福島県文化財調査報告書第108集

国 営 総 合 農 地 開 発 事 業

母畑地区遺跡発掘調査報告X

七 郎 内 C 遺 跡

七 郎 内 D 遺 跡

１９８２年３月

福 島 県 教 育 委 員 会

財団法人 福 島 県 文 化 セ ン タ ー

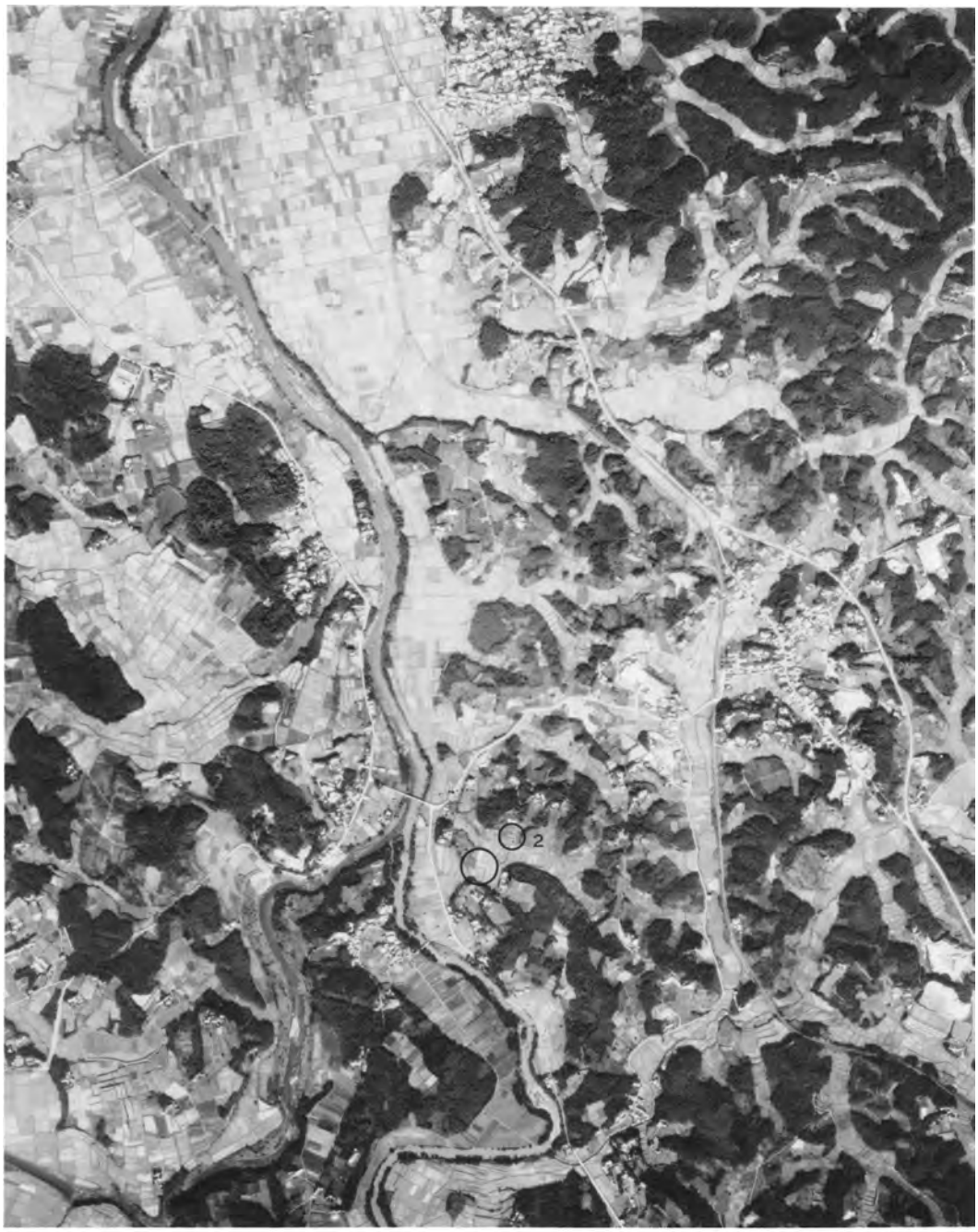
福島県文化財調査報告書第108集

国 営 総 合 農 地 開 発 事 業

母畑（ぼばた）地区遺跡発掘調査報告Ⅹ

七 郎 内 C 遺 跡

七 郎 内 D 遺 跡



七郎内C・D遺跡周辺航空写真（1. 七郎内C遺跡，2. 七郎内D遺跡）

七郎内Ｃ遺跡第１遺物包含層出土土偶

七郎内Ｃ遺跡第１遺物包含層出土縄文土器（1.1包48，2.1包49）

序　　文

国営総合農地開発事業である母畑開拓建設事業は，福島県中通り地方を貫流する阿武隈川の上流部右岸の郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村・中島村の６市町村にわたり，南北およそ30㎞，総面積4,379haにおよぶ広大な面積を対象として，農業近代化のための水田基盤整備・開畑・水田および畑地への灌漑等を行う事業です。

阿武隈川の流れは，古来その流域に豊かな耕土を堆積し，政治・経済・文化の中枢となる地域を形成して現在に至り，県民生活の大動脈としての役割を果たしてきました。この流域には古代以来の古墳・官衙跡・寺院跡さらにはそれらを支えた集落跡・生産跡など貴重な遺跡が数多く残っています。

当母畑地区もその一部であり，今年度母畑地区全体の表面調査を終了した結果628の遺跡が確認されました。これら遺跡の保存と開発との調和を図るため昭和56年度の開発に際し東北農政局母畑開拓事業所と事前協議を行い，郡山市の唐松Ａ遺跡，須賀川市の早稲田古墳群・又兵衛田Ａ遺跡・戸屋塚群，石川町の七郎内Ｃ・七郎内Ｄ遺跡の６遺跡について記録保存のため発掘調査を実施することになりました。発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター遺跡調査課に委託し実施したもので，ここにその調査成果を報告書として刊行することができました。本書はその一部ですが埋蔵文化財の保存・活用のみならず学術研究上にも役立つことを念願いたします。

最後に，ご協力いただいた地元有志，郡山市・須賀川市・石川町各教育委員会関係者，市役所・町役場関係者，東北農政局母畑開拓建設事業所および開発関係機関各位の埋蔵文化財に対するご理解に深く感謝の意を表します。

昭和57年３月

福島県教育委員会
教育長　邊　見　榮之助

あ　い　さ　つ

近年開発にともなう埋蔵文化財の発掘調査が年ごとに増加しております。財団法人福島県文化センター遺跡調査課は，その設置以来埋蔵文化財保護の立場にたって国営総合農地開発事業母畑地区内の遺跡調査に従事してまいりました。その結果，阿武隈川東岸の南北約30㎞にわたる広大な地域の，原始から近世にかけての歴史解明に多大の成果をあげることができました。

昭和56年度は，郡山市から石川町にかけての６遺跡について発掘調査をしましたが，それらは縄文時代，古墳時代，奈良・平安時代，さらに中世・近世と長期間にわたっています。いずれの遺跡もその地区において歴史上重要な役割を果たしたものであり，また貴重な文化遺産でもあります。本報告書には本年度発掘調査した６遺跡のうち七郎内Ｃ・七郎内Ｄ遺跡についてその成果をまとめたものです。

母畑地区における埋蔵文化財の発掘調査は今後も継続して実施される予定であり，それらの成果についても逐次発掘調査報告書として刊行いたします。これらの報告書が阿武隈川東岸の歴史を解明するための，基本的でしかも重要な記録になるものと確信しております。本報告書がいささかでも関係各位の参考に供され，学問発展の一助となれば幸と存じます。

最後に，この調査に御協力いただきました関係諸機関および地元の皆々様に厚く御礼申しあげます。

昭和57年３月

財団法人福島県文化センター

館　長　佐　藤　　光

例　　言

1　本書は昭和56年度国営総合農地開発事業母畑地区にかかる遺跡を発掘調査した報告書である。

2　この報告書には，昭和56年度に発掘調査した６遺跡のうち，石川町所在の七郎内Ｃ・Ｄ遺跡を収録した。

3　母畑地区の事業の促進にあたっては，東北農政局（母畑開拓建設事業所）と福島県教育委員会（文化課）とが埋蔵文化財についての協議を行い，埋蔵文化財の保存を図るとともに事業計画上保存が困難な地点については発掘調査を実施し記録保存に努めている。

4　昭和56年の発掘調査費は，東北農政局の負担金・国庫補助金・県費からなる。

5　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。

6　昭和56年度財団法人福島県文化センターでは，母畑地区に遺跡調査課第１係（下記組織表）の職員を配し調査にあたった。

7　遺跡調査課が遺跡を発掘調査する場合，当課課長である目黒吉明が担当者となる。

8　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡の調査は，小平良男，大越道正，阿部俊夫，松本　茂が実施した。

9　報告書の執筆は，七郎内Ｃ遺跡が小平・大越・阿部・松本，七郎内Ｄ遺跡は大越が各々分担した。原稿の調整には大越があたり，課長目黒が監修した。分担執筆者名は本文中に明記してある。

10　石器類の石質鑑定は，一部について真鍋建一（福大助教授）・藤間典子両氏の協力を得た。

11　各遺跡の資料は，担当の調査員と当課臨時職員が整理し，福島県文化センターにおいて保管の予定である。

昭和56年度（財）福島県文化センター遺跡調査課組織

課　　長　目黒吉明

第１係

専門文化財主査	若林伸亮（県教育委員会出向）	文化財主事	阿部俊夫（文化センター職員）
文化財主査	大河峯夫（県教育委員会出向）	文化財主事	橋本博幸（文化センター職員）
文化財主査	小平良男（県教育委員会出向）	文化財主事	高橋信一（文化センター職員）
文化財主事	辺見陽一（県教育委員会出向）	文化財主事	松本　茂（文化センター職員）
文化財主事	玉川一郎（県教育委員会出向）	文化財主事	福島雅儀（文化センター職員）
文化財主事	大越道正（文化センター職員）	文化財主事	安田　稔（文化センター職員）

第２係

文化財主査	矢部一弥（県教育委員会出向）	文化財主事	鈴鹿良一（文化センター職員）
文化財主査	長谷川力（県教育委員会出向）	文化財主事	山内幹夫（文化センター職員）
文化財主事	大越忠士（県教育委員会出向）	文化財主事	石本　弘（文化センター職員）
文化財主事	村木　亨（県教育委員会出向）	文化財主事	芳賀英一（文化センター職員）
文化財主事	寺島文隆（文化センター職員）	嘱　　託	長島雄一（文化センター職員）

凡　　例

1　報告書中の遺構図における用例は次のとおりである。

(1)　方　　位　図中の方位は磁北を示す。基準線南北の磁北からの偏度はN−29°1′20″−Eである。

(2)　縮 尺 率　原則として1/20・1/30・1/40の縮尺で採録したが，各遺構の特性にあわせ縮尺率を選択した。

(3)　柱　　痕　柱穴のなかで柱痕が確認されたものには柱痕の部分にアミ点のスクリーントーンを貼付した。

(4)　焼　　土　柱痕同様スクリーントーンを貼付した。

(5)　ケ　　バ　遺構内の傾斜部には原則としてTTTのケバで表現したが，相対的に緩傾斜の部分には〒のケバを使用した。なお〒は後世の人為的な削土部分の斜面を現わす。

2　報告書中の遺物図における用例は次のとおりである。

(1)　縮 尺 率　各遺物の大きさにあわせ縮尺率を選定したが，土器については1/2・1/3・1/4，石器は2/3・1/2・1/3・1/4・1/6の縮尺率を使用した。

(2)　土器断面　イ）縄文土器，弥生式土器，土師器等の低火度焼成される土器の断面は白ヌキ，須恵器等の主に高火度焼成されるものはベタ黒とした。

ロ）粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭にわかるものは原則として一点鎖線を用い，積み上げ痕跡はあるが不明瞭なものは破線を使用し表現した。

ハ）断面の位置は向かって右側を原則としたが，一部遺物遺存状況によって左側としたものもある。

(3)　黒色処理　土師器における器面の黒色処理は，その処理面にアミ点のスクリーントーンを貼付して表示した。

(4)　石　　器　表・裏面，断面を一応実測面の原則としたが，一部のものについては他の実測面を
実 測 面　追加あるいは削除した。時に磨石では紙面の都合上，片面と断面の実測に止まったものが多い。

3　報告書に使用した市町村名，遺跡名，遺構名の略号と，遺物の番号とは次のとおりである。

(1)　町村略号　石川町……ＩＫ

(2)　遺跡略号　七郎内Ｃ遺跡……ＳＲＵ・Ｃ　　七郎内Ｄ遺跡……ＳＲＵ・Ｄ

(3)　遺構略号　竪穴住居跡ＳＩ，掘立柱建物跡ＳＢ，土坑ＳＫ，溝ＳＤ

ピットは，各遺構に伴うものをP_1，P_2…とし，遺構に伴わないものをグリッド名とピット番号とを組み合わせＡ１P_2，Ｂ２P_4…と呼称した。

(4)　遺物番号　遺物は各遺構毎に土器・石器の別なく遺構名と組み合せ通し番号をふり，遺物の登録番号とした。

例，１住３……１号住居跡の３番の遺物

39坑45……39号土坑の45番の遺物

遺構名は次のように略してある。

竪穴住居跡→住，炉跡→炉，焼土遺構→焼，土坑→坑，埋甕→埋，包含層→包

目　　次

序　　章 …… 1

第１節　調 査 経 過…… 1

1　昭和55年度までの調査経過（１）　2　昭和56年度の調査経過（３）

第２節　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の環境…… 5

1　母畑地区の自然環境（５）　2　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の自然環境（７）

3　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の歴史的環境（８）

第１編　七郎内Ｃ遺跡 …… 11

第１章　調 査 経 過…… 13

第１節　位置と地形…… 13

第２節　調 査 経 過…… 15

第２章　縄文時代の遺構と遺物…… 17

第１節　遺構・遺物の概観…… 17

1　遺構の分布(17)　2　土器の分類(17)

第２節　竪穴住居跡…… 20

１号住居跡(20)　３号住居跡(23)　４号住居跡(24)

５号住居跡(27)　７号住居跡(31)　９号住居跡(35)

第３節　炉　　跡…… 36

１号炉跡(36)

第４節　焼 土 遺 構…… 39

１号焼土遺構(39)　２号焼土遺構(41)　３号焼土遺構(42)

４号焼土遺構(43)　５号焼土遺構(44)

第５節　埋　　甕…… 45

１号埋甕(45)　２号埋甕(46)　３号埋甕(46)　４号埋甕(46)

５号埋甕(49)

第６節　土　　坑……49
１　土坑の形態・規模について(49)　２　土坑の分布について(51)
３　土坑内堆積土について(54)　４　土坑内の遺物出土状況について(55)
５　出土遺物について(56)
15号土坑(79)　20号土坑(83)　38号土坑(84)　39号土坑(87)
51号土坑(88)　55号土坑(89)　72号土坑(90)
第７節　遺物包含層……92
第１遺物包含層(92)　第２遺物包含層(148)
第３遺物包含層(162)　第４遺物包含層(166)
第８節　ピ ッ ト 群…… 173
ピット群(173)
第９節　竪穴状遺構…… 178
１号竪穴状遺構(178)　２号竪穴状遺構(180)
第10節　遺構外出土の遺物…… 181
第11節　試掘調査時(８Ｔ住居跡)の成果 …… 189
８号トレンチ検出住居跡(189)

第３章　弥生時代の遺構と遺物…… 202

第４章　歴史時代の遺構と遺物…… 204
第１節　竪穴住居跡…… 204
２号住居跡(204)
第２節　掘立柱建物跡…… 207
１号建物跡(207)　２号建物跡(207)
第３節　土　　坑…… 209
３号土坑(209)

第５章　考　　察…… 211
第１節　縄文時代の遺物と遺構…… 211
遺物について…… 211
１　縄文土器(211)　２　土製品(220)　３　石器(220)　４　石製品(221)
遺構について…… 222
１　竪穴住居跡(222)　２　埋甕(223)　３　土坑(223)

第２節　弥生時代の遺物について…… 224
第３節　奈良・平安時代の遺物と遺構…… 225
遺物について …… 225
遺構について …… 226

第２編　七郎内Ｄ遺跡 …… 227

第１章　調 査 経 過…… 229
第１節　位置と地形…… 229
第２節　調 査 経 過…… 230

第２章　遺構と遺物…… 231
第１節　竪穴住居跡…… 232
１号住居跡(232)　２号住居跡(233)　３号住居跡(235)
４号住居跡(238)　５号住居跡(240)　６号住居跡(241)
第２節　掘立柱建物跡…… 244
１号建物跡(244)　２号建物跡(245)　３号建物跡(245)
４号建物跡(246)　５号建物跡(246)　６号建物跡(249)
７号建物跡(250)　８号建物跡(251)　９号建物跡(251)
第３節　土坑・その他…… 253
土坑(253)　柱列(259)　ピット群(260)　溝跡(260)
遺構外出土の遺物(261)

第３章　考　　察…… 263
第１節　縄文時代の遺物と遺構…… 263
第２節　奈良・平安時代の遺物と遺構…… 264
第３節　時期不明の遺構について…… 267
第４節　各遺構の相互関係について…… 267

挿図・表目次

序　　章

〔挿図〕

第１図　母畑地区位置図……１
第２図　母畑地区開発計画図……２
第３図　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺地形区分……６
第４図　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡の位置と周辺遺跡の分布……９

〔　表　〕

第１表　発掘調査遺跡一覧……４
第２表　七郎内Ｃ・Ｄ周辺遺跡分布一覧表……10

第１編　七郎内Ｃ遺跡

〔挿図〕

第１図　七郎内Ｃ遺跡周辺地形図……14
第２図　七郎内Ｃ遺跡基本層序柱状図……15
第３図　１号住居跡……21
第４図　１号住居跡出土遺物……22
第５図　３号住居跡……23
第６図　４号住居跡……24
第７図　４号住居跡出土縄文土器……25
第８図　４号住居跡出土石器……26
第９図　５号住居跡……27
第10図　５号住居跡出土縄文土器……29
第11図　５号住居跡出土石器……30
第12図　７号住居跡……31
第13図　７号住居跡出土縄文土器……32
第14図　７号住居跡出土縄文土器……33
第15図　７号住居跡出土石器……34
第16図　９号住居跡……35
第17図　１号炉跡……37
第18図　１号炉跡・周辺ピット出土縄文土器・石器……38
第19図　１号焼土遺構……40
第20図　１号焼土遺構出土縄文土器……40
第21図　２号焼土遺構……41
第22図　３号焼土遺構……42
第23図　４号焼土遺構……43
第24図　５号焼土遺構……44
第25図　１～５号埋甕……47
第26図　１～５号埋甕出土遺物……48
第27図　１・２・４～６号土坑……57
第28図　７～10・19号土坑……58
第29図　11～13・15・16号土坑……59
第30図　17・18・20・22・24号土坑……60
第31図　23・25～27号土坑……61
第32図　28～30・37号土坑……62
第33図　31～36号土坑……63
第34図　38～40・43号土坑……64
第35図　44・46・47号土坑……65
第36図　48・49・51～54・58号土坑……66
第37図　55～57・59・60・62号土坑……67
第38図　63～67号土坑……68
第39図　68～74号土坑……69
第40図　75～79号土坑……70
第41図　２・４・５・７・９～12号土坑出土縄文土器……71
第42図　18・25・27・28・39・43・44・48・49・52・54号土坑出土縄文土器……72
第43図　54・60・62・64・66・70・74・75・77・80号土坑出土縄文土器……73
第44図　１・２・４・７・９～11・21・24・25・42・48・54・62・65・66・74・76号土坑出土石器……75
第45図　４・11・12・66・77号土坑出土石器…76
第46図　27・32・70・74号土坑出土石器……77
第47図　７・９・47・77・78号土坑出土石器…78
第48図　15号土坑出土縄文土器……80

第49図　15号土坑遺物出土状況……81
第50図　15号土坑遺物出土状況……82
第51図　20号土坑……83
第52図　20号土坑出土縄文土器……84
第53図　38号土坑出土縄文土器……85
第54図　38号土坑出土石器……86
第55図　38号土坑遺物出土状況……86
第56図　39号土坑出土琥珀玉……87
第57図　39号土坑琥珀玉出土状況……88
第58図　51号土坑出土縄文土器……89
第59図　51号土坑遺物出土状況……89
第60図　55号土坑出土大珠……90
第61図　55号土坑……90
第62図　72号土坑……90
第63図　72号土坑出土縄文土器……91
第64図　第１遺物包含層セクション図……92
第65図　第１遺物包含層遺物出土状況……折込
第66図　第１遺物包含層出土Ⅰ群土器……97
第67図　第１遺物包含層出土Ⅰ群土器……98
第68図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器……99
第69図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 100
第70図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 101
第71図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 102
第72図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 103
第73図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 104
第74図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 105
第75図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 106
第76図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 107
第77図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 108
第78図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 109
第79図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 110
第80図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 111
第81図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 112
第82図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 113
第83図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 114
第84図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 115
第85図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 116
第86図　第１遺物包含層出土Ⅳ群土器…… 117
第87図　第１遺物包含層出土Ⅳ群土器…… 118
第88図　第１遺物包含層出土Ⅴ群・Ⅵ群土器…… 119
第89図　第１遺物包含層出土Ⅵ群土器…… 120
第90図　第１遺物包含層出土Ⅶ群土器…… 121
第91図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 122
第92図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 123
第93図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 124
第94図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 125
第95図　第１遺物包含層出土Ⅹ群土器…… 126
第96図　第１遺物包含層出土Ⅺ群土器…… 127
第97図　第１遺物包含層出土Ⅺ群土器…… 128
第98図　第１遺物包含層出土Ⅻ群土器・縄文土器底部…… 131
第99図　第１遺物包含層出土ⅩⅢ群土器…… 132
第100図　第１遺物包含層出土石器…… 133
第101図　第１遺物包含層出土石器…… 134
第102図　第１遺物包含層出土石器…… 135
第103図　第１遺物包含層出土石器…… 136
第104図　第１遺物包含層出土石器…… 137
第105図　第１遺物包含層出土石器…… 138
第106図　第１遺物包含層出土石器…… 139
第107図　第１遺物包含層出土石器…… 140
第108図　第１遺物包含層出土ミニチュア土器…… 142
第109図　第１遺物包含層出土土製品…… 143
第110図　第１遺物包含層出土土製品…… 144
第111図　第１遺物包含層出土土製品…… 145
第112図　第１遺物包含層出土縄文人面・獣面状把手…… 146
第113図　第１遺物包含層出土縄文人面・獣面状把手…… 147
第114図　第２遺物包含層出土Ⅰ・Ⅱ群土器…… 150
第115図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 151
第116図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 152
第117図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 153
第118図　第２遺物包含層出土Ⅱ・Ⅲ群土器…… 154
第119図　第２遺物包含層出土Ⅳ～Ⅶ群土器…… 155
第120図　第２遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 156
第121図　第２遺物包含層出土Ⅷ・Ⅺ・ⅩⅢ群土器…… 157
第122図　第２遺物包含層出土石器…… 158
第123図　第２遺物包含層出土石器…… 159
第124図　第２遺物包含層出土石器…… 160
第125図　第２遺物包含層出土土製品・人面・獣面状把手…… 161
第126図　第３遺物包含層出土Ⅲ・Ⅴ群土器…… 163
第127図　第３遺物包含層出土Ⅴ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ・ⅩⅢ群・ミニチュア土器…… 164
第128図　第３遺物包含層出土石器…… 165
第129図　第４遺物包含層セクション…… 166

第130図　第４遺物包含層出土Ⅲ～Ⅴ群土器 …… 168
第131図　第４遺物包含層出土Ⅴ群土器 …… 169
第132図　第４遺物包含層出土Ⅴ・Ⅶ群土器 …… 170
第133図　第４遺物包含層出土Ⅶ・Ⅺ・Ⅻ群土器 …… 171
第134図　第４遺物包含層出土石器 …… 172
第135図　ピット群出土縄文土器・石器 …… 177
第136図　１号竪穴状遺構 …… 179
第137図　１号竪穴状遺構出土縄文土器・石器 …… 179
第138図　２号竪穴状遺構 …… 180
第139図　２号竪穴状遺構出土縄文土器・石器 …… 180
第140図　遺構外出土縄文土器・ミニチュア土器・土製品 …… 182
第141図　遺構外出土石器 …… 183
第142図　遺構外出土石器 …… 184
第143図　遺構外出土石器 …… 185
第144図　遺構外出土石器 …… 186
第145図　遺構外出土石器 …… 187
第146図　遺構外出土石器 …… 188
第147図　試掘８号トレンチ検出住居跡 …… 190
第148図　試掘調査時（８Ｔ住居跡）出土石器… 190
第149図　試掘調査時（８Ｔ住居跡）出土縄文土器 …… 191
第150図　七郎内Ｃ遺跡出土弥生式土器 …… 203
第151図　２号住居跡 …… 204
第152図　２号住居跡出土土師器 …… 206
第153図　１号建物跡 …… 207
第154図　２号建物跡 …… 208
第155図　３号土坑 …… 209
第156図　３号土坑出土土師器 …… 210
第157図　福島県内におけるⅡ群土器出土遺跡位置図 …… 127

〔　表　〕

第１表　１号住居跡ピット計測表……22
第２表　３号住居跡ピット計測表……23
第３表　４号住居跡ピット計測表……25
第４表　５号住居跡ピット計測表……28
第５表　９号住居跡ピット計測表……36
第６表　１号炉跡周辺ピット計測表……38
第７表　１号焼土遺構周辺ピット計測表……39
第８表　２号焼土遺構周辺ピット計測表……41
第９表　３号焼土遺構周辺ピット計測表……43
第10表　４号焼土遺構周辺ピット計測表……44
第11表　５号焼土遺構周辺ピット計測表……45
第12表　土坑形態分類表……50
第13表　土坑一覧表……51
第14表　堆積土別土坑一覧表……55
第15表　石鏃形態分類表……74
第16表　39号土坑出土琥珀玉計測表……88
第17表　第１遺物包含層出土石鏃形態分類表…… 132
第18表　第２遺物包含層出土石鏃形態分類表…… 161
第19表　第３遺物包含層出土石鏃形態分類表…… 166
第20表　ピット一覧表…… 173
第21表　遺構外出土石鏃形態分類表…… 181
第22表　縄文土器一覧表…… 192
第23表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表…… 194
第24表　七郎内Ｃ遺跡出土土師器一覧表…… 210

第２編　七郎内Ｄ遺跡

〔挿図〕

第１図　七郎内Ｄ遺跡周辺地形図…… 229
第２図　七郎内Ｄ遺跡遺構配置図…… 231
第３図　１号住居跡…… 232
第４図　２号住居跡…… 233
第５図　２号住居跡出土土師器…… 234
第６図　３号住居跡…… 235
第７図　３号住居跡カマド…… 236
第８図　３号住居出土土師器・須恵器…… 237
第９図　４号住居跡…… 238
第10図　４号住居跡埋甕…… 239
第11図　４号住居跡出土縄文土器…… 239
第12図　５号住居跡…… 240
第13図　６号住居跡…… 242
第14図　６号住居跡出土土師器…… 243
第15図　１号建物跡…… 245

第16図　２・３・４号建物跡…… 247
第17図　５号建物…… 248
第18図　６号建物跡…… 249
第19図　７号建物跡…… 250
第20図　８号建物跡…… 251
第21図　９号建物跡…… 251
第22図　５号土坑出土土師器・土製支脚…… 254
第23図　１～５号土坑…… 255
第24図　６～10号土坑…… 257
第25図　８号土坑出土縄文土器…… 258
第26図　11号土坑…… 258
第27図　11号土坑出土土師器・砥石…… 259
第28図　１号柱列…… 260
第29図　ピット群…… 260
第30図　７号溝セクション…… 261
第31図　遺構外出土遺物…… 261

〔　表　〕

第１表　掘立柱建物跡掘形・柱痕計測表…… 252
第２表　ピット群計測表…… 260
第３表　七郎内Ｄ遺跡出土土師器一覧表…… 262
第４表　掘立柱建物跡一覧表…… 266

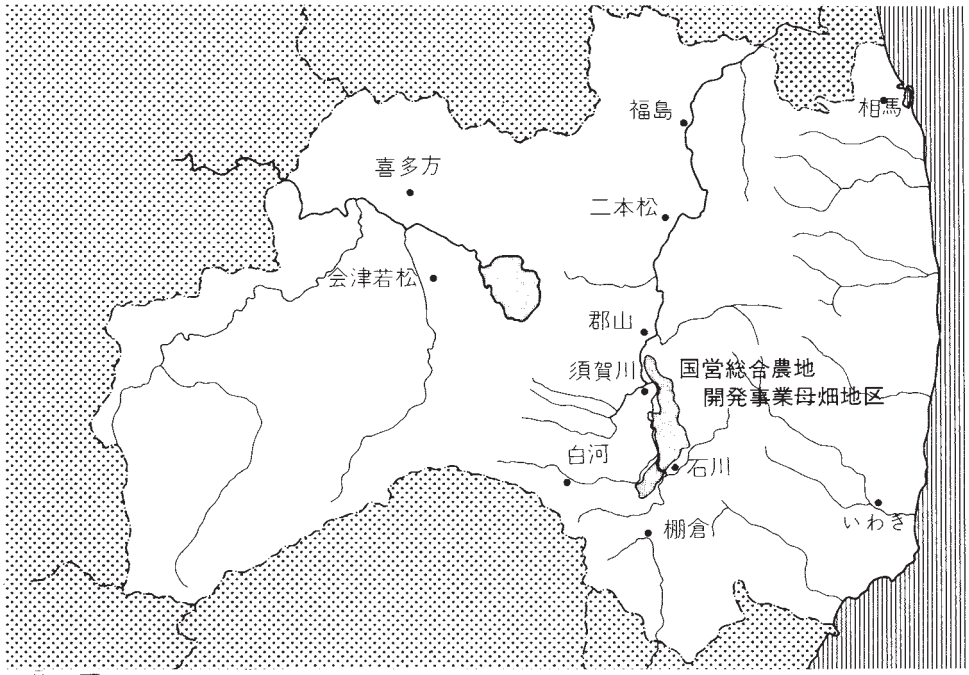
序　　章

第1節　調査経過

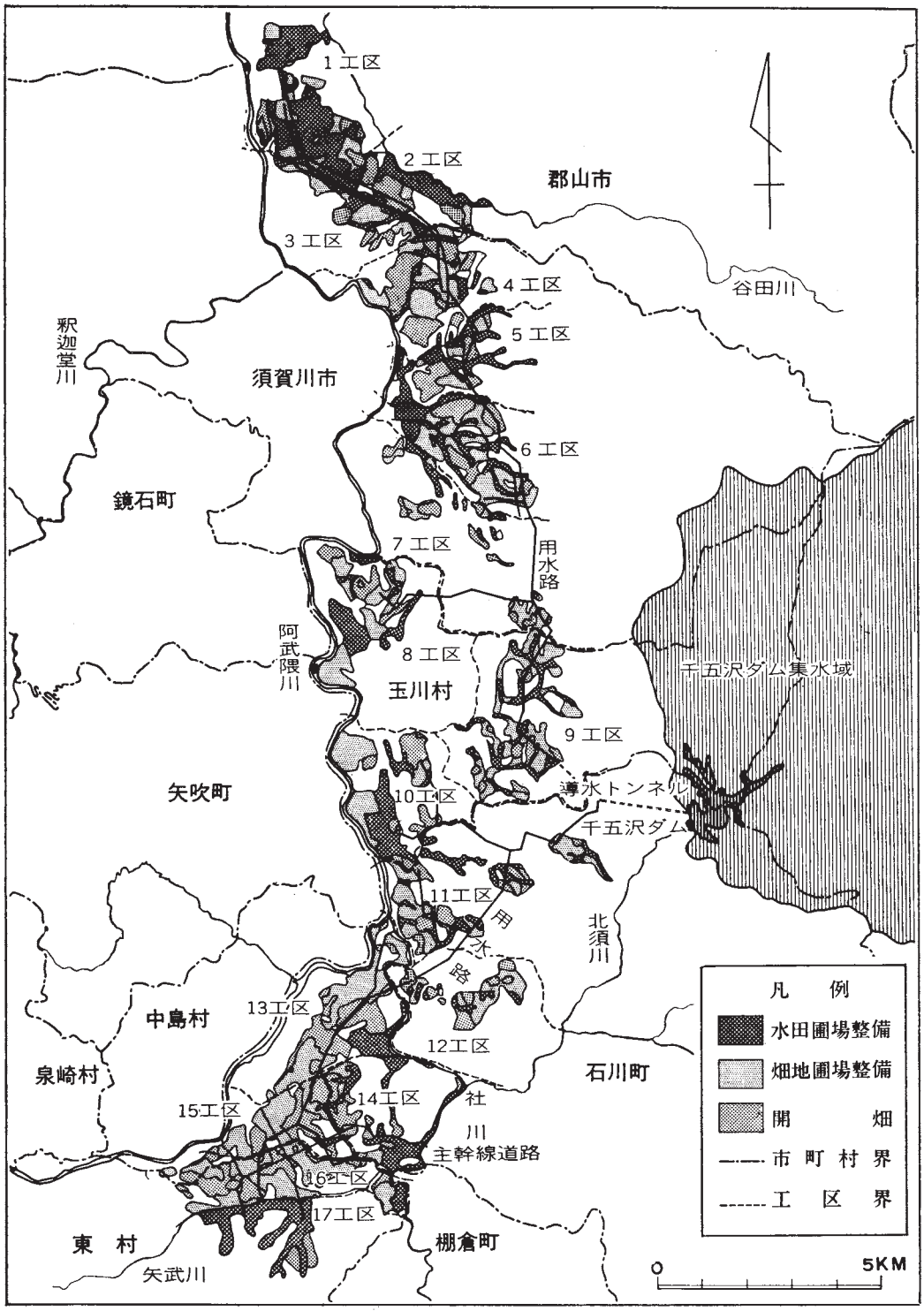
1　昭和55年度までの経過

国営総合農地開発事業母畑地区は，阿武隈山地西縁丘陵地帯に4,379haにおよぶ農地を開発するために昭和43年から開始された事業である。阿武隈川の右岸，南北約30km，東西約５kmの狭長な地区で，郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村および中島村の２市１町３村にまたがっている。事業の概要は，阿武隈川の支流北須川の上流部に千五沢ダムを築造し，大規模な灌漑および開田計画をたてたが，昭和45年度以降の米の生産調整を含む農政転換により開畑と畑地灌漑に変更され，昭和67～68年に完成することを目標に工事と計画の再検討が併行して進められている。

福島県教育委員会では昭和44年度に母畑事業区内の遺跡分布調査を実施したが，昭和51年度から，開畑・圃場整備等の工事着手にともない福島県教育委員会と東北農政局母畑事業所との間で埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な協議を行い，埋蔵文化財保護に対応してきた。昭和52年度には財団法人福島県文化センター内に遺跡調査課を新設し，調査を委託し実施してきた。昭和51年度以降の調査の詳細は，後記報告書および表のとおりである。



第１図　母畑地区位置図



第2図　母畑地区開発計画図

２　昭和56年度の調査経過

昭和56年１月26日，福島県教育委員会と母畑事業所との間で，昭和56年度事業実施区域内の埋蔵文化財について第１回の保存協議が行われた。その後５月６日にいたり，次の６遺跡については記録保存のための発掘調査を実施し，残余の遺跡については工区除外，盛土工法などで遺跡の保存を図ることで協議が成立し，財団法人福島県文化センターに発掘調査が委託された。

各遺跡の工区・所在地・調査期間は次のとおりである。

工区	遺跡名	所在地	遺跡の種別	
2	唐松Ａ遺跡	郡山市田村町岩作字唐松	（縄文・弥生・土師）	５月25日～７月29日
5	早稲田古墳群	須賀川市下小山田字早稲田	（古墳群中・近世墓跡）	５月18日～11月21日
5	又兵衛田Ａ遺跡	須賀川市小倉字高柴	（縄文包含地）	９月７日～10月27日
6	戸屋塚群	須賀川市大栗字戸屋	（中・近世塚群）	８月３日～８月11日
11	七郎内Ｃ遺跡	石川町字下ノ内	（縄文・土師集落跡）	５月18日～８月21日
11	七郎内Ｄ遺跡	石川町大字中野字七郎内	（縄文・土師集落跡）	６月11日～８月６日

福島県文化センター遺跡調査課は，昭和56年度に３名の増員を得て総計23名となった。母畑関係の調査には12名をあて３班編成とし，発掘調査および分布調査に対処した。唐松Ａ遺跡は縄文時代早期末葉と推定される住居跡と鍛冶関連遺構が検出された。戸屋塚群は径８ｍ前後の２基の塚を調査した。早稲田古墳群は遺構の分布範囲が10,000㎡以上におよぶため１班が専ら発掘に対応したが農作物の作付状況，多量の土坑墓，縄文時代晩期包含層との重複等々の関係で予想外の長期発掘となった。七郎内Ｃ遺跡と同Ｄ遺跡は至近距離のため同一班で同時併行して発掘調査を実施した。特に七郎内Ｃ遺跡では，縄文時代中期の遺物包含層が予定地外まで拡がっており，予定期間を延長して調査せざるをえなかった。

調査日程との関係で，発掘調査を実施した全遺跡において現地説明会を開催することはできなかったが，七郎内Ｃ・Ｄ遺跡については８月１日に石川町教育委員会の協力を得て，早稲田古墳群については11月21日に須賀川市教育委員会の協力を得てそれぞれ開催することができた。

本報告書には，昭和56年度に発掘調査した６遺跡のうち，「七郎内Ｃ遺跡」「七郎内Ｄ遺跡」の２編を収録した。「唐松Ａ遺跡」「又兵衛田Ａ遺跡」「戸屋塚群」の３編は『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅷ』（福島県文化財調査報告書106集）に収録し，「早稲田古墳群」については『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ』（福島県文化財調査報告書107集）に収録した。

分布調査の結果については，『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅵ』（福島県文化財調査報告書第103集）に本年度の試掘結果と共に，６年間にわたり母畑事業区内全域を踏査した結果の集成である「母畑地区遺跡一覧表」とこれに対応する地図を収録した。

（若林　伸亮）

発掘調査

『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報』（福島県文化財調査報告書第60集）　昭和52年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第67集）　昭和53年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第74集）　昭和54年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ』（福島県文化財調査報告書第84集）　昭和55年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第85集）　昭和55年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ』（福島県文化財調査報告書第95集）　昭和56年３月刊

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅶ』（福島県文化財調査報告書第96集）　昭和56年３月刊

第１表　発掘調査遺跡一覧

市町村名	郡山市	須賀川市		石川町	石川町・中島村	東村	備考
工区	2	5	6	11	15	16	
昭和51年度					上森屋段		60集　概報
昭和52年度						佐平林 谷地前C 赤根久保	67集　Ⅱ
昭和53年度					達中久保	佐平林 板倉前B 笊内古墳群	74集　Ⅲ
昭和54年度		山田B 下小山田古墳群		源平A 源平C	十三塚群	佐平林 谷地前C 西原	84集　Ⅳ（5・11・15工区） 85集　Ⅴ（16工区）
昭和55年度		大久保A 沼平 沼平東 細桙城 沼平塚群		杉内B 杉内C 杉内E	十三塚E塚群		95集　Ⅵ（11・15工区） 96集　Ⅶ（5工区）

分布調査

『母畑地区遺跡試掘調査概報Ⅰ』（福島県文化財調査報告書第61集）　昭和52年３月刊

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第66集）　昭和53年３月刊

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第73集）　昭和54年３月刊

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅳ』（福島県文化財調査報告書第83集）　昭和55年３月刊

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第97集）　昭和56年３月刊

市町村	工区	周知遺跡数	51年度		52年度		53年度		54年度		55年度		56年度		5計		総遺跡数
			踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	踏査面積 ha	新発見遺跡数	
郡山	1	4											440.8	33	400.8	33	37
	2	0							80.0	9	102.8	21	—	4	182.8	34	34
須賀川	3	6											186.2	40	186.2	40	46
	4	16									344.5	31			344.5	31	47
	5	18					193.0	21			—	1	—	3	193.0	25	43
	6	5					46.0	5	301.8	33			—	1	347.8	39	44
	7	5							137.9	22	—	3	60.0	13	197.9	38	43
玉川	8	10									292.9	20			292.9	20	30
	9	0											262.8	9	262.8	9	9
	10	8			—	1	—	4			283.9	14			283.9	19	27
石川（含中島）	11	24					291.8	16	—	1					291.8	17	41
	12	5									113.6	4	20.0	1	133.6	5	10
	13	39							317.4	21					317.4	21	60
	14	48					10.0	2	200.6	7					210.6	9	57
	15	26	150.0	2	—	1	85.7	1	—	1	—	2			235.7	7	33
東	16	4	—	1	145.0	15	216.9	32							361.9	48	52
	17	1					165.4	14							165.4	14	15
合計		219	150.0	3	145.0	17	1008.8	95	1037.7	94	1137.7	96	969.8	104	4449.0	409	628

第２節　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の環境

１．母畑地区の自然環境

国営総合農地開発事業母畑地区は，阿武隈川上流の右岸に位置している。阿武隈川流域は古くから「中通り」とよばれ，福島・本宮・郡山・須賀川・白河の各盆地が北から南へと並んでいる。これら各盆地の盆地床に分布する洪積層の割合は，福島盆地が最も少なく南部ほどその比率が高くなっている。阿武隈川はこれら諸盆地の東端近くを北流しており，右岸には阿武隈山地西縁丘陵地帯がせまり，沖積地は河川沿いに狭長に分布するにすぎない。

母畑地区周辺の地質を概観すると，阿武隈川右岸は阿武隈山地を構成する花崗岩・花崗閃緑岩を主とする深成岩からなるほぼ定高性の丘陵地帯が，阿武隈川本流近くまで接近している。阿武隈川左岸の郡山盆地は，郡山層・大槻層などとよばれる洪積世の砂礫質堆積物で構成される台地が広い面積を占めている。須賀川盆地，白河盆地は，白河石英安山岩質熔結凝灰岩を基盤とし，その上部には郡山盆地の郡山層に対比される矢吹層が薄くおおっている。沖積層は阿武隈川およびその支流の沿岸に狭長に分布している以外，阿武隈山地西縁丘陵地帯に分布する袋状谷底低地にもわずかながら沖積層が認められる。

阿武隈山地西縁丘陵地帯の地形は，おおよそ海抜高度400m以下，起伏量100m以下である。須賀川市大東地区から玉川村泉地区にかけては，観音山（453m）を中心とする起伏量100m以上の地域がみられるが，これは阿武隈山地が侵食される過程における残丘と考えることができる。しかし全体としては起伏量60m以下のなだらかな円頂丘のつらなりがほとんどを占めている。阿武隈山地西縁丘陵地帯を開析する小河川の流路は，花崗岩地帯の小規模で複雑な構造線に支配されており，所々に袋状の谷底低地を形成している。氾濫原は阿武隈川ぞいに不連続にみられる。これは阿武隈川が所々で花崗岩の基盤岩を下刻し急流を作るため，急流の上流部に袋状の氾濫原を形成したものと考えられる。玉川村より下流部の氾濫原には自然堤防，後背湿地，三ケ月湖跡などの発達がみられるが，石川町より上流部ではその発達が明瞭でない。河岸段丘は所々で分断され連続していない。低位段丘は郡山盆地の大槻面に対比されるもので，流域全体にわたり比較的明瞭に指摘できる。中位段丘は郡山盆地の西ノ内面に対比されるものであるが，阿武隈川とその支流社川の合流点より上流部には広く分布しているが，下流部には断片的に認められるにすぎない。下流部の中位段丘面には集落の立地している例が多くみられる。上位段丘面は阿武隈川右岸では山脚末端付近にわずかに認められるにすぎず，しかも開析や崩落によりかなりの傾斜をもっており，平坦面として認めることはできない。上位段丘は郡山盆地の郡山面に対比して考えることができるので，阿武隈川左岸には広く分布している。

第３図　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺地形区分図

２．七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の自然環境

七郎内Ｃ遺跡・七郎内Ｄ遺跡は阿武隈川とその支流社川の合流点直下にある明神橋より東へ約200～300mの地点，国鉄水郡線野木沢駅の南西２kmほどの所に位置する。当遺跡は阿武隈山地西縁丘陵地帯の西端に位置し，阿武隈川・社川より西は須賀川盆地，俗称矢吹原台地とよばれている。阿武隈山地西縁丘陵地帯は花崗岩，花崗閃緑岩の基盤岩が樹枝状に侵食され，さらに風化作用も加わって山頂高度300～350m，比高40～50m程度，高さのよく揃った円頂丘が連続している。遺跡周辺には花崗岩中に貫入した石英の岩脈が風化作用からとり残されている状態が数多く観察される。須賀川盆地の盆地床は一様でないが，当遺跡に近い盆地南半の地形は，基盤である白河石英安山岩質熔結凝灰岩（白河層）の上部を白河層の２次堆積物である矢吹層（小池一之：1965）が薄くおおい，海抜高度は270～280mである。この矢吹層は郡山市街地周辺にみられる郡山層に比定されているが，海抜高度が高いことと層厚が薄いことが矢吹層の特色といえる。須賀川盆地南半には矢吹層に埋め残された白河石英安山岩質熔結凝灰岩の丘陵が所々に突出しており，それらの高度は東部で300m，西部で350m程度である。阿武隈川および社川はこれら地形・地質に影響されながら氾濫原・河岸段丘などを形成し流下している。

明神橋付近では阿武隈川が花崗岩の基盤を下刻しているため，河床と沖積面の比高は6.0～7.5mに達する。そのため氾濫常習地は明神橋の周辺，ごくわずかの部分であり，沖積地の大部分は低位段丘面と認められる。この低位段丘面は海抜高度266～270mであり，明神橋付近での幅は100～200mにすぎない。しかし１kmほど上流および下流では巾が１～1.5kmほどになり氾濫原も広く認められるので，明神橋付近は阿武隈川上流部における１つの狭窄部であるということができる。低位段丘面の自然堤防上には上流部では背戸Ａ・鳥内・長土路Ｂなどの縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が分布しているが，下流部の自然堤防上には奈良・平安時代の遺跡のみ分布しており，縄文時代・弥生時代等の遺跡は現在までの所発見されていない。したがって明神橋より上流部と下流部では低位段丘面形成の時期が相違していると予想される。

阿武隈川東岸の中位段丘は開析が進み丘陵末端に分断されて残っているにすぎないが，西岸の中島村や南へ続く石川町新屋敷地区には中位段丘面が広く残っている。海抜高度は280m前後を示し縄文時代から奈良・平安時代にかけての多数の遺跡が立地しており，七郎内Ｃ遺跡もその中の１つである。

上位段丘面は阿武隈川東端ではごくわずか認められるにすぎず，しかも小開析谷の谷頭部に断片的に位置している。七郎内Ｄ遺跡は上位段丘面が侵食・開析・崩落などのため緩斜面化した部分に立地した遺跡である。これは報告書本文にも記載されている通り，地山がかなりの傾斜を示し，しかも巨大な円礫を含む砂質で構成されていることから知られるものである。

３．七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺の歴史的環境

七郎内周辺の歴史的環境はかなり変化に富んでいる。

旧石器時代の遺跡としては，成田型刃器を出土した矢吹町陣ケ岡遺跡及び鏡石町成田遺跡が北方約４㎞程にあり，その北には須賀川市乙字ケ滝遺跡もよく知られている。また，南方７㎞程の東村谷地前Ｃ遺跡からも旧石器が出土している。

縄文早・前期の遺跡としては北東約２㎞程の源平Ｂ，源平Ｃの両遺跡があり，北1.5㎞程の玉川村薬師堂遺跡からは縄文の数時期に亘る遺物が検出されている。縄文中期の遺跡としては，本報告書の七郎内Ｃ遺跡及び隣接する七郎内Ｂ遺跡，更には東方５㎞程の小田口Ｃ，小田口Ｄの両遺跡などがあげられる。北方２㎞の杉内Ｄ遺跡，南方１㎞程の和久遺跡は縄文後・晩期の遺跡である。矢吹町泉川流域には下荒具・渡池上（早・前期），越中山・向原（中期），柏山（後・晩期）等の縄文遺跡があるが，阿武隈川氾濫原周辺には縄文遺跡がほとんど見られない。

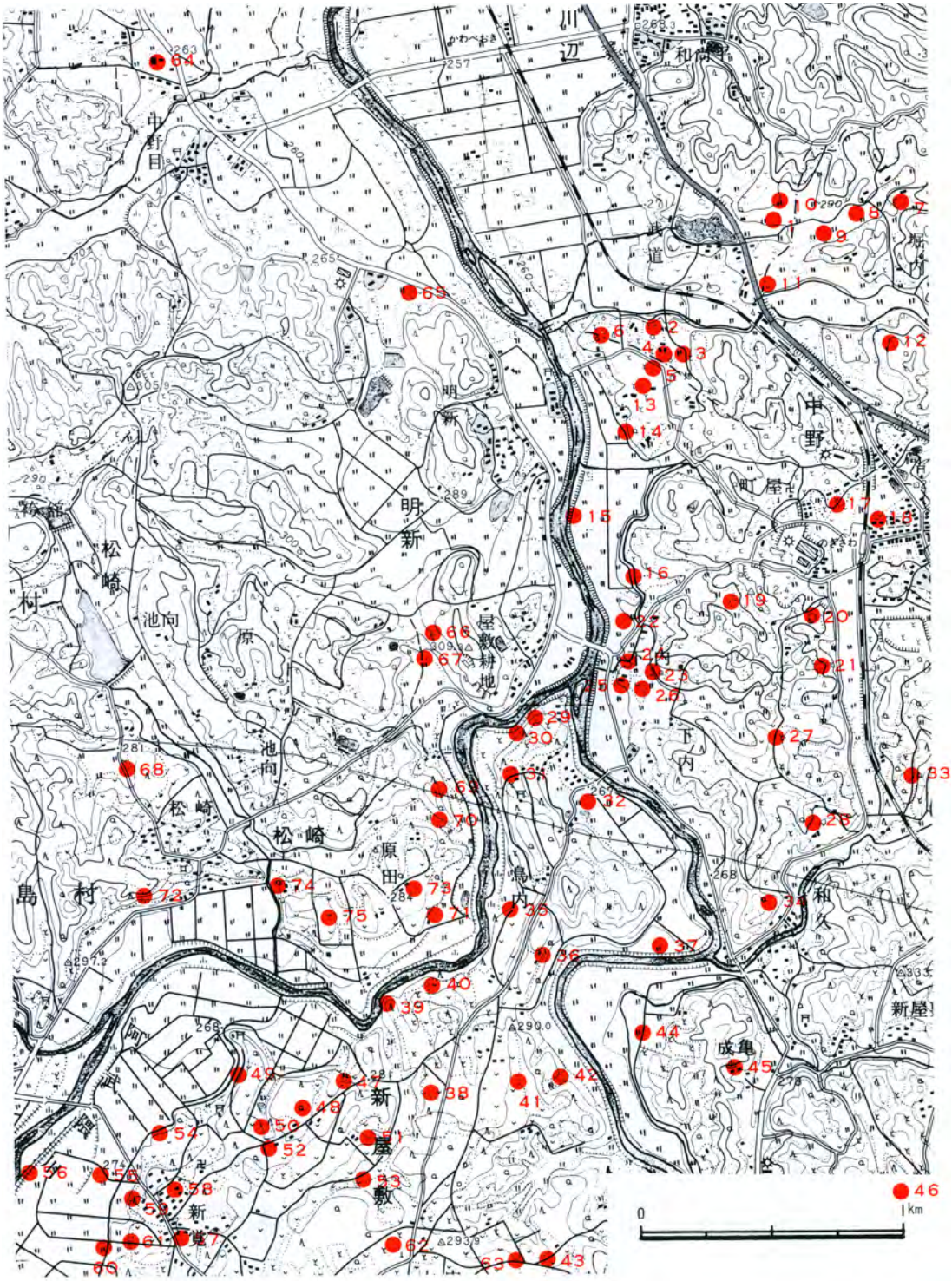
弥生期の遺跡には，縄文晩期の影響を受けた土器を出土し，再葬墓群としても有名な県史跡鳥内遺跡が社川の対岸1.5㎞程にあり，また，先に縄文遺跡に例示した源平Ｃ，小田口Ｄ，和久等の遺跡からも弥生期の遺物が出土している。矢吹町では，泉川流域の愛宕下遺跡と共に阿武隈川の河岸に赤渕遺跡が立地している。

県史跡に指定されている11基の横穴石室を持つ円墳群で構成された悪戸古墳群，前方後円墳３基を含む８基の古墳が現存する大壇古墳群及び矢吹町の鉄鏃10数点，深紅色琥珀製棗玉を出土した鬼穴古墳群は1.5～４㎞の範囲内にあり，また，横穴古墳群を含めた古墳遺跡は阿武隈川を臨む河岸段丘上に濃密に分布するが，阿武隈川を離れるにつれて非常に少なくなる。

奈良・平安時代の遺跡は数多く知られており，集落跡と確実視されるものだけを見ても，杉内Ｂ，杉内Ｃ，杉内Ｅ，薬師堂，下悪戸，中悪戸，上悪戸，七郎内Ｄ，富貴田Ｂ，井戸上Ａ，鍛冶内Ｂ，前谷中等々枚挙の遑ない。また，矢吹町泉川沿岸には住居跡と共に瓦窯跡，製鉄跡等の生産遺跡も知られている。

中世の当遺跡周辺は石川氏一族の支配地であったが，石川氏は南の佐竹氏，白河結城氏，また，北方の須賀川二階堂氏，三春田村氏等々と対立抗争を繰り返しながら天正年間まで領土を保持してきた。そのため各所に石川氏一族の城館が見られる。大寺城下，須釜東福寺舎利塔は国史跡であり，岩法寺五輪塔は国重文として，また，川辺八幡神社には石川氏関係を含めた中世文書の所蔵で知られている。

（若林　伸亮）



第４図　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡の位置と周辺遺跡の分布

第2表　七郎内C・D周辺遺跡分布一覧表

No.	遺　跡　名	所　在　地	時　期
1	武道B	玉川村川辺字武道	奈良，平安
2	久保田A	玉川村川辺字久保田	奈良，平安
3	久保田B	玉川村川辺字久保田	奈良，平安
4	久保田C	玉川村川辺字久保田	奈良，平安
5	久保田D	玉川村川辺字久保田	奈良，平安
6	薬師堂	玉川村川辺字久保田	縄文早期末～前期初，古墳
7	杉内A	石川町中野字杉内	奈良，平安
8	杉内C	石川町中野字杉内	縄文，土師
9	杉内D	石川町中野字杉内	土師
10	杉内E	石川町中野字杉内	奈良，平安
11	堀ノ内	石川町中野字堀ノ内	奈良，平安
12	藤田城	石川町中野字堀ノ内・滑津	中世
13	下悪戸	石川町中野字悪戸	奈良，平安
14	悪戸古墳群	石川町中野字悪戸	古墳
15	中悪戸	石川町中野字悪戸	古墳，奈良
16	上悪戸	石川町中町字悪戸・堀込	奈良，平安
17	太子堂	石川町中野字町屋・吹上	奈良，平安
18	水　内	石川町中野字水内	奈良，平安
19	堀　込	石川町中野字堀込	奈良，平安
20	富貴田A	石川町中野字富貴田	奈良，平安
21	富貴田B	石川町中野字富貴田	奈良，平安
22	大　台	石川町中野字七郎内	旧石器，縄文中期
23	七郎内A	石川町中野字七郎内	奈良，平安
24	七郎内B	石川町中野字七郎内	縄文中期，奈良，平安
25	七郎内C	石川町中野字下ノ内	縄文中期，平安
26	七郎内D	石川町中野字七郎内	縄文中期，平安
27	井戸上A	石川町中野字井戸上	平安
28	井戸上B	石川町中野字井戸上	奈良，平安
29	背戸A	石川町新屋敷字背戸	縄文
30	背戸B	石川町新屋敷字背戸	弥生
31	屋敷下	石川町新屋敷字屋敷下	奈良，平安
32	烏　内	石川町新屋敷字耕土	縄文後・晩期，弥生，奈良・平安
33	金　田	石川町中野字鍛冶内	奈良，平安
34	和　久	石川町中野字和久	縄文晩期，弥生，奈良・平安
35	笹　塚	石川町新屋敷字笹塚	奈良，平安
36	長土路	石川町新屋敷字長土路	縄文，奈良，平安
37	長土路B	石川町新屋敷字長土路	奈良，平安
38	鷹ノ巣A	石川町新屋敷字鷹ノ巣	奈良，平安
39	鷹ノ巣B	石川町新屋敷字鷹ノ巣	縄文
40	鷹ノ巣C	石川町新屋敷字鷹ノ巣	奈良，平安
41	鷹ノ巣D	石川町新屋敷字鷹ノ巣・笹塚，沢井字藤沢	縄文，奈良，平安
42	藤沢B	石川町沢井字藤沢	奈良，平安
43	藤沢F	石川町沢井字藤沢・猫石	奈良，平安
44	宝殿前	石川町中野字宝殿前	奈良，平安
45	成　亀	石川町中野字成亀	縄文中期
46	沖ノ田輪塚群	石川町中野字沖ノ田輪	鎌倉，南北朝
47	雀	石川町新屋敷字雀	奈良，平安
48	雀　B	石川町新屋敷字雀	奈良，平安
49	田　上	石川町新屋敷字田上	縄文，奈良，平安
50	大壇古墳群	石川町新屋敷字田上・焼場	古墳
51	大　壇	石川町新屋敷字大段	縄文，奈良，平安
52	焼　場	石川町新屋敷字焼場	縄文，奈良，平安
53	後原塚群	石川町沢井字後原	不明
54	殿　戸	石川町新屋敷字石船	奈良，平安
55	殿　内	石川町新屋敷字外ノ内	奈良，平安
56	殿内B	石川町新屋敷字外ノ内	奈良，平安
57	新覚A	石川町新屋敷字新覚	奈良，平安
58	新覚B	石川町新屋敷字新覚	縄文，奈良，平安
59	新覚C	石川町新屋敷字新覚	奈良，平安
60	高屋敷	石川町新屋敷字高屋敷	奈良，平安
61	高屋敷B	石川町新屋敷字高屋敷	奈良，平安
62	古内A	石川町沢井字山ノ神・後原	奈良，平安
63	山ノ神A	石川町沢井字山ノ神	弥生
64	塚原古墳	矢吹町中ノ目字塚原	古墳
65	甲三ツ段古墳	矢吹町明神字甲三ツ段	古墳
66	西原遺跡	矢吹町明神字西原	縄文後期
67	沼和久横穴群	矢吹町明神字沼和久	古墳
68	大池西遺跡	中島村松崎字大池西	古墳
69	住吉遺跡	中島村松崎字住吉	縄文，古墳
70	袴館遺跡	中島村松崎字原田	縄文
71	袴館古墳	中島村松崎字原田	古墳
72	松崎蝦夷穴群	中島村松崎字善棚	古墳
73	松崎遺跡	中島村松崎字原田	縄文，弥生，古墳
74	松美遺跡	中島村松崎字松美	古墳
75	月山遺跡	中島村松崎字山根	奈良，平安

第１編　七郎内Ｃ遺跡

時代・種類	縄文時代中期－集落跡 奈良・平安時代－集落跡
調査期間	５月18日～８月21日
調　査　員	小平良男　　大越道正 阿部俊夫　　松本　茂
協力機関	石川町教育委員会

第１章　調 査 経 過

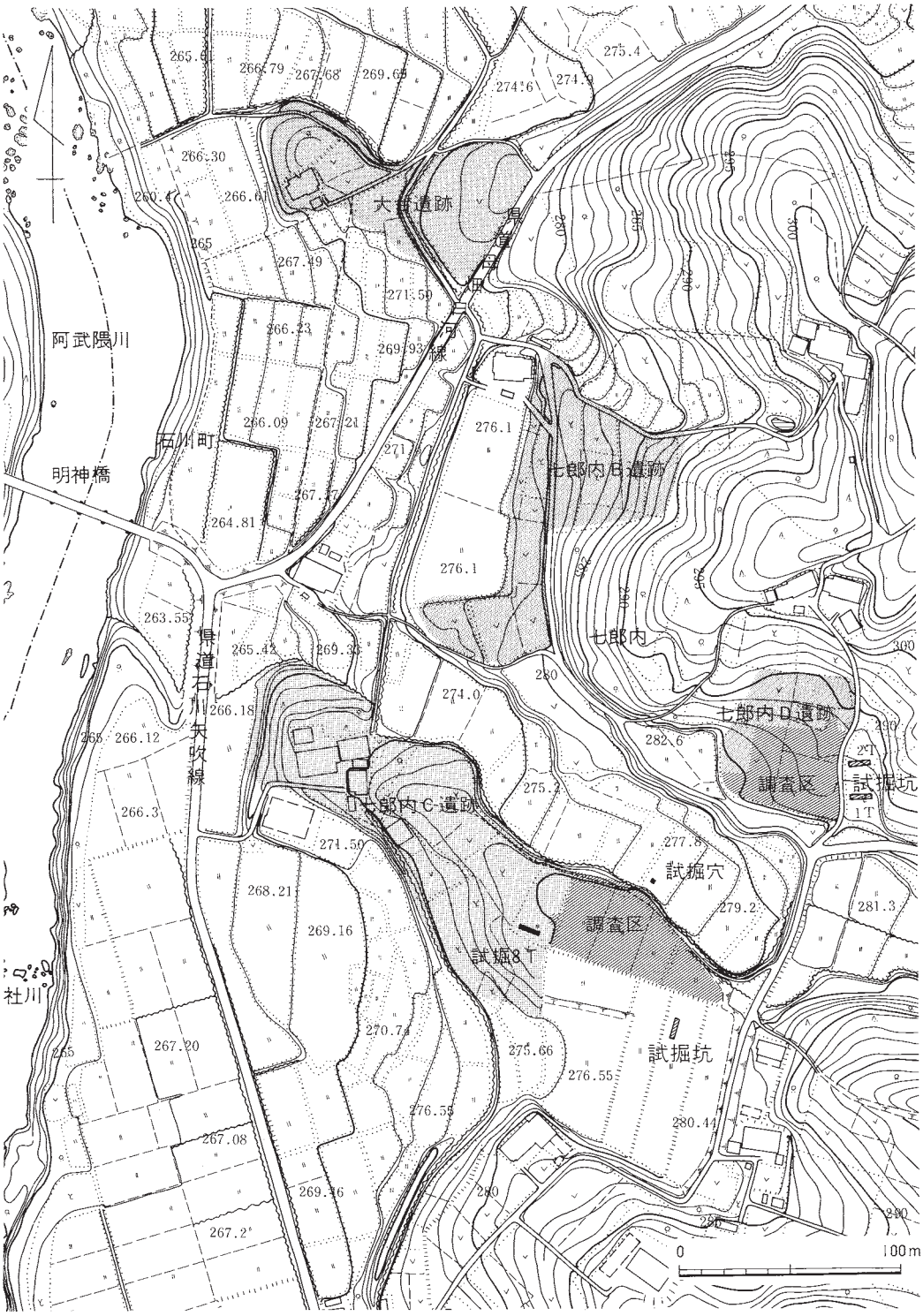
第１節　位置と地形

七郎内Ｃ遺跡は，石川郡石川町下ノ内地区に所在する遺跡である。この地区は石川町の西北部にあたり，阿武隈川と社川の合流点より東に約300m，また国鉄水郡線野木沢駅より南西に約１㎞の地点に位置している。遺跡周辺の地形は，西に二つの河川の氾濫原や段丘を越えて石英安山岩質熔結凝灰岩を基盤とする丘陵と，砂・礫・粘土等の埋積谷堆積物で構成された台地（いわゆる郡山面）が展開し，東に古期花崗閃緑岩及びペグマタイトを伴う花崗岩を主体とした阿武隈山地西端が迫っている。

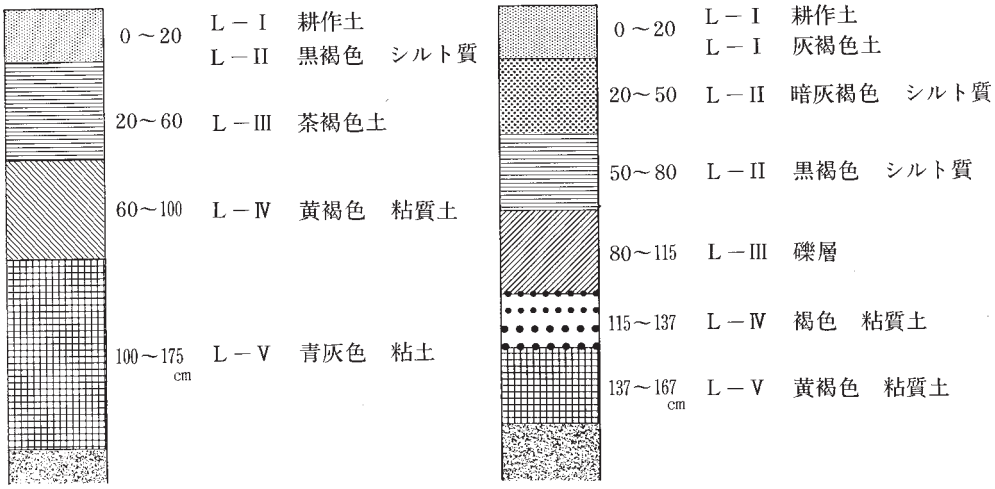
遺跡はこの阿武隈山地西端より北西方向に伸びて阿武隈川東岸に達する段丘上にある。この段丘は約50mの幅と400m前後の長さを有し，氾濫原より三段の高まりをもって山地に連なっていく。遺跡が立地するのは第二段の中位段丘上であり，遺跡の全面積は約15,000㎡を占める。また，この段丘上の南北には，段丘に沿ってそれぞれ小開析谷が走り，このうち北側開析谷を挟んだ北方の丘陵斜面には七郎内Ｄ遺跡がある。遺跡の標高は278m～280m前後を示し，東側から西側にかけて，又中央部より南北それぞれにわずかに傾斜している。北側開析谷との比高差は約３m～3.5mを有し，南側開析谷とは約1.5m～3.5mを測る。一方，遺跡が立地するこの中位段丘は，遺跡の東端より東に約50m付近から約10°の傾斜角をもって標高を増し，侵食をうけた高位段丘となる。

この高位段丘面には，しばしば花崗岩の露頭が観察され，往時多くの石製品の材料を提供していたものと思われる。現在遺跡は水田・桑畑・蔬菜畑・宅地と広く利用されており，南北の開析谷は谷地田となっている。今回の調査はこのうち工事にかかる遺跡東端の水田部分について行い，最終的に約2,000㎡を調査対象区域とした。調査区域の中央部一帯は，水田造成による削平を強くうけており，遺構や遺物の多くは段丘縁辺部に集中していた。

なお，調査区内で認められた基本層序は次の通りである。第Ⅰ層…耕作土。第Ⅱ層…粒子の細かいシルト気味の黒褐色土。第Ⅲ層…やや粘性をもつ茶褐色土。第Ⅳ層…黄褐色粘質土。第Ⅴ層…青灰色粘土層。もちろんこれらの層序が調査区全域で整合的に観察されたわけではない。削平をうけた調査区中央部付近は，ほとんど第Ⅰ層直下に第Ⅲ層・第Ⅳ層が続いて第Ⅱ層を欠き，南北縁辺部では第Ⅱ層が厚く遺物包含層としてそれぞれ東西方向に帯状に分布していた。第Ⅲ層は第Ⅱ層から第Ⅳ層への漸移層と考えられ，第Ⅳ層が地山である。一部の遺構はこの第Ⅳ層を掘り込んでつくられていた。これが第Ⅴ層であり，この面に達すると湧水がみられた。第２図に調査



第1図　七郎内C遺跡周辺地形図



第2図　七郎内C遺跡基本層序柱状図

区と調査区南北に走る二つの開析谷の柱状図を掲げる。　（小平）

第2節　調査経過

本遺跡は，昭和53年，当課の踏査によって発見され，翌54年に試掘調査された遺跡である。踏査では約15,000㎡が遺跡面積とされたが，試掘調査では工事にかかる遺跡東部2,400㎡を調査対象区とした。この調査では，設定したトレンチ内より縄文時代の住居跡が検出され，出土遺物にも大木８ａ式期に比定される縄文土器と，若干の土師器片が確認されたため，遺跡は，縄文時代中期と，奈良～平安時代の複合遺跡であろうと判断された。

今回の調査は，工区変更や工法等による遺跡保存が困難な東部区域，約1,600㎡を対象に記録保存の目的で実施した。調査期間は，５月～７月まで２カ月の予定で計画したが，調査が進行するのに伴い，対象面積の拡張を余儀なくされ，又，調査区の北側と南側で確認された遺物包含層が予想を越える大量の遺物を出土し，更にこの包含層の中よりしばしば遺構が検出される，といった事態が生じたため，当初の予定を約１カ月遅延せざるをえなくなった。

調査は，対象区域に一辺10mの大グリッドを設定し，東西列にアルファベット，南北列に算用数字を付し，両者の組合せで各グリッドを呼称，更にこの大グリッド内に一辺１m四方の小グリッド区分を設け，東西方向並列型に１より100番までの番号を付した。遺物は，遺構内のものを除き，原則として小グリッドごとに収納した。グリッドの南北軸線偏度はN－29°１′20″－Eである。

調査日誌概要

５月18日　重機による表土剝離作業を開始する。早くも住居跡らしい落ち込みを２基，土坑数基を確認する。遺跡の略号をＳＲＵ－Ｃとする。

５月19日　基準杭を設定し，遺構検出作業を開始する。

５月20日　遣り方設定。ベンチマークは280.3m。

５月21日　Ｃ－１グリッドと調査対象外区域の境界に遺構が検出されたため，調査区を西側に若干拡張する。拡張区域をＣ－０グリッドとする。

５月22日　Ａ・Ｄグリッドに約10mの幅をもち東側に伸びる遺物包含層を確認する。

５月27日　上記の包含層の範囲を確認するため調査区のＥ20ラインに沿ってトレンチを設定する。その結果少なくとも南側の包含層は更に東に伸びることが判明する。

６月１日　現在まで住居跡２，掘立柱建物跡２，土坑20を検出し，順次精査に入る。

６月２日　調査区を東側に拡張するため再び重機を稼動させる。拡張面積は約600㎡。

６月４日　拡張区に基本杭を設定。これに伴い調査区全域の東西ラインを６まで延長する。

６月９日　39号土坑より琥珀製小玉が大量に出土する。

６月17日　Ｄ－４グリッドで住居跡検出。これで検出された住居跡は４軒となる。Ａ－１グリッドを掘り込む。遺物の出土量は多いが性格不明なため特殊遺構とする。

６月24日　55号土坑より大珠が１点出土する。

７月２日　６月末より現在まで主に南側包含層より４基の埋甕遺構を検出する。

７月６日　第２遺物包含層の掘り下げを開始する。

７月15日　Ｄ－４グリッドの掘り下げ開始。

７月23日　Ｄ－２・３グリッドの掘り下げ開始。その過程でＤ－３グリッド内より新たに住居跡１軒を検出する。土坑は72号まで精査。

７月27日　Ｄ－２グリッドで再び住居跡１軒を検出。

７月30日　第２・第３遺物包含層の精査をほぼ終了する。引き続き第１・第４遺物包含層を掘り下げ，遺物取り上げと平面実測に入る。

８月１日　現地説明会を行う。

８月３日　Ａ－３グリッドで石組みの炉跡を検出する。

８月５日　Ａ－３グリッドで土偶を検出する。土偶は現在まで16個体を確認する。

８月７日　Ａ－３・４グリッドの掘り下げを継続。なお明日より16日まで現場作業休みとなる。

８月17日　遺跡南北の開析谷の土層を確認するため２本のトレンチを入れる。

８月20日　第１・第４遺物包含層の精査を終了。全測図の作製，遺跡全景の撮影を終え全ての調査作業が完了する。発掘総面積は1,921㎡。調査日数は64日であった。　（小平）

第２章　縄文時代の遺構と遺物

本章では縄文時代に属すると思われる遺構・遺物について取り扱う。遺構には竪穴住居跡をはじめとし土坑・埋甕など種類・性格の異なるものも含まれ，そこから出土した遺物も多数にのぼる。また遺構の遺存状況は，後世の撹乱によって極めて悪く，炉跡や焼土遺構のみ検出されたものがある。本来は竪穴住居跡の上部が削平されたものと推定されるが，柱穴構造や他の施設に不明な点があるため，第２節竪穴住居跡の項からは切り離し，第３・４節で報告する。なお遺物は遺構内から出土したものは各遺構の項で記載し，遺構に伴わず出土した遺物は第10節で記載することにする。

第１節　遺構・遺物の概観

１．遺構の分布

縄文時代に属する遺構として，住居跡６，焼土遺構５，埋甕５，土坑71，ピット364，性格不明遺構２，包含層４カ所が検出されている。主体を占める時期は縄文時代でも中期のものであるが，土坑やピットは所属時期を明確に比定し得る遺物の出土が比較的少なく，個々の所属時期は不明な点も多い。しかしながら遺構内の堆積土の状況や，大部分の遺構中より縄文中期の土器片が出土していること等から，明確に時期比定のできない土坑･ピットも多くは中期に属するものと考えられる。

現況で検出し得た遺構の分布は，台地縁辺部に集中する傾向が認められ，中央部付近では土坑やピットが散在するのみで遺構の分布は希薄である。当遺跡のごとく，特に住居跡が台地縁辺部に群在し占地する傾向は，他の縄文時代中期の遺跡における住居跡の占地についても一般的に認められ，台地の中央部がすでに相当削平されている事実もあるが，比較的往時の姿を留めているものと考えられる。

２．土器の分類

当時代の遺物には，縄文土器・石器・土製品等が検出されているが，ここでは量的に多く，時期比定の根拠になる土器のみについて取り扱う。

出土した縄文土器のなかでは圧倒的に中期の土器群が主体をしめ，その他前期の土器が少量認められるのみである。以下，器形や施文される文様を中心として分類を行うが，縄文時代中期の土器群を第Ⅰ群から第Ⅻ群の12群に，その他の時期をⅩⅢの１群に一括した。なお，遺構・遺物の具体的報告に入る第２節以下では，特に土器の報告に関して本項で分類した記号を併用する。

七郎内Ｃ遺跡出土縄文土器分類

第Ⅰ群土器：縄文原体の側面圧痕文が施される土器

器形は口縁部の外反する深鉢が多い。口縁部に複列の側面圧痕文が横位に施文される。胴部は地文のみのものが多いが，Ｙ字状の隆帯や綾絡文が縦位に施文されるものも認められる。

第Ⅱ群土器：細い隆帯に沿って，又は単独で押し引きによる有節沈線文が施文される土器

口縁部形は球体に近い形態で，口縁上端が僅かに外反する深鉢が多い。他に口縁の外傾する深鉢，樽形の深鉢，小型土器が認められる。口縁部にはブリッジ状の把手・Ｓ字状の突起等が付されるものもある。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる。口縁部には隆帯と有節沈線により楕円区画文･弧状文が連続的に配されるものが多い。胴部は縄文を地文とし，隆帯と有節沈線によって縦に区画し，有節沈線により横位に加飾の加えられる例も少なくない。

第Ⅲ群土器：口縁部に太い隆帯による加飾が加えられる土器

器形はバラエティーに富み，円筒状・口縁部外反・樽状の深鉢と，小型土器の一群がある。口縁は平縁を呈する。施文される文様からさらに３分類される。

１　類：口縁直下に太い隆帯の貼り付け文が施される土器

隆帯により表出される突起のモチーフは楕円形状・横Ｓ字状・渦巻状を呈するものが多く，突起上には有節沈線文が施文されるものが多い。文様帯は口縁直下に集中し，太い隆帯を全周させ，胴部文様と画するものが多い。隆帯上には，指頭による圧痕，縄文原体の側面圧痕が縦位・横位に施文される例もある。胴部は縄文を地文とし，隆帯と沈線又は有節沈線で縦区画の行われるものがほとんどであるが，無文の土器も認められる。

２　類：頸部文様帯が認められる土器

頸部上下端は数条の沈線・隆帯によって区画される。頸部には貼り付け痕を明瞭に残す小波状の隆帯のある例も認められる。

３　類：太い隆帯による中空・眼鏡状の大型把手の付される土器

器形をうかがえるような土器は少なく，把手のみが出土したものが多い。口縁部には平行沈線による連弧状の文様が表出されるものもある。

第Ⅳ群土器：胴部に沈線による加飾が多用される土器

器形は口縁部が外傾して開き，口縁上端で「く」の字状に内側に屈曲する深鉢と，キャリパー形に近い器形を呈する深鉢が多い。施文される文様からさらに２分類される。

１　類：鋭い半肉彫り的な平行沈線が器面全面に施され，地文に縄文を持たない土器

口縁上には眼鏡状・横Ｓ字状の把手が付される。口縁部文様帯と胴部文様帯は隆帯による長楕円形状の貼り付け文で上下に画される。口縁部には隆帯・平行沈線により渦巻文を主体に種々の文様が表出される。胴部は平行沈線を縦位に施す。

２　類：地文に縄文が用いられる土器

施文される沈線は断面の丸いものと鋭いものがある。口縁部と胴部は全周する数条の沈線で上下に画される。口縁部文様帯は不明なものが多い。胴部の沈線は器面全面に施されるものと，単位文様的に施されるものがある。

第Ⅴ群土器：側縁を沈線により調整した隆帯によって，文様が表出される土器

器形はキャリパー状を呈する深鉢が主体を占めるが，胴部が大きく開く鉢形を呈するような土器も認められる。口縁部文様帯と胴部文様帯は全周する隆帯沈線により上下に区画される。一部には頸部文様帯が認められる例もある。口縁部文様帯には，隆帯と沈線によって，クランク状，末端を渦巻状とした波状文が単位文様的に表出される。末端の渦巻は突起状を呈するものも認められる。胴部には縄文のみのものが多いが，複列の沈線を縦位に配し，一部を渦巻状として所謂剣先状の突起が施される例もある。

第Ⅵ群土器：縄文のみが施された土器を一括した。

第Ⅶ群土器：粘土紐の積み上げ痕を残し，積み上げ痕上に指頭等による押捺が加えられる土器

器形は口縁部が外反気味に開く深鉢，内彎する深鉢，胴部に丸味を有する深鉢等がある。キャリパー型の深鉢は認められない。施文される文様によって３分類し得る。

１　類：積み上げ痕上に指頭による押捺の加えられるもの

２　類：積み上げ痕が明瞭ではないが，棒状の工具による刺突の加えられる土器

３　類：積み上げ痕上にナデによる調整の加えられた土器

第Ⅷ群土器：太い隆帯と，それに沿って又は単独で，角押文・爪形文が施文される土器

口縁部に大きな山形状の把手の付されるものが多い。

第Ⅸ群土器：胴部上半に渦巻文・楕円形状の区画文の配される土器

地文に条線が施されることを特徴とする。

第Ⅹ群土器：交互刺突文が施された土器を一括した。

１　類：交互刺突(器面に斜方向)が口縁部・胴部に施文される土器で，地文を持たない。

２　類：交互刺突(器面に斜方向)が口縁部のみに施文される土器で，地文を有す。

３　類：円形刺突(器面に直角)が交互に加えられた土器で，地文を有す。

第Ⅺ群土器：浅鉢形の土器を一括する。

第Ⅻ群土器：縄文時代中期の土器であるが，いずれの群にも入らない土器を一括した。

第ⅩⅢ群土器：縄文時代中期以外の時期の土器である。　（小平・大越・阿部・松本）

第２節　竪穴住居跡

１号住居跡

遺　　構（第３図，図版３～５）

Ｂ－１グリッドに検出された住居跡で，調査区の北西端に位置する。遺構検出面は茶褐色土である。南側で29号土坑と重複し，１号住居跡が新しい。プランは北側のふくらんだ長径5.0m，短径4.4mの不整な楕円形状を呈し，住居跡の長軸はほぼ北を指す。

覆土は混入する地山ブロック土により３層に分層し得た。堆積状態は水平状の堆積が観察されるものの，いずれの層中にも多量の地山ブロックが混入しており，人為的に埋めもどされている可能性が強い。

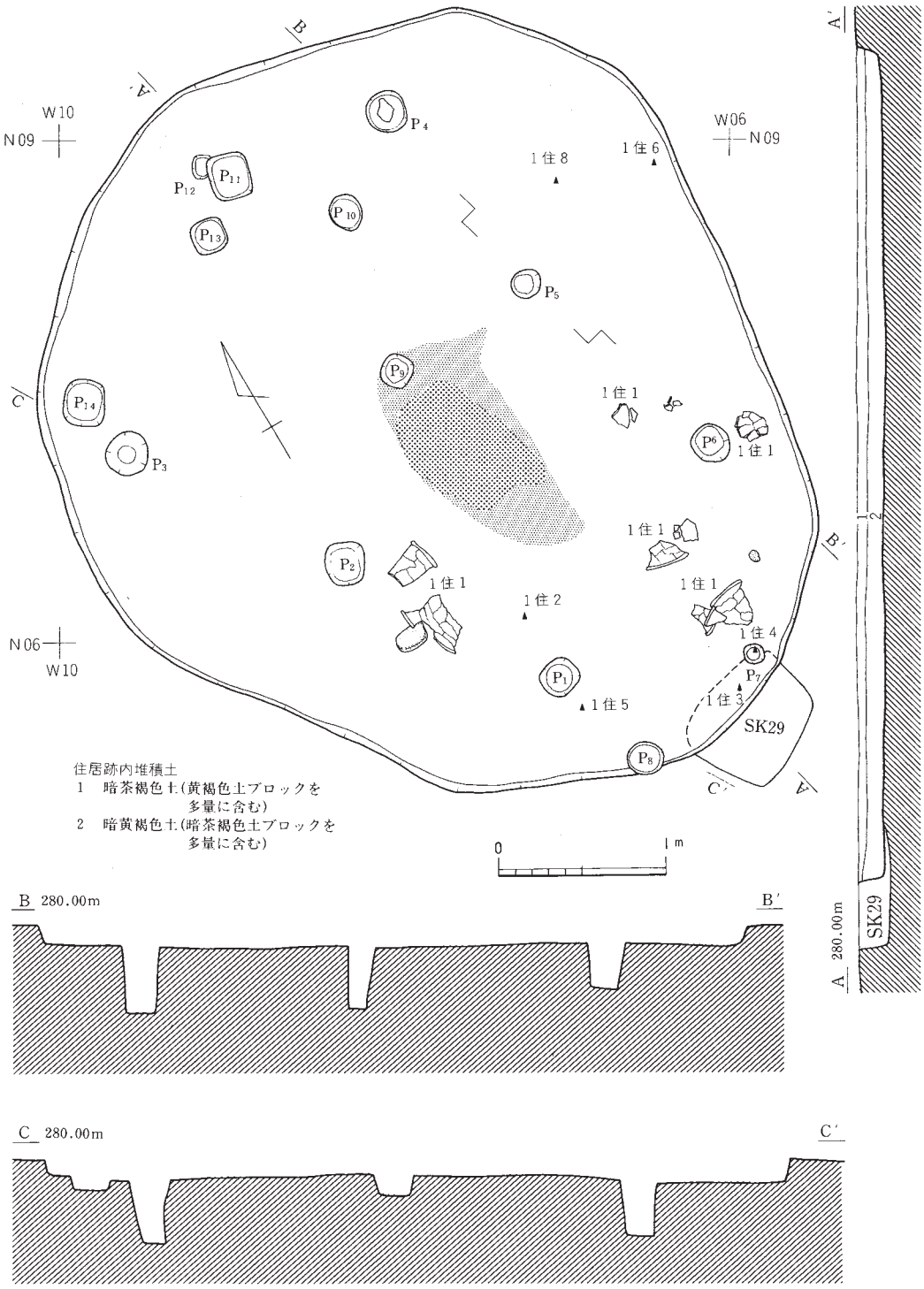
床は茶褐色土下の青灰色粘質土を僅かに掘り窪めた地山面をそのまま用い，ほぼ水平で壁際を除いて固く締まっている。壁は急傾斜で立ち上がり，壁高は12cm前後を測る。周溝は検出されなかった。ピットは総数14個が検出された。P_1～P_6・P_{11}は径・深さがいずれも25×30～40cm前後を測り，炉を挟んで直線的に配列しており，１号住居跡の柱穴と考えられる。P_7・P_8は深さが10cm前後と浅く，設置される位置が壁際に寄っていることから，１号住居跡の出入口施設に関連するピットと考えられる。

炉は住居跡中央やや南寄りに位置し，床面をそのまま利用した地床炉で．掘り込み等は認められなかった。約80×55cmの範囲は加熱を強く受け燃焼面と考えられる。周辺部は部分的に加熱を受け，焼土・カーボンが密集している。P_9は炉の北端に近接するピットで，深さは12cmと浅く他のピットとの配列も認められず，柱穴とは考えられない。一方ピットの周縁が加熱を受けている所から，炉に付随する施設と理解されよう。しかしピット内での火の使用をうかがわせるような様相は観察されなかった。ピット覆土中には焼土・カーボンの堆積が認められることから，炉に設置されていた土器等を住居跡の廃絶に伴い，抜き取った可能性が強い。

遺　　物（第４図，図版36・76）

器形をうかがえる土器は床面直上から浅鉢が１点出土したのみで，他には深鉢の胴部小破片が僅かと，石器が８点，及びフレーク・チップ類が少量出土したのみである。

土　　器　浅鉢（１住１）は，炉跡南側に大型破片状態で散在していたものをほぼ完形に復元したものである。出土状態はほとんどの破片が器面外面を上向きにした状態で検出され，住居跡廃絶時に大型破片が，人為的に置かれたものと考えられる。器形は底部から直線的に開き，口線上端が外側に屈曲する。内面には明確な稜が認められる。口唇部には沈線により末端を渦巻状とした長楕円形状の文様が施されている。

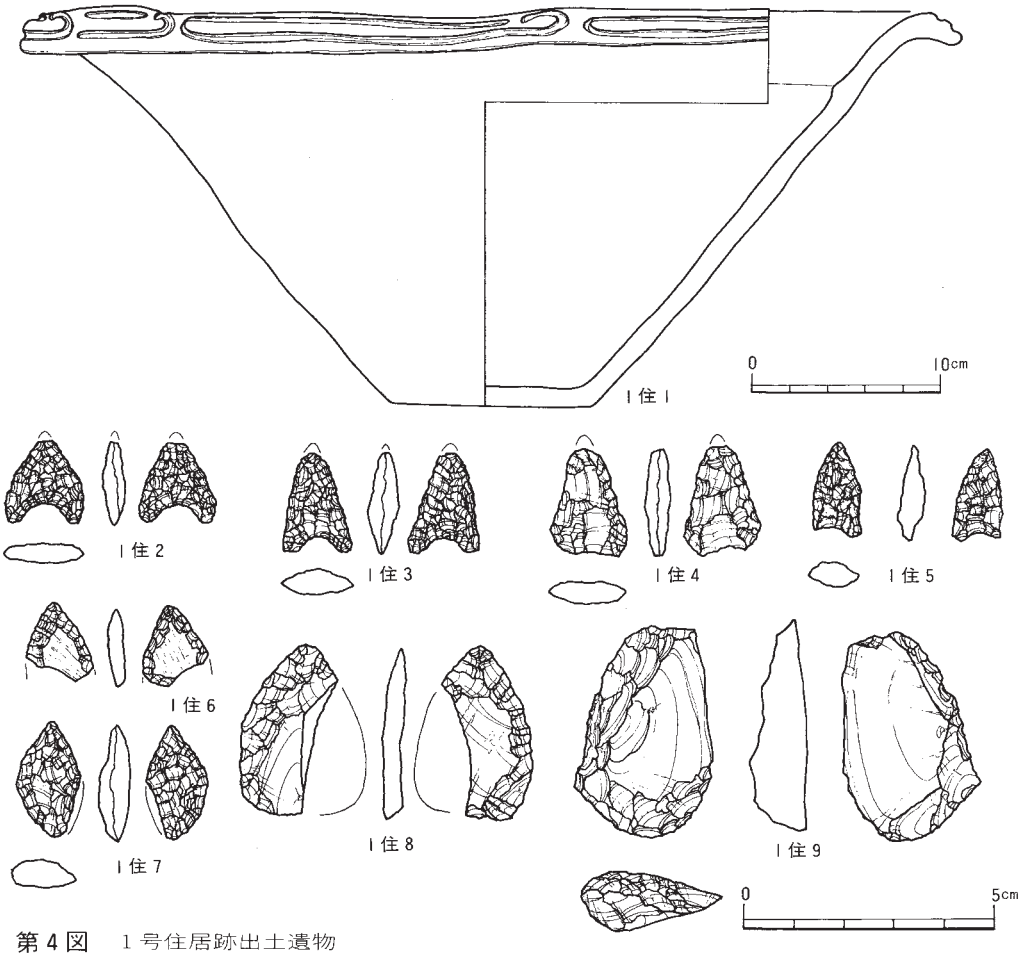

W10
N09
W06
N09
N06
W10
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
1住1
1住2
1住3
1住4
1住5
1住6
1住8
SK29
住居跡内堆積土
1　暗茶褐色土(黄褐色土ブロックを多量に含む)
2　暗黄褐色土(暗茶褐色土ブロックを多量に含む)
0
1m
B 280.00m
B'
C 280.00m
C'
A 280.00m
A'
SK29

第３図　１号住居跡

石　　器　８点出土した（１住２～９）。出土層位は堆積土内（１住２・６・７・９）。床面直上（１住３・５・８），P_8内（１住４）である。石鏃は５点（１住２～６）で基部に抉りを有するもの（１住２・３・５）と抉りが明確でないもの（１住４）がある。欠損品は４点で（１住２～４・６），先端部欠損（１住２～４）と，基部欠損（１住６）がある。１住７はドリル状の石器で一部側縁を欠損する。１住８は槍状の薄い剝片の周縁に刃部が作り出されている。一部側縁を欠損する。１住９は厚い剝片の下端に刃部が作り出されたスクレイパー状の石器である。（松本）

第１表　１号住居跡ピット計測表（cm）

P No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
直　径	22	26	26	25	18	23	12	21	20	22	28	16	21	28
深　さ	34	12	42	42	38	28	14	10	12	－	32	3	8	7



第４図　１号住居跡出土遺物

３号住居跡

遺　　構（第５図，図版６）

Ｄ－４グリッドに検出された住居跡である。開田時の削平が著しく住居跡の北側の一部が，２×1.4mの範囲で遺存するのみである。検出面は西側が黄褐色土，東側が黄褐色土下の白色粘質土である。プランは遺存部から推定すると，隅丸の方形状を呈するものと考えられる。覆土は暗茶褐色土をベースとし，混入物により４層に分層し得た。堆積状況はレンズ状の堆積が観察され，自然堆積を示す。ℓ－３は壁の剝落土と考えられる。床面上には焼土・カーボンが多く堆積していた。

床は白色粘質土層を掘り込んだ地山面を利用し，平坦で固く締まっている。壁は急傾斜で立ち上がり，壁高は北側コーナーで27cmを測る。西壁際には幅約15cm，深さ約10cmの周溝がある。

ピットは径25cm以上のものが４個検出された。P_3はカット面に検出されたピットで，床面からの深さは推定30cm前後と思われ，柱穴の可能性が強い。他のピットは深さ15cm前後と浅く，配列に規則性も認められないことから，柱穴としての可能性もあるが断定することは避けたい。壁際には５個のピットがある。いずれも直径約10cm，深さ約10cmを測る。ピット覆土中に焼土の堆積が認められ，壁際をめぐる配列から壁柱穴的機能が考えられる。炉は検出されなかった。

第２表　３号住居跡ピット計測表（cm）

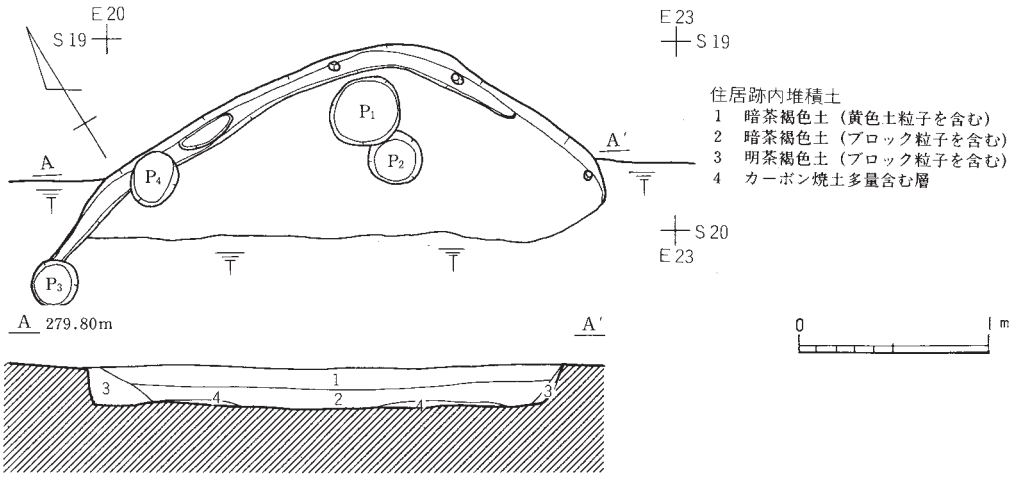
P No.	P_1	P_2	P_3	P_4
径	38	29	25	30
深さ	12	16	29	9

遺　　物

遺物は少なく，覆土中より縄文土器深鉢の胴部小破片とチップ類が出土したのみである。

ま　と　め

３号住居跡は削平のため規模等不明な点が多い。床面上には焼土の堆積がほぼ全域にみられ，



第５図　３号住居跡

本遺構が焼失家屋であることが窺われた。出土遺物中にはⅢ・Ⅷ群土器がある。　（松本）

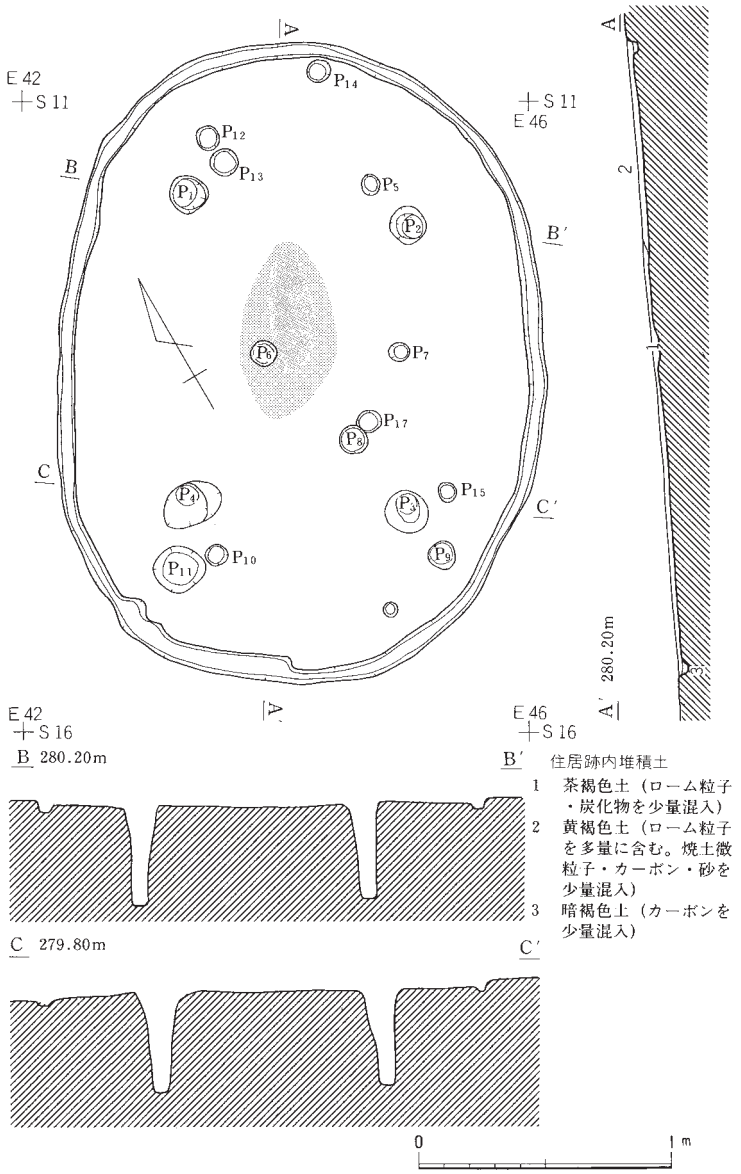
４号住居跡

遺　　構（第６図，図版７）

調査区の南東部，Ｄ－６グリッドで検出された。検出面は住居跡北側の約⅓が暗褐色土で南側⅔が茶褐色土である。全般的に耕作による削平をうけている。南側は包含層と重複し，検出にはやや困難が伴った。本遺構の平面プランは南北に長軸をもつほぼ卵形の楕円形を呈し，プランの長軸は北北東に傾いている。規模は長径5.06m，短径3.8m，床面積は約12.34㎡である。

住居跡内の堆積土は，茶褐色土（ℓ－１），暗黄褐色土（ℓ－２），暗茶褐色土（ℓ－３）と３層に分類されるが，周溝にのみ堆積した第３層を除けば堆積土の層厚は最大で８㎝にすぎず堆積のしかたもℓ－２にℓ－１が流れ込む形をとっており，自然堆積である可能性が強い。

床は黄褐色粘質土の地山を掘り込んでつくられ固くしまっている。床面は北から南にかけて約３°の傾斜角をもち，北端と南端の比高差は38㎝を測る。この傾斜はやや不自然にもみえるが炉の傾斜状態から見てこの住居跡は当初より傾斜して



第６図　４号住居跡

つくられていたと考えられる。床面から壁へは急角度をもって立ち上がるが遺存壁高は２～11cmである。周溝は断面Ｕ字状で壁直下を全周している。

ピットは17個検出されたがこのうち主柱穴と考えられるのはP_1～P_4の４個である。これらのピットの径は床面で25～40cmで，床面から約30cm下がった地点から15～20cmと細くなり，断面がいわゆる漏斗状に近くなる。ピット上半の壁面は多少崩落したものと思われ，恐らく柱の太さは15～20cmと推定される。深さは72～80cmを測り，相互の距離は東西1.75～1.8m，南北2.2～2.4mとほぼ規則性をもっている。他のピットは深さが10～30cmにすぎないことから少なくとも主柱穴にはなりにくいと思われる。

炉は住居跡の中央よりやや北寄りに位置する地床炉で，約80×140cmの範囲で床面が焼け，特にその中央部分35×95cmの範囲は明赤褐色に変化しブロック状を呈している。その長軸は，住居跡プランの長軸に沿っている。

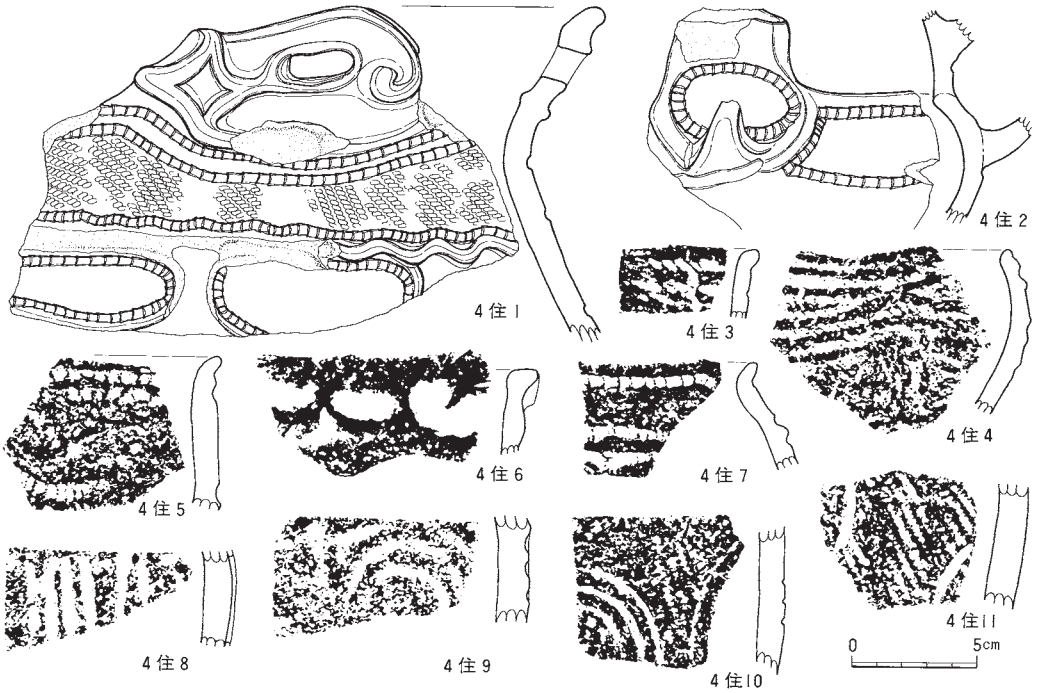
第３表　４号住居跡ピット計測表（cm）

P No.	P_1	P_3	P_2	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
径	30	30	34	50	17	18	17	22	20
深さ	80	78	72	80	6	14	7	31	22
P No.	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	
径	15	38	18	20	16	15	9	18	
深さ	33	39	10	12	30	16	14	5	

遺　　物（第７・８図）

全て縄文時代中期のものである。堆積土中のものを含め土器片は，約130点，石器５点が出土している。

土　　器　出土地点による内訳は



第７図　４号住居跡出土縄文土器

堆積土83点，床面35点，周溝内15点，ピット内数点である。大半が摩滅した小破片で遺存状況は悪い。器形的には大部分が深鉢と推定される。以下比較的施文上の特徴をもつ破片を出土地点ごとにみる。

堆積土からは，口縁部に縄文原体による圧痕をもつもの（第Ⅰ群土器，４住３），口縁部に付された隆帯に沿って有節沈線が施されたもの（第Ⅱ群土器，４住５・７），縄文の地文上に渦巻状沈線を施した胴部破片（第Ⅳ群土器，４住10・11）が出土している。

床面上からは，上述した第Ⅳ群土器の胴部破片（４住９住居跡南西部出土）や，同類で４住４のように口縁部に隆帯でクランク状文様を施した破片（住居跡東部出土）も検出されている。

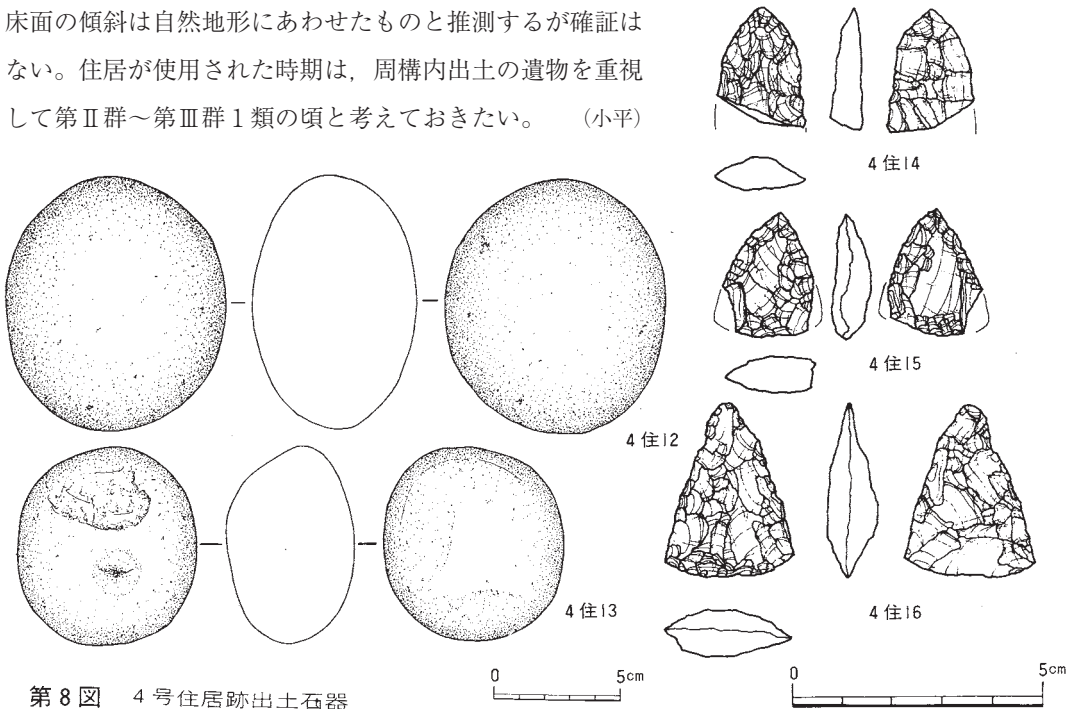
周溝からは，隆帯による渦巻状小突起を付した口縁部破片（第Ⅲ群１類土器，４住６住居跡南端部出土）口縁部に大型把手やブリッジ状把手を付し，その下に隆帯による波状文や楕円区画文に沿って有節沈線を施した大型破片（第Ⅱ群土器，４住１・２）が出土している。

P_8からは縄文の地文上に縦位の沈線がある胴部破片（第Ⅳ群土器，４住８）が出土している。

石　　器　土器に比較し出土量は少ない。わずかに堆積土中より石篦状石器（４住16）と基部の側縁が欠損した無茎石鏃（４住15），周溝より一部欠損した敲石（４住13）と石鏃の未成品（４住14），それに床面より磨石（４住12）が出土したのみである。

ま　と　め

この住居跡は床面が南に向かってやや傾斜し，４本の柱を主柱とする上屋構造をもっていたものと考えられる。ただピットの配列からみて，P_{14}が支柱としての役割をもった可能性も残る。床面の傾斜は自然地形にあわせたものと推測するが確証はない。住居が使用された時期は，周構内出土の遺物を重視して第Ⅱ群～第Ⅲ群１類の頃と考えておきたい。　（小平）



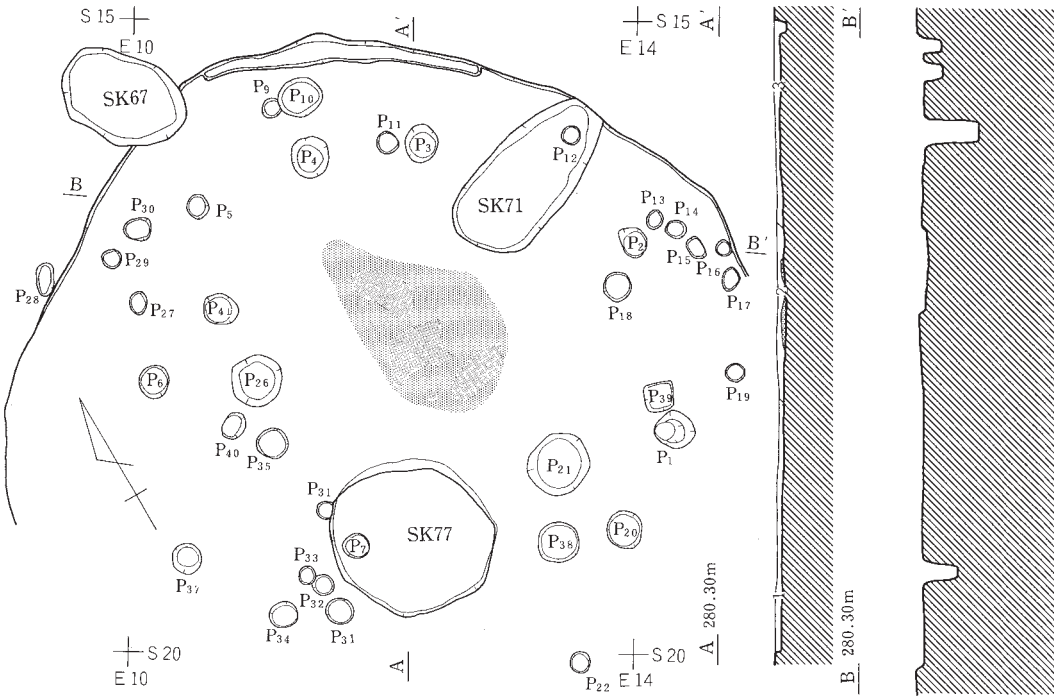
第８図　４号住居跡出土石器

５号住居跡

遺　　構（第９図，図版８・９）

調査区中央部の南端，Ｄ－３グリッドで検出された。検出面は北側が明茶褐色土，中央部が茶褐色土である。本跡は遺物包含層掘り下げの段階で漸く検出された遺構である。全体的に削平が著しく北側のプランは検出されたものの南側は最後まで明らかにしえなかった。しかし検出された北側の壁の状況から判断すると本跡の平面プランはほぼ隅丸方形を呈し，5.5m前後の直径をもつかなり大型の住居跡となる可能性が強い。本跡は３基の土坑と重複しているが，67・71号土坑は本跡の壁を切っている点で新しい時期の所産と考えられる。また77号土坑との重複関係は明確にしえなかったが，土坑の状況から住居跡に伴うものとは考えにくく，遺物からみてごく接近した時期における両者の先後関係が想定される。

住居跡内堆積土は地山の黄褐色粘質土の混入の状態から３層が認められ，ほぼ北側に明茶褐色土，中央部に茶褐色土，南側に暗茶褐色土が被っている。これらの堆積のしかたは床面からみると単層で斜行状を示しており，自然堆積したものと考えられる。床面は，住居跡北半部が黄色土地山を直接床面とし堅固であるが，南半では黒色土を利用しているため幾分しまりが弱い。



住居跡内堆積土
1　暗茶褐色土（ローム・炭化物粒を少量含む）
2　茶褐色土（ローム粒・焼土・炭化物粒を含む）
3　茶褐色土（ロームブロック・炭化物粒を含む）

第９図　５号住居跡

第４表　５号住居跡ピット計測表（cm）

P No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
径	32	25	30	32	18	26	22	欠	16	35	17	15	16	16
深さ	46	40	50	42	28	18	27	番	47	11	16	8	11	21
P No.	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}	P_{28}
径	18	12	20	24	14	30	50	16	欠	欠	欠	40	19	欠
深さ	13	14	15	18	19	22	38	56	番	番	番	17	17	番
P No.	P_{29}	P_{30}	P_{31}	P_{32}	P_{33}	P_{34}	P_{35}	P_{36}	P_{37}	P_{38}	P_{39}	P_{40}	P_{41}	
径	15	22	20	16	15	24	24	15	25	32	28	22	28	
深さ	12	11	58	52	44	40	27	38	56	57	55	40	50	

周溝は，北側の一部約２ｍの範囲で残存し，断面Ｕ字形を呈している。幅は５～15cm，床面からの深さは４～７cmを測る。

ピットは，総数36個検出されている。P_1～P_4，P_9，P_{22}，P_{31}～P_{34}，P_{37}～P_{41}の15個のピットは，深さが40～60cm前後の深さをもち，また炉を中心に壁際を巡る点から，一応柱穴の可能性があると考えられる。勿論15個の全てが同時期の柱穴であったとは考えられず，ピットの位置や間隔からP_2－P_4－P_{40}－P_{31}－P_{38}やP_{39}－P_3－P_{41}－P_{34}－P_{22}等の数種類の組み合せが想定されるが，いずれも決定的根拠に欠け臆測の域を出ない。この他にP_{21}・P_{26}のように径が40～50cmと大きく，深さも柱穴と考えられるピットより浅いものがある。

炉は，住居跡床面をそのまま利用した地床炉で特別な施設をもたない。焼土の分布は，住居跡の中央やや北寄りの地点に約180×110cmの楕円形に近い範囲で広がっており，その長軸はほぼ北北西に傾いている。火床面の状態は一様ではなく，焼け具合の強弱の度合によって相異がみられ，焼土の範囲のなかで強く熱変した部分が３ブロック確認された。

遺　　物（第10・11図，図版76・77）

この住居跡が遺物包含層を小グリッド単位に掘り込んでいく過程で検出されたため，検出以前に収納した遺物と検出後の遺物の整理に若干の混乱が生じた。ここでは確実なものだけを問題にする。遺物は全て縄文中期のもので覆土中のものを含め100点をこえる。遺物は土器と石器であるが土器が圧倒的な割合を占め，両者とも南側一帯からの出土が多い傾向をもつ。

土　　器　土器には完形品がなく，ほとんどが摩滅した小破片で遺存状態は必ずしも良好ではない。器形では少数の小型土器を含めて深鉢が主体である。

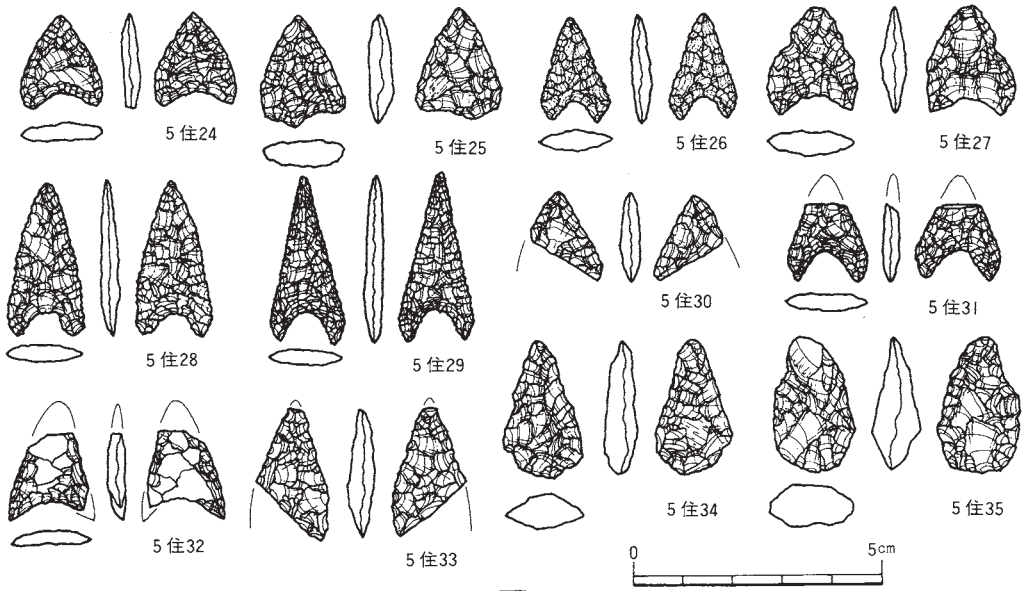
床面から出土した破片は41点を数える。多くは，隆帯による渦巻文をもつ胴部破片（５住11・18）口唇部に沈線で渦巻文様を表出したもの（５住23），直線や綾絡状の沈線を縦位に施したもの（５住17・21），隆帯側縁を半截竹管による沈線で縦区画したと思われるもの（５住22）等をはじめとする第Ⅴ群比定土器が大半を占めた（５住１・３・８・12・15・16）。またこの他に，隆帯に沿って有節沈線

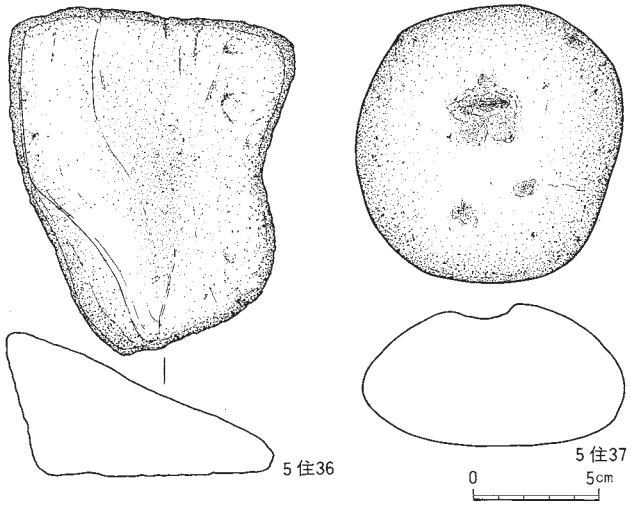
が施文されるもの（第Ⅱ群，５住19），口縁に付した太い隆帯上に指頭による押捺圧痕をもつもの（第Ⅲ群１類，５住６），粘土積み上げ痕上に指頭による押捺がみられるもの（第Ⅶ群１類，５住20）等が全体的割り合いは低いが出土している。

床面で第Ⅴ群土器が頻出する傾向は，堆積土内出土の土器についてもいえる。中には口縁直下にキャタピラ文をもつ関東系の土器片（第Ⅷ群，５住４）等もわずかに混在するものの，ほとんどは隆帯と沈線で文様構成をした第Ⅴ群土器である。（５住２・５・７・９・14）

なお，５住10・13は共に床面と同レベルながら恐らく本跡の南西壁外になると思われる地点から出土した資料で参考としてあげた。第Ⅴ群比定土器と考えているが，特に５住10は縄文の地文

第10図　５号住居跡出土縄文土器





第11図　５号住居跡出土石器

上に隆帯で剣先状突起文様を施す典型的な第Ⅴ群土器の特色を示している。

石　　器　石鏃（５住24～35）と石皿（５住36），磨石・凹石類（５住37）がある。いずれも南東コーナー付近より出土した。石鏃は全て無茎石鏃で，基部に抉りのあるもの７点，抉りのないものは１点である。欠損するものは４点で，先端部・基部を欠損するものがそれぞれ２点ある。５住34・35は石鏃の未製品と考えられる。石皿は欠損品で片面は使用により凹んでいる。

ま　と　め

この住居跡は不明な点が多い。異常に多いピット，不明瞭な南側プラン，南側に多い遺物等々。しかし柱穴と目される15基のピットの分布をみると，特に南西コーナーで顕著なように，いくつかのコーナーに群在する傾向がある。このことは，火熱をうけた３つの焼土ブロックが三者三様のあり方をしてそれ自体炉の移動を示唆している点と考えあわせたとき，この住居跡が幾度かの改築を行った可能性も残すように思える。南側に多い遺物は自然傾斜に従った北側からの流れ込

みが主体であろうが包含層との関わり等の点でなお検討の余地が残る。ただこの住居が使用された時期は出土遺物からみて第Ⅴ群土器の時期としてよいと思われる。（小平）

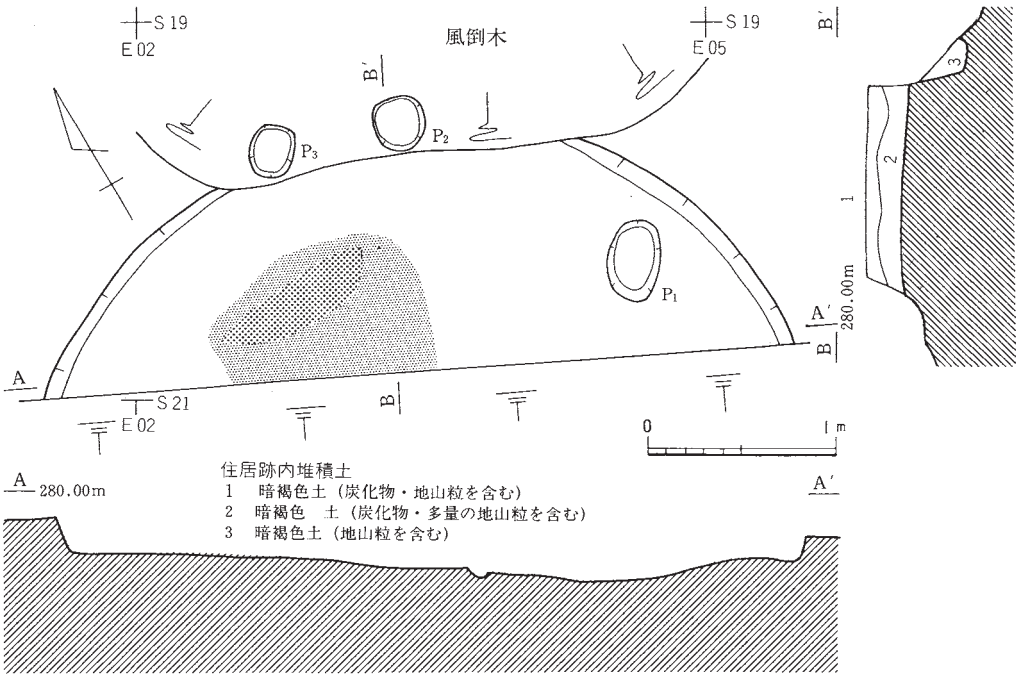
７号住居跡

遺　　構（第12図，図版10・11）

本遺構は，Ｅ－２グリッドの南端，南向きの緩斜面で検出された。検出面は地山黄褐色土である。緩斜面にそって全体的に削平され，遺存状態は良好でない。特に，遺構の北端と南半はすでに破壊され遺存していない。プランは，残存している壁面の弧線から推定し，５ｍ前後の円形もしくは楕円形を呈していたものと思われる。堆積土は，暗褐色土・暗茶褐色土の２者に分層された。２層とも炭化物・地山粒子を含んでいるが，下層では地山粒子の混入が多く認められた。床面は，黄褐色土地山をじかに床面とし，水平で固くしまっている。壁は，急な立ち上がりを示し，壁高は15～20cm前後を測る。周溝は検出されなかった。

炉は，地床炉で北壁近くに検出された。炉の火床面は床面のレベルから約２cm程窪んでいる。焼土の範囲内には，60×20cmの範囲で顕著に焼けた面が認められた。この周囲には木炭物がみられ弱く焼けた面が広がっている。

ピットは３個検出された。P_1は楕円形のプランで長径約42cm，短径26cm，深さ約20cmを測



第12図　７号住居跡

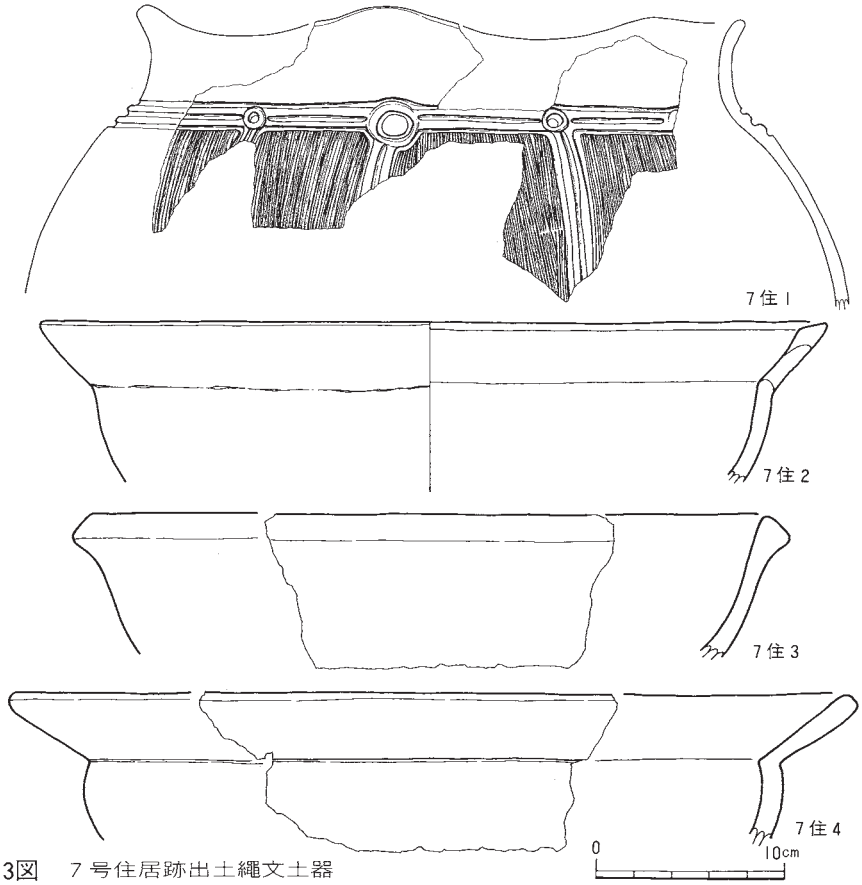
る。P_2・P_3は，北側の風倒木に破壊された斜面で検出された。ともに円形を呈し，P_2は径23cm，深さ28cm，P_3は径11cm，深さ27cmを測る。P_2・P_3は，プランの想定線から若干外側に位置すると思われるため，当住居跡には伴わない可能性が強い。

遺　　物（第13～15図，図版36・77）

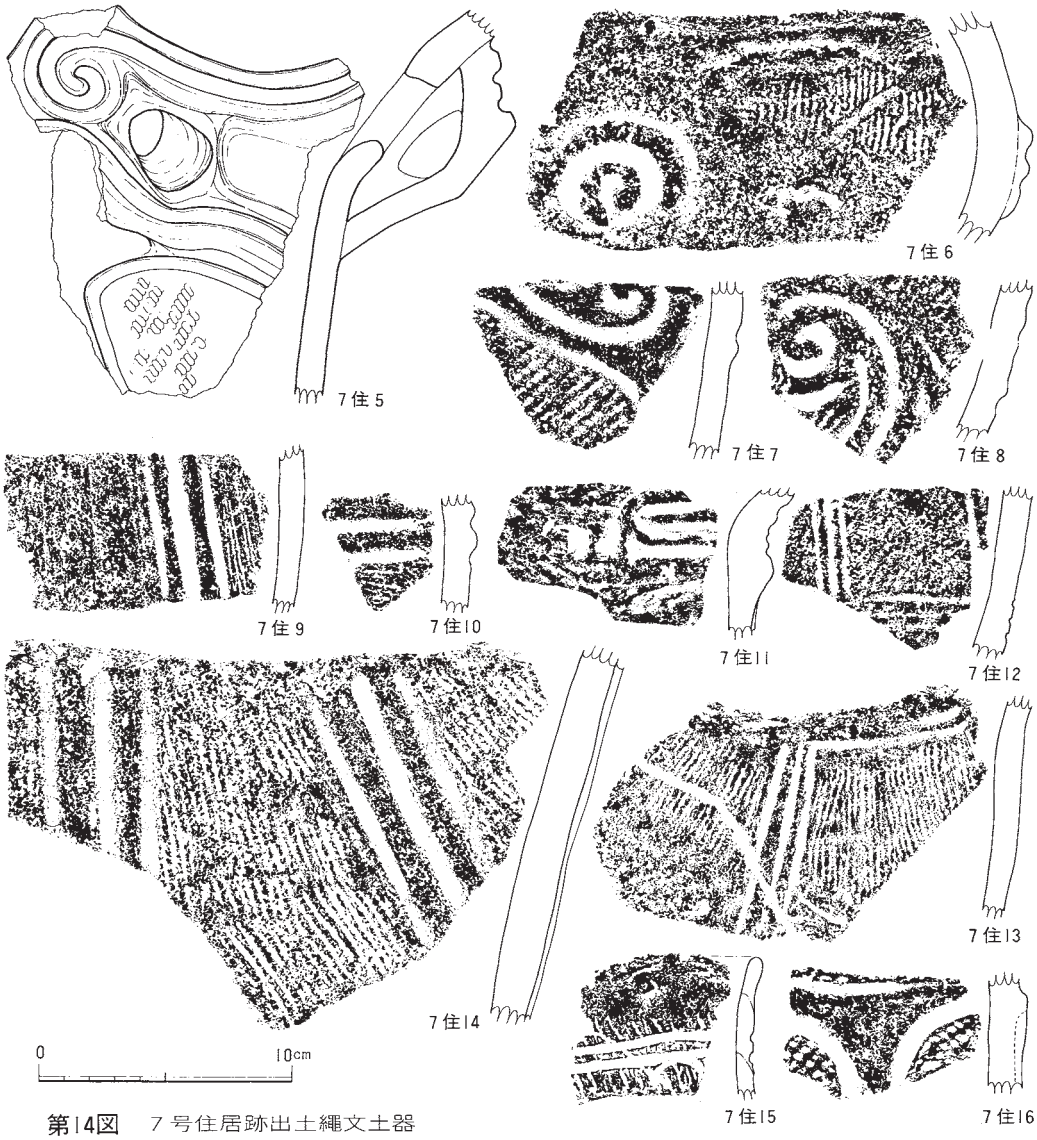
７号住居跡からの出土遺物は，約110点である。うち半数が床面直上から出土した。土器は，いずれも破片であるが，大半が第Ⅴ群土器に属する深鉢とみられる。石器は石鏃・磨石等出土しているが，比較的磨石が多い。

土　器　７住１は，堆積土中と床面上出土の破片が接合したものである。器形は，口縁部がゆるやかな波状を呈し，胴部は球体状の丸味をもつと思われる。頸部には，側縁を沈線で調整した隆帯が巡り，無文の口縁部と，文様をもつ胴部とに区画している。頸部隆帯上には円形文が施されている。この円形文から垂下させた頸部同様の隆帯によって胴部を縦に分割している。胴部地文は条線文である（第Ⅳ群土器）。

７住２・３・４（第Ⅺ群土器）はいずれも浅鉢で，平縁・無文の口縁部破片である。口縁部立ち上



第13図　７号住居跡出土縄文土器

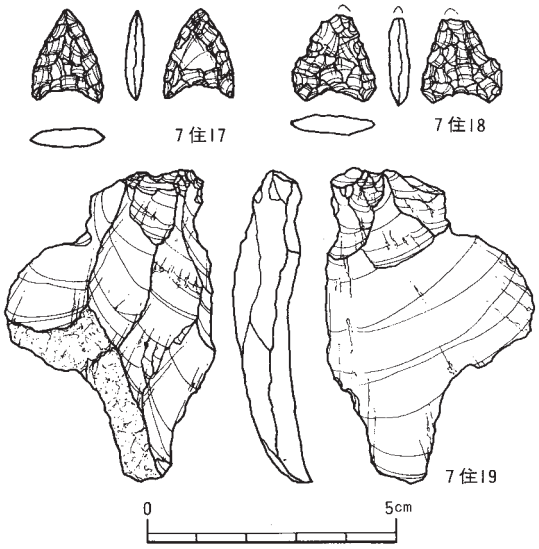


第14図　７号住居跡出土縄文土器

がりは，７住２・４が外側に「く」の字状に強く屈曲するのに対し，７住３では大きな屈曲はなく，胴部から口唇部まで外傾しながら立ち上がっている。

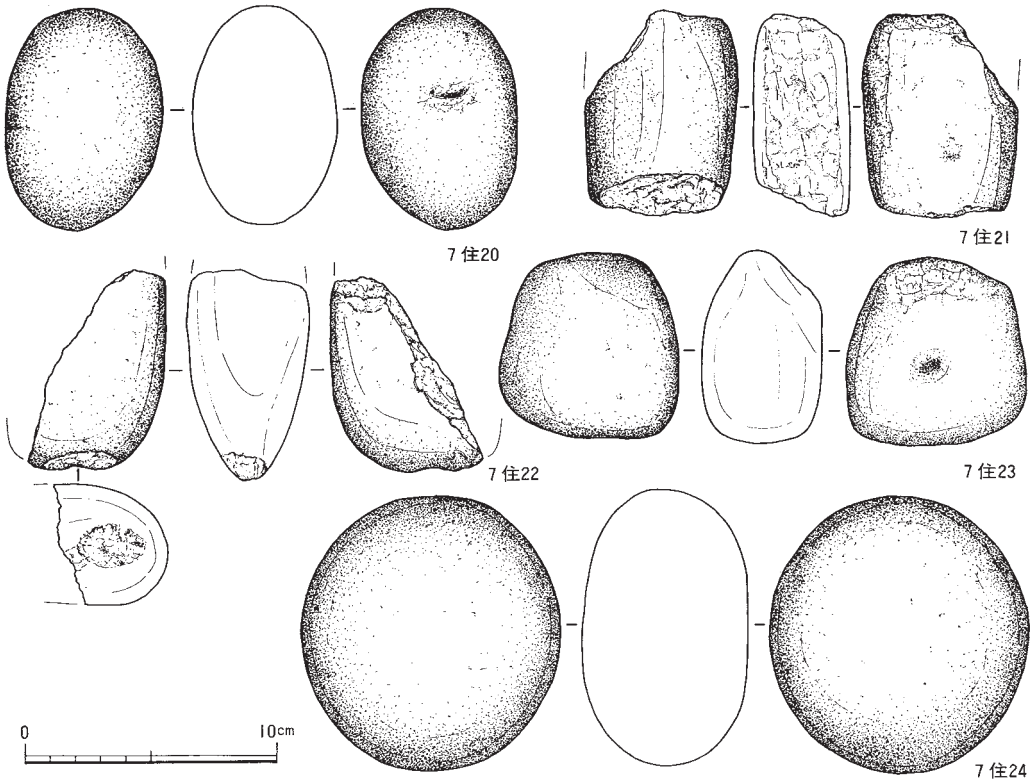
７住５～14・16は第Ⅴ群土器である。床面から出土したものは７住５・９・12・13・16で，他は堆積土中の出土である。７住５は太い沈線で渦巻文の施文された中空の把手である。７住６～10・14・16は側縁を沈線で調整された太い隆帯が縦位あるいは渦巻状に貼り付けられるものである。地文には縄文（７住７・８・16）と撚糸文（７住６・９・13・14・15）の２種がある。７住11は隆帯で楕円区画文が表出され，７住12は平行沈線が施されるものである。７住15は小型土器の口縁部破片で，頸部に２本の沈線を施している。地文は撚糸文である。

石　　器　石鏃２点（７住17・18），磨石５点（７住20～24）の総数７点で，他に剝片１点（７住19）が検出された。石鏃は，無茎で２点とも堆積土中から検出した。基部に浅い抉りを有するが，７住18は先端を欠損している。磨石は７住21～23が堆積土中，７住20・24が床面上から出土している。形態的には，円形・楕円形とやや縦長の楕円形を呈する。７住21・22は欠損品である。いずれも全体的に磨滅しており，全面を使用したとみられる。７住23は中央部が僅かに窪んでいるため，凹石としても使用された可能性がある。堆積土中から出土した７住19は剝片で刃部を作り出した形跡は認められない。



ま　と　め

当住居跡は削平がはなはだしく，残存部からプランが想定できたのみで，内部の施設や構造等明らかにできなかったが，炉跡は，想



第15図　７号住居跡出土石器

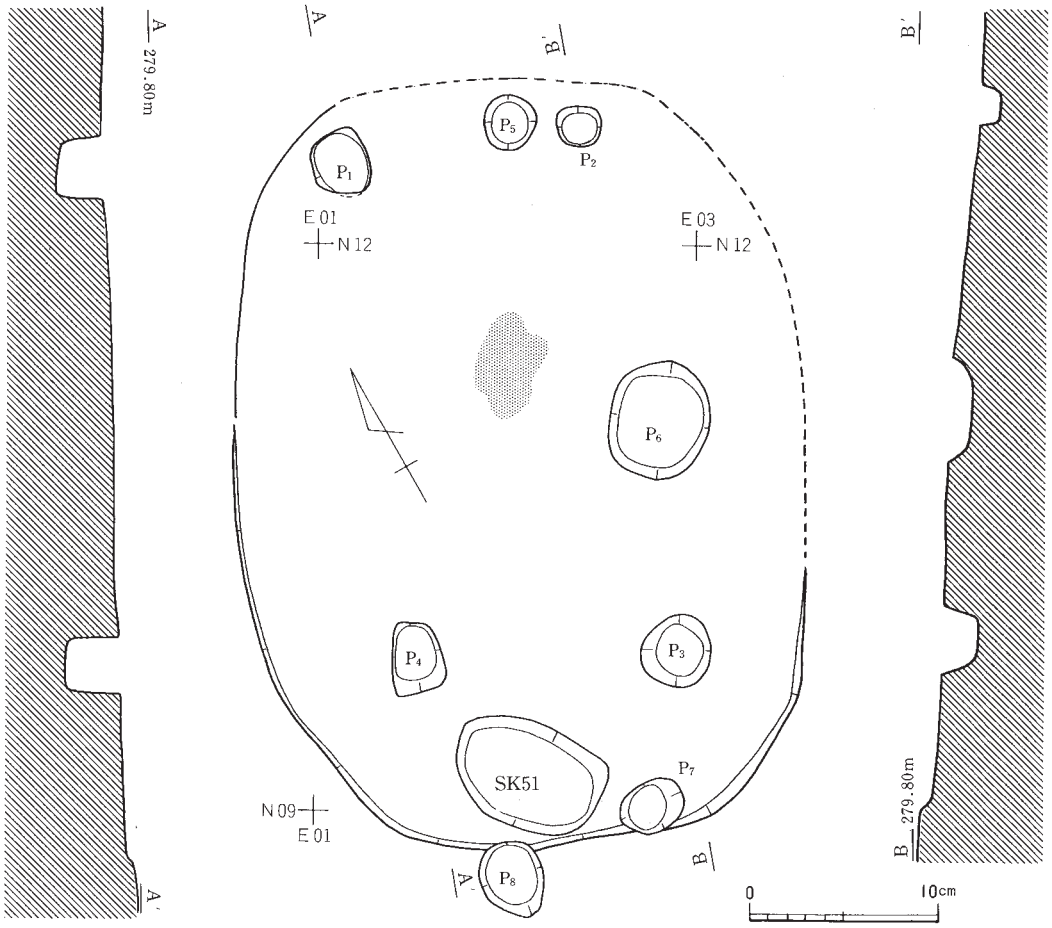
定プランからみれば住居跡の中央とは考えられず，北側に片寄って設定されていたものと思われる。本跡時期は，出土した遺物の傾向からみて第Ⅴ群土器の時期と考えられる。（阿部）

９号住居跡

遺　　構（第16図，図版12）

調査区北側Ａ－２グリッドに検出された住居跡である。台地北側緩斜面に位置しているため，南側の壁が僅かに検出されたのみで，斜面下方にあたる北側では住居跡プランがすでに流れ出してしまっているためか明確に把握できなかった。南壁際では51号土坑と重複関係にあたるが本跡のほうが古い。

プランは短軸約3.0mほどの楕円形に近いものが考えられ，想定される長軸はほぼ北西方向を指す。堆積土は，住居跡南半を薄く覆っている暗茶褐色土の単一層で，自然堆積か人為堆積かの



第16図　９号住居跡

第５表　９号住居跡ピット計測表（cm）

P No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7
径	35	24	40	40	30	64	35
深さ	25	10	20	30	12	14	28

別は判断できなかった。壁は住居跡南半にわずかの立ち上がりをみせ残存している。壁高は最大でも３cmである。床は比較的遺存状態の良かった南側でも軟弱であり，住居跡北側では壁同様流出してしまった可能性が強く検出されなかった。

炉は地床炉と思われる。住居跡中央やや北寄りに約40×60cmの範囲で焼土面が確認されている。この焼土は掘り込み等をもたないものであるが，想定プラン内の位置関係から推定すればほぼ本跡の炉跡と考えられる。

ピットは総数７個検出されている。このうちP_1～P_4は，深さ約20～30cmを測り炉を挟んでほぼ対角線上に位置し柱穴と考えられるピットである。P_6は，炉の東側に近接して検出されたピットで，上幅60×80cm，深さ15cmを測る平面やや楕円形を呈す。P_6の位置する箇所はすでに床面が露呈していた場所で，P_6が住居跡の施設か確認することはできなかった。

遺　　物

遺物は住居跡堆積土中，ピット内から縄文土器の小破片約60点が出土している。いずれも磨滅が著しく，器形・文様等うかがえるものはない。

ま　と　め

本跡は台地北側緩斜面につくられた住居跡で，北半がすでに流出しており遺存状況は悪い。プランは，柱穴の位置から推定して約4.5×３m程度の楕円形を呈するものと考えられる。本跡の時期は不明な点が多いが，第Ⅺ群土器を伴出した51号土坑よりも遡る。（松本）

第３節　炉　　跡

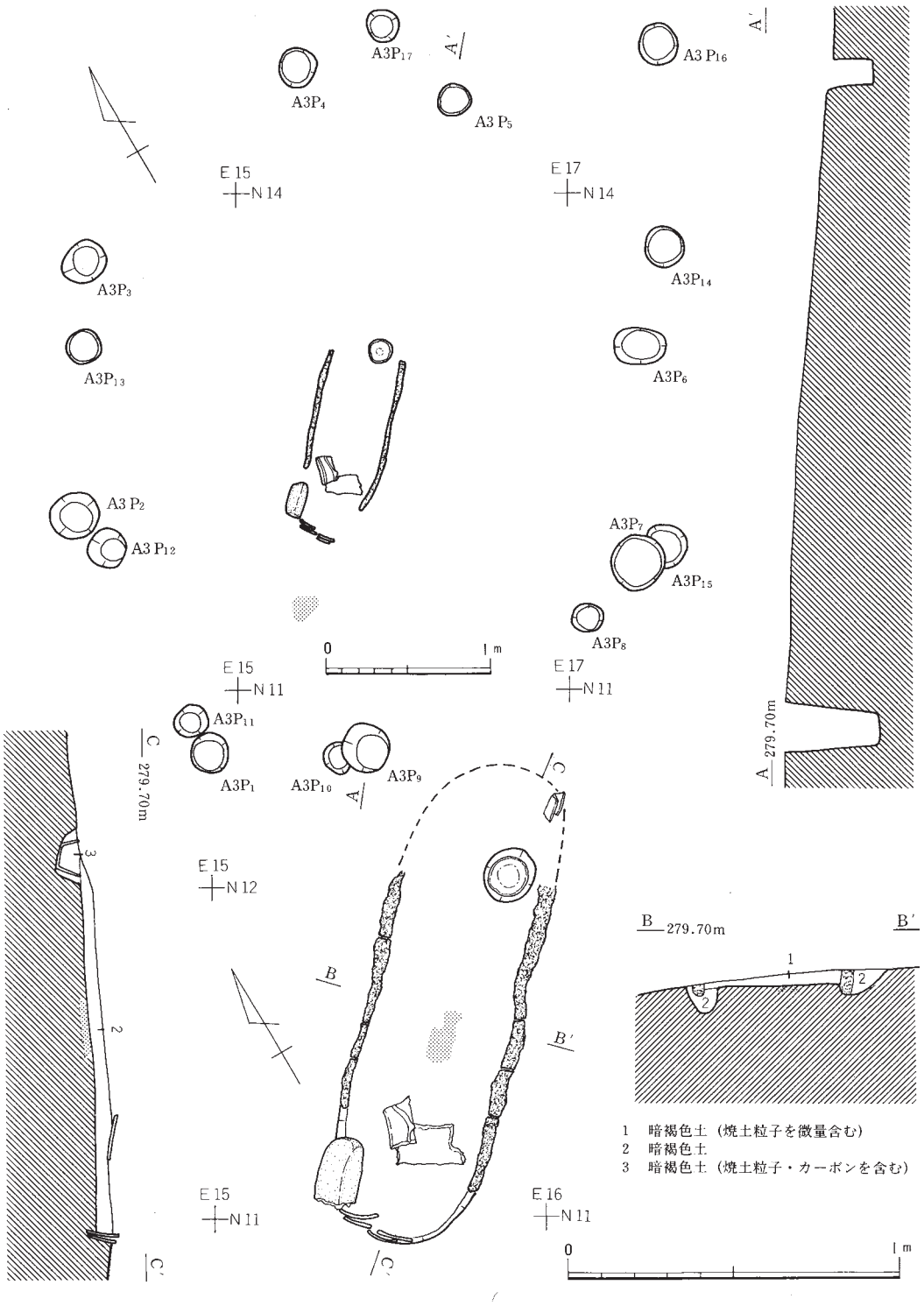
１号炉跡

遺　　構（第17図，図版13・14）

Ａ－４グリッドに検出された炉跡で，北斜面に形成された第１遺物包含層の南端部に位置している。検出面は黒褐色土内で，遺物包含層掘り込みの際に検出されたものである。

炉は南北に長く，側縁は花崗岩と土器片とを設置し，炉内を囲っている。花崗岩は東西長辺に土器は南端に各々使用されているが，北端部に関しては不明である。平面形は，炉の北側で南端部同様土器片を立てて設置したと思われる部分があることから，北端部も囲い込まれていたものと考えられ，恐らく約150×50cmの細長い小判状を呈するものと思われる。炉内の火床面は焼けが弱く，長時間使用された形跡がない。炉の北側には深鉢の底部が正位に埋設されていた。

周辺には15個のピットが検出されている。これらのピットのうちＡ３P_1（Ａ－３グリッドに検出され

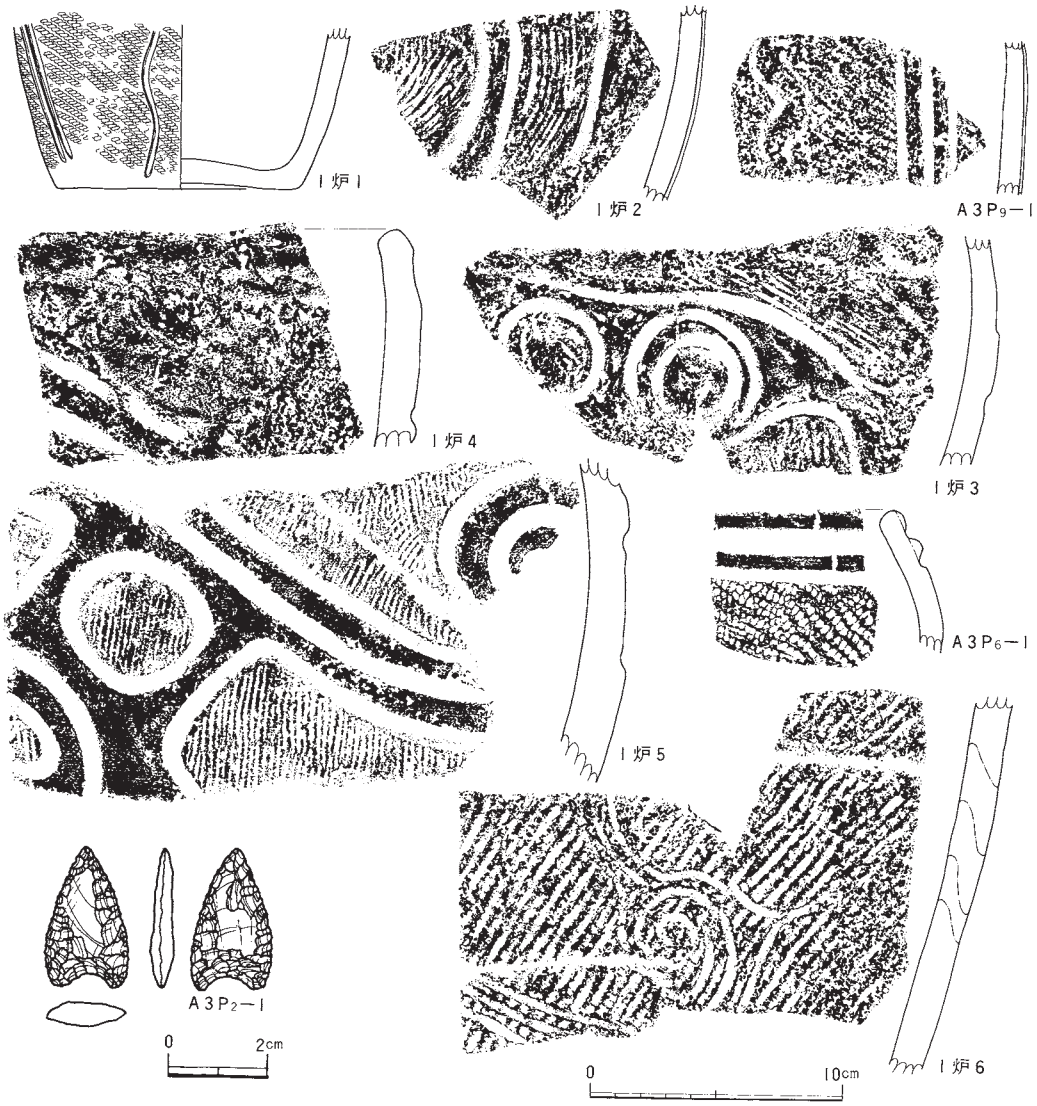

A3P17
A3P4
A3P5
A3P16
A3P3
A3P14
A3P13
A3P6
A3P2
A3P12
A3P7
A3P15
A3P8
A3P11
A3P1
A3P10
A3P9
E 15
N 14
E 17
N 14
E 15
N 11
E 17
N 11
E 15
N 12
E 15
N 11
E 16
N 11
279.70m
279.70m
279.70m
0
1 m
1 暗褐色土（焼土粒子を微量含む）
2 暗褐色土
3 暗褐色土（焼土粒子・カーボンを含む）

第17図　1号炉跡

たP₁の意味で以下前記の略号を使用する）～Ａ３P₆・Ａ３P₈～Ａ３P₁₃は，炉跡を取り囲むような位置関係にあるピットで，炉からの距離は1.5～２ｍとほぼ平均化している。ピットは２本一組のような状態で検出されたものが多い。このなかにはＡ３P₇－Ａ３P₁₅やＡ３P₉－Ａ３P₁₀にみられるように重複関係をもつピットがある。この炉跡とピット群は，恐らく本来は竪穴住居跡を構成していた

第６表　１号炉跡周辺ピット計測表（cm）

No.	A3P1	A3P2	A3P3	A3P4	A3P5	A3P6	A3P7	A3P8	A3P9	A3P10	A3P11	A3P12	A3P13	A3P14	A3P15
径	24	30	28	25	20	32	34	18	32	20	22	23	21	25	27
深さ	31.5	34.7	50.8	27.5	28.1	43.3	20.6	59.6	55.6	50	33.4	26.7	23.6	28.5	30.9



第18図　１号炉跡・周辺ピット出土縄文土器・石器

施設と思われ，各ピットは柱穴と考えられる。

遺　　物（第18図，図版47）

ここでは炉跡内から検出したものを中心に，周辺ピットから検出した遺物も含めて取り扱う。

土　器　炉を囲い込む材量として使用されたもの（１炉１～３），炉内から出土されたもの（１炉４・５），炉に近接して検出されたもの（１炉６）の３者が炉跡から出土した遺物で，周辺ピット内からは，２片（Ａ３P_6－１・Ａ３P_9－１）検出されている。

１炉１は，炉内に正位で設置されていた深鉢の底部で，胴部を２本一組の沈線で４区画し区画内には１本の蛇行沈線が縦位に施されている。１炉２～６，Ａ３P_6－１，Ａ３P_9－１も深鉢の破片である。文様は，側縁を沈線で調整した太い隆帯や沈線によって円文・渦文等が表出される。地文には，撚糸文（１炉２・３・５），縄文（１炉６，Ａ３P_6－１，Ａ３P_7－１），無文（１炉４）の３種がある。いずれも第Ｖ群土器の範疇に含まれる土器と思われる。

石　器　Ａ３P_2から出土した石鏃（Ａ３P_2－１）１点のみである。比較的小さめの鏃で基部には抉りが認められる。

ま と め

当炉跡は南北端を囲む施設が貧弱であるが，基本的には石囲い埋甕炉のなかでとらえられる。本跡は周辺のピットを含めて考えれば，明確なプランは検出できなかったが竪穴住居跡の可能性が濃厚な遺構である。規模の想定は困難であるが東西間のピット間隔は約3.4m，南北は約4.1mを測ることからほぼ径４～５mのプランと推定される。周辺のピットは２個一組みで検出された例が多く，柱穴の据え替えともみられるが，炉の使用が極めて短期間であったことを考慮すれば断定はできない。時期は第Ｖ群土器の時期としてとらえられるが，当遺跡内の縄文時代中期の遺構群のなかでは最も新しい時期の土器群を伴出している。（松本）

第４節　焼土遺構

１号焼土遺構

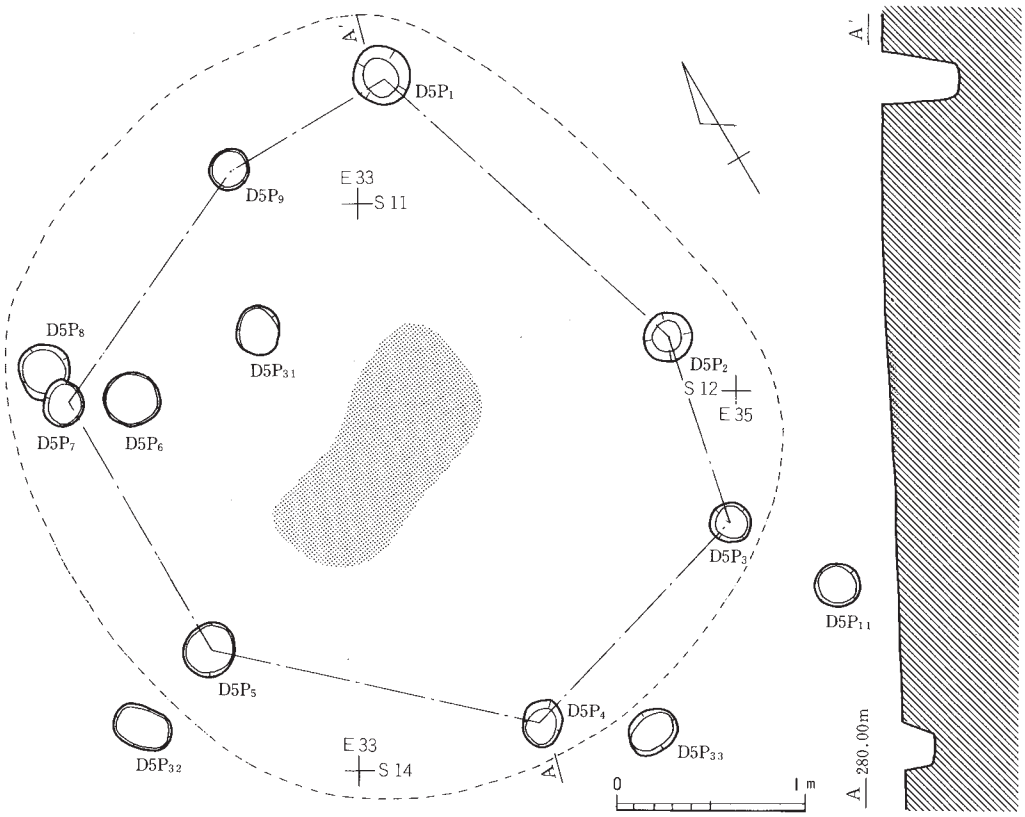
遺　　構（第19図）

Ｄ－５グリッドに検出された遺構で，南斜面に形成された第２遺物包含層の北側に隣接している。この地点は開田時の削平を強く受けており遺構の遺存状況は極めて悪く，表土直下の暗茶褐色土上面で検出された。

焼土や木炭の散布は約140×70cm

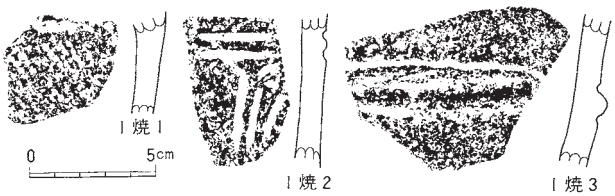
第７表　１号焼土遺構周辺ピット計測表（cm）

No.	D5 P_1	D5 P_2	D5 P_3	D5 P_4	D5 P_5	D5 P_6	D5 P_7	D5 P_8	D5 P_9
径	30	26	22	25	28	30	24	29	22
深さ	38.5	38.7	45.6	14.3	32.4	26.4	41.4	19.2	26.6



第19図　１号焼土遺構

を測るほぼ楕円形の範囲に認められ，その長軸はほぼ北東方向である。焼土と木炭の散布範囲下部は皿状に掘り窪められており，その深さは約５cmを測る。底面は加熱を強く受けており，地山の焼土化は約４cm下まで及んでいる。



第20図　１号焼土遺構出土縄文土器

周辺にはピットが13個散在して検出されている。このなかで焼土の範囲をある間隔を置いて巡っているものにＤ５P_1～Ｄ５P_9がある。これら９個のピットは深さ15～40cmとやや深浅の幅があるが，焼土・ピットを含め竪穴住居跡の遺存形態として大きくみれば柱穴の可能性が推定されるものである。また隣接して検出された他の４個のピットは，極端に接近するものや，やや遠くはずれるもので焼土遺構に伴う柱穴としての線は薄い。

遺　　物（第20図）

焼土層中から７片の縄文土器破片が出土した。このうち採拓可能なものは３点であった。１焼１は口縁部に横位の縄文原体の側面圧痕を有し，１焼２は胴部に平行沈線，１焼３は隆帯に沿っ

て沈線が施されている。

ま　と　め

当焼土遺構は地床炉と考えられるが，周囲に巡るピット群を関連させれば，１号炉跡同様竪穴住居跡内に設置された炉跡と想定される。住居跡自体のプランは不明であるが，炉を挟む対面のピットの距離から推定すれば径3.5～４ｍの大きさと思われる。

出土土器の１焼１はⅠ群土器，１焼２・３はⅣ群土器にそれぞれ比定可能である。出土状況は炉の使用時に紛れ込んだものと思われ，土器片のなかで新しい要素をもつⅣ群土器を炉跡ないし住居跡の時期の上限としてとらえておく。（大越）

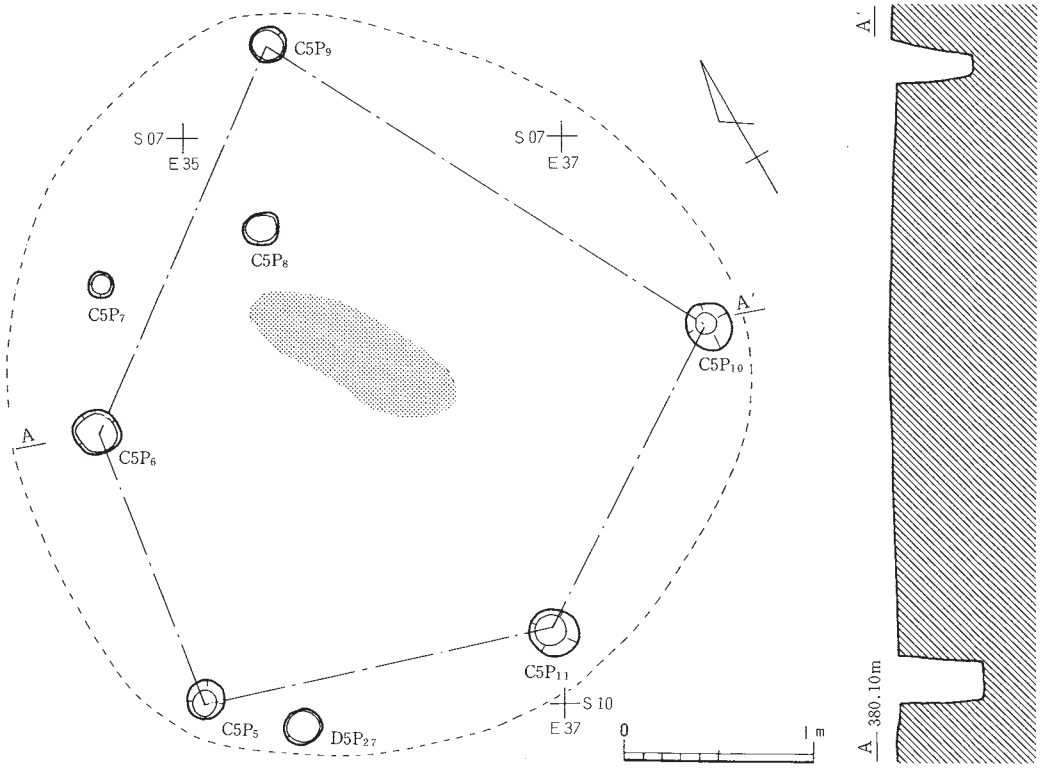
２号焼土遺構

第８表　２号焼土遺構周辺ピット計測表（cm）

P No.	C5P5	C5P6	C5P7	C5P8	C5P9	C5P10	C5P11	C5P27
径	21	24	14	20	20	26	26	20
深さ	45.8	45.5	13.8	6.1	42.7	41.5	47.7	7

遺　　構（第21図，図版15）

Ｃ－５グリッドに検出された遺構で，１号焼土遺構の北東に隣接している。検出面は表土直下の黄褐色土面である。焼土は長径120cm，短径40cmの楕円形状の範囲に広がる。地山を掘り窪めた様子は認められず平坦な地山面で直接火を焚いたと思われる。地山の焼土化は，焼土上面から４cmの深さまで進んでいる。



第21図　２号焼土遺構

焼土周辺には８個のピットが検出された。このうちＣ５P_7・P_8，Ｄ５P_{27}を除く残りの５個のピットが焼土と関連するものと考えられる。

遺　　物

周辺のピットから縄文土器小破片が10数片検出されたが，いずれも摩滅が著しく文様等をうかがえるものはない。

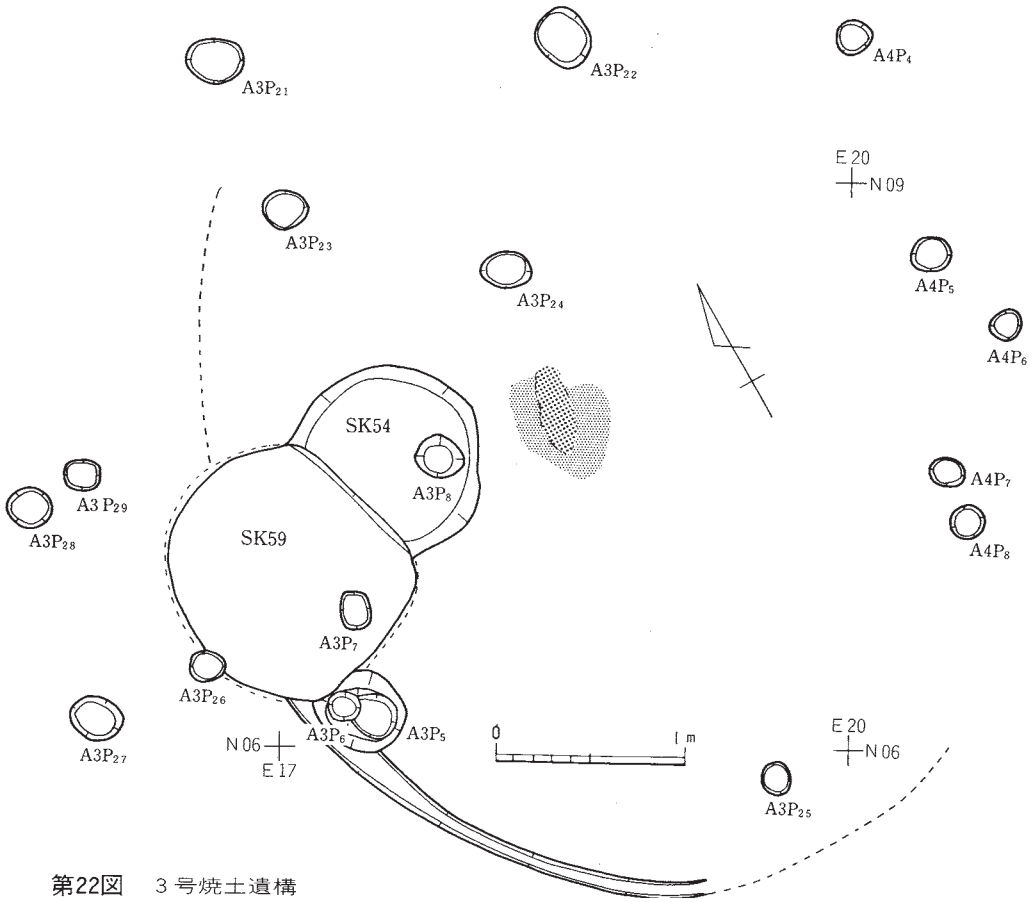
ま　と　め

本跡は炉跡と考えられるが炉を取り囲むピットの存在から竪穴住居跡と想定され，規模は径約４ｍ前後と推定される。

３号焼土遺構

遺　　構（第22図）

Ｂ－３・４グリッドに検出された遺構で，表土直下の白色粘質土上面に焼土範囲が認められ本跡とした。焼土の範囲は長径50cm，短径20cm程度の楕円形状に広がり，長軸はほぼ北を指す。掘



第22図　３号焼土遺構

り込みは認められず，地山が加熱され焼土化したものと思われる。

焼土周辺には18個のピットが検出された。ここでは54・59号土坑底面にある２個のピットも，土坑の施設と断定し得なかったため本項に含めて取り扱う。これら18個のピットは深さや位置に相当不規則な点が多い。焼土の南西側約２ｍの地点には，幅10cm，深さ３cmと浅い溝が一部弧状に巡っているのが確認された。西端で59号土坑と重複関係にあるが，重複部分では，僅かに溝の埋土が堆積しているのみで遺構の先後関係は把握できなかった。

第９表　３号焼土遺構周辺ピット計測表（cm）

P No.	A3P5	A3P6	A3P7	A3P8	A3P21	A3P22	A3P23	A3P24	A3P25
径	22	16	20	27	30	32	22	26	17
深さ	29	30	32	17	37	30	33	18	27
P No.	A3P26	A3P27	A3P28	A3P29	A4P4	A4P5	A4P6	A4P7	A4P8
径	18	29	22	18	18	20	16	18	18
深さ	39	34	28	32	28	29	16	14	12

遺　　物

焼土内部からの遺物の出土はないが，周辺のピット内から縄文土器の小破片が数片出土している。いずれも摩滅が著しく文様等不明である。

ま と め

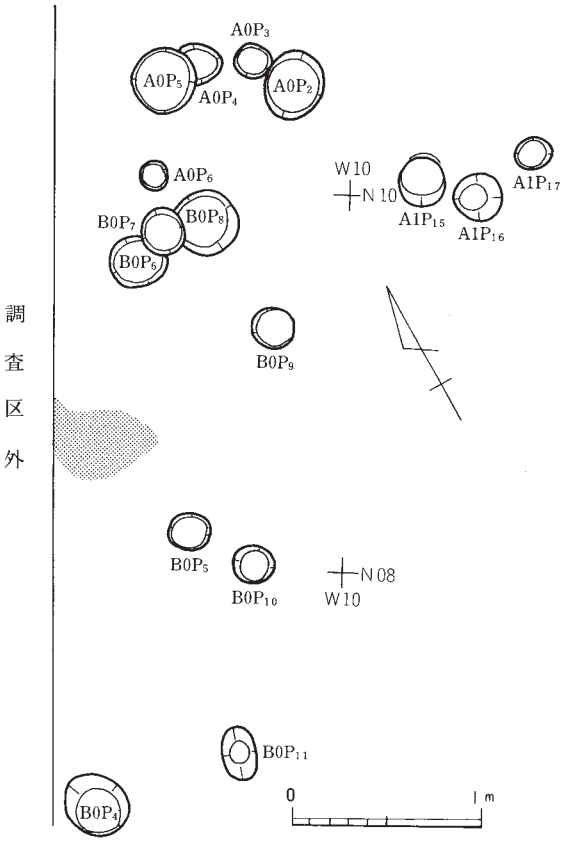
当焼土遺構は南西側に検出された周溝状の溝の存在から竪穴住居跡内の炉跡である可能性が濃厚である。しかし焼土周辺のピットは柱穴として明確に断定しえず，柱構造等は不明な点が多い。（松本）

４号焼土遺構

遺　　構（第23図）

Ｂ－０グリッドに検出された遺構である。本跡付近は耕作による撹乱が著しい。焼土範囲は短径40cmであるが長径は調査区外へ延びるため不明である。掘り込みは認められず，地山が加熱のため焼土化したものと考えられる。

焼土周辺には17個のピットが散在して検出された。径20～40cm，深さ９～43cmと様々で，焼土を中心にしてみた場合，配置に規則性は認められない。



第23図　４号焼土遺構

第10表　４号焼土遺構周辺ピット計測表（cm）

P No.	A0P2	A0P3	A0P4	A0P5	A0P6	A1P15	A1P16	A1P17
径	36	18	24	33	14	26	25	18
深さ	20	13	29	35	10	50	38	14
P No.	B0P4	B0P5	B0P6	B0P7	B0P8	B0P9	B0P10	B1P11
径	36	21	30	24	34	22	22	28
深さ	65	27	23	28	30	40	21	53

遺　　物

本跡に伴うと思われる遺物の検出はなかった。

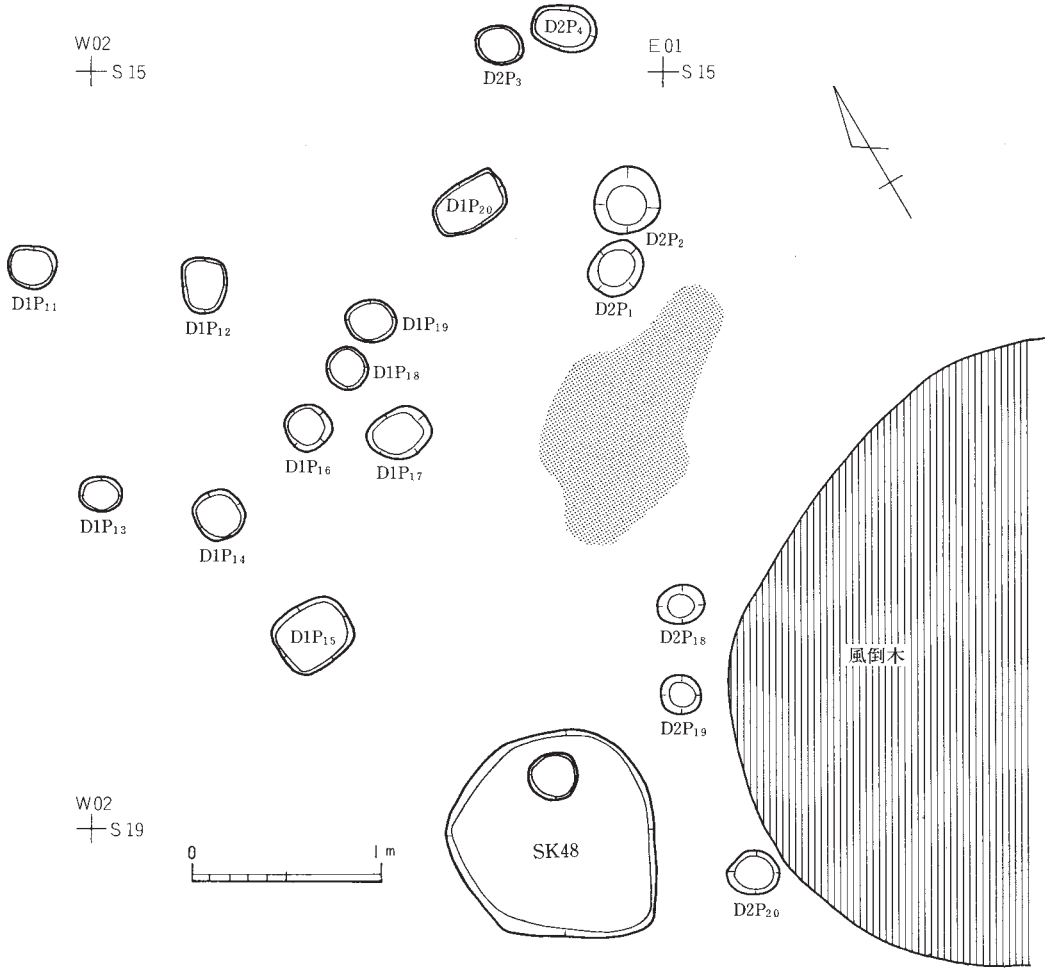
ま と め

当焼土遺構周辺からは，配列に規則性のあるピットや，周溝等は認められず住居跡内の炉とする根拠は極めて薄い。（大越）

５号焼土遺構

遺　　構（第24図）

Ｄ－２グリッドに検出された遺構である。表土下の黒色土面に焼土範囲が認められ，本跡とし



第24図　５号焼土遺構

た。焼土の範囲は150×80cmの不整楕円形状を呈し，長軸を北東にとる。焼土下部には掘り込み等認められず，地山自体が加熱され焼土化したものと思われる。焼土化は一様ではなく焼けの弱い部分と強い部分とが観察される。

第 11 表　５号焼土遺構周辺ピット計測表（cm）

P No.	D1P11	D1P12	D1P13	D1P14	D1P15	D1P16	D1P17	D1P18	D1P19
径	25	30	20	27	42	24	33	22	27
深さ	22	29	10	8	35	37	15	27	11
P No.	D1P20	D1P1	D2P2	D2P3	D2P4	D2P18	D2P19	D2P20	SK48内
径	40	36	30	24	34	25	20	28	25
深さ	9	7	11	27	47	20	18	7	31

焼土周辺には18個のピットが検出された。このなかでは48号土坑底面に検出されたピットも，確実に土坑に伴うものと断定し難いため，本項でも取り扱った。ピットの深さは10～45cmのなかに収まるが統一性に欠け，配列にも規則性は認められなかった。

遺　　物

当遺構に直接伴う遺物の検出はない。

ま　と　め

本跡周辺では竪穴住居を想定させる要素は検出されなかった。焼土自体は焼け具合にむらが認められ，使用期間も比較的短かったものと考えられる。また，この付近は調査区内でも黒色土の堆積がみられる部分で，遺構の遺存状況は他の地点に較べ良い方であることから，本跡は竪穴住居跡の炉ではなく，単独の屋外炉として機能していた可能性も考えられる。（松本）

第５節　埋　　甕

１号埋甕（第25・26図，図版16）

Ｃ－１グリッド東寄りに検出された。検出面は地山黄褐色土面である。土器は深鉢で倒立の状態で設置されていたと思われるが，大半が削平のため欠失しており口縁部付近が残存したものと考えられる。口縁端部は出土せず，埋設時以前にすでに失われていた可能性が強い。土器は破片状態でしか採取できなかったが，掘形にそって一部欠損するもののほぼ全周するような状態で出土している。

掘形は，長径62cm，短径48cmの平面楕円形のプランで，検出面からの深さは最大で13.2cmを測る。底面は不規則な鍋底状を呈している。堆積土は，灰味を帯びた茶褐色土を主体とし４層に細分されるが，最上層では微量の炭化物の混入が認められた。

土器は，地文に間隔の広い条線文が施された深鉢（第Ⅸ群土器）である。文様は断面台形状を呈する２本一組の太い隆帯を横位あるいは縦位に貼り付け，口縁部や胴部を区画し，一部渦を巻く部分もある。隆帯の側縁は強くナデられ沈線化している。（阿部）

２号埋甕（第25・26図，図版16・36）

Ｄ－２グリッドに検出された。確認面は黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）上面である。土器は，底部を欠く深鉢（２埋１）が正立の状態で設置されていた。

堀形は平面円形のプランで，直径38㎝，深さ20㎝を測る。ほぼ埋置土器の大きさや形状に合わせて掘り込んでいるため，土器と堀形壁面との空隙は少ない。堆積土は埋置土器内外とも地山黄褐色土を多く混入した茶褐色土であるが，土器内の一部には他層よりも地山ブロックの混入が少ない部分もみられた。

土器（２埋１）は，胴部上半で「く」の字状に屈曲し，口縁部がラッパ状に開く深鉢（第Ⅸ群土器）である。底部は検出されなかったが，これは埋置時以前に打ち欠かれたものと思われる。文様は無文の口縁下に楕円文を６単位配し，その単位間には側縁を沈線化し相対的に盛り上げた隆線によって渦巻文を表出している。地文には条線文が施されている。（松本）

３号埋甕（第25・26図，図版16・36）

Ｄ－５グリッド内で検出した埋甕で，第２遺物包含層の精査過程で確認したものである。土器は，倒立状態で設置されているが，堀形底面からは僅かに浮き上がっている。胴下半部はすでに失われている。

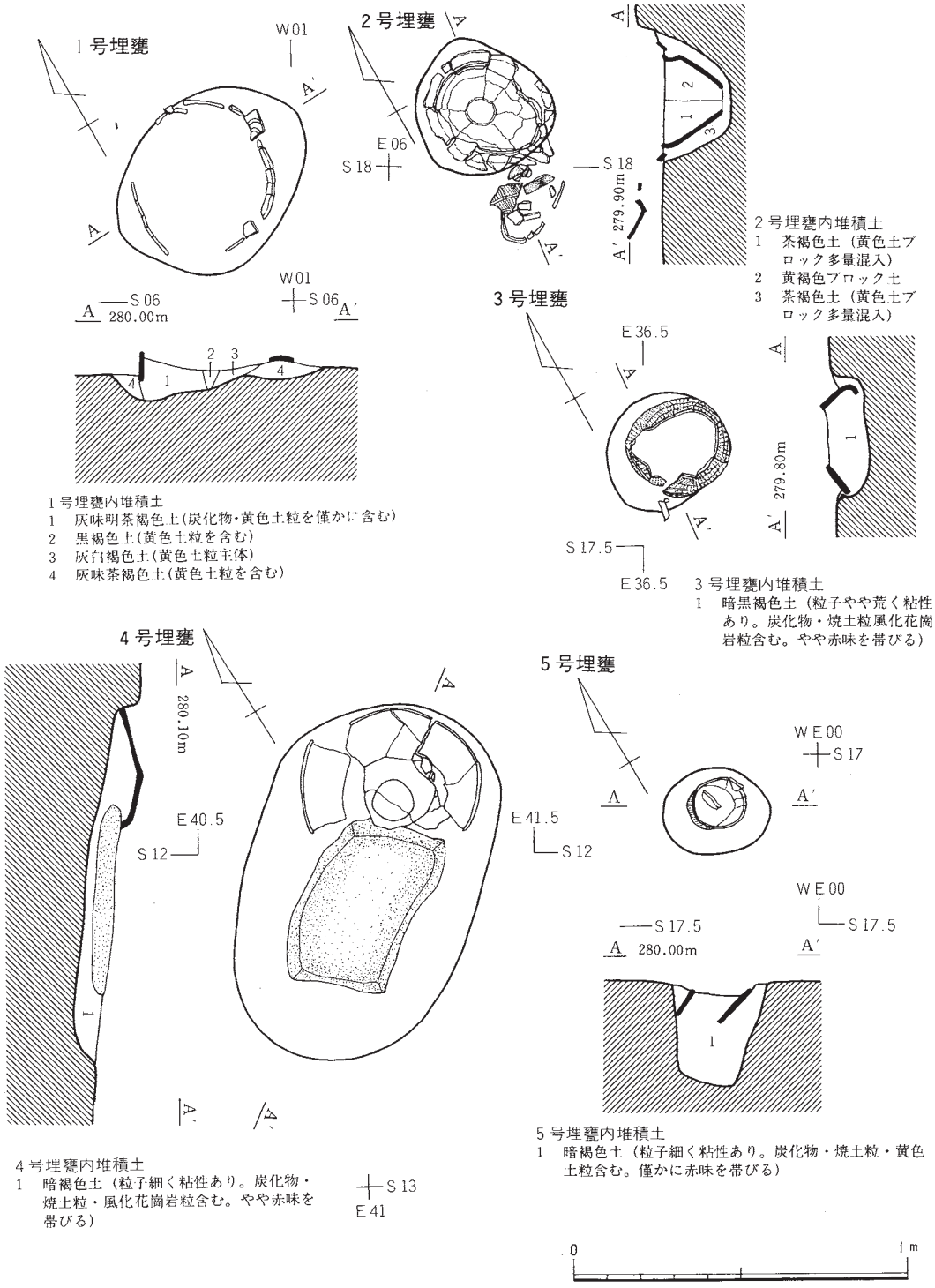
堀形は，直径32㎝の平面円形プランで，検出面からの深さは16.6㎝を測る。堆積土は，炭化物・焼土粒を含み，やや赤味を帯びた黒褐色土の単層である。

土器（３埋１）は，キャリパー状を呈する深鉢（第Ⅴ群土器）である。文様は口縁下端を全周する隆帯と頸部を全周する３条の沈線によって，口縁部から胴部を３分割している。口縁部文様帯は，末端を渦巻状とした２本一組の隆帯による波状の単位文様が横位に６単位施され，さらに末端の渦巻部からは頸部に向けて隆帯を下げ口縁部を６区画している。地文には単節縄文（ＬＲ）が施されている。（阿部）

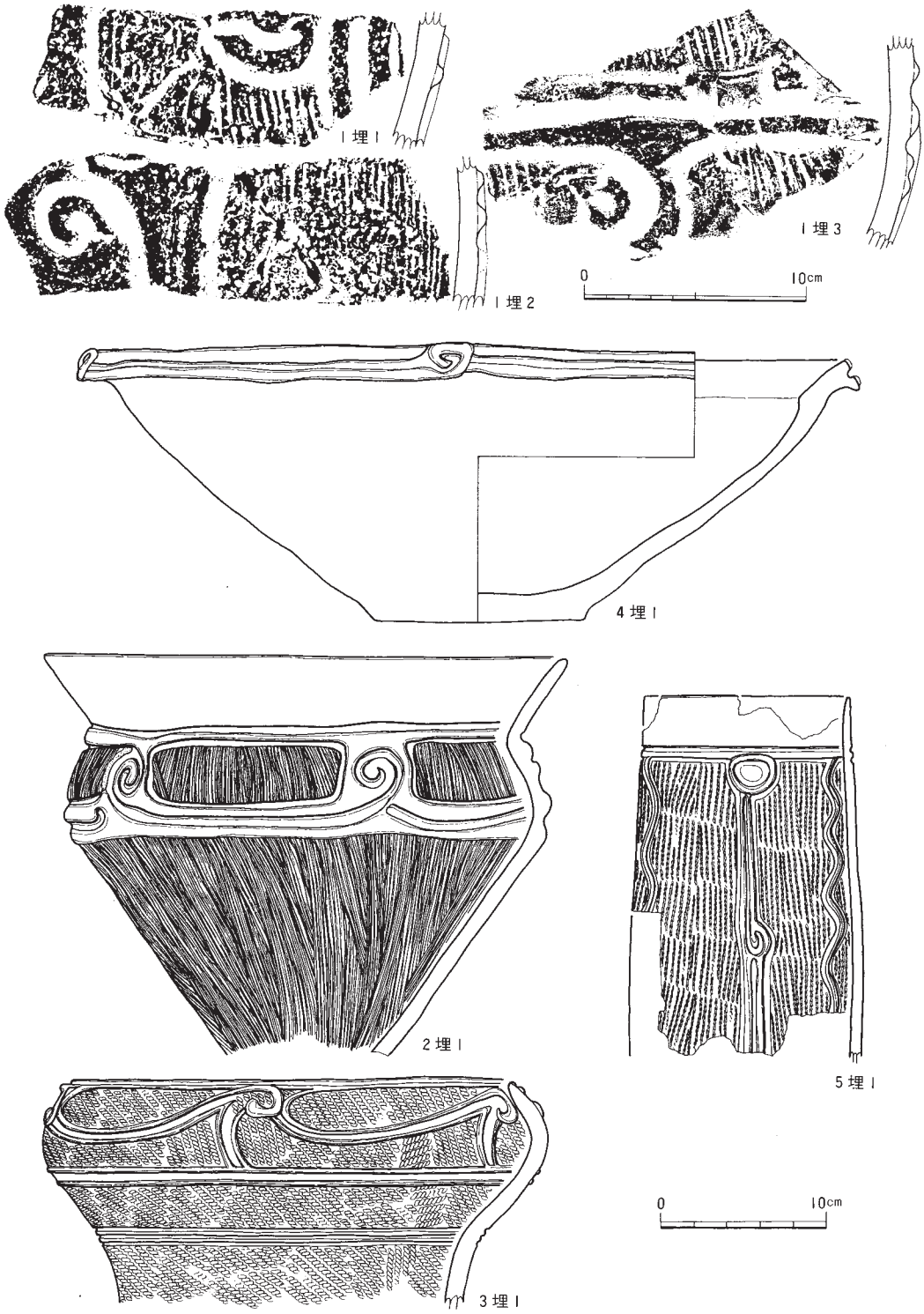
４号埋甕（第25・26図，図版16・36）

Ｄ－６グリッドに検出された埋甕で，暗茶褐色土（Ｌ－Ⅲ）面にて確認した。土器は，堀形のほぼ中央に検出された長辺55㎝，短辺35㎝，厚さ５㎝の長方形を呈した扁平な花崗岩の北東端に一部冠るような状態（伏甕）で設置されている。埋置土器はほぼ完形であるが花崗岩にかかると思われる部分のみが欠落している。

堀形は，長径110㎝，短径70㎝の平面楕円形を呈し，深さは約10㎝を測る。底面は鍋底状であるが北から南へ向かって傾斜している。埋土は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土の単層である。


1号埋甕
W01
A
A′
S 06
280.00m
2号埋甕
E 06
S 18
279.90m
2号埋甕内堆積土
1　茶褐色土（黄色土ブロック多量混入）
2　黄褐色ブロック土
3　茶褐色土（黄色土ブロック多量混入）
1号埋甕内堆積土
1　灰味明茶褐色土(炭化物・黄色土粒を僅かに含む)
2　黒褐色土(黄色土粒を含む)
3　灰白褐色土(黄色土粒主体)
4　灰味茶褐色土(黄色土粒を含む)
3号埋甕
E 36.5
S 17.5
279.80m
3号埋甕内堆積土
1　暗黒褐色土（粒子やや荒く粘性あり。炭化物・焼土粒風化花崗岩粒含む。やや赤味を帯びる）
4号埋甕
280.10m
E 40.5
S 12
E 41.5
S 13
E 41
4号埋甕内堆積土
1　暗褐色土（粒子細く粘性あり。炭化物・焼土粒・風化花崗岩粒含む。やや赤味を帯びる）
5号埋甕
W E 00
S 17
S 17.5
280.00m
5号埋甕内堆積土
1　暗褐色土（粒子細く粘性あり。炭化物・焼土粒・黄色土粒含む。僅かに赤味を帯びる）
0
1 m

第25図　1～5号埋甕



第26図　１～５号埋甕出土遺物

土器（４埋１）は口縁部が僅かに外反する浅鉢である。文様は口縁部にのみ認められ，以下を無文とする。口縁部には隆帯が渦巻状に４個付され，その間を沈線で結んでいる。口縁部内面には明瞭な稜をつくりだしている。（阿部）

５号埋甕（第25・26図，図版16・36）

Ｄ－１グリッド東寄りに検出された埋甕で，５号焼土遺構の西側に近接している。検出面は黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）上面である。土器は円筒形の深鉢で，堀形底面から15～20㎝浮いた地点にやや斜めに傾いた倒立状態で設置されていた。

堀形は長径32㎝，短径26㎝を測る平面楕円形を呈している。検出面からの深さは32㎝で，壁面の立ち上がりは急峻である。堆積土は，僅かに赤味を帯びた暗褐色土で炭化物・焼土を含んでいる。

土器（５埋１）は円筒形の深鉢で胴下半部を欠損している。第Ⅴ群土器に比定される土器である。文様は，口縁部無文帯下に隆帯を巡らせ口縁部と胴部を区分し，隆帯下には円形文を３個配置している。そこから胴部を大きく３分割するように胴部半ばでフックする隆帯を垂下させ，さらにこの区画のほぼ中央に蛇行する隆帯を同じく垂下させている。上記したすべての隆帯は両側縁を沈線によって調整される。地文には撚糸文が施される。（阿部）

第６節　土　　坑（第27～40図，図版17～23）

調査区内から検出された土坑は総数73基を数える。このなかで歴史時代の遺物を伴出した３号土坑と，堆積土がグライ化した粘質土で恐らく現在の水田耕作時に掘り込まれたと思われる41号土坑を除く71基は，堆積土中から縄文土器が検出されたものが多く，堆積土の特徴も他の縄文時代の遺構の特徴と近似していることから，ほぼ縄文時代の所産と考えられる。

本節ではこれら縄文時代に比定される可能性の強い71基の土坑について報告する。以下報告するにあたっては，土坑の形態分類や分布・遺物の出土状況等を概観したのち，形態や遺物出土状況等に特色の認められる15・20・38・39・51・55・72号土坑の７基について個別に説明する。

１．土坑の形態・規模について

検出された土坑は，平面形と断面形から以下のように分類される。

平面形　Ⅰ－円形を呈するもの
　　Ⅱ－楕円形を呈するもの

断面形　Ａ－コの字状を呈するもの
　　Ｂ－Ｕ字状を呈するもの
　　Ｃ－壁がオーバーハングするもの

第12表　土坑形態分類表

類別	総数	土坑番号								
ⅠA	27	5	6	7	8	10	11	12	19	29
		32	33	35	36	38	40	43	47	48
		49	58	64	66	68	69	70	76	78
ⅠB	13	2	4	16	22	25	31	34	52	54
		56	57	60	62					
ⅠC	7	15	18	20	30	59	65	77		
ⅡA	12	9	13	17	23	26	27	37	39	44
		67	79	80						
ⅡB	12	1	24	28	46	51	53	55	63	71
		72	73	74						

前記の分類で円形・楕円形の別は，短径・長径の比が１：1.25を目安とし，これを下回る土坑については円形に，上回るものについては楕円形に各々分類した。断面形は底面が水平でほぼ垂直に立ち上がるものをＡ，底面が皿状を呈し開き気味に立ち上がるものをＢとした。以上の基準で分類したのが第12表である。

ⅠＡ類　検出土坑中最も多い類で総数27基を数え土坑総数の38％を占める。規模の明らかな土坑は22基で，最大が144×137cm（７号土坑）最小は39×38cm（35号土坑）である。直径50～110cmの間には18基の土坑が含まれるが，この60cm間では特にある点で集中する傾向はみられない。直径130～140cmの間では３基（７・８・40号土坑），直径50cm以下では１基（35号土坑）と少ない。深さは最小で６cm（47号土坑），最大で42cm（76号土坑）である。10cm以下は47・49号土坑の２基，30cm以上は76号土坑の１基のみで，他は10～30cm間に含まれる。

ⅠＢ類　13基を数え土坑総数比18％を占める。規模が判明する土坑は12基で，最大は107×100cm（54号土坑），最小は43×36cm（31号土坑）である。規模にばらつきはあるものの31号土坑を除きすべて直径50～110cmの間に含まれる。深さは５cm（56号土坑）が最小で，最大は42cm（４号土坑）を測るが，10～20cm間に７基が集中する。

ⅠＣ類　総数７基，土坑総数比10％で土坑群中最も少ない類である。いわゆる袋状土坑を本類としたが，壁の一部のみでもオーバーハングするものも含めてある。規模の判明する土坑は５基で，最大は30号土坑の148×144cm，最小は65号土坑の68×65cmである。深さは10～30cmのもの５基，40～50cmのもの２基がある。最大は20号土坑の46cmである。

ⅡＡ類　総数12基，土坑総数比17％である。規模の明確なものは９基で，最大は23号土坑の166×84cm，最小は80号土坑で54×44cmを測る。深さは最大で23号土坑の103cmを測るが，最も集中するのは５～30cmの間で９基を数える。他は50cm以上のものであるが23号土坑も含め３基と数は少ない。

ⅡＢ類　総数12基，土坑総数比17％である。規模の明確なものは９基で，最大は46号土坑の208×102cmで，最小は73号土坑の60×37cmである。特に集中する傾向はないが，短径では65～75cmの10cm間に９基の存在が認められる。深さは０～20cmの間を測るものが10基で，最も深いものが46号土坑の73cmである。

ⅡＣ類　分類基準から６類の形態が想定されるが，本群に比定しうる土坑の検出はなかった。

2．土坑の分布について

調査区内における土坑の分布は各形態の土坑が台地上に散在するが，台地縁辺部（A・B・Dグリッド付近）には分布密度が濃く，中央部（Cグリッド付近）は薄い傾向が認められる。しかしながら中央部分はすでに開田のため相当削平を受けた現状を考慮すれば，上記の傾向をそのまま受け取ることはできない。ただ密な分布を示す台地の縁辺部のなかで，包含層が形成される浅い谷地形のような部分での検出例が少ないことだけは指摘できそうである。

これら散在する土坑のなかで一部群在する傾向や，なかには重複関係をもつ土坑がある。C－5グリッド南西隅に検出された6基（31～36号土坑）は狭い範囲に密集して検出された。これらの土坑は近接するもののまったく重複が認められないことから何らかの関連をもつ一群の土坑として考えることもできる。またB－3グリッドで検出された54・58・59号土坑は互いに重複し，土坑構築にも時間差があったことを示している。この他には68号と69号，11号と12号，7号

第13表　土坑一覧表(1)

土坑番号	位置	類型	規模（cm）			出土遺物	重複関係	備考
			上端	下端	深さ			
1	C－0 C－1	Ⅱ－B	114 × 68	97 × 59	18	縄文土器片少数，剥片1		
2	C－1	Ⅰ－B	100 × 97	88 × 81	12	縄文土器片多数，剥片1		
3	C－0 C－1		185 × 120	172 × 106	20	土師器片		
4	B－1	Ⅰ－B	140 × 110	111 × 94	42	縄文土器片，磨石1， 石鏃1，剥片2		覆土に自然石あり
5	A－1	Ⅰ－A	102 × 95	93 × 90	19	縄文土器片		内部にピット2
6	B－2	Ⅰ－A	98 × 95	85 × 83	16	縄文土器片少数		人為堆積
7	B－2	Ⅰ－A	144 × 137	134 × 126	23	縄文土器片多数，磨石1 石鏃2	SK19を切る	覆土に自然石
8	C－1	Ⅰ－A	138 × 130	133 × 121	20	縄文土器片少数		
9	D－1	Ⅱ－A	140 × 85	122 × 64	79	縄文土器片，石鏃2 磨石1		
10	D－1	Ⅰ－A	87 × 82	83 × 79	16	縄文土器片，石鏃1		
11	D－1	Ⅰ－A	93 × 88	89 × 84	21	縄文土器片，石鏃1 磨石1，掻器1，剥片1	SK12を切る	内部にピット1
12	D－1	Ⅰ－A	不明× 80	不明× 77	19	縄文土器片少数，磨石1	SK11に切られる	
13	C－3	Ⅱ－A	152 × 58	137 × 50	50	縄文土器片		
14								欠番
15	D－1	Ⅰ－C	103 × 85	104 × 94	22	縄文土器片多数		人為堆積
16	C－2	Ⅰ－B	100 × 85	88 × 65	15		C－2GのP13を切る	

第 13 表　土坑一覧表 (2)

土坑番号	位置	類型	規模（cm）			出土遺物	重複関係	備考
			上端	下端	深さ			
17	A－2	Ⅱ－A	136 ×不明	133 ×不明	7			
18	D－2	Ⅰ－C	90 × 89	93 × 90	21	縄文土器片		覆土に自然石
19	B－2	Ⅰ－A	不明× 68	不明× 59	20	縄文土器片少数	SK07 に切られる	
20	B－3	Ⅰ－C	100 × 84	129 × 107	46	縄文土器片		覆土に柱状の大型自然石
21								欠　番
22	D－1	Ⅰ－B	64 × 62	59 × 58	14	縄文土器片		
23	A－2	Ⅱ－A	167 × 84	125 × 38	103	縄文土器片少数	SI09 を切る	内部ピット 1 人為堆積
24	C－0	Ⅱ－B	不明× 55	不明× 46	16	縄文土器片少数，石鏃 1		
25	D－2	Ⅱ－B	97 × 87	92 × 82	20	縄文土器片，石鏃 1		
26	C－3	Ⅱ－A	74 × 45	62 × 28	22	縄文土器片少数		
27	C－2	Ⅱ－A	105 × 75	102 × 72	9	縄文土器片多数，磨石 1	SK37 を切る	覆土に人頭大自然石
28	C－2	Ⅱ－B	128 × 74	116 × 61	10	縄文土器片		覆土に自然石
29	B－1	Ⅰ－A	72 ×不明	68 ×不明	18		SI01 に切られる	人為堆積
30	C－4	Ⅰ－C	148 × 144	139 × 138	19	縄文土器少数		
31	C－5	Ⅰ－B	43 × 36	35 × 31	24			
32	C－5	Ⅰ－A	81 × 65	75 × 50	17	縄文土器片少数，磨石 1		
33	C－5 D－5	Ⅰ－A	63 × 53	58 × 47	25			
34	C－5	Ⅰ－B	77 × 64	65 × 55	31	縄文土器片少数		
35	C－5	Ⅰ－A	39 × 38	34 × 33	14			
36	C－5	Ⅰ－A	74 × 73	69 × 66	23	縄文土器片少数		
37	C－2	Ⅱ－A	不明× 62	不明× 57	8	縄文土器少数	SK27 に切られる	
38	D－4	Ⅰ－A	115 × 100	103 × 87	20	縄文土器片，石鏃 1 磨石 1，珪化木 1		覆土に人頭大の自然石
39	D－4	Ⅱ－A	119 × 86	110 × 77	15	縄文土器片，琥珀製小玉		
40	D－4 D－5	Ⅰ－A	140 × 138	135 × 127	12	縄文土器片		
41	A－4		114 × 104	76 × 71	30			人為堆積
42								欠　番

第13表　土坑一覧表(3)

土坑番号	位置	類型	規模(cm) 上端	下端	深さ	出土遺物	重複関係	備考
43	D－5	Ⅰ－A	88×74	79×68	15	縄文土器片少数		覆土に自然石
44	D－4	Ⅱ－A	154×116	143×108	23	縄文土器片多数		内部にピット2
45								欠番
46	A－1	Ⅱ－B	208×120	147×25	73			
47	D－3	Ⅰ－A	58×55	52×53	6	縄文土器片少数，石鏃3 蜂巣石1		覆土に人頭大の自然石
48	D－2	Ⅰ－B	115×111	110×105	13	縄文土器片		内部にピット1
49	D－1	Ⅰ－B	94×82	90×75	8	縄文土器片少数		
50								欠番
51	B－2	Ⅱ－B	85×56	76×44	12	縄文土器片多数	SI09を切る	人為堆積，覆土に自然石
52	B－2	Ⅰ－B	85×83	75×75	10	縄文土器片		
53	D－2	Ⅱ－B	137×100	119×90	18	縄文土器片少数		覆土に自然石
54	B－3	Ⅰ－B	107×100	86×84	20	縄文土器片，石鏃1	SK58，59を切る	内部にピット1
55	B－3	Ⅱ－B	102×81	96×75	7	縄文土器片少数		内部にピット1
56	B－3	Ⅰ－B	93×75	85×68	5	縄文土器片少数		
57	B－3	Ⅰ－B	68×58	57×48	12	縄文土器片少数		
58	B－3	Ⅰ－A	不明×59	不明×50	11	縄文土器片少数	SK54に切られ59を切る	
59	B－3	Ⅰ－C	121×不明	127×113	28	縄文土器片少数	SK54，58に切られる	内部にピット2
60	C－2	Ⅰ－B	56×48	25×32	25	縄文土器片多数		
61								欠番
62	D－5	Ⅰ－B	97×86	83×63	17	縄文土器片少数，石鏃1 掻器1		内部にピット2 覆土に自然石
63	A－3 B－3	Ⅱ－B	103×68	83×54	23	縄文土器片		
64	D－4	Ⅰ－A	71×65	60×53	17	縄文土器片		
65	D－5	Ⅰ－C	68×65	65×60	17	縄文土器片少数，石鏃1		覆土に自然石
66	D－3	Ⅰ－A	76×70	65×59	26	縄文土器片，石鏃2 石匙1		覆土に人頭大の自然石
67	D－2 D－3	Ⅱ－A	106×65	95×58	25	縄文土器片少数	SI05を切る	覆土に自然石
68	D－4	Ⅰ－A	94×87	77×74	17	縄文土器片	SK69を切る	

第13表　土坑一覧表(4)

土坑番号	位置	類型	規模(cm) 上端	規模(cm) 下端	規模(cm) 深さ	出土遺物	重複関係	備考
69	D－4	Ⅰ－A	115×不明	103×不明	19	縄文土器片少数	SK68に切られる	
70	D－6	Ⅰ－A	103×101	98× 90	22	縄文土器片多数，磨石1		
71	D－3	Ⅱ－B	145× 67	138× 56	10		SI05を切る	内部にピット1
72	D－2 E－2	Ⅱ－B	135×不明	128×不明	15	縄文土器片多数	SI06を切る	
73	D－2	Ⅱ－B	60× 37	56× 33	9	縄文土器片少数	SK74を切る	
74	D－2	Ⅱ－B	不明× 72	不明× 59	13	縄文土器片，石鏃2 磨石1	SK73に切られる	
75								欠番
76	D－3	Ⅰ－A	105×100	80× 82	42	縄文土器片，石鏃1	SI05を切る	
77	D－3	Ⅰ－C	132×115	135×120	41	縄文土器片	SI05を切る	覆土に自然石
78	D－3	Ⅰ－A	86× 82	78× 74	18	縄文土器片，磨石2		内部にピット1 覆土に自然石
79	D－3	Ⅱ－A	140×108	125× 92	20		SI05を切る	
80	A－4	Ⅱ－A	54× 44	42× 31	10	縄文土器片		

と19号，27号と37号の例とがある。縄文時代の住居跡との重複については，１号住居跡と29号土坑，５号住居跡と67・71・76・77・79号土坑，６号住居跡と72号土坑，９号住居跡と23・51号土坑との例などをあげることができる。遺構間の前後関係については，第13表に表示したが，住居跡と土坑との関係については，一般に土坑が住居跡を切る例が多いといえる。しかし，29号土坑は１号住居跡に切られており，一部の住居跡より古い土坑の存在も知られる。

３．土坑内堆積土について

土坑の性格を明確にする要素としては，土坑の形態あるいは遺存する遺物(自然遺物を含む)とともに土坑内の堆積土が重要な手懸かりとなる。当遺跡の土坑内の堆積土を観察の結果，次の４種に分類された。

イ）自然堆積

ロ）人為堆積

ハ）一つの土坑が自然堆積と人為堆積の両堆積からなるもの

ニ）堆積状況不明

土坑内堆積土によって分類したのが第14表であり，ロ)が最も多く，次いでイ)・ハ)となっている。自然堆積では，粒度の均一な茶褐色土が主体で，粘質土や焼土・木炭粒が混入するときでも一層

第14表　堆積土別土坑一覧表

堆積土状況	土坑番号							
自然堆積	3	4	8	9	12	23	24	25
	30	32	35	36	38	43	48	54
	57	58	62	64	67	75	76	78
人為堆積	2	5	6	7	15	19	27	28
	33	34	37	39	40	41	47	51
	59	65	66	68	69	70	71	77
	79							
自然＋人為堆積	11	13	20	29	46			
不明	1	8	10	14	16	17	18	22
	26	31	44	49	52	53	55	56
	60	61	63	72	73	74	80	

中の混入状況は一般に散在し一点に集中する傾向はない。

人為堆積の場合は，上記した茶褐色土に地山の黄褐色土粘質土や青白色粘土の小塊が多く混入した土層である。掘り込みが黄褐色土（L－Ⅳ）まで達していない場合は上層の茶褐色土（L－Ⅲ）に近似した土層がブロック状に入り込む場合もみうけられる。

自然堆積土と人為堆積土との場合は，上層と下層にそれぞれイ）とロ）の土層が堆積するが，上下層の関係は一定でない。

イ）～ハ）について概述したが堆積土の埋まりかたによってイ）は開口させて使用した土坑，ロ）は開口させて使用した土坑を廃絶直後に埋め戻した土坑，ハ）は一次使用から堆積土が若干流入した段階で再利用したものと，開口直後に埋め戻したが埋まりきらず上部に堆積土が流入（自然堆積層）した土坑の三者が考えられる。

4．土坑内の遺物出土状況について

遺物の検出された土坑は71基中64基である。出土遺物は破片状態で出土した縄文土器が大半をも占め，次いで石鏃・磨石・凹石・石錐等の石器類，チップ・自然石の類がある。この他特記すべきものに39号土坑から出土した琥珀製の小玉50数点や，55号土坑の大珠等がある。

遺物は土坑内に入った契機によって，偶然性に左右されたもの（A）と，意図的なもの（B）とに分類される。

A　遺物は土坑内部に転落あるいは流入するが，埋土が堆積する段階では土坑が人為的に埋め戻された場合でも堆積内に混入する可能性がある。いずれにしても，出土する土器からみれば小破片状況で出土する例が多い。

B　遺物は土坑内に投棄あるいは埋置されるが，埋土は人為的に埋め戻される場合が大半である。この場合投棄または埋置される場である土坑は二次的な使用ケースもあり，土坑全体の堆積土の状態は幾分自然堆積土の要素も含まれうる。土器は完形に近いものもしくは大型破片や破片状態で出土してもある程度復元可能なものが多く検出される。

以上の二つに分けられるが，土坑内埋土が堆積する段階では両者の要素が相互に入り込む可能性が考えられ，一つの土坑内から出土した遺物のまとまりを上記の二者に選別することはできない。従って二者を分離するためには，遺物の出土状態や土坑内堆積土の状況等を考慮し各遺物の別を推定していかなければならない。とりあえずここではＢの傾向を示す遺物の在り方についてのみ記載する。

Ｂの傾向を示す遺物には，縄文土器・小玉・自然石（人頭大以上）・砕石があげられる。これらの遺物は出土状況等によって次のように分類される。

①	縄文土器が完形もしくは完形品に近い状態で検出される例	ＳＫ－20・51・64
②	多数の縄文土器破片が密着状態で検出される例	ＳＫ－15
③	縄文土器（完形品に近い状態もしくは大型破片）と自然石がセットで検出される例	ＳＫ－28・38・(20)・(51)
④	自然石のみ検出される例	ＳＫ－18・37・47・66・67
⑤	砕石が集中して検出される例	ＳＫ－40
⑥	小玉が集中して検出される例	ＳＫ－39

以上６種に分類されるが，巨視的にみれば埋甕等も①のなかに含めて考えることができる。

５．出土遺物について

前項でも出土遺物に関しては若干記したが，ここでは主として第41図から第47図に掲載した遺物を土器・石器・石製品等に大別して報告し，その他自然石や砕石についても多少触れておく。なお，15・20・38・39・51・55・72号土坑は遺物を含め個別記載することから本項からは除く。

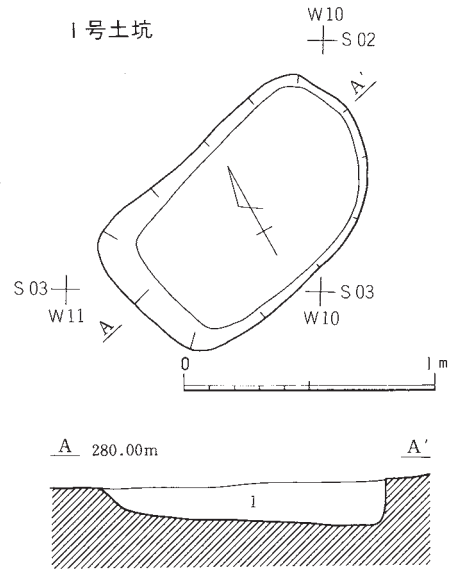
土　器（第41～43，図版37）　Ⅰ群土器は総数３点出土しているがいずれも細片で図示できたものはない。

Ⅱ群土器は総数26点出土した。いずれも有節沈線と隆帯が施されている。２坑１・２，39坑１・２，44坑５，48坑５が比定される。

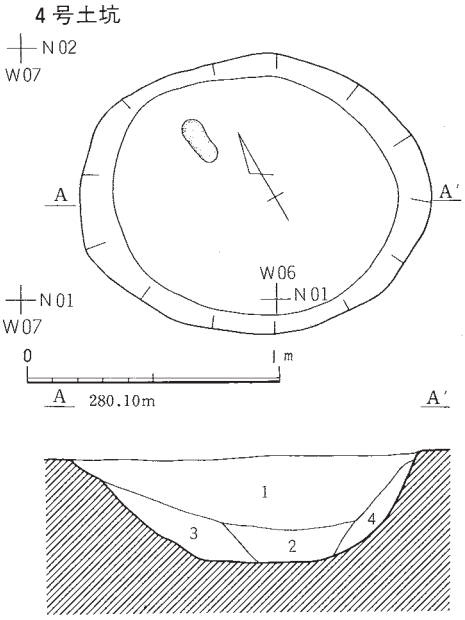
Ⅲ群土器は総数62片の出土である。隆帯上に押捺の加えられた例が多い。２坑３～６・８～10，７坑３，11坑１，43坑１，44坑１～３，66坑１が比定される。

Ⅳ群土器は18片あり，複列の沈線が弧状に配された９坑２，18坑１が本群に比定される。

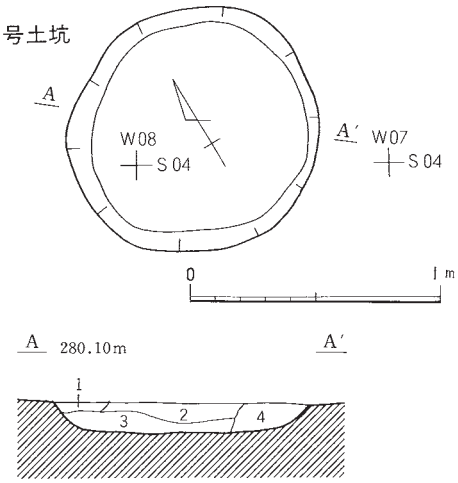
Ⅴ群土器は総数164片を数え，文様の明らかな土器群中では出土量が最も多い。４坑１～3，７坑５，９坑３・４，10坑１～４，25坑１～５，27坑１～４，48坑１～４・49・52，54坑１，70坑２・４，74坑１，75坑１～４，77坑１・２が本群に比定される。地文には縄文と撚糸文の施文されたものがある。64坑１はほぼ完形状態で出土した深鉢である。現況では風化が著しく胴上半を約½復元し得ただけである。頸部文様帯が明瞭に認められ第Ⅲ群２類とも考えられるが，胴部に浅い蛇行沈線，口縁部には僅かに口縁部文様帯を縦に区画すると思われる沈線が施されてい



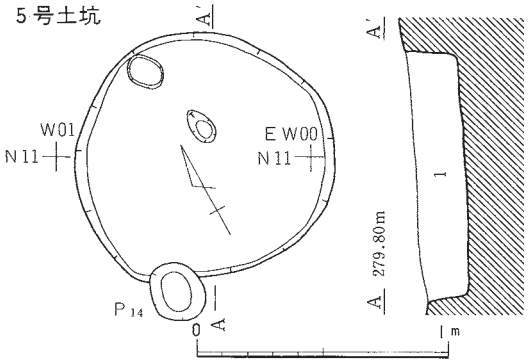
1号土坑内堆積土
1　茶褐色砂質土(地山黄褐色団粒を含む)



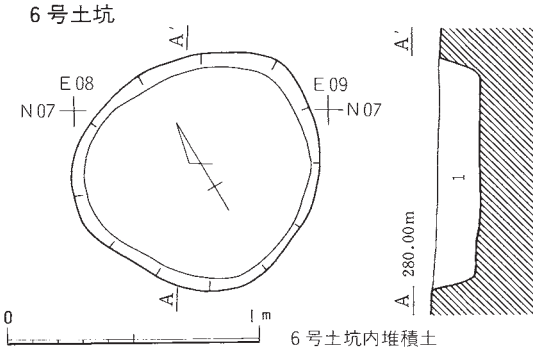
4号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（砂質シルト）
2　暗茶褐色土（シルト）
3　黄茶褐色土（シルトと粘土混在）
4　黄茶褐色土（ローム質黄色土に茶褐色砂質土混入）



2号土坑内堆積土
1　黒味暗茶褐色土(砂質土・焼土・木炭を含む)
2　茶褐色土(砂質土・焼土・木炭・ローム団粒を含む)
3　黄褐色土ローム層
4　茶褐色土(多量のローム団粒, 木炭・焼土を含む)

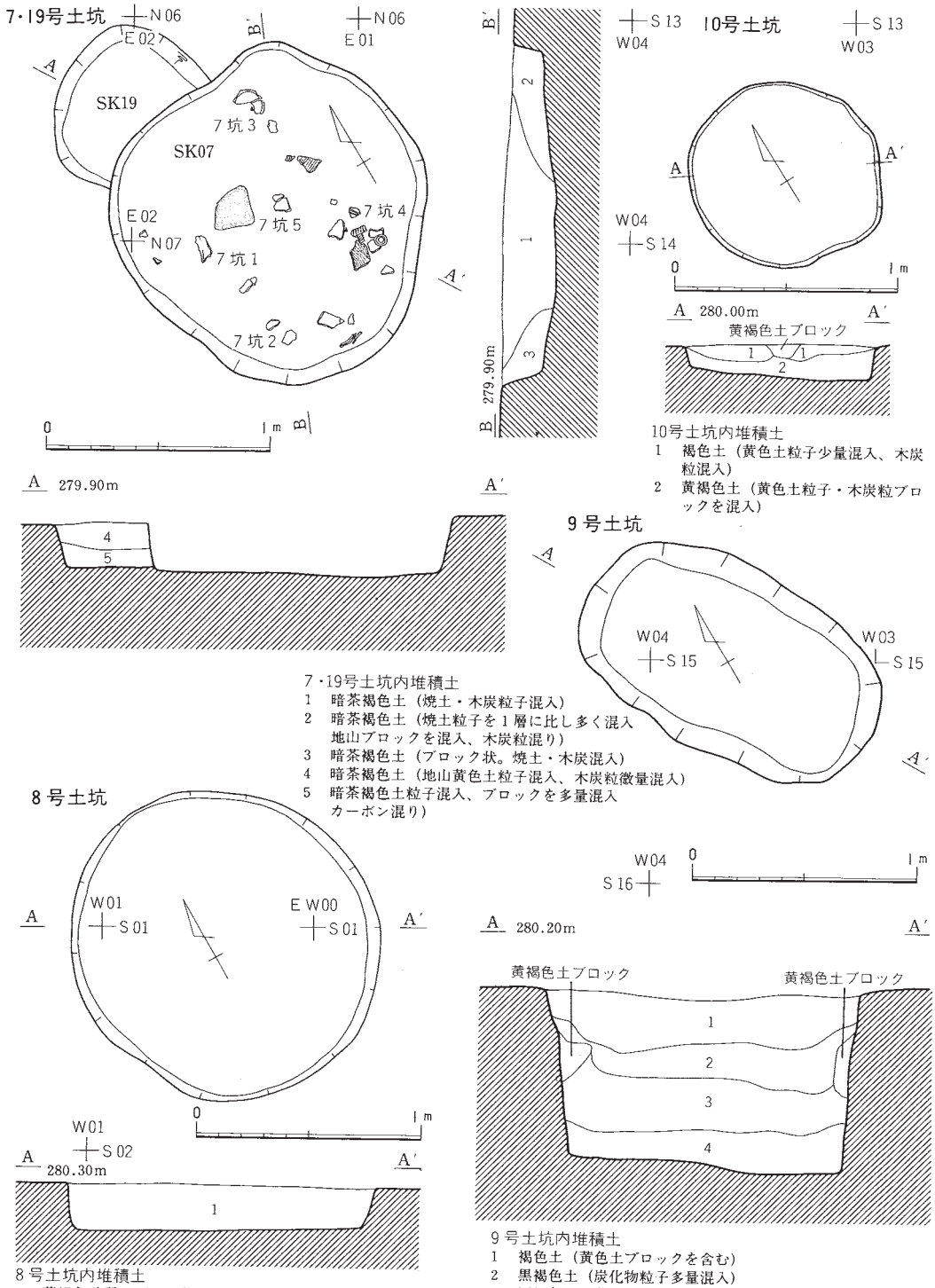


5号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（地山黄色土ブロック・焼土・カーボンを混入。締り強い）

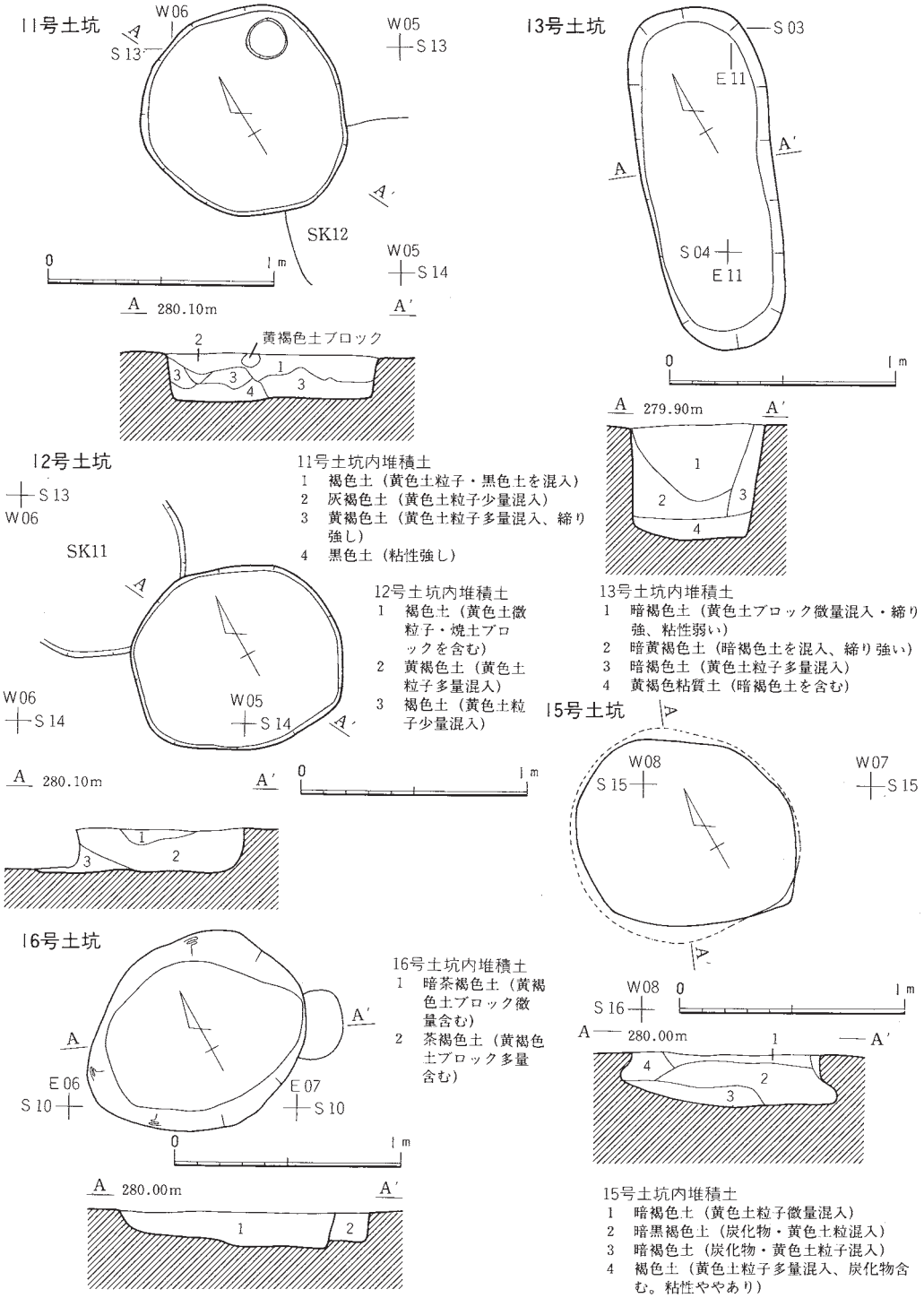


6号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（地山黄色土ブロック・焼土カーボンを含む。締り強い）

第27図　1・2・4～6号土坑



第28図　7～10・19号土坑



11号土坑内堆積土
1　褐色土（黄色土粒子・黒色土を混入）
2　灰褐色土（黄色土粒子少量混入）
3　黄褐色土（黄色土粒子多量混入、締り強し）
4　黒色土（粘性強し）

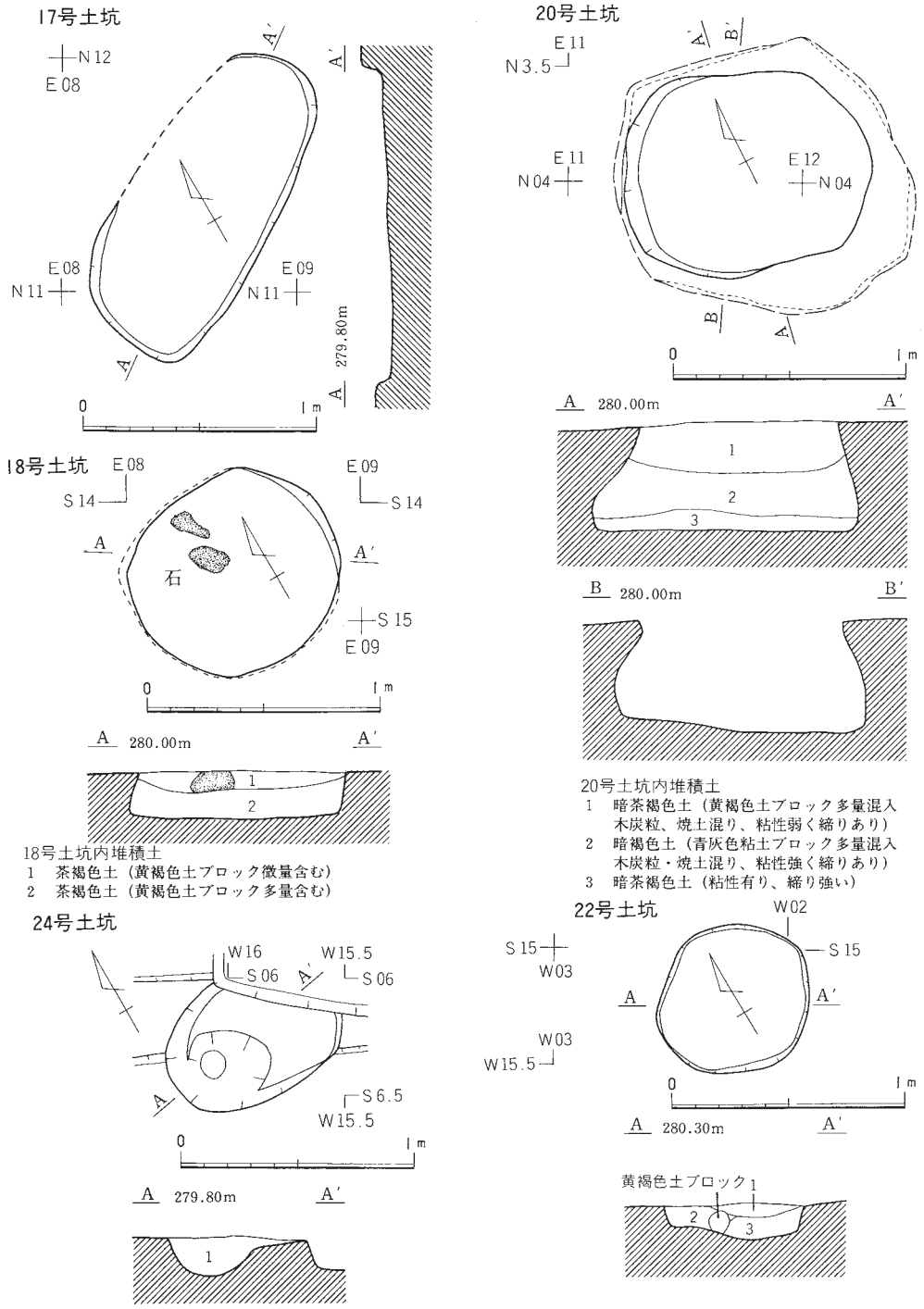
12号土坑内堆積土
1　褐色土（黄色土微粒子・焼土ブロックを含む）
2　黄褐色土（黄色土粒子多量混入）
3　褐色土（黄色土粒子少量混入）

13号土坑内堆積土
1　暗褐色土（黄色土ブロック微量混入・締り強、粘性弱い）
2　暗黄褐色土（暗褐色土を混入、締り強い）
3　暗褐色土（黄色土粒子多量混入）
4　黄褐色粘質土（暗褐色土を含む）

16号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄褐色土ブロック微量含む）
2　茶褐色土（黄褐色土ブロック多量含む）

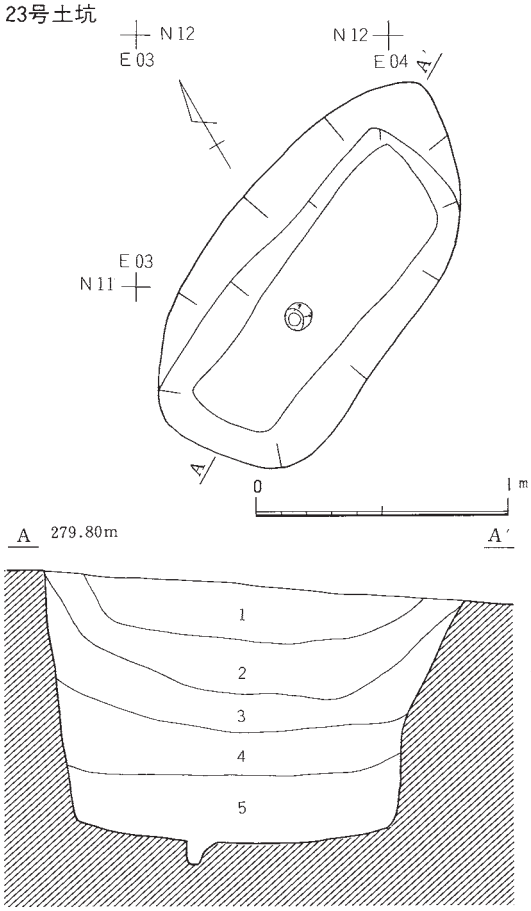
15号土坑内堆積土
1　暗褐色土（黄色土粒子微量混入）
2　暗黒褐色土（炭化物・黄色土粒混入）
3　暗褐色土（炭化物・黄色土粒子混入）
4　褐色土（黄色土粒子多量混入、炭化物含む。粘性ややあり）
5　暗茶褐色土（黄色土と暗茶褐色土の混合土、固く締り粘性あり）

第29図　11～13・15・16号土坑

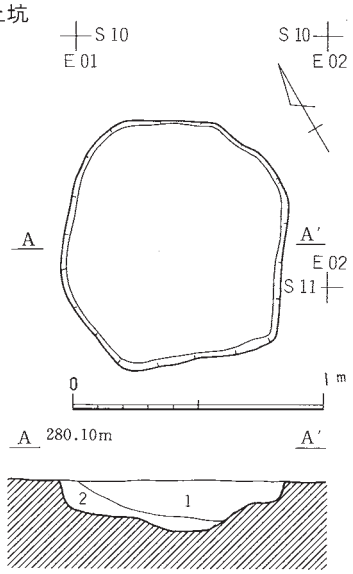


第30図　17・18・20・22・24号土坑

23号土坑



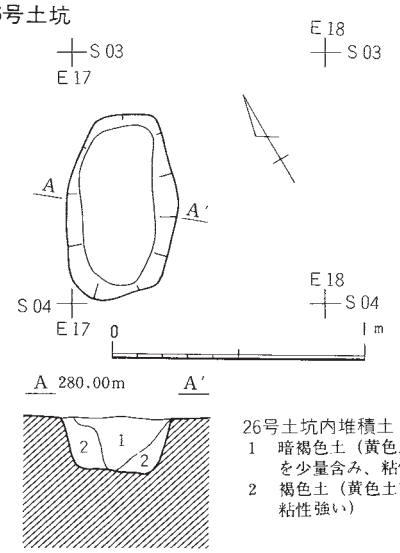
25号土坑



25号土坑内堆積土
1　褐色土（黄色土粒子・炭化物を少量含む）
2　黄褐色土（黄色土粒子を多量含み，粘性有）

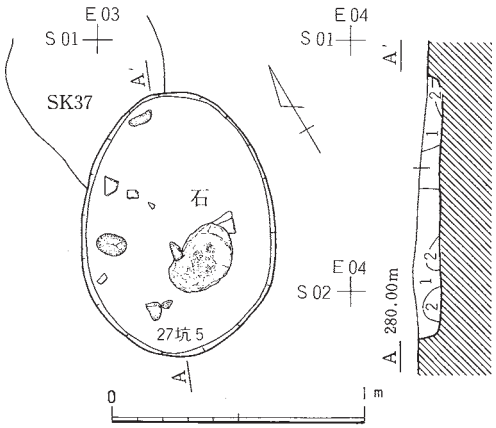
23号土坑内堆積土
1　暗褐色土（締り強い）
2　暗茶褐色土（地山黄色土ブロックを少量混入、締り強い）
3　暗茶褐色土（地山黄色土ブロックを少量混入、締り強い）粘性強い）
4　青灰褐色土（暗茶褐色土を含み、締りやや弱く粘性強い）
5　暗褐色土（暗茶褐色土・青灰褐色土粘質土を含み、締り強い，粘性強い）

26号土坑



26号土坑内堆積土
1　暗褐色土（黄色土粒子・炭化物を少量含み、粘性強い）
2　褐色土（黄色土ブロックを含み粘性強い）

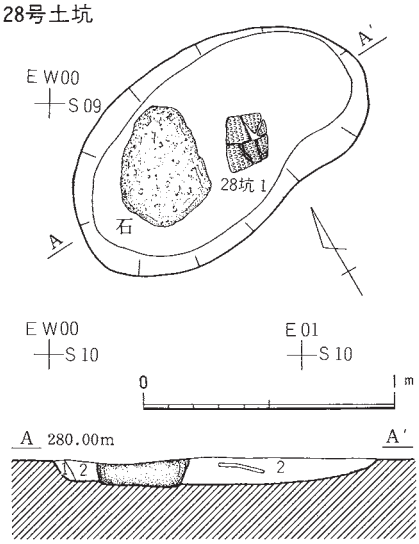
27号土坑



27号土坑内堆積土
1　褐色土（白色の風化花崗岩粒子・暗茶褐色土粒子を少量含む）
2　暗茶褐色土（地山粒子に褐色土粒子が少量混入、木炭物を少量含み、硬くしまる）

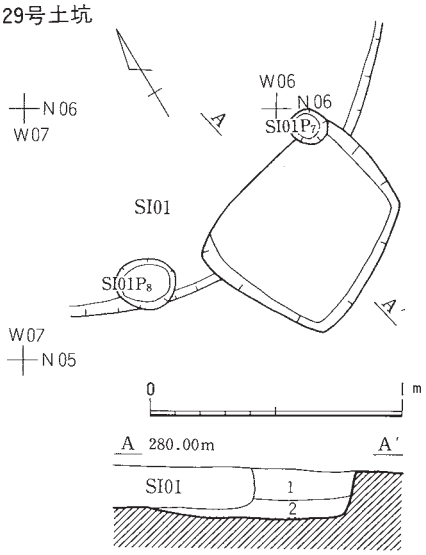
第31図　23・25～27号土坑

28号土坑



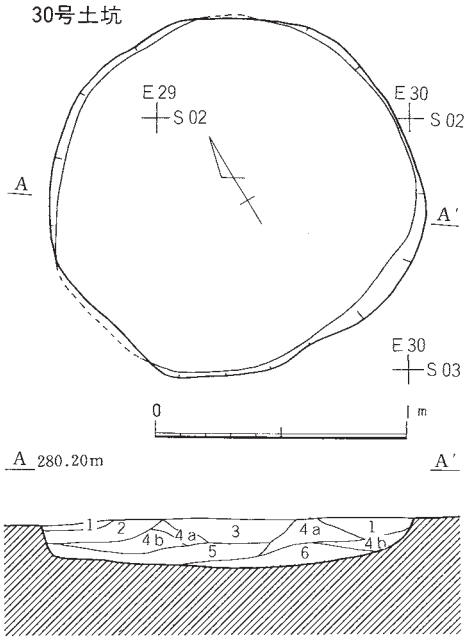
28号土坑内堆積土
1　黄褐色土（褐色土粒が混入）
2　褐色土（木炭粒・焼土少量含む
風化花崗岩粒微量含む）

29号土坑



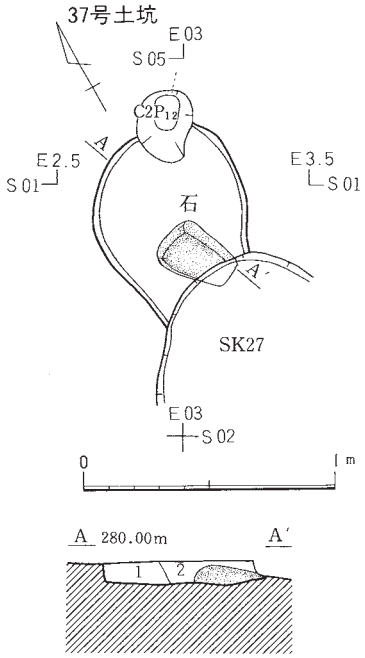
29号土坑内堆積土
1　黄褐色土（黄白色土と暗茶褐色土がブロック状に混在）
2　暗褐色土（焼土・木炭粒を含む）

30号土坑



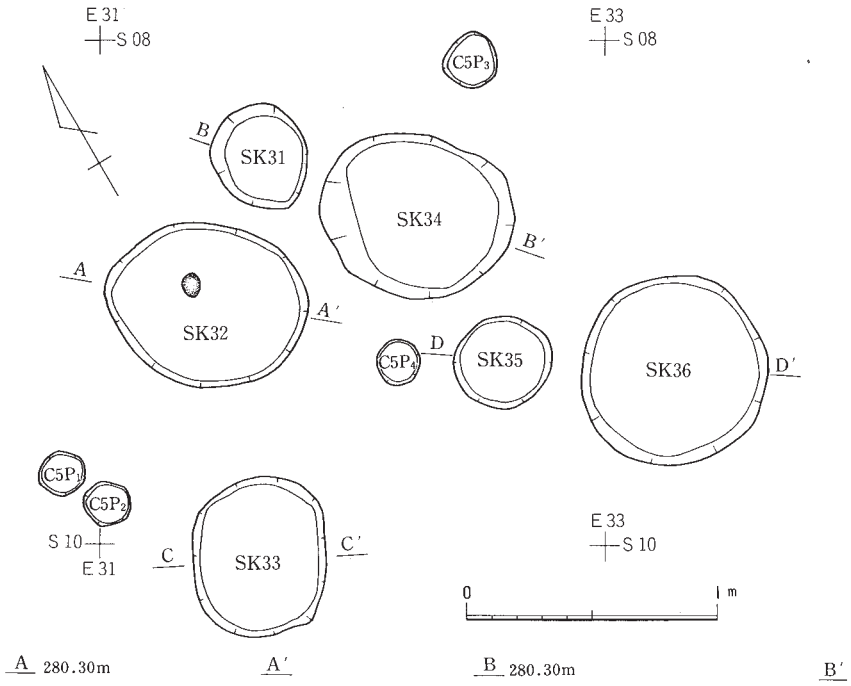
30号土坑内堆積土
1　無白色（砂質粘土）
2　茶褐色土（砂質シルト、木炭粒若干混入）
3　黒褐色土（砂質シルト・木炭層下部に焼土粒を若干含む）
4a　暗茶褐色土（砂質粘土、茶褐色土と黄褐色土混入
4b　黄茶褐色土（砂質粘土塊が混入、木炭粒若干混入）
5　黒味暗褐色土（砂質シルト木炭粒多量混入）
6　茶褐色（砂質シルト）

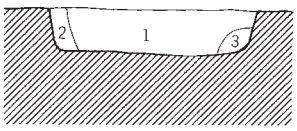
37号土坑



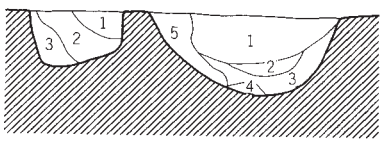
37号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄色土粒と２層の混合土、粘性あり）
2　褐色土（多量の黄色土粒を含む粘性あり）

第32図　28～30・37号土坑



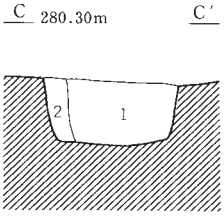


32号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土微粒子焼土小片・木炭粒含む）
2　黄褐色土（黄色土小ブロック含む）
3　明茶褐色土（黄色土小ブロック含む。粘性あり）

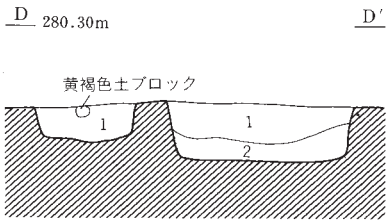


31号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土粒含む）
2　黄褐色土（黄色土小ブロック含む）
3　褐色土（粘性強い）

34号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土小ブロック、炭化物少量含む）
2　明茶褐色土（黄色土、粘土小ブロック含む）
3　褐色土（黄色土ブロック、粘土粒子を含む）
4　黄褐色土（黄色土粒子・粘土ブロックを含む）
5　灰色土（粘土ブロックを含む）



33号土坑内堆積土
1　褐色土（黄色土粒子・炭化物粒子を少量含む）
2　黄褐色土（黄色土ブロック、炭化物粒子を含む。粘性あり）

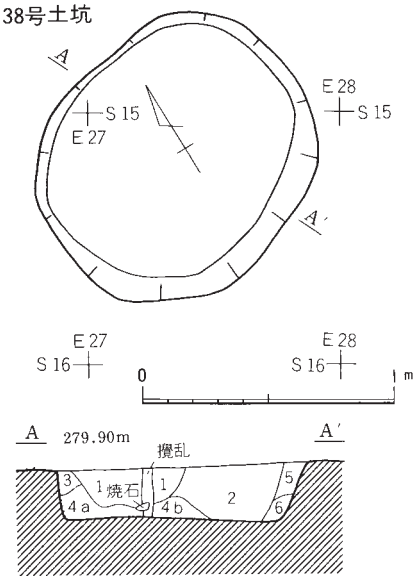


35号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土粒子・炭化物粒子を少量含む）

36号土坑内堆積土
1　褐色土（焼土・黄色土粒子を含む炭化物ブロックを少量混入）
2　暗褐色土（焼土、黄色土粒子多量混入）

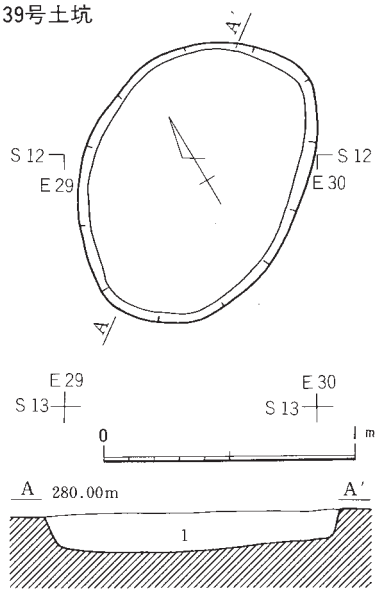
第33図　31～36号土坑

38号土坑



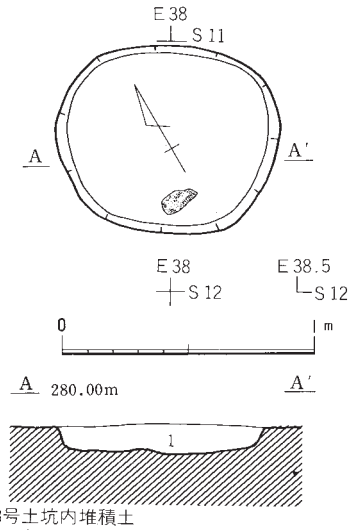
38号土坑内堆積土
1　灰味茶褐色土（砂質土・木炭粒を少量混入）
2　暗茶褐色土（砂質シルト・木炭粒を多量混入）
3　茶褐色土（砂質シルト）
4a　茶褐色土（シルト・粘土を少量混入）
4b　茶褐色土（ジルト・粘土を多量混入）
5　黄褐色土（砂質粘土・黄色土粒に若干の茶褐色砂質シルト粒混入）
6　茶褐色土（砂質シルト・黄色砂質土を若干混入）

39号土坑



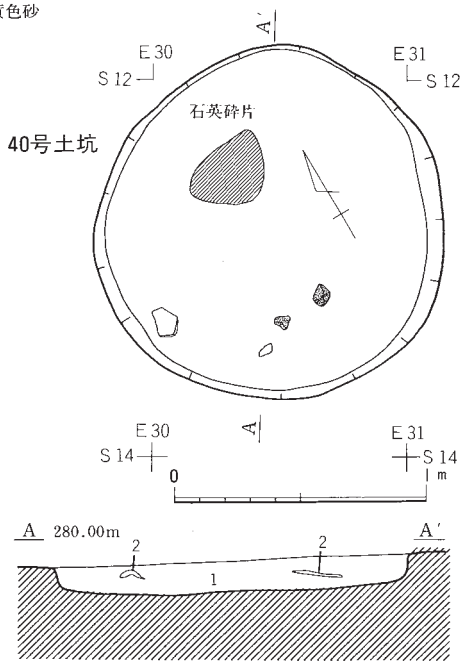
39号土坑内堆積土
1　茶褐色土（炭化物、白色の風化花崗岩粒を含む褐色土と黄色土の混合土・中央部では黄色土がブロック状に混入、粒子やや粗く粘性あり）

43号土坑



43号土坑内堆積土
1　暗褐色土（木炭粒の小ブロックを大量に含む黄色土粒子・焼土を少量混入、しまり強い）

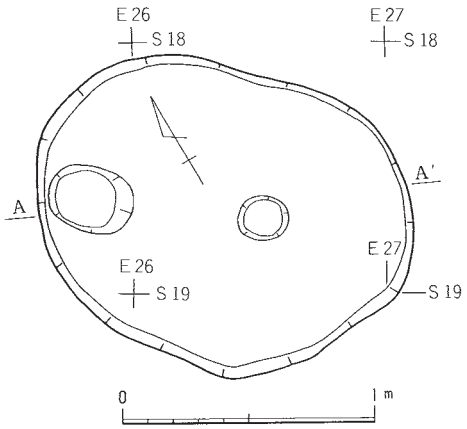
40号土坑

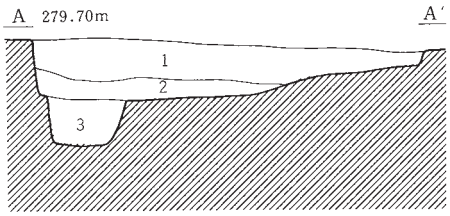


40号土坑内堆積土
1　褐色土（炭化物・黄色土粒を含む白色の風化花崗岩粒含む。粒子やや粗く、粘性あり）
2　黒褐色土（褐色土と炭化物の混合土、僅かに焼土を含む）

第34図　38～40・43号土坑

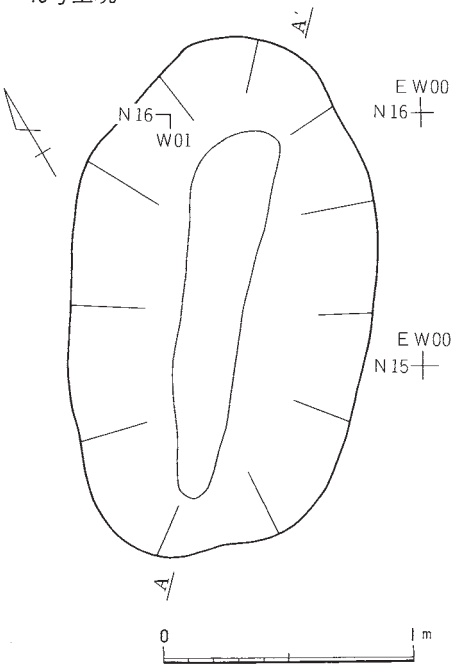
44号土坑

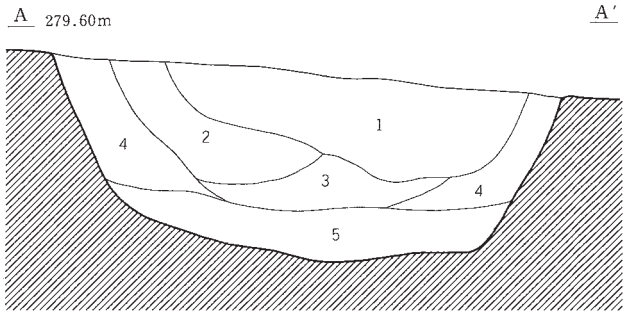




44号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄色土ブロックを少量混入木炭粒を含む）
2　暗茶褐色土（黄色土ブロックを多量混入木炭粒・焼土を含む）
3　暗茶褐色土（黄色土ブロックを微量含む焼土・木炭粒の混入が比較的多い）

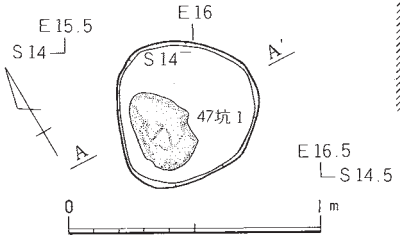
46号土坑

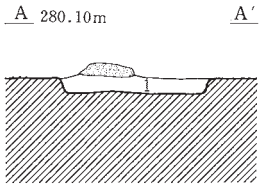




46号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土
2　暗茶褐色土（白色土ブロック・木炭粒混入）
3　暗茶褐色土（白色土ブロック・木炭粒多量混入）
4　暗茶褐色土（白色土・黄色土ブロック多量混入）
5　暗黄褐色土

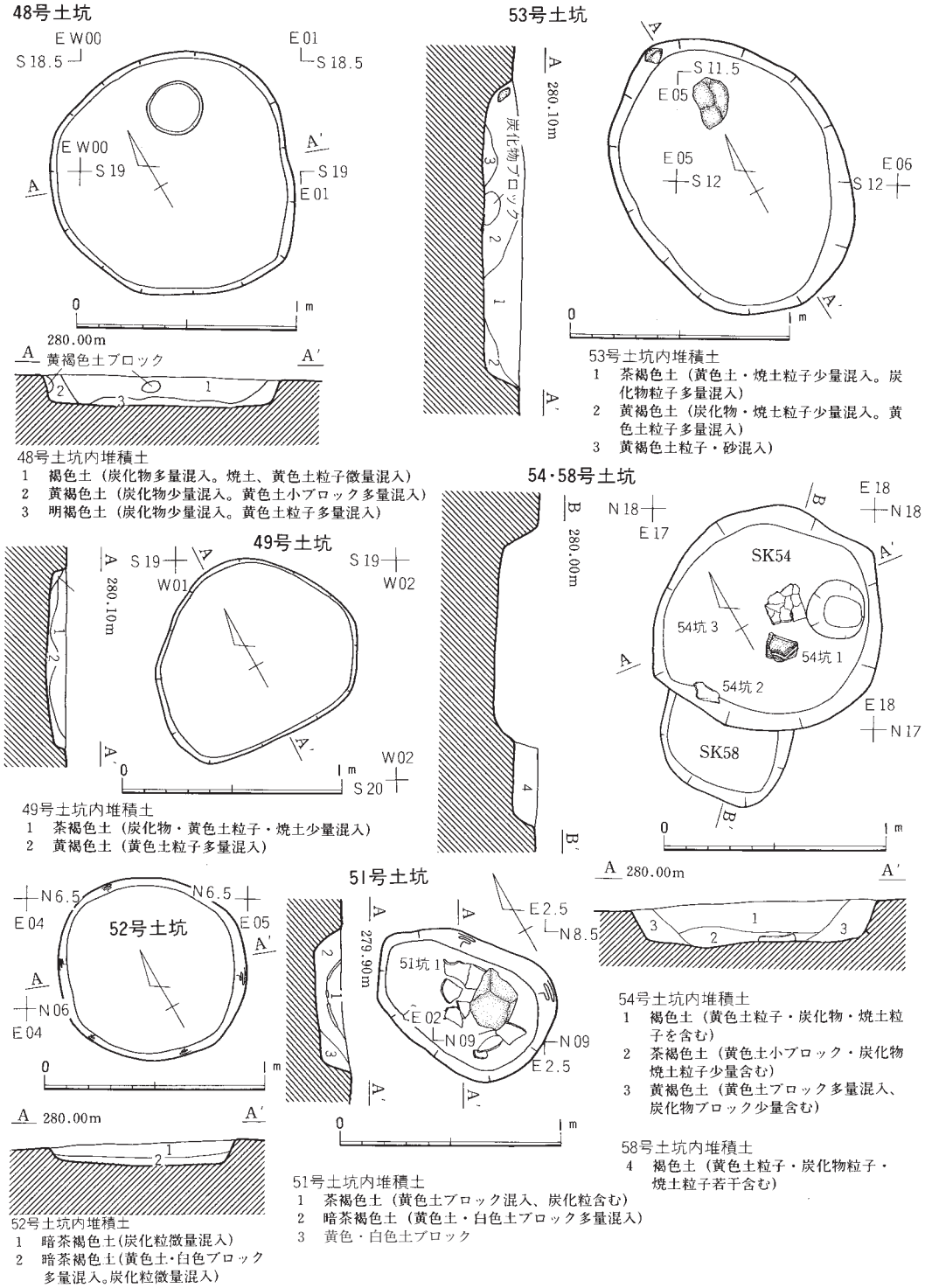
47号土坑





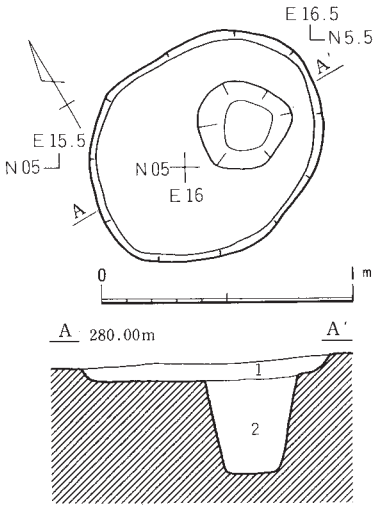
47号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土粒子・炭化物粒を含む粘性あり、やや柔い）

第35図　44・46・47号土坑



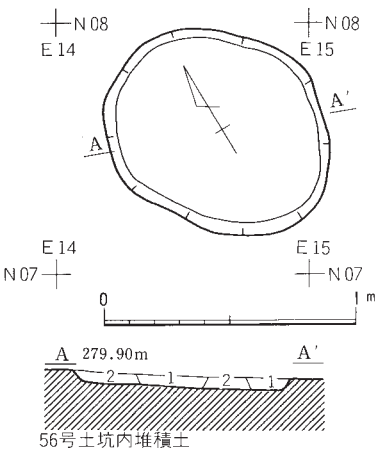
第36図　48・49・51～54・58号土坑

55号土坑



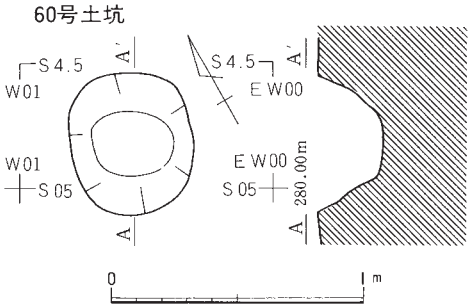
55号土坑内堆積土
1　灰褐色土（黄色土粒子・炭化物粒子・砂を含む焼土微量混入）
2　明褐色土（炭化物粒子・黄色土粒子・砂を含む）

56号土坑

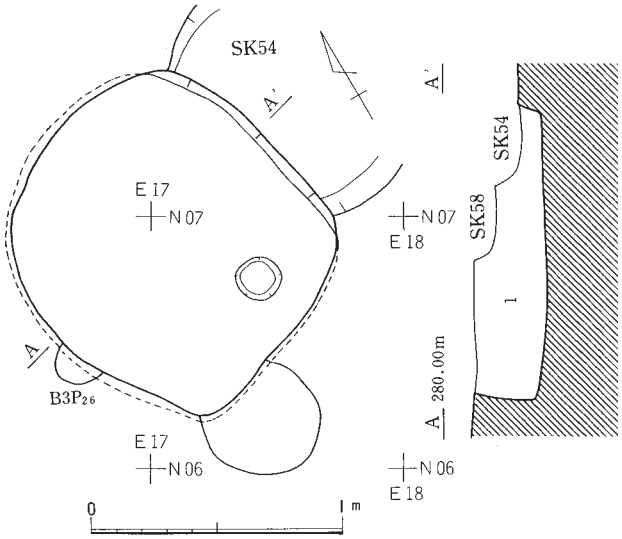


56号土坑内堆積土
1　黄褐色土（黄色土粒子多量混入）
2　褐色土（黄色土粒子・炭化物微量含む）

60号土坑

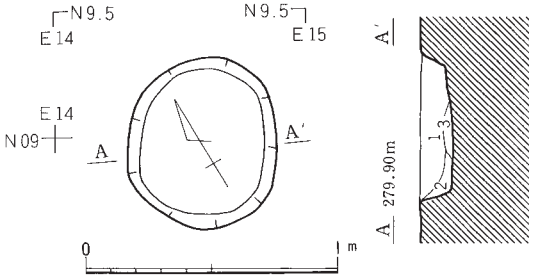


59号土坑



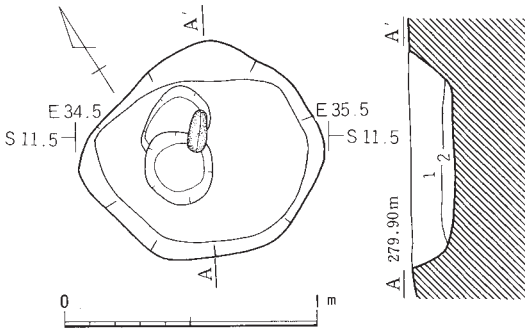
59号土坑内堆積土
1　黄褐色土（黄色土ブロックを大量に含む炭化物少量混入）

57号土坑



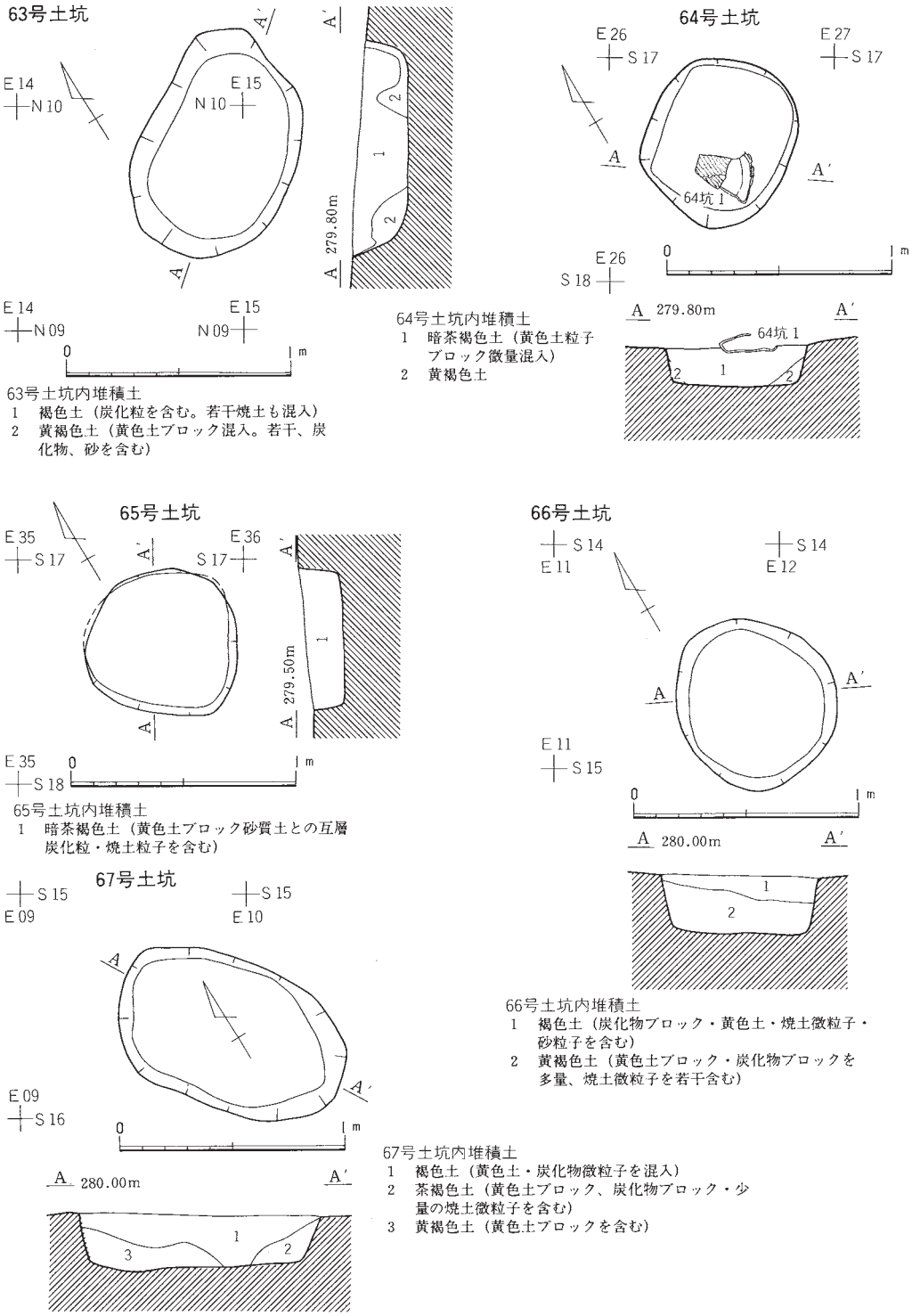
57号土坑内堆積土
1　褐色土（焼土・炭化物粒子・黄色土粒子若干含む）
2　黄褐色土（焼土・炭化物粒子・黄色土ブロックを多量含む）
3　灰褐色土（焼土炭化物を微量含む）

62号土坑



62号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄色土ブロック微量混入）
2　暗茶褐色土（黄色土ブロック少量混入、炭化粒・赤色粒子含む）

第37図　55～57・59・60・62号土坑



63号土坑内堆積土
1　褐色土（炭化粒を含む。若干焼土も混入）
2　黄褐色土（黄色土ブロック混入。若干、炭化物、砂を含む）

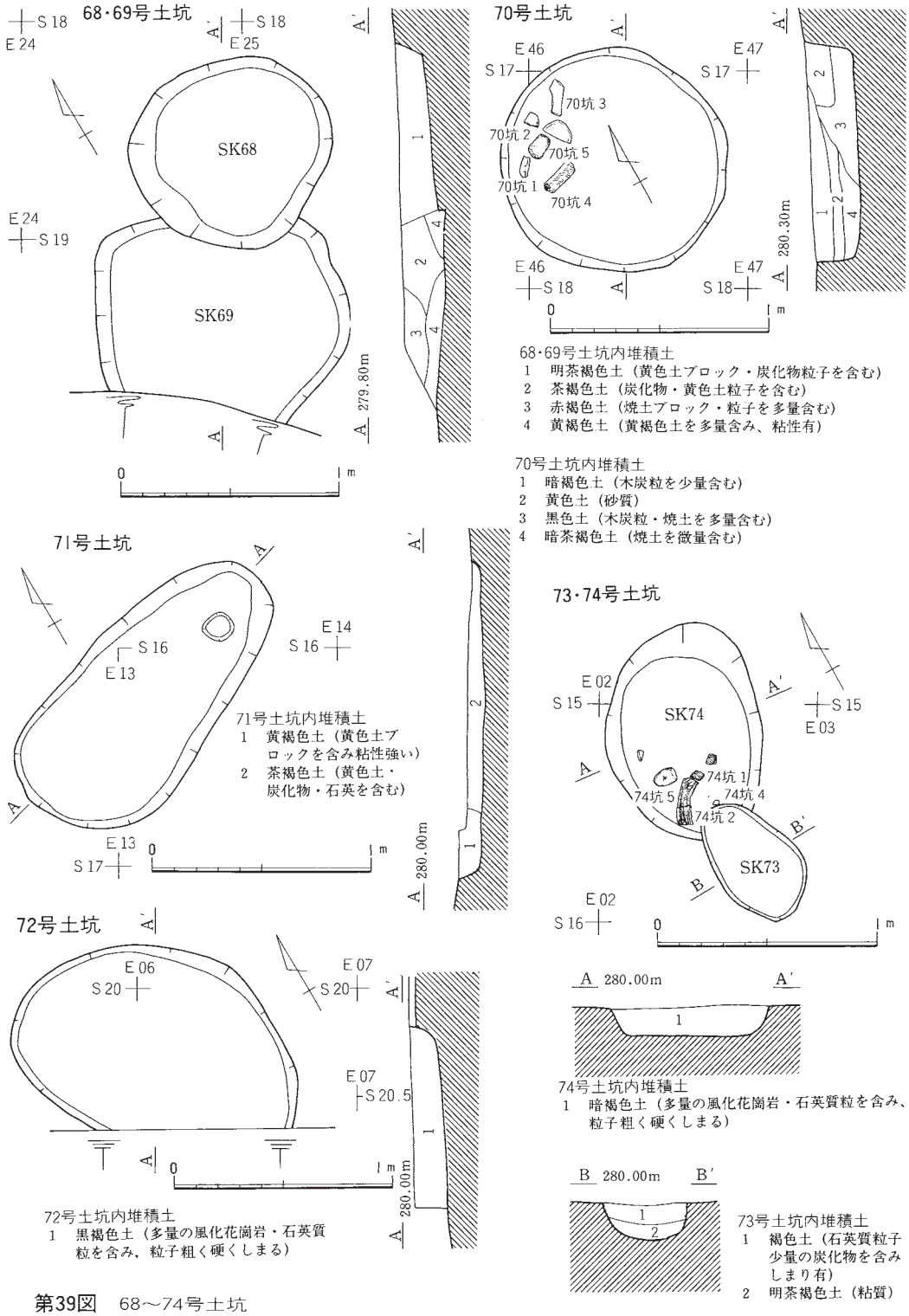
64号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄色土粒子ブロック微量混入）
2　黄褐色土

65号土坑内堆積土
1　暗茶褐色土（黄色土ブロック砂質土との互層炭化粒・焼土粒子を含む）

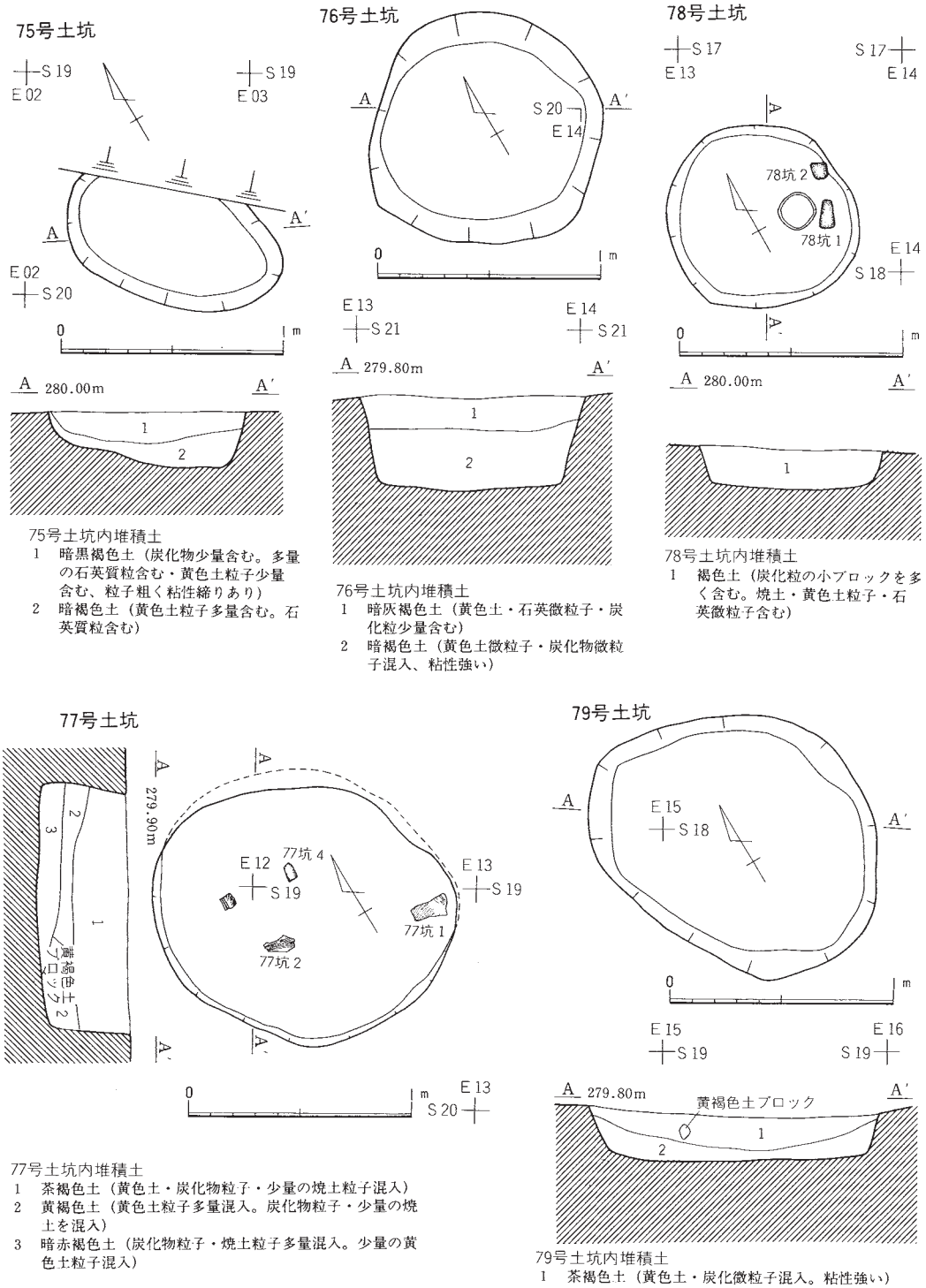
66号土坑内堆積土
1　褐色土（炭化物ブロック・黄色土・焼土微粒子・砂粒子を含む）
2　黄褐色土（黄色土ブロック・炭化物ブロックを多量、焼土微粒子を若干含む）

67号土坑内堆積土
1　褐色土（黄色土・炭化物微粒子を混入）
2　茶褐色土（黄色土ブロック、炭化物ブロック・少量の焼土微粒子を含む）
3　黄褐色土（黄色土ブロックを含む）

第38図　63～67号土坑



第39図　68～74号土坑



75号土坑内堆積土
1　暗黒褐色土（炭化物少量含む。多量の石英質粒含む・黄色土粒子少量含む、粒子粗く粘性締りあり）
2　暗褐色土（黄色土粒子多量含む。石英質粒含む）

76号土坑内堆積土
1　暗灰褐色土（黄色土・石英微粒子・炭化粒少量含む）
2　暗褐色土（黄色土微粒子・炭化物微粒子混入、粘性強い）

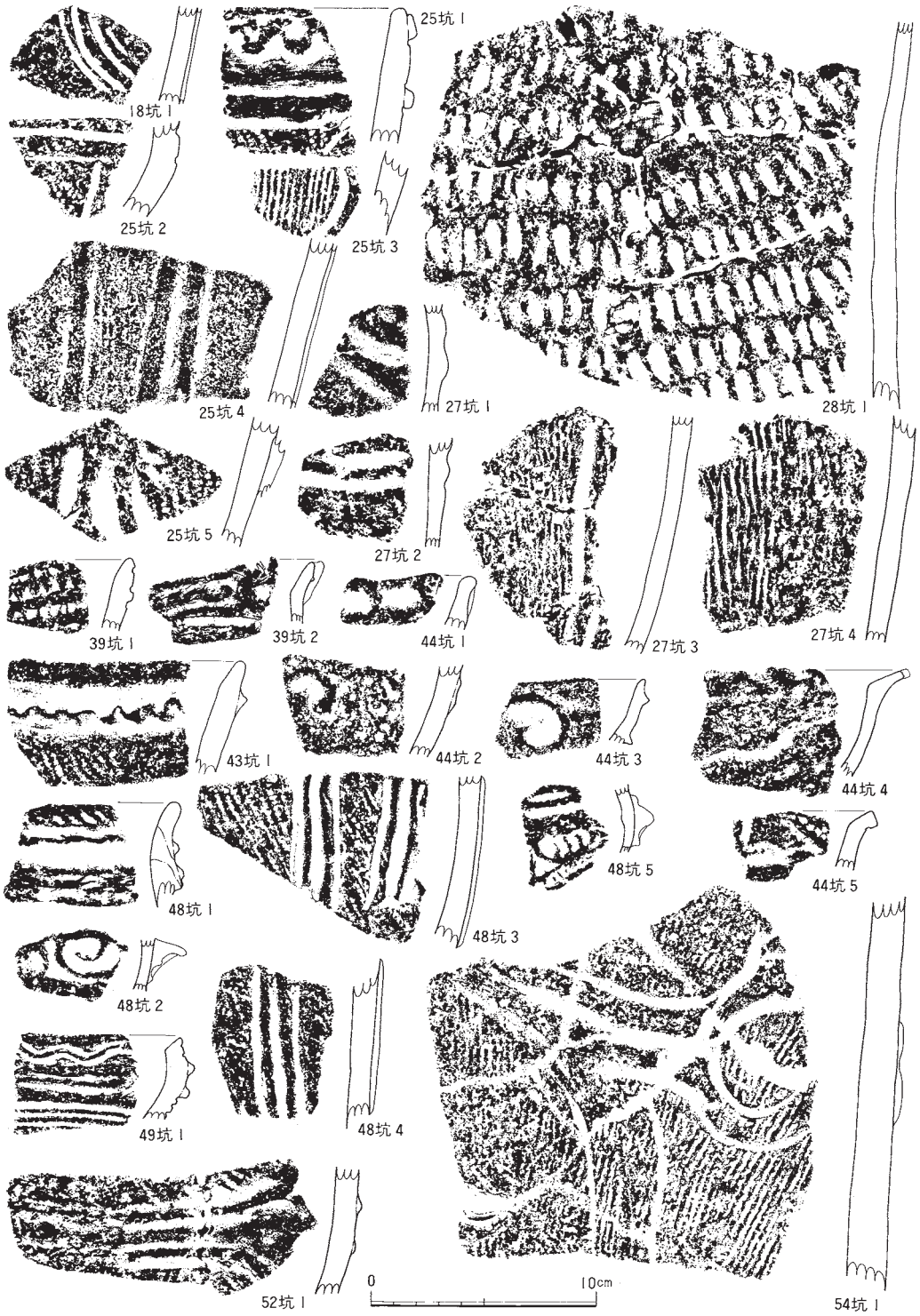
78号土坑内堆積土
1　褐色土（炭化粒の小ブロックを多く含む。焼土・黄色土粒子・石英微粒子含む）

77号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土・炭化物粒子・少量の焼土粒子混入）
2　黄褐色土（黄色土粒子多量混入。炭化物粒子・少量の焼土を混入）
3　暗赤褐色土（炭化物粒子・焼土粒子多量混入。少量の黄色土粒子混入）

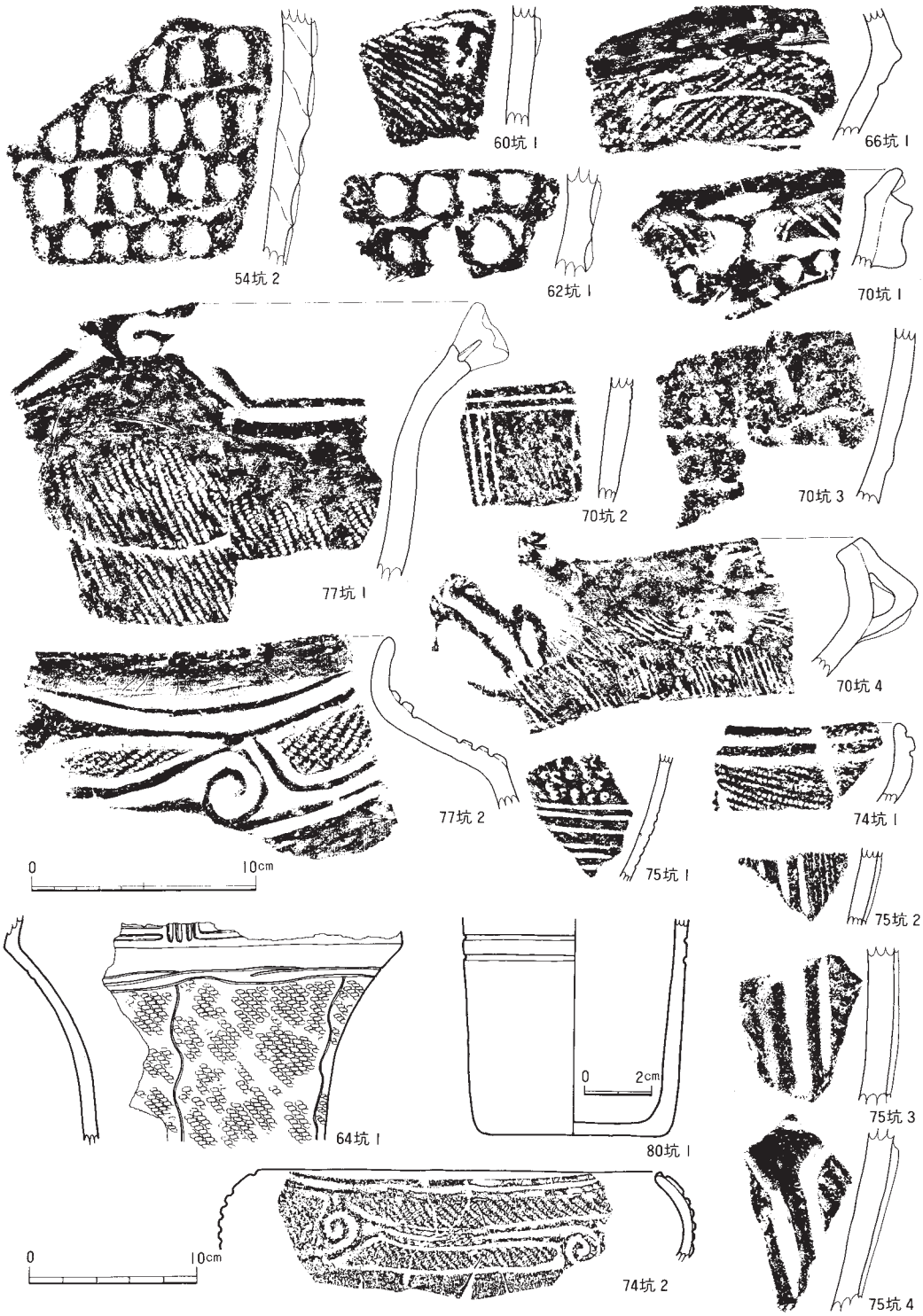
79号土坑内堆積土
1　茶褐色土（黄色土・炭化微粒子混入。粘性強い）
2　明茶褐色土（黄色土小ブロック多量混入。炭化粒焼土微粒子少量含む）

第40図　75～79号土坑

第41図　2・4・5・7・9～12号土坑出土縄文土器



第42図　18・25・27・28・39・43・44・48・49・52・54号土坑出土縄文土器



第43図　54・60・62・64・66・70・74・75・77・80号土坑出土縄文土器

るところから，第Ⅴ群土器と考えた。74坑１は底面直上から出土したキャリパー型深鉢の口縁部で文様は側縁を沈線で調整した隆帯によって末端を渦巻状とした横位の単位文様が施される。

Ⅵ群土器は縄文のみ施されるもので，10坑６がある。

Ⅶ群土器は総数５点で，９坑１・５，10坑５，54坑２，62坑１がある。

Ⅷ群土器は総数７点で，70坑１が本群に比定される。

Ⅺ群土器は11坑２の１片が出土しただけである。

ミニチュア土器では80坑１があげられる。文様は胴部上位に細い沈線を２本横位に巡らしている。地文は器面が荒れているため不明である。

これらの土器群のなかでⅥ群土器としたものは縄文のみで他の文様が施文されない土器を指しているが，特に破片状態ではたとえ縄文のみの施文であっても他の文様部が欠損している場合があり，安易に比定できない面がある。これは10坑６についても同じである。

石　　器（第44～47図，図版76～78・80）　検出された石器には，石鏃・石錐・石匙・不定形石器・磨石・凹石・石皿・多孔石がある。磨石・凹石・石皿・多孔石等は幾つかの要素を共有あるいは転用している状況が残りやすく以下では磨石・凹石類・石皿・凹石類とする。

石鏃は下記の土坑から総数26点検出されている。

ＳＫ－４・７・９・11・21・24・25・42・48・54・62・65・66・74・76

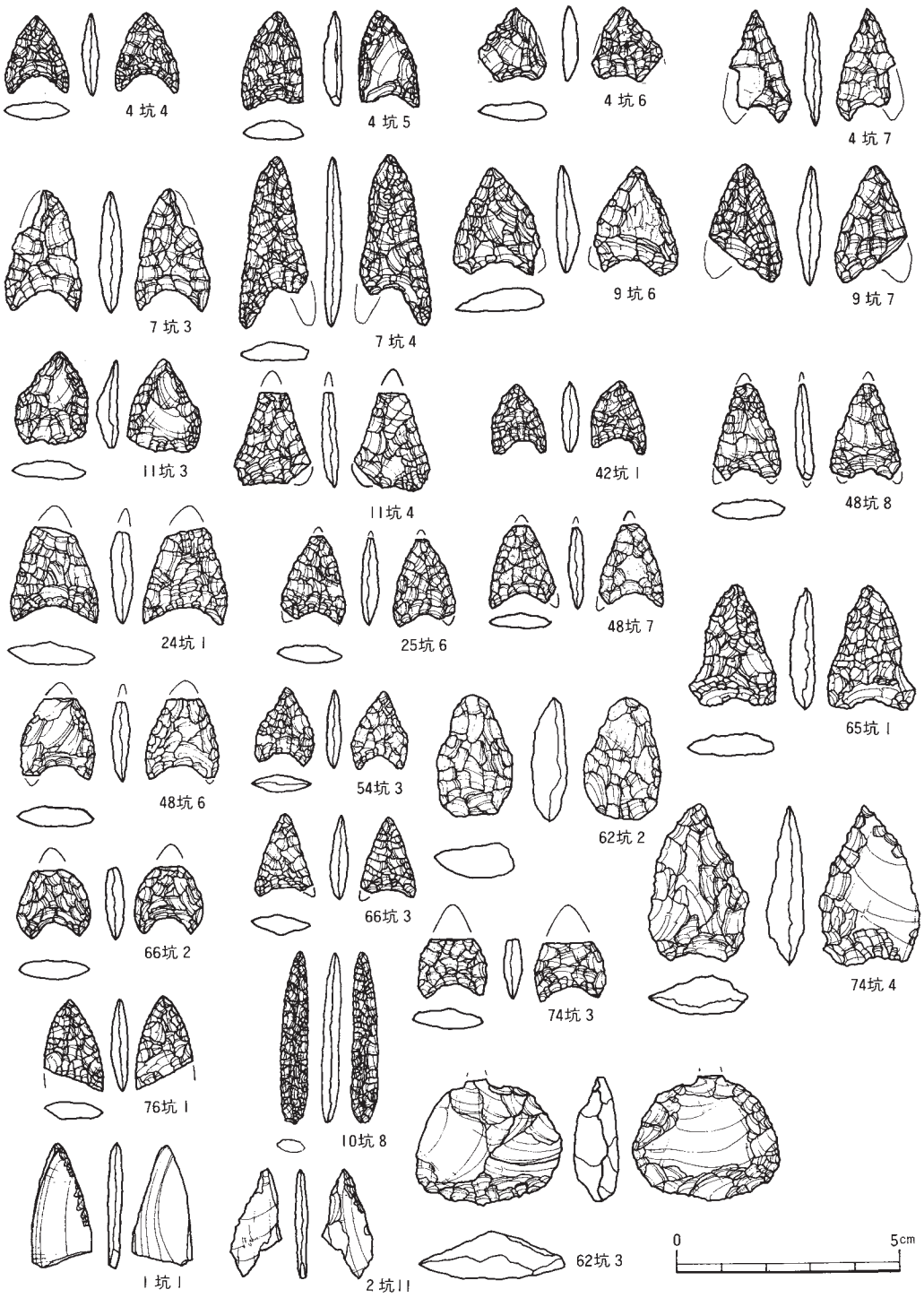
形態は，側縁部が丸味をおびるもの（Ａ）と，側縁部が直線的で全体的な形が三角形に近いもの（Ｂ）がある。基部は観察不可能なものを除いてすべて無茎であるが，抉りのあるものとないものの二種類がある。大きさは長さ１～３㎝，幅１～２㎝，厚さ３～４㎜中に大半がおさまる。石鏃は完形で検出されたのは９点であるが，他は一部が欠損して検出されている。先端部が欠損するもの４点，基部の一部が欠損するもの７点，基部の全部を欠損するもの１点，先端部および基部の一部を欠損するもの５点を各々数える。

石錐では10坑８がある。長さ４㎝，幅７㎜と細長い形状のものである。石匙には62坑３が１点ある。長さ28㎜，幅33㎜を計る横形のもので，摘みの先端を欠損している。不定形石器は６点ある。１坑１は側縁の一部に，２坑11は先端部にそれぞれ使用痕が認められる。４坑８は四角形の剝片の２側縁に刃部が作られたものである。66坑４は薄く長い剝片の両側縁に刃部が作り出されている。11坑５は剝片の上端に角度の急な鈍い刃部が作られたものである。77坑３は柳葉状の剝片の側縁に刃部が作られている。

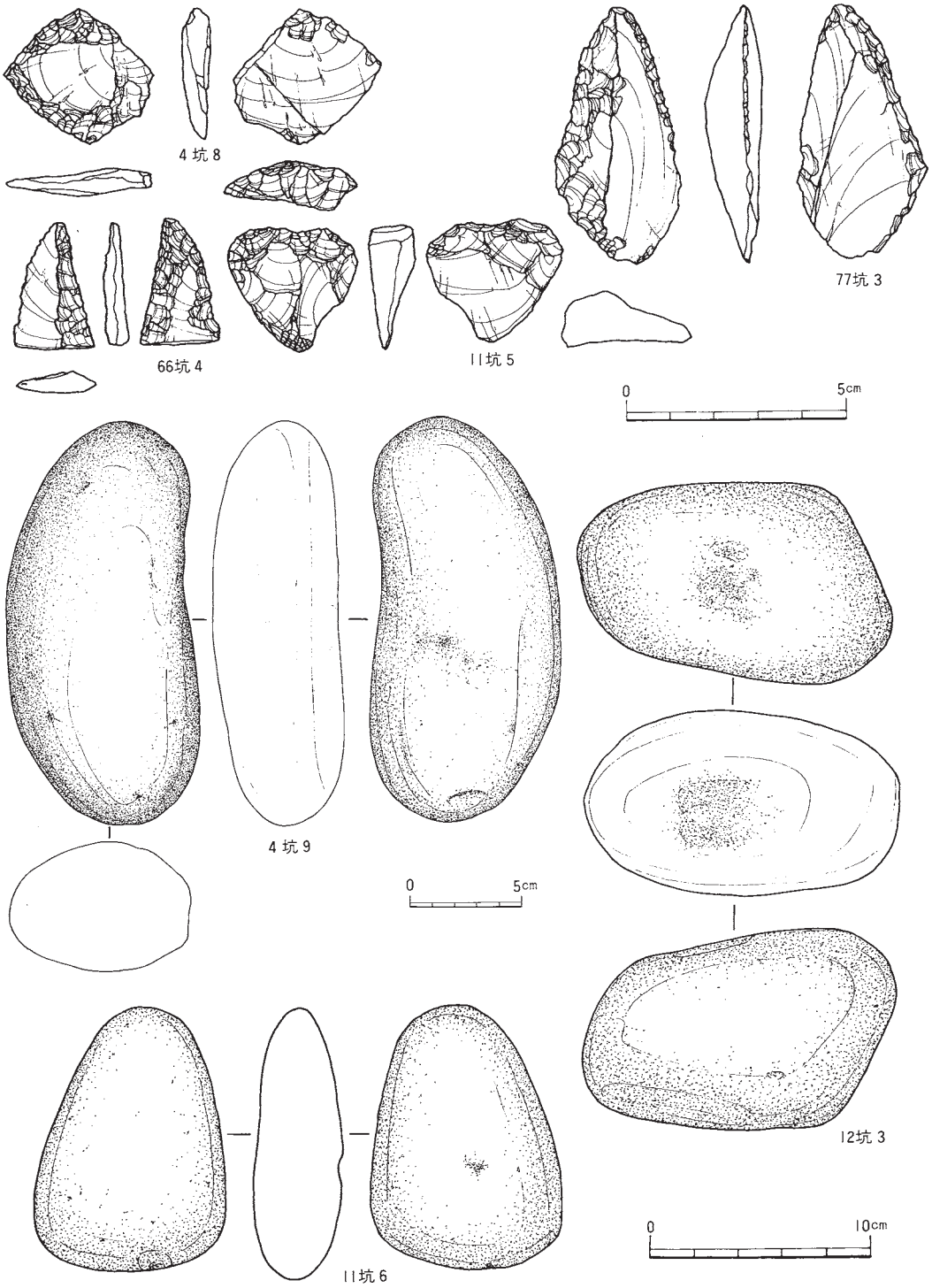
磨石・凹石類は10点（４坑９，11坑６，12坑３，27坑５，32坑１，38坑７，70坑５，74坑５，78坑１・２）

第 15 表　石鏃形態分類表

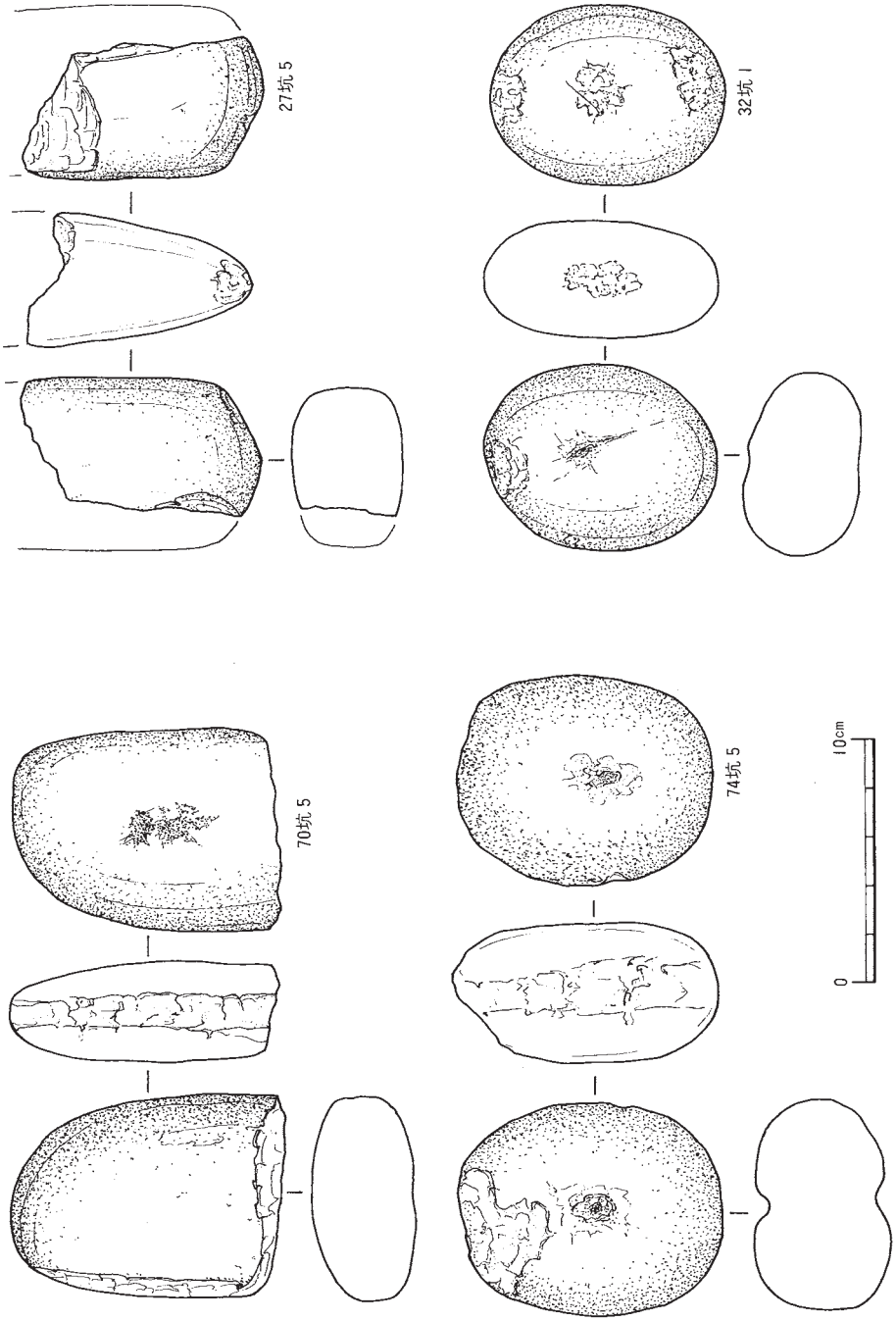
形　態	遺　物　番　号				
丸　味 Ａ	４坑４ 42坑１	４坑５ 48坑６	11坑３ 54坑３	21坑１ 66坑２	21坑２ 74坑３
直　線 Ｂ	４坑６ ９坑７ 45坑１ 76坑１	４坑７ 11坑４ 48坑７	７坑３ 24坑１ 48坑８	７坑４ 25坑６ 62坑２	９坑６ 42坑２ 65坑１



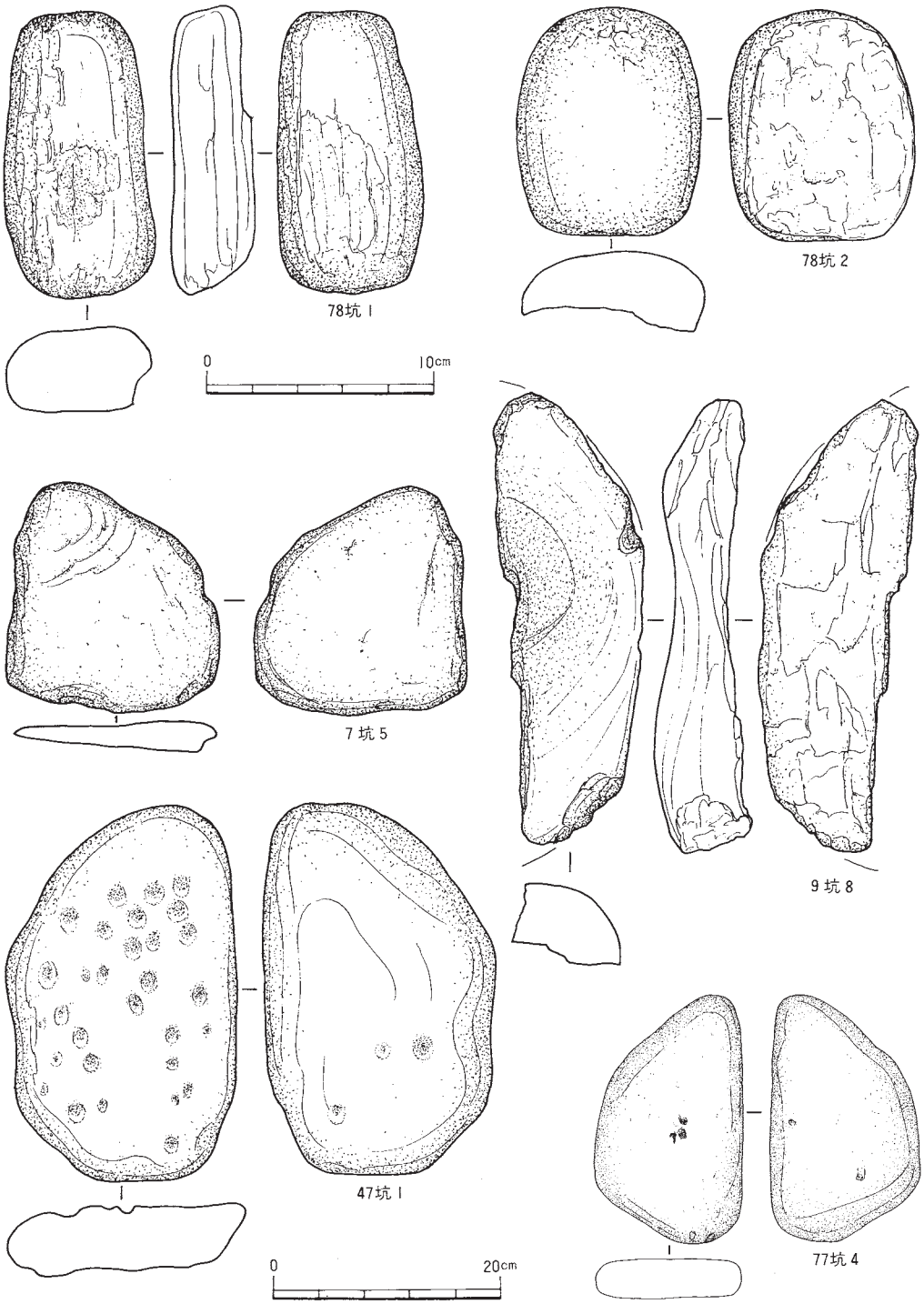
第44図　1・2・4・7・9～11・21・24・25・42・48・54・62・65・66・74・76号土坑出土石器



第45図　4・11・12・66・77号土坑出土石器



第46図　27・32・70・74号土坑出土石器



第47図　7・9・47・77・78号土坑出土石器

ある。いずれも円礫状の自然石に磨りが加えられており器面に平滑な部分が認められる。凹部を有するものは，12坑１・32坑１・70坑１・72坑５の４点で，70坑１を除き他は複数面に施されている。凹部の位置は中央部にあるものが多い。

石皿は３点（７坑５，９坑８，77坑４）でいずれも板状の石を利用している。７坑５・９坑８は使用による窪みが顕著にみられる。47坑１は凹部が多数設けられたものである。

この他に土坑内から自然石や砕石が検出されている。検出状況は両者とも土坑内に据え置かれた状態で検出される例が多い。自然石では，20・27・28・38・47・51・66号土坑の７例である。石質は花崗岩が多い。砕石は40号土坑１基から検出された。石英を２～３㎝の細片に打ち砕いたもので，土坑中央やや北寄りに約30㎝の範囲に集中させている。

以上土坑内出土の遺物について概略したが，詳しくは以下報告する７号土坑出土の遺物も含めて第５章第１節で再考する。（大越・松本）

15 号 土 坑

遺　　構（第29図，図版18）

Ｄ－１グリッドやや西寄りで検出された土坑である。検出面は黄褐色土（Ｌ－Ⅲ）面である。プランは，東西約90㎝，南北約85㎝を測りほぼ円形を呈している。底面形も円形であるが直径は検出面よりもやや広く約１ｍを測る。従って壁面はオーバーハングして立ち上がっている。壁高は25㎝である。底面状態は平坦ではなく全体的に中央部が低くなる鍋底状である。

堆積土は５層に分層されるが，その主体は地山粒・焼土・木炭粒を含む黒褐色土である。なかでも焼土粒の混入は第３層中に多く認められた。堆積土は不規則な堆積状態を示すことから人為的に埋め戻されたと考えられる。

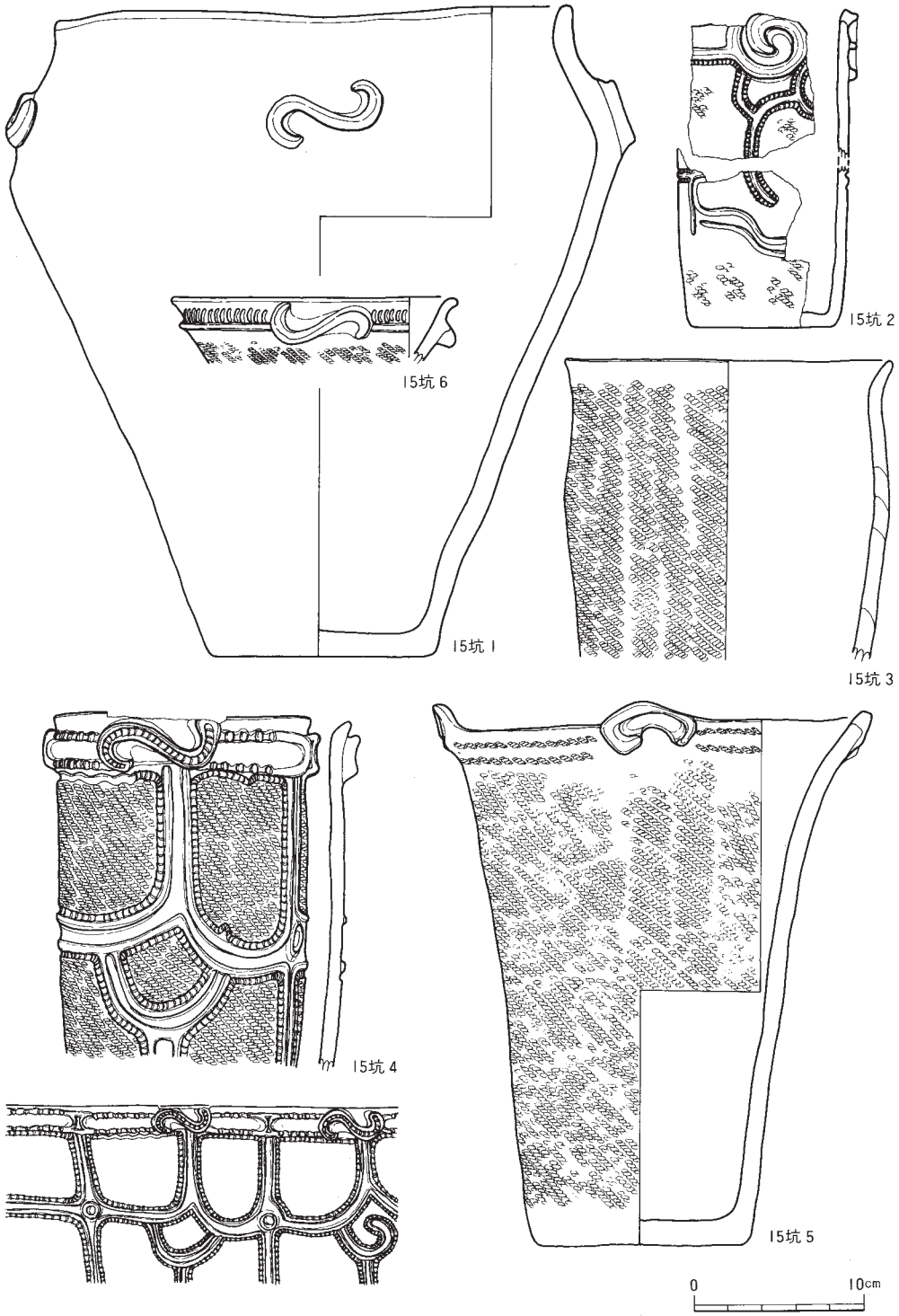
遺　　物（第48～50図，図版36・37）

本跡は当調査区で検出された土坑のなかでは最も出土遺物が多い。遺物は126片の縄文土器破片と２点のフレークである。

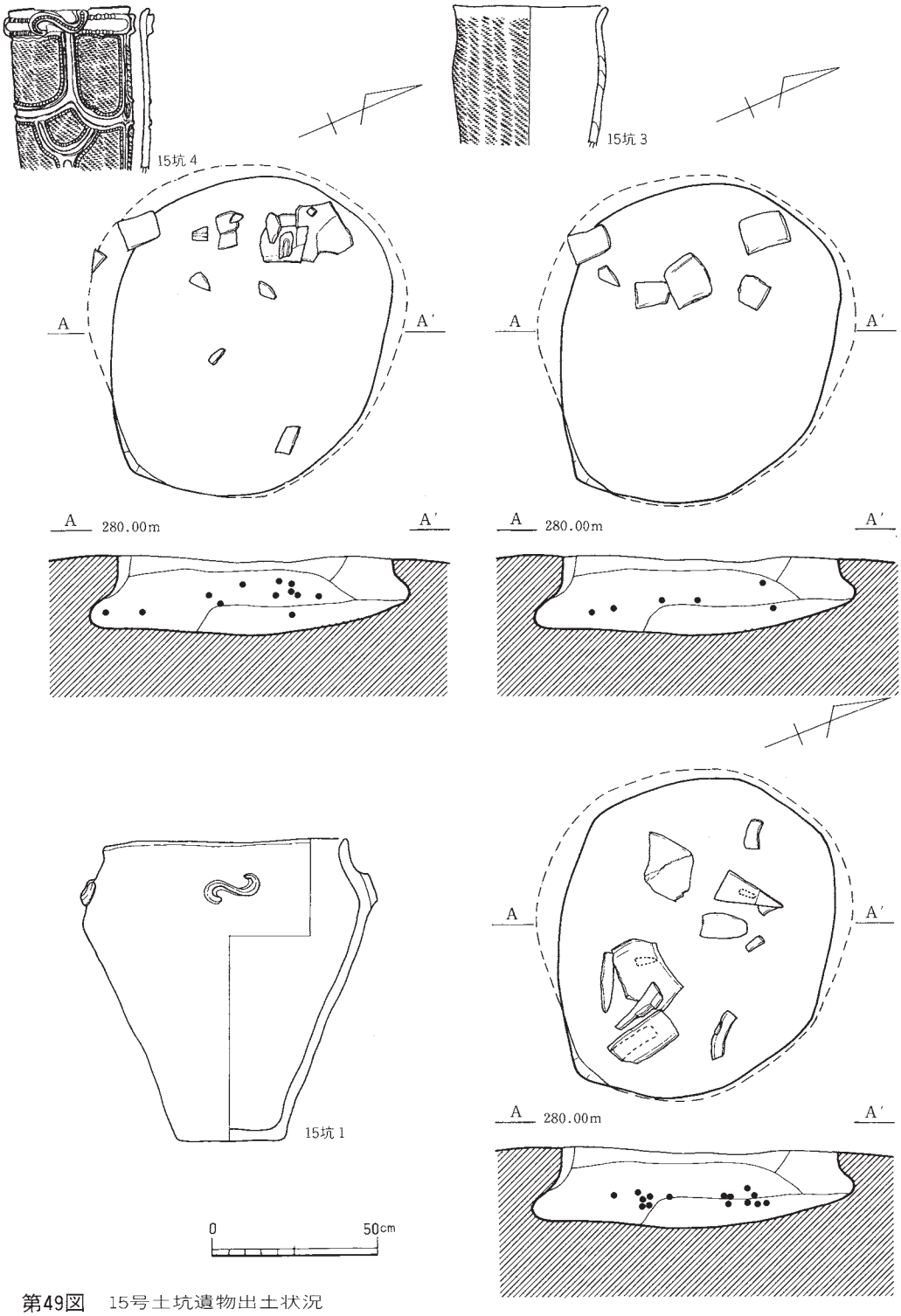
土　器　大半を占める土器破片は大型破片を含みいずれも各片が密着した状態で第２・３層中から集中して検出された。一括廃棄と考えられ，接合する破片を多く確認した。なかにはほぼ完形に近い状態まで復元したもの（15坑１・５）もある。図上復元できた遺物は総数で深鉢６個体がある。第Ⅵ群土器に比定される15坑３を除き，他はすべてⅢ群１類に含まれる土器である。

15坑１は口縁直下に横Ｓ字状の隆帯を等間隔に４個貼付する。他に文様は施されず地文も施文されないが，器面の調整痕と思われる軽い指頭圧痕が暗文風に残る。器形は，小さめの底部から胴部は外傾して開き横Ｓ字文直下付近から口縁部は強く内傾する。口唇部は短く直立している。

15坑２は小型の深鉢で円筒形を呈している。口縁部の一部と胴部が遺存している。地文は縄文



第48図　15号土坑出土縄文土器

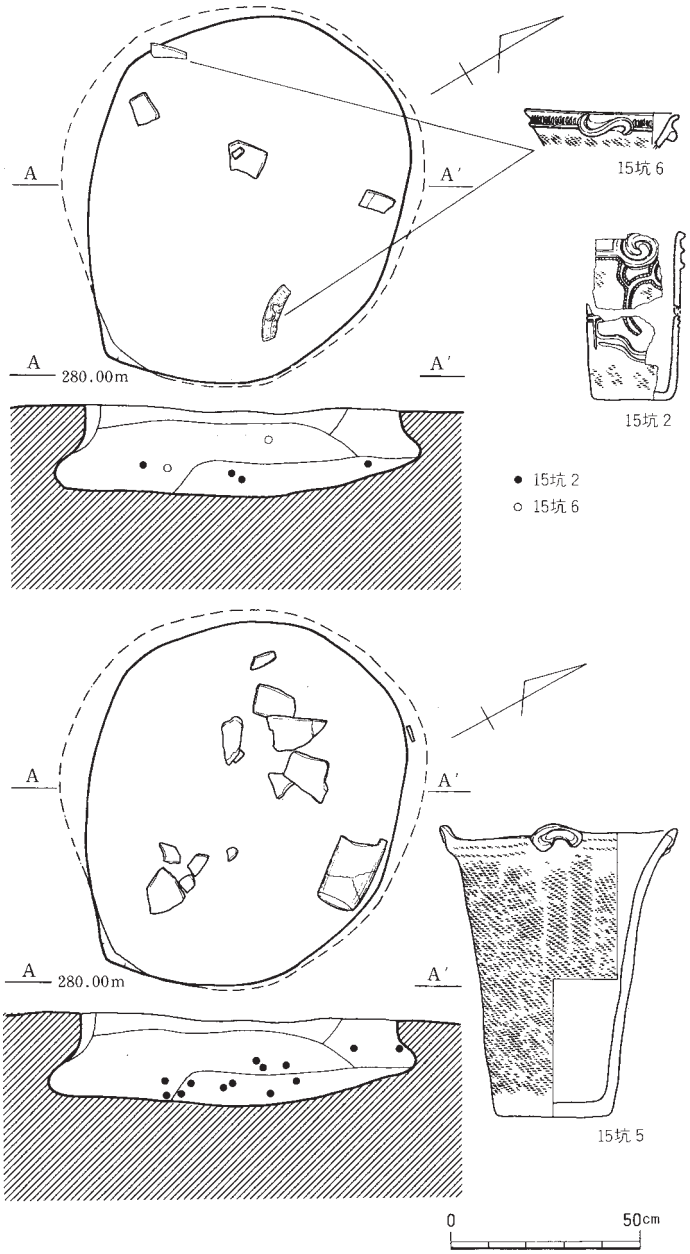


第49図　15号土坑遺物出土状況

と思われるが器面の摩滅のため僅かに認められるにすぎない。文様は，口縁部に太い隆帯による渦巻状の突起が貼付され，胴部には側縁を有節沈線で調整した隆帯によって文様を施文している。

15坑３は縄文のみが施された深鉢で加飾されない土器である。胴部下半は欠損するが口縁部はほぼ全周する。胴部上半は僅かに張りを有し，口縁部は短く緩く外反する。縄文は単節縄文（ＬＲ）を縦回転し施文している。

15坑４は円筒形の深鉢で，胴部下半を欠損している。口縁部には，太い隆帯による横Ｓ字状の突起を２個貼付している。突起の稜には有節沈線が施されている。さらに口縁部周縁は押捺が加えられた隆帯で細長い楕円文を４単位つくり出している。胴部は側縁を有節沈線によって調整された隆帯で縦に４区画，上下に二分している。各交差部は円文を付すことや隆帯の方向を一時変化させることによって区画文様にアクセントをつけている。地文は単節縄文（ＬＲ）を縦回転し施文している。



第50図　15号土坑遺物出土状況

15坑５は深鉢でほぼ完形品である。口縁には半円形の突起を４個貼付し，その間に２列の縄文原体の側面圧痕を施している。胴部は加飾されず単節縄文（ＬＲ）を縦回転した地文のみである。器形は胴部下半の立ち上がりは直線的にやや外傾するが上半は外反して幾分開く形をとる。

15坑６は口縁部の一部のみ残存するもので，隆帯による横Ｓ字状の突起を付している。破片の

状態からみて相対する位置にもうひとつ取り付くものと思われる。またこの突起を挟んで隆帯が横位に巡るが，口唇と隆帯間には深い連続した爪形の刺突を加えている。横位の隆帯以下は単節縄文（ＬＲ）を施しているのが僅かに認められる。

ま　と　め

当土坑はフラスコ型の土坑であるが，遺物は土坑底面から若干浮いた状態で検出されていることから，土坑の本来の機能が停止した後の二次的な使用と考えられる。遺物は密着集中して出土しているため一時に投棄された一括遺物と捉えられる。（阿部）

20号土坑

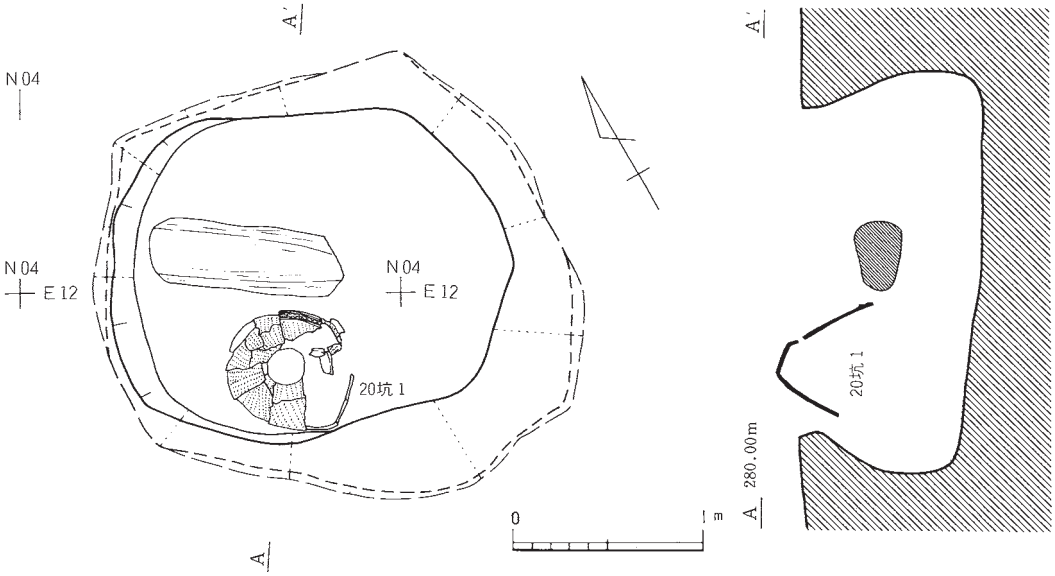
遺　　構（第30・51図，図版19）

Ｂ－２グリッドに検出されたフラスコ状を呈する土坑である。確認面でのプランは不整円形で径約90cmを測る。底面径は120cmで確認面での直径より広い。そのため壁面は全体にオーバーハングするが，最大径は底面から約20cm上位の部分にあり130cmを測る。検出面から底面までの深さは47cmで，底面はほぼ平坦である。

堆積土は３層に分層しえた。大きくは土坑底面を薄く覆う自然堆積層（ℓ－３）と，黄色土ブロックの混入度合によって２層に細分される人為堆積層（ℓ－１・２）とに分けられる。

遺　　物（第52図，図版37）

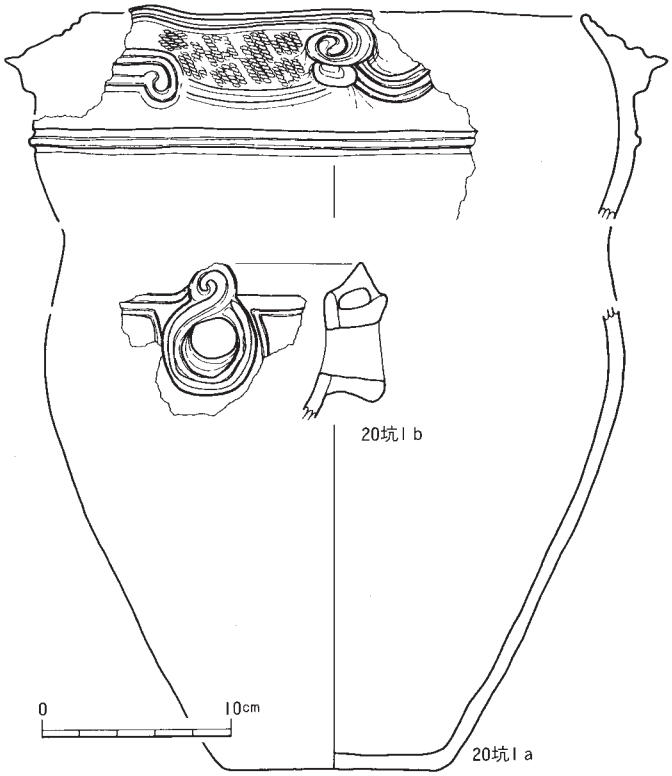
人工遺物として完形に近い縄文土器１点，自然遺物として柱状の石が検出されている。出土層



第51図　20号土坑

位はいずれも第２層中からの出土である。

20坑１は倒立状態で出土した。出土時には胴下半部が一部欠損していたのみであるが，現況では風化が著しく器形・文様が僅かにうかがえる程度である。器形は胴上部が若干括れる深鉢と考えられる。文様は口縁部に集中する。側縁を沈線で調整した隆帯により波状の単位文様が施される。単位文様の末端は渦巻状の突起となる。地文は単節縄文（ＬＲ）が施文される。20坑１ｂは突起の部分と思われるが，中央部には内外面を通じた径約３cmの孔があけられている。接合しないが20坑１ａと同一個体の破片と考えられる。



第52図　20号土坑出土縄文土器

柱状の自然石は，長さ50cm，幅15cm，重さ18kgを測る。加工や使用の痕跡は認められない。石質は緑色片岩である。

ま　と　め

本跡はフラスコ形の土坑で，堆積土や遺物出土状況から次の順が想定される。土坑の構築→使用→第３層堆積→使用停止→第１次埋め戻し（第２層堆積）→土器・自然石設置→第２次埋め戻し（第１層堆積）の過程である。使用後の埋め戻しは，土器・自然石の設置を目的とした可能性が強く，一連の作業として短時間に行われたものと思われる。遺物の埋置状態から土坑の最終的使用目的は前述した埋甕に近似する性格が与えられる。20坑１は第Ⅴ群土器に比定される。（松本）

38 号 土 坑

遺　　構（第34図，図版21）

Ｄ－４グリッドに検出された土坑で，暗茶褐色土（Ｌ－Ⅲ）面で確認された。プランは東西1.14m南北１ｍを測るやや不整の円形を呈している。底面はほぼ平坦で，壁は60～80度の傾斜角で立

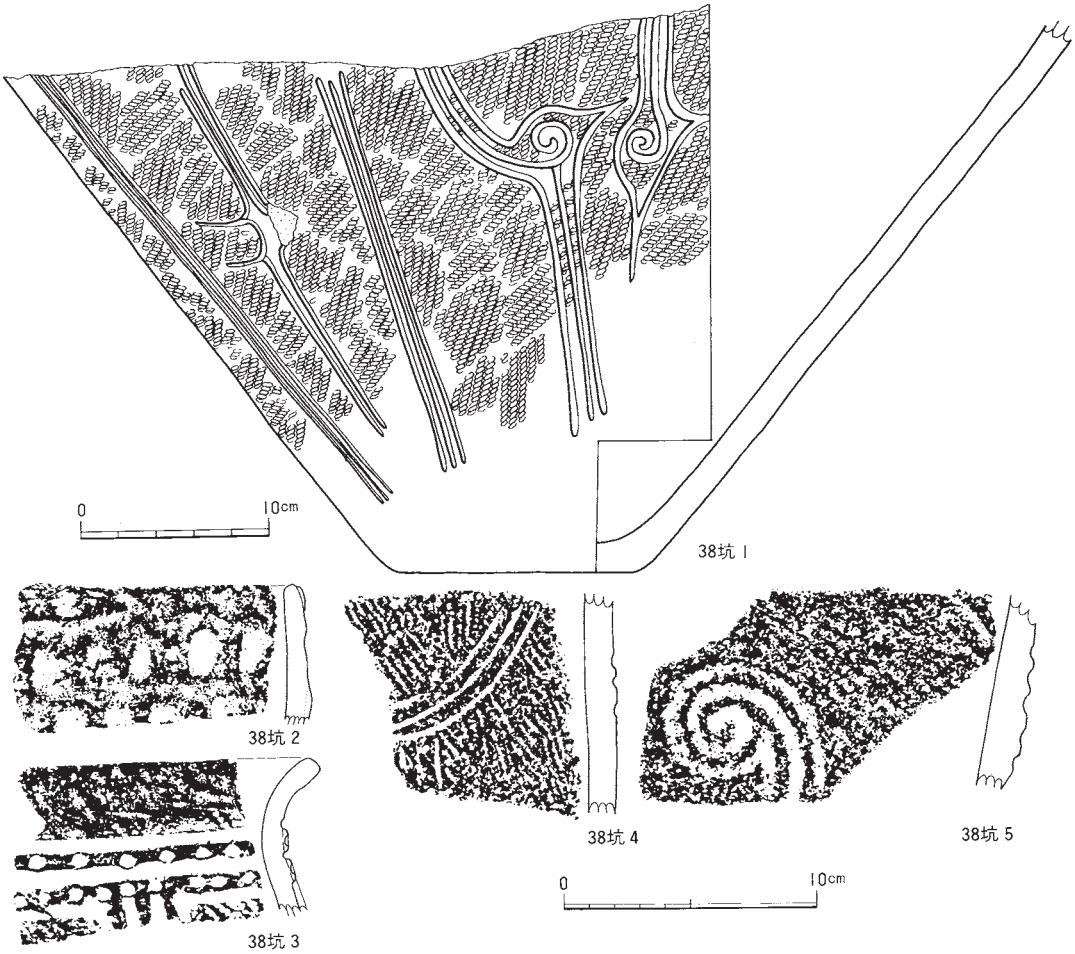
ち上がるが，若干南壁の立ち上がりが緩い。検出面から底面までの深さは23cmを測る。

堆積土は６層に細分されたが，主体は木炭粒を混入した茶褐色砂質土で，壁際底面付近には地山の粘質土を多く混入した土層が観察された。恐らくは流れ込みによる自然堆積と思われる。

遺　　物（第53～55図，図版37）

遺物は主に堆積土第１・２層中から出土している。縄文土器破片・石鏃・磨石が検出されたが他に凝灰岩質の自然石も入り込んでいる。

土　器　図示できたのは５片である。第Ⅶ群土器に比定される38坑２を除き，他の４片は第Ⅴ群土器の範疇で考えられる。すべて深鉢の破片と思われるが，38坑１は胴下半の開きが大きく断定できない。文様は両側縁を沈線で調整した隆帯によって構成される。38坑１，38坑５は，隆帯と沈線によって渦巻文が表出されるが，38坑１では渦巻の一部が突出する。38坑４は他に比較し沈線幅が狭く，38坑３では横位の隆帯上に円形の刺突が施されている。



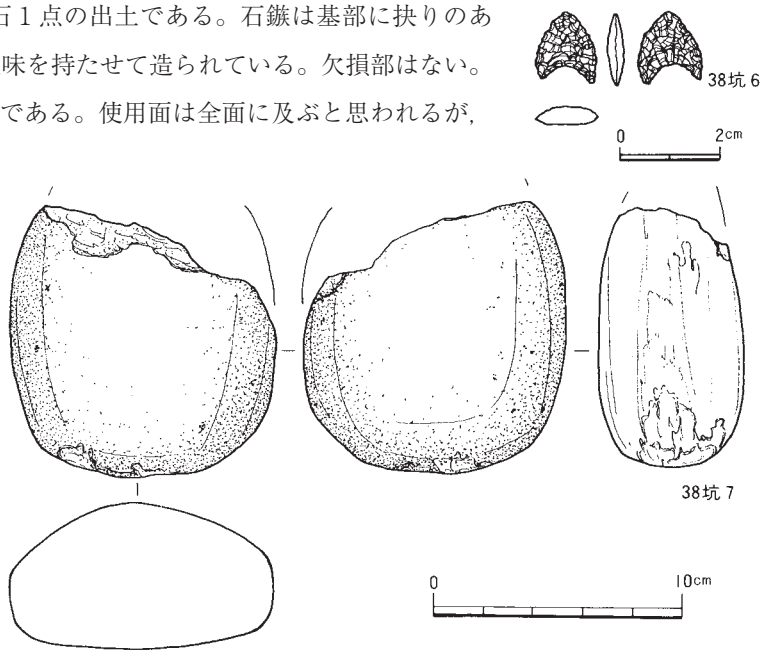
第53図　38号土坑出土縄文土器

石　　器　石鏃１点，磨石１点の出土である。石鏃は基部に抉りのある小型の鏃で，両側縁は丸味を持たせて造られている。欠損部はない。

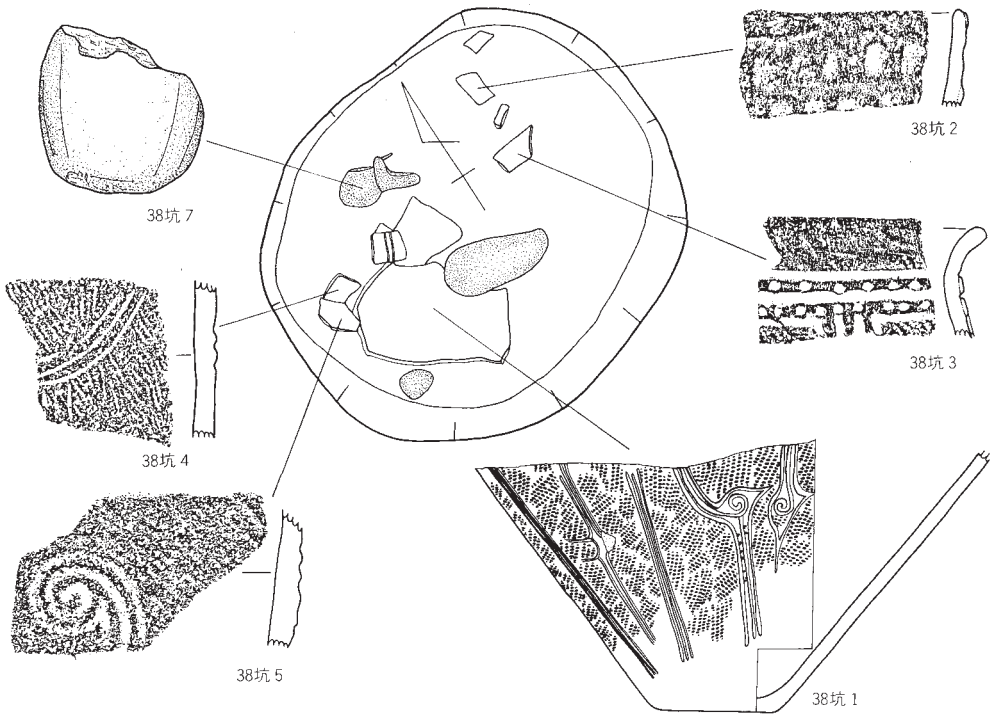
磨石は約⅓を欠く欠損品である。使用面は全面に及ぶと思われるが，凹石として使用された形跡はない。

ま　と　め

当土坑は円形に近い形をとるものの，15号や20号土坑とは壁面の状態から区別される。堆積土は自然の流れ込みの状況を示しているが，遺物は38坑１のような大型破片も検出されていることから，土



第54図　38号土坑出土石器



第55図　38号土坑遺物出土状況

坑内に堆積土が流入するある段階で投棄された可能性が強い。恐らくそれは壁面の一部が崩落し第１・２層が堆積する間と思われる。従って土坑の時期は第Ⅴ群土器をもって上限とするが，若干遡る可能性もないわけではない。（大越）

39 号 土 坑

遺　　構（第34図，図版21）

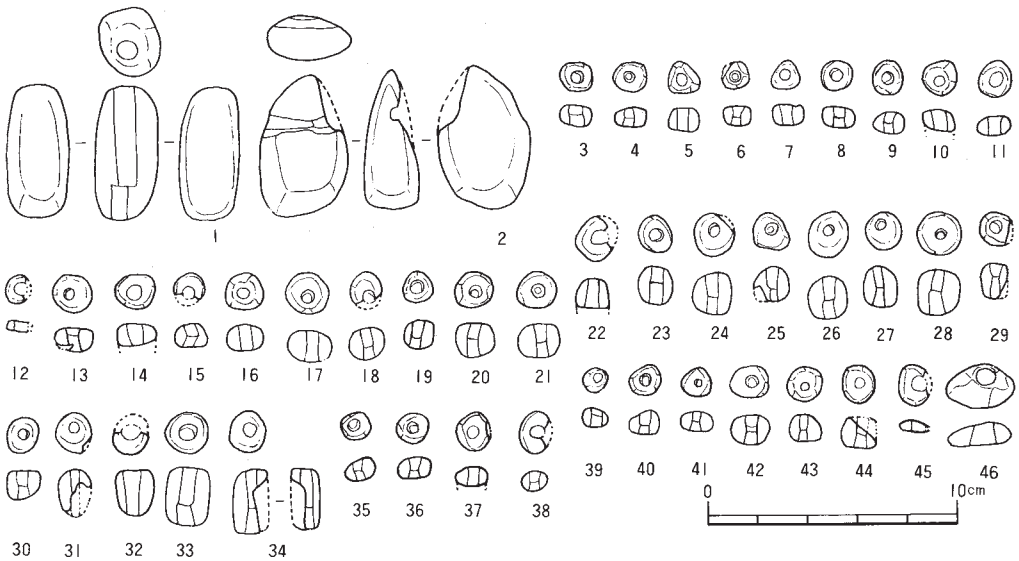
Ｄ－４グリッド北東寄りに検出された土坑で，検出面は暗茶褐色土（Ｌ－Ⅲ）である。長径120cm，短径85cmの楕円形のプランで，検出面からの深さは15cmを測る。底面はほぼ平坦であるが，壁面の立ち上がりはやや急である。

堆積土は，褐色土と黄色土の混合土である。特に中央部では黄色土がブロック状に混入している。堆積状況や遺物の出土状況からみて，人為的に埋め戻されたと判断される。

遺　　物（第56・57図，図版79）

検出された遺物は琥珀製の玉のみである。総数は欠損品もあることから正確な玉数は把握できないが，概数では50余点と思われる。そのうち図化しえたものは46点である。玉は土坑南半のやや東側寄りに集中して検出されたが，出土地点が明らかなものは34点（39坑１～34）である。

39坑１・２は比較的大きめの玉で，土坑底面上３～５cmから出土した。39坑１は，幅1.2cm，高さ2.7cm，孔径0.4cmを測る。断面はやや楕円形を帯び，側面中央で僅かに膨らんでいる。側面には弱い稜線が観察される。孔は二方向から穿孔されているが，貫通点ではずれが生じ段差となっている。孔の断面は方形に近い。



第56図　39号土坑出土琥珀玉

39坑２は，幅1.7cm，高さ2.8cm，孔径0.3cmを測る全体的にやや扁平な玉である。穿孔は二方向穿孔によるが，他の玉とは異なり側面から孔が穿たれている。側面には面取りの痕跡と思われる稜線が残る。

39坑46は臼玉に近い扁平の玉である。一方向からの穿孔によるが，孔径0.5cmを測り最大の孔径値を示す。幅1.3cm，高さ0.4cmである。

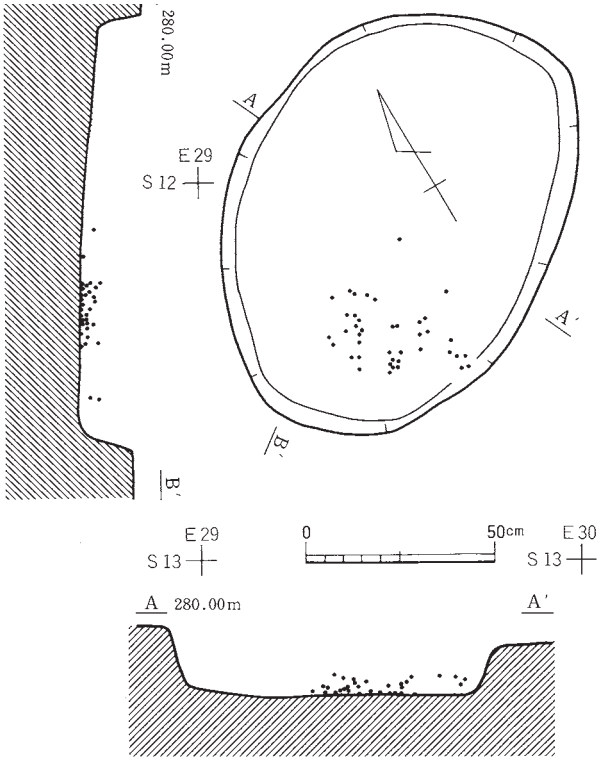
第16表　39号土坑出土琥珀玉計測表（cm）

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
幅	1.2	1.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.8	0.8	0.6	0.7
高	2.7	2.8	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	0.5	－	0.5	0.5
孔径	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2
番号	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
幅	0.9	0.7	0.6	0.8	0.8	0.9	0.7	0.8	0.7	0.9	0.7	0.8	0.6	0.7	0.7	0.8
高	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	－	0.8	0.8	0.7	0.9	0.8	0.9	0.7	0.6	－	0.9
孔径	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.4
番号	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46		
幅	0.9	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	0.5	0.6	0.6	0.8	0.7	0.7	0.8	1.3		
高	1.2	1.3	0.4	0.4	－	0.4	0.4	0.5	0.4	0.6	0.5	0.6	0.2	0.4		
孔径	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.5		

39坑１，39坑２，39坑46を除く43点は，いずれも断面円形ないし楕円形である。形態的に39坑３，39坑４のように臼玉状を呈するものや，39坑33，39坑34のように管玉状を呈するものに分けられる。穿孔方向の多くは二方向からのものが多く平均孔径値は0.2～0.3cmである。

ま　と　め

本跡は堆積土や琥珀玉の出土状況から墓坑の可能性も考えられる土坑のひとつである。時期については土器片の伴出がないため明らかでない。（阿部）

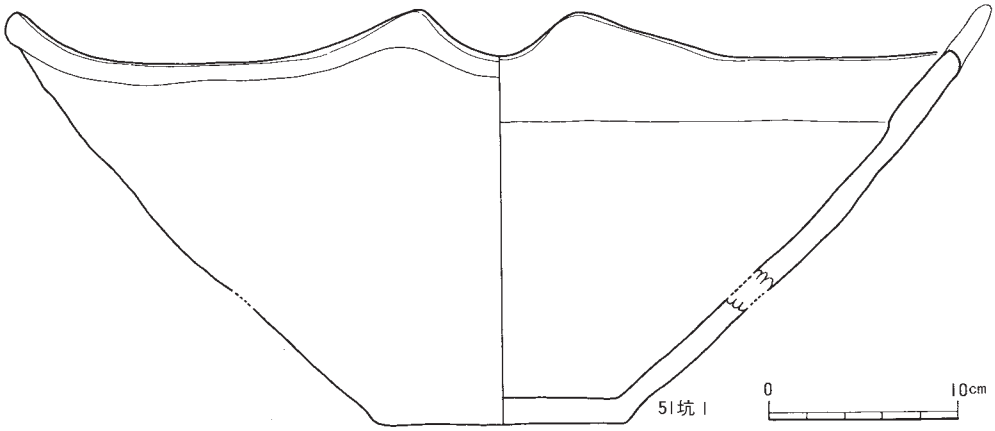


第57図　39号土坑琥珀玉出土状況

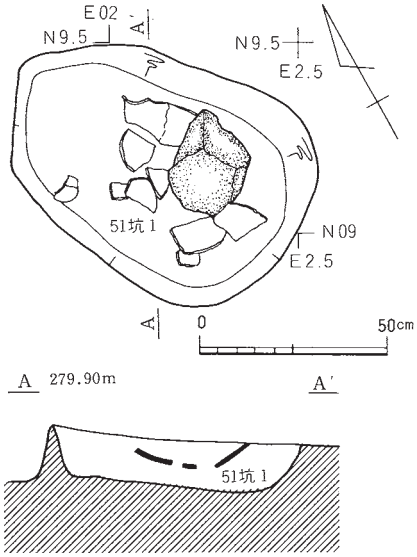
51号土坑

遺　　構（第36図，図版22）

Ｂ－２グリッドに検出された土坑で，重複関係にある９号住居跡よりも新しい。長径85cm，短径56cmを測る平面不整楕円形を呈している。底面はほぼ水平で，壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは18cmを測る。



第58図　51号土坑出土縄文土器



第59図　51号土坑遺物出土状況

堆積土は黄色土（L－Ⅳ）の混入度合から３層に分層した。各層とも黄色土をブロック状に混入しており人為堆積と考えられる。

遺　　物（第58・59図）

遺物は浅鉢の大型破片と人頭大の自然石が検出されている。出土層位は堆積土第２層上面で，破片上位に自然石が密着している。浅鉢は，波状口縁を呈し大きく４単位構成となっている。口縁部内面にはほぼ水平な稜が巡っている。器面に文様は施文されない。

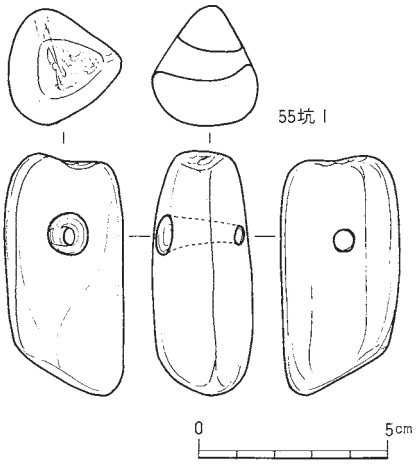
ま　と　め

本跡は人為的に埋め戻されたと判断されるが，その際浅鉢の大型破片と自然石とを埋置したと考えられる。この他にも３例ほど自然石と大型破片の出土した土坑があるのでそれらを含めたうえで第５章第１節で土坑の機能等については再考したい。　（松本）

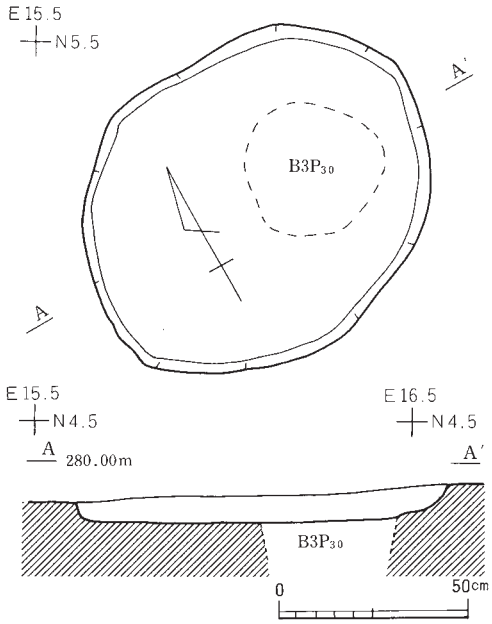
55 号 土 坑

遺　　構（第37・61図，図版22）

調査区北斜面Ｂ－３グリッドに検出された土坑である。長径103cm，短径83cmの楕円形を呈している。深さは約10cmを測る。堆積土は木炭粒を含む暗茶褐色砂質土の１層のみしか確認しえなかった。人為堆積が自然堆積かの別は判然としない。底面にＢ３P_{30}が検出されているが，このピットは本跡掘り上げてから検出したもので，土坑よりも古く直接の関係はないと思われる。



第60図　55号土坑出土大珠



第61図　55号土坑

遺　　物（第60図，図版78）

堆積土内から大珠が１点検出されている。形状は三角柱にやや近い形態を呈し，側面の三面は平滑に仕上げられている。孔は中央からやや一方に片寄り穿孔され，穿孔方向は彎曲している。長さ6.4cm，幅2.6cm，孔径は最大で1.1cmを測る。石質はヒスイキ石と思われる。

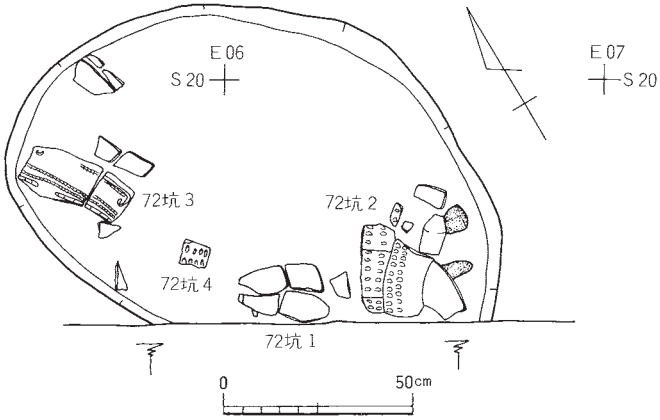
ま　と　め

本跡からは大株１点が検出されている。出土状況は埋土の堆積状況が不明のため判然としない。大珠は調査区内で唯一の遺物であり，またヒスイキ石の産地が周辺では考えられないことから，大きな意義を含んでいるものと思われる。（大越）

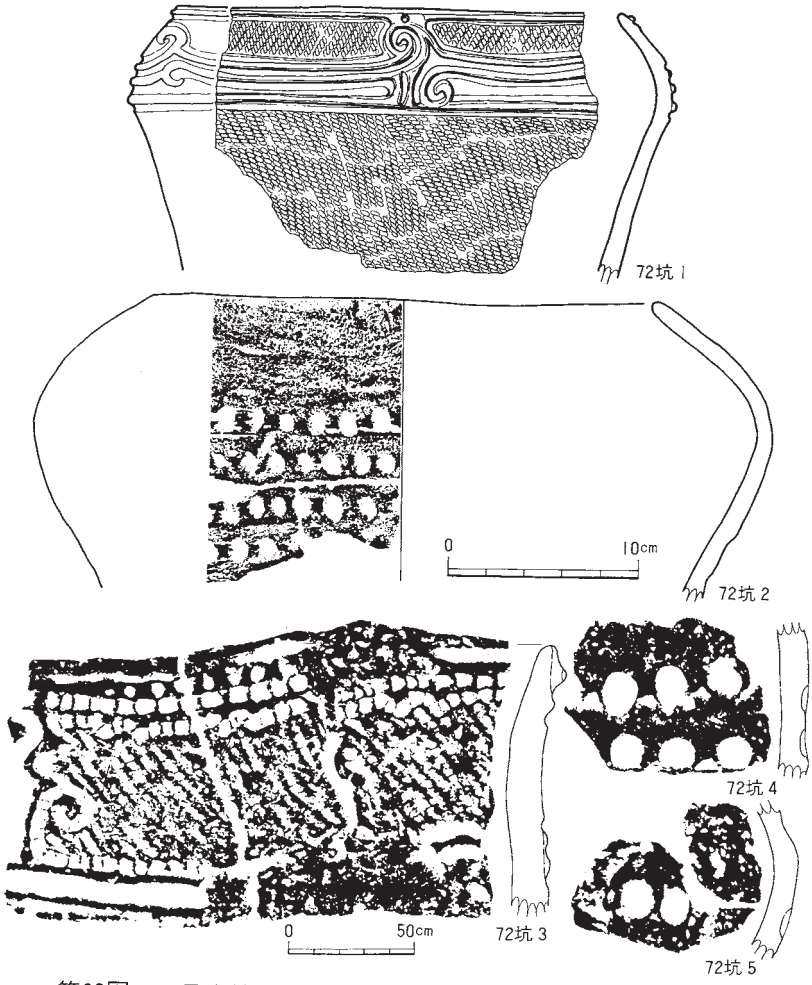
72 号 土 坑

遺　　構（第39・62図，図版23）

Ｅ－２グリッドの南端，黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）地山面で検出された土坑である。重複関係にある２号竪穴状遺構よりも新しい。上部の削平が著しく，土坑南端は開田時にけずられすでにない。プランは，長径135cm以上，短径95cmの楕円形を呈すると思われる。検出面



第62図　72号土坑



第63図　72号土坑出土縄文土器

からの深さは最大18cmを測るが，概ね10～15cm程度である。壁面の立ち上がりは比較的急峻である。底面は南に向かってやや傾斜している。堆積土は，黄褐色土地山粒子を混入した黒褐色土の自然堆積層である。

遺　　物（第63図，図版37・38）

検出された遺物の総数は37点である。このうち32点が縄文土器破片で，他はチップやフレーク類である。遺物の大半は土坑底面上５～10cmの壁面付近から出土している。復元して完形品になるような遺物は含まれていない。

72坑１は南端から出土したキャリパー型の深鉢の破片で第Ⅴ群土器に比定される。口縁部から胴部にかかる部分が遺存している。口縁部文様帯は側縁を沈線で調整した隆帯によって表出され，単位文様を構成していると思われる。区画間の隆帯は末端を渦巻状にあしらい，その渦巻と口唇間には円形の刺突を加えている。胴部は単節縄文（ＬＲ）を施し地文としている。

72坑２は東壁寄りで出土した深鉢の破片で，口縁部の約⅓が遺存している。付近から出土した72坑４，72坑５と同一個体と思われる。口縁部が強く内彎する器形で，器面には粘土紐の積み上げ痕跡を明瞭に残している。外面の粘土紐上には口縁部以下に指頭による横捺をほぼ等間隔に施している。第Ⅶ群土器に比定される。

72坑３は西壁寄りで出土した深鉢の口縁部破片で，第Ⅱ群土器に比定される土器である。全体にゆるい破状口縁を呈すると思われる。文様は，口唇直下に棒状工具によるとみられる押捺が加

えられた隆帯を貼り付け，下部に二条の有節沈線を巡らせている。口唇直下の隆帯からさらに途中でフックする隆帯を垂下させ下段の横位に巡る隆帯に繋いでいる。この垂下する隆帯の側線は有節沈線が付帯するものと，単なるナデ調整とのものがある。付帯される有節沈線は中間で渦巻状を呈している。

ま　と　め

出土した土器片は37点を数えるが，埋土は自然堆積で遺物も大半は流れ込んだものと考えられる。従って土坑は最終時まで開口して使用されたと思われ，土坑の時期は遺物のなかで新しい要素をもつ第Ⅴ群土器の時期が上限として想定される。（阿部）

第７節　遺物包含層

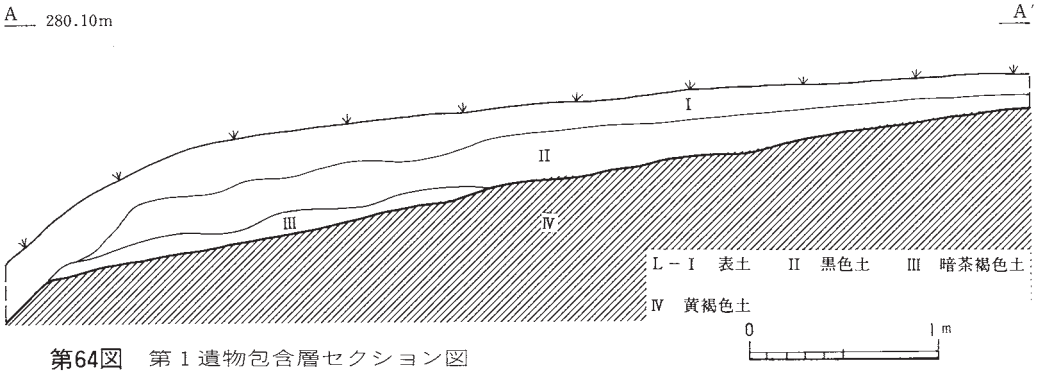
調査区内では包含層が４ケ所検出されている。いずれも南北両斜面の窪地に形成されている。第１包含層は北斜面（Ａ－３・４グリッド）に，第２包含層は南斜面東側（Ｄ－５・６グリッド）に，第３包含層は南斜面西側（Ｄ－２グリッド），第４包含層は北斜面西側（Ａ－１グリッド）にそれぞれ広がりを持つ。遺物の出土量は，第２・第３包含層に比較し第１包含層の出土量が圧倒的に多い。

以下各包含層を番号順に記載するが，土器は群別に，石器は種類によって分類しとりまとめた。

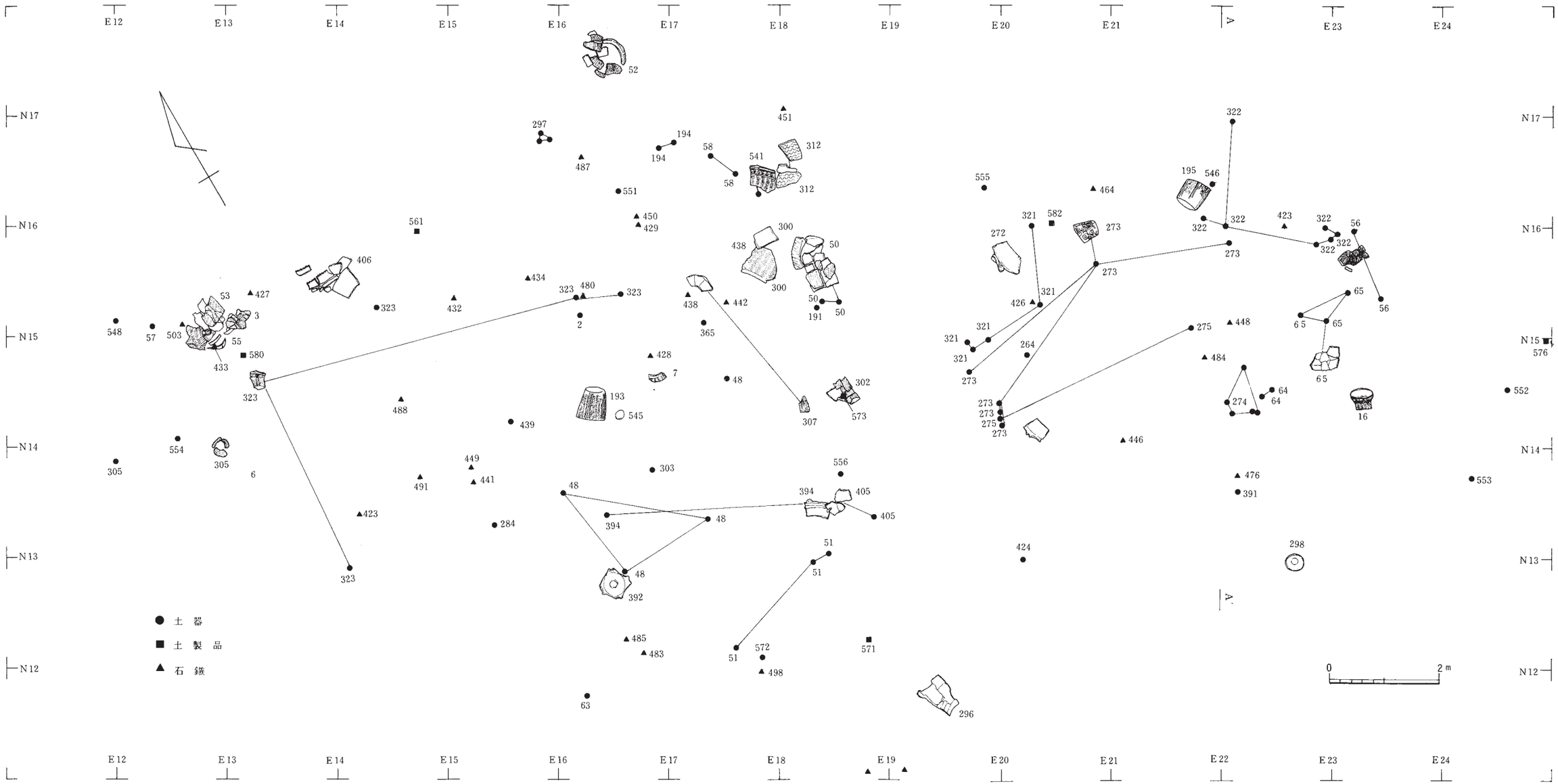
第１遺物包含層

遺　　構（第64図・付図，図版26）

北斜面Ａ－３・４グリッドに検出された包含層である。範囲は東西約12m，南北約７ｍを測る。この範囲はごく浅く全体的に窪んでおり，基本層位第Ⅱ層である有機質の黒色土が南方斜面上位から流れ込み，北側斜面下位にいくにつれ層厚を増している。この浅く窪んだ部分を第Ⅱ層が堆積していく段階で投棄の場に利用したものと思われる。遺物包含層の北縁は開析谷の水田化によりすでに削られ往時の状況を保ってはいない。



第64図　第１遺物包含層セクション図



第65図　第1遺物包含層遺物出土状況

第Ⅱ層黒色土の最大層厚は北側斜面下位で約30㎝を測るが黒色土自体の細分は不可能であった。遺物は黒色土の中位から下位にかけ集中して包含されているが，上位における遺物包含密度は希薄である。斜面下方に薄く堆積する茶褐色土（Ｌ－Ⅲ）層は無遺物層となる。

遺　　物（第65図）

出土遺物には人工遺物として小型土器やミニチュア土器を含む縄文土器，土偶等の土製品，石鏃を初めとする石器，フレーク・チップ類がある。この他に自然遺物として炭化した堅果類，骨片，人頭大の自然石が出土している。

これらの遺物の大半は縄文土器片が占めるが，多くは破片状態で出土している。なかには同個体の破片が一ケ所にまとまって出土した例もあるが，復元しえても個体の½程度の遺存率であるものがほとんどであった。以下各遺物について説明を加えることとするが，土器は第１節で分類した各土器群ごとに述べることとする。

〔縄文土器〕（第66～99図，図版38～44・46・48～62）

Ⅰ群土器　口縁部に縄文原体の側面圧痕文が横位に施文された土器を一括した。器種の主体は深鉢で，他に小型鉢（１包７・８・27・28）が僅かに認められる。口縁部の形態は，外反ないし外傾気味に立ち上がり，波状になるものと平縁のものがある。

施文される文様は比較的単純で口縁部に縄文原体の側面圧痕を横位に数条，胴部は地文として縄文が施されたものが多い。１包１～３・13・18・29・30の口縁部は棒状の隆帯を縦位に貼り付けることによって区画されている。これらの土器は口縁部下端を全周する隆帯によって，口縁部と胴部が区画される例が多い。１包６・８は口唇部の一部が突起状を呈している。

胴部は地文のみのもの，隆帯を懸垂させ胴部を区画するもの（１包１・３・４・29・36～38・40～42），縦に綾絡文の施されるもの，垂下した隆帯間を繋ぐように沈線が施されるものがあり，これらの文様が複合して同一個体に施された例も顕著である。垂下する隆帯は断面が三角形で，側縁はナデ調整が加えられたものが多い。口縁部と胴部を区画する横位の隆帯との接点ではＹ字状を呈するものがある。地文の多くは単節縄文（ＬＲ）が施されるが，他に１包６のように無節の縄文（Ｌ）や，１包３のように撚りの異なる原体（ＬＲ・ＲＬ）を交互に施した例もある。いずれの例でも原体の回転方向は縦方向である。

１包４・20・27・28は側面圧痕文が施されないが，Ｙ字状の隆帯（１包４・27・28），口唇部の一部が突起状を呈する（１包20・28）ことから本群に含めた土器である。

Ⅱ群土器　細い隆帯と有節沈線によって文様の表出された土器を本群とした。器種には深鉢と浅鉢が認められるが，浅鉢は小型のものである。この他に台部の破片と思われるものがあるが，全体的な器形は不明である。深鉢では所謂キャリパー型を呈するもの（Ａ）と，丸味を帯び胴部上半に最大径を有すもの（Ｂ）がある。いずれも緩い波状になる口縁が主体を占めるが，Ａでは口唇部が

短く外傾する。口縁上にはＳ字状やブリッジ状の突起・把手が付されるもの（１包49・53・57・65～87)が多いが，Ｓ字状のモチーフは正面からは観取できず，裏面あるいは上面から見ることによって初めてＳ字と認められるものである。１包57は外面では人面状の突起であるが，内面ではＳ字状のモチーフを構成している。

口縁部文様は，隆帯や有節沈線等によって表出されるが，比較的単純な文様しか構成しない口唇直下の部分と，最大径を有す口縁部中位やや上方から胴部に接続する括れ部までの間で文様展開が複雑化する部分の二つに区分してみることが可能である。特に口縁部が広いＡの深鉢がこの傾向を強く示すが，稀にＢの深鉢（１包48）でもみられる場合がある。上位の口縁部文様帯では，口縁に沿って有節沈線が１列あるいは数列横位に施文されるもの（１包49・50・53・57），同じく有節沈線で細長い楕円形の文様を表出しているもの（１包48・49），口縁に沿って１列の縄文原体の側面圧痕を施し極めて緩い波状の頂点から縦に隆帯を貼り付けたもの（１包51）がある。下位の口縁部文様帯では隆帯と有節沈線によって数種のモチーフが表出される。多くは隆帯の側縁に有節沈線が沿う形をとるが，有節沈線が独自で文様を構成する場合もある。構成される文様としては，楕円形状の区画文が配されるもの（１包48・57），連弧状・渦巻状の文様が複合して表出されるもの（１包49・50・52・54），両者が併用されるもの（１包51）等がある。

胴部文様は口縁部文様帯同様隆帯と有節沈線によって施文されている。隆帯は口縁部文様帯から直線的に下降するものと，下降する隆帯から横方向や斜方向に派生するものとがある。有節沈線は隆帯に沿って施されることが多いが，口縁部文様帯同様隆帯から分離し独自に文様を構成する場合がある。当然垂下する隆帯の側縁にも有節沈線が施されるが，この場合は胴部上半に顕著に認められるのみで胴部下半では単なる沈線もしくはナデ調整と化しているものが多い。胴部全体の文様を大きくみれば，垂下する隆帯によって胴部をいくつかに分割しさらに分割した区画間内に文様を展開させる傾向がうかがえる。区画間の文様は弧線文を連続させ，垂下する隆帯間を繋いでいく手法が１包48・49・53で観察できる。破片で部分的な文様からの推定になるが，１包136・183・185・186・188も同様な手法と思われる。この弧線文のなかには場合によって渦巻状になるものも認められる。これら区画間内文様は加飾の度合が比較的簡素なものと，加飾の度合が強くなるものとがあるが，相対的に施文が簡素であれば垂下する隆帯に視点が奪われ隆帯が際立ってくる。逆に加飾の度合が強く量感あれば垂下する隆帯を含めて胴部文様が全般的な文様となり視点がフラットになる傾向が強い。後者のなかには胴部が縦に分割されず文様が展開される土器（１包53）もある。

地文は単節縄文（ＬＲ）が施されるものが圧倒的に多い。他に綾絡文が付されるもの（１包48・49・52・58・59・132・133・149）と，撚りの異なる単節縄文が交互に施文されたもの（１包95・168）がある。縄文原体の回転方向は基本的にすべて縦回転である。

１包66・88～93は有節沈線が施されることから本群としたが，１包88・90～92は，器種や隆帯のあり方ではⅠ群土器に近似している。１包177・180・184・189・190は縦の隆帯が貼り付けられた深鉢の胴部破片である。綾絡文が施されないことから本群に含めたが，Ⅰ群土器にも綾絡文が施されない例もあり，Ⅰ群土器に属する可能性も残している。１包177・178は側縁に沈線が沿う隆帯により文様の表出された胴部破片であるが，１包152・156のモチーフと共通するためここではⅡ群土器のなかで捉えておく。

Ⅲ群土器　口縁部に太い隆帯による加飾が加えられた土器を本群とした。本群は先述したように３分類される。

＜１類＞　口縁直下に太い隆帯の貼り付けられるものを一括した。

器形は比較的単純で口縁部が外傾気味に開く深鉢が主体を占める。他に数少ないがキャリパー型深鉢になると思われる口縁部破片が２点（１包232・240）ある。口縁は全て平縁で，大振りなＳ字状の突起が付される例（１包191・196・198～200・202～212・217）が顕著である。この場合の「Ｓ」はⅡ群土器に加飾される「Ｓ」とは異なり，正面から「Ｓ」と観取できるものである。突起は内外面に有節沈線や沈線が施される。

文様は口縁下端に沈線を数本全周させて口縁部と胴部とを区画するもの（１包192・198・199・200・202・209・228・229）と，口縁部・胴部が区画されないもの（１包191）がある。口縁部文様は口唇直下に集中する傾向があり，太い隆帯を１本（１包191・196・197・209～211・213・215～217・233・235・241），または２本（１包206・208・219・221・225・227・234）口唇に沿って施している。口唇部に付される隆帯上には押捺が加えられる例が多い。なかには１包215・216・233～235のように隆帯が小波状を呈するものもある。隆帯以外の文様要素は変化に富み，横位・弧状に施された沈線（１包198・202・209・217），縦位に短く引かれた沈線がほぼ等間隔で横列に並ぶ（単沈線）もの（１包197・208・211・213），横位・縦位に施された縄文原体の側面圧痕（１包209・215・216）や有節沈線（１包192・214・228・229）等が用いられている。

胴部文様は口縁部文様に比較し未発達である。文様は隆帯・有節沈線・沈線等によって表出されるが，１包172～174の文様では上位から垂れ下がる文様が主流で一部弧状や蛇行させている部分がある。また上記の文様が施文されない縄文の地文のみのもの（１包191），無文のもの（１包197・199）も混在している。地文には縦方向に回転させた単節縄文が多用される。

＜２類＞　頸部文様帯のある土器を本類とした。

２点あげられる。１包264はキャリパー型の深鉢で，口縁部に隆帯と沈線で楕円区画文を配し口唇上に飛び出す形で横Ｓ字状の突起が１個付されている。頸部には隆帯による小波状文が施されているが，隆帯の側縁は調整されず貼り付けた痕跡をそのまま残している。胴部は縦方向の回転による単節縄文（ＬＲ）の地文のみである。

１包265は口縁部に貼り付け痕を残す隆帯によって文様が表出されていることから本類に含めてある。

＜３類＞　太い隆帯による中空状の把手を有するものを一括した。

器形を窺えるものは少ないが，口縁部が外傾する深鉢と，キャリパー型の深鉢がある。突起の形状は，眼鏡状を呈するもの（１包257・271），横Ｈ字状のもの（１包244～250），ブリッジ状のもの（１包266・269）がある。把手上には沈線や細い隆帯によって加飾されている。

この他，太い隆帯による円形状の貼り付けが突起風になるもの（１包260～262・270）も文様化する隆帯とは異質なため３類に含めて考えた。

Ⅳ群土器　沈線による加飾が多用される土器を本群とし，地文の有無でさらに２類に細分した。

＜１類＞　地文に縄文が施文されない土器を本類とした。１包272・286・287が本類に入る。

１包272は口縁部が内彎する深鉢で，人面を思わせる大型把手が口縁に付されている。文様は半肉彫り的な鋭い平行沈線が密に施文され，把手直下には隆帯と平行沈線による渦巻文が表出されている。

＜２類＞　地文に縄文が施文される土器を本類とした。１包273～285，288が本類に入る。沈線には，幅狭く鋭いもの（１包274・275・277～280・284・285）と，幅広く断面が丸味を帯びたもの（１包273・276・281・282）がある。この沈線によって表出される文様は渦巻文が多いが，他に短く連続しない沈線で，横位・縦位・弧状等に描くこともある。１包274では平行沈線がクランク状に施文されている。１包281・282は口唇下に隆帯による文様が集中し，あるいはⅢ群土器に含まれる可能性もある。

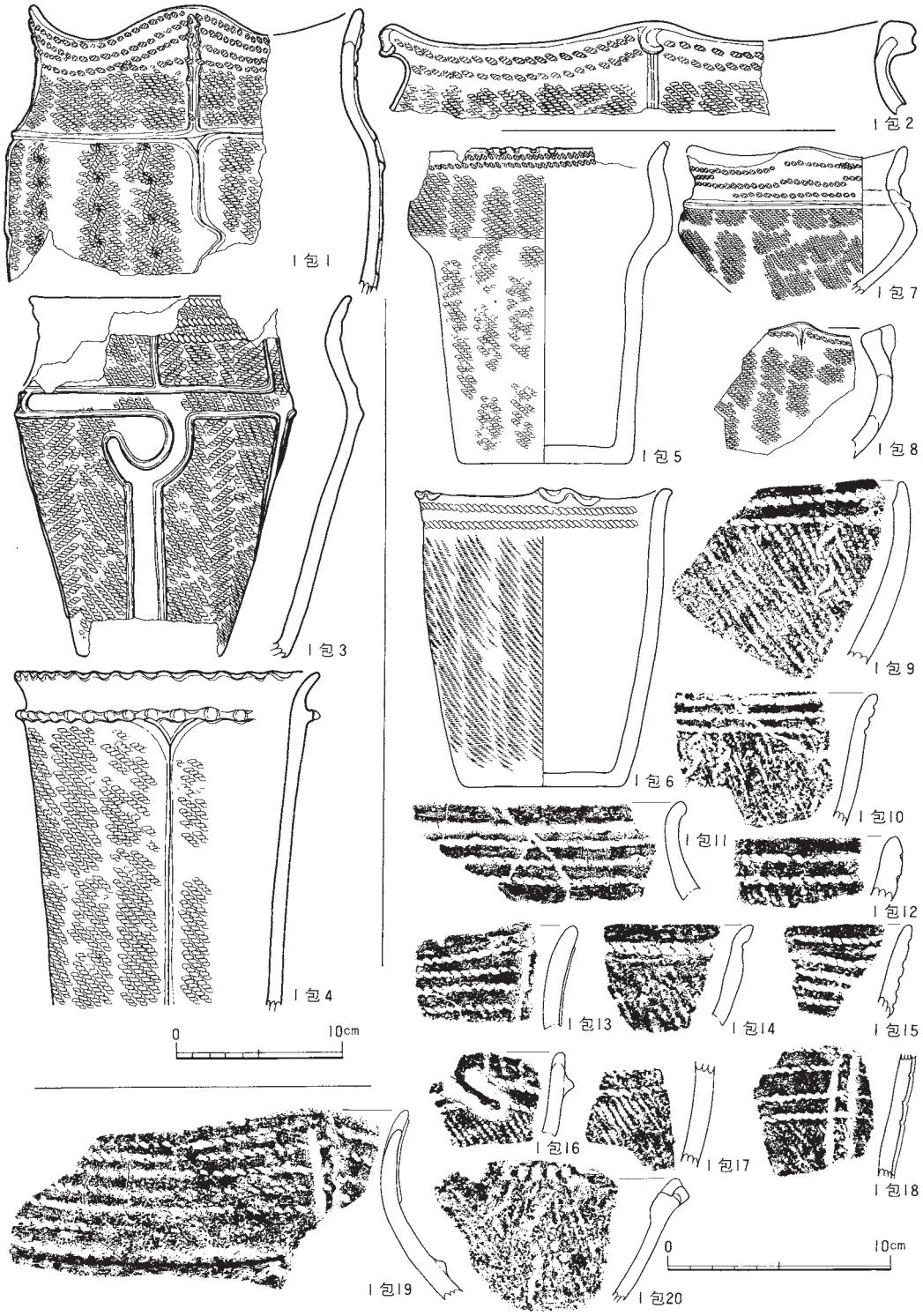
Ⅴ群土器　側縁を沈線により調整した隆帯によって文様が表出される土器である。

１包289～295が比定されるが，いずれも破片である。口縁部の形態は外傾して立ち上がるものと，短かく外傾する口唇部以下が丸味をもって膨らむものとがある。口縁部文様は，側縁を沈線で調整した隆帯によって，渦巻文・円文・長楕円形区画文が施されている（１包289・290）。胴部文様は，口縁部同様隆帯・沈線によって施文されるが，破片のため文様がどのように展開するのか不明のところが多い。

地文は単節縄文を使用したものが主体を占めるが，撚り糸文を使用（１包291）したものもある。原体の回転方向は，これまでの土器群のように一定方向（縦回転）に規制されることはなく多方向の回転方向をとる。

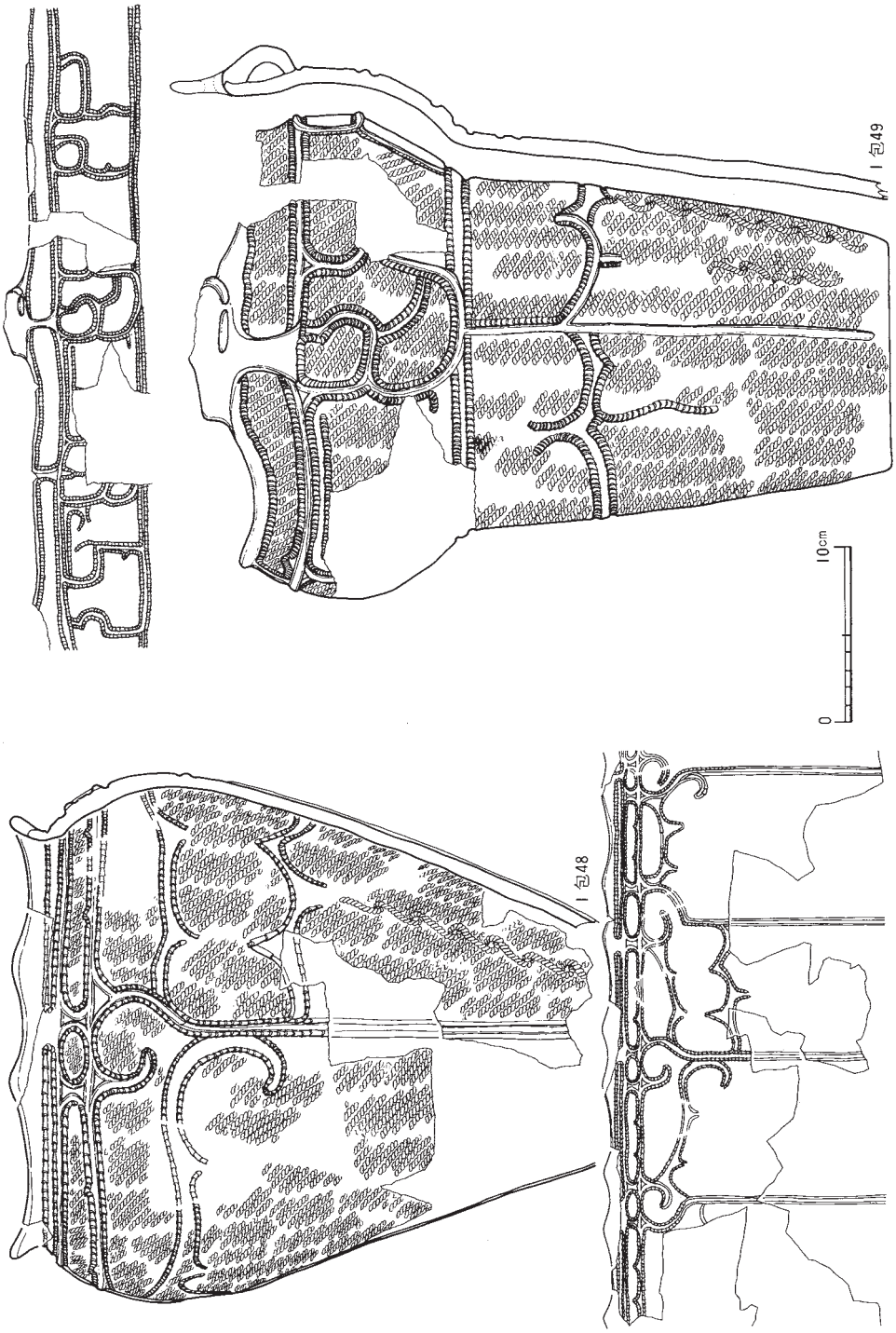
Ⅵ群土器　縄文のみで施文された土器である。

１包296～311が本群に比定される。全体的な器形を窺えるのは，底面から口縁部まで直線的に外傾して開くもののみであるが，他にキャリパー型に近いものも含まれるようである。施文される縄文はいずれも単節縄文で，１包304以外は原体を縦に回転している。１包296・297は折り返し，

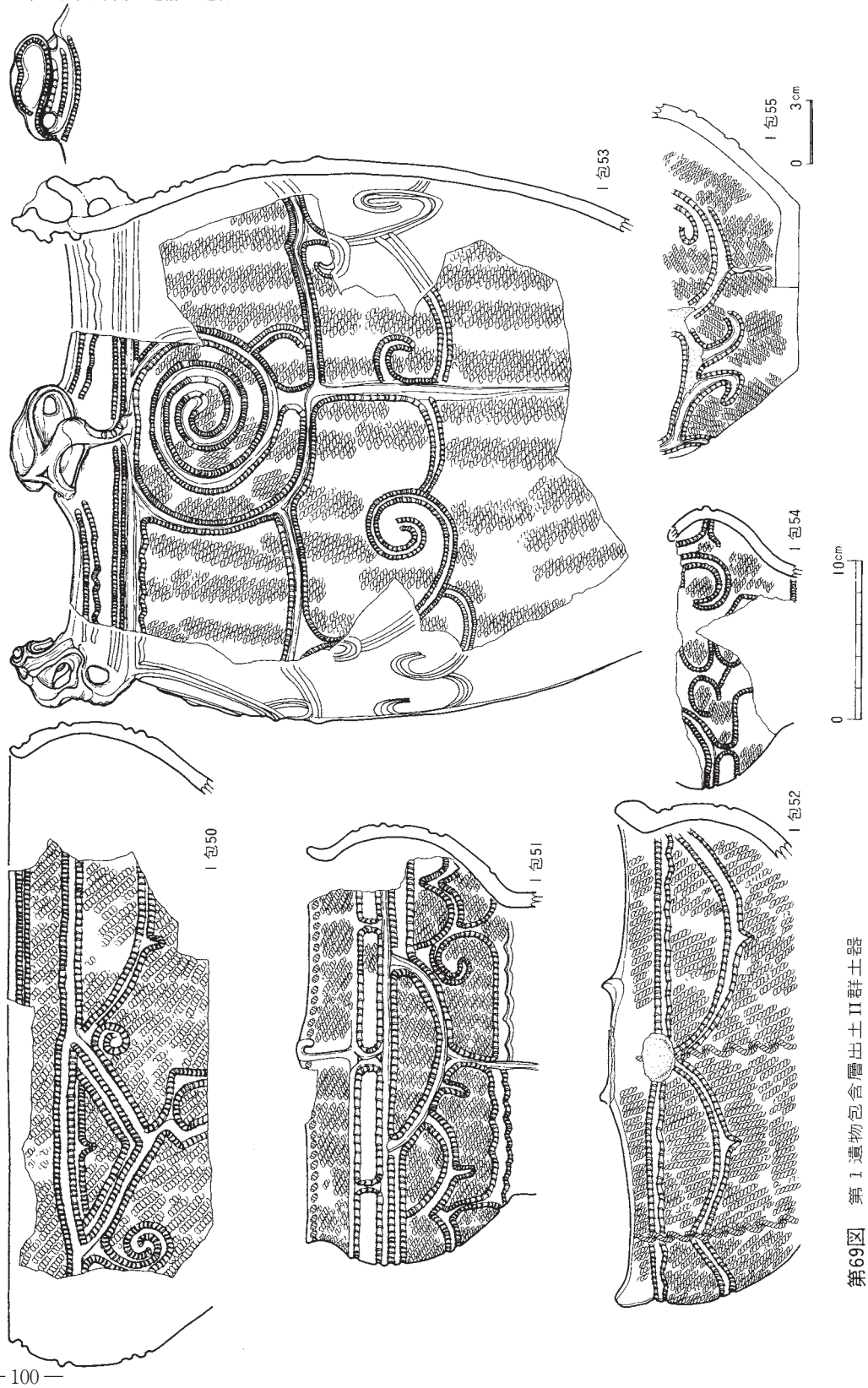


第66図　第１遺物包含層出土Ⅰ群土器

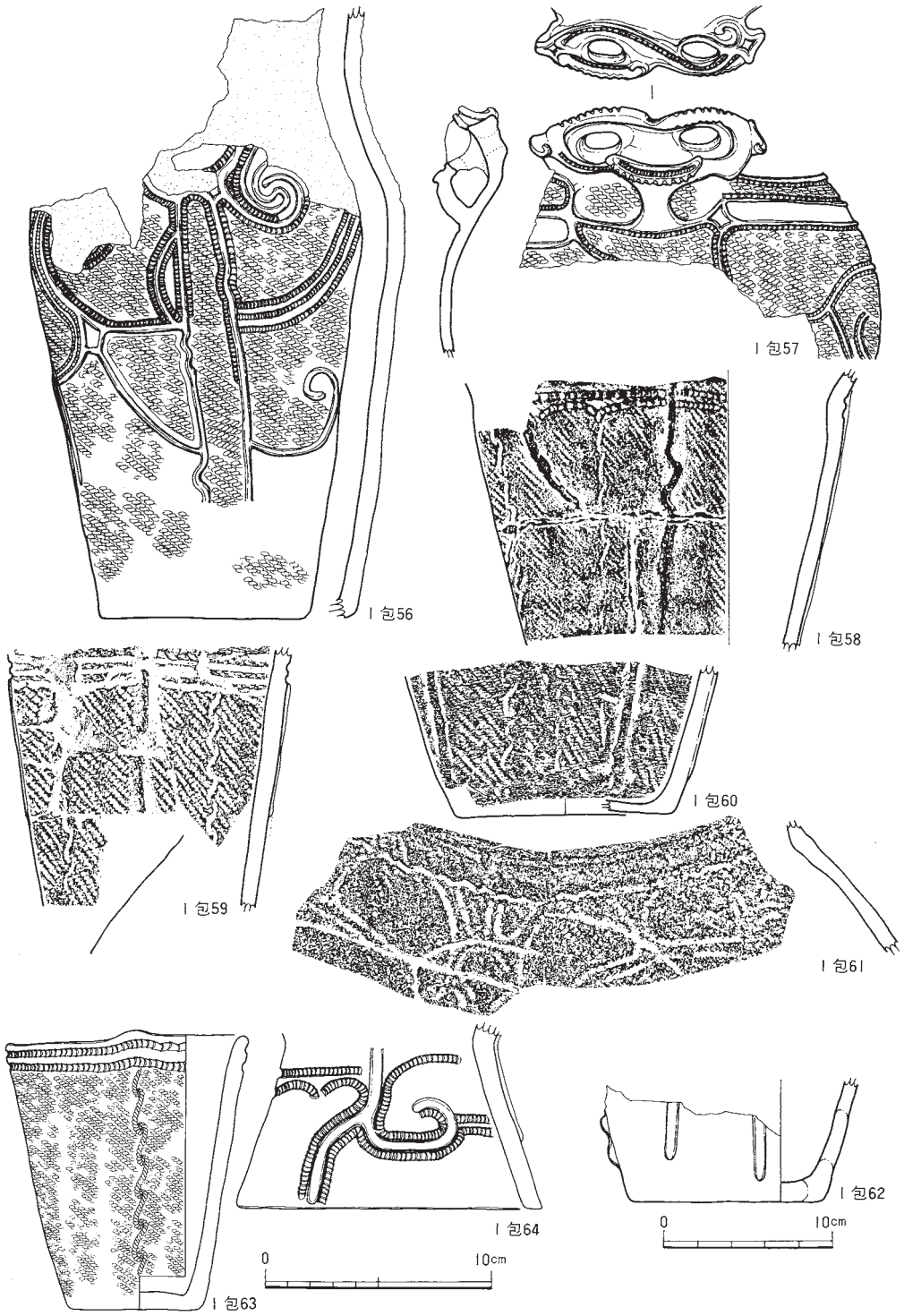
第67図　第１遺物包含層出土Ⅰ群土器



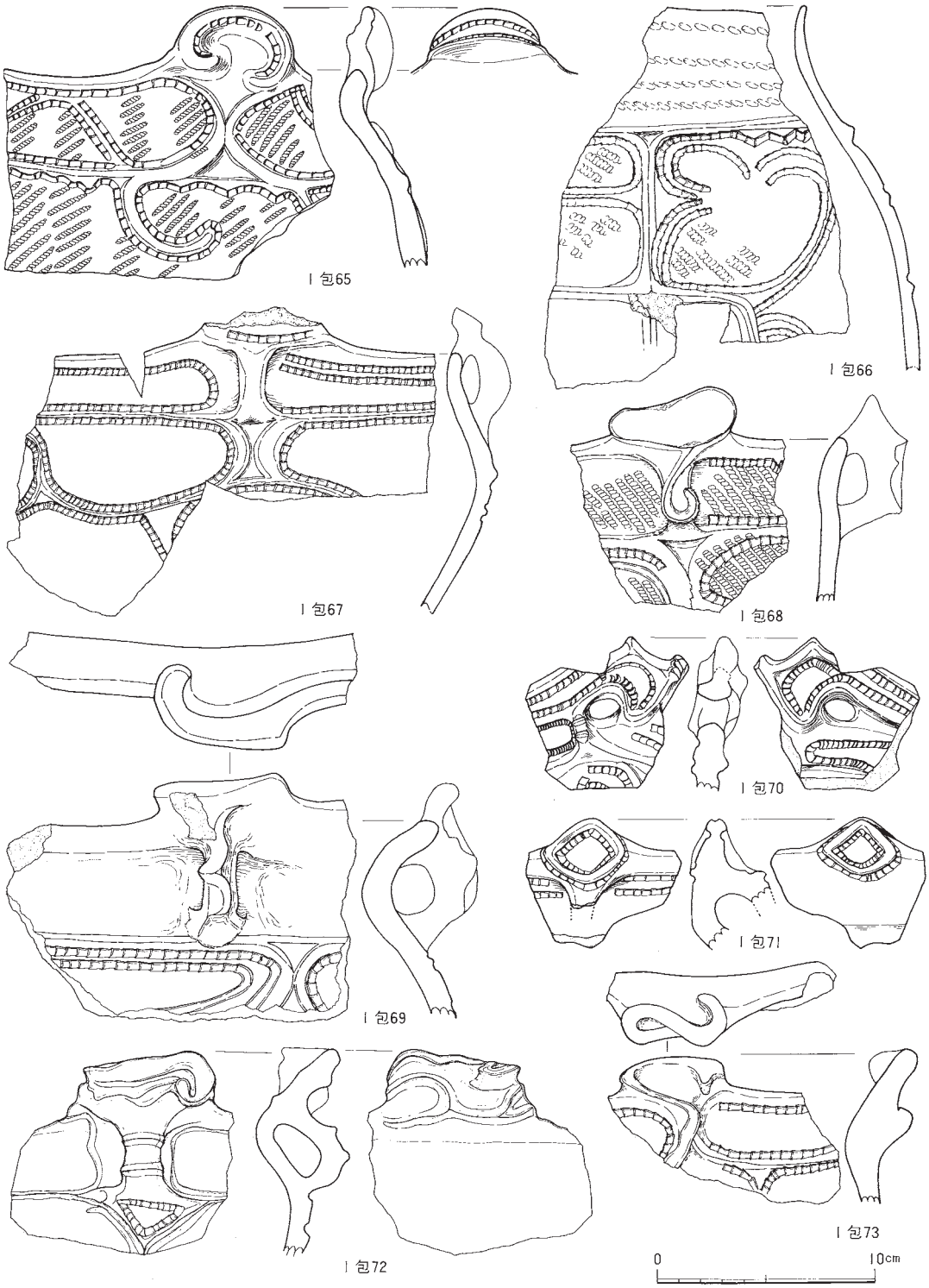
第68図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



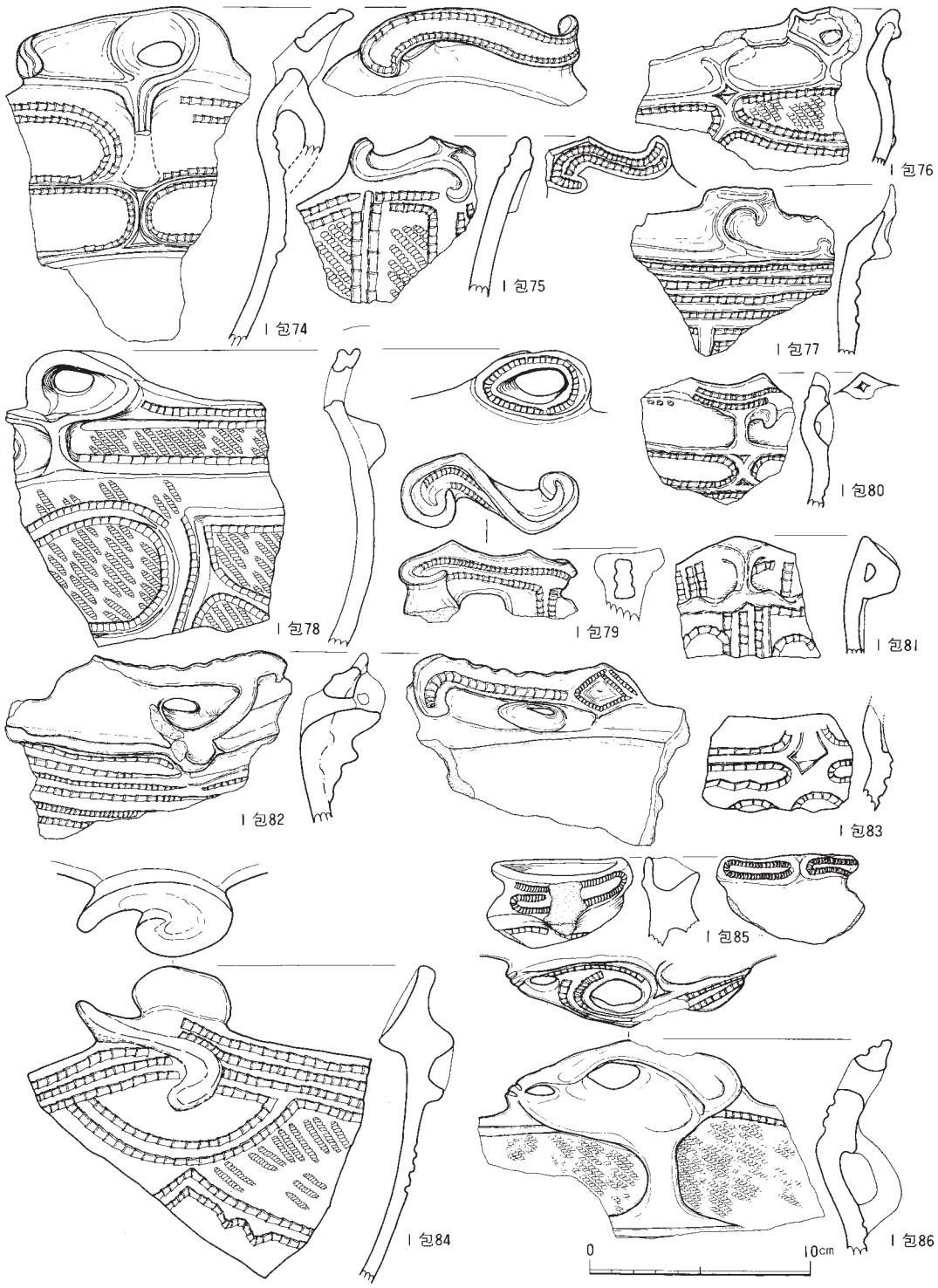
第69図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



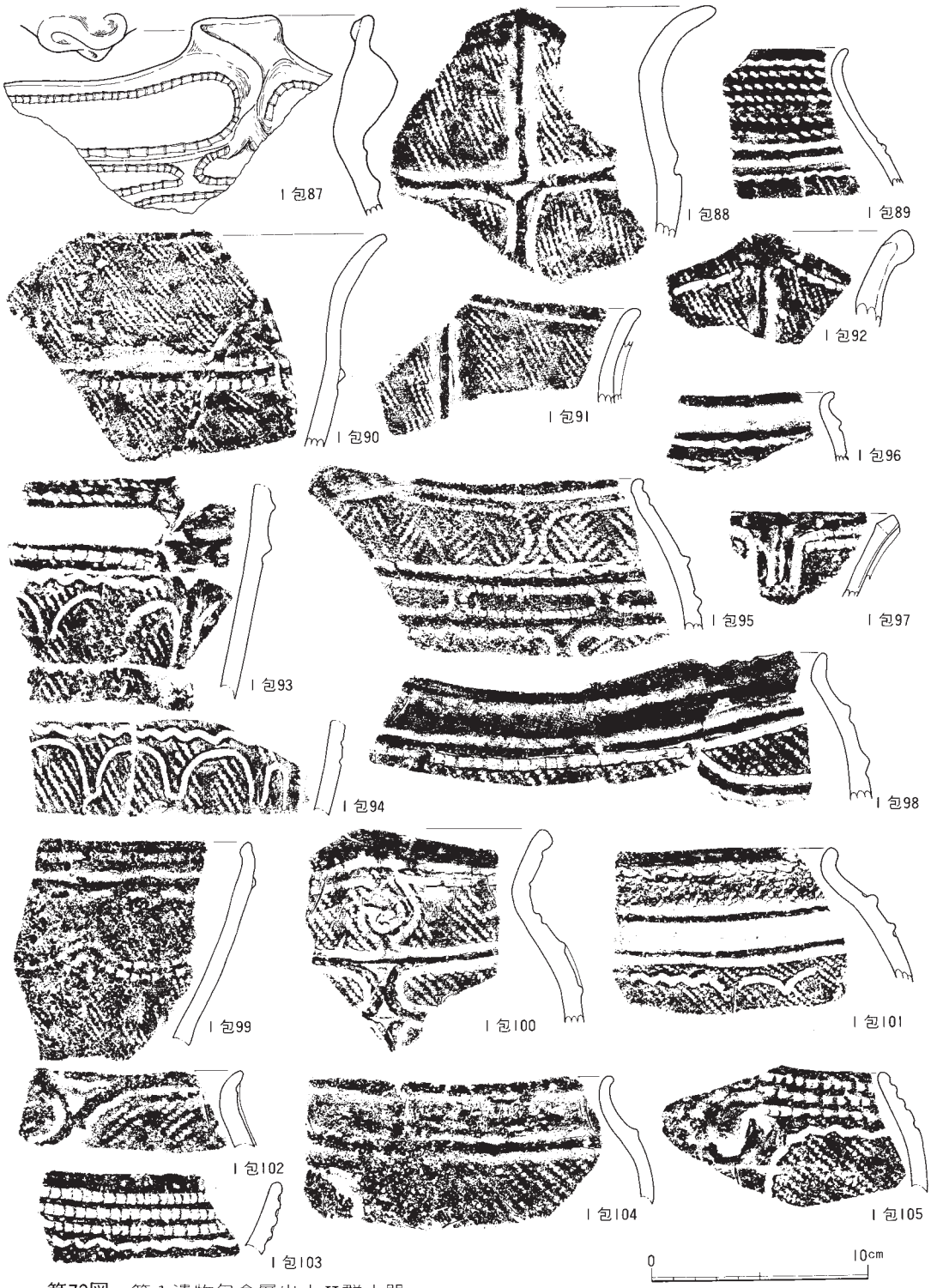
第70図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



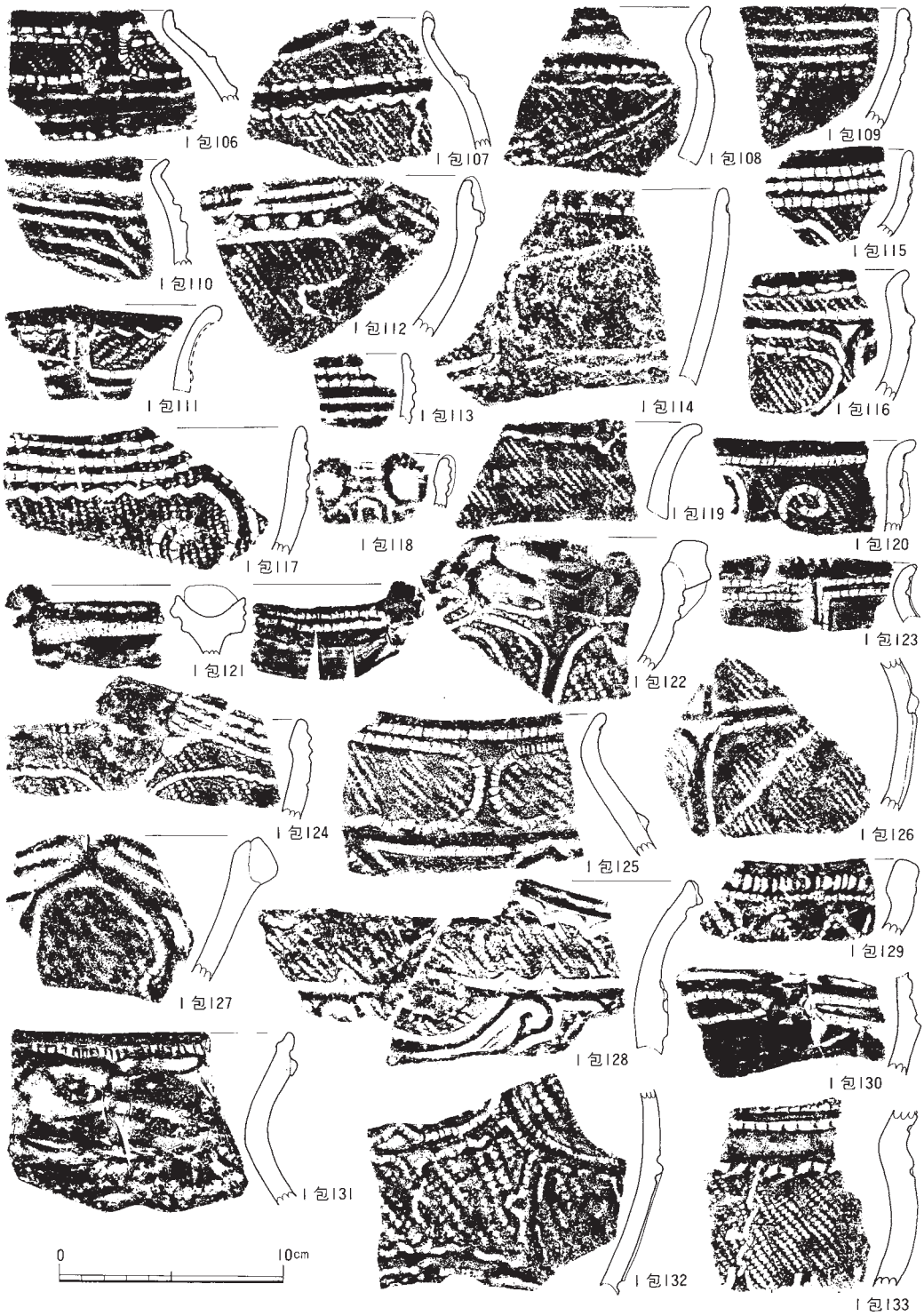
第71図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



第72図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



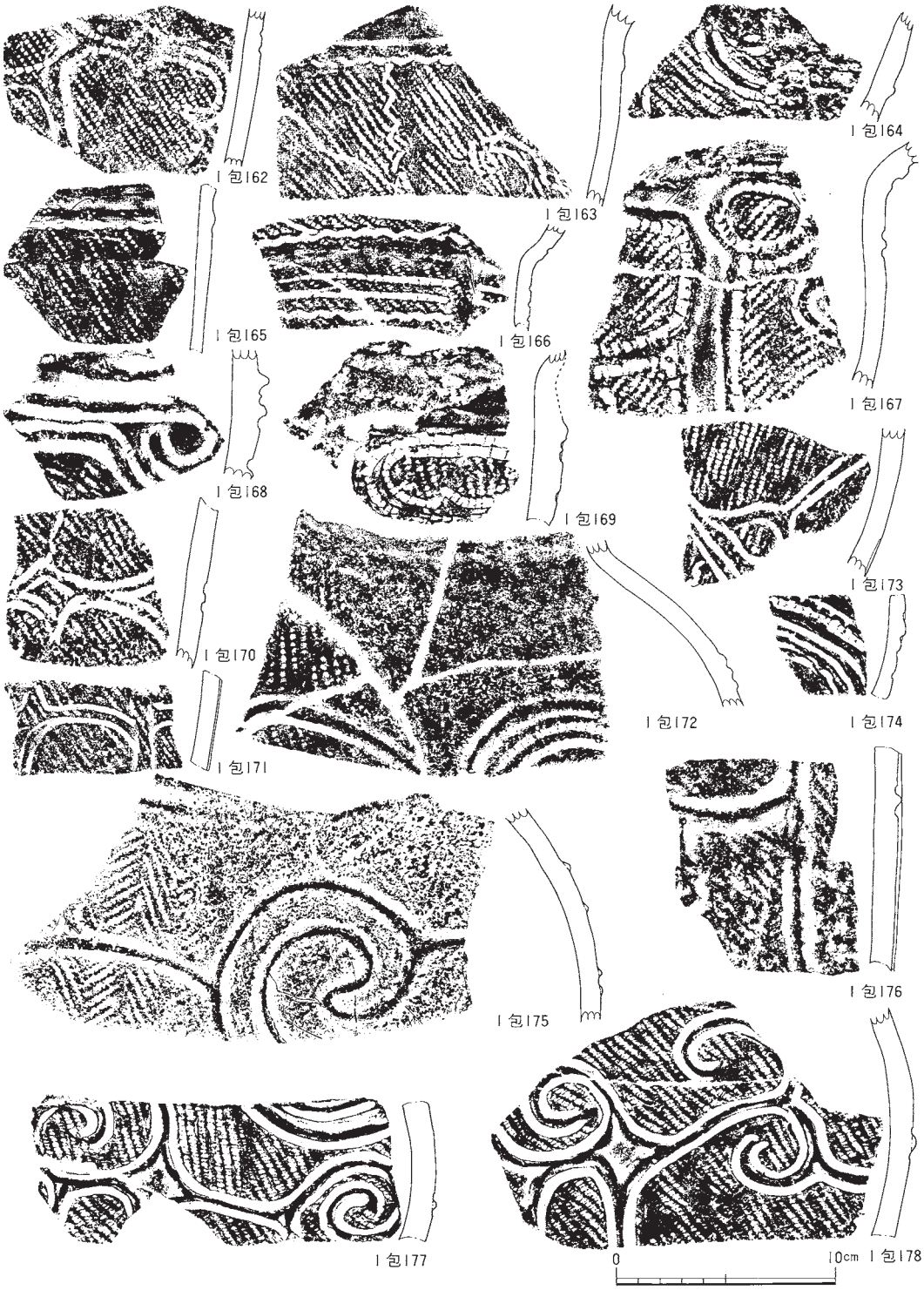
第73図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



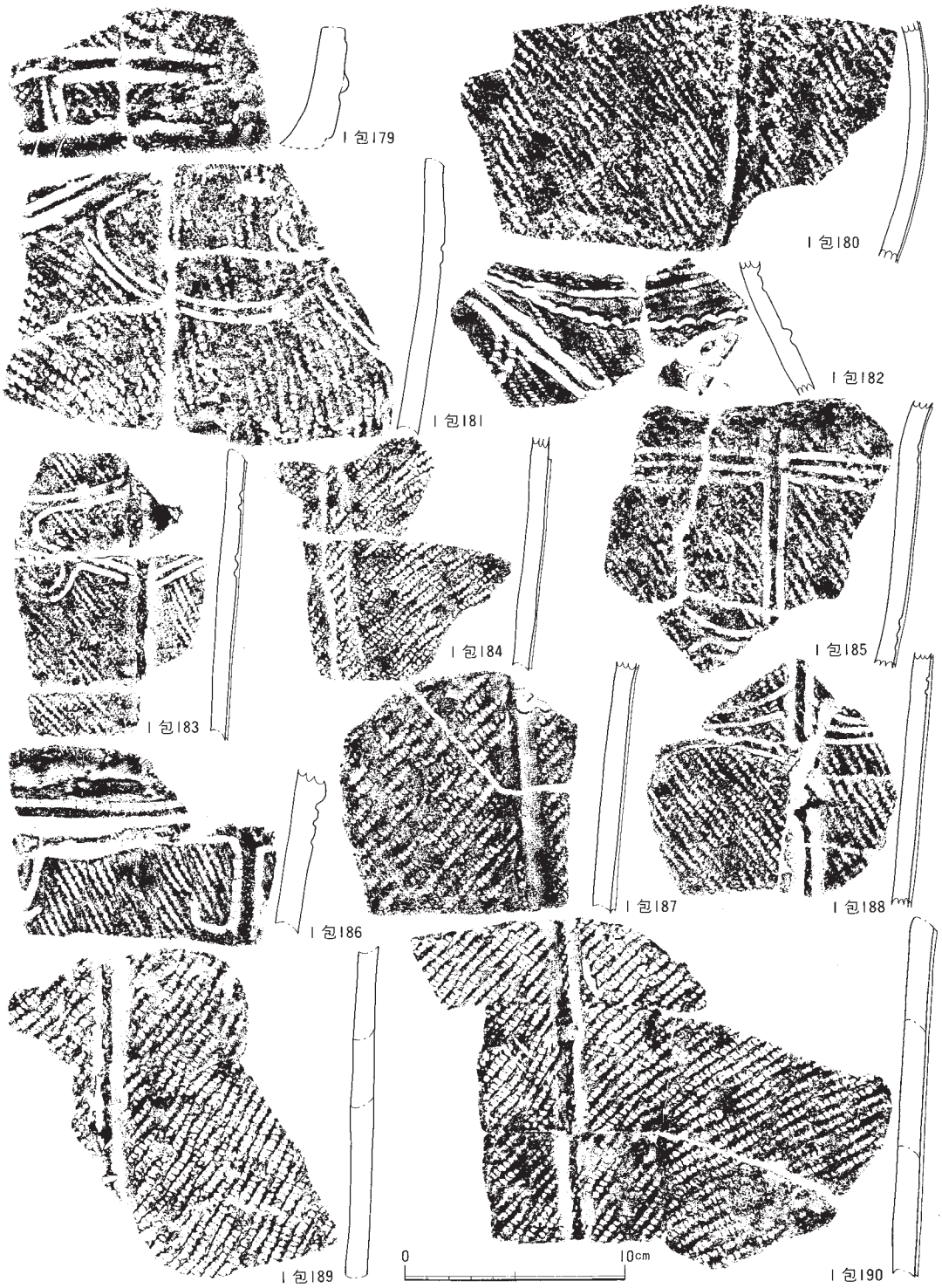
第74図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器

第75図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器

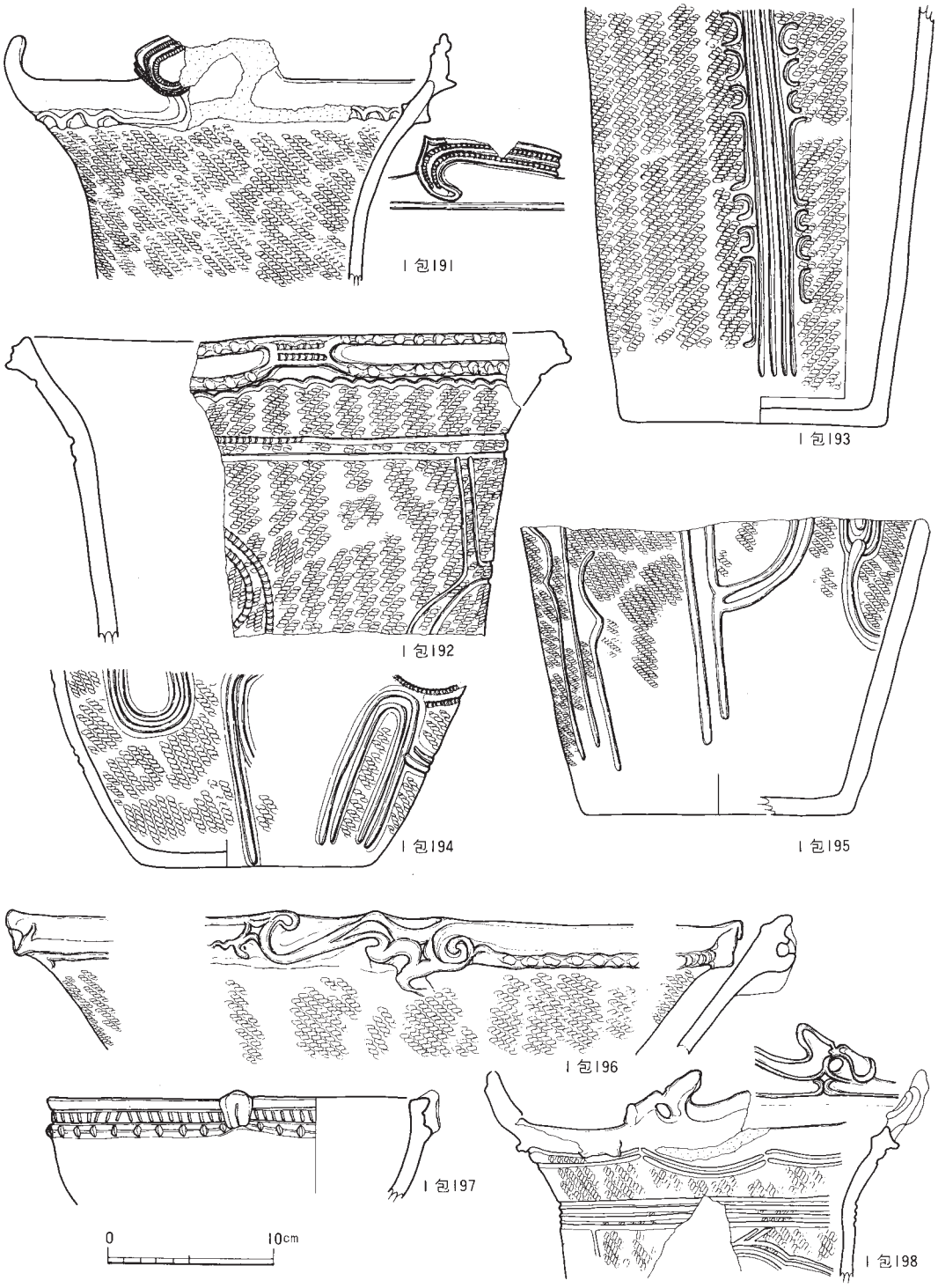
第76図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



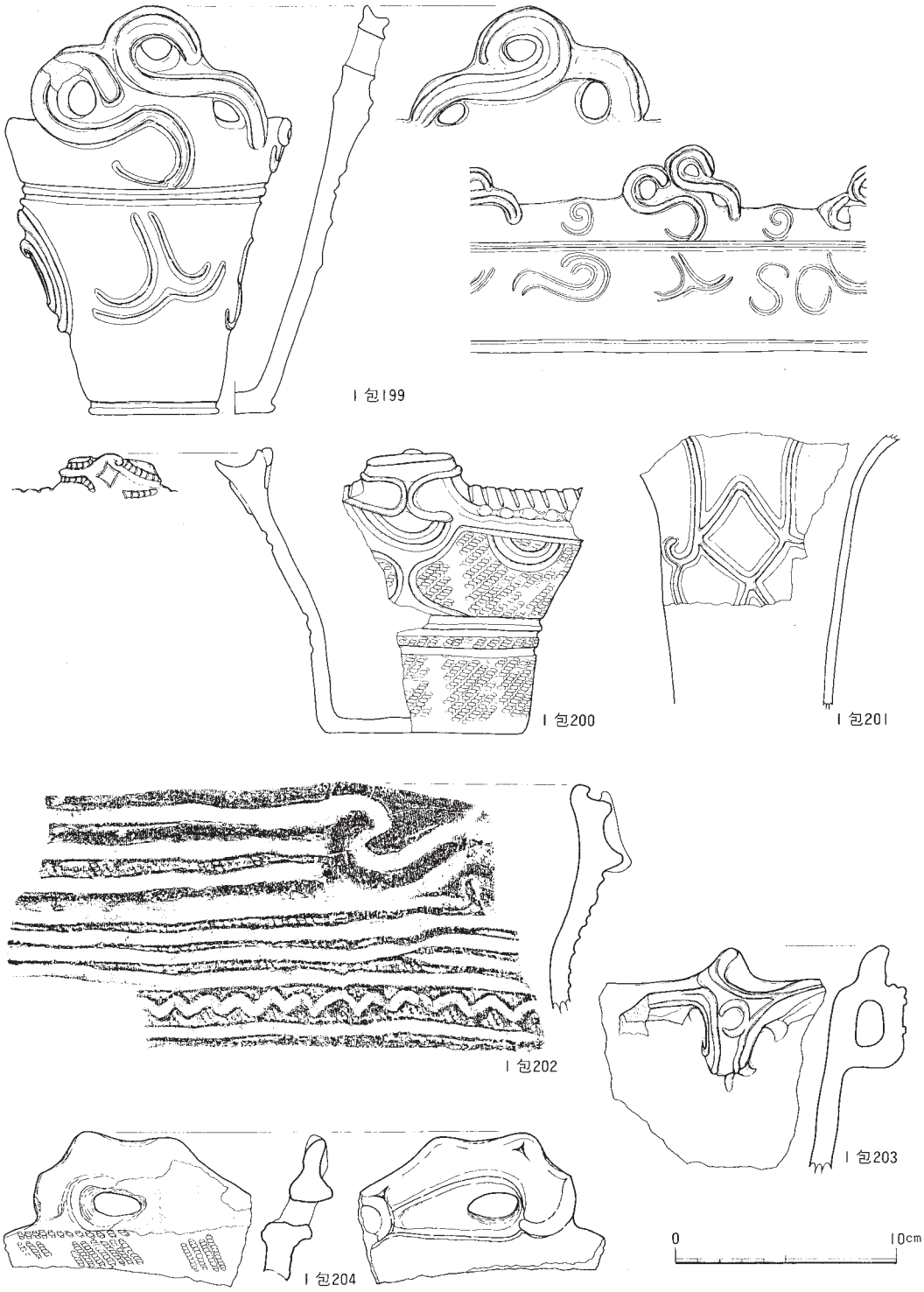
第77図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



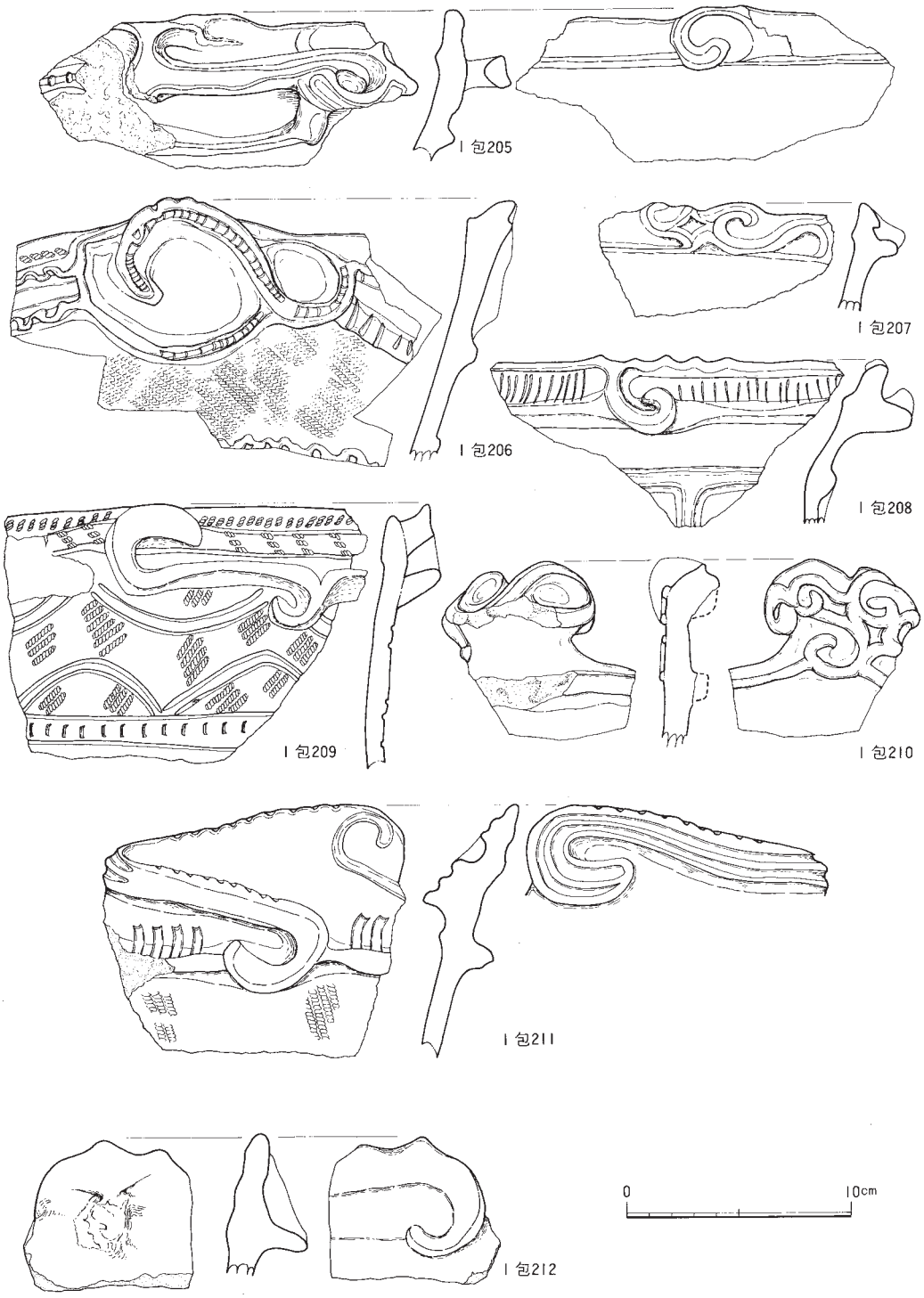
第78図　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器



第79図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器



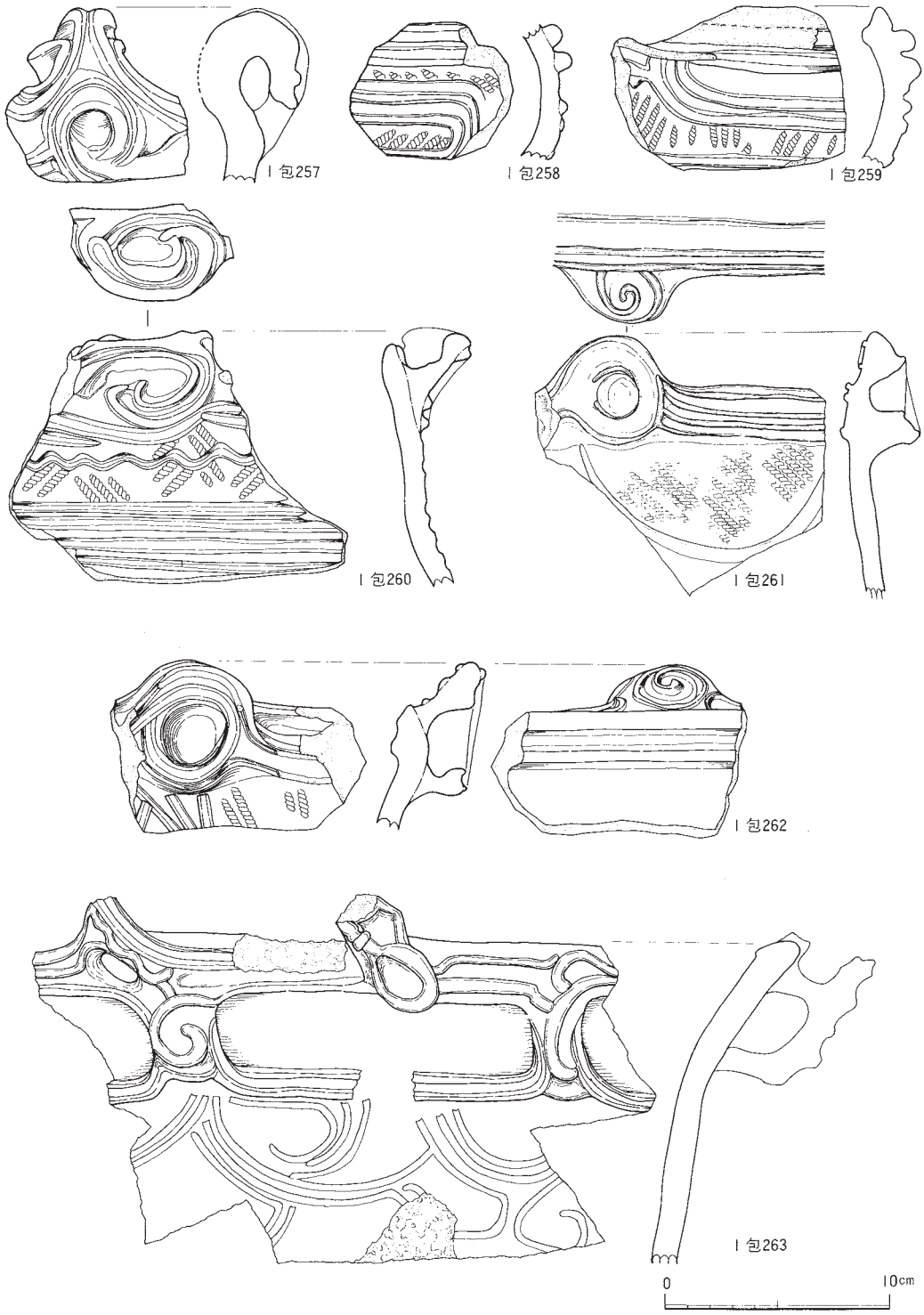
第80図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器



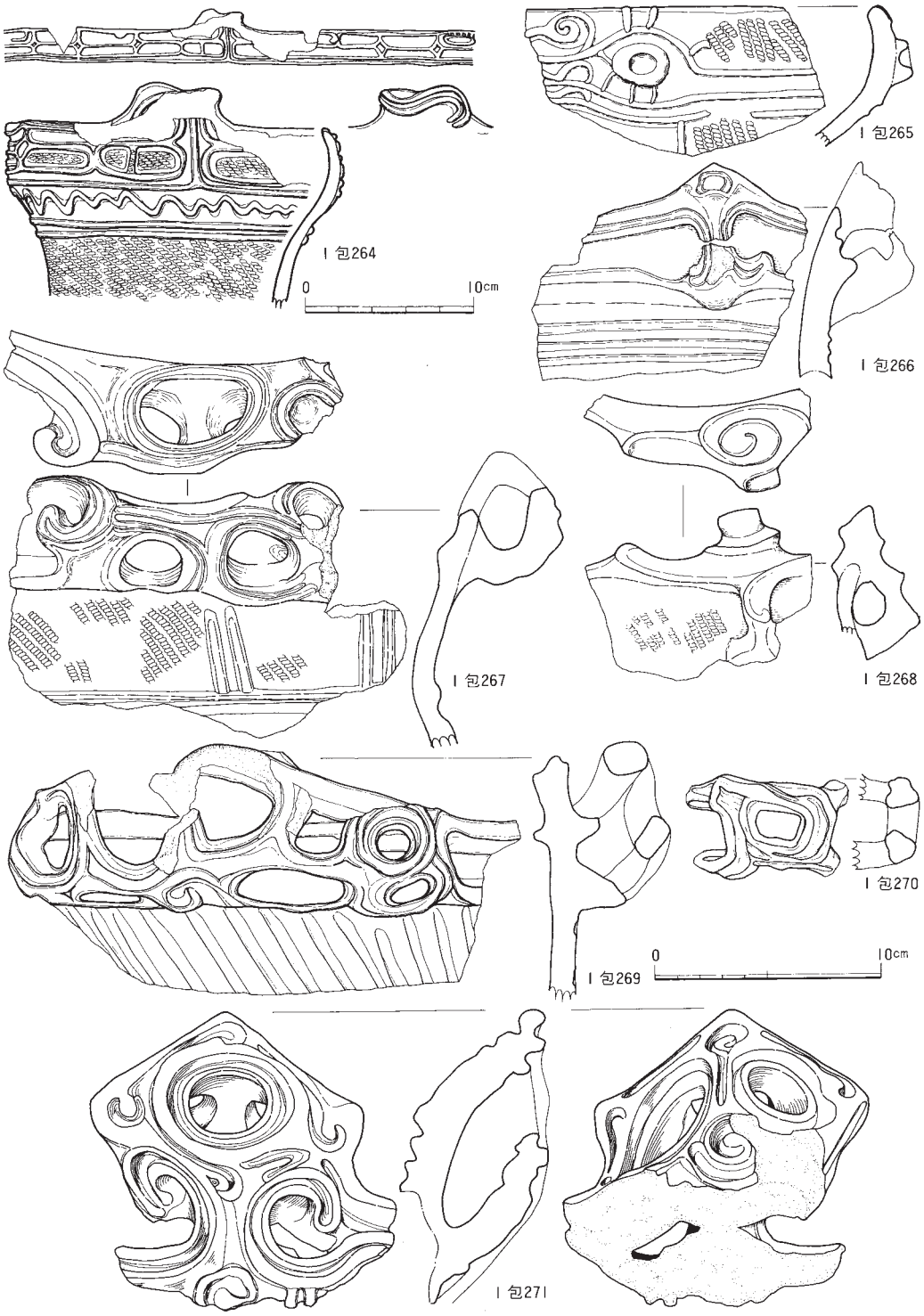
第81図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器

第82図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器

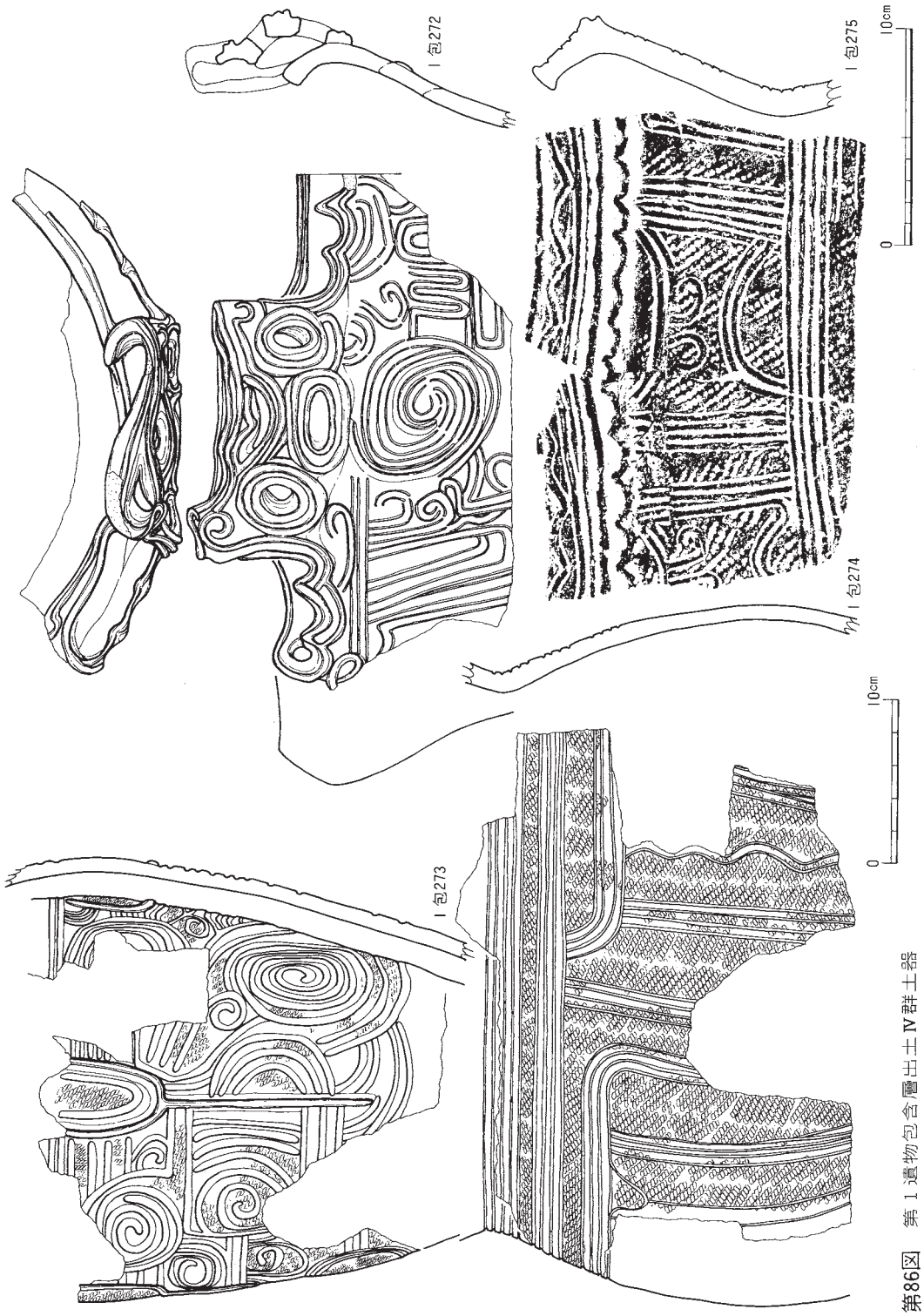
第83図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器



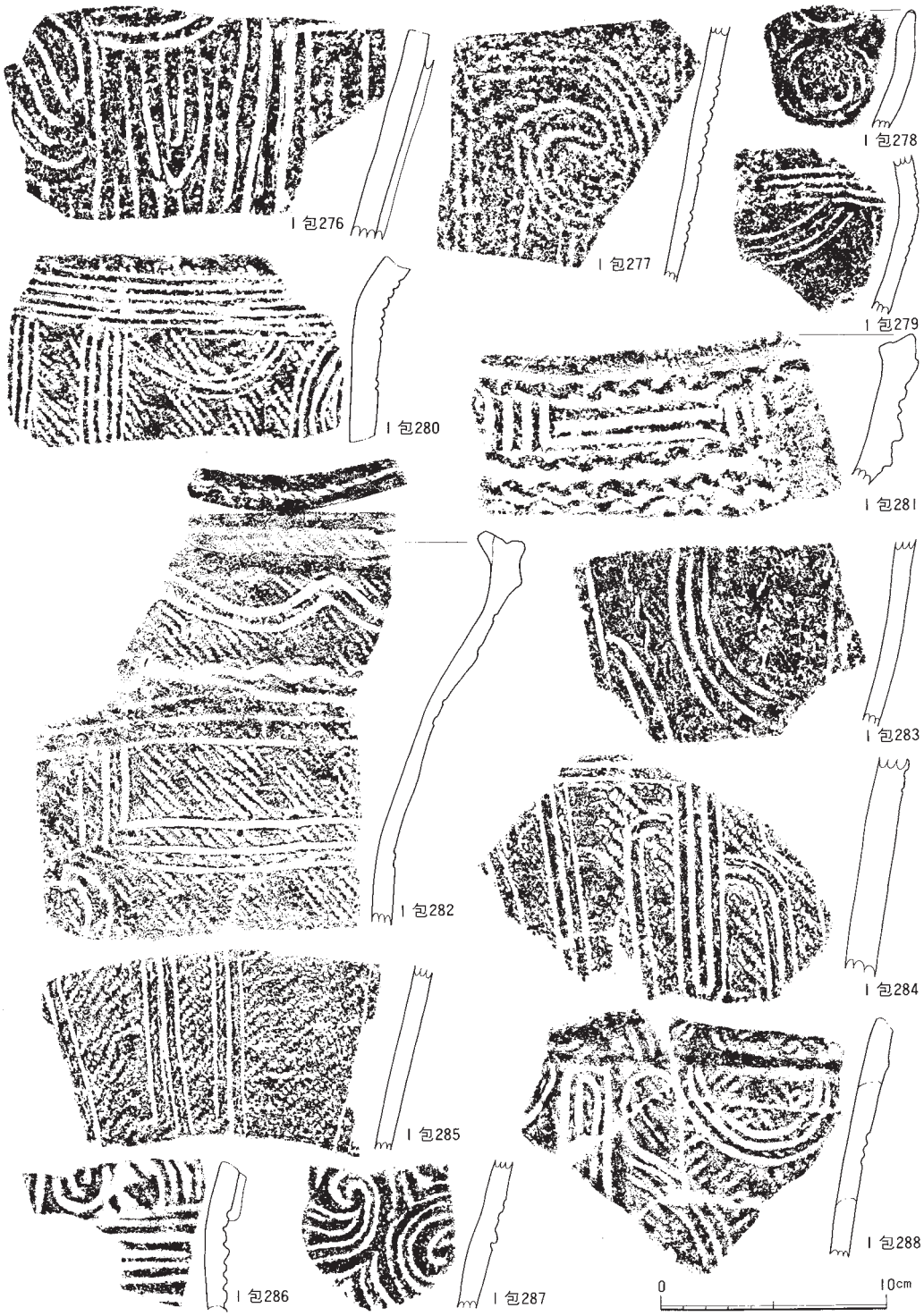
第84図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器



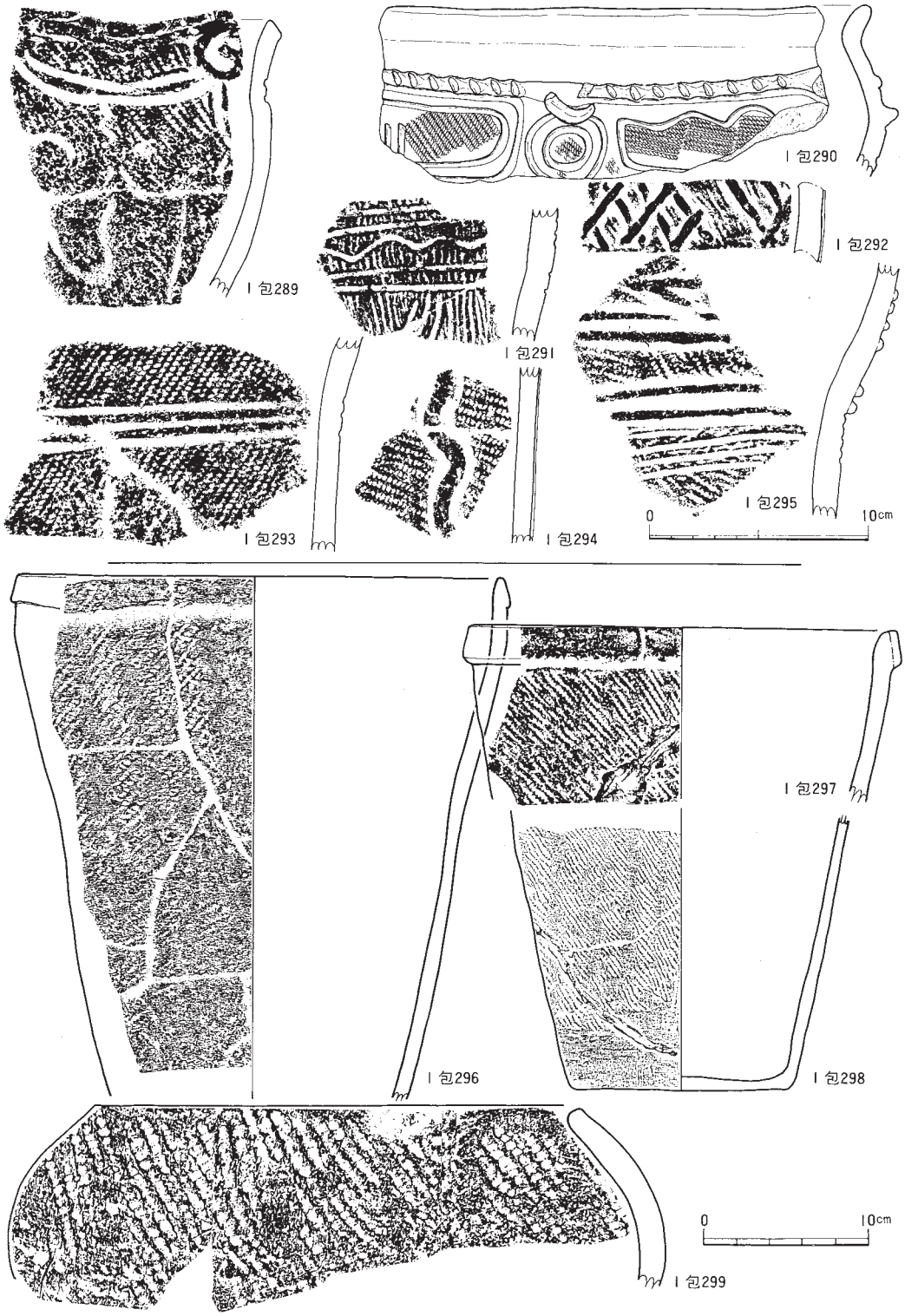
第85図　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器



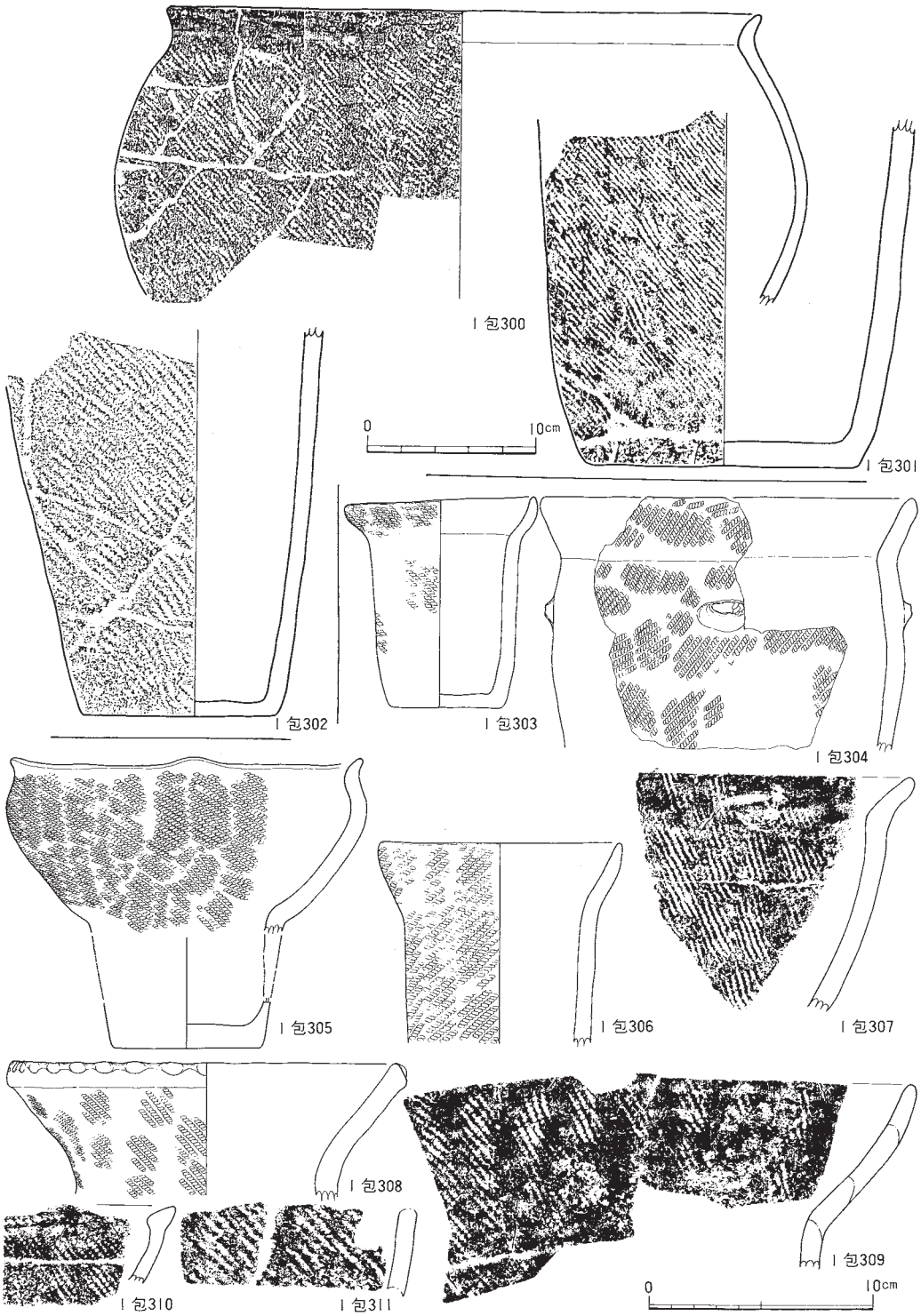
第86図　第１遺物包含層出土Ⅳ群土器



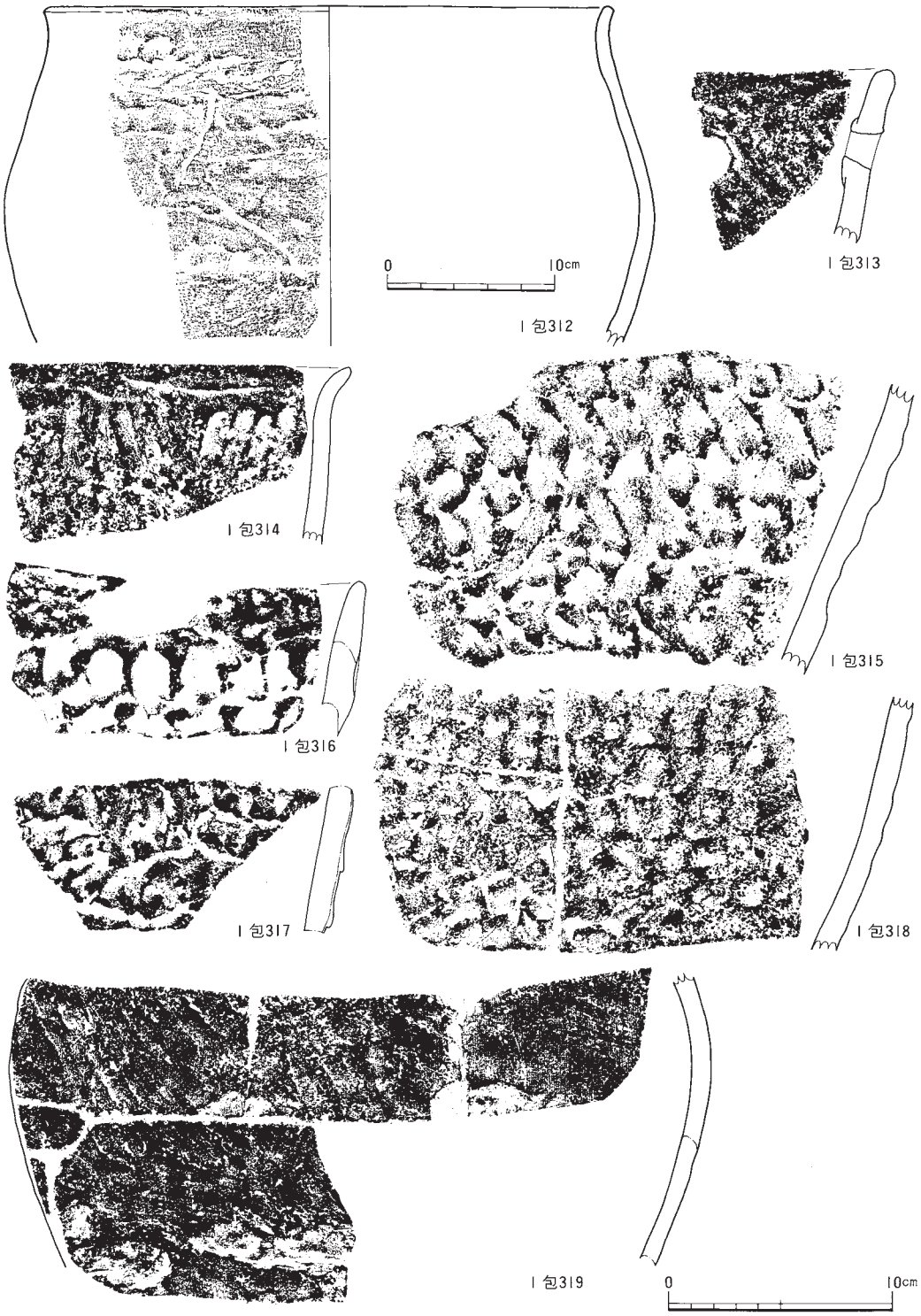
第87図　第１遺物包含層出土Ⅳ群土器



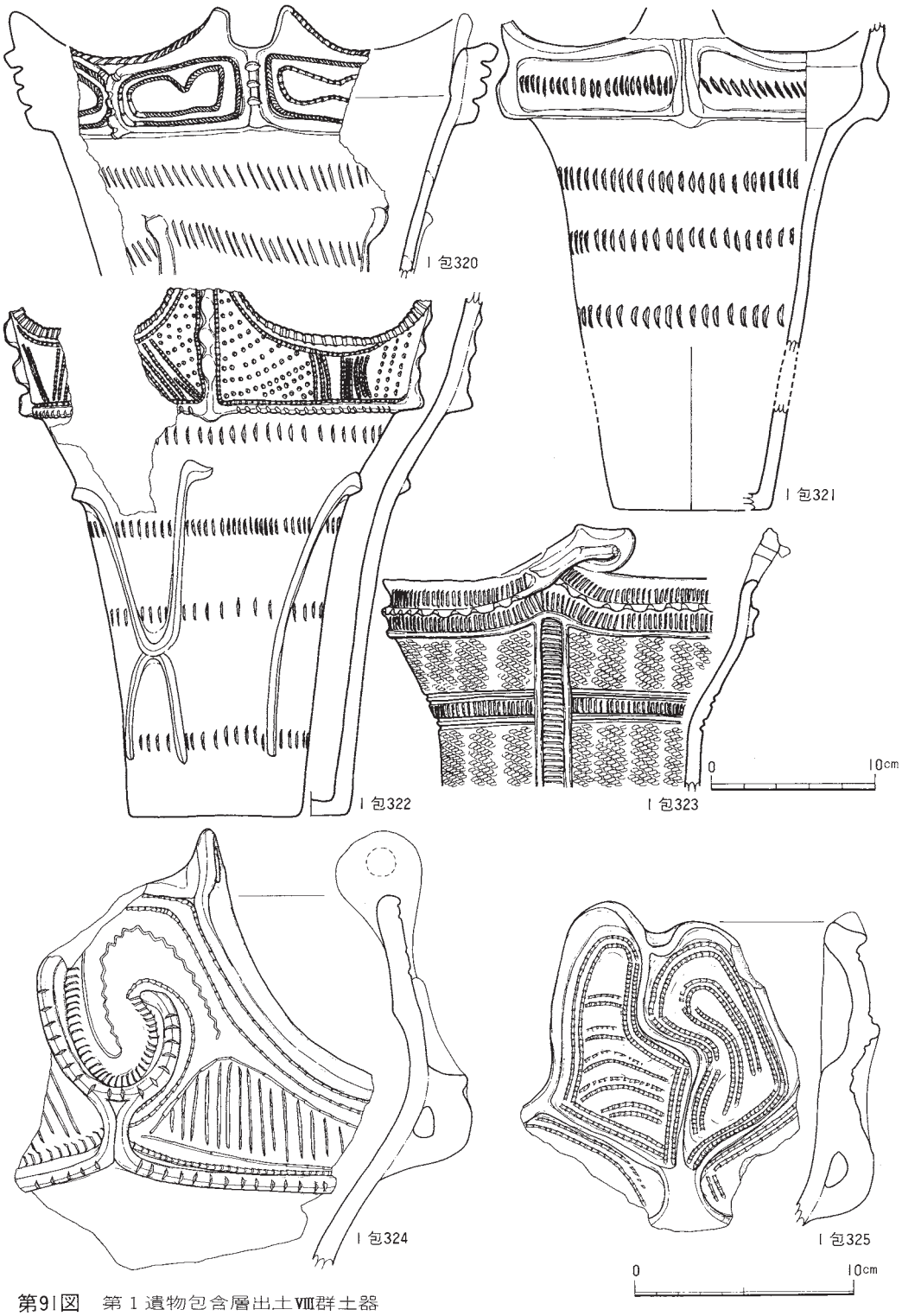
第88図　第１遺物包含層出土Ⅴ群（上段）・Ⅵ群（下段）土器



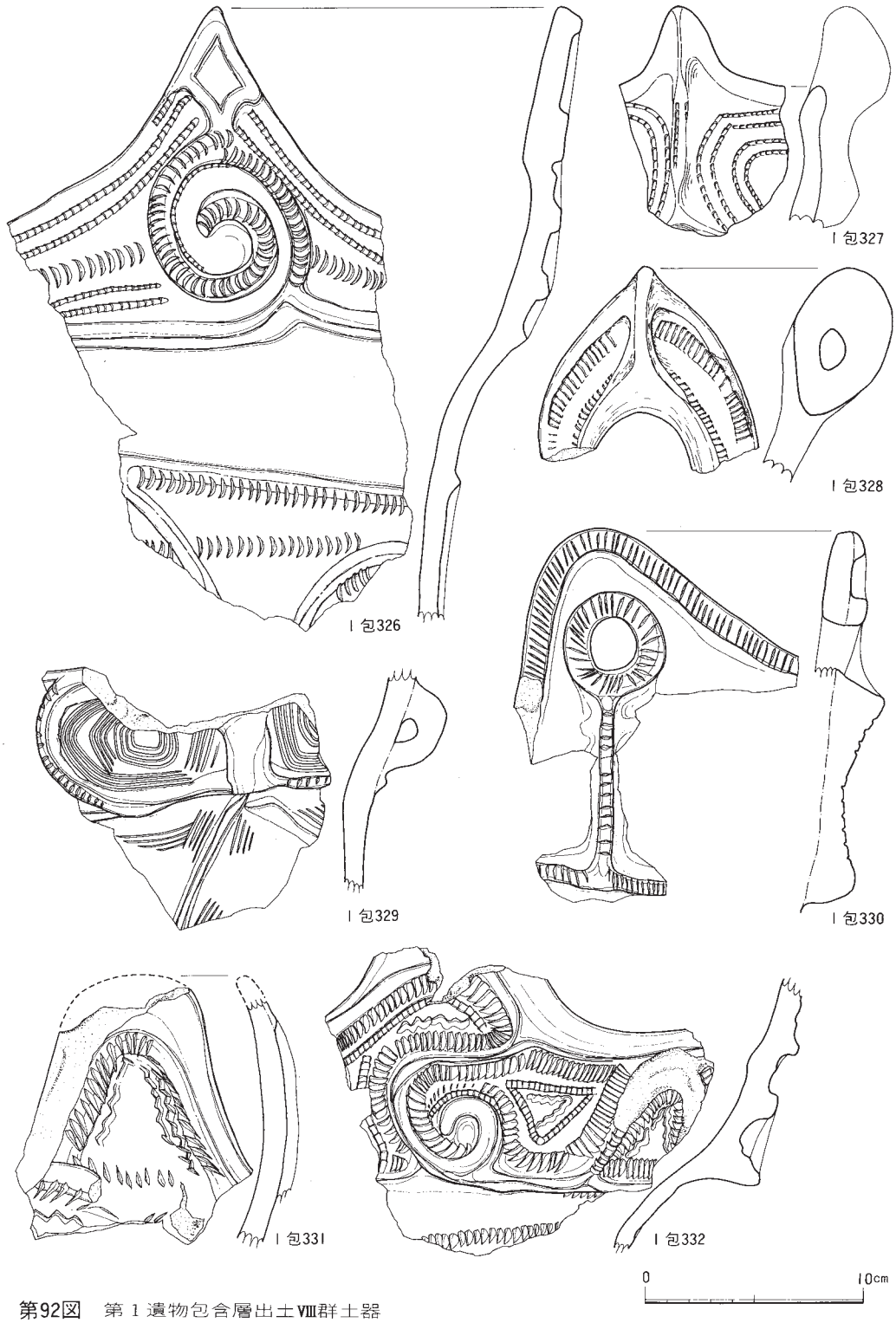
第89図　第１遺物包含層出土Ⅵ群土器



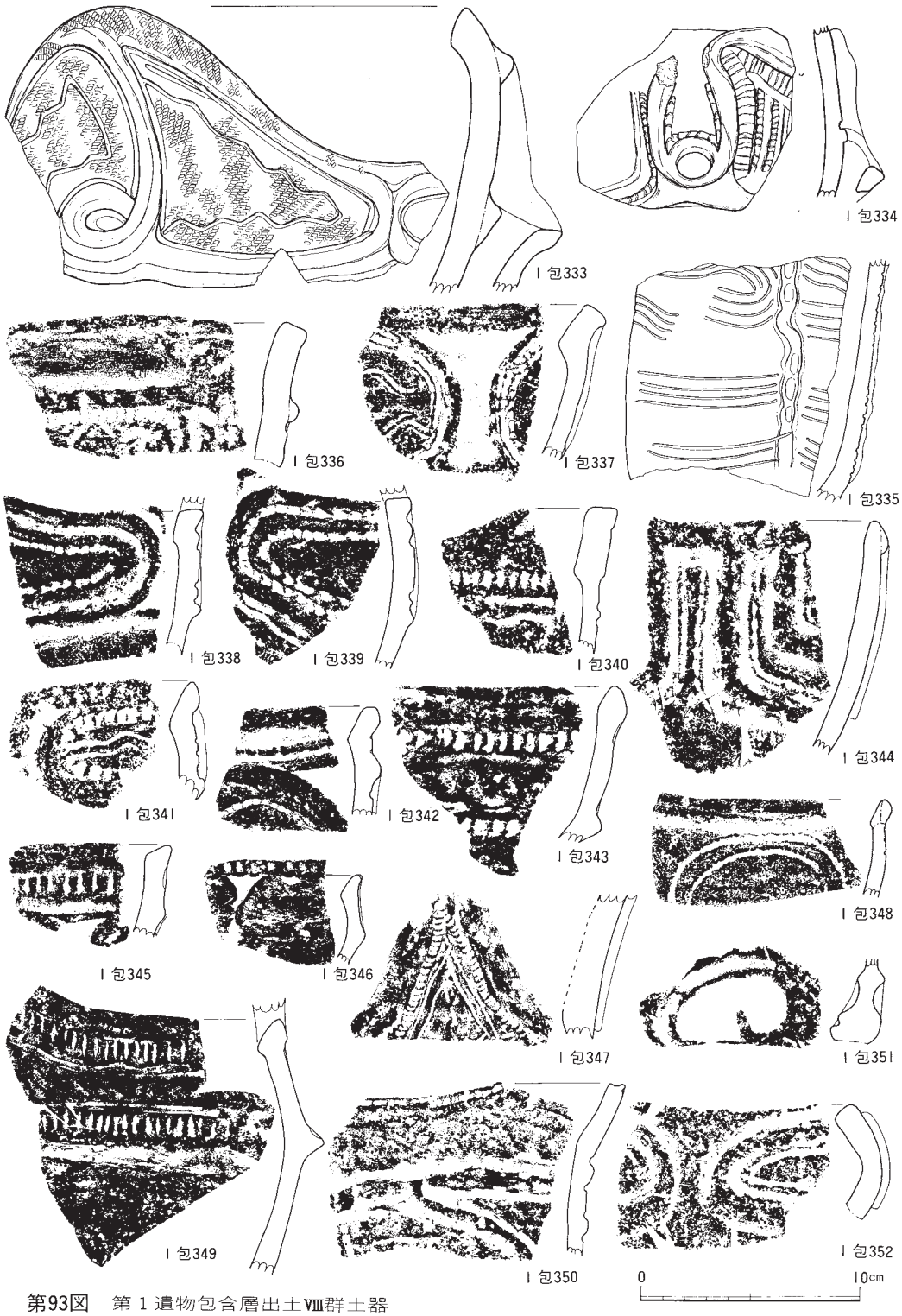
第90図　第１遺物包含層出土Ⅶ群土器



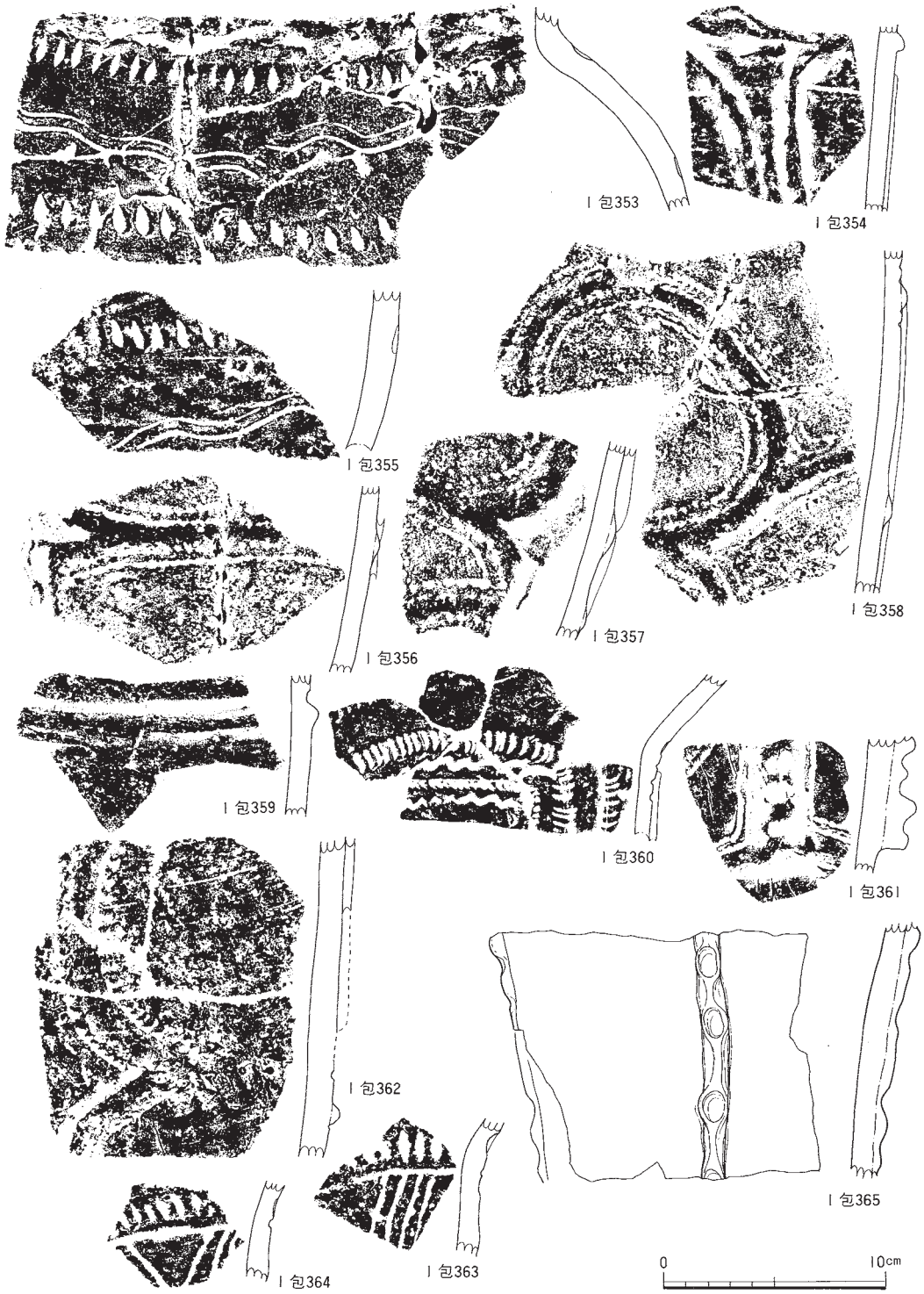
第91図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器



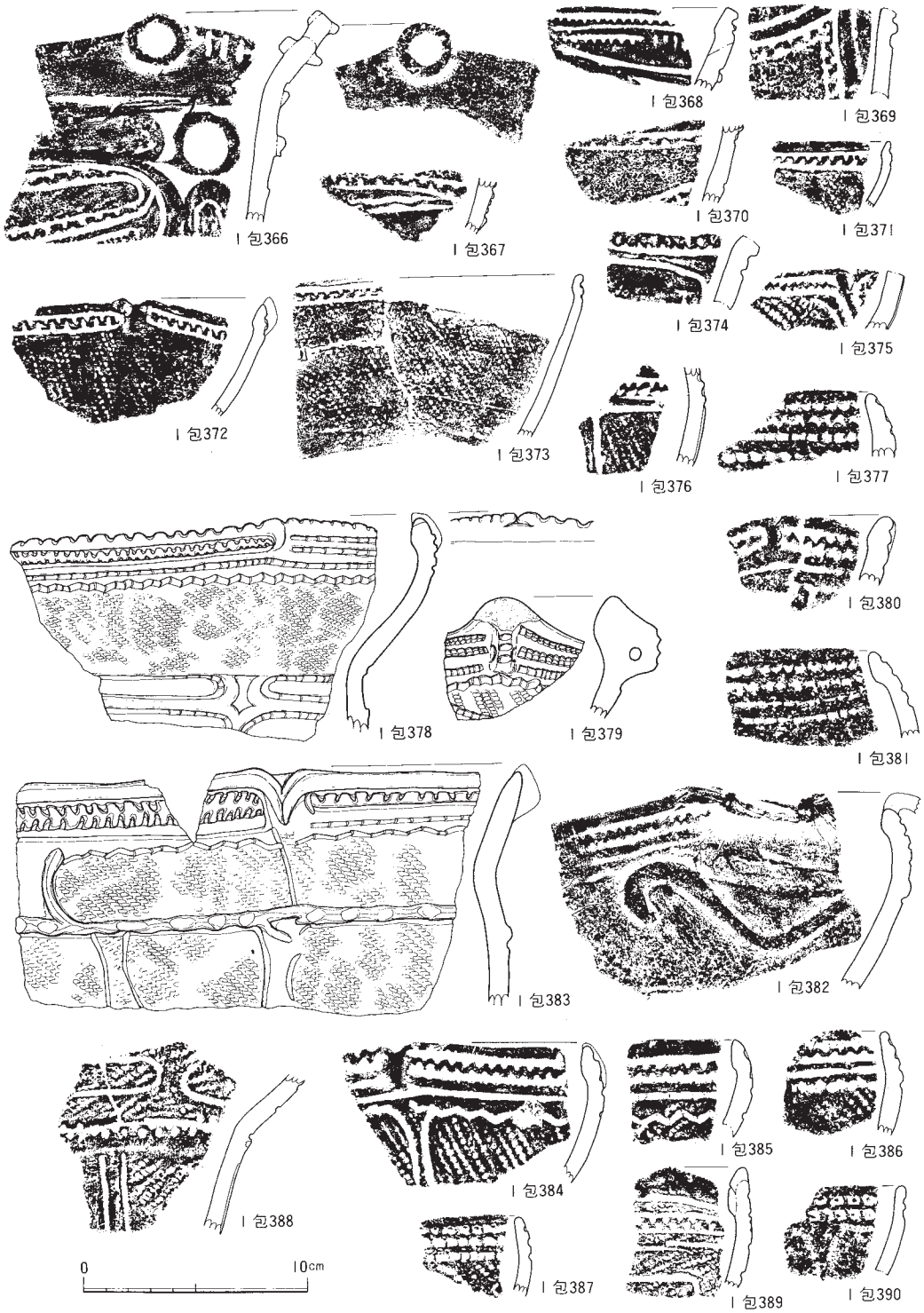
第92図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器



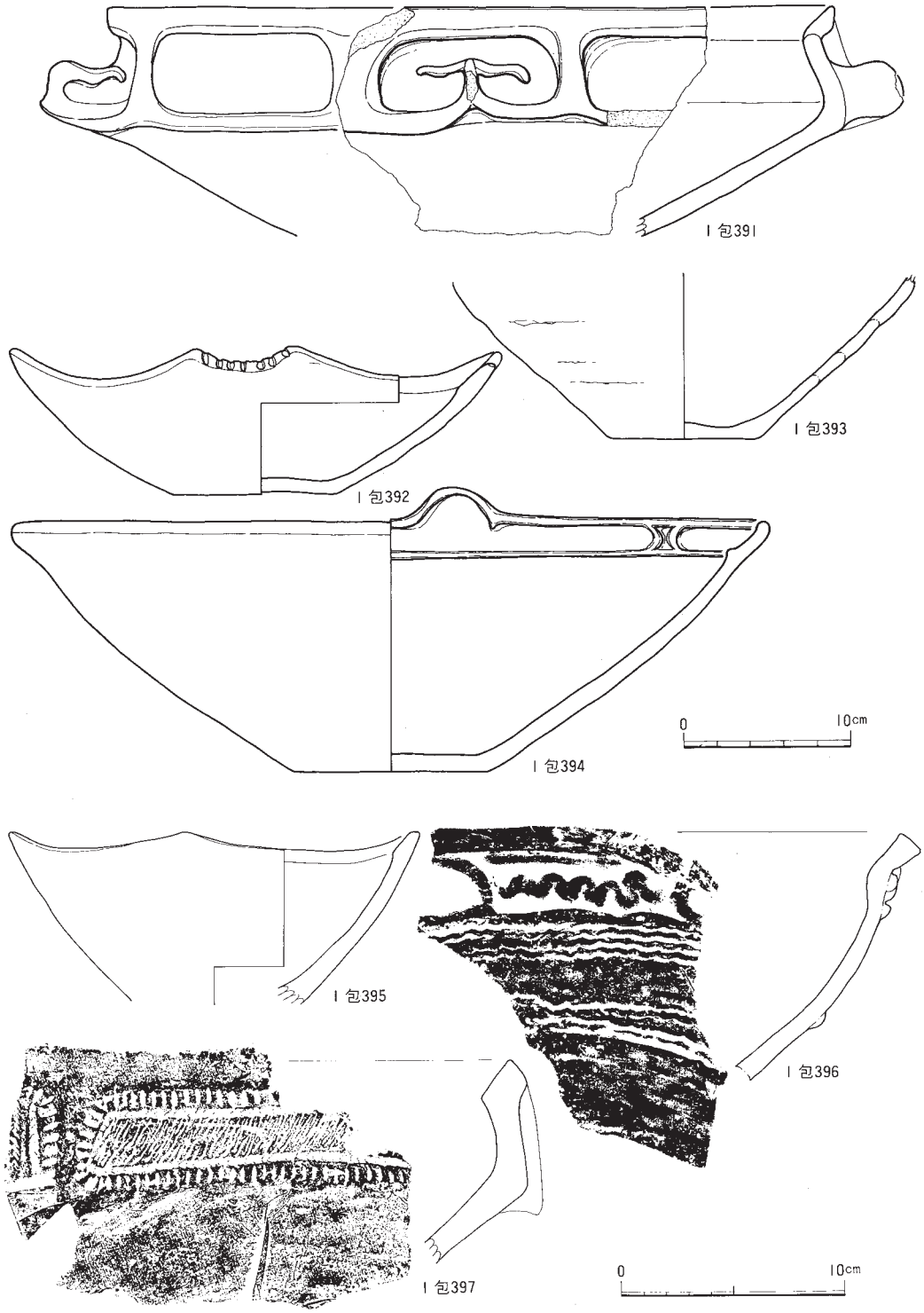
第93図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器



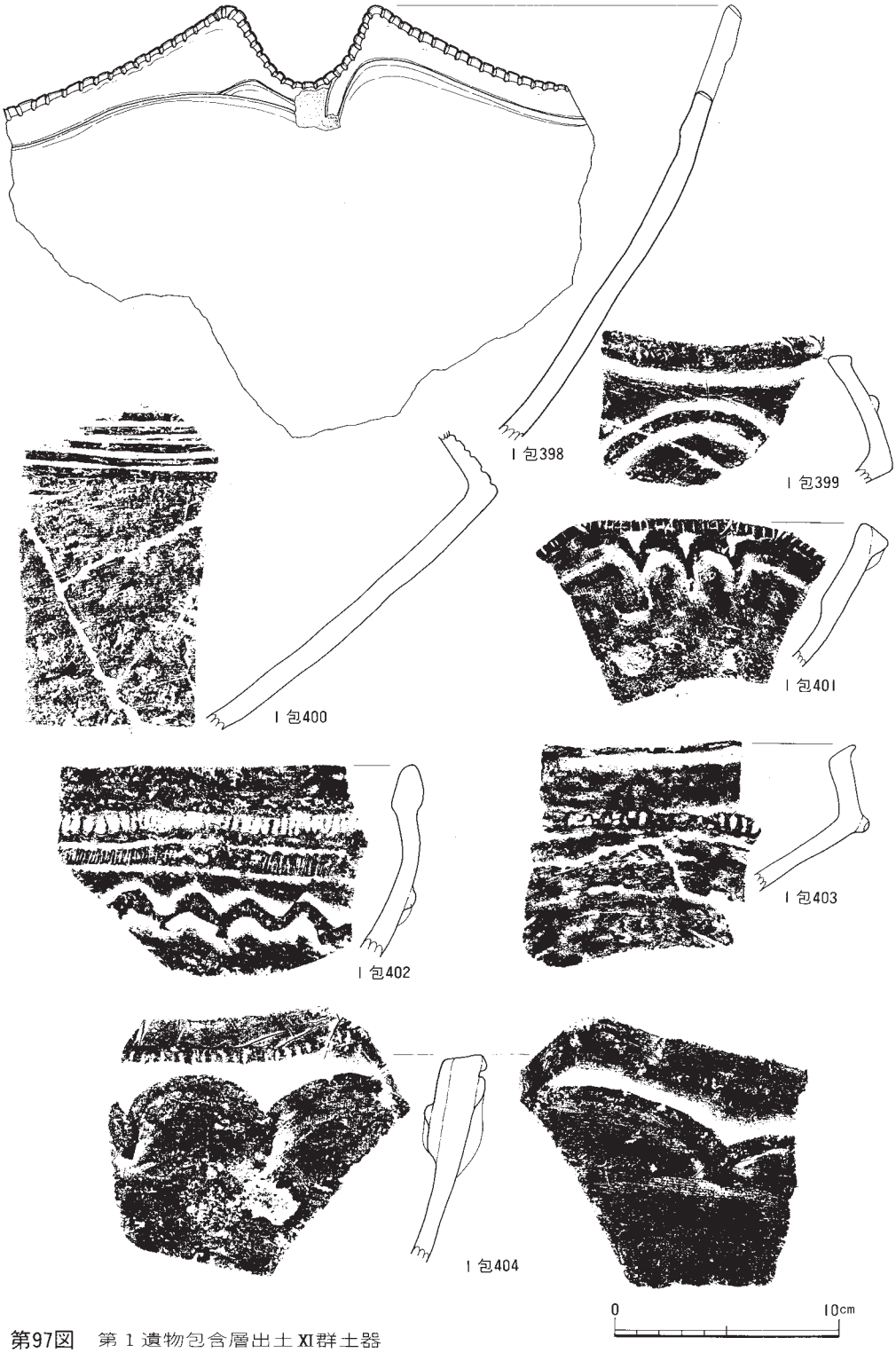
第94図　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器



第95図　第１遺物包含層出土Ⅹ群土器



第96図　第１遺物包含層出土Ⅺ群土器



第97図　第１遺物包含層出土Ⅺ群土器

あるいは貼り付けの複合口縁，１包304は胴部上端に瘤状の突起，１包308は口唇部に押捺の加えられた土器である。

Ⅶ群土器　粘土紐の積み上げ痕上に指頭等による押捺が加えられたもの。

１包312～319が本群に比定される。深鉢は胴部が丸味を帯び口縁部が外反するものと，胴部から口縁部に向かって直線的に開くものがある。文様は１類土器とした積み上げ痕上に押捺の加えられたもの（１包315～318）と，３類土器としたナデによる調整が加えられたもの（１包312～314・319)がある。

Ⅶ群土器　太い隆帯と角押文が多用されるものである。

１包320～365が比定される。器形は口縁上に大型の把手が付された深鉢が主体を占め，文様は口縁部下端を全周する隆帯で，口縁部と胴部に区画される。施文される文様・隆帯・角押文の他に，矢羽根状の連続刺突・円形刺突・平行沈線・波状沈線や隆帯上の押捺や刻み，口唇部の刻み等がある。角押文にも幅の広いもの，狭いもの，連続して施されるもの，刺突文的に施されるものがあり，特に口縁部では，これらの文様が複合して施されることが多く変化に富んだ文様を構成する。また，本群土器は地文に縄文がほとんど使用されない点も一つの特色である。

把手部分を含めた口縁部文様は，前述の各文様の併用によって複雑であるが，隆帯・角押文によって表出されるモチーフから大きく二分できる。口縁部に楕円形状・窓枠状の区画文の認められるもの（１包320・321・327・337～339・341・342・352）と，把手部に隆帯により渦巻文・円文等が表出されたもの(１包324～326・328～334)である。

口縁部に区画文を有するもののうち１包320は幅の狭い矢羽根状の連続刺突により，区画文が施される。１包321は区画内に幅の広い角押文が単独で横位に，１包327・337～339・341・342・352は隆帯に沿って角押文が施されたものである。１包337の区画内には波状沈線文が横位に施されている。１包322は口縁部に区画文は施されないが，１包320・321と同様把手部に押捺の加えられた隆帯が縦位に貼り付けられている。

把手部には渦巻文・円文等が隆帯によって表出されているが，その隆帯の多くは極めて太い。断面は丸又は台形状を呈し，幅の広い角押文が主に隆帯に沿って施文される。他に沈線文・幅の狭い角押文が器面を充塡するように密に施されたもの（１包324・325・331・332・334）もある。１包324・325・329は把手下端にブリッジ状の把手が付され，１包329・333では角押文にかわって沈線文が，１包333はさらに地文に縄文が施されている。

胴部文様は隆帯と角押文が主として施される。１包320～322・353・355は角押文が単独で数列，横位に施文され，１包320・322は縦位に隆帯が貼り付けられている。１包353・355では角押文間に波状沈線が横位に施されている。１包326・354・356～360・362は隆帯に沿って角押文の施されるものである。１包335・365は押捺の加えられた隆帯が縦位に貼付され，１包

335では沈線が横位に施されるが，いずれも角押文は施されていない。

１包323はキャリパー状の深鉢で，口縁上には突起が付されている。文様は隆帯間・沈線間に施されたキャタピラ状の文様が，口縁部に沿って２条，突起下に縦位に１条，頸部に横位に１条施されている。地文は単節縄文（ＬＲ）が施されている。

Ⅹ群土器　交互刺突文が施されたものを本群とした。

１包366～390が比定される。本群土器は交互刺突の施される部位・交互刺突以外に用いられる文様から大きく３つのグループに分けられる。

＜１類＞　交互刺突（器面に斜方向）が口縁部・胴部に施文される土器で，地文を持たない。１包366～369・370・374が比定される。１包366は口縁・胴部上位に円形文の付されたもので，楕円形の区画文が上下２段認められる。交互刺実は下段の楕円形区画内に施されている。

＜２類＞　交互刺突（器面に斜方向）が口縁部のみに施文される土器で，地文を有す。１包371～373・377～385が比定される。交互刺突とともに有節沈線・隆帯が施されるもの（１包377～387）がある。１包377・379～381・387では刺突間が波状にならない。

＜３類＞　円形刺突（器面に直角）が交互に加えられる土器で，地文を有す。１包388～390が比定される。交互刺突は頸部・口縁部下端に施され，他に隆帯・沈線が施文されている。

Ⅺ群土器　浅鉢土器を一括している。

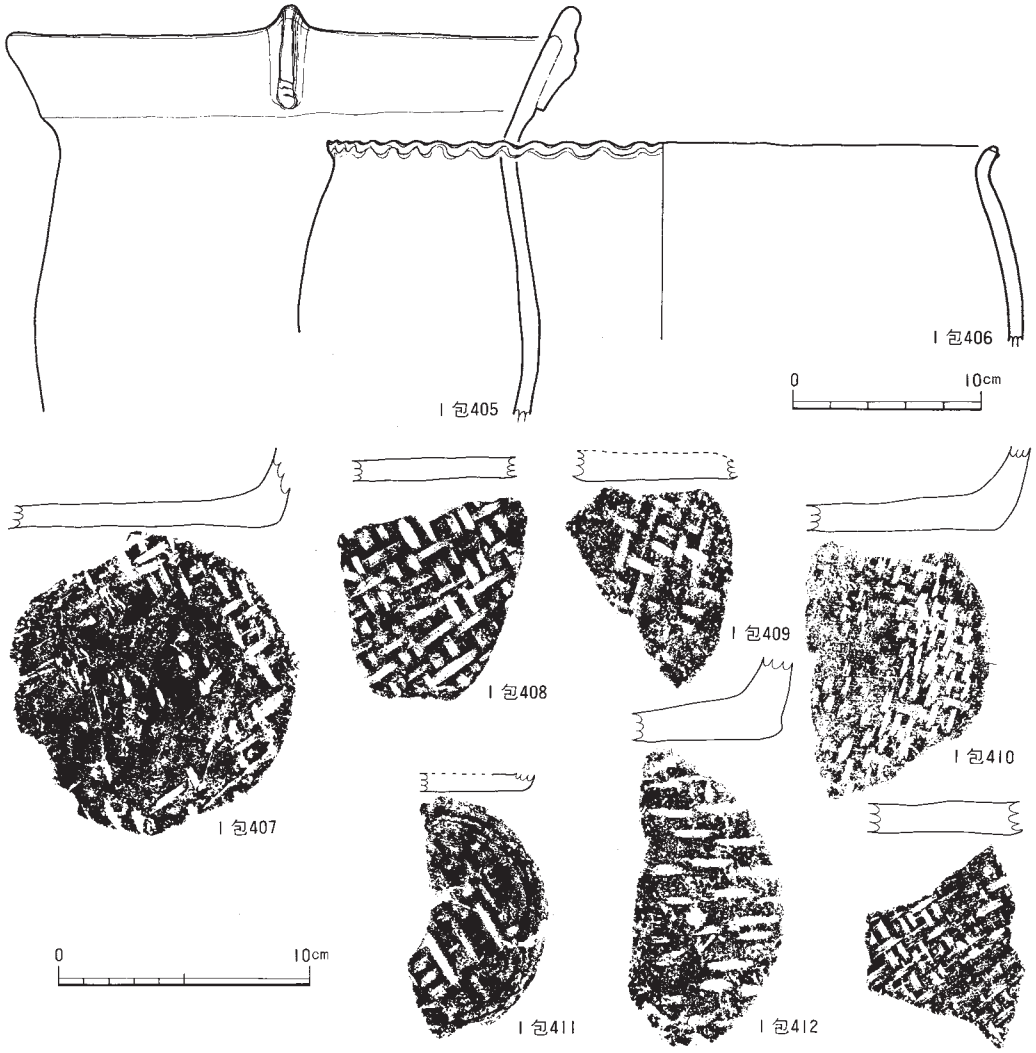
１包391～404が比定される。器形は底部から口縁部まで緩やかに開き，口縁は波状のものが多い。内面には稜が認められるもの（１包392・394～396・398・401・402・404）と口縁部が内屈する平縁のもの（１包391・397・399・400・403）がある。

文様は一般的に簡素であるが，口縁部の内屈するものは屈曲した口縁部外面に加飾される傾向が強い。１包391･397では太い隆帯により窓枠状･長楕形状区画が認められ，１包397は区画に沿って連続刺突文を施し，その区画内には細い沈線を密に引いている。１包399は隆帯・１包400では沈線が施されている。

屈曲しない浅鉢では無文のもの（１包395）と僅かでも施文されるものがある。施文される浅鉢には，口唇部上に刻みの加えられるもの（１包392・398），内面に楕円形区画文の施されるもの（１包394），口縁部外面に隆帯が弧状に貼り付けられるもの（１包396・401・402・404），波状の沈線文（１包396），角押文と沈線（１包402）が施されるものがある。

Ⅻ群土器　縄文時代中期の土器であるがいずれの群にも入らない土器を一括した。

１包405の器形は胴部が丸味を持って立ち上がり，頸部は一旦括れる。僅かに肥厚する口縁部は外傾して開く。口縁部には縦位の隆帯が棒状に貼り付けられるのみで，他に文様は加えられない。１包406は丸く膨らむ胴部から口縁が短く外反する器形でこれといった文様をもたないが，口唇部のみは押捺の結果波状になっている。

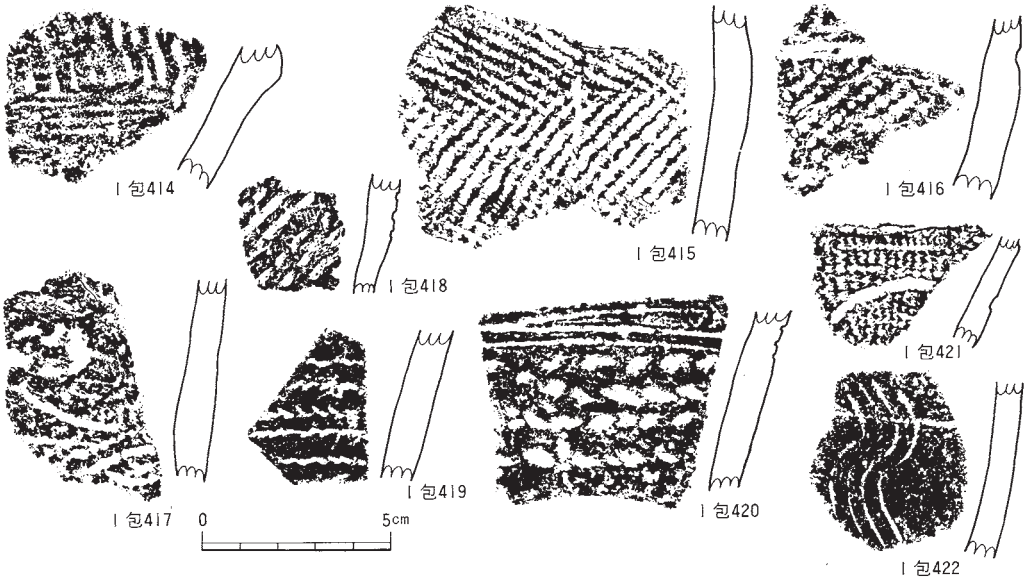


第98図　第１遺物包含層出土Ⅻ群土器，縄文土器底部

１包407～413は，網代痕の認められる底部である。底部のみで所属群が不明であるが，中期の土器破片が密集したなかから検出されており，当期のものと考えられる。

ⅩⅢ群土器　縄文中期以外の土器を一括した。

胎土中に繊維が含まれるものと，含まれないもので大きく２分し得る。１包414～418は胎土中に繊維が含まれるもので，１包414は内外面に条痕文が施文され，さらに外面横位に施された太い隆帯上に，縦位に沈線が加えられている。１包415は羽状縄文の施された土器で，撚りの異なる原体を単独で横位に回転させている。原体には２段の縄文（ＬＲ）と０段多条の縄文が使用されている。１包416・417は２段の縄文（ＬＲ）が施文され，１包418は押し引きによる浅い沈線



第99図　第１遺物包含層出土XⅢ群土器

が斜位に施されたものである。

１包419～422は胎土中に繊維を含まない土器で，１包419・420は変形爪形文・平行沈線文(420)が施されている。１包421は貝殻腹縁文が密に施され，沈線が１本弧状に加えられている。１包422は平行沈線による波状文が縦位に施されたものである。　（大越・松本）

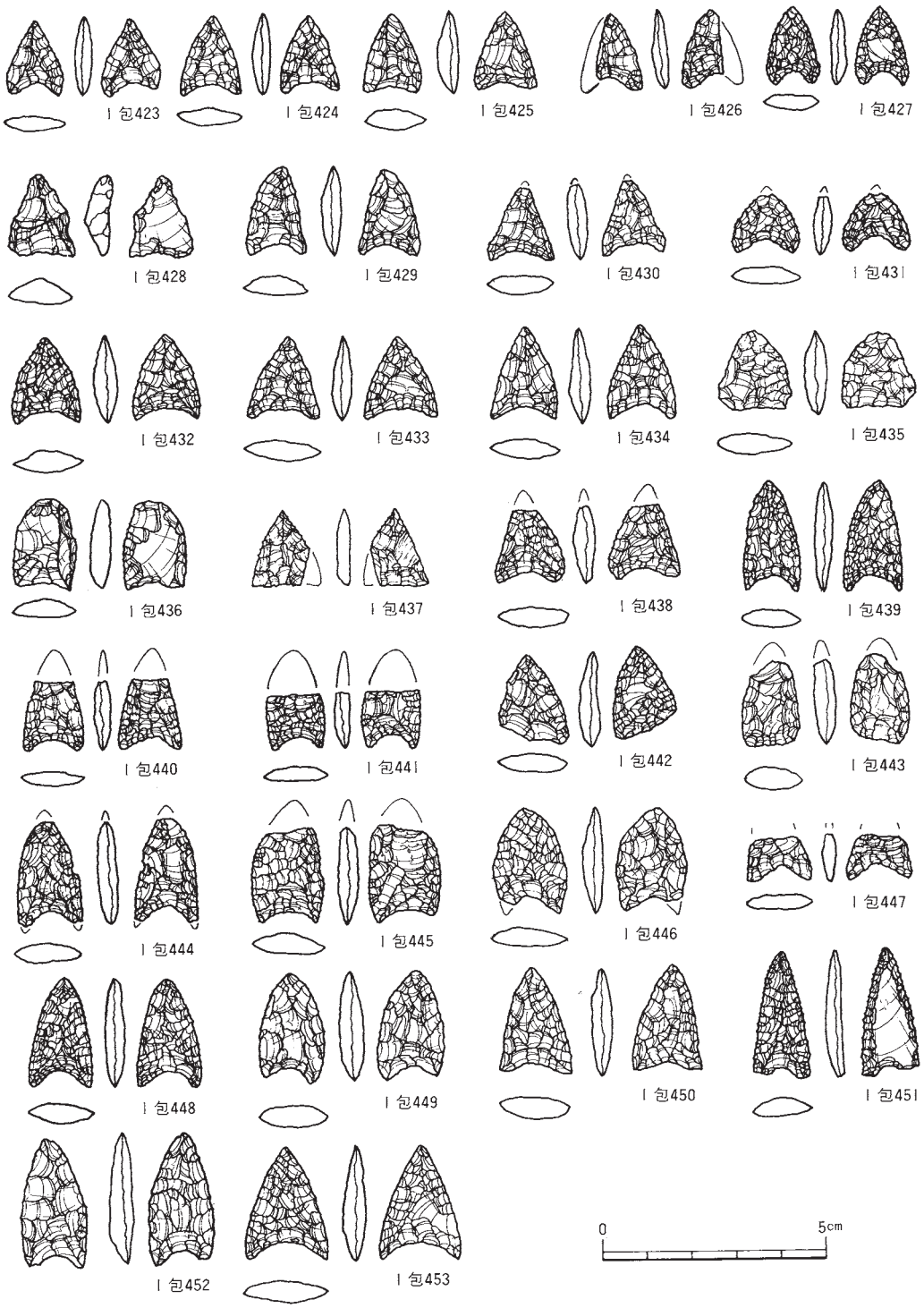
〔石　　器〕(第100～107図，図版76～78・81・82)

石器には，石鏃67点，不定形石器12点，石篦状石器１点，磨製石斧２点，磨石・凹石類35点がある。この他に多類のフレーク・チップ類が出土している。本項ではこれら石器を各器種毎にまとめ報告するが，フレーク・チップ類のなかで使用痕の認められるものは不定形石器のなかで記載した。

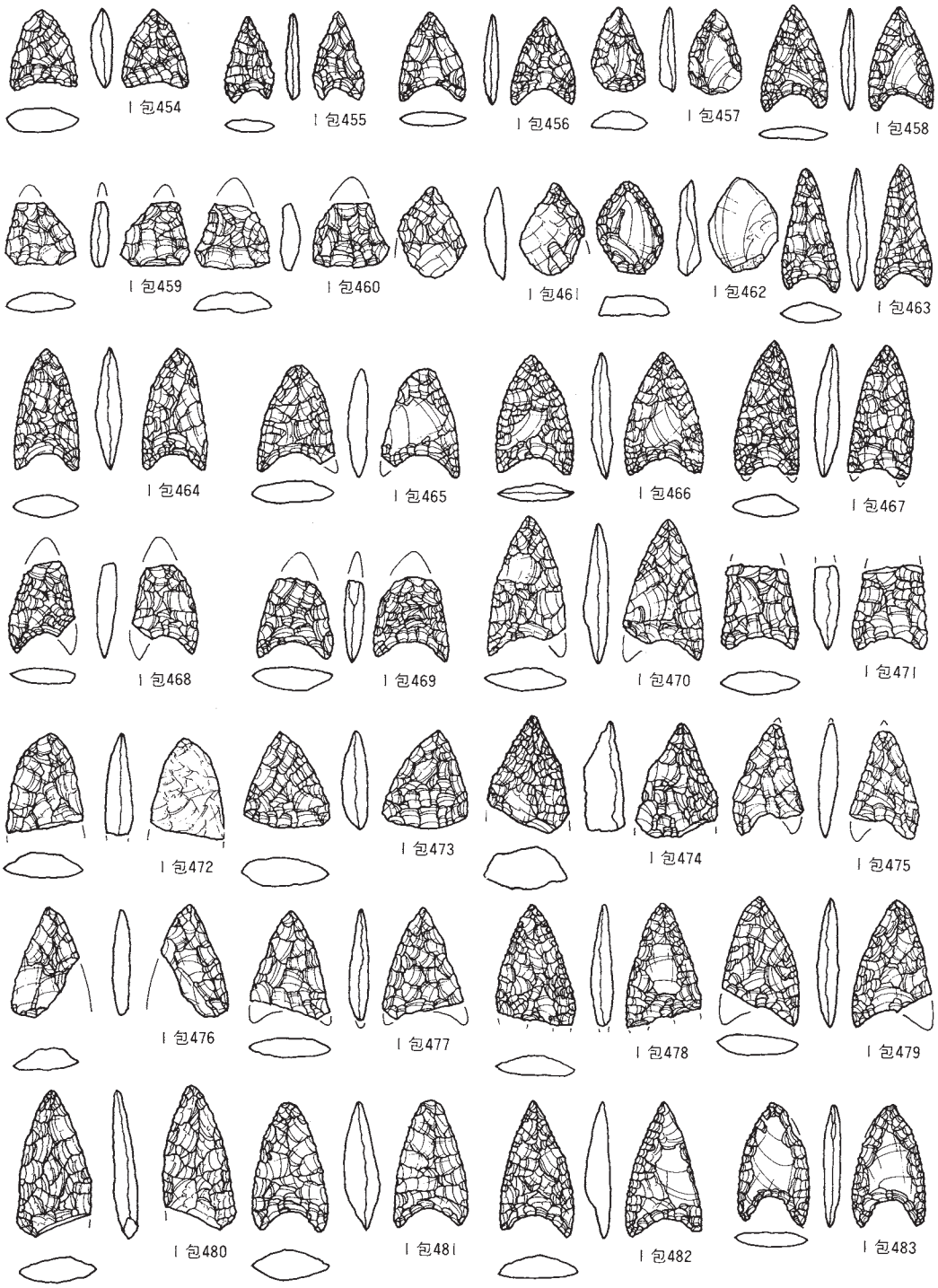
石　鏃　総数67点と本跡出土石器の最多数を占める基部が欠損する６点を除く他のものはいずれも無茎の石鏃で，基部に抉りのあるもの50点，抉りのないもの11点を数える。側縁の形態では，丸味を帯びるもの35点，直線のもの29点である。欠損品は27点あり欠損部位毎の内訳は，先端部欠損が13点，基部をすべて欠損するもの２点，

第17表　第１遺物包含層出土石鏃形態分類表

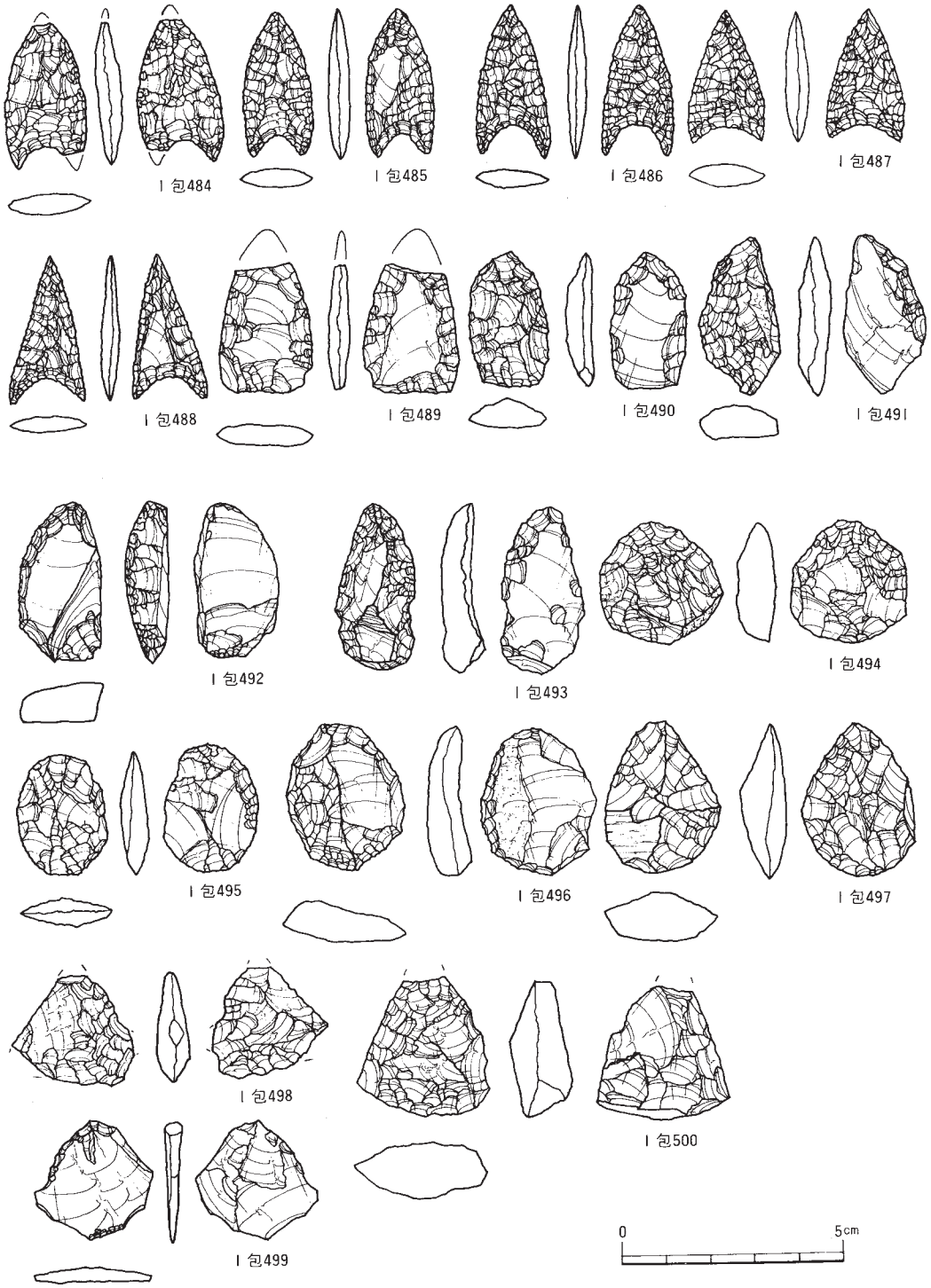
側　縁	抉　り	遺　物　番　号
丸　味	有	423 422 425 426 427 431 430 433 436 445 446 449 452 454 456 458 464 465 466 468 469 475 479 461 483 484 485 487
	無	435 437 462 463
	不　明	470 476 478
直　線	有	428 429 430 435 438 439 440 441 444 448 450 451 453 455 463 467 470 471 482 486 482
	無	457 459 460 473 489
	不　明	474 477 480



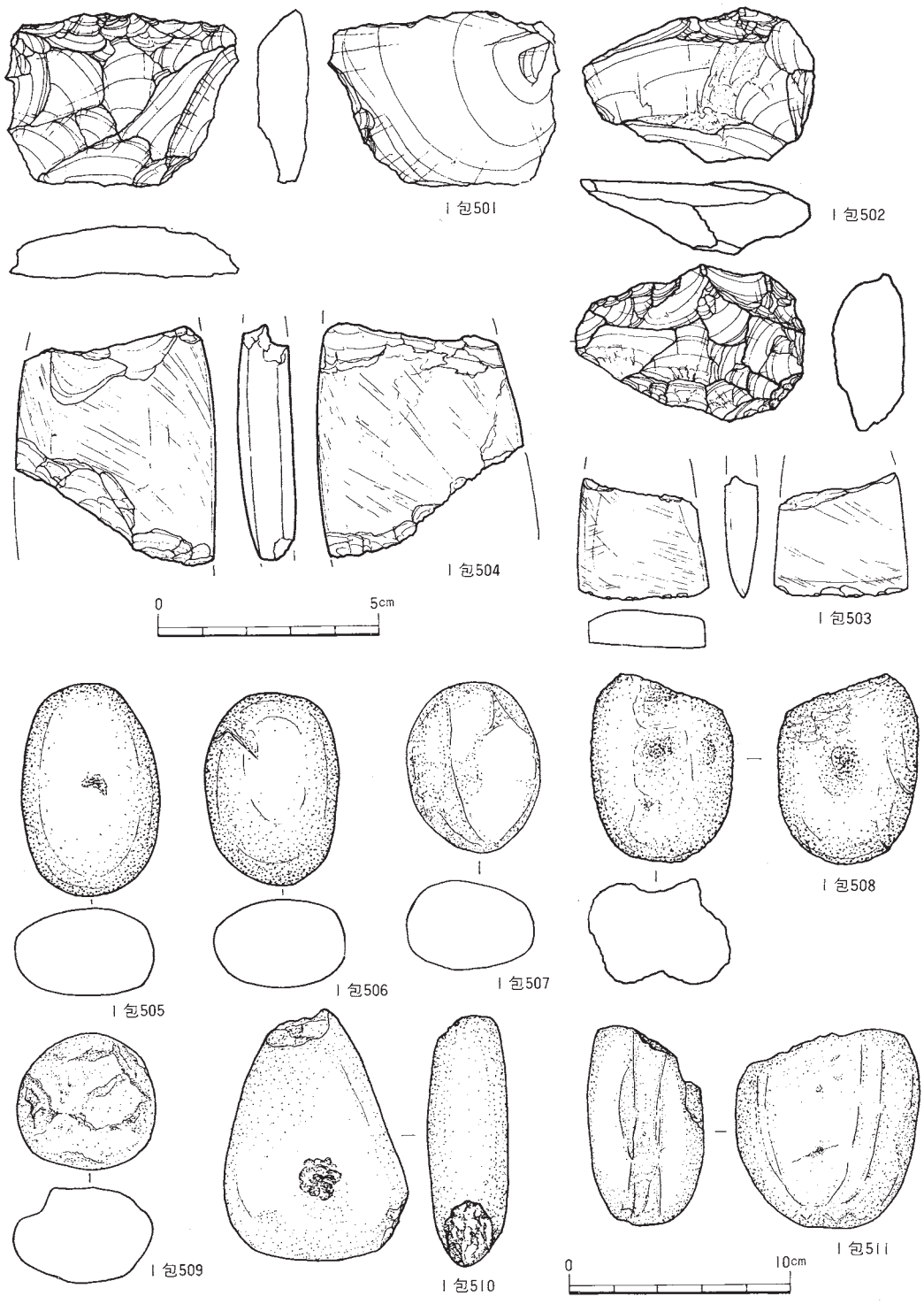
第100図　第１遺物包含層出土石器



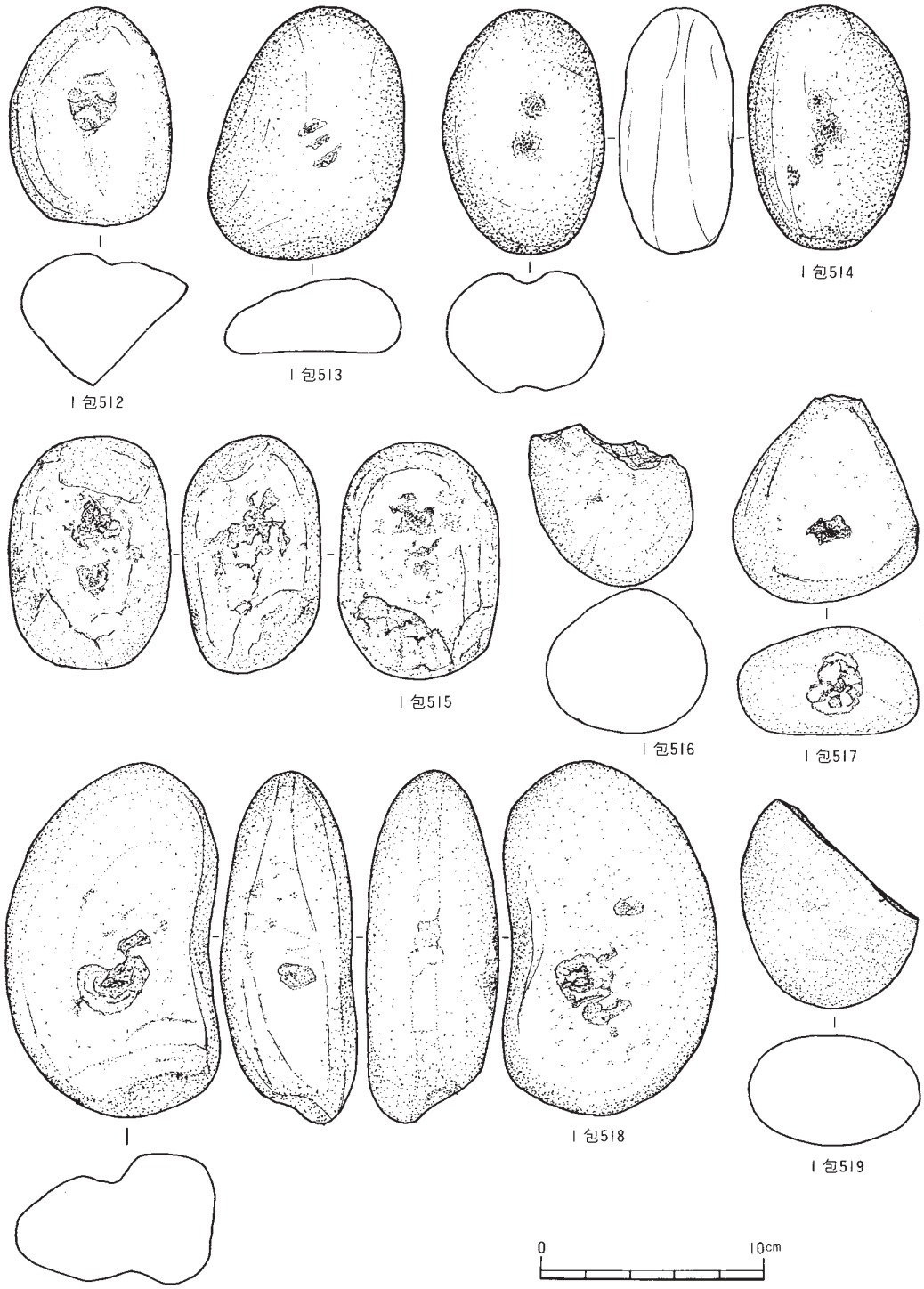
第101図　第１遺物包含層出土石器



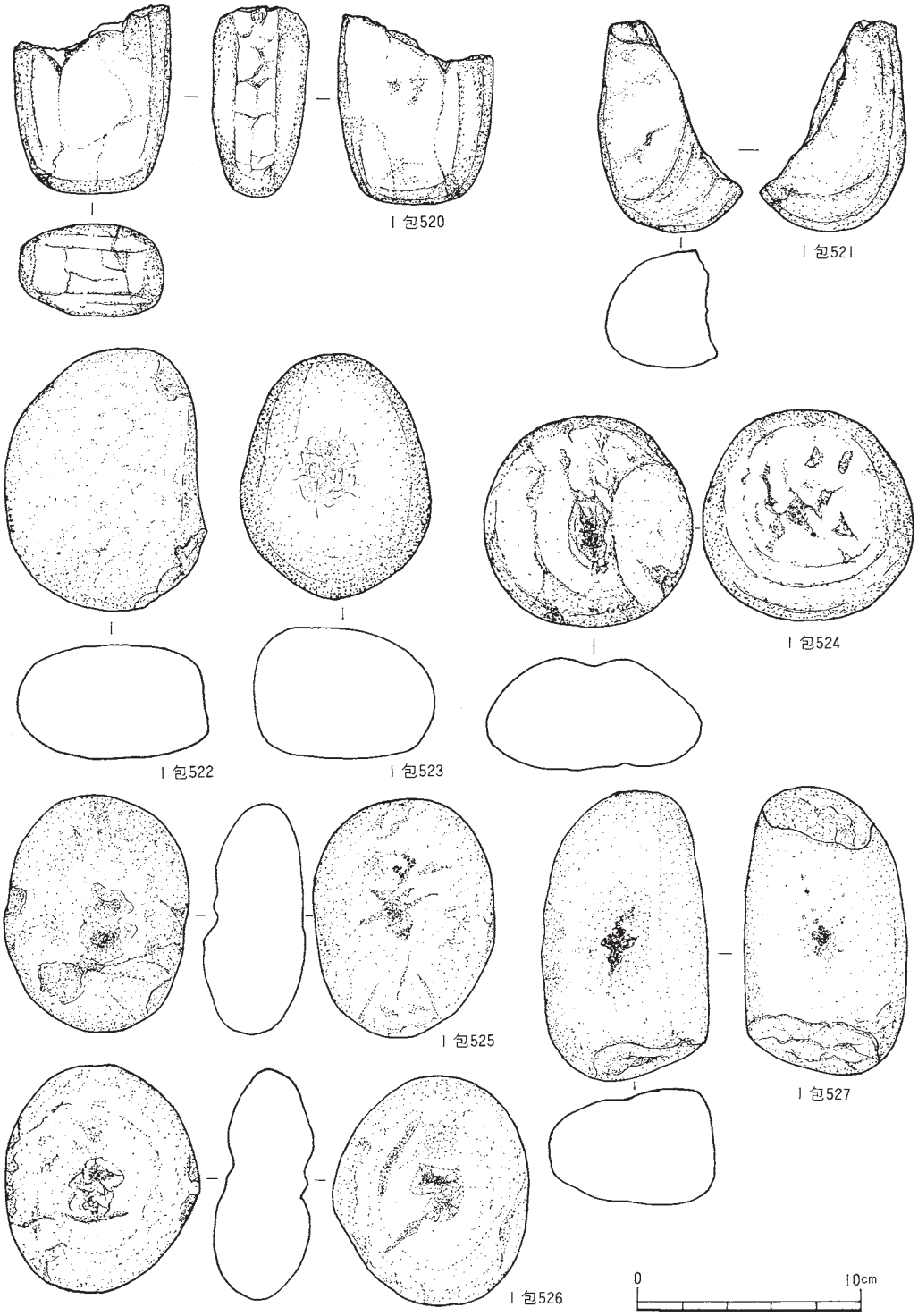
第102図　第１遺物包含層出土石器



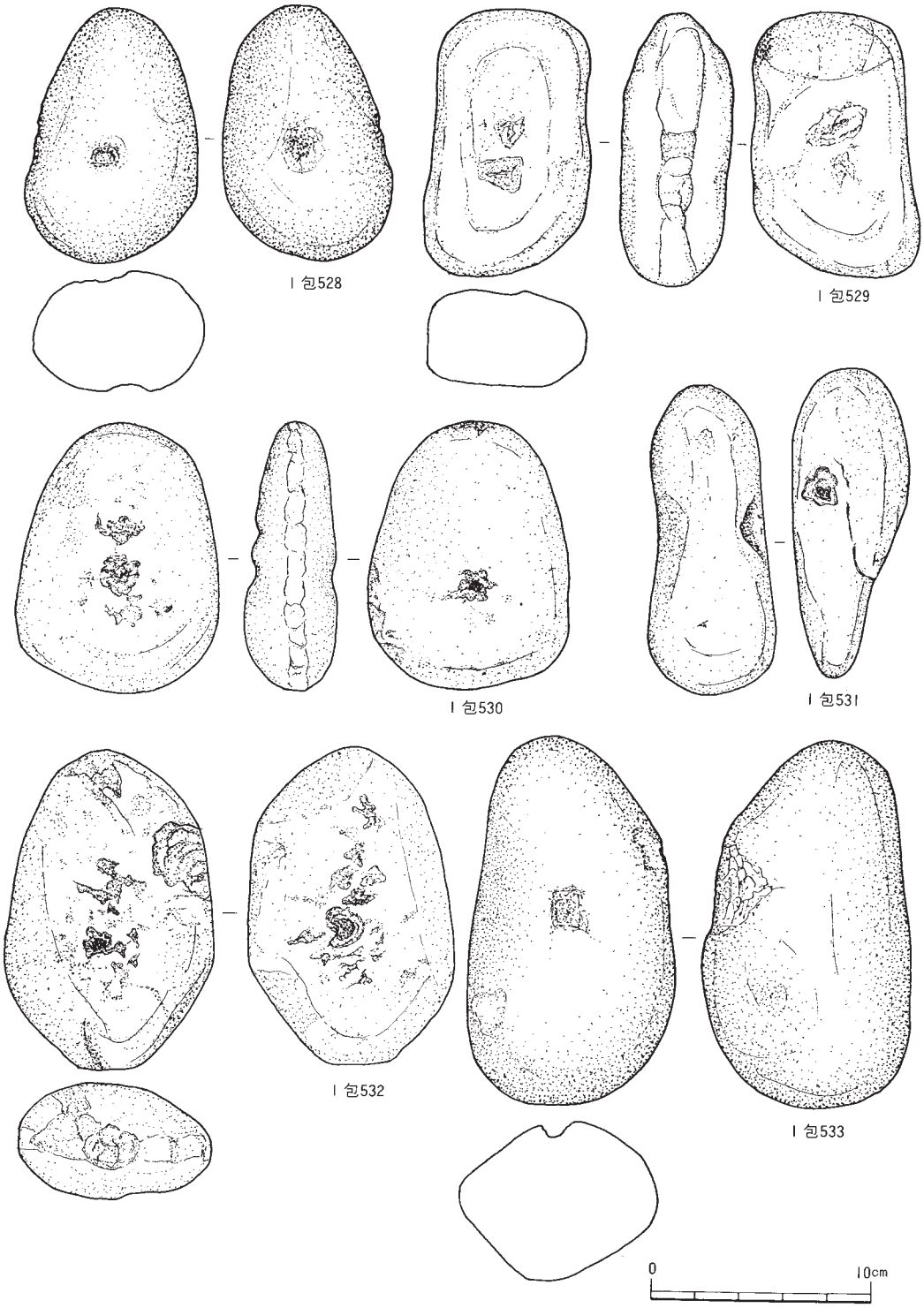
第103図　第１遺物包含層出土石器



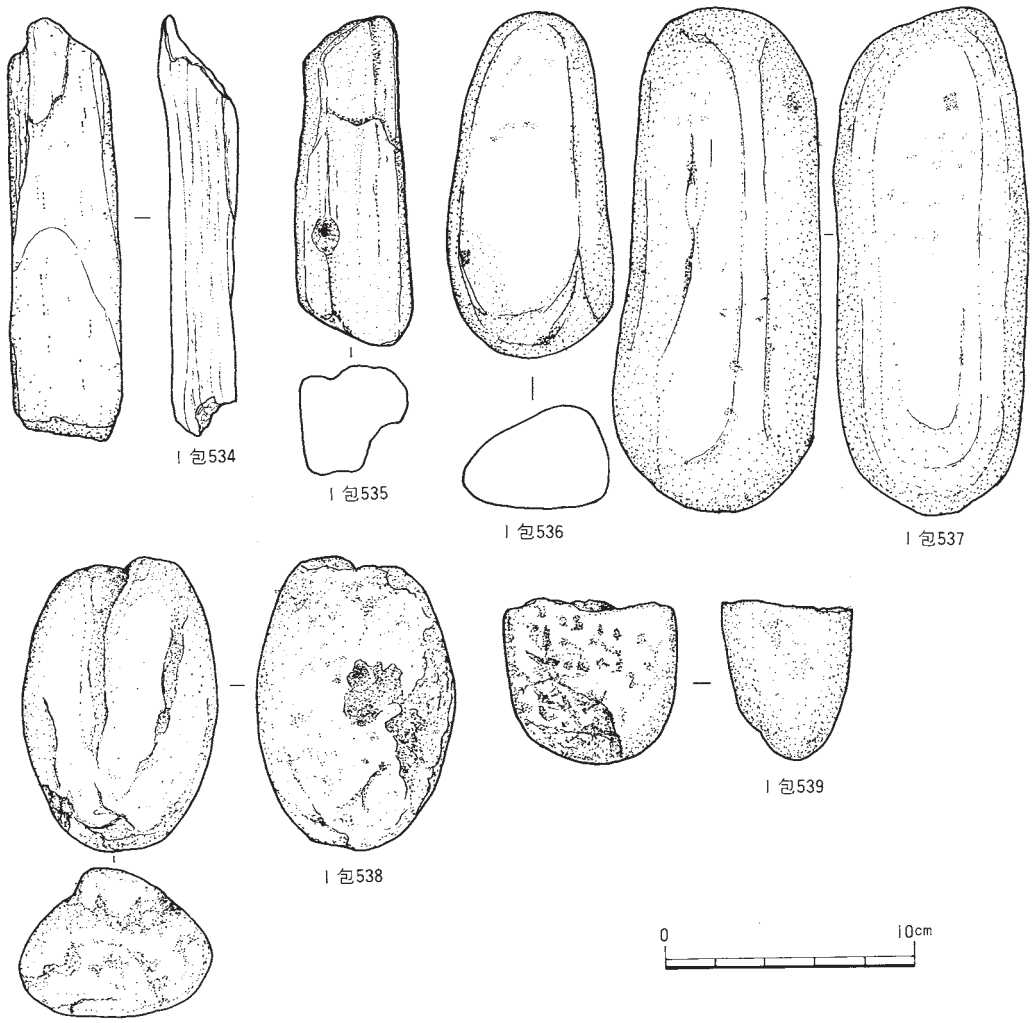
第104図　第１遺物包含層出土石器



第105図　第１遺物包含層出土石器



第106図　第１遺物包含層出土石器



第107図　第１遺物包含層出土石器

基部の一部を欠損するもの６点，先端部と基部の一部を欠損するもの３点，側縁部を欠損するもの３点である。大きさは鏃長幅が明確なもののうち，最小のもの（１包423・427）で1.7cm（長）×1.2cm（幅），最大のもの（１包465）は3.5×1.7cmを測るが，鏃長1.7～2.1cm程度の比較的小型の鏃が多い。厚味は0.4～0.6cmのなかにおさまり，あまりばらつきがない。

１包428は形態が他の石鏃に比べ整っておらず，側縁の調整剥離も疎らで荒いことから石鏃の未成品と考えられる。１包461・462は楕円形状の小剥片の周縁に剥離調整が加えられたもので片面に主要剥離面が残されている。大きさも他の石鏃とほぼ同じため石鏃に含めたが，後述する不定形石器の中に含まれる可能性もある。１包474は他と比較し厚手で石錐とも考えられるが，一般的な石錐に比べ先端部の作り出しが弱いことから石鏃とした。

不定形石器　出土総数12点（１包490～501）である。大きさは2.8～4.0cmを測るもので，石鏃に比べると長さと幅の比が少なく器厚も１cm前後と厚い。１包490～493は縦長剥片の側縁に鋭角的な刃部（１包490）や鈍い刃部（１包491・492・493）が作り出されたもので，片面に主要剥離面を残している。１包494～497は円形に近い形を呈するもので周縁に刃部を作り出しているが両面から剥離し鋭角的刃部をもつもの（１包494・495・497）と，片面から剥離し鈍角的刃部をもつもの（１包496）とがある。器面全面にも細い剥離が加えられ，全般的に丁寧に作り上げられている。１包498～450は，不定形な剥片の側縁に鋭角的な刃部を，１包475は台形状の剥片の一側縁に荒い剥離調整が加えられたもので，片面には主要剥離面を残す。

石箆状石器　１包502の１点のみである。厚い剥片部の両面から荒い剥離が加えられているが，刃部は明瞭でない。片面に主要剥離面を残す。

磨製石斧　１包503・504の２点である。いずれも欠損品であるが１包503は小型のもので一部刃毀れが認められる。相方とも身が薄く，側縁の仕上げには稜をもたせている。

磨石・凹石類　総数35点出土している（１包505～539）。本跡出土石器中石鏃についで出土量の多かったものである。主に直径10cm前後の丸味を帯びた扁平な河原石が用いられ，いずれの器面にも磨り痕が認められる。このなかには凹部を有する14点（１包508・512・514・515・518・524～526・528～530・532・535・538）と，敲き痕の認められるもの２点（１包505・517）が含まれる。（松本）

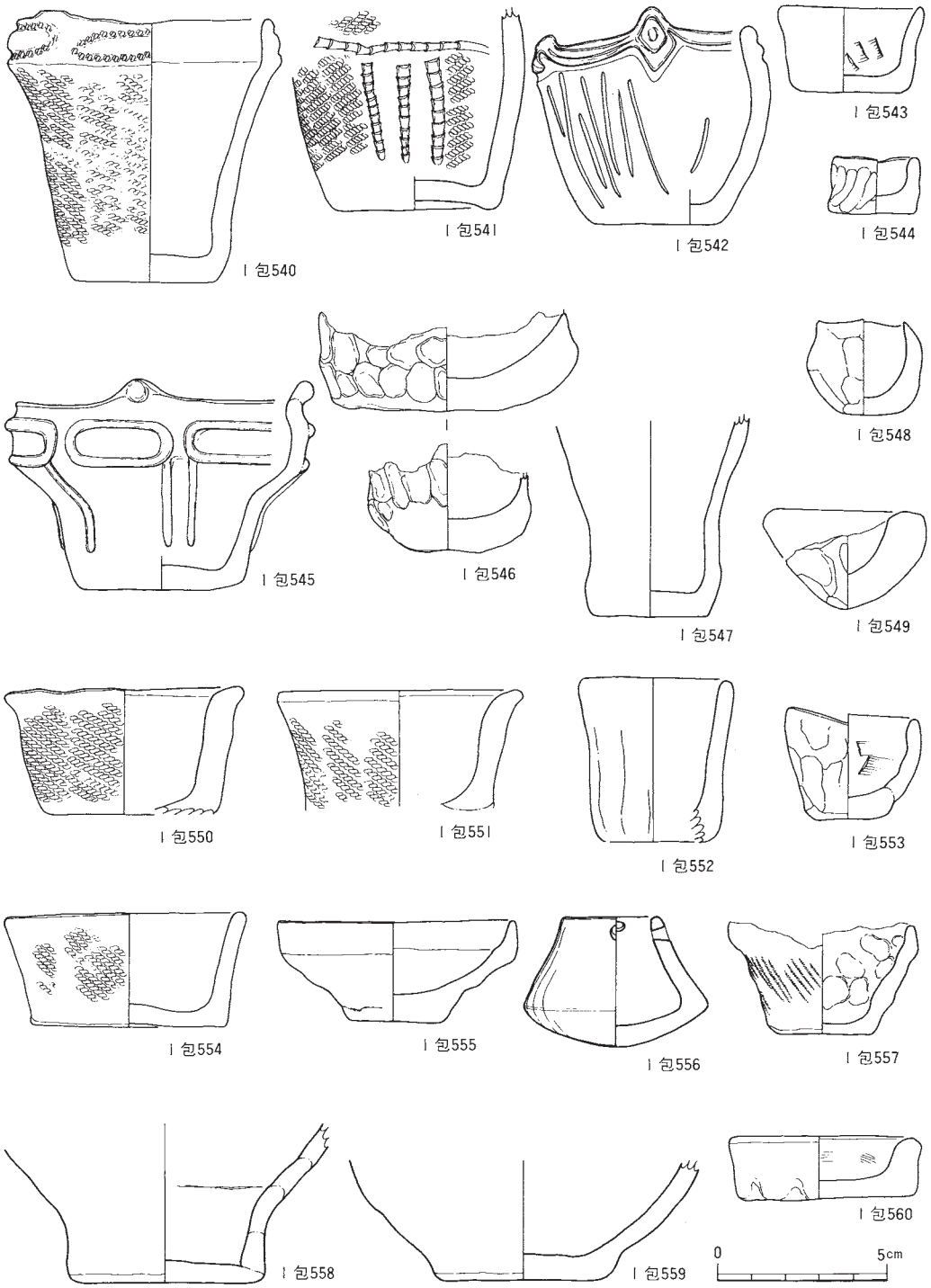
〔土　製　品〕（第108～113図，図版67～75）

本跡からは土器・石器の他に各種土製品が多数出土している。器種には，ミニチュア土器・土偶・円板状土製品・三角状土製品等がある。この他に土器口縁に付された人面状・獣面状の把手も一般的な把手とは若干性格が異なると考えられるため，本項で取り扱う。

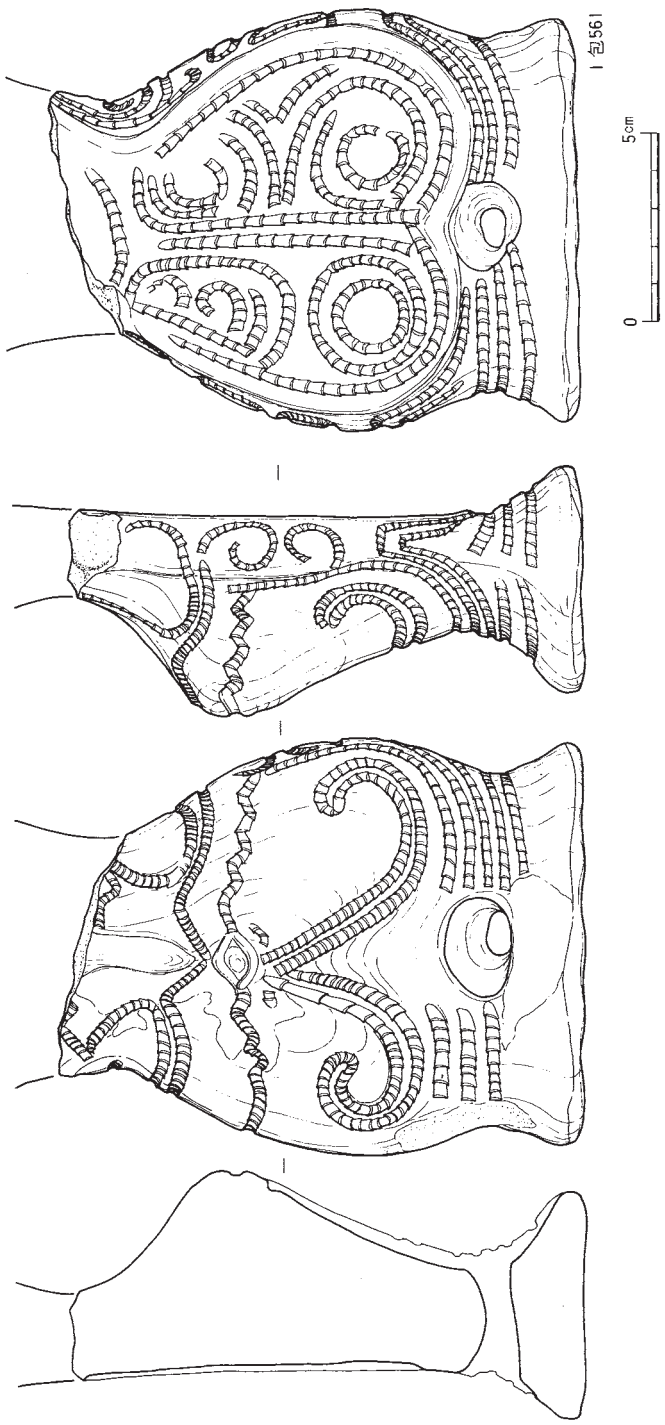
ミニチュア土器　１包540～560の21点である。器高が判明するもののなかでの最大高は１包540の7.5cmであるが，多くは3.5～６cmの範囲に収まる。これらの土器は大別して精製されたもの（１包540～542・545・550・551・554～557）と，粗製のもの（１包543・544・546～549・552・553・558～560）の二種がある。

精製された土器では文様が施文される例が多く，その文様要素やモチーフは深鉢のそれに共通するものがある。１包540は側面圧痕，１包541は有節沈線，１包542は沈線，１包545では隆帯によって文様が表出されており，これを540はⅠ群，541はⅡ群，545はⅧ群の各群に比定することも可能である。１包550・551・554・557は縄文のみが施文され，１包556は対面する位置に各１ケ所焼成前にあけられた小孔が設けられている。

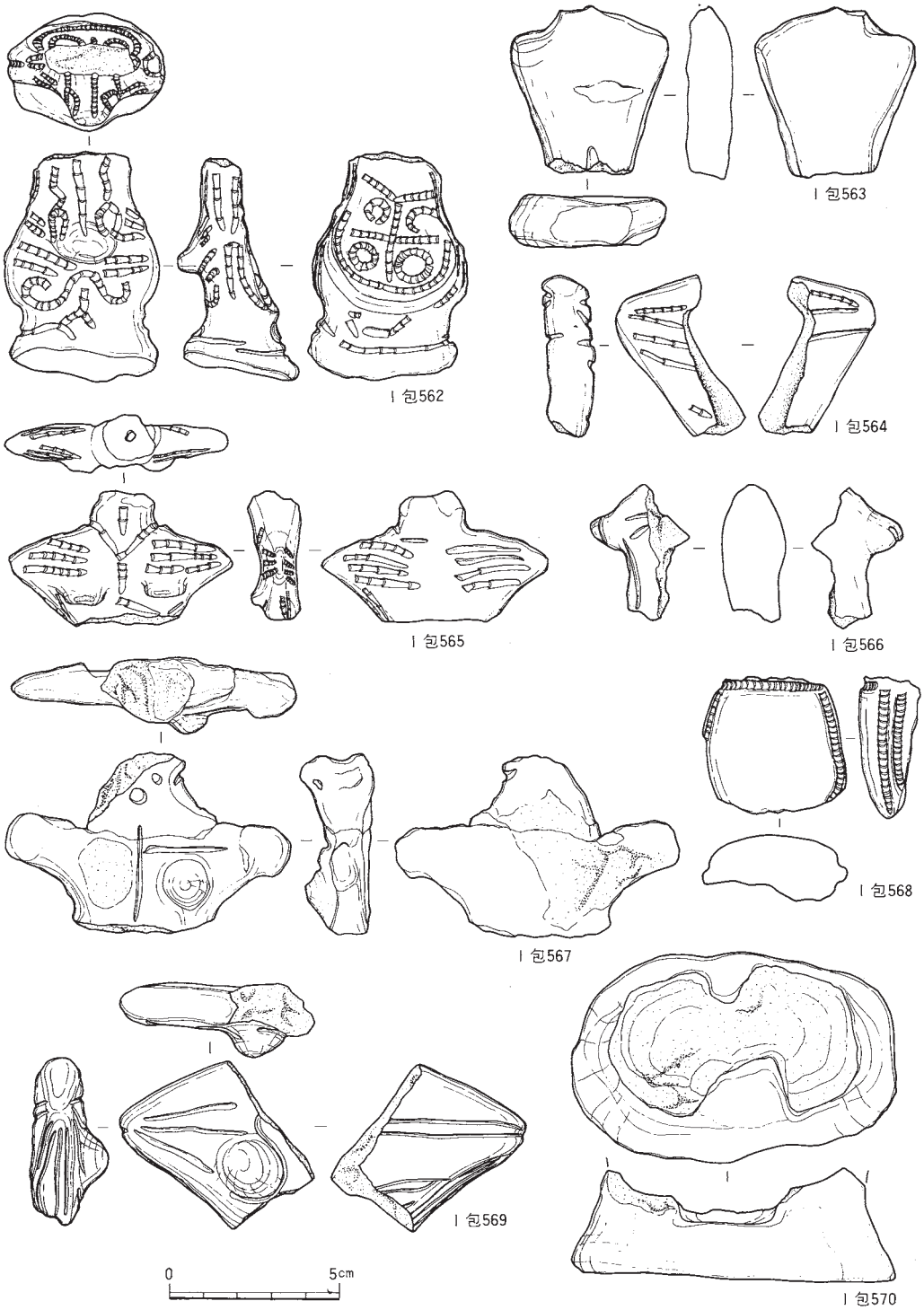
粗製の土器は文様が施文されず形態等一定しないが，１包546では器面全面に指頭によると思われる凹凸が顕著でⅦ群土器と共通した特徴をもっている。



第108図　第１遺物包含層出土ミニチュア土器



第109図　第１遺物包含層出土土製品



第110図　第１遺物包含層出土土製品

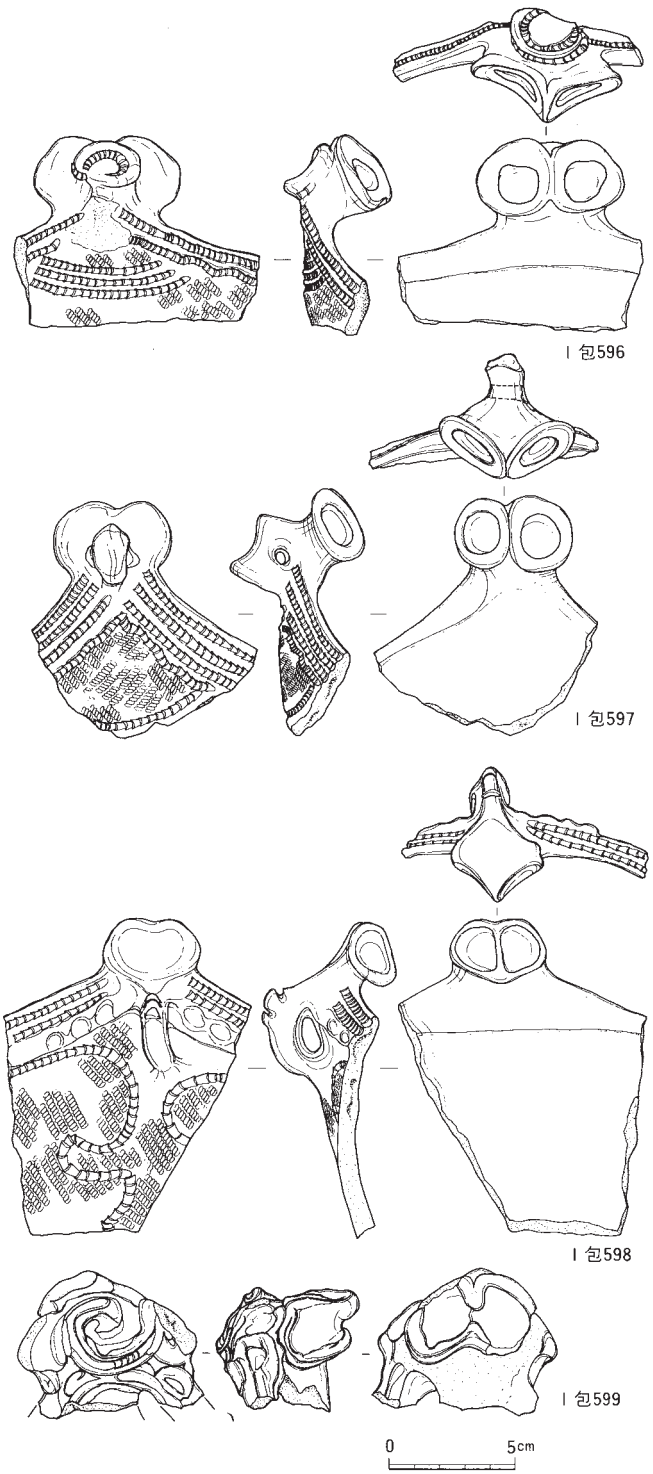
第111図　第１遺物包含層出土土製品

第112図　第１遺物包含層出土縄文人面・獣面状把手

土　偶　１包561～574の14点が検出されているが，いずれも欠損品である。頭部欠損のもの（１包561・562），頭部・脚部を欠損するもの（１包563），胴下半～脚部を欠損するもの（１包565・567）と，肩部（１包564・566・569），脚部（１包568・570・571～574）の一部のみ残存しているものがある。形態は脚部のみのものを除くといずれも板状であるが，各部位の表現の相異によって多少形態に変化がみられる。１包561・562では，腰の部分を大きく張り出させ全体的に丸味を持たせている。

１包563～567・569では，腕を真横に短く突出させ胴部をしぼっている。前者では腹部を，後者では乳房を強調するものが多い。頭部は１包565・567で瘤状にとりつくが，１包567のように目・口が刺突により表現される程度であり，具象的に強調される例はない。

体部の文様は全般にわたり施文されるが，特に肩・乳房・首周りに施文されるものが多い。施文される文様では，有節沈線のもの７点（１包561・562・564・565・568・573・574），沈線が施されるもの４点（１包566・567・569・571）がある。



第113図　第１遺物包含層出土縄文人面・獣面状把手

その他の土製品　形態の相異で，円板状土製品や三角状土製品の類がある。

１包579は円板状の土製品としたものである。直径20.5cm，厚さ２cmを測る。側縁部が僅かに立ち上がり，うねりの少ない波状を呈し，一見盆か皿にみえる。文様は，沈線により中央部に大きな円文を描き，その円文から波底部に向け末端を渦巻状とした放射状文が５本施される。さらに放射状文に沿って弧状に沈線を施し波底部間を繋いでいる。

１包575は三角形状土製品である。一辺約６cmを測り，全体的に幾分反り返っている。三角形の頂部には，各々刻みが加えられている。

１包577は小型の円型土製品である。直径3.5cm，厚さ2.1cmを測る。施文される文様はないが，各面ともよく研磨されている。

人面・獣面状把手　土器の把手の部分に人面もしくは獣面と思われる文様が表出されたものを一括した。多くは土器の内面に顔面が向かう形をとるが，１包580のみは外面に貼付されている。文様は少なからず抽象化されているが，抽象化の度合いにより１）１包580のように頭から足まで人体と思われる文様を貼り付けるもの，２）顔面の輪郭を隆帯で縁取り刺突によって目や口を表現したもの（１包578・581・583），３）顔面の輪郭のみを縁取ったもの（１包583～593・595）３種類認められる。１）と３）との顔面は共通した特徴を持っている。３）のもの単独では抽象化した対象物が想定できかねる面が多いが，手・足を付けた１）の顔の表現法によって３）が顔面のデフォルメであることがわかる。また１）や３）では人体や顔面の縁取りに沿って有節沈線が加えられることがある。１包594は同じ挿図内で取り扱ったが，形態的には３）に近似するものの多少異質な側面を含んでおり，あるいはこの群のなかからはずれる可能性もある。

これらの把手には有節沈線が施文されることが多く，この点からいえばⅡ群土器のなかで考えられる破片である。（大越）

第２遺物包含層

遺　　構（付図，図版27）

南側傾斜面，Ｄ－５グリッド東側からＤ－６グリッドにかけて検出された遺物包含層である。範囲は東西12m，南北４～６ｍを測るが，南側はすでに開田時の削土によって破壊され，不明である。包含層の広がる範囲は周囲に較べ僅かに窪んでおり，この窪地にＬ－Ⅱとした有機質の黒褐色土が堆積している。最大層厚は南端で約20cmを測るが，細分は不可能であった。

遺物は第Ⅱ層中から多量に出土したが，上位からの出土はなく中位から下位にかけ集中する。第Ⅱ層と第Ⅳ層との間には，黄褐色土を含む茶褐色砂質土が部分的に堆積していることが認められた。本層は基本層序における第Ⅲ層に対比されるが，砂質分が多く粘性にかけるため二次的な堆積物と思われる。遺物は第Ⅱ層と第Ⅲ層の層理面まで入り込んでいる。

遺　　物

本跡から出土した遺物の種類やその出土状況は，遺物量の多少という点を除けば第１遺物包含層とほぼ同一の内容を示している。量的に多い土器破片もすべて第１包含層中に認められるものであり，本項では各土器群ごとの詳しい記述は省き，ある程度器形を復元し得た土器を中心に述べる。

〔縄文土器〕(第114～121図，図版44・63～65)

出土した土器は各々以下のように類別される。

第Ⅰ群	２包１～11	第Ⅷ群	２包96～103
第Ⅱ群	２包12～75	第Ⅸ群	なし
第Ⅲ群１類	２包76～80・82	第Ⅹ群	２包109・110
３類	２包81	第Ⅺ群	２包104～108
第Ⅳ群１類	２包83～88	第Ⅻ群	なし
第Ⅴ群	２包89～92	第ⅩⅢ群	２包113・114
第Ⅵ群	２包93・94	底　部	２包111・112
第Ⅶ群	２包95		

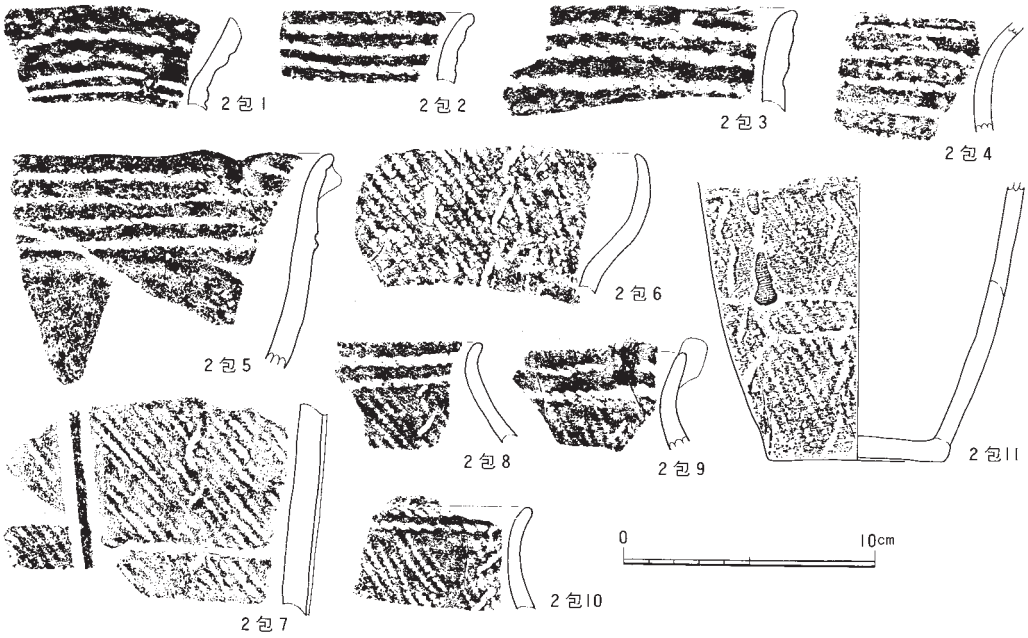
ここである程度器形を復元し得た遺物は，Ⅱ・Ⅵ・Ⅷ群土器に比定される僅かの土器である。

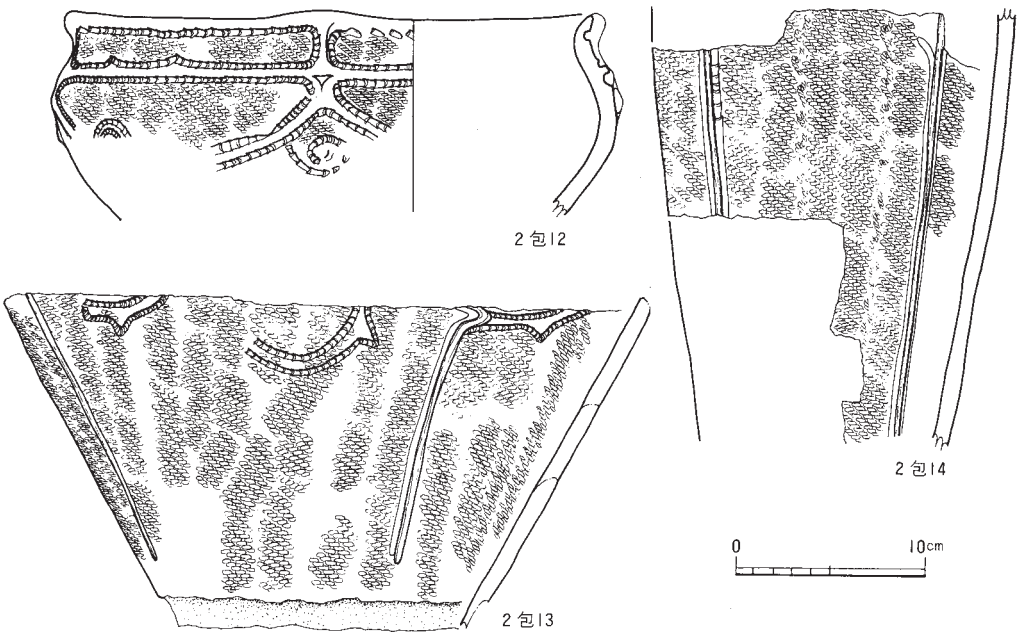
Ⅱ群土器　２包12は深鉢の口縁部で，上位に長楕円形区画文，下位に三角状区画文が，隆帯及び隆帯に沿って施された有節沈線とによって描き出されている。三角状区画文の接点には，有節沈線により渦巻文が表出されている。２包13・14は深鉢の胴部である。隆帯・有節沈線・沈線を縦位に施し胴部を縦に区画し，区画間には有節沈線(２包13)，縦の綾絡文(２包14)を施している。２包15は小型の土器で有節沈線は施文されていないが，本例と類似したモチーフをもつ土器が第１包含層のⅡ群土器中に認められるため本群に含めた。２包35・36は縄文原体の側面圧痕文と有節沈線が併用されている。２包65・67・69～73は同一個体の土器と考えられるもので，撚りの異なる原体を縦方向に回転し羽状縄文としている。

Ⅵ群土器　２包94は口縁部が外反する深鉢で，口唇上に押捺が加えられている。

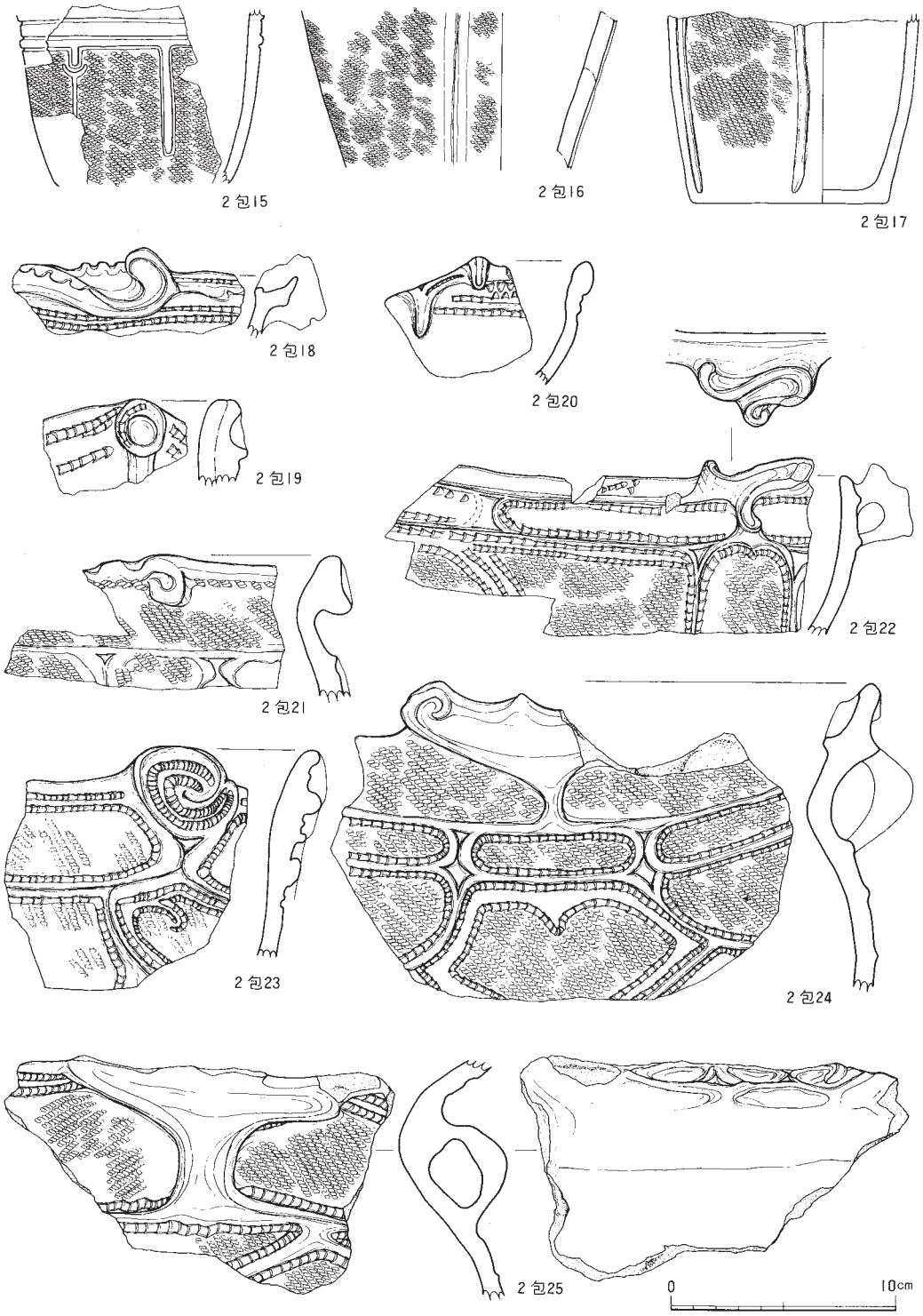
Ⅷ群土器　２包98は巨大な把手が４個とりつく深鉢である。把手頂部から太い隆帯を懸垂させ口縁部を大きく４分割し，側縁に幅広の角押文が加えられた太い隆帯によって窓枠状の区画文が配されている。胴部も太い隆帯と角押文が縦方向を主として施されている。２包99は深鉢の胴部で，太い隆帯とそれに沿って施されたキャタピラ状の角押文によって三角形状の区画文が施され，区画内には平行沈線による小波状文が横位に施文される。

ⅩⅢ群土器　２包113は密な平行沈線が，２包114は波状貝殻文が施文される。いずれも胎土に繊維は含まない。



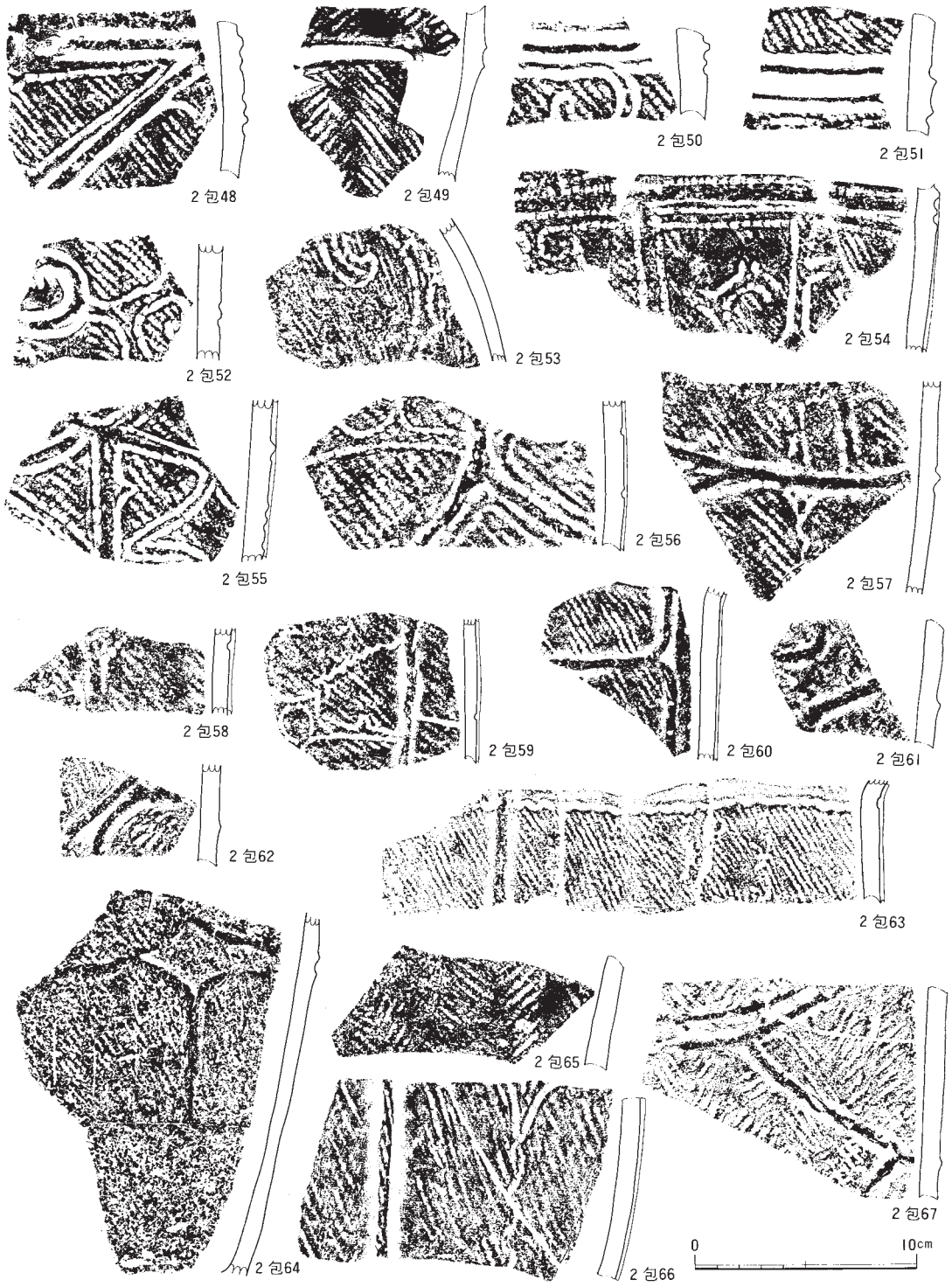


第114図　第２遺物包含層出土 I（上段）・II（下段）群土器

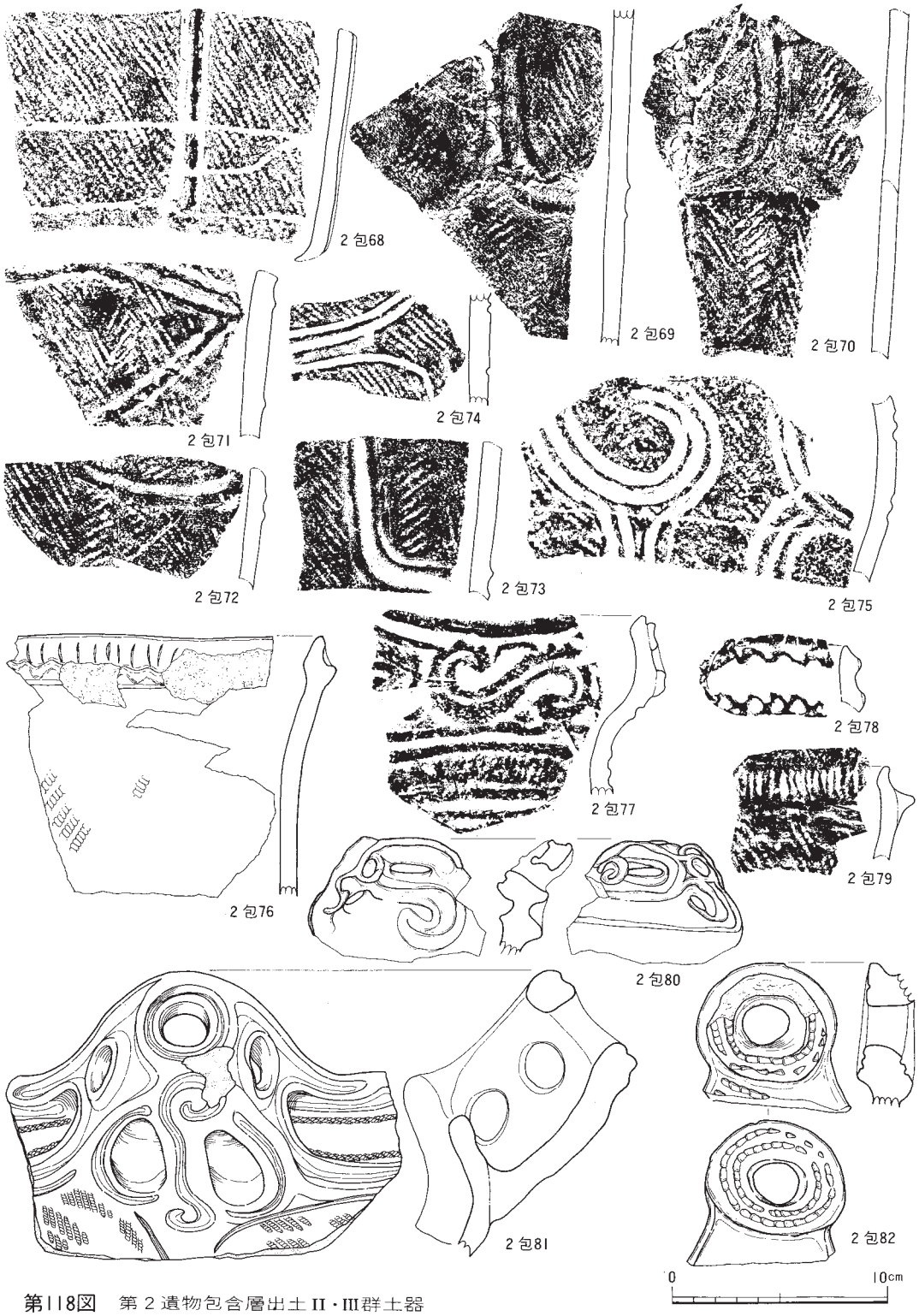


第115図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器

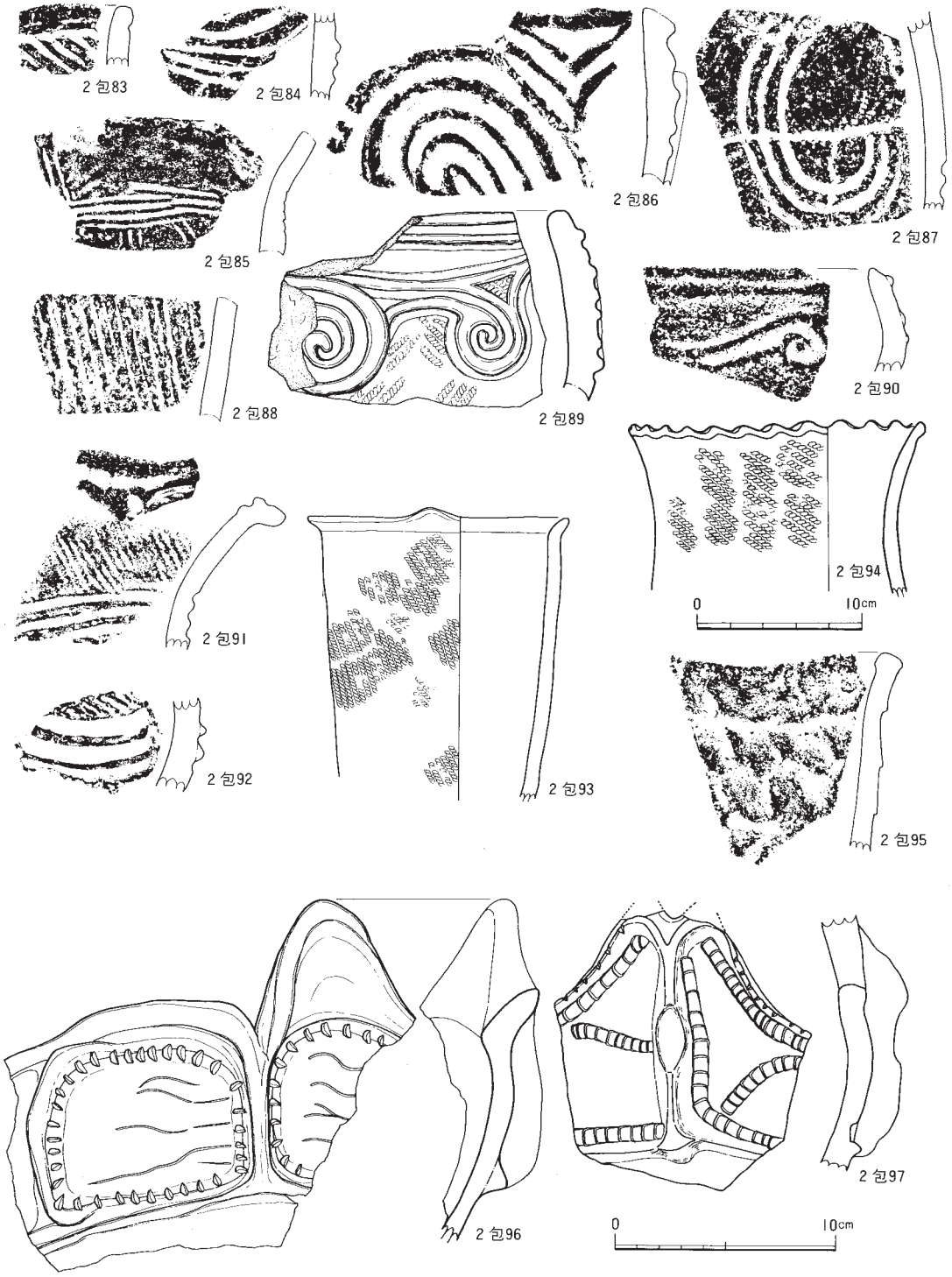
第116図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器



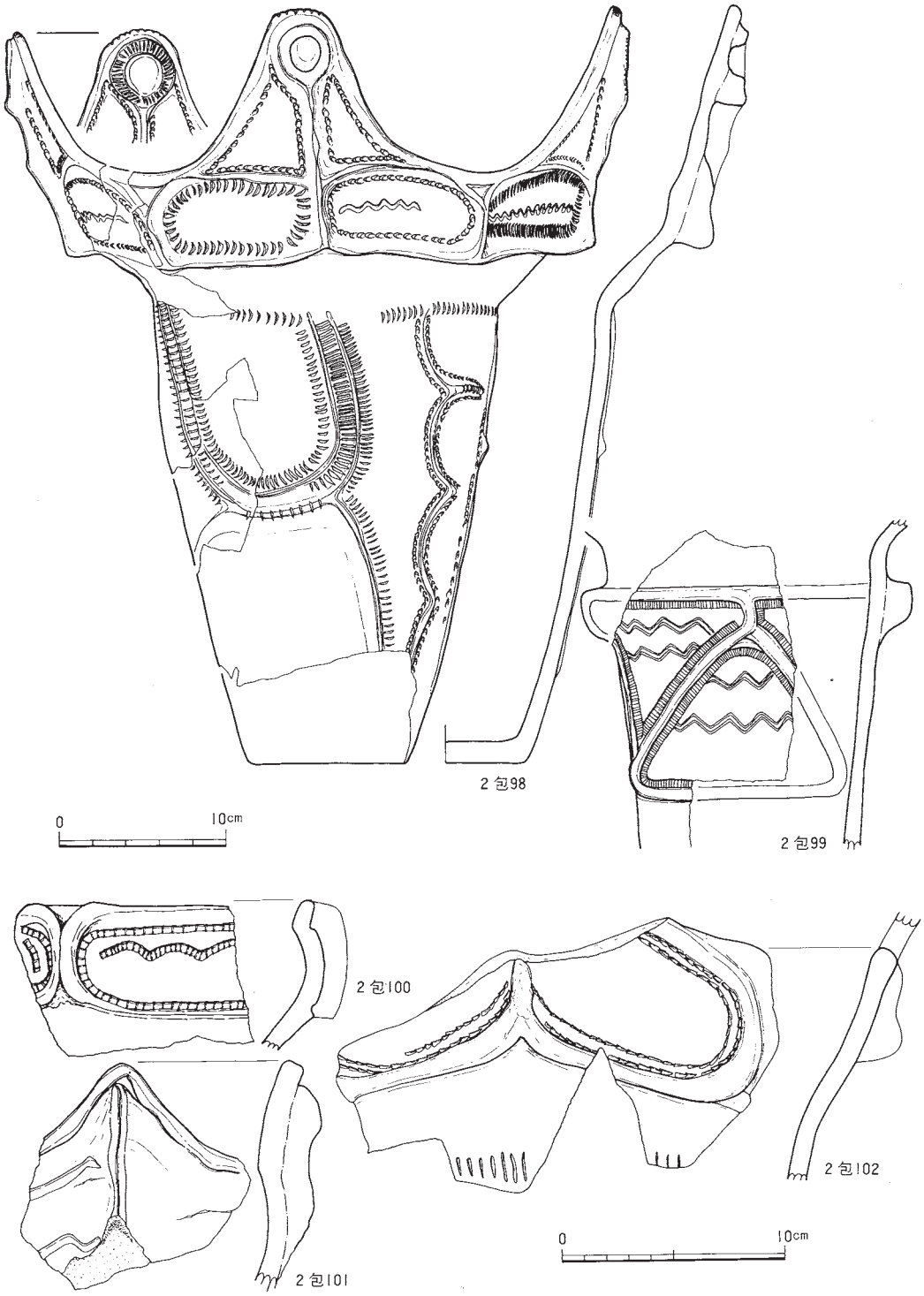
第117図　第２遺物包含層出土Ⅱ群土器



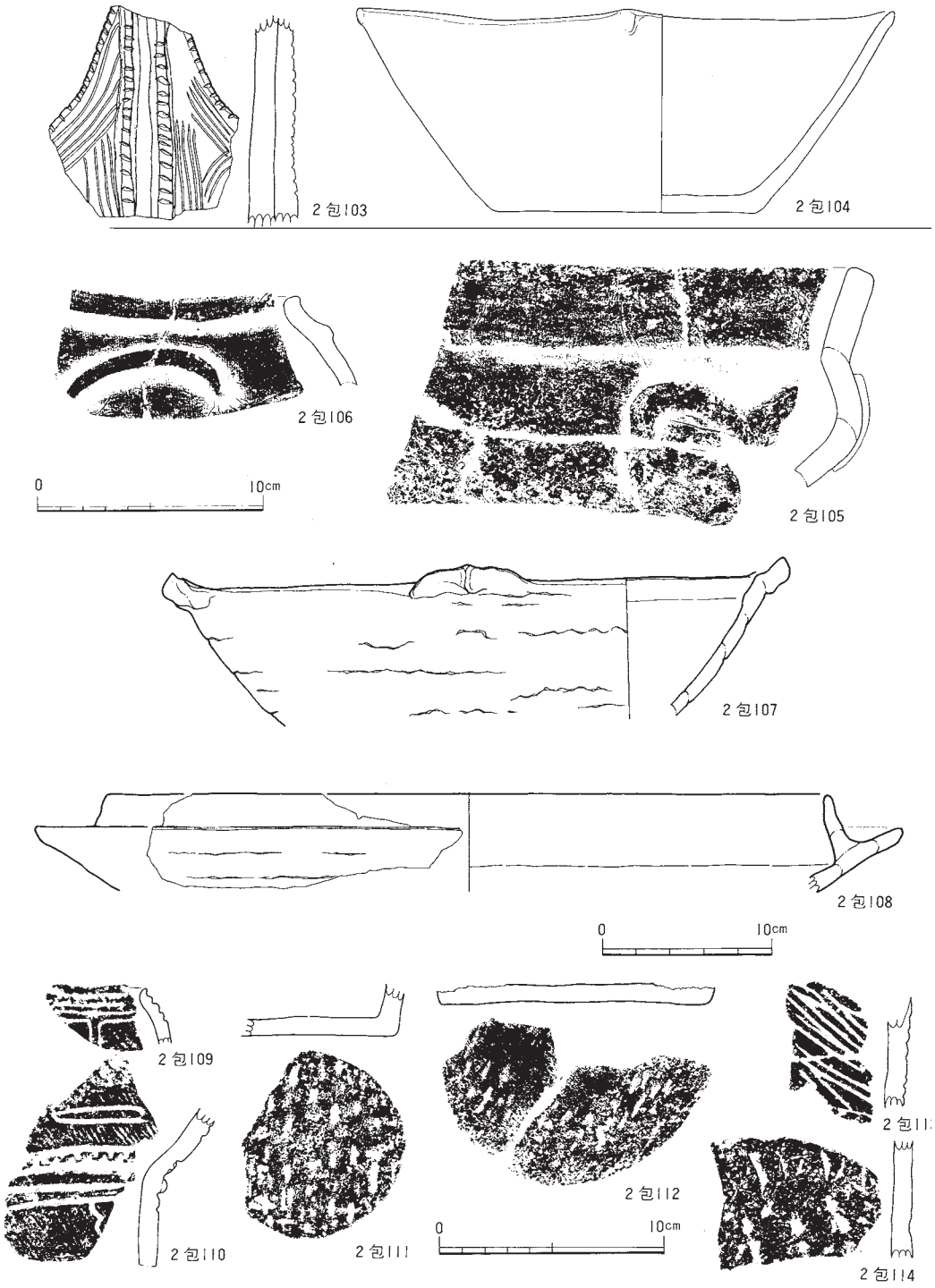
第118図　第２遺物包含層出土Ⅱ・Ⅲ群土器



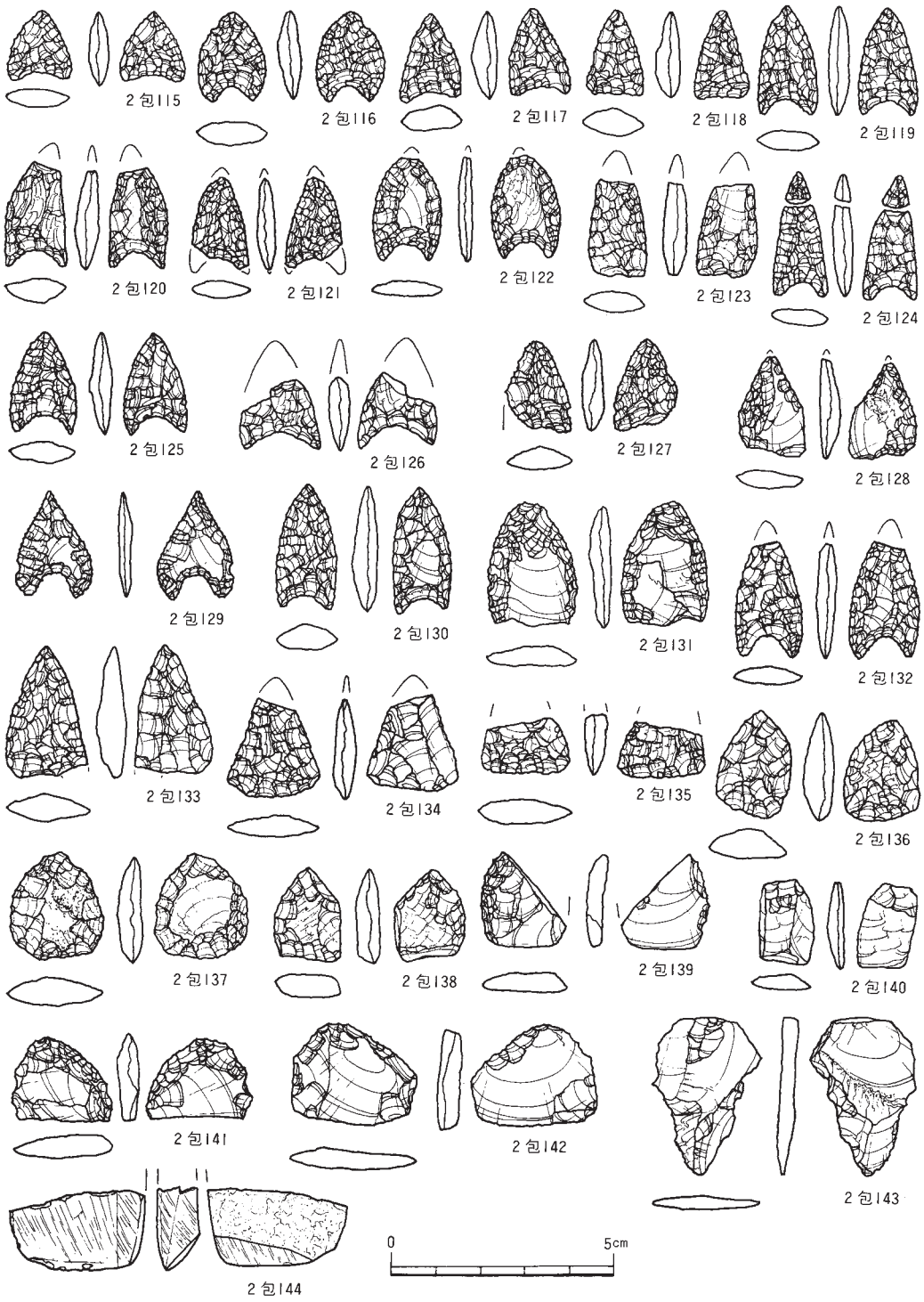
第119図　第２遺物包含層出土Ⅳ～Ⅶ群土器



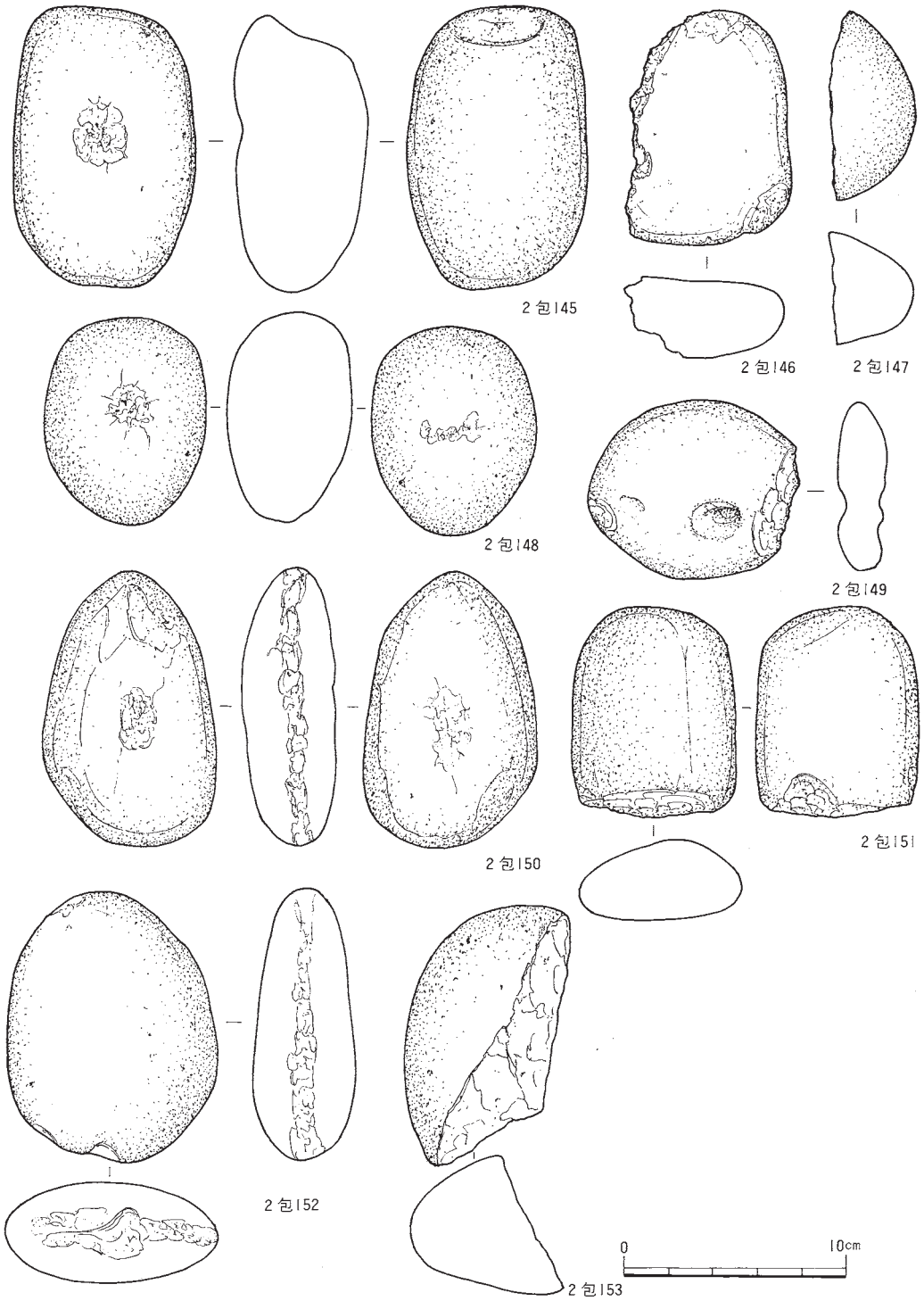
第120図　第２遺物包含層出土Ⅷ群土器



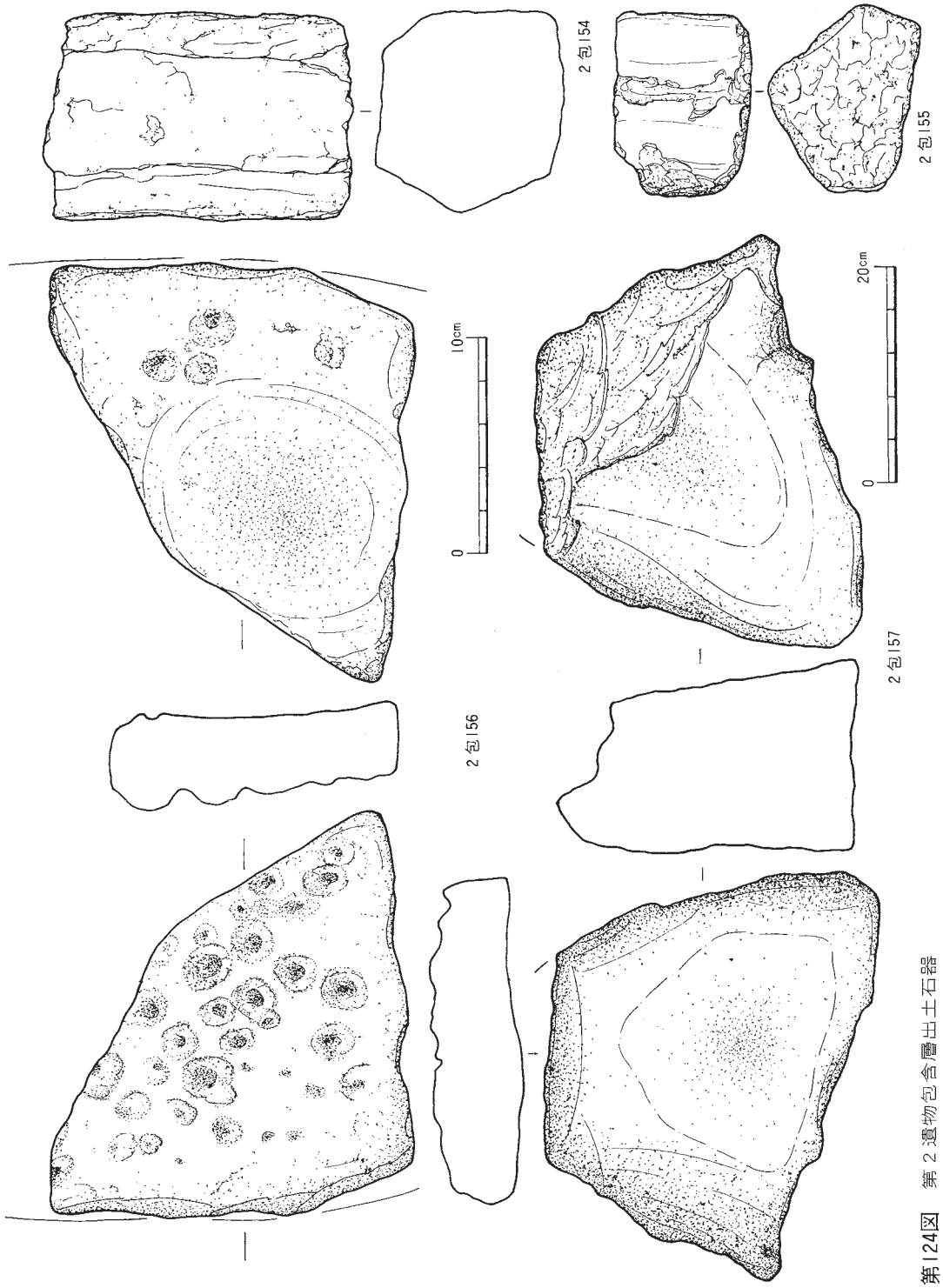
第121図　第２遺物包含層出土Ⅷ・Ⅺ群土器



第122図　第２遺物包含層出土石器



第123図　第２遺物包含層出土石器



第124図　第２遺物包含層出土石器

〔石　　器〕(第122～124図，図版76～78・80)

出土した石器は，石鏃21点，不定形石器８点，磨製石斧１点，磨石・凹石類９点，石皿２点，柱状石２点である。他にフレーク・チップ類が多数出土しているが，刃部や使用痕が認められないことからここでは取り上げない。

第18表　第２遺物包含層出土石鏃形態分類表

側縁	抉り	遺　物　番　号
丸味	有	115，116，119，121，122 125，126，129，130，131
	無	－
	不明	127，131
直線	有	117，120，124
	無	118，123，134，135
	不明	128，133

石　　鏃　２包115～135である。いずれも無茎の石鏃で基部に抉りのあるもの13点，抉りのないもの４点，不明４点である。側縁の形状では，丸味を帯びるもの12点，直線のもの９点である。欠損品は総数10点で，先端部を欠損するもの８点，基部の一部を欠損するもの１点，先端部と基部の一部を欠損するもの１点がある。鏃長は1.7～2.9cmの間をそれぞれ測るが，一定のサイズに集中する傾向はない。２包128は剝離調整が疎らに施されたもので，石鏃の未成品と考えられる。

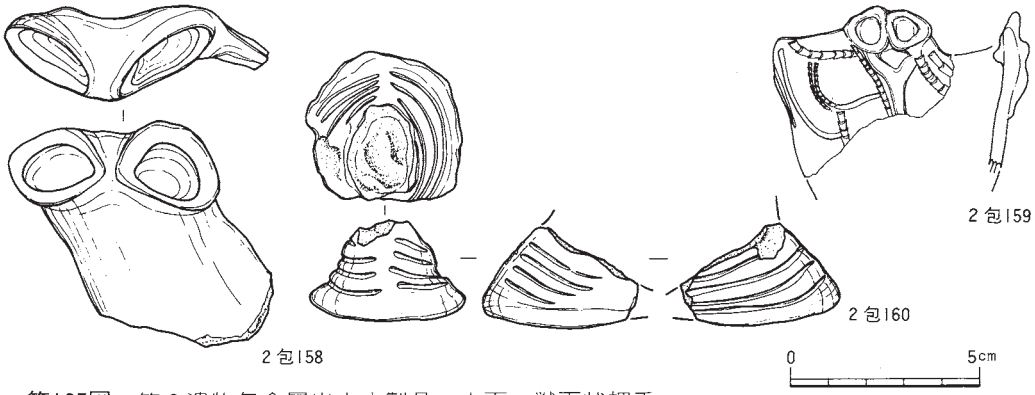
不定形石器　２包136～143が該当する。長さ1.9～2.4cm程度の小型の石器が主体を占める。これらのなかには剝離調整が剝片の周縁すべてに加えられるもの（２包136・137・141）と，一部にしか加えないもの（２包138・140・142・143）がある。刃部は鋭角的に作り出されているが２包138ではやや鈍い刃部である。２包140・143は，薄い剝片の一部に荒い剝離調整を加えている。

磨製石斧　２包144，１点のみである。刃部の残片で片刃であることがわかる。器面は全面丁寧に磨かれ，側縁には明瞭な稜線を作り出している。

磨石・凹石類　２包145～153があげられる。長さ10cm程度の丸味を帯びた扁平な河原石が用いられ，いずれも磨りが加えられている。凹部を有するものが３点（２包145・149・150）ある。

〔土 製 品〕(第125図，図版74・75)

土　　偶　２包160，１点のみである。脚部の破片で全面に沈線が横位に施されている。



第125図　第２遺物包含層出土土製品・人面・獣面状把手

人面・獣面状把手　２包158・159，２点である。２包158は深鉢の内側に，２包157は有節沈線の施されたミニチュア土器の外面に付されている。（大越・松本）

第３遺物包含層

遺　　構（付図）

Ｄ－２グリッド南側に検出された遺物包含層で，範囲は現況で東西７ｍ，南北５ｍを測る。遺物包含層はさらに南側に広がるものと思われるが，開田時の削平のため南側の範囲は不明である。

本跡付近も第１・第２遺物包含層と同じく僅かに窪んだ所に粘性の強い黒褐色土（Ｌ－Ⅱ）が堆積している。最大層厚は南端で10cmを測る。

遺　　物

出土した遺物の種類は前述した第１・第２遺物包含層とほぼ同様であるが，量的には劣る。土器ではやはり破片状態で出土し接合する破片も少ないため器形を窺えるようなものは僅かであったが，他の包含層では出土量の少なかったＶ群土器が多く検出されている。

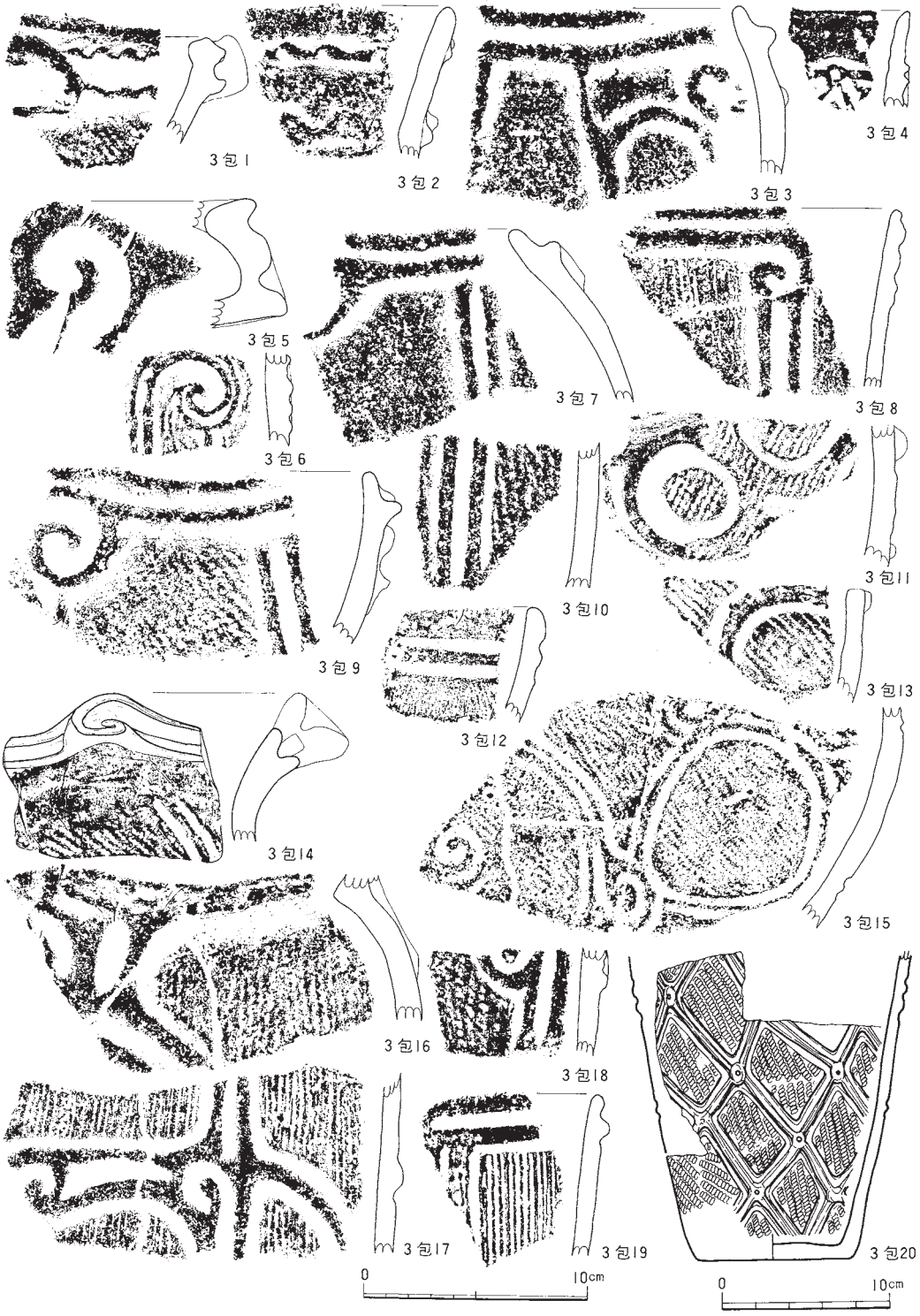
〔縄文土器〕（第126・127図，図版44）

以下，挿図掲載の土器を各群に比定し，本跡で特徴的なＶ群土器や僅かではあるが器形の窺えるものについて若干の説明を加える。

Ⅲ群土器	３包１・２	Ⅹ群土器	３包35・36
Ⅴ群土器	３包３～34	Ⅺ群土器	３包40
Ⅶ群土器	３包37～39	Ⅻ群土器	３包41～45

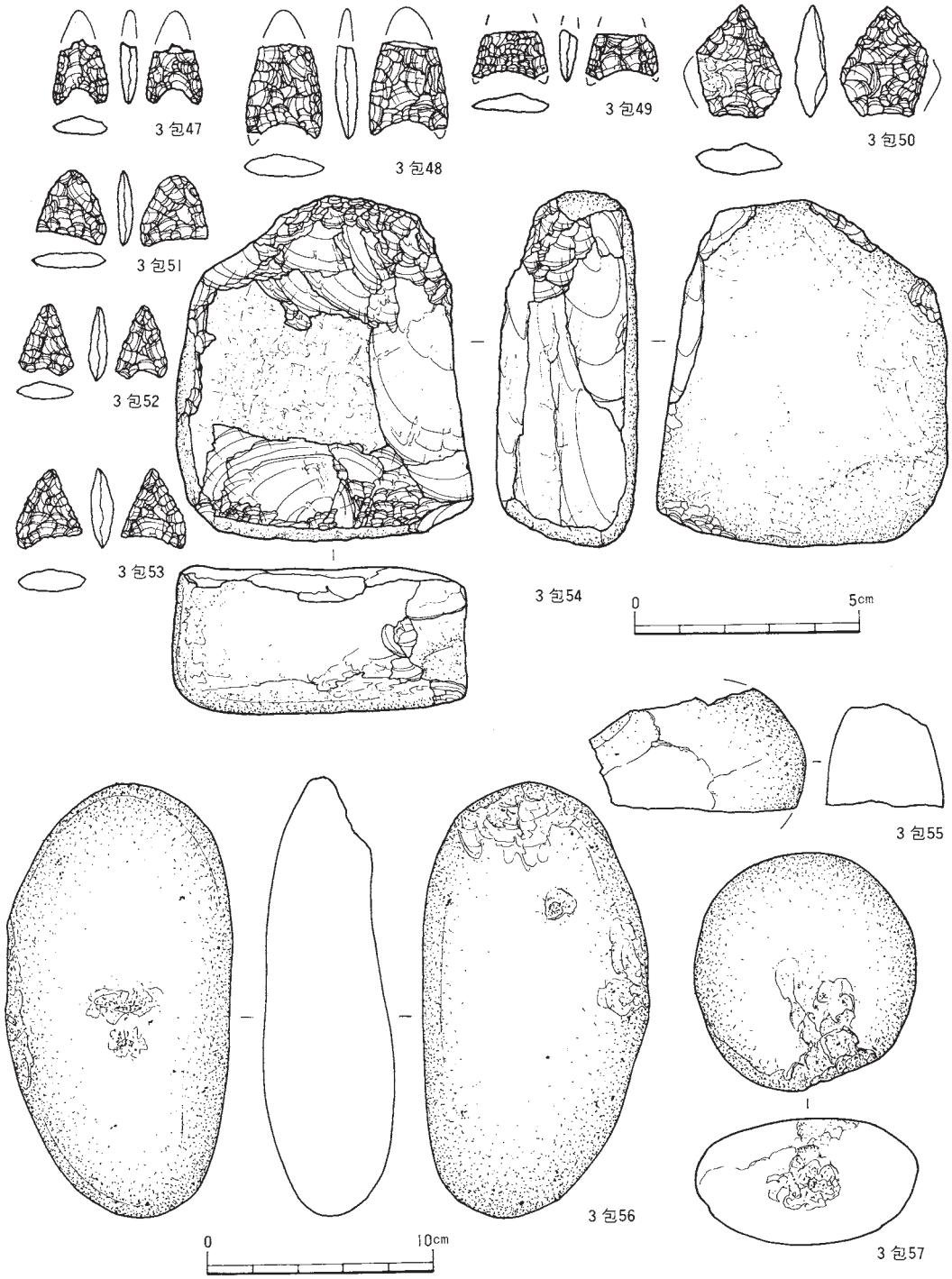
Ⅴ群土器　本群中（３包３～34）で器形を窺えるものは少ない。口縁部形態では破片のカーブから外傾気味に開くものと，大きく内彎するものの二者が主体を占め，所謂キャリパー状を呈する深鉢はない。文様は，いずれも側縁が沈線によって調整された隆帯によって表現され，渦巻状のモチーフが多用される。渦巻文は，口縁部に表出されるもの（３包５・７～９・14・26）の他に，胴部を縦に区画する懸垂隆帯間の中程に表わされるもの（３包15・17・18・21～23・25・29）があるが，後者ではこの渦巻文から懸垂隆帯を繋ぐように横に展開する文様が認められる。渦巻文の他には，円文の表出されるもの（３包11）や，側縁が沈線で調整された隆帯上に円形の刺突が加えられるもの（３包32）がある。地文は単節縄文が施されたものの他に，縦方向に密な撚糸文が施されるもの（３包８・17・19・21・28～30・33）も認められる。

３包20は埋甕２に近接して黒褐色土上面から横倒しの状態で出土したものである。胴部が外傾して開く深鉢であるが，口縁部を欠損するため全体の器形は明らかではない。文様は側縁が沈線で調整された隆帯を胴部全面に格子目状に配し，交点をボタン状に肥厚させ中央に円形の刺突が加えられる。地文には単節縄文（ＲＬ）が使用されている。



第126図　第３遺物包含層出土Ⅲ・Ⅴ群土器

第127図　第３遺物包含層Ⅴ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ・ⅩⅢ群・ミニチュア土器



第128図　第３遺物包含層出土石器

第19表　第３遺物包含層出土石鏃形態分類表

形態	抉り	遺物番号
丸味	有	47・48・53
	無	50・51
	不明	—
直味	有	49・52
	無	—
	不明	—

Ⅹ群土器　交互刺突が施された３包35・36が本群に比定される。３包35は無文の口縁部下端に２例の円形刺突が横位に施されている。胴部は側縁を沈線で調整した隆帯を懸垂させいくつかに縦分割している。地文は撚り糸文である。

Ⅷ群土器　３包41～45が比定される。３包42は浅い平行沈線が斜位に，３包43は沈線文が施されたもので，いずれも地文に単節縄文が使用されている。

〔石　　器〕(第128図，図版76)

総数11点出土している。器種別の内訳は，石鏃７点，石核１点，磨石・凹石類３点である。

石　鏃　３包47～53の７点である。いずれも無茎の石鏃で，基部・側縁の形態別は第19表のとおりである。欠損品は４点で，先端部を欠損するもの３点，側縁を欠損するもの１点である。

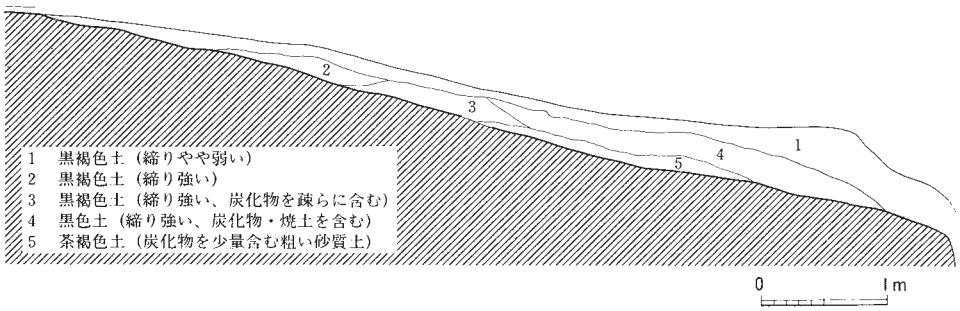
石　核　３包54，１点である。４面に自然面を残す石核である。扁平な四角形状の石を大割りした後，両側縁を打面として剝離作業が行われている。剝離面の状況から，得られた剝片は不定形で小型のものであったと思われる。

磨石・凹石類　３包55～56の３点である。扁平な河原石が用いられいずれも磨りが加えられている。３包56では凹みを有す。　(大越)

第４遺物包含層

遺　　構(第129図・付図，図版28)

Ａ－１グリッドに検出された包含層で，東西３ｍ，南北7.5ｍを測る。本跡は南北に細長く，遺跡の北側を区画する開析谷より枝分かれするように南側に入る沢状の浅い窪地内に形成されたものである。この窪地内には基本層位第Ⅱ層に近似する焼土や木炭粒を混入した黒褐色土が，斜面上位にあたる南側から流れ込んだ状態で傾斜に沿って堆積している。堆積土は焼土・木炭粒の混入



第129図　第４遺物包含層セクション

度合から３層（ℓ２～ℓ３）に分層される。第４層は最も厚く堆積した土層で層厚約30cmを測る。第１層は締りの弱い暗褐色土で表土から草根等により多分に影響された土層と思われる。

遺　　物

遺物は各層中から検出されたが，他層に比較し第１層目からの出土量はやや劣る。土器・石器類の遺物の他に傾斜面下位において人頭大の花崗岩や硅石が多く出土したが，これらの石には使用痕等認められなかった。量的には他の包含層と同様土器が最も多く出土している。多くは破片状態での出土であるが，なかには完形品が土圧によって押し潰されたような状態で出土したものもあり，焼土や木炭粒を含めた多くの遺物は堆積土が流入する過程で人為的に投棄された可能性が強い。本項では各遺物について一括して説明を加えるが，土器は主体を占める第Ⅴ・Ⅶ群土器を中心に述べることとする。なお他群土器でも器形が窺えるものについても若干説明を加える。

〔縄文土器〕（第130～133図，図版45・66・71）

図示したものは以下のように類別できる。

第Ⅲ群土器１類	４包５	第Ⅳ群土器２類	４包11～14・15
２類	４包２～４	第Ⅴ群土器	４包16～48
３類	４包６	第Ⅶ群土器	４包49～58
第Ⅳ群土器１類	４包８～10・12・13	第Ⅺ群土器	４包59・60

Ⅴ群土器　４包16～48が比定されるが，口径20cm以上を測る深鉢と，口径15cm以下の比較的小型の深鉢がある。器形ではキャリパー状を呈するもの（４包19・20）と，口縁部が外傾気味に開き波状口縁を呈するもの（４包16～18・21・25・27）が認められ，後者は小型の土器に多い。

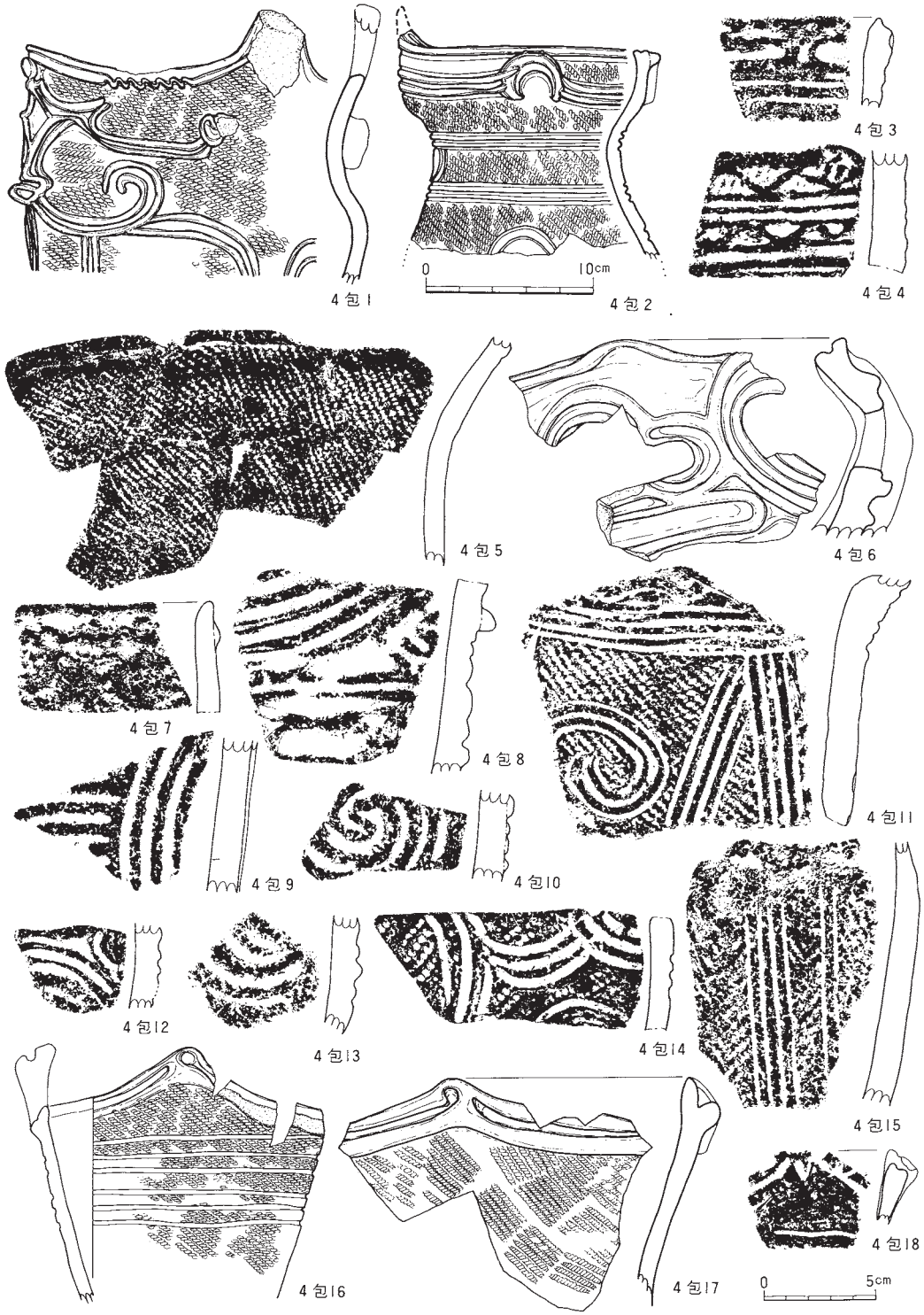
口縁部に施文される文様も器形の違いによって多少差異が認められる。前者の場合では，側縁を沈線で調整した隆帯によって，クランク状（４包19），末端を渦巻状とした波状文（４包20）が単位文様として施されている。他の破片でも加飾の強いもの（４包23・24・29・30・32・33）が多い。後者では，口縁上端部に太い沈線を全周させ波頂部に沈線による渦巻状の文様が表出されるもの（４包16～18・21・22・25）が多数を占める。全般的に口縁部文様の在り方は単純である。

胴部は，側縁を沈線で調整した隆帯を主として縦方向に施したもの（４包37・38・46）や，浅い平行沈線を横位・縦位に施したもの（４包39・41～45），地文のみのもの（４包17）がある。口縁部が外傾する深鉢では浅い平行沈線が施されるものが多い。

Ⅶ群土器　深鉢の器形は変化に富んでいる。４包49では底部から口縁部まで外反気味に開き，４包50では胴部が外傾して開いている。さらに破片中には丸味を帯びた胴部に外反する口縁部が付されたもの（４包52・56）がある。

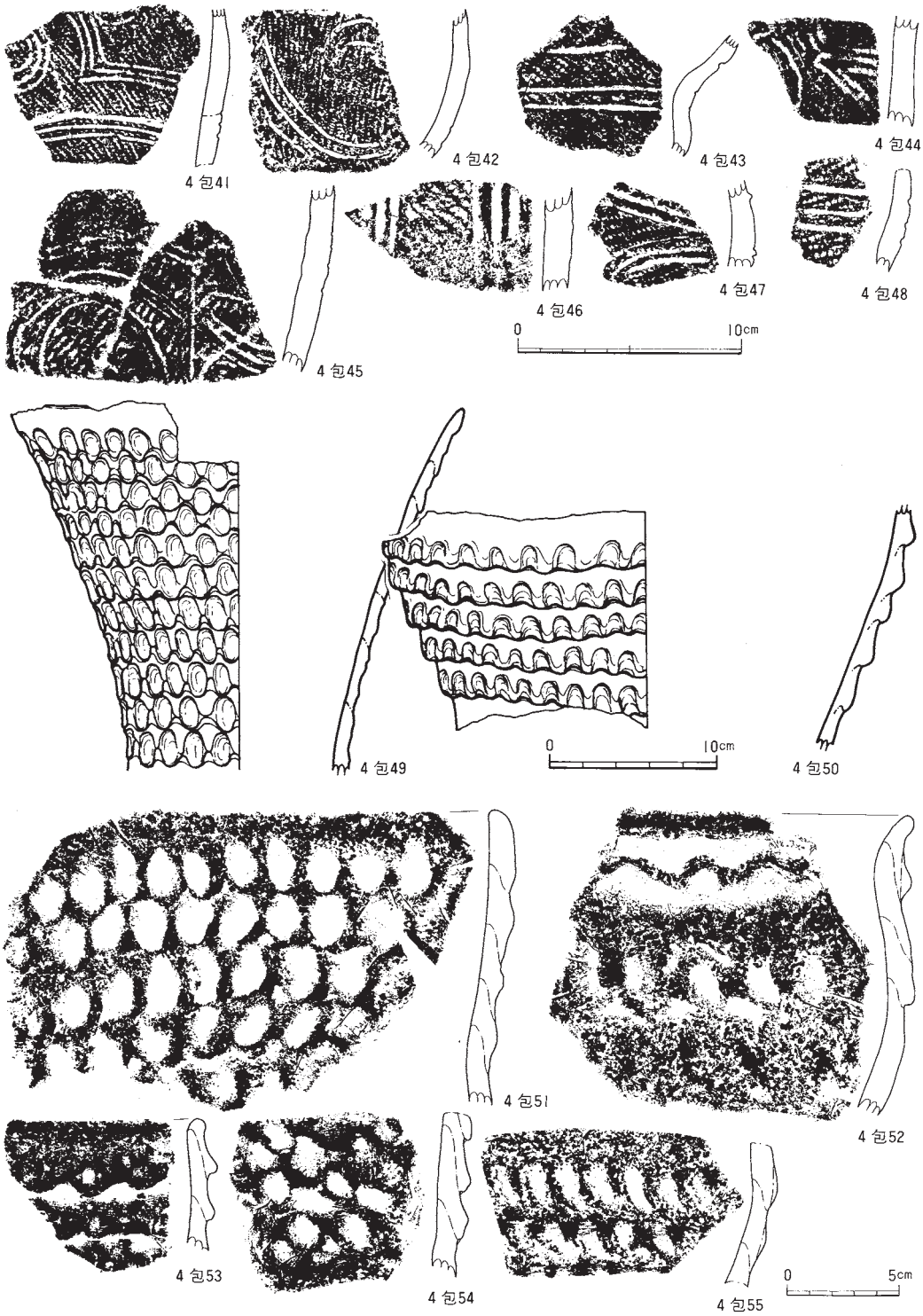
以上Ⅴ・Ⅶ群土器について述べたが，他に器形の窺えるもの等を抽出して略記する。

４包１は，Ⅲ群土器に比定される。山形の把手が付され，胴部が括れる深鉢である。隆帯を縦

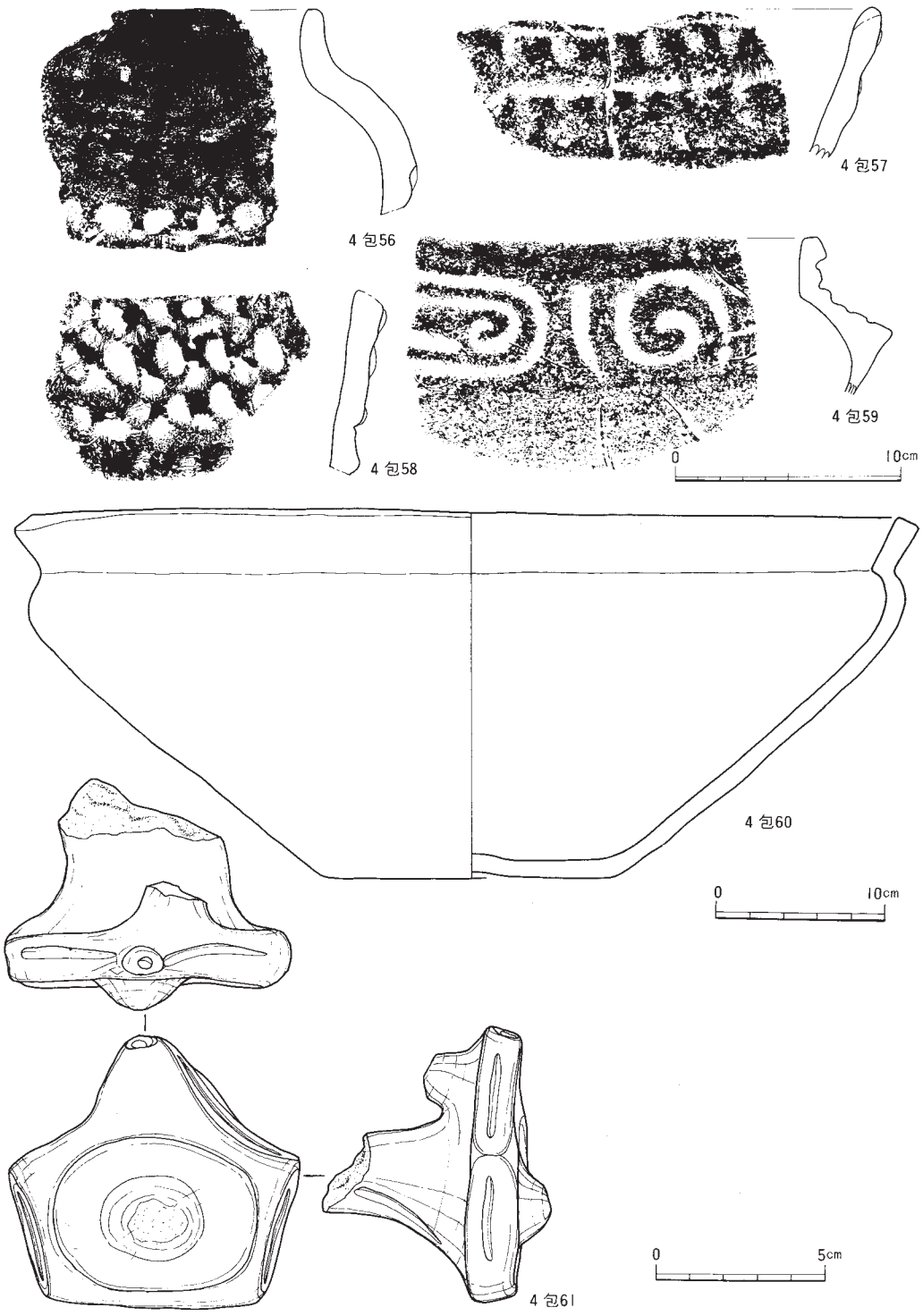


第130図　第４遺物包含層出土Ⅲ～Ⅴ群土器

第131図　第４遺物包含層出土Ⅴ群土器



第132図　第４遺物包含層出土Ⅴ・Ⅶ群土器



第133図　第４遺物包含層出土Ⅶ・Ⅺ・Ⅻ群土器

位・横位に貼り付けているが，隆帯の側縁を調整しておらず貼り付けの痕跡を明瞭に残している。一部に渦巻状のモチーフが認められる。把手下には突起が付されているが，把手を挟んでほぼ等位置に突起が付されていた痕跡が認められる。

４包２もⅢ群土器に比定される。口縁部の対面する位置に半円状の突起が付されたもので，側縁を沈線で調整した隆帯で突起間を繋いでいる。頸部には３本１組みの沈線を上下に２段それぞれ全周させている。

４包60は無文の浅鉢（Ⅺ群）である。胴部上端が丸味を帯び口縁部が外傾して開く器形を呈する。

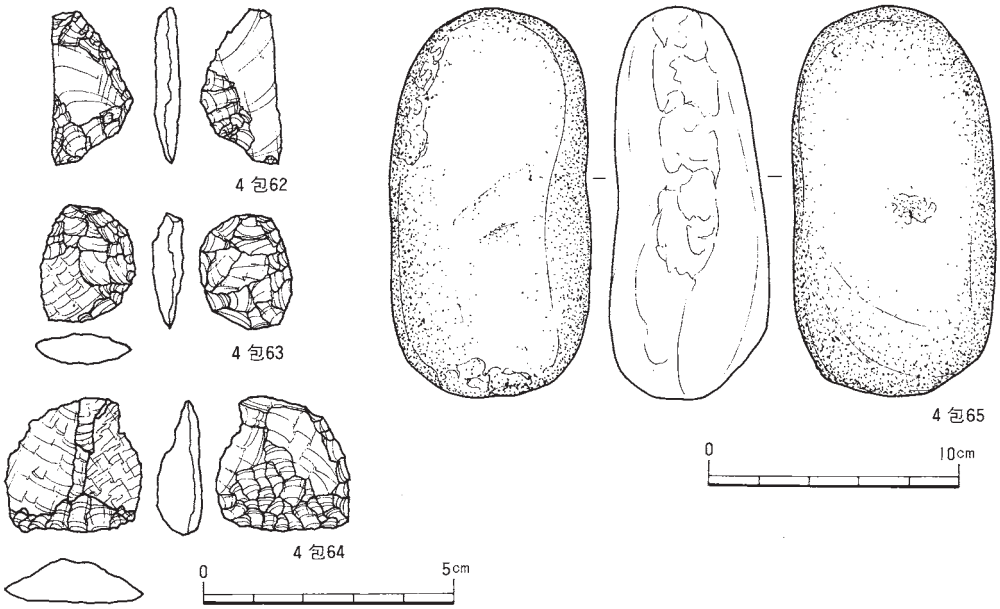
４包61は把手と思われるが，どの部分にどのような状態で取り付くのか判然とせず，土製品に入る可能性も充分に残っている。

〔石　　器〕（第134図）

出土石器は４点と少ない。内訳は不定形石器３点，磨石・凹石類１点である。

不定形石器　４包62は剝片の周縁部に主に片面から剝離調整を加え鋭角的な刃部を付けている。４包63は剝片の周縁部に両面から剝離調整されたもので楕円形を呈している。刃部は鋭い。４包64は厚目の剝片の下端部に両面から剝離調整が加えられたもので，前掲の２点に比較し刃部はやや鈍く作られている。

磨石・凹石類　４包65は楕円形状の河原石を用いたもので，器面には磨りが加えられている。先端の一部には敲き痕が認められる。（松本）



第134図　第４遺物包含層出土石器

第8節　ピット群

調査区内には総数364個のピットが検出されている。これらのピットは調査区内に設定した一辺10mのグリッドごとに通し番号を付して整理した。炉跡や焼土遺構の周囲にあって竪穴住居跡の残存形態であろうと充分想定されるピットでも，断定する根拠に欠けるため一応各グリッドごとの通し番号を付している。またピット内からは縄文時代以外の時期を明確に示す遺物の出土はなく一括して本節で取り扱うが，縄文時代以外に属するピットが含まれる可能性もあることを前もってお断りしておく。

ピット群

遺　　構(付図)

ピットの個々の計測値は第20表に掲載した。直径９～48cmの平面ほぼ円形を呈し，深さは３～60cmの間を測る。堆積土は基本層位第Ⅲ層に対比される茶褐色土が主体を占めるものが多く幾分地山黄褐色土(L－Ⅳ)粒子が混入する場合もある。

これらのピットは調査区内に散在して検出されているが，とりわけ南北両緩斜面に多く他の遺構の分布と同様の傾向を示す。なかには炉跡や焼土遺構を取り巻き柱穴としての位置を与えられる可能性をもつものもあり，他のピットもその規模や深さからみて柱穴の可能性が濃厚であるが，

第20表　ピット一覧表(1)

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
A－0	P_1	27	18	
	P_2	36	20	
	P_3	18	13	
	P_4	24	29	
	P_5	33	35	
	P_6	14	10	
A－1	P_1	29	26	
	P_2	26	20	
	P_3	14	24	
	P_4	21	9	
	P_5	20	37	
	P_6	23	38	
	P_7	20	17	
	P_8	29	10	
A－1	P_9	25	40	
	P_{10}	33	11	
	P_{11}	30	19	
	P_{12}	23	11	
	P_{13}	20	18	
	P_{14}	48	24	
	P_{15}	26	50	
	P_{16}	25	38	
	P_{17}	18	14	
A－2	P_1	34	15	
	P_2	20	13	
	P_3	22	11	
A－3	P_1	24	32	縄文土器片
	P_2	30	35	縄文土器片
A－3	P_3	28	51	縄文土器片
	P_4	25	28	縄文土器片
	P_5	20	28	
	P_6	32	43	縄文土器片
	P_7	34	20	縄文土器片
	P_8	18	60	
	P_9	32	56	縄文土器片
	P_{10}	20	50	縄文土器片
	P_{11}	22	33	
	P_{12}	23	27	
	P_{13}	21	24	縄文土器片
	P_{14}	25	29	縄文土器片
	P_{15}	27	31	
	P_{16}	24	27	

第 20 表　ピット一覧表 (2)

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
A－3	P_{17}	19	26	
A－4	P_1			(欠番)
	P_2	30	30	
	P_3	20	22	
	P_4	28	18	
	P_5	34	4	縄文土器片
B－0	P_1	47	7	
	P_2	20	21	
	P_3	44	45	
	P_4	36	65	
	P_5	21	27	
	P_6	30	23	
	P_7	24	28	
	P_8	34	30	
	P_9	22	40	縄文土器片
	P_{10}	22	21	
	P_{11}	28	53	
	P_{12}	19	28	
	P_{13}	19	39	
	P_{14}	19	18	
	P_{15}	30	9	石鏃
	P_{16}	21	23	
	P_{17}	40	43	
	P_{18}	21	16	
	P_{19}	20	23	
B－1	P_1	20	23	縄文土器片
	P_2	20	22	
	P_3	34	17	
	P_4	23	26	縄文土器片
	P_5	15	10	
	P_6	20	14	
	P_7	20	13	石鏃
	P_8	24	10	
	P_9	38	25	
	P_{10}	20	16	
	P_{11}	19	21	

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
B－1	P_{12}	25	12	
	P_{13}	28	13	縄文土器片
	P_{14}	29	17	
	P_{15}	20	19	
	P_{16}	18	19	
	P_{17}	24	25	
B－2	P_1	18	15	縄文土器片
	P_2	24	23	
	P_3	24	25	
	P_4	24	24	縄文土器片
	P_5	14	21	
	P_6	45	23	
	P_7	42	23	
	P_8	34	23	
B－3	P_1	27	13	縄文土器片
	P_2	24	24	
	P_3	22	6	
	P_4	36	32	縄文土器片
	P_5	40	10	
	P_6	24	17	
	P_7	22	14	縄文土器片
	P_8	14	16	
	P_9	24	10	
	P_{10}	18	14	
	P_{11}	30	14	
	P_{12}	9	7	
	P_{13}	12	3	
	P_{14}	28	16	
	P_{15}	25	17	
	P_{16}	20	11	
	P_{17}	28	9	
	P_{18}	20	10	
	P_{19}	22	16	
	P_{20}	33	17	縄文土器片
	P_{21}	30	37	縄文土器片
	P_{22}	31	20	

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
B－3	P_{23}	22	33	
	P_{24}	26	18	
	P_{25}	17	27	
	P_{26}	18	39	
	P_{27}	29	34	縄文土器片 石鏃
	P_{28}	22	28	縄文土器片
	P_{29}	18	32	縄文土器片
B－4	P_1	18	4	
	P_2	16	5	
	P_3	21	25	
	P_4	18	28	
	P_5	20	29	
	P_6	16	16	
	P_7	18	14	
	P_8	18	12	
C－0	P_1	34	30	
	P_2	36	22	
C－1	P_1	20	13	
	P_2	42	11	縄文土器片
	P_3	21	21	
	P_4	17	20	縄文土器片
C－2	P_1	50	4	
	P_2	23	15	
	P_3	20	12	
	P_4	34	4	
	P_5	24	7	
	P_6	20	8	
	P_7	26	20	縄文土器片
	P_8	18	7	
	P_9	20	11	
	P_{10}	17	17	
	P_{11}	30	19	
C－3	P_1	24	11	
	P_2	24	9	
	P_3	20	13	
	P_4	22	8	

第20表　ピット一覧表(3)

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
C－3	P_5	25	11	
	P_6	28	10	
C－5	P_1	18	9	
	P_2	19	10	
	P_3	22	21	縄文土器片
	P_4	18	7	
	P_5	21	46	
	P_6	24	46	
	P_7	14	14	
	P_8	20	6	
	P_9	20	43	
	P_{10}	26	42	
	P_{11}	26	48	
D－0	P_1	32	14	
	P_2	40	16	
D－1	P_2	33	13	
	P_3	32	19	縄文土器片
	P_4	40	13	
	P_5	36	13	
	P_6	22	16	縄文土器片
	P_7	44	17	石鏃 フレイク
	P_8	28	16	
	P_9	47	33	縄文土器片 石鏃
	P_{10}	22	7	
	P_{11}	25	22	
	P_{12}	30	30	
	P_{13}	20	10	
	P_{14}	27	8	
	P_{15}	42	35	縄文土器片
	P_{16}	24	37	
	P_{17}	33	15	縄文土器片
	P_{18}	22	27	
	P_{19}	27	11	
	P_{20}	40	9	
	P_{21}	22	30	
	P_{22}	45	21	

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
D－1	P_{23}	30	7	
	P_{24}	23	37	
	P_{25}	28	27	
	P_{26}	22	32	
	P_{27}	30	11	
	P_{28}	26	28	
	P_{29}	22	26	
	P_{30}	36	33	縄文土器片 フレイク
	P_{31}	34	6	
	P_{32}	5	2	
	P_{33}	25	16	
	P_{34}	8	2	
	P_{35}	6	6	
	P_{36}	13	40	
	P_{37}	35	14	
	P_{38}	32	22	
	P_{39}	28	15	縄文土器片
	P_{40}	26	33	
	P_{41}	30	9	
	P_{42}	18	31	
	P_{43}	16	39	
	P_{44}	30	19	
	P_{45}	10	2	
D－2	P_1	26	14	縄文土器片
	P_2	34	21	縄文土器片
	P_3	24	27	縄文土器片
	P_4	34	47	縄文土器片
	P_5	25	47	
	P_6	22	19	縄文土器片
	P_7	27	15	
	P_8	23	14	
	P_9	23	12	縄文土器片
	P_{10}	20	17	縄文土器片
	P_{11}	23	23	
	P_{12}	22	15	
	P_{13}	18	5	

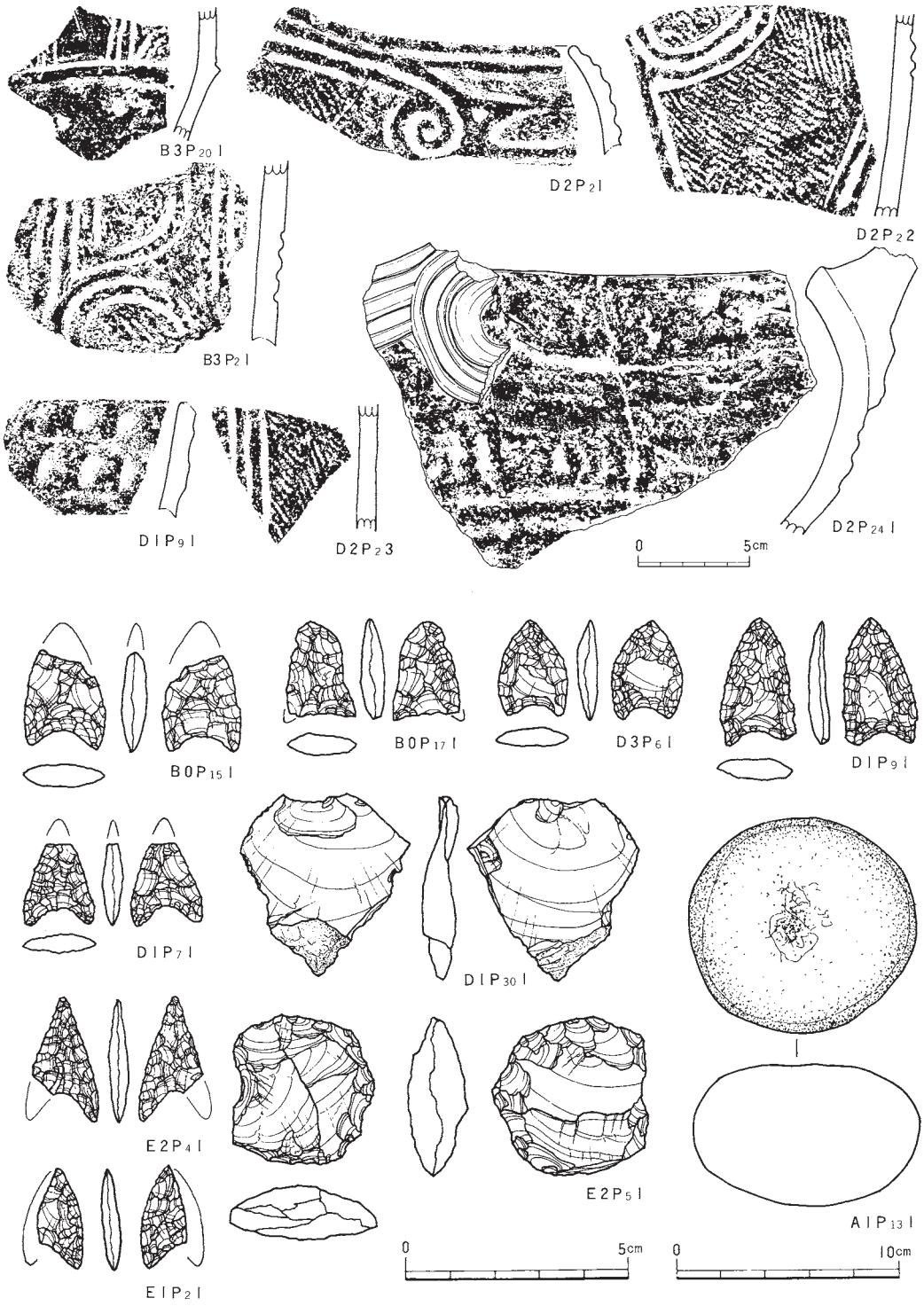
グリッド	番号	径	深さ	遺　物
D－2	P_{14}	24	14	
	P_{15}	32	9	
	P_{16}	36	10	縄文土器片
	P_{17}	24	19	
	P_{18}	25	20	
	P_{19}	20	18	
	P_{20}	28	7	
	P_{21}	58	7	
	P_{22}	40	12	
	P_{23}	20	15	
	P_{24}	42	31	縄文土器片
D－3	P_1	42	12	
	P_2	13	9	
	P_3	12	6	
	P_4	17	11	
	P_5	16	8	
	P_6	18	11	
	P_7	12	10	
	P_8	17	8	
	P_9	35	18	
	P_{10}	20	13	
	P_{11}	12	9	
	P_{12}	22	16	
	P_{13}	12	12	
	P_{14}	18	12	
	P_{15}	22	10	
	P_{16}	24	11	
	P_{17}	36	22	
	P_{18}	18	22	
	P_{19}	28	12	
	P_{20}	28	18	
	P_{21}	24	13	
	P_{22}	17	13	
	P_{23}	18	16	
	P_{24}	16	21	
	P_{25}	14	32	

第 20 表　ピット一覧表 (4)

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
D－3	P_{26}	32	21	
	P_{27}	44	29	
	P_{28}	44	14	
	P_{29}	17	7	
	P_{30}	36	13	
	P_{31}	32	9	
	P_{32}	24	9	
	P_{33}	32	19	
	P_{34}	18	15	
	P_{35}	16	12	
D－4	P_{1}	18	18	
	P_{2}	14	7	
	P_{3}	17	13	
	P_{4}	27	10	
	P_{5}	30	20	
	P_{6}	13	10	
	P_{7}	26	5	
	P_{8}	18	8	
	P_{9}	25	16	
	P_{10}	20	13	
	P_{11}	28	16	縄文土器片
	P_{12}	20	17	縄文土器片
	P_{13}	26	16	
	P_{14}	24	11	縄文土器片
	P_{15}	18	11	
	P_{16}	22	14	
	P_{17}	26	15	
	P_{18}	30	11	
	P_{19}	12	10	
	P_{20}	30	12	縄文土器片
	P_{21}	20	29	
	P_{22}	30	21	縄文土器片
	P_{23}	18	23	縄文土器片
	P_{24}	16	16	
	P_{25}	48	16	

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
D－4	P_{26}	32	11	
	P_{27}	24	19	
	P_{28}	16	14	
	P_{29}	16	11	縄文土器片
	P_{30}	24	29	縄文土器片
	P_{31}	16	7	
	P_{32}	20	12	
	P_{33}	24	25	縄文土器片
	P_{34}	20	5	
	P_{35}	23	9	
	P_{36}	28	21	縄文土器片
	P_{37}	20	17	縄文土器片
	P_{38}	18	31	
	P_{39}	23	10	
	P_{40}	26	13	
D－5	P_{1}	30	39	
	P_{2}	26	39	
	P_{3}	22	46	
	P_{4}	25	14	
	P_{5}	28	32	
	P_{6}	30	26	
	P_{7}	24	41	
	P_{8}	29	19	
	P_{9}	22	27	
	P_{10}	30	8	
	P_{11}	24	11	
	P_{12}	22	7	縄文土器片
	P_{13}	16	3	
	P_{14}	27	27	
	P_{15}	42	14	
	P_{16}	36	18	
	P_{17}	38	31	
	P_{18}	41	22	
	P_{19}	44	21	
	P_{20}	23	28	

グリッド	番号	径	深さ	遺　物
D－5	P_{21}	22	25	
	P_{22}	30	14	
	P_{23}	25	27	
	P_{24}	24	16	
	P_{25}	24	25	
	P_{26}	26	18	
	P_{27}	20	7	
	P_{28}	16	14	
	P_{29}	22	23	
	P_{30}	42	11	
	P_{31}	26	17	
	P_{32}	30	10	
	P_{33}	28	4	
D－6	P_{1}	16	16	
	P_{2}	18	15	
	P_{3}	15	10	縄文土器片
	P_{4}	24	29	縄文土器片
	P_{5}	21	20	縄文土器片
	P_{6}	20	18	縄文土器片
	P_{7}	20	21	縄文土器片
	P_{8}	18	12	
	P_{9}	12	13	
	P_{10}	16	13	縄文土器片
	P_{11}	14	14	
	P_{12}	14	19	縄文土器片
	P_{13}	26	25	縄文土器片
	P_{14}	44	13	
E－1	P_{1}	42	17	
	P_{2}	42	41	縄文土器片 石鏃
E－2	P_{1}	32	7	
	P_{2}	40	5	縄文土器片
	P_{3}	18	6	
	P_{4}	26	49	縄文土器片 石鏃
	P_{5}	28	16	縄文土器片 掻器
	P_{6}	21	31	



第135図　ピット群出土縄文土器・石器

各ピット間の関連性が希薄なため住居跡等のプランを想定するには困難である。なおＤ－２グリッドに検出されたＰ$_{24}$は，他のピットに較べやや大きく堆積土中から大型破片が出土していることから若干性格を異にするものと思われる。

遺　　物（第135図，図版47・76・77）

いくつかのピット内から縄文土器破片・石器が検出されている。多くはピット内埋土が堆積する際に紛れ込んだものと思われるが，Ｄ２Ｐ$_{24}$から出土した土器片は大型の破片で意識的に埋めた可能性も考えられる。

土　器　土器片の大半は，磨滅の著しい小破片であった。図示したＢ２Ｐ$_{20}$・Ｄ１Ｐ$_{9}$・Ｄ２Ｐ$_{3}$・Ｄ２Ｐ$_{24}$出土の土器は比較的文様が明瞭なものを選び出したものである。

Ｄ２Ｐ$_{24}$１・Ｂ２Ｐ$_{20}$は第Ⅲ群に，Ｄ２Ｐ$_{2}$１～３は第Ⅴ群，Ｄ１Ｐ$_{9}$１はⅦ群，Ｂ３Ｐ$_{20}$１はⅧ群に各々比定できる。Ｄ２Ｐ$_{24}$１は把手が付される口縁部上位に太い隆帯が貼り付けられた痕跡が認められることからⅢ群土器に含めたが，口縁下部に施された押捺文によってⅦ群土器に入る余地もある。

石　器　出土した石器は，石鏃７点，不定石器２点，磨石１点である。

石鏃はいずれも無茎の石鏃でＤ０Ｐ$_{17}$１を除いたものには抉りが認められる。Ｅ２Ｐ$_{4}$１は側縁が直線的なもので，他は全て丸味を持っている。欠損するものは４点で内訳は，先端部欠損のもの２点（Ｂ０Ｐ$_{15}$１・Ｄ１Ｐ$_{7}$１），基部欠損１点（Ｅ２Ｐ$_{4}$１），側縁部欠損１点（Ｅ１Ｐ$_{2}$１）である。

不定形石器としたＤ１Ｐ$_{30}$１は，側縁の一部に使用痕の認められる剝片である。Ｅ２Ｐ$_{5}$１は円形状の剝片の周縁に両面から剝離調整を加え，鋭い刃部が作り出されている。

Ａ１Ｐ$_{13}$１は，最大幅10.2㎝を測るやや扁平な円形状の河原石を用いた磨石である。（小平・大越）

第９節　竪穴状遺構

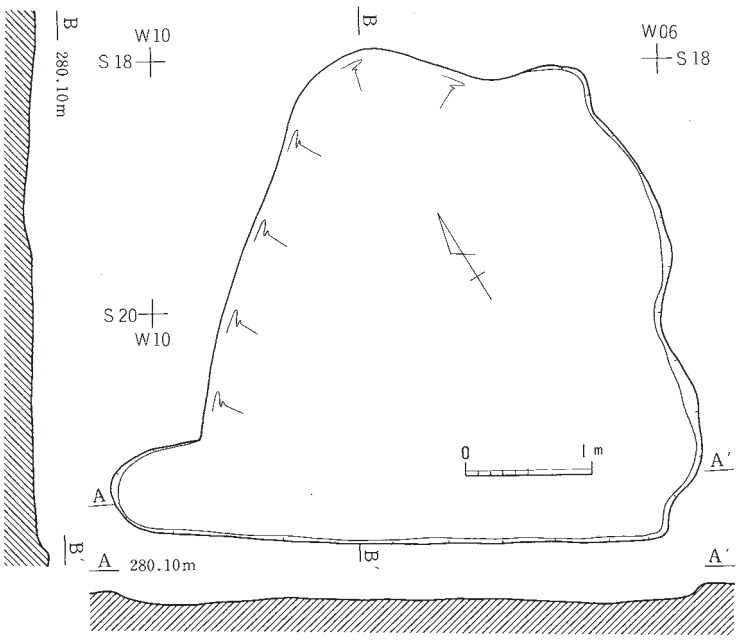
調査区内では，２基の竪穴状遺構が検出されている。竪穴状遺構とは竪穴住居跡や土坑等の遺構からは外れる遺構を一括して呼称した。機能等については不明な点が多い。

１号竪穴状遺構

遺　　構（第136図，図版29）

調査区南西端Ｄ－２からＥ－２グリッドにかけて検出された遺構で，確認面は黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）地山である。大きさは東西4.6m，南北４ｍを測る不整形を呈している。深さは最大で13㎝であるが概ね７～８㎝を測る。底面の状態は僅かに起伏がみられる。壁面の立ち上がりは全般に緩やかであるが，特に北西部の立ち上がりは緩やかである。

堆積土は，基本層位第Ⅱ層に近似する黒褐色土であるが，茶褐色土粒を含み多少硬質な点で第



第136図　１号竪穴状遺構

Ⅱ層とは異なる。単一層であり粒子が均一なことから自然堆積層と思われるが断定はできない。

遺　　物

（第137図，図版76）

本跡から検出された遺物には，縄文土器破片と石鏃がある。いずれも堆積土中出土である。

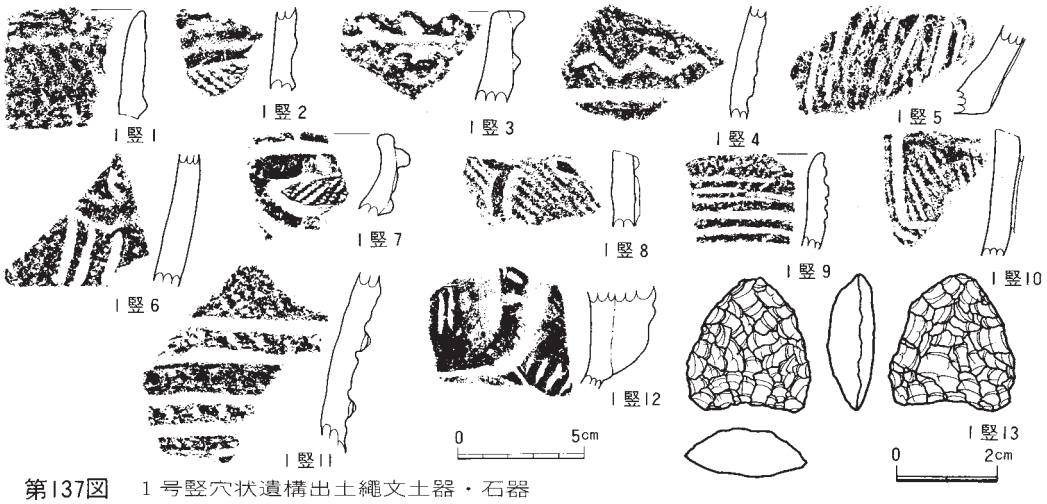
土　　器　大半が小破片で磨滅が著しく，接合する例もほとんど認められなかった。図示したものはこれらの土器の中から比較的文様の明瞭なものを選択した。掲載した土器は次のように分類した。

Ⅰ群土器　１竪１・２　　Ⅲ群土器　１竪３・４　　Ⅳ群土器２類　１竪５・６

Ⅴ群土器　１竪７～11　　Ⅷ群土器　１竪12

１竪２の施文様表に有節沈線は用いられていないが，２本の隆帯の形状と側縁の調整がⅡ群土器に近似することから当群に含めた。

石　　器　石鏃が１点検出されている。側縁が丸味を帯び，基部に抉りを有する無茎の石鏃で，幅



第137図　１号竪穴状遺構出土縄文土器・石器

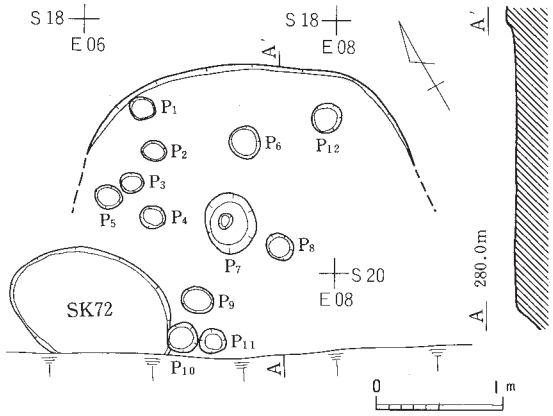
2.4cmと広く，厚みも９㎜と厚い。　（阿部）

２号竪穴状遺構

遺　　構（第138図，図版30）

南斜面にあたるＤ－２からＥ－３グリッドにかけて検出された遺構である。この付近は第３遺物包含層である黒褐色土が薄く堆積した部分で，包含層の精査の段階で確認した。プランは残存部分から想定して楕円形に近い形をとると思われるが，北壁のみの検出で定かではない。

壁の残存高は３cm前後を測り，底面は平担である。堆積土はＬ－Ⅱに対比される黒褐色土に類似しているが，地山黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）粒子を含んでいる点が多少異なっている。堆積状況は北側からの流れ込みによるものと思われる。



第138図　２号竪穴状遺構

遺　　物（第139図，図版76）

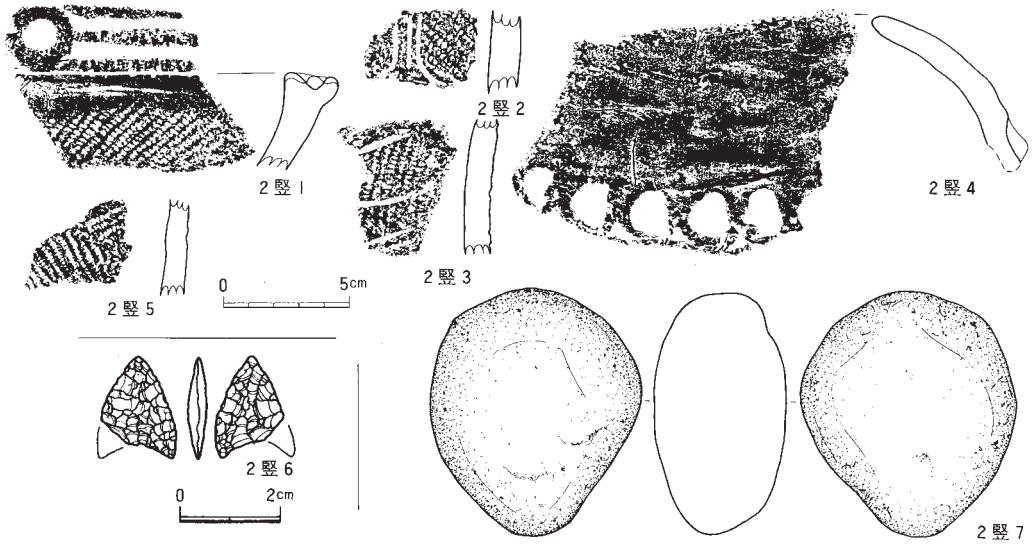
検出された遺物は少ない。主に縄文土器小破片の出土であるが，他に石鏃・磨石が各１点検出された。

土　　器　図示した土器は次のように分類される。

Ⅴ群土器　２竪１～３

Ⅶ群土器　２竪４

Ⅻ群土器　２竪５



第139図　２号竪穴状遺構出土縄文土器・石器

２竪５は羽状縄文の施されたもので，原体は撚りの異なる２段の縄を結束したものである。

石　　器　２竪６は基部に抉りを有する石鏃で，基部の１部を欠損している。側縁は丸味を帯びている。２竪７は最大幅9.8cmを測るやや偏平な楕円形状の石を磨石としている。　（阿部）

第10節　遺構外出土の遺物

本節では各遺構や包含層に伴わず出土した遺物について報告する。図示した遺物を中心に述べるが，土器は比較的文様が明瞭にわかるもの，石器は所謂定形石器の他に刃部や使用痕の認められるものも含めて掲載した。この他に土製品として土偶が検出されている。なお出土地点や出土層位については別表を参照されたい。

〔縄文土器〕（第140図，図版46）

図示した土器片の出土層位はすべて表土である。各土器の類別は以下のとおりである。

Ⅰ群土器　遺構外１　　Ⅱ群土器　遺構外２　　Ⅴ群土器　遺構外５・６

Ⅶ群土器　遺構外７　　Ⅷ群土器　遺構外８・９　　Ⅻ群土器　遺構外10

遺構外１は深鉢の胴部で，縦位に綾絡文が施されたものである。原体の側面圧痕は認められないが，他遺構出土の第１群土器の胴部文様に縦位の綾絡文が比較的顕著に認められる所から，遺構外１も第Ⅰ群土器と考えたものである。遺構外10は胎土に繊維を含むもので，撚りの異なる０段多条の縄文を横方向に交互に回転させ羽状縄文としている。

〔石　　器〕（第141～146図，図版76～78・80～82）

検出された石器は，北側の開析谷に設けた試掘坑から出土した磨製石斧を除き，全てＬ－Ⅰもしくは Ｌ－Ⅲ直上からの出土である。

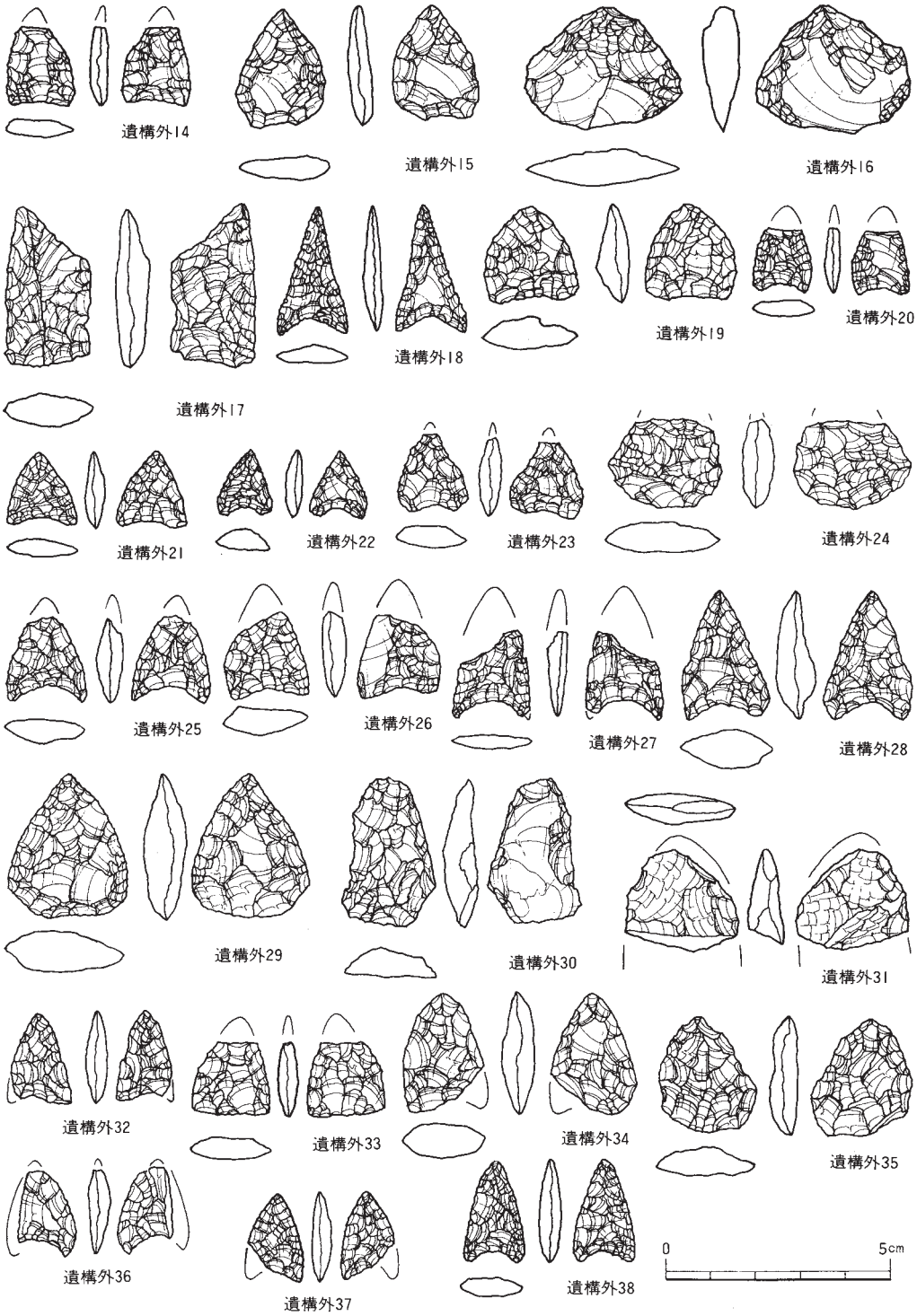
石　　鏃　総数36点検出されている。いずれも無茎の石鏃で基部に抉りを有するもの31点，抉りのないもの５点である。側縁の形態では，丸味を帯びるもの27点，直線的なもの９点である。欠損品は19点を数える。先端部を欠損するもの10点，基部の１部を欠損するもの８点，側縁部を欠損するもの１点である。大きさは，遺構外43で長さ10cm，幅２cmと最も小さく，遺構外26で長さ3.2cm，幅2.6cmと最も大きいが，長さでは一般的に1.5～2.6cmの間に集中する。

第21表　遺構外出土石鏃形態分類表

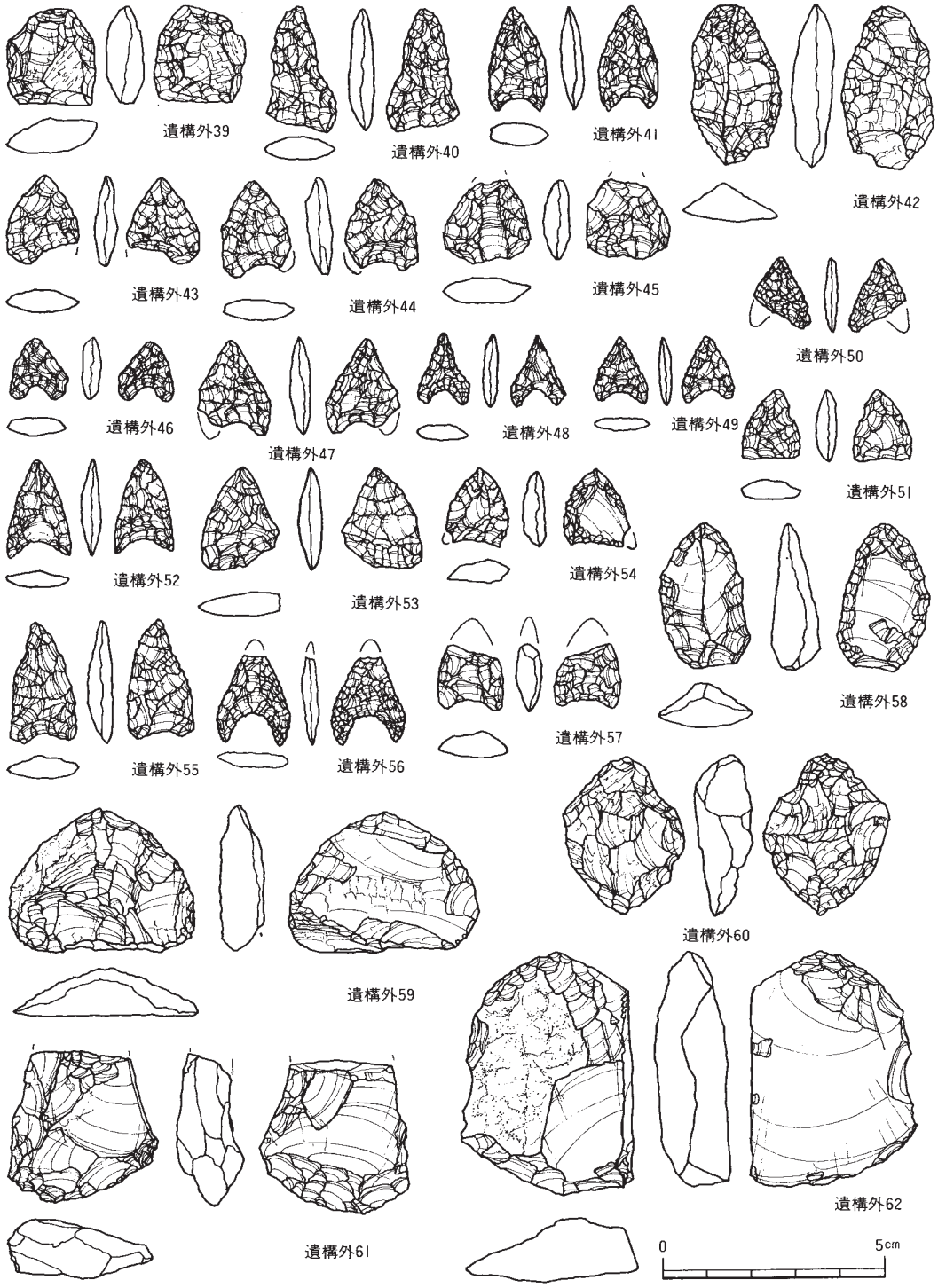
側縁	抉り	遺　物　番　号
丸味	有	4 15 19 20 21 22 23 25 26 29 34 36 37 41 43 44 46 47 49 50 54 56 57
	無	33 45 51 53
直線	有	18 27 28 32 38 48 52 55
	無	40

不定形石器　総数12点検出されている。遺構外24・31・35・39・60は，円形状の剝片の周縁部に両面から剝離調整を加え鋭角的な刃部を作り出している。遺構外30・32・58は，断面三角形状の縦長

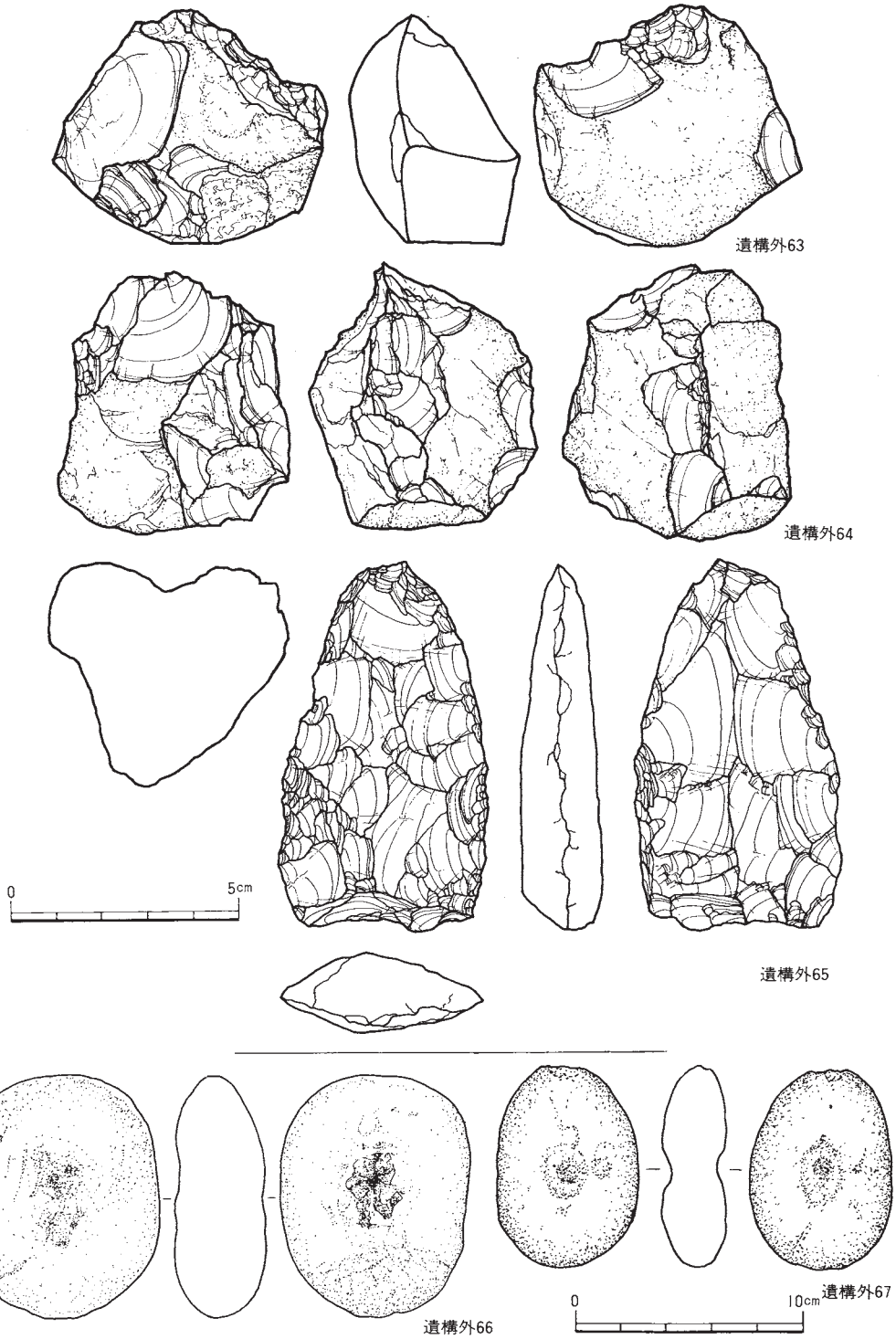
第140図　遺構外出土縄文土器・ミニチュア土器・土製品



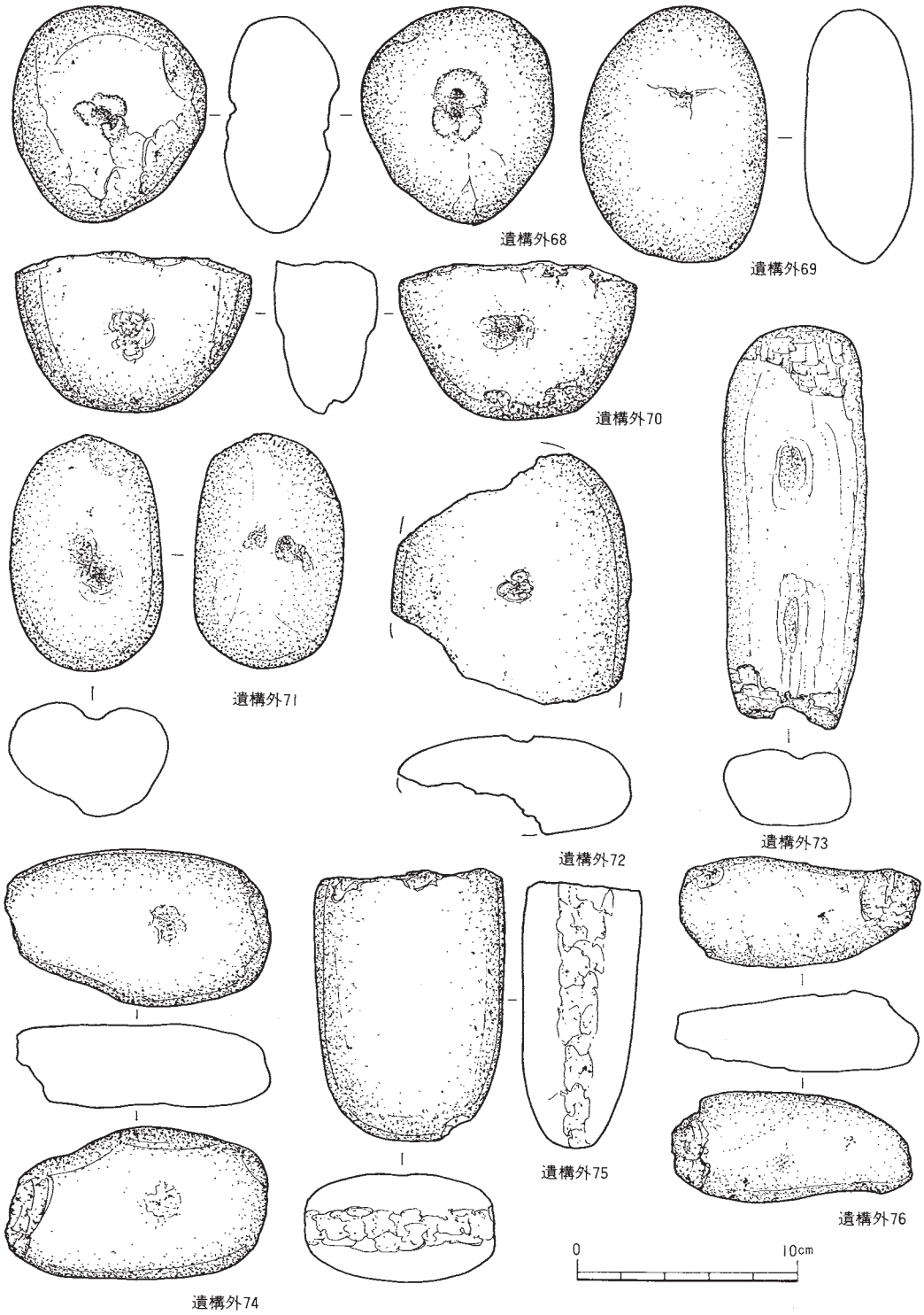
第141図　遺構外出土石器



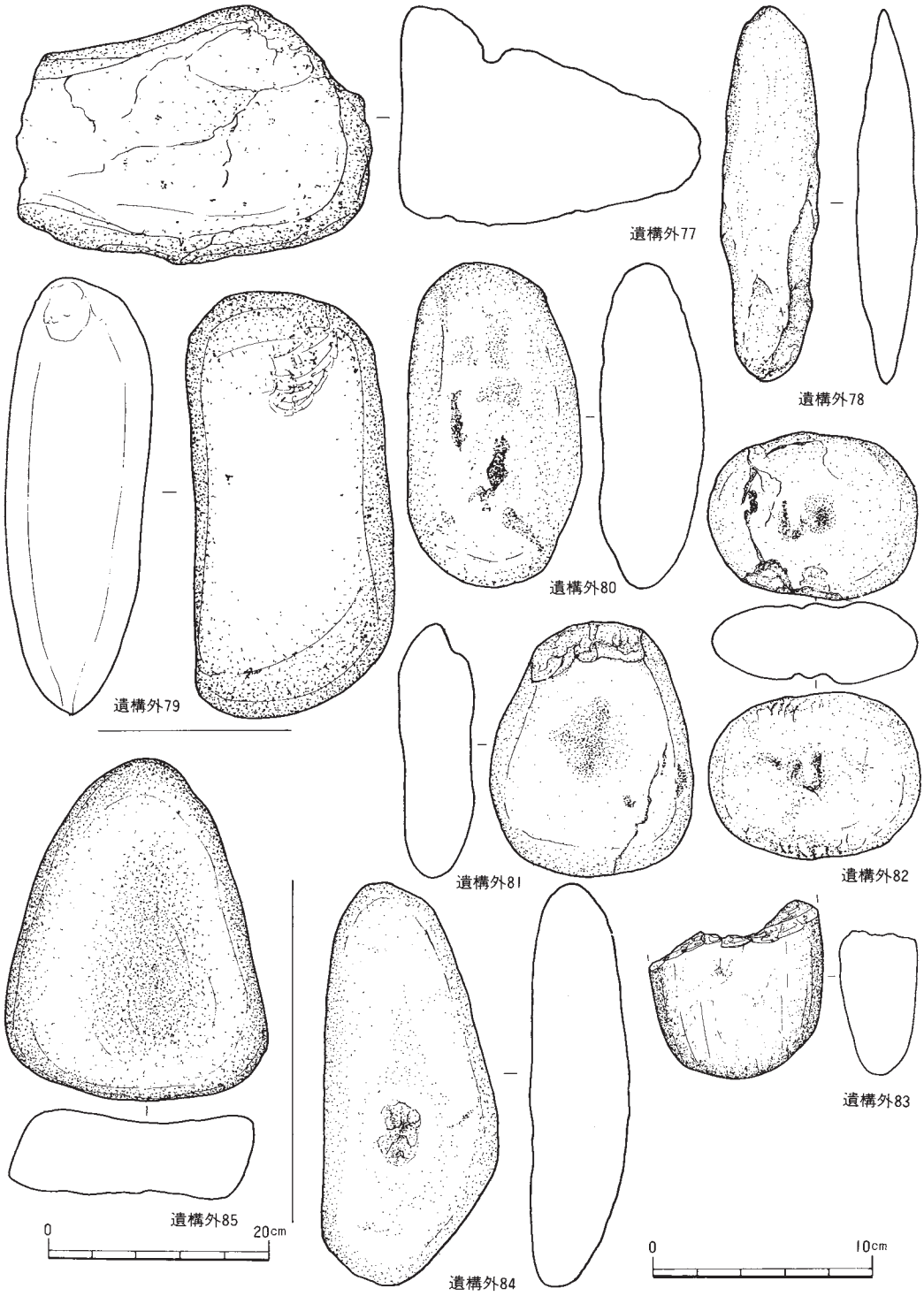
第142図　遺構外出土石器



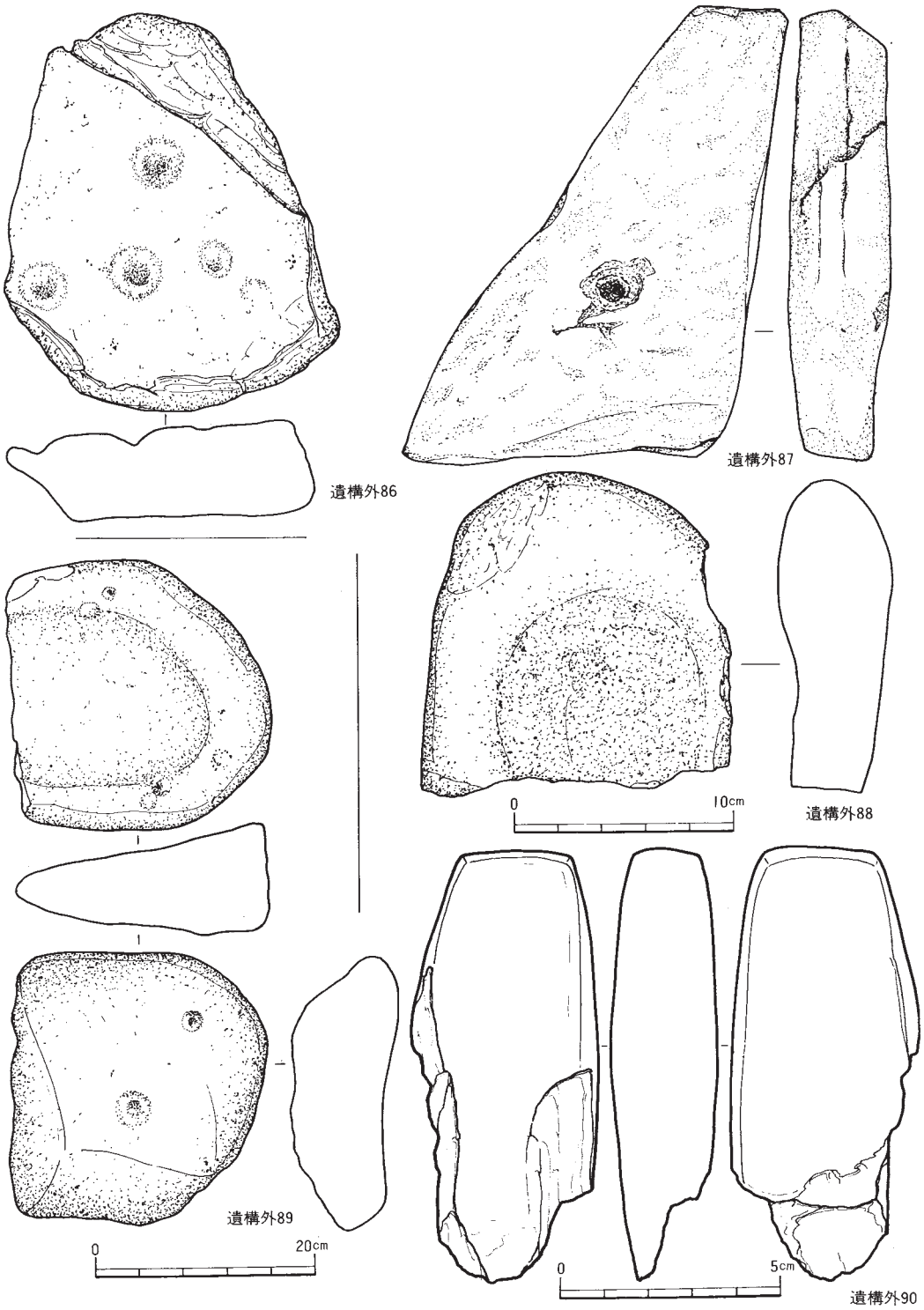
第143図　遺構外出土石器



第144図　遺構外出土石器



第145図　遺構外出土石器



第146図　遺構外出土石器

剝片の側縁及び先端部に両面から剝離調整を加え角度の大きな刃部を作っている。遺構外17は長方形状の剝片の側縁部に両面から剝離調整を加えたものであるが両端部を欠損している。遺構外62は剝片上端部の一部に剝離調整が加えられているが，刃部は作り出されていない。

石箆状石器　遺構外65の１点である。側縁部及び先端部は両面から荒い剝離調整を行い，下端部は片面から剝離調整し角度の急な刃部を作り出している。

石　　核　遺構外63・64の２点である。両者とも剝離作業があまり進んでいない石核で自然面を多く残している。打面を任意に設定して剝離したことが窺われる。

磨石・凹石類　総数17点を数える。円形または楕円形状の扁平な河原石を利用したものと思われ，遺構外76を除く他のものは器面に磨り痕が認められる。これらのなかで凹み部を有するもの（遺構外66～68，70～73，82，84）が９点，敲き痕が認められるもの（遺構外65・76・82）３点がある。

石　　皿　遺構外77，85～89の６点である。いずれも使用によって全体的に窪んでいる。なかには遺構外86・87・89のように凹石として利用されたものもある。

磨製石斧　遺構外90の１点である。北側開析谷に設けた試掘坑の調査時に採取したものである。全面を丁寧に磨きあげ，側縁に稜線を作り出し仕上げている。刃部を欠損する。

以上各器種毎に説明を加えたが，この他に器面が僅かに磨かれた棒状の石の両端部に荒い剝離が加えられているもの（遺構外78）も検出されている。

〔土　製　品〕（第140図，図版71）

ミニチュア土器　遺構外11の１点である。口縁部に瘤状の突起が付され，沈線を横位に一本施している。比較的精製された部類に入る。

土　　偶　遺構外12・13の２点である。遺構外12は土偶脚部の破片である。遺構外13は板状の土偶で頸部と脚部を欠損している。腕は短く突出し，胴部は括れている。乳房が強調され，器面全面には有節沈線が施されている。（松本）

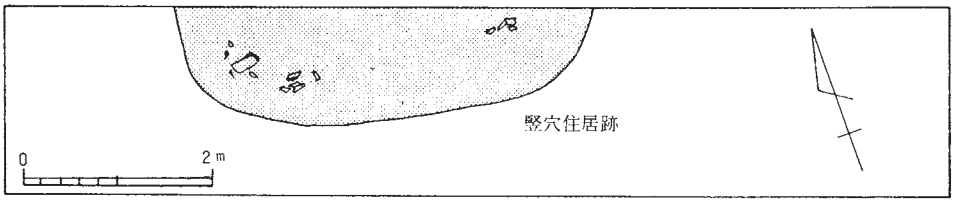
第11節　試掘調査時（８Ｔ住居跡）の成果

本節では今回の調査区からは外れたが，昭和54年度の試掘調査で設定した８号トレンチから検出された縄文時代中期の竪穴住居跡と，その住居跡内から出土した遺物について再度報告する。

８号トレンチ検出住居跡

遺　　構（第147図）

調査区外西側（第１図　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡周辺地形図）に設定したトレンチ（８号）から検出された住居跡である。プランの南部を検出したのみで全体の規模等については不明な点が多いが，ほぼ隅



第147図　試掘８号トレンチ検出住居跡

丸方形を呈するものと推定される。

堆積土は木炭や焼土粒を含む暗茶褐色で一部の掘り込みにより床面まで20～30cmの層厚であることが確認されている。堆積土内には多くの土器片が混入していた。

遺　　物（第148・149図，図版45・46）

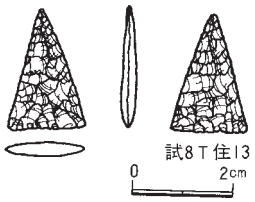
遺物は住居跡南側遺構確認面から検出したものである。出土量は今回の調査による他の住居跡に比べて多く，器形の窺える土器だけでも４点，他に石鏃が１点出土している。

土　器　図示したものは以下のように類別できる。

Ⅱ群土器	８Ｔ住６	Ⅲ群土器１類	８Ｔ住１・７	Ⅲ群土器２類	８Ｔ住３・８
Ⅲ群土器３類	８Ｔ住５	Ⅳ群土器１類	８Ｔ住２	Ⅳ群土器２類	８Ｔ住９
Ⅴ群土器	８Ｔ住10	Ⅺ群土器	８Ｔ住４	Ⅻ群土器	８Ｔ住11・12

８Ｔ住１は口縁部上端に太い隆帯による突起状の楕円形区画文が配され，口唇部・区画文上には有節沈線が施される。胴部は貼り付け痕を残す隆帯を「Ｈ」字状に配し縦に２分割され，地文には単節縄文（ＲＬ）が施されている。８Ｔ住２は口縁上に眼鏡状の把手が付されたものである。文様は平行沈線文が器面全面に施されている。胴部上端の括れ部には隆帯による長楕円形状の文様が施される。

８Ｔ住３は２本１組の沈線で上下を区画した頸部文様帯内に，同じ沈線により四角形状の区画文が施文されたものである。地文には単節縄文（ＬＲ）が施されている。８Ｔ住４は底部から緩やかに立ち上がる無文の浅鉢である。８Ｔ住11・12は条痕文が施された土器で胎土中に繊維を含んでいる。８Ｔ住11は格子目状に施された沈線の交点に円形刺突が加えられ，８Ｔ住12は括れ部に刺突文が施文されている。

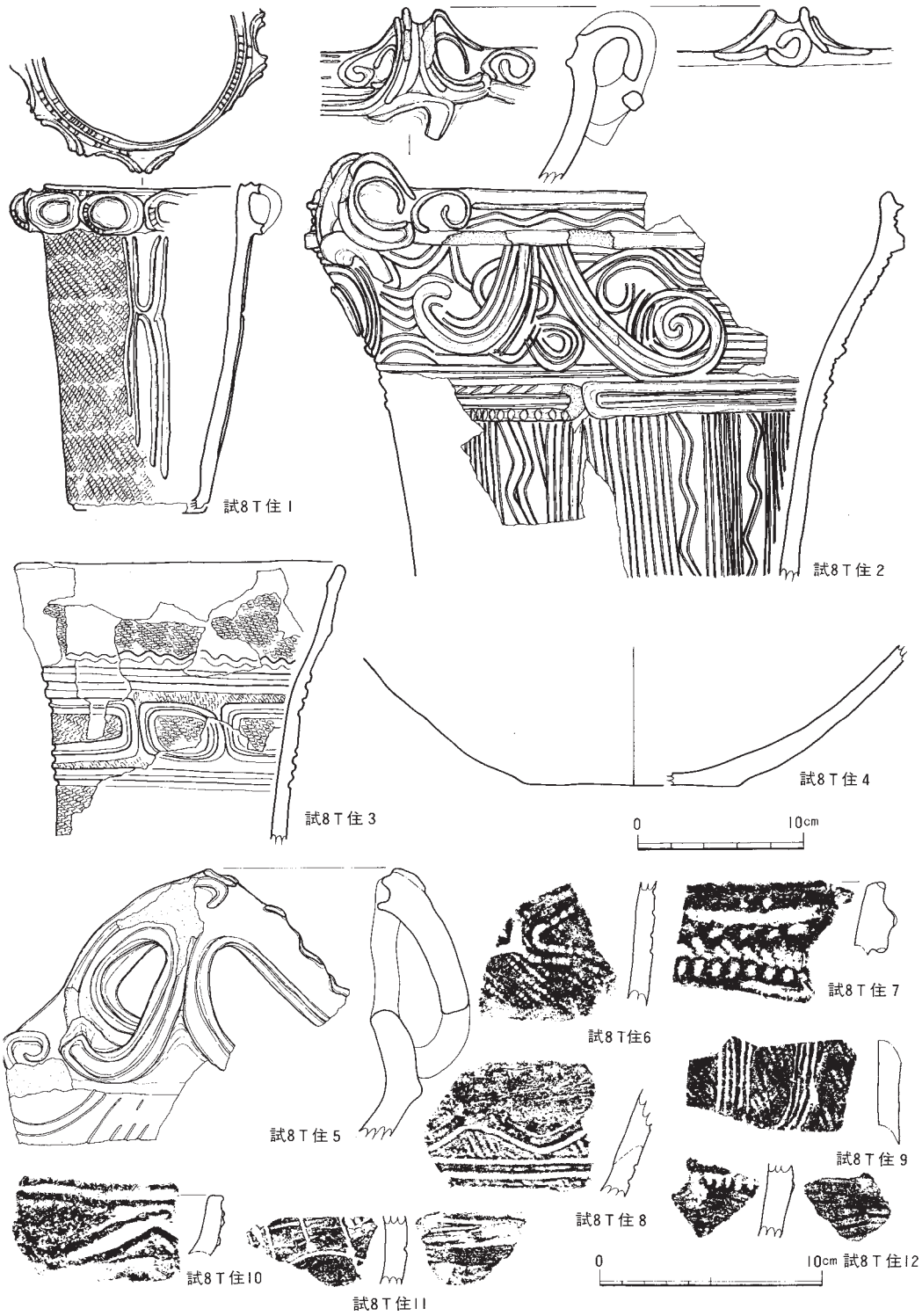


第148図
試掘調査時（８Ｔ住居跡）
出土石器

石　器　石鏃が１点（８Ｔ住13）出土している。基部に抉りの認められないもので，形態は二等辺三角形を呈する完形品である。

ま と め

遺構・遺物の在り方は，不明な点が多く，遺物も堆積土内出土で，明確に本遺跡に伴なうものとはいいがたいが，一応本跡の時期を出土したⅢ・Ⅳ群土器の範囲のなかで捉えておきたい。（大越）



第149図　試掘調査時（8T住居跡）出土縄文土器

第 22 表　縄文土器一覧表 (1) 法量測定可能土器

遺物No.	図No.	層位	器種	法量（cm）			文様要素			分類
				口径	底径	器高	口縁部文様	胴部文様	地文	
1 住 1	4	床直	浅鉢	49.7	10.8	21	口唇部沈線，末端渦巻状	無　文	なし	XI
7 住 1	13	床直	深鉢	(48.4)	不明	(18.3)	無　文	隆帯と沈線を垂下	条線文	IX
7 住 2	13	ℓ_1	浅鉢	(41.6)	不明	(8.5)	無　文	無　文	なし	XI
7 住 3	13	床直	浅鉢	(35.5)	不明	(8.0)	無　文	無　文	なし	XI
7 住 4	13	ℓ_1	浅鉢	(44.5)	不明	(8.4)	無　文	無　文	なし	XI
1 炉 1	18	炉内	深鉢	不明	9.5	(7)	不　明	沈線を垂下	LR単	V
2 埋 1	26	埋設	深鉢	31.4	(9.7)	(23.9)	無　文	隆帯による渦巻文	条線文	IX
3 埋 1	26	埋設	深鉢	26.2	不明	(13.2)	隆帯と沈線	無　文	LR単	V
4 埋 1	26	埋設	浅鉢	44.2	12.5	15.8	口唇部沈線，末端渦巻状	無　文	なし	XI
5 埋 1	26	埋設	深鉢	12.4	不明	(11.7)	無　文	隆帯と沈線を垂下	R撚糸	XII
15 坑 1	48	ℓ_2 ℓ_3	深鉢	29.5	12.8	38.4	隆帯による横Ｓ字状突起	無　文	なし	III－1
15 坑 2	48	ℓ_2 ℓ_3	深鉢	不明	9.2	10.7	隆帯による渦巻状突起	隆帯と有節沈線	LR単	III－1
15 坑 3	48	ℓ_2 ℓ_3	深鉢	19.4	不明	(12.6)	無　文	無　文	LR単	VI
15 坑 4	48	ℓ_2 ℓ_3	深鉢	14.4	不明	(21.0)	横Ｓ字状突起，有節沈線	隆帯と有節沈線	LR単	III－1
15 坑 5	48	ℓ_2 ℓ_3 ℓ_4	深鉢	24.8	(12.0)	32.1	撚糸圧痕文，半円状突起	無　文	LR単	III－1
20 抗 1	52	ℓ_2	深鉢	34.4	10.8	不明	隆帯と沈線で末端渦巻状	無　文	LR単	V
38 坑 1	53	ℓ_2	深鉢	不明	12.7	(31)	不　明	隆帯と沈線	RL単	V
51 坑 1	58	ℓ_2	浅鉢	不明	13.0	(6.1)	（波状口縁）	無　文	なし	XI
64 坑 1	43	ℓ_1	深鉢	不明	不明	(12.8)	沈　線	沈線を蛇行状に垂下	LR単	III－2
72 坑 1	63	ℓ_1	深鉢	(23.0)	不明	(13.8)	隆帯と沈線で末端渦巻状	無　文	LR単	V
72 坑 2	63	ℓ_1	深鉢	(26.8)	不明	(15.7)	無　文	指頭による押捺文	なし	VII－1
74 坑 2	43	ℓ_1	深鉢	(23.4)	不明	(5.0)	隆帯と沈線で末端渦巻状	不　明	LR単	V
80 坑 1	43	ℓ_2	ミニ	不明	5.0	(6.5)	不明，頸部に平行沈線	無　文	不明	III－2
1 包 5	66	L－II	ミニ	11.0	8.0	14.5	縄文原体圧痕	無　文	LR単	I
1 包 6	66	L－II	ミニ	11.5	7.3	12.8	波状小突起，原体圧痕	無　文	無節L	I
1 包 7	66	L－II	ミニ	(10.0)	不明	(6.6)	縄文原体圧痕	無　文	LR単	I
1 包 48	68	L－II	深鉢	24.5	不明	(33.2)	波状口縁	隆帯と有節沈線，綾絡文	LR単	II
1 包 49	68	L－II	深鉢	25.0	不明	(39.5)	横Ｓ字状突起，橋状把手	隆帯と有節沈線，綾絡文	LR単	II
1 包 50	69	L－II	深鉢	(37.2)	不明	(12.5)	隆帯と有節沈線，渦巻文	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 51	69	L－II	深鉢	(24.8)	不明	(15.2)	渦巻状突起と原体圧痕	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 52	69	L－II	深鉢	31.2	不明	(12.1)	小突起，有節沈線	有節沈線，綾絡文	LR単	II
1 包 53	69	L－II	深鉢	24.8	不明	(37.7)	橋状把手	隆帯と有節沈線，渦巻文	LR単	II
1 包 54	69	L－II	深鉢	(16.0)	不明	(12.5)	不　明	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 55	69	L－II	深鉢	不明	7.8	(6.8)	不　明	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 56	70	L－II	深鉢	不明	12.0	(36.5)	不　明	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 58	70	L－II	深鉢	(18.5)	不明	(15.2)	橋状把手と有節沈線	隆帯と有節沈線	LR単	II
1 包 59	70	L－II	深鉢	不明	不明	(10.2)	不明，頸部に有節沈線	隆帯を垂下，綾絡文	LR単	II
1 包 60	70	L－II	深鉢	不明	12.3	(8.6)	不　明	綾絡文	LR単	II
1 包 62	70	L－II	深鉢	不明	10.9	(7.2)	不　明	細い隆帯を垂下	なし	II
1 包 63	70	L－II	ミニ	11.6	6.0	12.4	波状口縁，有節沈線	綾絡文	LR単	II
1 包 64	70	L－II	ミニ	不明	13.4	(7.8)	不　明	隆帯と有節沈線	なし	II
1 包 191	79	L－II	深鉢	(25.0)	不明	(14.8)	Ｓ字状突起，隆帯波状文	無　文	LR単	III－1
1 包 192	79	L－II	深鉢	(34.0)	不明	(18.2)	隆帯で長楕円区画文	沈線と有節沈線	なし	III－1
1 包 193	79	L－II	深鉢	不明	15.8	(25.5)	不　明	沈線を垂下，半円文	RL単	III－1
1 包 194	79	L－II	深鉢	不明	13.0	(17.0)	不　明	隆帯と沈線，円文	LR単	III－1
1 包 195	79	L－II	深鉢	不明	16.2	(12.6)	不　明	隆帯と沈線で縦に加飾	LR単	III－1
1 包 196	79	L－II	浅鉢	44.0	不明	(8.5)	横Ｓ字状突起，渦巻状	無　文	LR単	III－1
1 包 197	79	L－II	深鉢	(28.4)	不明	(6.5)	小突起，沈線による加飾	不　明	なし	III－1
1 包 198	79	L－II	深鉢	22.2	不明	(12.1)	横Ｓ字状突起，頸部に沈線	隆　帯	RL単	III－1

第22表　縄文土器一覧表(2) 法量測定可能土器

遺物No.	図No.	層位	器種	法量（cm）			文様要素			分類
				口径	底径	器高	口縁部文様	胴部文様	地文	
1包199	80	L－Ⅱ	小型	18.0	5.8	18.5	隆帯によるS字状突起	隆帯で渦巻文，S字文	なし	Ⅲ－1
1包200	80	L－Ⅱ	小型	(18.0)	9.2	12.9	細い隆帯と突起	沈線による半円文	RL単	Ⅲ－1
1包264	85	L－Ⅱ	深鉢	15.6	不明	(12.9)	横S字状突起，隆沈線	無文	LR単	Ⅲ－2
1包273	86	L－Ⅱ	深鉢	不明	不明	(28.5)	不明	Y字状隆帯，沈線の渦文	なし	Ⅳ－2
1包274	86	L－Ⅱ	深鉢	不明	不明	(24.0)	不明，頸部に平行沈線	縦位に平行沈線	LR単	Ⅳ－2
1包296	88	L－Ⅱ	深鉢	(29.6)	不明	(27.0)	折返し口縁	無文	RL単	Ⅵ
1包297	88	L－Ⅱ	深鉢	46.0	不明	(10.6)	折返し口縁	無文	LR単	Ⅵ
1包298	88	L－Ⅱ	深鉢	不明	(13.0)	(17.0)	不明	隆帯を垂下	LR単	Ⅵ
1包299	88	L－Ⅱ	深鉢	14.6	不明	(5.3)	無文	無文	LR単	Ⅵ
1包300	89	L－Ⅱ	鉢	(35.2)	不明	(17.2)	無文	無文	RL単	Ⅵ
1包301	89	L－Ⅱ	深鉢	不明	15.5	(22.5)	不明	無文	LR単	Ⅵ
1包302	89	L－Ⅱ	深鉢	不明	11.6	(23.0)	不明	無文	LR単	Ⅵ
1包303	89	L－Ⅱ	ミニ	8.6	5.1	9.5	無文	無文	LR単	Ⅵ
1包304	89	L－Ⅱ	小型	16.0	不明	(11.2)	無文	無文	LR単	Ⅵ
1包305	89	L－Ⅱ	小型	15.4	6.0	7.8	無文	無文	LR単	Ⅵ
1包306	89	L－Ⅱ	小型	10.6	不明	(9.0)	無文	無文	RL単	Ⅵ
1包307	89	L－Ⅱ	小型	16.2	不明	5.8	口唇部を棒状工具で押捺	無文	LR単	Ⅵ
1包312	90	L－Ⅱ	深鉢	34.0	不明	(15.3)	無文	指頭による押捺文	なし	Ⅶ
1包320	91	L－Ⅱ	深鉢	(26.8)	不明	(16.4)	山形把手，隆帯と刺突文	爪形刺突文	なし	Ⅷ
1包321	91	L－Ⅱ	深鉢	不明	9.8	(20.1)	扇状把手，爪形刺突文	爪形刺突文	なし	Ⅷ
1包322	91	L－Ⅱ	深鉢	25.0	10.4	(32.1)	山形把手，隆帯と刺突文	U字状隆帯，爪形刺突文	なし	Ⅷ
1包323	91	L－Ⅱ	深鉢	22.8	不明	(15.9)	隆帯による突起，角押文	隆帯と角押文	LR単	Ⅷ
1包391	96	L－Ⅱ	浅鉢	(43.2)	不明	(13.6)	隆帯で把手状突起	無文	なし	Ⅺ
1包392	96	L－Ⅱ	浅鉢	29.5	9.8	8.9	波状口縁，波頂部に刺突	無文	なし	Ⅺ
1包393	96	L－Ⅱ	浅鉢	不明	8.6	(9.8)	不明	無文	なし	Ⅺ
1包394	96	L－Ⅱ	浅鉢	(45.0)	11.6	17.3	突起，内は長楕円区画	無文	なし	Ⅺ
1包405	98	L－Ⅱ	深鉢	(29.4)	不明	(21.6)	刺突のある縦長の突起	無文	なし	Ⅻ
1包406	98	L－Ⅱ	深鉢	(35.0)	不明	(10.3)	棒状工具による連続押捺	無文	なし	Ⅻ
1包540	108	L－Ⅱ	ミニ	7.8	4.6	7.0	原体圧痕で長楕円文	無文	無節L	Ⅰ
1包541	108	L－Ⅱ	ミニ	不明	4.4	(6.1)	不明	有節沈線を垂下	なし	Ⅱ
1包542	108	L－Ⅱ	ミニ	7.8	3.4	6.4	小突起と沈線	沈線を垂下	なし	
1包543	108	L－Ⅱ	ミニ	4.2	3.3	2.5	無文	無文	なし	
1包544	108	L－Ⅱ	ミニ	2.5	2.6	1.6	無文	無文	なし	
1包545	108	L－Ⅱ	ミニ	8.5	5.0	6.2	小突起，隆帯で楕円文	隆帯を垂下	なし	Ⅷ
1包547	108	L－Ⅱ	ミニ	不明	3.6	(6.1)	不明	無文	なし	
1包548	108	L－Ⅱ	ミニ	2.5	1.3	2.9	無文	無文	なし	
1包549	108	L－Ⅱ	ミニ	(3.1)	0.3	2.9	無文	指頭による圧痕文	なし	
1包550	108	L－Ⅱ	ミニ	7.2	6.7	(3.8)	無文	無文	RL単	
1包551	108	L－Ⅱ	ミニ	不明	7.2	(3.5)	不明	無文	なし	
1包552	108	L－Ⅱ	ミニ	4.5	(2.8)	(4.8)	無文	無文	なし	
1包553	108	L－Ⅱ	ミニ	3.8	2.0	3.2	無文	無文	なし	
1包554	108	L－Ⅱ	ミニ	6.1	5.6	3.4	無文	無文	LR単	
1包555	108	L－Ⅱ	ミニ	6.5	2.8	2.9	無文	無文	なし	
1包556	108	L－Ⅱ	ミニ	3.1	5.0	3.8	無文	無文	なし	
1包557	108	L－Ⅱ	ミニ	(5.5)	2.7	(3.3)	無文	無文	無節L	
1包558	108	L－Ⅱ	ミニ	不明	5.1	(4.7)	不明	無文	なし	
1包559	108	L－Ⅱ	ミニ	不明	4.5	(3.6)	不明	無文	なし	
1包560	108	L－Ⅱ	ミニ	4.6	5.0	1.9	無文	無文	なし	
2包11	114	L－Ⅱ	小型	不明	6.8	(11.3)	不明	綾絡文	LR単	Ⅰ

第 22 表　縄文土器一覧表 (3) 法量測定可能土器

遺物No.	図No.	層位	器種	法量（cm）			文様要素			分類
				口径	底径	器高	口縁部文様	胴部文様	地文	
2包 12	114	L－Ⅱ	深鉢	26.7	不明	(11.4)	有節沈線による楕円文	有節沈線による渦巻文	LR単	Ⅱ
2包 14	114	L－Ⅱ	深鉢	不明	不明	(13.0)	不明	細い隆帯と有節沈線	LR単	Ⅱ
2包 17	115	L－Ⅱ	深鉢	不明	9.3	(8.8)	不明	隆帯を垂下	LR単	Ⅱ
2包 93	119	L－Ⅱ	小型	11.8	不明	(13.5)	小突起	無文	LR単	Ⅵ
2包 94	119	L－Ⅱ	深鉢	(17.0)	不明	(10.4)	波状口縁	無文	LR単	Ⅵ
2包 98	120	L－Ⅱ	深鉢	34.6	16.2	45.2	山形状把手，爪形刺突文	爪形刺突文	なし	Ⅷ
2包104	121	L－Ⅰ	浅鉢	(15.4)	(11.4)	9.0	波状口縁	無文	なし	Ⅺ
2包107	121	L－Ⅱ	浅鉢	35.7	不明	(9.5)	小突起	無文	なし	Ⅺ
2包108	121	L－Ⅱ	浅鉢	(42.3)	不明	(5.5)	平口縁，口縁下に鍔	無文	なし	Ⅺ
3包 20	126	L－Ⅱ	深鉢	不明	9.0	(18.3)	不明	隆帯と沈線で菱形区画文	RL単	Ⅺ
3包 35	127	L－Ⅲ	深鉢	(33.0)	不明	(11.3)	無文，下端に円形刺突	隆帯で縦区画	撚糸文	Ⅹ
3包 46	127	L－Ⅱ	ミニ	不明	6.1	(3.7)	不明	無文	LR単	
4包 1	130	L－Ⅱ	深鉢	不明	不明	(16.0)	隆帯と山形の突起	隆帯による渦巻文	LR単	Ⅲ
4包 2	130	(ℓ－2)	深鉢	14.8	不明	(8.4)	半円状突起と隆帯	平行沈線による半円文	RL単	Ⅲ
4包 16	130	(ℓ－1)	小型	14.6	不明	(11.3)	隆帯と沈線	平行沈線	LR単	Ⅴ
4包 19	131	(ℓ－1)	深鉢	(20.0)	不明	(11.0)	隆帯と沈線でクランク状	無文	LR単	Ⅴ
4包 20	131	(ℓ－1)	深鉢	(20.4)	不明	(7.3)	隆沈線で末端渦巻文	不明	不明	Ⅴ
4包 49	132	L－Ⅲ	深鉢	(27.0)	不明	(21.8)	指頭による押捺文	指頭による押捺文	なし	Ⅶ
4包 60	133	L－Ⅱ	浅鉢	53.0	16.0	21.8	無文	無文	なし	Ⅺ
遺外 1	140	不明	深鉢	不明	10.5	不明	不明	綾絡文	LR単	Ⅰ
試住 1	148	覆土内	深鉢	12.9	(7.5)	(20.0)	隆帯による突起状楕円文	隆帯でH字状文	RL単	Ⅲ－1
試住 2	148	覆土内	深鉢	(34.3)	不明	(23.4)	隆帯による眼鏡状把手	半截竹管による平行沈線	なし	Ⅳ－1
試住 3	148	覆土内	深鉢	(19.8)	不明	(16.5)	不明，頸部に沈線	沈線による楕円文	LR単	Ⅲ－2

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (1)

遺物No.	図No.	器種	出土地点	採取No.	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石質
1住 2	4	石鏃	SI01	S－5	堆積土	(1.7)	1.5	0.45	0.9	石英
1住 3	4	石鏃	SI01	S－3	床直	(2.0)	1.4	0.6	1.2	石英
1住 4	4	石鏃	SI01 P_8			(2.2)	1.5	0.5	1.5	石英
1住 5	4	石鏃	SI01	S－4	床直	1.9	0.9	0.6	0.8	石英
1住 6	4	石鏃	SI01	S－6	堆積土	(1.6)	1.4	0.3	0.6	石英
1住 7	4	石鏃	SI01		堆積土	2.3	(1.2)	0.6	1.4	石英
1住 8	4	石鏃	SI01	S－7	床直	3.3	(1.4)	0.4	2.4	石英
1住 9	4	不定形石器	SI01		ℓ－1	4.2	2.7	1.1	10.9	頁岩
		磨石・凹石	SI02	88	床面	21.0	11.2	4.3	200	安山岩
		磨石・凹石	SI02	29	貼り床	(11.0)	(8.4)	4.5	70	安山岩
4住 12	8	磨石・凹石	SI04	40		10.0	8.5	6.5	740	花崗岩
4住 13	8	磨石・凹石	SI04	33		7.6	7.1	5.1	400	花崗岩
4住 14	8	石鏃(未)	SI04		ℓ－1	(2.5)	(1.7)	0.6	3.6	石英
4住 15	8	石鏃	SI04 A区壁溝内			2.5	(1.8)	0.8	2.4	頁岩(?)
4住 16	8	石箆状石器	SI04		ℓ－1	3.4	2.6	1.0	6.8	頁岩(?)
5住 24	11	石鏃	D－3G－91	48	L－Ⅱ	1.8	1.6	0.3	0.9	石英
5住 25	11	石鏃	SI05	46		2.2	2.7	0.5	1.6	石英
5住 26	11	石鏃	SI05	47		2.1	1.4	0.4	0.8	流紋岩
5住 27	11	石鏃	SI05		覆土	2.1	1.8	0.5	1.4	石英
5住 28	11	石鏃	SI05	44		3.1	1.5	0.4	0.9	頁岩(?)

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (2)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
5 住 29	11	石　鏃	D－3G－82			3.4	1.5	0.4	1.1	頁　岩
5 住 30	11	石　鏃	D－3G－82			1.7	(1.1)	0.4	0.5	流紋岩
5 住 31	11	石　鏃	SI05　P_6			(1.5)	1.6	0.3	0.8	頁　岩(?)
5 住 32	11	石　鏃	D－3G－91	47		(1.8)	1.4	0.3	0.7	安山岩
5 住 33	11	石　鏃	D－3G－81			(2.6)	1.4	0.5	1.8	頁　岩(?)
5 住 34	11	石鏃(未)	SI05	45		2.7	1.6	0.6	2.3	石　英
5 住 35	11	石鏃(未)	D－3G－91			2.7	1.6	1.0	3.9	石　英
5 住 36	11	石　皿	SI05	38		(14.7)	(10.6)	(5.2)	760	安山岩
5 住 37	11	磨石・凹石	SI05	43		10.9	10.3	5.6	1010	安山岩
7 住 17	15	石　鏃	SI07　中央部		検出面	1.4	1.4	0.4	0.5	珪化木
7 住 18	15	石　鏃	SI07		覆　土	(1.7)	1.7	0.4	1.1	石　英
7 住 19	15	剥　片	SI07		覆　土	6.2	4.1	1.3	19.5	片麻岩
7 住 20	15	磨石・凹石	SI07	115		8.8	6.1	5.7	450	石　英
7 住 21	15	磨石・凹石	SI07	56		(8.1)	6.1	3.8	330	安山岩
7 住 22	15	磨石・凹石	SI07	31		(8.3)	(4.8)	4.8	270	安山岩
7 住 23	15	磨石・凹石	SI07	70		7.5	7.1	4.8	410	安山岩
7 住 24	15	磨石・凹石	SI07	119		11.0	10.2	6.5	1030	花崗岩
A 3 P_2 1	18	石　鏃	A－3G　P_2	1		2.8	1.7	0.5	1.6	頁　岩
1 坑 1	44	不定形石器	SK01		埋　土	2.7	1.3	0.3	1.2	頁　岩
2 坑 11	44	不定形石器	SK02	15	ℓ－3	2.4	1.2	0.3	0.5	石　英
4 坑 4	44	石　鏃	SK04		埋　土	1.8	1.4	0.4	1.1	頁　岩
4 坑 5	44	石　鏃	SK04		埋　土	2.1	1.4	0.4	0.6	頁　岩
4 坑 6	44	石　鏃	SK04		埋　土	(1.6)	(1.5)	0.3	0.9	石　英
4 坑 7	44	石　鏃	SK04		埋　土	2.5	(1.2)	0.4	0.6	頁　岩
4 坑 8	45	不定形石器	SK04		埋　土	2.9	3.3	0.6	5.5	頁　岩(?)
4 坑 9	45	磨石・凹石	SK04		底　面	18.0	8.2	5.6	1060	安山岩
7 坑 3	44	石　鏃	SK07	S－9		2.7	1.7	0.5	1.5	石　英
7 坑 4	44	石　鏃	SK07			3.8	(1.5)	0.4	1.9	頁　岩
7 坑 5	47	石　皿	SK07	S－13		20.4	17.6	2.6	1490	安山岩
9 坑 6	44	石　鏃	SK09		ℓ－3・4	(2.4)	(1.9)	0.5	1.8	流紋岩
9 坑 7	44	石　鏃	SK09		ℓ－2	2.6	(1.6)	0.6	1.5	石　英
9 坑 8	47	石　皿	SK09		ℓ－2	(39.6)	(12.6)	(11.8)	4640	安山岩
10 坑 1	44	石　錐	SK10		埋　土	3.9	0.7	0.4	0.9	頁　岩(?)
11 坑 3	44	石　鏃	SK11			2.0	1.7	0.5	14.9	瑪　瑙
11 坑 4	44	石　鏃	SK11			(2.0)	(1.7)	0.4	1.0	頁　岩
11 坑 5	45	不定形石器	SK11		埋　土	2.9	3.1	1.1	4.9	頁　岩
11 坑 6	45	磨石・凹石	SK11		埋　土	12.2	8.6	4.0	620	凝灰岩
12 坑 3	45	磨石・凹石	SK12			14.2	9.0	8.4	1510	安山岩
24 坑 1	44	石　鏃	SK24		埋　土	(2.0)	(1.9)	0.5	1.9	石　英
25 坑 6	44	石　鏃	SK25		ℓ－1	(1.9)	1.4	0.4	0.7	流紋岩
27 坑 5	46	磨石・凹石	SK27	7		(9.2)	(5.4)	(5.4)	360	安山岩
32 坑 1	46	磨石・凹石	SK32		ℓ－1	(9.6)	7.6	4.8	500	安山岩
38 坑 6	54	石　鏃	SK38			1.9	1.2	0.3	0.5	流紋岩
38 坑 7	54	磨石・凹石	SK38	12		(10.4)	10.4	5.8	1850	安山岩
42 坑 1	44	石　鏃	SK42	2		1.6	1.2	0.4	0.6	石　英
47 坑 1	47	多孔石	SK47		検出面	33.2	20.4	6.1	5680	花崗岩
48 坑 6	44	石　鏃	SK48		ℓ－1	(1.8)	1.8	0.4	1.3	石　英
48 坑 7	44	石　鏃	SK48		ℓ－1	(1.8)	(1.5)	0.4	1.0	流紋岩
48 坑 8	44	石　鏃	SK48		ℓ－1	(2.1)	(1.5)	0.4	0.7	石　英
54 坑 3	44	石　鏃	SK54			1.7	1.3	0.4	0.6	流紋岩

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (3)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
55 坑 1		大　珠	SK55		堆積土					ヒスイキ石
62 坑 2	44	石　鏃	SK62		堆積土	3.8	1.7	0.8	3.8	石　英
62 坑 3	44	石　匙	SK62		堆積土	(2.8)	3.3	1.0	8.9	泥　岩
65 坑 1	44	石　鏃	SK65	S－2		2.7	2.0	0.6	2.4	黒曜石
66 坑 2	44	石　鏃	SK66		ℓ－1・2	(1.1)	1.5	0.4	1.1	石　英
66 坑 3	44	石　鏃	SK66	2		(1.9)	(1.3)	0.4	0.6	石　英
66 坑 4	45	不定形石器	SK66		検出面	2.8	1.8	0.5	2.0	流紋岩
70 坑 5	46	磨石・凹石	SK70	32		(11.0)	8.2	4.2	480	安山岩
74 坑 3	44	石　鏃	SK74		検出面	(1.3)	(1.6)	0.4	1.0	石　英
74 坑 4	44	石　鏃	SK74	9		3.5	2.2	0.9	4.9	玉　髄
74 坑 5	46	磨石・凹石	SK74	8		10.8	8.4	5.6	630	安山岩
76 坑 1	44	石　鏃	SK76		ℓ－1	(2.0)	(1.3)	0.4	0.8	黒曜石
77 坑 3	45	不定形石器	SK77			5.8	2.9	1.3	14.9	片麻岩
77 坑 4	47	石　皿	SK77	13		21.6	13.0	3.4	1750	安山岩
78 坑 1	47	磨石・凹石	SK78	3		12.4	6.4	3.6	530	凝灰岩
78 坑 2	47	磨石・凹石	SK78	2		10.0	8.0	(3.4)	440	緑色片岩
1 包423	100	石　鏃	A－4G－33	26		1.7	1.2	0.4	0.5	石　英
1 包424	100	石　鏃	A－4G－61	3		1.8	1.4	0.4	0.7	石　英
1 包425	100	石　鏃	A－3G－27		L－Ⅱ	1.8	1.3	0.5	1.1	石　英
1 包426	100	石　鏃	A－4G－31	43		1.8	(1.0)	0.4	0.6	石　英
1 包427	100	石　鏃	A－3G－23	31		1.7	1.2	0.3	0.7	黒曜石
1 包428	100	石　鏃	A－3G－37	25		1.8	1.5	0.6	1.2	頁　岩
1 包429	100	石　鏃	A－3G－27	11		2.0	1.4	0.4	1.1	石　英
1 包430	100	石　鏃	A－3G－29		L－Ⅱ	(1.7)	1.6	0.4	1.0	石　英
1 包431	100	石　鏃	A－3G－70	2		(1.3)	1.5	0.4	0.7	石　英
1 包432	100	石　鏃	A－3G－26	18		2.0	1.5	0.5	1.2	頁　岩(?)
1 包433	100	石　鏃	A－3G－33	22		1.9	1.7	0.4	1.1	石　英
1 包434	100	石　鏃	A－3G－26	8		2.1	1.5	0.5	1.2	石　英
1 包435	100	石　鏃	A－3G－48		L－Ⅱa	1.9	1.6	0.5	1.5	石　英
1 包436	100	石　鏃	A－3G－48		L－Ⅱ	2.0	1.3	0.5	1.3	頁　岩(?)
1 包437	100	石　鏃	A－3G－28		L－Ⅱ	1.7	(1.1)	0.3	0.7	石　英
1 包438	100	石　鏃	A－3G－28	19		(1.7)	1.5	0.5	1.1	流紋岩
1 包439	100	石　鏃	A－3G－36	8		2.5	1.3	0.4	1.2	黒曜石
1 包440	100	石　鏃	A－3G－18		L－Ⅱ	(1.5)	1.4	0.4	0.8	黒曜石
1 包441	100	石　鏃	A－3G－46	25		(1.3)	1.3	0.3	0.7	黒曜石
1 包442	100	石　鏃	A－3G－28	34		2.1	1.5	0.5	1.2	黒曜石
1 包443	100	石　鏃	A－3G－54	16		(1.9)	1.3	0.5	1.5	石　英
1 包444	100	石　鏃	A－3G－48		L－Ⅱa	(2.3)	1.5	0.5	1.5	黒曜石
1 包445	100	石　鏃	A－3G－47		L－Ⅰ	(2.2)	1.6	0.5	1.9	黒曜石
1 包446	100	石　鏃	A－4G－42	15		(2.4)	1.6	0.5	1.2	アプライト
1 包447	100	石　鏃	A－4G－21		L－Ⅱ	(1.1)	1.4	0.3	0.3	玉　髄
1 包448	100	石　鏃	A－4G－33	2		2.4	1.4	0.4	1.4	頁　岩
1 包449	100	石　鏃	A－3G－46	1		2.5	1.5	0.5	2.3	石　英
1 包450	100	石　鏃	A－3G－17	5		2.4	1.6	0.5	1.8	石　英
1 包451	100	石　鏃	A－3G－19	33		2.9	1.3	0.4	1.2	頁　岩
1 包452	100	石　鏃	A－3G		L－Ⅱ	2.9	1.5	0.5	2.4	頁　岩(?)
1 包453	100	石　鏃	A－4G－42		L－Ⅱ	2.6	1.8	0.5	1.7	頁　岩
1 包454	101	石　鏃	A－4G－43		L－Ⅰ	1.8	1.5	0.5	1.3	石　英
1 包455	101	石　鏃	A－3G－45			1.9	1.1	0.3	0.6	流紋岩
1 包456	101	石　鏃	A－3G－88		L－Ⅰ	2.0	1.5	0.3	0.8	頁　岩(?)

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (4)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
1 包457	101	石　鏃	A－3G－59		L－I	1.9	1.2	0.4	0.9	石　英
1 包458	101	石　鏃	A－4G－63		L－I	2.3	1.5	0.3	0.9	頁　岩
1 包459	101	石　鏃	A－3G－56		L－I	(1.5)	1.6	0.4	1.0	石　英
1 包460	101	石　鏃	A－3G		L－I	(1.5)	1.6	0.4	1.3	石　英
1 包461	101	石　鏃	A－3G－47		L－I	2.1	1.4	0.5	1.3	石　英
1 包462	101	石　鏃	A－4G－43		L－I	2.1	1.5	0.5	1.3	石　英
1 包463	101	石　鏃	A－4G－41			2.8	1.3	0.4	1.3	メノウ
1 包464	101	石　鏃	A－4G	13		2.7	1.4	0.6	1.6	流紋岩
1 包465	101	石　鏃	A－4G－51		L－I	2.4	1.8	0.5	1.5	流紋岩
1 包466	101	石　鏃	A－3G－54		L－I	2.8	1.7	0.5	1.8	頁　岩
1 包467	101	石　鏃	A－4G－63		L－I	3.0	1.5	0.6	2.0	頁　岩
1 包468	101	石　鏃	A－3G－45			(2.1)	(1.5)	0.4	1.1	頁　岩
1 包469	101	石　鏃	A－4G－21		L－I	(1.8)	1.7	0.4	1.5	石　英
1 包470	101	石　鏃	A－3G－54		L－I	3.2	1.7	0.6	2.2	流紋岩
1 包471	101	石　鏃	A－3G－31		L－I	(1.9)	1.8	0.6	2.0	石　英
1 包472	101	石　鏃	A－3G－36		L－I	(2.3)	1.7	0.6	2.2	石　英
1 包473	101	石　鏃	A－4G		L－I	2.2	1.7	0.6	2.5	石　英
1 包474	101	石　鏃	A－4G－41			2.5	(1.8)	0.8	3.7	黒曜石
1 包475	101	石　鏃	A－3G－48		L－II	(2.5)	(1.5)	0.4	1.5	石　英
1 包476	101	石　鏃	A－4G－53	19		2.4	(1.1)	0.4	1.2	頁　岩
1 包477	101	石　鏃	A－3G－17		L－II	(2.5)	(1.8)	0.5	1.6	石　英
1 包478	101	石　鏃	A－3G－68	5		(1.7)	1.8	0.5	1.9	頁　岩
1 包479	101	石　鏃	A－4G－42			2.9	(1.7)	0.5	1.9	流紋岩
1 包480	101	石　鏃	A－3G－27	9		3.4	1.7	0.6	2.5	流紋岩
1 包481	101	石　鏃	A－3G－70	1		2.9	1.7	0.8	2.8	流紋岩
1 包482	101	石　鏃	A－3G－30	2		3.1	1.7	0.6	2.1	石　英
1 包483	101	石　鏃	A－3G－57	30		2.7	1.6	0.4	1.5	安山岩
1 包484	102	石　鏃	A－4G－42	28		(3.2)	1.8	0.6	3.2	頁　岩
1 包485	102	石　鏃	A－3G－57	29		3.4	1.5	0.5	2.3	片麻岩
1 包486	102	石　鏃	A－3G－18		L－II	3.5	1.7	0.4	2.1	頁　岩
1 包487	102	石　鏃	A－3G－17	18		2.9	1.7	0.5	2.3	頁　岩
1 包488	102	石　鏃	A－3G－35	13		3.3	1.7	0.4	1.5	頁　岩(?)
1 包489	102	石　鏃	A－4G－49		L－I	(2.8)	2.1	0.5	4.0	泥　岩
1 包490	102	不定形石器	A－3G－45		L－I	3.0	1.8	0.6	3.7	頁　岩(?)
1 包491	102	不定形石器	A－3G－45	13		3.9	1.8	0.7	4.9	黒曜石
1 包492	102	不定形石器	A－3G－69	5		3.6	1.9	1.0	7.5	頁　岩
1 包493	102	不定形石器	A－3G		L－II	3.6	1.8	0.7	6.2	頁　岩
1 包494	102	不定形石器	A－4G		L－II	3.4	2.6	0.8	7.1	頁　岩(?)
1 包495	102	不定形石器	A－3G－48		L－I	2.8	0.6	2.0	3.9	頁　岩
1 包496	102	不定形石器	A－3G－28	16		2.6	2.8	0.9	8.1	石　英
1 包497	102	不定形石器	A－3G－30		L－II	3.5	2.6	1.0	8.8	石　英
1 包498	102	不定形石器	A－3G－48		L－IIa	2.5	2.8	0.8	4.8	石　英
1 包499	102	不定形石器	A－4G－49		L－I	2.7	2.8	0.3	2.4	頁　岩
1 包500	102	不定形石器	A－3G－45		L－I	(3.0)	3.0	1.2	12.0	石　英
1 包501	103	不定形石器	A－3G－30		L－II	4.0	5.2	1.1	25.2	頁　岩
1 包502	103	石箆状石器	A－3G－45	26		5.2	3.5	1.5	24.9	頁　岩
1 包503	103	磨製石斧	A－3G－23	26		(2.8)	3.0	0.7	9.7	凝灰岩
1 包504	103	磨製石斧	A－3G－42		L－I	(5.4)	(4.5)	1.2	44.7	凝灰岩
1 包505	103	磨石・凹石	A－3G－49		L－II	9.6	6.2	3.9	360	花崗岩
1 包506	103	磨石・凹石	A－3G－44	41		8.7	6.0	4.0	320	安山岩

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (5)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
1　包507	103	磨石・凹石	A－3G－50	24		7.8	6.0	4.0	200	安山岩
1　包508	103	磨石・凹石	A－3G－30	11		8.5	6.5	4.5	310	安山岩
1　包509	103	磨石・凹石	A－3G－25			6.1	6.3	4.3	190	安山岩
1　包510	103	磨石・凹石	A－4G－42	23		11.5	8.3	3.7	480	安山岩
1　包511	103	磨石・凹石	A－4G－41	4		9.0	8.1	5.2	530	凝灰岩
1　包512	104	磨石・凹石	A－4G－44	25		10.0	7.2	6.0	400	安山岩
1　包513	104	磨石・凹石	A－3G－29	28		11.5	8.5	3.4	400	安山岩
1　包514	104	磨石・凹石	A－3G－69	6		11.0	7.3	5.5	520	安山岩
1　包515	104	磨石・凹石	A－4G－63	3		10.5	7.3	5.2	610	安山岩
1　包516	104	磨石・凹石	A－3G－39	31		(7.0)	7.0	6.5	330	安山岩
1　包517	104	磨石・凹石	A－4G－22	1		9.4	8.2	5.0	520	凝灰岩
1　包518	104	磨石・凹石	A－4G－44	7		16.0	9.0	5.8	1010	安山岩
1　包519	104	磨石・凹石	A－3G－6		L－Ⅱ	9.5	7.5	5.0	440	安山岩
1　包520	105	磨石・凹石	A－3G－48		L－Ⅱ	8.4	7.0	4.0	350	安山岩
1　包521	105	磨石・凹石	A－3G－39	49	L－Ⅱ	9.6	5.1	6.0	290	安山岩
1　包522	105	磨石・凹石	A－3G－6			11.8	9.0	5.1	700	安山岩
1　包523	105	磨石・凹石	A－3G－25	1		11.0	8.5	5.8	730	安山岩
1　包524	105	磨石・凹石	A－3G－26	25		9.5	9.4	5.0	550	凝灰岩
1　包525	105	磨石・凹石	A－3G－17		L－Ⅱ	10.7	8.4	4.5	510	凝灰岩
1　包526	105	磨石・凹石	A－3G－16		L－Ⅱa	10.2	8.7	4.2	400	安山岩
1　包527	105	磨石・凹石	A－3G－34	56		13.0	7.3	5.2	810	安山岩
1　包528	106	磨石・凹石	A－3G－25	24		11.6	7.9	5.5	560	安山岩
1　包529	106	磨石・凹石	A－4G－42	22		12.4	7.5	4.9	700	安山岩
1　包530	106	磨石・凹石	A－3G－20	28		12.3	9.2	4.2	560	安山岩
1　包531	106	磨石・凹石	A－3G－49	30		14.1	5.8	5.3	510	安山岩
1　包532	106	磨石・凹石	A－3G－35	18		14.5	9.5	5.2	910	安山岩
1　包533	106	磨石・凹石	A－3G－14	2		16.7	9.5	7.0	1400	安山岩
1　包534	107	磨石・凹石	A－3G－46	12		(16.7)	4.4	3.6	390	安山岩
1　包535	107	磨石・凹石	A－3G－29	23		(13.2)	4.7	4.3	370	緑色片岩
1　包536	107	磨石・凹石	A－3G－48		L－Ⅱ	8.9	6.5	4.0	630	安山岩
1　包537	107	磨石・凹石	A－4G－21	34		20.1	8.1	7.6	690	安山岩
1　包538	107	磨石・凹石	A－3G－25	26		11.7	7.7	6.0	760	安山岩
1　包539	107	磨石・凹石	A－4G－41	25		(6.5)	6.9	5.3	290	安山岩
2　包115	122	石　鏃	D－6G－77		L－Ⅱ	1.7	1.4	0.4	0.9	石　英
2　包116	122	石　鏃	D－5G－77			2.0	1.6	0.5	1.5	黒曜石
2　包117	122	石　鏃	D－5G－7		L－Ⅱ	2.0	1.3	0.6	1.4	石　英
2　包118	122	石　鏃	D－5G－95		L－Ⅱ	1.9	1.4	0.6	1.2	石　英
2　包119	122	石　鏃	D－6G－65		L－Ⅱ	2.4	1.4	0.5	1.5	石　英
2　包120	122	石　鏃	D－6G－64		L－Ⅱ	(2.2)	1.4	0.5	1.4	珪化木
2　包121	122	石　鏃	D－6G－73	S－1		(2.0)	1.3	0.4	0.9	黒曜石
2　包122	122	石　鏃	D－5G－80	6		(2.3)	1.6	0.3	1.3	頁　岩(?)
2　包123	122	石　鏃	D－6G－73			2.1	1.3	0.5	1.6	流紋岩
2　包124	122	石　鏃	D－6G－83		L－Ⅱ	(2.7)	1.2	0.4	1.4	石　英
2　包125	122	石　鏃	D－5G－90			2.3	1.4	0.5	0.9	珪化木
2　包126	122	石　鏃	D－6G－79		L－Ⅱ	(1.6)	1.8	0.4	1.1	石　英
2　包127	122	石　鏃	D－6G－65		L－Ⅱ	2.0	1.4	0.5	1.2	黒曜石
2　包128	122	石　鏃	D－6G－86		L－Ⅲ	(2.2)	1.5	0.4	1.3	頁　岩(?)
2　包129	122	石　鏃	D－5・6G		L－Ⅱ	2.4	1.7	0.3	1.0	
2　包130	122	石　鏃	D－5G－80	7		2.8	1.4	0.5	2.3	頁　岩(?)
2　包131	122	石　鏃	D－5G－79		L－Ⅱ	2.7	2.0	0.4	2.8	頁　岩(?)

第23表　七郎内C遺跡出土石器一覧表(6)

遺物No.	図No.	器種	出土地点	採取No.	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石質
2 包132	122	石鏃	D－5G－100		L－Ⅱ	(2.6)	1.5	0.4	1.5	頁岩
2 包133	122	石鏃	D－6G－75		L－Ⅱ	2.9	1.9	0.7	2.9	石英
2 包134	122	石鏃	D－5G－81		L－Ⅱ	(2.2)	2.0	0.5	1.7	流紋岩
2 包135	122	石鏃	D－6G－74		L－Ⅱ	(1.3)	2.1	0.5	1.6	黒曜石
2 包136	122	不定形石器	D－6G－62		L－Ⅱ	2.4	1.7	0.7	2.9	石英
2 包137	122	不定形石器	D－6G－46		L－Ⅱ	2.3	2.1	0.6	2.6	流紋岩
2 包138	122	不定形石器	D－6G－62		L－Ⅱ	2.1	1.5	0.5	2.2	石英
2 包139	122	不定形石器	D－6G－1		L－Ⅱ	2.1	1.9	0.4	1.9	頁岩(?)
2 包140	122	不定形石器	D－6G－59			2.0	1.3	0.3	1.0	石英
2 包141	122	不定形石器	D－5G－88		L－Ⅱ	1.9	2.2	0.5	2.0	流紋岩
2 包142	122	不定形石器	D－5G－87		L－Ⅱ	2.2	2.7	0.5	4.1	泥岩
2 包143	122	不定形石器	D－6G－75		L－Ⅱ	3.5	2.4	0.4	2.7	頁岩(?)
2 包144	122	磨製石斧	D－6G－68		L－Ⅱ	1.8	3.1	0.9	6.1	凝灰岩
2 包145	123	磨石・凹石	D－6G－75	10		12.4	8.2	6.0	1000	凝灰岩
2 包146	123	磨石・凹石	D－5G		L－Ⅱ	10.6	(7.2)	3.4	360	凝灰岩
2 包147	123	磨石・凹石	D－5G		L－Ⅱ	8.4	(3.6)	2.5	280	凝灰岩
2 包148	123	磨石・凹石	D－5G		L－Ⅱ	9.4	7.4	5.6	520	凝灰岩
2 包149	123	磨石・凹石	D－5G		L－Ⅱ	(9.7)	7.6	2.2	240	凝灰岩
2 包150	123	磨石・凹石	D－6G－63	1		12.4	7.8	4.2	490	凝灰岩
2 包151	123	磨石・凹石	D－5G		L－Ⅱ	(9.4)	7.2	2.6	390	凝灰岩
2 包152	123	磨石・凹石	D－5G－36	1		12.2	9.4	4.6	720	凝灰岩
2 包153	123	磨石・凹石	D－6G		L－Ⅰ	(11.8)	(5.4)	5.8	460	凝灰岩
2 包154	124	柱状石製品	D－5G－88	1		1.4	9.2	8.4	1870	長石(?)
2 包155	124	柱状石製品	D－5G－80	2		6.2	8.4	6.4	510	長石(?)
2 包156	124	石皿	D－5G－78	1		13.2	15.0	4.0	1500	安山岩
2 包157	124	石皿	D－6G		L－Ⅰ	27.2	39.2	14.8	2730	安山岩
3 包47	128	石鏃	D－2G－72		L－Ⅱ	(1.4)	0.4	0.4	0.5	頁岩
3 包48	128	石鏃	D－2G－84			(2.1)	0.5	0.5	1.7	石英
3 包49	128	石鏃	D－2G－73		L－Ⅱ	(1.2)	(0.4)	0.4	0.6	黒曜石
3 包50	128	石鏃	D－2G－64		L－Ⅱ	2.5	(0.7)	0.7	2.5	流紋岩
3 包51	128	石鏃	D－2G－73		L－Ⅰ	1.7	0.32	0.4	0.7	石英
3 包52	128	石鏃	D－2G－82		L－Ⅰ	1.65	0.45	0.4	0.5	石英
3 包53	128	石鏃	D－2G－73			1.8	0.5	0.5	1.0	石英
3 包54	128	石核	D－2G			7.9	3.1	3.1	24.3	頁岩
3 包55	128	磨石・凹石	D－2G－83		L－Ⅰ	(5.6)	(4.9)	(4.4)	380	安山岩
3 包56	128	磨石・凹石	D－2G－85		L－Ⅰ	19.6	5.8	2.9	1380	安山岩
3 包57	128	磨石・凹石	D－2G－75		L－Ⅰ	10.6	9.8	5.6	780	安山岩
4 包62	134	不定形石器							2.7	頁岩
4 包63	134	不定形石器	ベルト内						3.0	石英
4 包64	134	不定形石器	ベルト内						5.8	石英
4 包65	134	磨石・凹石	A－1G			15.6	7.8	6.4	1180	安山岩
B0P_{15} 1	135	石鏃	B－0G　P_{15}			(2.2)	1.8	0.5	2.1	石英
B0P_{17} 1	135	石鏃	B－0G　P_{17}			(2.3)	1.5	0.6	1.6	石英
D3P_6 1	135	石鏃	D－3G　P_6		埋土	2.3	1.6	0.4	1.5	石英
D1P_9 1	135	石鏃	D－1G　P_9			3.8	1.7	0.5	2.1	頁岩(?)
D1P_7 1	135	石鏃	D－1G　P_7			(1.8)	1.6	0.4	1.1	頁岩(?)
E2P_4 1	135	石鏃	E－2G　P_4			2.7	1.3	0.5	7.7	石英
E1P_2 1	135	石鏃	E－1G　P_2			2.3	1.1	0.4	0.7	流紋岩
D1P_{30} 1	135	剥片	D－1G　P_{30}			3.2	3.9	0.8	7.7	頁岩
E2P_5 1	135	円形掻器	E－2G　P_5			3.6	3.3	0.8	15.9	頁岩

第 23 表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表 (7)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
A1 P_{13} 1	135	磨石・凹石	A－1G　P_{13}			9.8	10.2	6.4	860	凝灰岩
1 竪 13	137	石　鏃			検出面	2.7	2.9	0.9	6.2	石　英
2 竪 6	139	石　鏃		26		2.0	(1.4)	0.4	0.9	石　英
2 竪 7	139	磨石・凹石		25		9.6	8.4	5.2	590	凝灰岩
遺構外14	141	石　鏃	A－1G		L－Ⅰ	(1.7)	1.5	0.4	1.1	黒曜石
遺構外15	141	石　鏃	A－2G－50			2.7	2.0	0.5	2.8	石　英
遺構外16	141	不定形石器	A－2G－90		L－Ⅰ	2.7	3.4	0.8	7.7	頁　岩(?)
遺構外17	141	不定形石器	A－2G		L－Ⅱ	3.5	1.9	0.8	5.5	石　英
遺構外18	141	石　鏃	B－3G－9		L－Ⅰ	2.8	1.6	0.4	1.1	頁　岩
遺構外19	141	石　鏃	B－3G			2.2	2.1	0.8	2.6	石　英
遺構外20	141	石　鏃	C－1G			(1.5)	1.3	0.4	0.6	頁　岩(?)
遺構外21	141	石　鏃	C－1G			1.7	1.5	0.4	0.8	石　英
遺構外22	141	石　鏃	D－1G		検出面	1.5	1.2	0.4	0.7	瑪　瑙
遺構外23	141	石　鏃	D－3G－91		L－Ⅱ	(1.7)	1.5	0.5	1.3	石　英
遺構外24	141	不定形石器	D－3G－91		L－Ⅱ	(2.0)	2.5	0.7	3.9	石　英
遺構外25	141	石　鏃	D－3G	30		(1.9)	1.8	0.6	1.8	石　英
遺構外26	141	石　鏃	D－3G－82		L－Ⅱ	(1.9)	1.9	0.5	1.9	石　英
遺構外27	141	石　鏃	D－3G－81		L－Ⅰ	(1.9)	0.8	0.4	1.0	頁　岩
遺構外28	141	石　鏃	D－3G－86			1.9	2.0	0.9	3.6	石　英
遺構外29	141	石　鏃	D－3G－91		L－Ⅱ	3.2	2.6	1.0	8.3	石　英
遺構外30	141	不定形石器	D－3G－91		L－Ⅱ	3.3	2.0	0.7	4.0	頁　岩
遺構外31	141	石　鏃	D－4G		L－Ⅰ	(2.1)	2.4	0.8	3.8	石　英
遺構外32	141	石　鏃	D－4G		L－Ⅰ	2.0	(1.2)	0.5	1.2	石　英
遺構外33	141	石　鏃	D－4G		L－Ⅱ	(1.7)	1.8	0.5	1.5	石　英
遺構外34	141	石　鏃	D－4G		L－Ⅱ	2.7	(1.8)	0.7	3.5	石　英
遺構外35	141	不定形石器	D－4G		L－Ⅰ	2.6	2.2	0.6	4.0	石　英
遺構外36	141	石　鏃	D－4G		L－Ⅰ	(1.9)	(1.8)	0.5	1.0	石　英
遺構外37	141	石　鏃	D－6G		L－Ⅰ	2.0	(1.2)	0.4	1.0	石　英
遺構外38	141	石　鏃	D－6G		L－Ⅰ	2.3	1.4	0.5	1.3	石　英
遺構外39	142	不定形石器	D－6G		L－Ⅰ	2.3	2.0	0.9	2.2	石　英
遺構外40	142	石　鏃	D－6G		L－Ⅰ	2.8	1.6	0.6	4.8	石　英
遺構外41	142	石　鏃	E－2G－6		L－Ⅱ	2.3	1.3	0.5	1.4	流紋岩
遺構外42	142	不定形石器	D－6G		L－Ⅰ	3.7	2.1	0.9	6.3	石　英
遺構外43	142	石　鏃	E－2G－6		L－Ⅱ	2.1	(1.6)	0.5	1.2	石　英
遺構外44	142	石　鏃	北側溝			2.2	(1.5)	0.6	1.6	石　英
遺構外45	142	石　鏃	北側溝			(1.8)	2.0	0.6	2.3	石　英
遺構外46	142	石　鏃	風倒木痕		検出面	1.4	1.2	0.4	0.6	石　英
遺構外47	142	石　鏃	風倒木痕		埋　土	2.2	1.7	0.5	1.3	石　英
遺構外48	142	石　鏃	表　採			1.7	1.2	0.3	0.4	石　英
遺構外49	142	石　鏃	表　採			1.0	1.2	0.3	0.4	流紋岩
遺構外50	142	石　鏃	表　採			1.7	(1.1)	0.3	0.5	頁　岩
遺構外51	142	石　鏃	表　採			1.6	1.3	0.5	1.0	石　英
遺構外52	142	石　鏃	A－2G		L－Ⅰ	2.2	1.4	0.4	1.1	頁　岩(?)
遺構外53	142	石　鏃	表　採			2.3	1.8	0.5	1.9	石　英
遺構外54	142	石　鏃	表　採			1.7	1.4	0.5	1.2	頁　岩(?)
遺構外55	142	石　鏃	表　採			2.8	1.6	0.6	2.1	石　英
遺構外56	142	石　鏃	表　採			(2.0)	1.6	0.4	0.9	頁　岩
遺構外57	142	石　鏃	表　採			(1.5)	1.6	0.6	1.3	石　英
遺構外58	142	不定形石器	表　採			3.3	2.1	1.1	6.9	頁　岩(?)
遺構外59	142	不定形石器	表　採			3.3	4.1	1.0	15.1	頁　岩(?)

第23表　七郎内Ｃ遺跡出土石器一覧表(8)

遺物No.	図No.	器　種	出土地点	採取No.	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
遺構外60	142	不定形石器	表　採			3.6	3.2	1.3	11.0	石　英
遺構外61	142	不定形石器	表　採			(3.5)	3.2	1.5	11.4	凝灰岩
遺構外62	142	不定形石器	表　採			5.3	3.8	1.7	31.5	頁　岩
遺構外63	143	石　核	Ｂ－２Ｇ			5.7	5.2	4.8	136.6	頁　岩
遺構外64	143	槍先状石器	Ａ－１Ｇ		Ｌ－Ⅰ	8.0	4.4	1.3	66.9	頁　岩
遺構外65	143	石　核	Ｃ－２Ｇ－49		Ｌ－Ⅲ	5.0	5.9	3.7	105.3	頁　岩(?)
遺構外66	143	磨石・凹石	表　採			10.6	8.2	4.0	470	安山岩
遺構外67	143	磨石・凹石	表　採			8.8	6.2	2.8	270	凝灰岩
遺構外68	144	磨石・凹石	Ａ－１Ｇ		Ｌ－Ⅰ	9.8	8.6	5.0	490	安山岩
遺構外69	144	磨石・凹石	Ａ－１Ｇ		Ｌ－Ⅰ	11.6	8.4	4.8	690	安山岩
遺構外70	144	磨石・凹石	Ａ－２Ｇ－31		Ｌ－Ⅰ	(6.8)	10.6	4.6	400	凝灰岩
遺構外71	144	磨石・凹石	Ａ－３Ｇ－13		Ｌ－Ⅰ	10.6	6.8	5.2	450	凝灰岩
遺構外72	144	磨石・凹石	Ｃ－２Ｇ－79			(11.2)	10.4	(4.4)	500	凝灰岩
遺構外73	144	磨石・凹石	Ａ－３Ｇ－15		Ｌ－Ⅰ	(18.2)	5.8	3.4	550	凝灰岩
遺構外74	144	磨石・凹石	Ｄ－３Ｇ		Ｌ－Ⅰ	(11.4)	7.0	3.6	400	安山岩
遺構外75	144	磨石・凹石	Ｄ－４Ｇ		Ｌ－Ⅰ	(12.2)	8.6	5.4	860	安山岩
遺構外76	144	磨石・凹石	Ｄ－６Ｇ			(11.0)	5.0	3.6	300	凝灰岩
遺構外77	145	石　皿	Ｄ－６Ｇ		Ｌ－Ⅰ	(16.0)	(13.6)	9.8	2730	安山岩
遺構外78	145	不明石器	表　採			17.0	4.4	1.6	280	安山岩
遺構外79	145	磨石・凹石	表　採			19.8	9.0	6.4	1880	安山岩
遺構外80	145	磨石・凹石	表　採			14.8	7.8	4.6	710	凝灰岩
遺構外81	145	磨石・凹石	表　採			11.6	9.2	3.0	560	安山岩
遺構外82	145	磨石・凹石	表　採			9.2	7.6	3.8	410	安山岩
遺構外83	145	磨石・凹石	風倒木痕			(7.9)	7.8	3.4	240	凝灰岩
遺構外84	145	磨石・凹石	表　採			18.2	8.0	4.6	900	安山岩
遺構外85	145	石　皿	表　採			30.8	22.0	7.6	—	花崗岩
遺構外86	146	石　皿	Ｂ－４Ｇ		Ｌ－Ⅰ	18.0	14.0	4.2	1710	安山岩
遺構外87	146	石　皿	Ａ－３Ｇ－７			(20.2)	14.2	4.6	2500	安山岩
遺構外88	146	石　皿	Ａ－１Ｇ		Ｌ－Ⅰ	(14.0)	(14.0)	5.0	1420	安山岩
遺構外89	146	石　皿	Ａ－１Ｇ		Ｌ－Ⅰ	(22.8)	24.8	9.6	—	安山岩
遺構外90	146	磨製石斧	北側谷			(9.8)	8.4	5.0	159.5	緑色片岩
試8Ｔ住13	148	石　鏃	8Ｔ		覆　土	2.4	1.0	0.3	0.9	頁　岩

第３章　弥生時代の遺構と遺物

明確に人為的な遺構は検出されていない。従って遺物も遺構外から全て出土している。調査区南の表土またはＤ－２グリットに検出された風倒木痕に堆積している黒色土中から検出されたのみであるが，総数20片中，風倒木痕から15片が出土している。他の地点からの出土は認められず，調査区内で弥生式土器が分布する範囲は極めて限られた地点であったと思われる。

遺物の出土量が多い風倒木痕は，東西４ｍ，南北3.5ｍの範囲で広がり，南側では７号住居跡の北壁を破壊している。中央部に灰色粘土（Ｌ－Ｖ）が楕円形に広がり，その周辺部に黒色土が流入している。縄文土器・石器・弥生式土器がこの黒色土内から検出されているが，最も時期の下る遺物に弥生時代中期の土器片がみうけられ，風倒木痕もこの時期を遡り得ることは無いと考えられる。

遺　　物（第150図，図版83）

いずれも小破片で器形や全体的な文様が窺えるものもほとんどない。このため本項では，施文された文様要素を中心として述べる事としたい。

出土した土器片の文様要素は，大きく以下のように３分類できる。

Ⅰ群：磨り消し縄文が施されたものである。

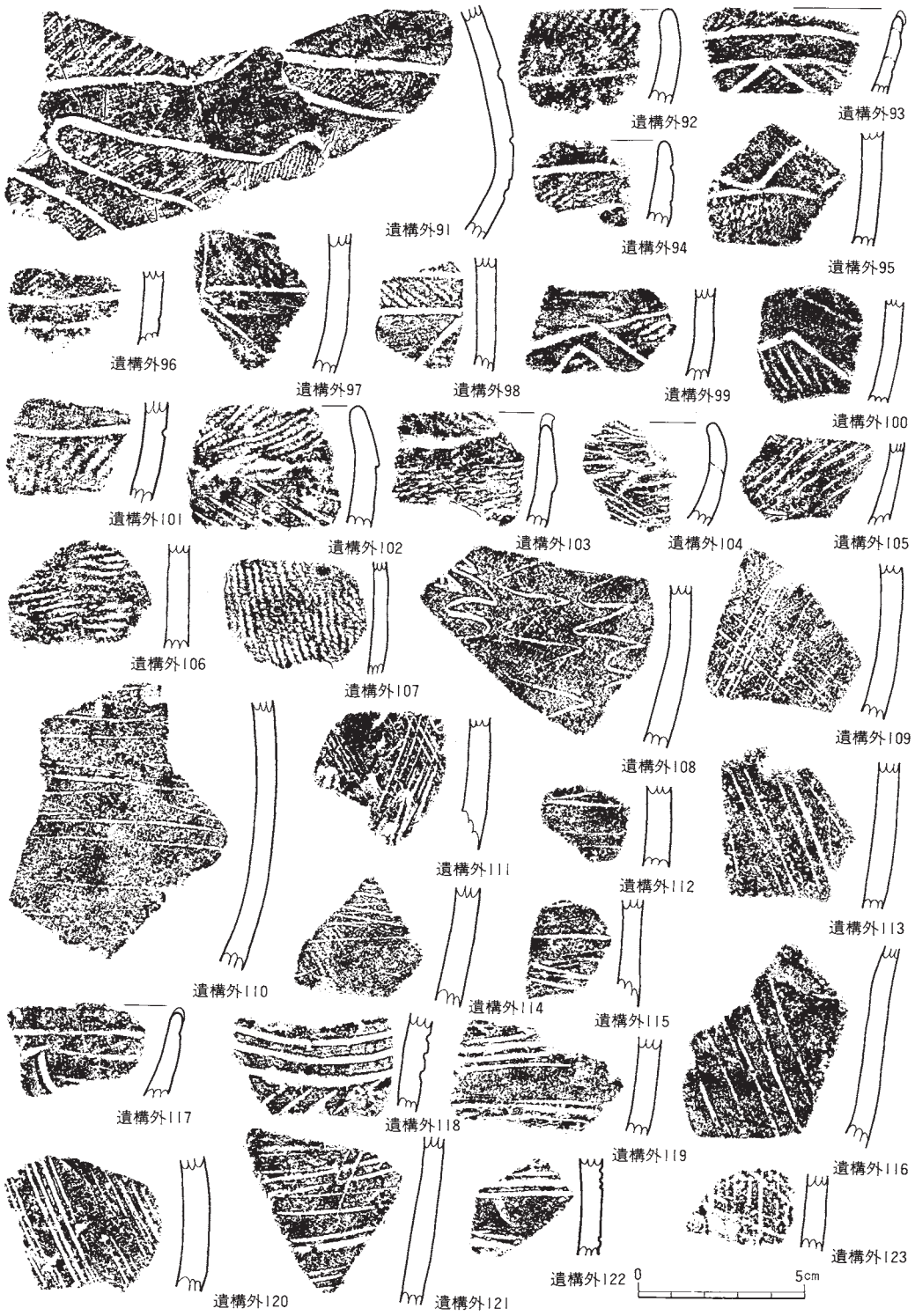
Ⅱ群：沈線文が施されたもので，沈線にはやや幅が広い太目の沈線と，細い沈線が施されるものとの二者がある。

Ⅲ群：縄文が施されたものである。

Ⅰ群　遺構外91～101が比定される。縄文帯を画する沈線は幅２㎜程のものがほとんどで，遺構外92～101では沈線は直線的に施されている。遺構外91は，壺形土器の胴部と考えられる大型破片である。縄文帯を画する沈線は曲線的で，縄文帯も不規則に配置されている。遺構外100は縄文の代わりに浅い沈線が施されたものである。

Ⅱ群　遺構外108～123が比定される。沈線は幅２㎜程の比較的太いもの（遺構外117・118）と１㎜程の細いもの（遺構外108～116，119～123）がある。さらに沈線には平行沈線（遺構外110・113・115～118・121），単独の沈線（遺構外108），条線状を呈するもの（遺構外109・111・114・119・120・122・123）がある。沈線は横位・斜位に施されるものが多いが，他に縦に小波状に施されるもの（遺構外118）と格子目状に施されるもの（遺構外109・111・121・123）がある。

Ⅲ群　遺構外102～107が比定される。遺構外102～103は口縁部資料では複合口縁を呈する。遺構外102は口縁部に縄文，胴部に平行沈線が施されている。（松本）



第150図　七郎内Ｃ遺跡出土弥生式土器

第４章　歴史時代の遺構と遺物

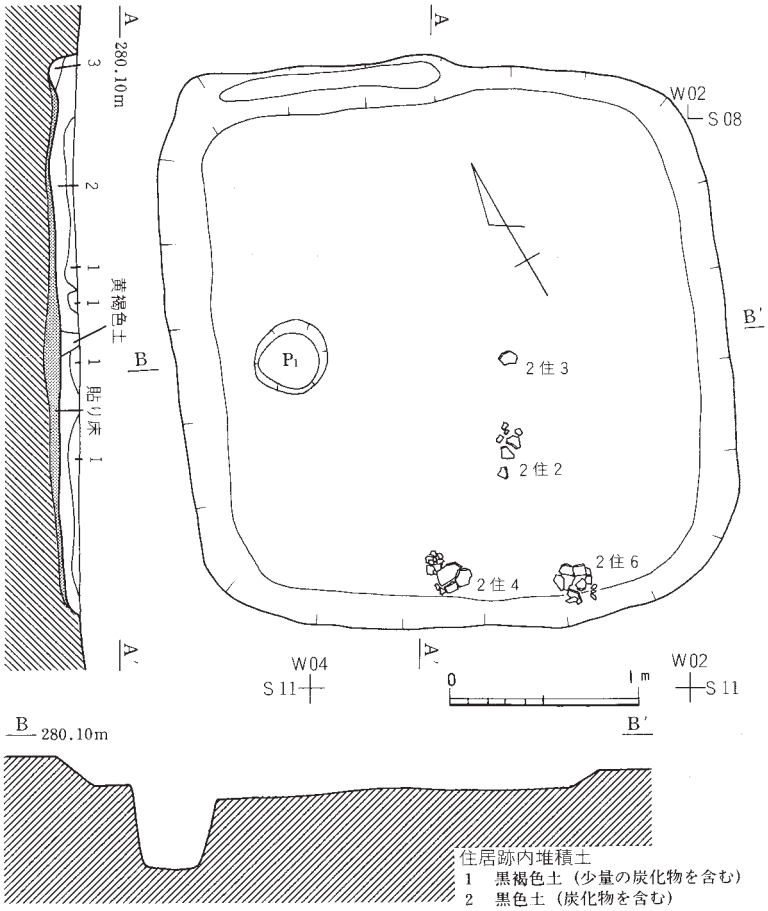
該期に属する遺構は，竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡２棟，土坑１基である。伴出した遺物からほぼ奈良～平安時代に位置づけられる。調査区内での遺構の分布は西端に偏在している。

第１節　竪穴住居跡

２号住居跡

遺　　構（第151図，図版31・32）

Ｃ・Ｄ－１グリッドに検出された住居跡で，南東コーナーで重複している14号土坑を切っている。プランは，東西2.9m，南北３ｍを測る方形を呈しているが，各コーナーは隅丸形である。検出面は地山黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）で，検出面から床面までの深さは14cmを測る。住居跡内堆積土は，第１層目の黒褐色土と第２層目黒色土の２層に大別される自然堆積層である。壁周辺には崩落土と思われる黄色土地山ブロックの堆積が部分的に認められる。床面は黄色土と黒色土の混合土を５～６cm入れ整地し貼り床としている。踏み締りが強い。床面から壁面への移行は緩やかで，壁の立ち上が



第151図　２号住居跡

りは50度前後の傾斜角である。

カマド等の付属施設は検出されなかったが，西壁寄りのほぼ中央部でピット（P_1）が１個検出された。ピットは直径40cmの円形で，深さは54cmを測る。堆積土は，ピット北隅に軟質で木炭粒を混入した黒褐色土が検出面から底面まで縦長に入り込んでいる。他の部分は黄色土と黒色土がブロック状に混入した土が堆積している。（阿部）

遺　　物（第152図，図版84）

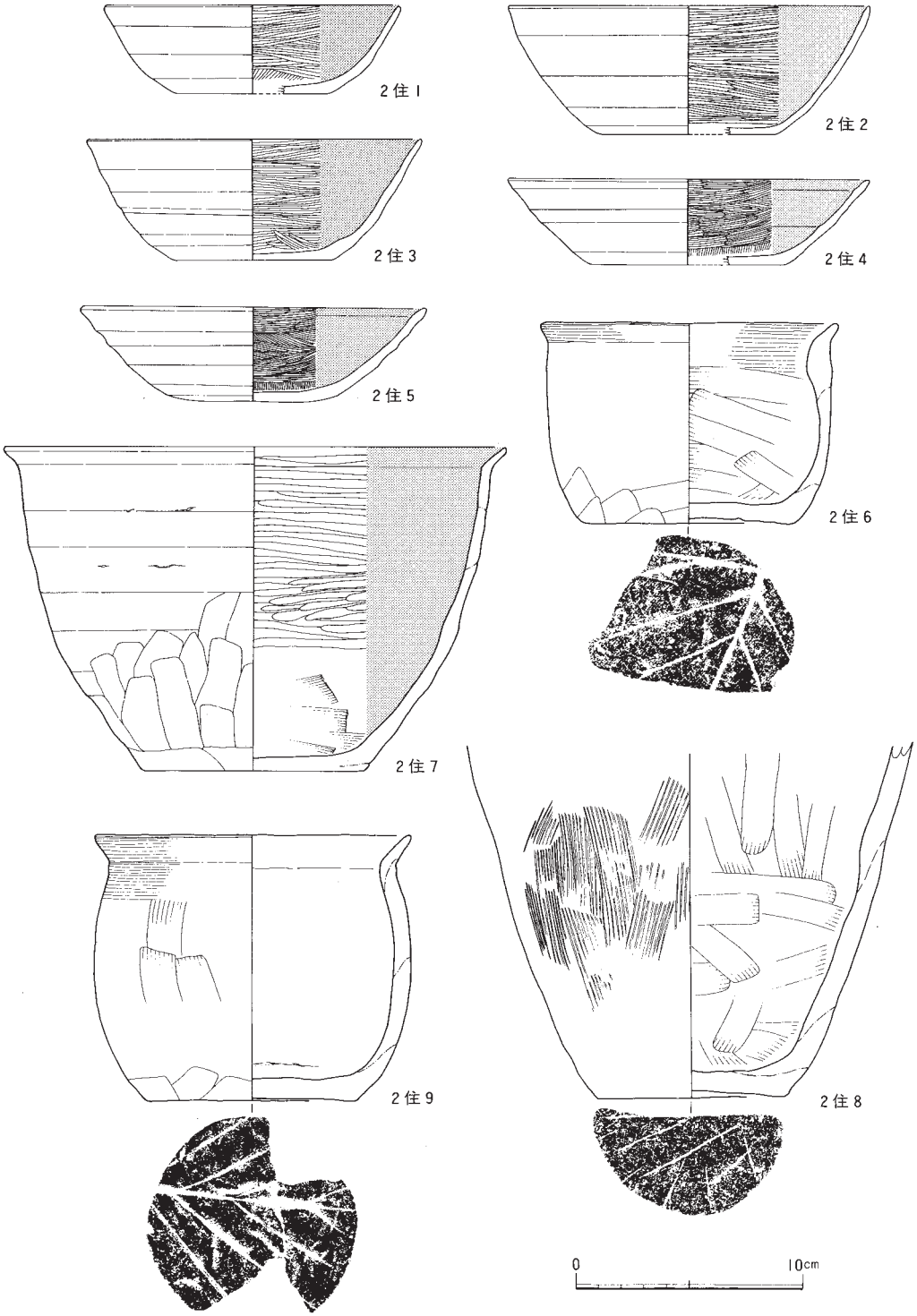
本跡に伴う遺物は土師器のみで，器種には杯・甕の二種がある。住居跡南半の床面上に散乱した状態で検出されたが，各土器の破片は極めて接近しており床面上の遺物がそのまま押し潰されたものと思われる。この他に住居跡には直接伴わないと思われる磨石類２点が出土している。

土師器杯　完形品になるものはないが総数10個体検出されている。出土層位毎の内訳は，堆積土内２点（２住１），床面上７点（２住２～４），P_1内１点（２住５）で，そのうち図化したのは５点である。すべてロクロ成形の平底杯であるが，２住３のように多少丸味をもつものも含まれる。体部の立ち上がりは，直線的に外傾して開くもの（２住１・３・５）と，外傾して立ち上がるがその際若干内彎するもの（２住２・４）がある。ロクロからの切り離し技法はその後の調整技法によってすべて不明である。外面の調整は底部全面から体部半ば付近まで回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキ黒色処理されている。内面のミガキ方向は図化した遺物ではすべて一定方向をとる。口径の大きさは12cm強のもの（２住１），15～16cm程度のもの（２住２～５）が，器高では4.5cm以下のもの（２住１・３・５）と，5.5cm以上のもの（２住２・４）の各々２種がある。

土師器甕　床面上から総数５点検出されたが，形態や法量の異なるものが混在している。図化した４点のなかで大きくは胎土が緻密で内面黒色処理されるタイプと，胎土に砂粒を含む率が多く内面が黒色処理されないタイプに分離でき，さらに後者では器高が約13cm程度止まりの小型甕と，器高の高い所謂長胴甕とに細分される。前者は２住６のみである。ロクロ成形で平底の底部から胴部は僅かに丸味を持ちながら外傾して立ち上がり，頸部から短かく外側に屈曲し口縁部となる。口唇部外面には弱いながら稜線をもつ。外面の調整は胴部下半から底部全面にかけ手持ちヘラケズリ，内面はヘラミガキ，黒色処理されている。後者はすべて非ロクロ成形である。小型甕は器肌の荒れが著しく，調整痕は不明な点が多いが，両者とも口縁部はヨコナデ，胴部はナデもしくはヘラナデ調整と思われる。長胴甕の胴部の調整は，外面でハケメ，内面でヘラナデとなっている。これらの甕のうち２住９を除く３点は底部外面に木葉痕を残している。検出した５点の甕も杯同様完形品になるものはない。

ま　と　め

本跡はカマド等の付属施設を持たないが，底面の踏み締りと遺物の出土状況から住居跡と考えた。時期は遺物の特徴やその組み合せからロクロ土師器使用段階の前半代と思われる。（大越）



第152図　２号住居跡出土土師器

第２節　掘立柱建物跡

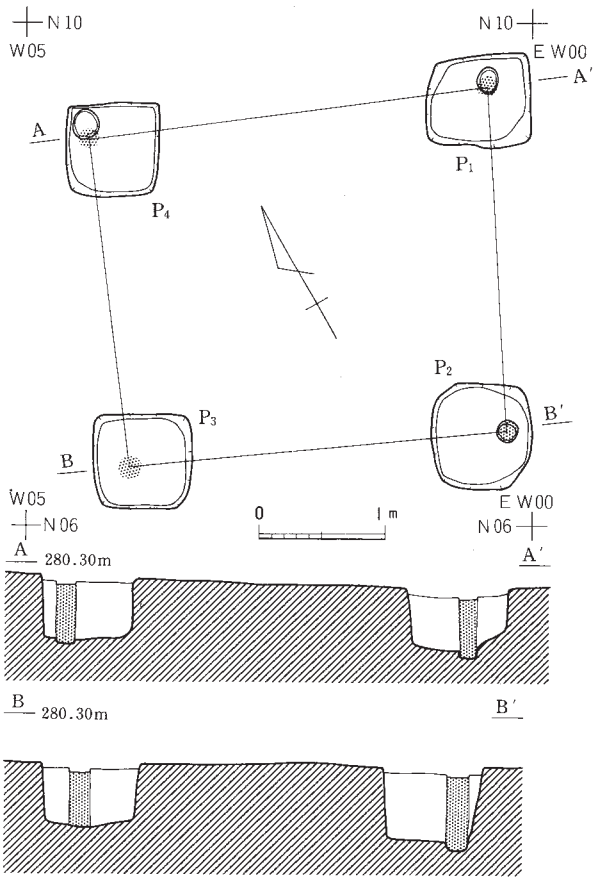
１号建物跡

遺　　構（第153図，図版33）

調査区の北西側Ｂ－１グリッドで検出された東西１間，南北１間の建物跡である。検出面は地山黄褐色土で，遺存状態は比較的良好である。各掘形は一辺72～82cm前後のほぼ方形を呈している。検出面からの掘り込みは最大で64cm，最小で50cmを測り，埋土は地山の小ブロックを若干混入した茶褐色土を基本としている。全ての掘形に直径14～16cmの円形柱痕が遺存し，このうちP_3を除いていずれも掘形底面に径14～16cm，深さ２～６cmのピットが確認されている。上屋の重み等から自然に沈んだ結果とも考えられるが，これは柱を据える為の掘形の可能性が強い。柱痕の中心をとった柱間の距離は，東辺3.16m，西辺2.98m，南辺2.66m，北辺2.74mを測り，東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ－28°－Ｗである。

遺　　物

遺物は縄文土器片が各掘形の埋土より出土している。内訳はP_1内４点，P_2内５点P_3内３点，P_4内９点でいずれも磨滅した小片で施文上の特色等は見出し難い。土師器は出土せず，この建物跡の年代を決定する資料は得られなかったが，ロクロ土師器を伴出している２号住居跡や２号建物跡の時期とほぼ同時期の所産と思われる。（小平）

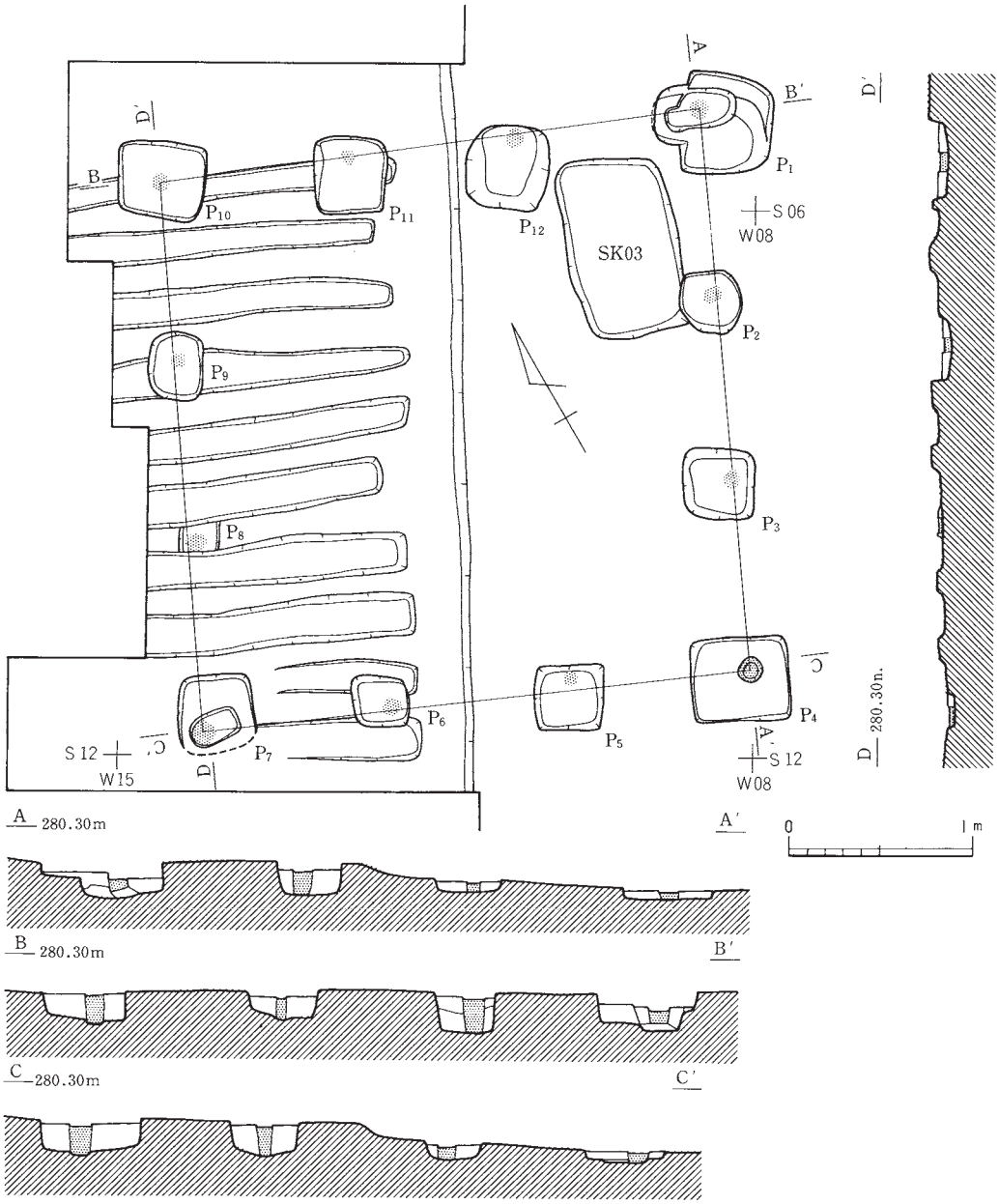


第153図　１号建物跡

２号建物跡

遺　　構（第154図，図版34）

調査区の西端Ｃ～Ｄ－０～１にかけ検出された東西３間，南北３間の建物跡である。確認面は地山黄色土（Ｌ－Ⅳ）面で重複関係にある３号土坑より新しい。遺構の西半は現代の耕作による畝跡によって相当破壊されている。西側柱列の柱痕を通る軸線の偏



第154図　２号建物跡

度はＮ－24°－Ｅである。各柱間間隔は，東側柱列北から2.02m＋2.10m＋2.04m，西側柱列北から2.02m＋1.98m＋2.10m，南側柱列西から2.08m＋1.98m＋2.02m，北側柱列西から2.14m＋1.84m＋2.04mを測る。

掘形は方形を基本としているが，３号土坑と重複しているP_2では丸味を持っている。各隅柱は80～110cmと他の一辺60cm程度の掘形に比較し大きい。ただP_8では東西辺が44cmばか

りで小規模な掘形であるが，上部の削平が著しく掘形底面に設けられたピットのみが残存した可能性もある。掘形底面は平坦なものが多いがP_4・P_9では柱の据える部分にはピットを設けている。掘形全体の埋土は地山黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）と黒色土（Ｌ－Ⅱ）とのブロックが混入した土層でいくつかの柱穴ではその混入度合によって，２層ないし３層に細分される。

柱痕はすべての掘形から検出されている。直径12～20cmで平面形は円形に近いものが多い。埋土は木炭粒の若干混入した軟質な黒褐色土である。

遺　　物

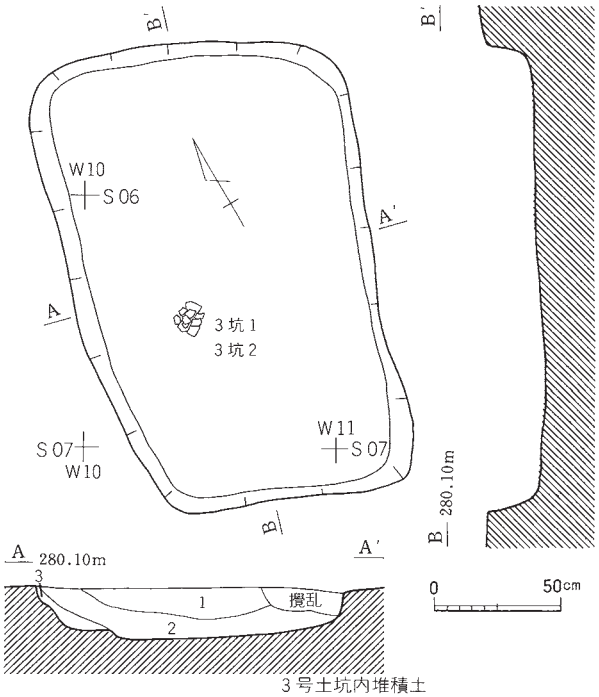
各掘形から土器の小破片が86片検出されている。大半は縄文土器の破片で，土師器破片は僅か４片を数えるのみである。器種が判明するものは杯破片２点である。いずれも体部下端から底部にかかる破片で，成形はロクロにより内面は黒色処理されている。外面調整は１点のみ手持ヘラケズリであることが観察できる。重複関係では３号土坑より新しいことが確認されているが，出土遺物からも技法的に３号土坑出土の土師器より後出することがいえる。（大越）

第３節　土　　坑

３号土坑

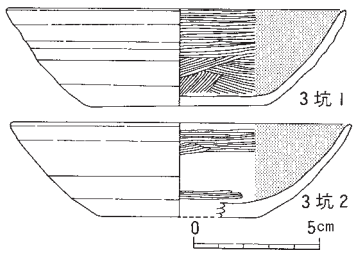
遺　　構（第155図，図版35）

調査区西端のＣ－１グリッドに検出された土坑で，重複関係にある２号建物跡よりも古い遺構である。検出面は地山黄褐色土（Ｌ－Ⅳ）面で，プランは東西1.25m，南北1.90mのほぼ隅丸長方形に近い形をとるが若干南辺に比較し北辺の幅が広い。検出面から底面までの深さは20cmを測る。底面は中央部に向けて全体的に僅かに窪んでいる。壁は70～80度の傾斜面で立ち上がるが，底面からの移行は滑らかである。堆積土は流れ込みによる自然堆積層で上層の黒色土と下層の茶褐色土が主体になっているが，その層理面には部分的



３号土坑内堆積土
1　黒色砂質シルト（木炭・焼土若干含む）
2　茶褐色砂質シルト（粘土団粒含む）
3　黒色土（多量の黄色土ブロック混入）

第155図　３号土坑



第156図　３号土坑出土土師器

に焼土の薄い堆積が認められた。

遺　　物（第156図，図版84）

本跡から検出された遺物は，縄文土器破片45点，土師器破片16点がある。土師器の器種による内訳は，杯８点，皿１点，甕６点であるが，図化した遺物はやや大きめの破片である杯２点である。

土師器杯　出土した杯はすべてロクロ成形である。土坑中央やや南西よりの底面上から検出した３坑１・２を除き他の破片は２～３cmの小破片である。３坑１は推定口径13.5cm，底径7.0cm，器高3.8cmを測る。底部は平底で体部は直線的に開く。外面調整は体部下半から底部全面を回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキ，黒色処理されている。ヘラケズリの回転方向は右回転，底部内面のミガキ方向は一定方向である。ミガキの幅は１mm前後と狭い。

３坑２は，口径13.5cm，底径6.3cmと推定され，器高3.7cmを測る。器面の調整技法は３坑１と同様と思われるが多少器面に荒れがあり，特に底部内面のミガキ方向は不明瞭である。

他の６片の小破片の内訳は口縁部破片５点，体部破片１点である。内面調整はすべてヘラミガキ，黒色処理されている。外面では調整痕の判明する２片は回転ヘラケズリが施されており，うち１点は口縁部付近にまで調整が及んでいる。

土師器皿　口縁部の小破片で蓋となる可能性があるが，ここでは皿として報告しておく。口唇部が短かく立ち上がり，内面の調整はヘラミガキ，黒色処理されている。

土師器甕　底部から胴部下端の破片１点，胴部５点，頸部付近１点である。明確にロクロ成形とわかるものは３片である。底部から胴部下端にかかる破片の調整は，胴部外面で縦方向の手持ちヘラケズリ，内面ではヘラナデである。

以上３器種の破片がみられるが，その成作技法から２号住居跡と同じ時期として捉えることができる。特に杯の類似性が強い。（大越）

第 24 表　七郎内Ｃ遺跡出土土師器一覧表

遺物番号	器種	出土層位	口径	底径	器高	成形	胎土	外面調整	内面調整	備考
2住1	杯	ℓ－1	13.1	6.7	3.9	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	杯	床面	14.8	6.9	5.4	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
3	杯	床面	15.3	7.5	4.2	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
4	杯	床面	15.9	7.7	5.7	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
5	杯	ℓ－3	16.0	8.6	3.8	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
6	甕	床面	22.2	9.8	14.3	ロクロ	密	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・ナデ・黒色処理	
7	甕	床面	13.2	9.2	8.9	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	底部木葉痕
8	甕	床面	14.0	9.3	11.8	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	－	底部木葉痕
9	甕	床面	－	8.2	15.5	非ロクロ	粗	ハケメ	ナデ	底部木葉痕
3坑1	杯	床面	13.4	6.9	3.8	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	杯	床面	13.5	6.2	3.7	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	

第５章　考　　察

本章ではこれまで述べてきた事実報告を各時代の遺構・遺物にとりまとめ，問題点となるような部分の幾つかについて若干考察を加えることとしたい。

第１節　縄文時代の遺物と遺構

遺物について

１．縄文土器

七郎内Ｃ遺跡出土の土器は，第２章冒頭で13群20類に分類した。各類の特徴からこれらを従来の編年に対比させると以下のようになる。

Ⅰ群土器　大木７ｂ式，Ⅱ群土器　大木７ｂ～８ａ式期，Ⅲ群土器　大木８ａ式

Ⅳ群土器　大木８ａ式期，Ⅴ群土器　大木８ｂ式，Ⅵ群土器　大木８ａ式期

Ⅶ群土器　大木８ａ～８ｂ式期，Ⅷ群土器　阿玉台式，Ⅸ群土器　加曽利Ｅ式

Ｘ群１類土器　大木７ｂ式，Ｘ群２類土器　大木７ｂ～８ａ式期，Ｘ群３類土器　大木８ｂ式

Ⅺ群土器　大木８ａ・阿玉台式，Ⅻ群土器　大木８ａ式期，ⅩⅢ群土器　縄文早期末～前期

Ⅰ群土器　側面圧痕文が口縁部直下に横位に施されたもので，大木７ｂ式に比定した。側面圧痕文自体は大木７ｂ式土器に特有なものでなく，福島市八景腰巻遺跡の例のように大木８ｂ式まで明らかに存在している。しかし，Ⅰ群土器のような施文方法を取るものは，東北南部における大木７ｂ式の内容が必ずしも明らかとなっていない現状では，やはり大木７ｂ式として捉えておく必要があろう。１包１に認められる胴部のＹ字状隆帯，地文に用いられた綾絡文の存在なども本期土器の特色として指摘し得る。側面圧痕文以外の土器で大木７ｂ式土器に比定し得るものは，数点出土した交互刺突文を有する土器等で数量的に極めて少ない。これを大木７ｂ式がまとまって出土した八景腰巻遺跡３次例と比較すると，器種・施文される文様において，七郎内Ｃ遺跡では欠落するものが多い事が指摘される。これらが時間差に起因するのか，地域差によるのかは七郎内Ｃ遺跡を含めた福島県南部における本期の様相が明確となっていない現状で判断を下す事はできない。

Ⅱ群土器　別項を設けて後述する事とする。

Ⅲ群土器　隆帯の加飾の著しい土器で，大木８ａ式に比定した。本期土器も県南部においては，層位的・平面的なまとまりを示す資料は極めて少なく，形式内容となると不明な点が多い。

しかし，口縁部に付されたＳ字状の突起や，太い隆帯による加飾はやはり大木８ａ式の特徴的なものと考えざるを得ない。

１類土器は15号土坑一括出土土器が好例である。他時期の土器を含まず，極限られた時間に一括廃棄されたものであろう。隆帯による文様表出が口縁直下に集中し，Ｓ字状の突起が付されている。次段階（８ｂ式期）に直接繋がる文様要素は認められないが，Ⅱ群土器に盛行する有節沈線文を施した土器がある事から，大木８ａ式でも古式の段階に位置付けられよう。しかし，大木８ａ式の古い段階に顕著な縦に側面圧痕が施された土器がほとんど認められない事は注意される。

２・３類土器はＳ字状等の突起や太い隆帯による把手が付されている所から，大木８ａ式の範疇に含まれるものであるが，１類土器に比較すると後出的なものと考えられる。これらに類似するものは，宮城県長者原貝塚１号住居跡出土土器があげられる。長者原貝塚の例では一部に大木８ｂ式に近似するような土器も出土しており，『大木８ｂ式に接続する比較的新しい段階』（丹羽：1981）と位置付けられている。３類土器に付された眼鏡状の把手の土器は，郡山市野中遺跡１号土坑出土土器に類例が求められる。やはり大木８ｂ式的な口縁部に沈線文を施しただけの深鉢と共伴しており，大木８ａ式の新しい段階に位置付けられるものであろう。一方これらの把手は，加曽利ＥⅠ式古式段階にも顕著に認められ，１包257～263のようにクランク状のモチーフを併せ持つ土器は，関東的様相が強い事が指摘できる。

Ⅳ群土器　沈線文が多用されるもので，会津・北陸地方との関連を考えたい一群である。しかし，胴部破片ではⅢ群土器中にも沈線文の多用されるものも認められ，Ⅲ群・Ⅳ群土器間には若干混同する所がある。１包272は口縁部にＳ字状を基本とした人面状の把手が付され，８Ｔ住２はⅢ群１類土器と伴出している事から，時期的にはⅢ群土器とほぼ同時期が考えられる。１包274はいわき市台の上貝塚第４類に近似し，大木８ａ式でも新しい段階の土器とされている。本例も他のⅣ群土器よりは後出するものであろう。

Ⅴ群土器　台の上貝塚５類，八景腰巻遺跡２群２類，いわき市大畑貝塚大木８ｂ式と器種組成・文様ともに共通する部分が多い事が指摘できる。一方これらと比較し特徴的なものとしては，地文に撚糸文が施されたものが上げられる。宮城県大松沢貝塚を含め他遺跡においてもほとんど出土していない事例から，これは大木８ｂ式における時間差に起因する可能性が強い。七郎内Ｃ遺跡でも７号住居跡・１号炉跡から出土しているにもかかわらず，第４遺物包含層ではほとんど認められていない。また，施文される文様も１炉５のように，無文帯に類似する表現がなされているものもあり，次段階の大木９式により近似するものと考えられる。３包20は格子目状に隆帯が胴部全体に貼り付けられたもので，交点には円形刺突が加えられている。隆帯の側縁を沈線で調整している所から，Ⅴ群土器に含めた。本例に類似するものは栃木県上原遺跡に認められ，口縁部文様のあり方から加曽利ＥⅡ式に比定されている。

Ⅵ群土器　縄文だけが施文された土器で，明確な編年的位置付けが困難なものが多い。この中で１包296・297のように複合口縁状を呈する深鉢は大木７ｂ式まで遡及する可能性が強い。１包298のように縄文が，縦にやや間隔をあけて施されるものは大木８ａ式に比定されよう。

Ⅶ群土器　輪積み痕上に押捺・刺突が加えられたり，荒く整形が行われ，積み上げ痕が残るもので，他にほとんど文様は施文されない。本群土器は他遺跡においてその存在があまり知られておらず，不明な点の多い一群である。

本群土器は各遺構から散在して出土しているが，この中で比較的まとまった出土が見られたものは72号土坑と第４遺物包含層である。第４遺物包含層は大木８ｂ式としたⅤ群土器を主に出土する遺構で，72号土坑でもやはり大木８ｂ式土器と伴出している事から，多くは大木８ｂ式期に比定されるものと思われる。一方，４包52のように口縁下端にⅢ群土器の一部に認められるような，隆帯による波状文が施された例も僅かではあるが認められる。また，各包含層より散在的に出土している事から，現段階では本群土器を大木８ａ式から大木８ｂ式にかけて存在した所謂粗製土器として捉えておきたい。これらの文様に類似するものは，阿玉台古式段階の土器胴部に施されるものがあり，これらにその起源を求めることも可能のように思われるが，阿玉台古式と大木８ａ・８ｂ式にはやはり時間差が多く，その関連性がどれ程のものか現段階では不明である。

Ⅷ群土器　阿玉台式土器について西村正衛氏による一連の研究があり，阿玉台式土器を５分類し，これらがそれぞれ時間的な差を有している事が指摘されている（西村：1972）。七郎内Ｃ遺跡で最も古い段階に位置付けられるものは１包320で，阿玉台Ⅰｂ類的な文様手法が見受けられる。これに次ぐものは１包321・322，２包98で，これらは阿玉台Ⅱ～Ⅲ類に比定されよう。最も新しい段階は１包333が考えられる。

出土した阿玉台式土器は，東関東のそれと施文される文様にやや異なる点も認められる。１包322は口縁部に円形の刺突文を器面に充塡させている。１包323，２包99には勝坂式土器の影響が見られる。２包99では阿玉台式的要素と勝坂式的要素が混在しているが，１包323では阿玉台式的要素は認められない。この事は，七郎内を取り巻く各型式を介在させた土器の伝播だけではなく，飛び火的な伝播の可能性も窺わせるものである。類例の増加を待ちたい。

Ⅸ群土器　２埋１は楕円形区画と渦巻文を施し，地文に条線文が施されている。器形の特色からは加曽利ＥⅢ式に比定する事が妥当かとも考えられるが，楕円形区画文・渦巻文が顕著である所から，加曽利ＥⅡ式に比定される可能性も強い。

Ⅹ群土器　１類土器とした１包366～370は胴部の一部に交互刺突が加えられたもので地文を持たない。１包366のような円形の貼り付け文が認められるものは八景腰巻１群３類土器中に類例があり，大木７ｂ式期の所産と考えられる。

２類土器は口縁上端に交互刺突が施されるもので，地文に縄文を有する。１包372のように口

縁部に小さな瘤状の突起を有するものは，「台の上貝塚土器意匠文の研究」（馬目：1968）中にいわき市下大越貝塚の大木７ｂ式土器と紹介された例に類似するようである。一方で有節沈線の施されるものは，Ⅱ群土器に含まれると考えられる。

３類土器に認められる円形の刺突は１・２類土器と系譜を異にするもので，加曽利Ｅ式に共伴する所謂連弧文土器に施される刺突との関連性が考えられる。因みに連弧文系の土器は，大畑貝塚出土土器中に認められる。

Ⅺ群土器　一般にあまり文様の施文されない浅鉢を一括した。大木系の浅鉢と阿玉台系の浅鉢に大別される。

大木系浅鉢には，１住１，４埋１，７住２～４，４包60が考えられる。いずれもあまり加飾が加えられないもので，口縁は平縁である。所属時期は７住２～４，４包60は伴出遺物から大木８ｂ式期に，１住１，４埋１は伴出遺物がほとんどなく不明な点が多いが，１住１は楕円形状の区画文が施され，内面に段を有する所から大木８ａ式まで遡る可能性が強い。

阿玉台系浅鉢では，１包391・394・396・397・２包105・106があげられる。いずれも隆帯による加飾の強い土器で１包391のように窓枠状の区画文の施されたものは，阿玉台式における一典型と考えられる。波状口縁を有する無文の浅鉢で，波頂部がさらに２分されるもの（１包392・395・398）も阿玉台系統の浅鉢と考えられる。

Ⅻ群土器　１包405は僅かに肥厚する口縁部に棒状の隆帯を縦に貼り付けたもので，八景腰巻１群３類中に類例が求められ，大木７ｂ式期に比定されよう。１包406は口唇部に押捺の加えられたもので，七郎内Ｃ遺跡ではⅢ群土器に比較的顕著な技法であり，大木８ａ式期の所産であろう。

ⅩⅢ群土器　縄文時代中期以外の土器を一括している。施文される文様から４つに大別して考えられる。貝殻条痕文の施されるものは，広義の茅山式に含まれよう。この中で８Ｔ住11は格子状に配された交点に円形刺突文が施されており，鴉ケ島台式に近似する。段状の括れが認められるものは，茅山下層式期の所産であろう。胎土に繊維を含んでいるが，外面にのみ縄文が施される土器は前期初頭に位置付けられよう。変形爪型文・波状貝殻文・平行沈線文の施されたものは，浮島系の土器と考えられる。１包419・420は浮島Ⅱ又はⅢ式に，１包421は興津式に比定される。３包41～45は縄文を地文に浅い沈線が密に施されるもので，縄文時代後期に比定されよう。

以上，各群土器を従来の編年に対比させてみたが，ここで編年的位置付け等について，多少の問題点を内包しているⅡ群土器について若干の考察を加えたい。

Ⅱ群土器について　器形は，口縁部が球体状を呈し口唇部が僅かに外反する深鉢（Ａ型）と，胴部が丸味を帯び所謂甕型に近い深鉢（Ｂ型）に２大別される。口縁部は平縁のものもあるが，緩い波状口縁が主体を占め，Ｓ字状の突起・ブリッジ状・人面・獣面状の把手を付したものも多い。

浅鉢は１点，小型のものが出土している。

文様は，器形と関連性のある事が窺われる。このためＡ型・Ｂ型の深鉢について，それぞれ述べる事としたい。

Ａ型深鉢；文様は口縁部と胴部に大きく２分割される。口縁部文様は上位・下位で表出されるモチーフに相違があり，上位には有節沈線を複列横位に施すものが多く，下位には隆帯と有節沈線によって楕円形状の区画文が施されるものが多い。他には，口縁部に沿って交互刺突が施されるものと，隆帯と有節沈線によって三角形状・連弧状の文様が横位に連続して表出されるものや楕円形区画文が認められず渦巻文が施されるものもある。

胴部文様は簡素で，隆帯を縦位に貼り付け胴部を区画するものが多数を占める。隆帯を繋ぐように沈線を施す例も認められるが，胴部の区画が意識されている事が窺われる。

Ｂ型深鉢；器形的に口縁部が発達しないため，文様は胴部上半に集中する傾向がある。渦巻文が表出されるものが顕著で，これはそれぞれ対面する位置に２又は４つ配されたものと考えられる。胴部は隆帯により区画されるものや，渦巻状の文様を横に連続させるようなものも認められる。僅かではあるが，Ａ型深鉢に多い楕円形状の区画文を有する例（１包48）もある。

地文は２段の縄を縦に転がしたものが主体を占めるが，綾絡文・羽状の縄文が施されたものも多く見受けられる。

他に本群土器の特徴的な所としては，器厚が約６～８㎜前後と比較的薄い事，隆帯が幅６㎜前後と細い事が挙げられよう。

〔大木７ｂ式との比較〕　共通点では，１．口縁部文様帯の在り方，２．施文される隆帯の様相，３．撚り糸圧痕の存在，４．楕円形状・三角・連弧状の区画文の存在，５．胴部の区画，６．地文のバラエティーの多さ，相違点では，１．深鉢における器形の違い，２．有節沈線の多用，３．口縁部突起の違い等があげられる。

七郎内Ｃ遺跡を含め県南地方において，大木７ｂ式と認識される土器は口縁上部に原体の側面圧痕文が施されただけの比較的単純な文様・器形が主体を占め，七郎内Ｃ遺跡でもこの傾向が窺われる。これらの大木７ｂ式土器の中には口縁上端に側面圧痕文が横位に施され，以下は縄文のみのもの（１包１～３）があり，さらに白河市南堀切（田中：1978）・郡山市山王館（田中：1967）遺跡では側面圧痕文下に楕円形状の区画文が配されたものが出土している。この事から大木７ｂ式土器の口縁部文様は側面圧痕文の施される部分と，地文または楕円形状区画文の施される部分の上下に区分して考えることができる。このような文様帯を有するものはⅡ群土器中の１包48・50・51とも類似し，さらに１包51では１包１・２のように，南堀切例に認められる口縁部を区画する縦位の隆帯が貼り付けられている。

隆帯は幅６㎜程と狭いものが主体を占めこの点Ⅰ群土器と共通するが，断面はＵ字状を呈す

るものがほとんどで，大木７ｂ式の断面が三角形状を呈する隆帯とは区別される必要がある。原体の側面圧痕文の存在はⅡ群土器中にも散見され，１包66などが好例であろう。１包89のように側面圧痕と有節沈線が口縁部に施されたものも認められる。一方見方を変え，口縁上部に複列横位に施された有節沈線もこれを側面圧痕に置き換えれば，大木７ｂ式のモチーフと同じものとなり技法的な共通点も窺える。しかし，楕円形状に有節沈線を配す手法（１包48・95等）は，大木７ｂ式のモチーフではあまり認められないものと思われる。

大木７ｂ式における胴部文様は比較的簡素であり，Ｙ字状の隆帯を縦位に貼り付け（１包１，南堀切例）胴部を区画するものが多い。Ⅱ群土器中にもＹ字状の隆帯を懸垂させるもの（１包126）も認められるが棒状の隆帯を懸垂させただけのものが多い。しかし基本的に胴部は区画的である。

一部に胴部を区画せず，文様が横に展開するもの（１包53・152・156・170・171）もあるが，この傾向はＢ型の深鉢に多く認められる。さらに地文には単節縄文の他に，羽状縄文（２包70他）・綾絡文（１包52・58・59）の施されるものも認められ大木７ｂ式に共通する。１包50～52・２包12に認められる三角形状・連弧状のモチーフも大木７ｂ式土器のモチーフに認められ，その接続する部分に施された渦巻文等も大木７ｂ式のモチーフに含まれよう。

大木７ｂ式とⅡ群土器の相違点では，やはり深鉢における器形の違いが特記される。さらに突起・把手の顕在化等も大木７ｂ式にはほとんど認められないものである。

〔大木８ａ式との比較〕　共通点を抜き出せば，１．有節沈線文，２．Ｓ字状突起，３．胴部の区画を意識しない横展開の文様が指摘できる。

しかし，有節沈線文・側面圧痕文は，Ⅱ群土器のように口縁部に単独で，又は楕円形状の区画文内に施されるものは認められず，多くは隆帯に沿うか，突起の加飾として用いられるものが大半である。突起自体もⅡ群土器では大木８ａ式土器のように，正面からＳ字状のモチーフが認められるものは少なく，上面・裏面からそれとわかるものがほとんどである。さらに付される突起の数も大木８ａ式では対面する位置に２又は４個施されるものが多いのに対して，Ⅱ群土器では口縁上に１個のみのものが多い。以上のように文様要素としては共通するもののその用いられ方には明らかに違なる点が多い。胴部文様が区画を意識せず横に展開するものはⅡ群土器の一部にもあり，大畑貝塚例等に認められる大木８ａ式のあるものに盛行する胴部文様と類似する。

Ⅱ群土器との相違点は多く，Ａ型の深鉢，隆帯と有節沈線による楕円形状区画文，三角形状・連弧状の文様モチーフはⅢ群土器では欠落している。さらに文様要素で最も異なるものは隆帯であろう。Ⅱ群土器における隆帯は幅６㎜前後のものであるが，大木８ａ式土器では幅１㎝前後と太くなり，これが又大木８ａ式土器のメルクマールともなっている。

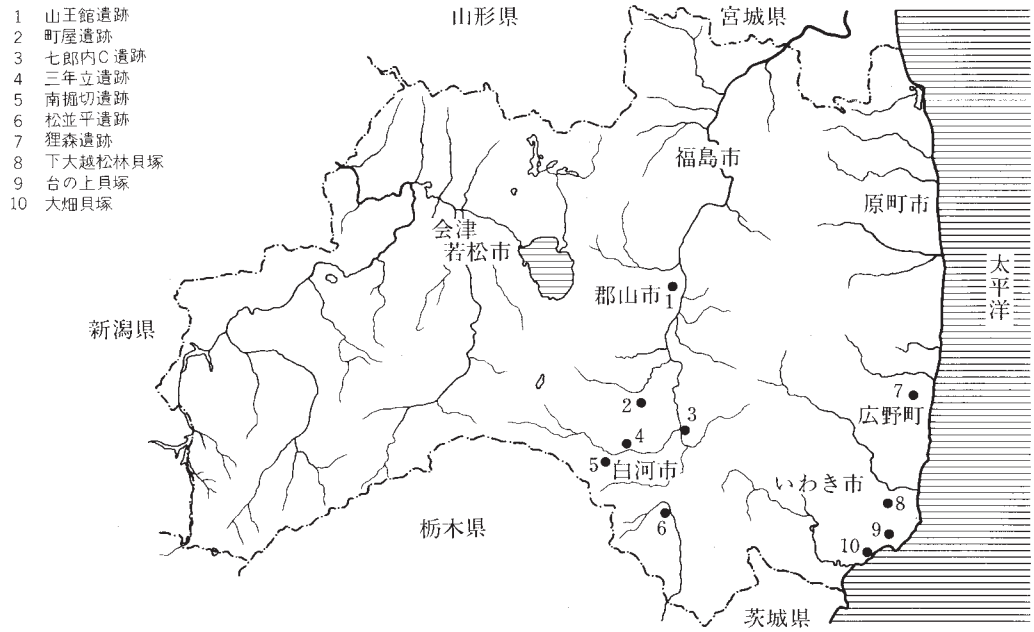
〔阿玉台式土器との比較〕　馬目氏の指摘されたように（馬目：1968），Ⅱ群土器に施された有節沈線や楕円形状の区画文はやはり阿玉台式にその系譜が求められよう。一方で阿玉台式の細分

の進んでいる（西村：1972）今日でも，具体的に阿玉台式土器のどの段階にその直接的な系譜が求められるかとなると不明な点が多い。

隆帯と角押し文・有節沈線に限ってみても，阿玉台式土器では時期による違いも有るが．角押し文には幅の狭いもの，広いもの，単独で施されるもの，隆帯に沿って施されるもの，キャタピラ状に密に施されるもの，押し引きにより連続して施されるもの，刺突文的に施されるもの等があるのに対し，Ⅱ群土器の有節沈線は幅がほぼ同じで竹管の表を用いて押し引きを行って施されたものばかりであった。さらに阿玉台式の隆帯はⅡ群土器のそれに比べ一般的に太く，特に阿玉台式の新段階のものと比べるとこの差は顕著である。大型の把手が付される阿玉台式特有の深鉢の存在も認められない。一方で阿玉台式に一般的でない縄文がⅡ群土器には全て施されている点はやはり注意されねばならない。

以上文様を中心として，Ⅱ群土器と大木７ｂ・８ａ・阿玉台式土器とをそれぞれ比較検討してきた。この結果Ⅱ群土器は大木７ｂ・８ａ・阿玉台式土器と共通する点がある一方でこれらの土器形式のうちのいずれかひとつに当てはめるには，それぞれに異なる点が多い事が指摘できよう。

〔Ⅱ群土器の分布について〕　Ⅱ群土器に比定される土器は，福島県内で管見によれば現在のところ10遺跡が知られている。今後この数はさらに数を増すものと考えられる。福島県内における分布状況（第157図）を概観すれば，県南部に集中する傾向が認められる。特に中通り地方に限って見れば，郡山市周辺部までは認められるものの福島市周辺の中期遺跡（八景腰巻・音坊・矢



第157図　福島県内におけるⅡ群土器出土遺跡位置図

細区遺跡）におけるⅡ群土器の出土は知られていない。

県外におけるⅡ群土器あるいはこれに類似する土器を出土した遺跡としては，栃木県大田原市湯坂遺跡・西那須野町槻沢遺跡・那須町何耕地遺跡・矢板市坊山遺跡・芳賀町弁天池遺跡・黒羽町浅番内遺跡・茨城県日立市諏訪遺跡・大洗町竹ノ下遺跡等が知られる。これらの遺跡は同県内でも北部に片寄って分布し，Ⅱ群土器は主として関東地方北部から東北南端部にかけてをその分布域としている事が窺われる。

〔Ⅱ群土器の編年的位置付け〕　Ⅱ群土器は文様から見れば大木７ｂ式と阿玉台式土器の融合によって成立した可能性が強い。Ⅱ群土器の祖形となるような段階のものとして南堀切（田中：1978）・山王館遺跡出土土器が挙げられる。これらは大木７ｂ式土器に阿玉台式土器の要素が組み入れられたものであろう。七郎内Ｃ遺跡の１包66・88～94等は器形や側面圧痕文の在り方では大木７ｂ式により近いものでありながら有節沈線が施される事から，この段階に比定されるものである。これを第１段階としておく。

第２段階は，阿玉台式の文様要素が確実に定着・発展した段階である。隆帯と有節沈線文による楕円形区画文とともに，前段階における側面圧痕文に変って有節沈線文が口縁直下に横位に施されるようになる段階でありⅡ群土器の大半を占める。しかし，楕円形区画文を除いた他の文様モチーフには大木７ｂ式に類似するものが多い。（１包50～52・２包12等）

第３段階は，楕円形区画文が衰退又は消失しこれに変って渦巻文が文様の主体となる段階とした。Ａ型の深鉢とともにＢ型の深鉢（１包53）が顕在化する。Ａ型の深鉢ではＳ字状突起をもとにした人面状把手が付されたものがあり，やはり渦巻文が表出されている（１包54・57）。他遺跡例では大畑貝塚・坊山遺跡出土の楕円形区画文が認められず，正面加飾によるＳ字状の突起が加えられたＡ型深鉢もこの段階に位置付けられる可能性が強い。

さらに第４段階として大木８ａ式に比定される太い隆帯による加飾の加えられた土器に有節沈線文が施されたもの（ＳＫ15例・８Ｔ住例），いいかえれば大木８ａ式の土器の文様要素に有節沈線のみが残る段階が位置付けられよう。

以上Ⅱ群土器内における文様変遷を推測した。しかし七郎内Ｃ遺跡ではⅡ群土器の各段階を層位的に示すような事例では認められず，現状ではあくまでも推論でしかない。しかしながら，大木８ａ式を純粋に出土した遺構の15号土坑では，出土土器中にⅡ群土器に対比されるような土器は出土していない。一方４段階とした有節沈線の用いられた大木８ａ式が２点（15坑２・４）出土している。第２遺物包含層は大木７ｂ式・阿玉台式・Ⅱ群土器を主として包含していた。４段階の土器をも含め大木８ａ式の明確なものは出土していない。この点から少なくともⅡ群土器第２段階以前は大木８ａ式に先行する可能性が考えられる。

次に他遺跡出土例を含めてこのような現象が認められるものかどうか見る事としたい。

他遺跡における第Ⅱ群土器を概観すると，第１段階の土器が他系統の土器と伴出した例，又層位的に出土した例は不明である。

第２段階の土器は諏訪遺跡７号土坑より出土した土器が相当するであろう。底面より３個体出土している。深鉢は２点でこのうち１点は諏訪タイプⅡ類とされるものであるが器形・楕円形状の区画文が配される事からⅡ群土器Ａ型深鉢に含まれる可能性が強い。ここでは第３段階に属するようなものは出土していない。25号土坑底面出土土器は諏訪タイプⅠ類とされたもので，七郎内Ⅱ群土器に先行する可能性もある。しかし楕円形区画文は認められないものの，口縁下に複列横位に施文された有節沈線などはⅡ群土器第２段階に近似するものであろう。器形的にはＢ型の深鉢の範疇に含まれる。同土坑ℓ－１内からは西村氏の編年にあてはめれば阿玉台式３類に比定される土器が出土し，諏訪タイプⅠ類とした深鉢はこれに先行するものとされている。

第３段階の土器は湯坂遺跡T_1－Ⅴ土坑からまとまって出土している。渦巻文を中心として胴部文様が構に展開するＢ型の深鉢で，口縁部に楕円形区画文の施されたＡ型深鉢は認められない。伴出遺物に阿玉台式（勝坂的文様が施される）と大木８ａ式土器がある。槻沢14ＨＰ－３もほぼ同じ段階と思われるが伴出遺物は明確でない。

第４段階では槻沢遺跡14Ｈ炉Ｐ－２，同14Ｈ炉下Ｐ出土土器が考えられる。Ｐ－２では隆帯による加飾が強まり有節沈線は施されるものの不規則である。阿玉台式（角押文に変って平行沈線が多用される）と大木８ａ式（口縁に眼鏡状把手の付されるもの）と伴出。14Ｈ炉下Ｐ出土の大木８ａ式土器は七郎内Ｃ遺跡15坑４・試８Ｔ住１と近似し，阿玉台終末期の土器と伴出している。

以上見てきたように他遺跡におけるⅡ群土器と阿玉台式・大木８ａ式土器の伴出関係から，第２段階は第３・４段階より先行すると考えられる。又湯坂・槻沢遺跡の伴出関係からは第３段階と第４段階が時間的に重複する可能性が強い。第３段階・第４段階に伴出する大木８ａ式を東北南部における大木８ａ式の初源段階として位置付け得るとするならば，２段階以前のⅡ群土器は単純に考えれば大木８ａ式以前に位置付けられる事となろう。

〔ま と め〕　Ⅱ群土器についてこれまで種々述べてきた。これを整理し，今後の問題点を述べて，本項を終える事としたい。１．Ⅱ群土器は阿玉台式と大木７ｂ式の融合によって成立し，２．Ⅱ群土器自体の中で独自の発展過程が予測される。３．北関東と東北南端部にその分布圏を持ち，４．時間的には大木７ｂ式期のある段階から，大木８ａ式期のある部分まで存続した可能性が強い。この事から，本群土器は既存の型式からは分離されるべきものであると考えられる。

しかし，七郎内遺跡を含めて本群土器が，層位的な事実関係を持って出土した例は今日あまりにも少なく，型式設定するまでの充分な層位的検証を受けていないのが現状である。

Ⅱ群土器の分布範囲は関東地方の阿玉台・加曽利Ｅ式文化圏と東北地方的な大木式文化圏のいずれも辺境地帯にあたり，土器自体にも複数型式の文様要素が組み込まれ，複雑な様相を呈して

いる。これをどのように整理し，理解して行くかは今後に残された大きな課題であろう。さらに本項では，宮城県をも含めて大木７ｂ・８ａ式土器の実体が必ずしも明らかでない現状（丹羽：1981）で，あまりにも安易にこの名称を用いてしまった。今後Ⅱ群土器を考えていくうえにおいては，これらの土器に対する位置付け，性格付けが並行して行われる必要がある。またⅡ群土器と阿玉台式・諏訪タイプと呼称される一群の土器との比較・検討をも進められなければならない，大きな問題として残ったままである。

２．土　製　品

ミニチュア土器・土隅・三角形状土製品等がある。大半は第１遺物包含層からの出土で，他の遺物と混在しており，特別な出土状態を示すものはなかった。

ミニチュア土器　器高10㎝以下のものが主体を占め，器形はバラエティーに富んでいる。文様の施されるものと，手捏土器的なものがあり数量的には後者が圧倒的に多い。文様の施されるものでは，深鉢の文様をコピーしたようなものが多い。これらの土器が検出された例は，県内においても数例知られるが，七郎内Ｃ遺跡においてはある程度数量的なまとまりが認められる。ミニチュア土器の使用目的は，大きさや形態から非実用品である事が推測されるのみで，調査の成果からは具体的に用途を推察し得るような知見は得られなかった。

土　　偶　板状土偶と考えられるもので，大木式文化圏から阿玉台式文化圏に特徴的なもので（江坂：1973）ある。七郎内Ｃ遺跡出土の土偶も，この系統に含まれるものであろう。これらは乳房を強調したものが多いが，１包561・562は腹部が強調されており，妊娠した女性を表現したものであろう。体部には沈線の施されたものもあるが，有節沈線によって渦巻文を主体とした文様が施されるものが多く，時期的には七郎内Ⅱ群土器に併行すると思われる。

その他の土製品　１包575は三角形状を呈し各頂部に糸掛け状の刻みが施されたもので，江坂氏の集成された「奥羽・関東地方の板状土偶から派生し，土偶と同一の用途を持つ，逆三角形状土板」に近似する。しかし，本例は，他遺跡例に認められるような装飾や突起等がない。

１包599は円板状の土製品である。外面には末端を渦巻状とした沈線が放射状に配されている事から，太陽をデフォルメしたものとも考えられる。他に類例がないため詳細は不明であるが，施された文様の特色から大木８ｂ式期に位置付けられよう。

３．石　　器

総数352点を図示した。この他に図示しなかった磨石が約90点，石皿の小破片と思われるものが数点ある。このため磨石・石皿・剝片・石核・他のものを除いた石器241点における組成比率は石鏃78％，不定形石器18％，石箆・石錐各0.5％，石匙１％，磨製石斧２％となる。

石　　鏃　いずれも無茎のもので，有茎石鏃は１点も出土しておらず，縄文中期前半期から後半期において，無茎石鏃がその主体を占めていた事が窺われる。大きさは鏃長１㎝たらずの小型

のものから，３㎝を越えるような大型のものまで認められる。これらの中では鏃長２㎝前後のものが最も多い。一般的に言われるように，石鏃が狩猟対象動物によって使い分けが行われた可能性はあるものの，七郎内Ｃ遺跡における石鏃の大きさの分布からは，このような現象を観取する事はできなかった。

不定形石器　形態が円形，又は楕円形状を呈する整形なものと，剝片の一部に刃部を作り出した形態の一定しないものを含めている。前者は，刃部の形態から石篦的な機能を充分果たし得るものと考えられ，後者は，角度の大きな刃部が主として作り出され，スクレイパー的な用途を考えておきたい。

石　　斧　４点出土した。いずれも磨製の石斧で，刃幅３㎝程の小型のものが２点ある。小型の磨製石斧はいずれも欠損品で，刃部には使用による刃毀れが認められるものもあり，実用品である事は確実である。しかし，木材を伐採するにはあまりにも小型で一般的な石斧とは考えられず，楔的な用途を考えておきたい。

石器組成からは石鏃・磨石・凹石類の多さが特記される。この傾向は福島県を含めた汎東北における該期遺跡に一般的に共通するものであり（日下部：1972），狩猟と共に植物採集が盛んに行われていた事が窺われる。さらに石篦等の定形石器に比べ不定形石器の多い事，打製石斧が明らかに欠落している事も注意される。しかし，不定石器についてはあまり注意されていない現状であり，これらの石器についての性格付けはその用途をも含め，今後さらに検討されねばならない問題であろう。

七郎内Ｃ遺跡では，石器材料として石英が多く用いられ，剝片石器中で47％を占め，フレークチップ類ではその数が他と比較して圧倒的に多い。これは周辺部に石英の鉱脈があり，原材料の入手が容易であった事に起因するものと思われる。

４．石　製　品

39号土坑より約50点の琥珀製の小玉，55号土坑より翡翠製の大珠が１点出土している。39号土坑出土の琥珀製の玉類は幅0.7～0.9㎝程の小玉が多く，最も大形のものは39坑２の1.7×2.8㎝である。形態は楕円形状，所謂臼玉状，管玉状を呈するが，いずれも不定形のものである。穿孔は２方向から行われたものが多く，39坑１ではこのため貫通点がずれている。土坑の所属時期は不明であるが，覆土の状態は他の縄文時代中期の土坑のそれと近似し，同時期の所産である可能性が強い。県内で縄文時代中期における琥珀製の玉の出土は，南堀切３号土坑に１点ある（根本・寺島：1981）。幅3.6㎝程の不整大形の玉で，穿孔は片面から行われ，石鏃６点と阿玉台式土器の小片と伴出している。形態からは南堀切例が大珠的様相を示すのに対し，39号土坑例は，古墳時代における同種玉と同様な在り方を示しているとも言える。このような在り方が縄文時代中期に，ある程度の類例が見出せるものか否かは，やはり今後の研究の進展を待って検討さ

れねばならないであろう。

遺構について

縄文時代の遺構と考えられるものは，住居跡・炉跡・焼土遺構・埋甕・土坑・遺物包含層・ピット・竪穴状遺構がある。これらの所属時期は遺物包含層を除くと，遺構内からの土器の出土が少ないため，明確に判断し得るものは少なく，特に土坑についてはこの傾向が強い。さらに出土土器中には他形式の土器も含まれ，これらの併行関係も現状では確定したものではない。このため本項では，便宜的に縄文時代中期の遺構を，～大木８ａ式期までをⅠ期，大木８ｂ式期～をⅡ期と２大別して述べる事とする。以下に出土遺物・切り合い関係からある程度時期の明らかなものを記しておく。

Ⅰ期：１・４・９号住居跡，15・29・51号土坑，第１・２遺物包含層

Ⅱ期：５・７号住居跡，１号炉跡，１～５号埋甕，20・38・64・72・74・77号土坑，
　　第３・４遺物包含層

１．竪穴住居跡

明確に住居跡と判断されるもの６軒，上部が削平されかろうじて焼土や周囲ピット群から住居跡として推定可能なもの３軒と，調査区外であるが試掘時に検出された１軒の総数10軒である。所属時期はⅠ期：１・４・９号住居跡と試掘８号トレンチ内住居跡，Ⅱ期：５・７号住居跡と１号炉跡，不明：３号住居跡と１・２号焼土遺構に分けられる。これらの住居跡の規模・構造について述べる事としたい。

規模はⅠ，Ⅱ期共に径約５ｍ程のものが一般的であり，特に差違は認められない。平面形はⅠ期の住居跡が楕円形状を呈するのに対し，Ⅱ期では隅丸方形状を呈している。柱穴はⅡ期のものが４本柱穴を基本として，方形状の柱穴配列を取るのに対し，Ⅱ期のものでは炉を中心とする多角形状の配列を示す。この点では，１・２号焼土遺構もⅡ期に属する可能性が強い。このような形態差が他遺跡において一般的な現象として観取し得るかどうかは，該期の住居跡の発掘例が乏しい現状では不明な点が多い。このような中で，大畑貝塚では大木８ｂ期の住居跡にⅡ期の住居跡と共通する柱穴の配列が認められるものがある。

炉はⅠ・Ⅱ期とも地床炉が一般的である。この中でⅡ期の内でも最も時代の下ると思われる１号炉跡は，炉の周辺に石囲い（一部土器片使用）と内部に埋甕を有するものであった。これ以前の炉が特に掘り込み等を持たず平面的に固定されていなかったため，使用していくにつれ火床が数箇所にも及び，必然的に炉の範囲が広がっていった可能性が強い事を考えると，炉の平面的固定化は，住居跡内空間利用のうえでもより有効な在り方を示すものと思われる。このような形態を有する炉は，大木８ｂ式期の中でも１号炉跡よりはやや時期が遡ると思われる八景腰巻遺跡例に類例が求められ，大木８ｂ式期における炉の一つの在り方を示すものと考えられる。

２．埋　　甕

５基確認されている。いずれも土器を正位あるいは倒立の状態で埋置したもので，住居跡等に伴うものではなく，単独の埋甕である。これらは遺存状態が悪いものが多いが，埋置時の状態をそのまま停めていると考えられる２号埋甕では，深鉢の底部が故意に打ち欠かれており，他遺跡において検出される埋甕と共通する特色が認められる。

埋甕に対しては今日，埋葬説（渡辺誠：1971）と，胎盤埋納説（木下：1981）があり，後者は住居跡内に設置された埋甕を対象に述べている。一方，屋外の埋甕については埋葬の一形態と捉えることが一般的であり，七郎内Ｃ遺跡でもこれを積極的に否定するような事象は観取されていない。このため七郎内Ｃ遺跡における埋甕に対しては，人骨は検出されなかったものの，やはり埋葬の一形態と現段階では捉えている。

４号埋甕は倒立状態の浅鉢と共に，大型の自然石が掘形底面より僅かに浮いた位置に設置されていたものである。本例も土器の設置されている亀単独で存在する事から埋甕の一形態として捉えたものであり，埋葬に関連するものと考えている。具体的には，死者の頭部に土器を被す葬法が千葉県市原市山倉貝塚に知られ，一方で石を伴う埋葬は，抱石葬として縄文時代における一葬法と認められる事から，４号埋甕例はこの２つの葬法が合体したものと考えられる。

３．土　　坑

総数71基が縄文時代に比定されるが，遺構に伴うと考えられる土器が検出された例は極僅かであり，土坑個々の所属時期となるとなお不明な点が多い。このため本項ではあえて土坑個々の時期比定を行わず，土坑の機能を中心に述べていく事としたい。この作業を行っていく上では，土坑内覆土の堆積状況と遺物出土状態がその中心となろう。なぜなら，土坑の形態と土坑内覆土の堆積状況・遺物出土状態との間には，相関関係が全く認められないためであり，また，七郎内Ｃ遺跡では，土坑の有する機能の差が現況において，直接的に形態差として表われていないと思われるからである。このような事は逆に言えば，同一機能を有しながら形態的には種々のものが認められる坂の下遺跡（森：1979）例からも類推される。

貯蔵穴　全国的に土坑を集成し，その機能についてまとめた堀越氏（堀越：1977）は，開口的な使用の窺われるものを貯蔵穴の可能性の強い土坑と捉えている。具体的には自然堆積を示す土坑と言う事となる。この場合，遺物はいずれも流れ込みの状態で出土し，中には完形状態で出土するものもあるが，個体数は極めて少ない（38・64号土坑）。20号土坑は後述するように墓坑と考えられるものであるが，人為堆積土下は薄く自然堆積層が認められる事から，貯蔵穴として使用していたものを墓に転用したと考えている。

陥し穴　一般的に形態は楕円形状・長方形状を呈し，深さは深く断面台形状を呈するものが一般的である。土坑底面に小ピットが設けられているものが多い。七郎内Ｃ遺跡においては，９・

13・23・46号土坑が形態的にはこれに近似する。しかし，他遺跡例に見られる（今村：1973，芳賀他：1981，鈴鹿：1982）群在化・直線的な配列は七郎内Ｃ遺跡では認められず，これが陥し穴と規定する前提条件の１つであるとすれば，七郎内Ｃ遺跡の土坑を陥し穴と規定するにはやや疑問も残る。

ゴ ミ 穴　15号土坑が比定される。数個体の土器が土坑内に散在した状態で検出され，出土状態からは土器を据えたような様相は認められていない。土器の廃棄と共に土坑は人為的に埋め戻されている。15号土坑は当初から土器廃棄のため構築されたものか，土坑の本来的な機能を終えた空間を二次的に利用したものかは判然としないが，土層観察では自然堆積層の存在は知られず，土坑構築から遺物廃棄まであまり時間差のなかった事が窺われる。

墓　　坑　人為堆積を示し，副葬品あるいは縄文時代の葬法と共通する要素が認められるものを考えた。20・28・37・39・40・47・51・66・67号土坑が比定される。39号土坑は琥珀製の小玉が土坑の一部から集中して50数点出土したものである。このような副葬品を伴う土坑は，縄文時代には管見した範囲では知られておらず，縄文時代のものとすれば僅少な例となろう。55号土坑からは大珠が出土している。堆積状態は土坑の遺存状態が悪く判断つきかねるが，南堀切遺跡３号土坑でも垂飾品が石鏃と共に副葬されている事から，55号土坑も墓として用いられた可能性が強い。40号土坑では破砕された石英が，やはり人為堆積を示す覆土中から一個所に集中して出土しており，副葬品として用いられたものと考えられる。

20号土坑は土坑内に，深鉢と大型の自然石がセットで設置されており，４号埋甕に認められる土器と石の関係と共通し，被甕抱石葬とでも言えるものかと考えている。51号土坑例もやはりこれと近似する性格を有する。また，土器を伴わず人頭大の石だけが検出される土坑も，共通性が認められ，やはり墓として考えておきたい。この他，単に人為堆積を示す土坑も，あるいは墓として用いられた可能性も考えられる。

土坑内に石を伴う墓坑としては，大畑貝塚に好例が見い出される。Ｂ地点ｅ２第４人骨とされたものがそれで，不整楕円形を呈する土坑内より，人骨と共に深鉢２個体と耳栓形土製品・鹿角棒２点と大型の石皿が一部人骨を覆うような状態で設置されている。この大畑例からも上記の土坑が墓坑であることを傍証できると思われる。　（松本）

第２節　弥生時代の遺物について

Ｌ－Ⅰ層，及び風倒木覆土中より出土した30数片の土器破片だけである。いずれも磨滅が著しく，小片で器形・部位を想定し得るものは少ない。施文された文様も，どちらかと言えば甕型土器に施された浅い刷毛目状の沈線が認められるものが多い。その中で，遺構外91は壺形土器の

胴部片と考えられるもので，太い沈線で区画された磨消縄文が曲線的に配されており，棚倉式に比定されよう。他の磨消縄文を有するものは，区画する沈線が細く配置も直線的である。郡山市柏山遺跡(福島県：1969，中村：1976)出土土器に近似するものと思われる。刷毛状の沈線の施されたものは，表郷村滝ノ森・金山町宮崎遺跡に，遺構外108は小波状の沈線文が縦に施され，同じく滝ノ森遺跡に類似するものが認められる。これらの土器は前述した如く，磨滅した小片が多いため，本項では大きく弥生中期中葉の時期と捉えておきたい。（松本）

第３節　奈良・平安時代の遺物と遺構

調査区内は，大半は縄文時代中期の遺構・遺物によって占められるが，その他に数少ないが，奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。検出した遺構・遺物は竪穴住居跡１軒・掘立柱建物跡２棟，土坑１基と，これら遺構に伴う土師器である。

遺物について

当時期の遺物は土師器だけである。器種は杯・甕の２種で構成される。遺物の絶対量が少なくある程度全体的に器形の窺えるものは図化した杯７点(２住１～５・３坑１・２)と甕４点(２住６～９)である。これらの遺物を幾つかに細分することも可能であるが後述するように時期的にも限定された一群と思われ分類は行わない。各器種の特徴等については第４章内で触れたのでこれも再記述しない。ただ杯類には，回転ヘラケズリされた杯以外に体部下端外面を手持ヘラケズリしている破片が１片，２号建物跡 P_7から検出されているので確認のため付記しておく。

回転ヘラケズリ調整された杯類７点は，２号建物跡と３号土坑の底面ないし床面から検出されたもので，２号住居跡では同じ床面上から甕類も共伴している。２住３・５，３坑１・２は器高が低く（４㎝以内），底径も大きい。外面の調整域も底部全部から体部半ばまで及び，なかには２住１のように口縁部付近にまで及ぶものがある。

甕類では形態的に小型甕・長胴甕等含まれているが，成形技法では非ロクロ，ロクロ成形の２種類がある。ロクロ成形の甕は２住６の１点のみであり，非ロクロ成形の甕の数量が多い。２住６は一般的な甕とは異なり，胎土も精選され，内面の調整においても杯内面と同様の扱いを施している。これは成形の段階からいくつかの使用目的に合わせ製作されたものと思われ，胎土の粗い，いわば粗製の甕が多く煮沸用に使用されるのに対し，２住６に代表される精製の甕は，直接火にかけない状態(貯蔵用？)での使用を目的としたものと考えられる。

これらの土器群の特徴をもつ時期のものとして，杯類の特徴から従来より県内では仏具壇遺跡(馬目：1975)が好例として知られているが，当土器群もほぼこの仏具壇期に該当するものと思われる。

上記の杯類の特徴とそれに共伴する甕類の様相から，一応年代を９世紀初頭を前後する時期としておきたい。これは３号土坑出土杯についても同様である。なお，２号建物跡 P_7 から出土した杯の体部下端外面調整の技法は前述の杯類の調整技法より後出するもので，時期的に下降するものと思われる。

遺構について

竪穴住居跡　２号住居跡１軒である。一辺約３ｍの隅丸方形でカマドや柱穴等は認められず，住居跡としての根拠に欠けるが，底面の状態が踏み締めたと思われる固さを持つことや底面からの遺物の出土状態等から住居跡としたものである。ただし，貯蔵穴やカマドが無いことからすれば，恒常的に使用された住居跡とは推定しがたい。

掘立柱建物跡　１・２号建物跡の２棟である。１号建物跡は１間×１間（8.3㎡），２号建物跡は３間×３間（37㎡）といずれも方形タイプの建物跡である。県内中通り南半での調査例により掘立柱建物跡は奈良・平安時代の集落跡の構成要素のひとつとしてかなり普遍化してきており，当課でもこの地域のいくつかの遺跡の調査を継続してきた。集落跡から検出される建物跡は，２間×２間や２間×３間が主体を占める傾向が強いが，調査区内で検出された１間×１間，３間×３間の建物跡の類例はいまだ少ないと言える。中通り南半での類例は，１間×１間の建物跡で，西原遺跡２棟（ＳＢ02・07），杉内遺跡１棟（ＳＢ10），岩渕境遺跡１棟（ＳＢ01）があり，３間×３間では佐平林遺跡（Ｖ区）１棟（ＳＢ01），谷地前Ｃ遺跡３棟（ＳＢ04Ｂ・08・16），西原遺跡１棟（ＳＢ05），沼平東遺跡（ＳＢ01），七郎内Ｄ遺跡（ＳＢ05）等が知られている。１間×１間の建物跡では柱間の距離が８尺～10尺と間数の増える建物跡よりも，ある一定の屋内空間を確保するためか柱間を広く取っている。３間×３間での間尺は７尺程度と一般集落内での建物跡の間尺と差程かわらないが，側柱のみの構造という点から束柱的な柱穴が上部の削平により消失した可能性を除いた場合高床の存在は考えられない面がある。

土　　坑　３号土坑１基だけである。堆積土の状態から開口していたものと思われる。用途については不明である。

以上各遺構に触れたがこれらの遺構の年代は，伴出した遺物によって２号住居跡と３号土坑を９世紀初頭を前後する時期と考えた。２号建物跡は３号土坑を切っており，また掘形内部から検出された土師器杯破片も技法的に新しい要素を持っていることから一応９世紀後半以降の年代を考えておく。１号建物跡の時期は伴出遺物がなかったため不明であるが，前述の二時期のうちいずれかに伴う遺構ではないかと思われる。（大越）

第２編　七郎内Ｄ遺跡

遺跡略号	ＩＫ－ＳＲＵ・Ｄ
所在地	石川町大字中野字七郎内
時代・種類	縄文時代中期－集落跡 奈良・平安時代－集落跡
調査期間	６月11日～８月６日
調査員	小平良男　　大越道正 阿部俊夫　　松本　茂
協力機関	石川町教育委員会

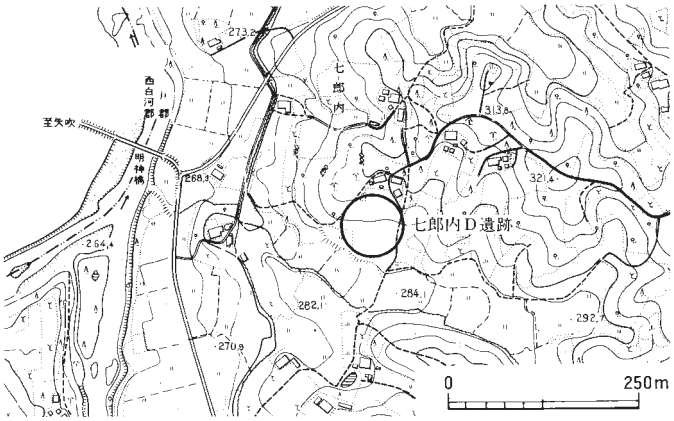
第１章　調 査 経 過

第１節　位置と地形

七郎内Ｄ遺跡は石川郡石川町大字中野字七郎内地内に所在する。この地点は水郡線野木沢駅から南西方向にあたり，直線距離にして900ｍを測る。行政区画上では石川町の南西に位置し，県道石川～矢吹線の阿武隈川上に架かる明神橋に近く東南東へ300ｍの地点にあたる。

当遺跡は阿武隈川右岸から東へ入り込んだ小規模な開析谷の北側緩斜面に立地し，第１編に収録した七郎内Ｃ遺跡とは，この開析谷を挟んで向い側にあたる位置関係をもっている。標高は海抜284～288ｍ，開析谷との比高差は５～６ｍを測る。遺跡の広がりは調査区の東および北にも幾分延びるものと思われ，面積は2,000㎡前後を数える。遺構群が検出された緩斜面は４～７度の傾斜角をもち南及び西へ向かい下る。斜面の南西端部は既に水田造成時に２ｍ強削平され原形をとどめていない。現在の遺跡内の土地利用状況は，馬鈴薯・蔬菜用の畑や桑畑として利用されており，相対的に高い所は耕作による削平が進んでいる。調査区内および周辺微地形はＤ・Ｅ列（第２図）が比較的高く尾根上に延び，またＤ－１グリッド付近では南西方向に延びる尾根上の高まりが分岐している。この尾根上の高まりの間には極めて小さな埋没谷が入り込んでいる。調査区内の基本層序は，耕作のためか20㎝前後の表土層下直に黄褐色砂質土，もしくはクルミ大の凝灰岩を主体とした礫層となる部分が多いが，埋没谷等地山まで深い所，例えばＢ－０グリッドでは，表土下に層厚30㎝前後の黒色土（Ⅱ層）が，その下部に茶褐色土（Ⅲ層）が10㎝前後堆積している。遺構の検出面は，削平された部分での検出が多く判然としないが，６号掘立柱建物跡の西側柱列ではⅢ層の上面を掘り込んでいることが確認されている。前記した礫層中の礫は円礫で段丘堆積物と考えられるが，同じく段丘上に占地している七郎内Ｃ遺跡より上位の段丘面と思われる。

当遺跡の中心的時期である平安時代と同時期の遺跡は周辺に散在しているが，いずれも小規模な遺跡が多く，開析谷に面する緩斜面もしくは谷頭部に占地する傾向がある。



第１図　七郎内Ｄ遺跡周辺地形図

第２節　調 査 経 過

七郎内Ｄ遺跡は，昭和53年当課の分布調査により発見，翌54年試掘調査された遺跡である。この試掘調査で設定したトレンチ内から掘立柱建物跡の柱穴が数基検出され，出土遺物からほぼ奈良～平安時代の集落跡であろうと推定された。

発掘予定は，当初表土剝ぎから遺構検出までは見通しを立てるため調査の前半におき，各遺構の精査は七郎内Ｃ遺跡が終了しだい調査員・作業員全員であたる方針でいた。しかしながら七郎内Ｃ遺跡の精査が進むにつれ，作業量が予定をはるかに超えるものと予測されたため予定を変更し，調査員１名，作業員４～５名で調査を開始し続行した。以下調査経過を略記する。

調査日誌概要

５月20日　七郎内Ｃ遺跡に引き続き重機による表土剝ぎを行う。

５月22日　遺構検出作業。竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡３棟以上，土坑５基を検出し，一時作業を中断する。

６月11日　調査を再開。基準杭の設定，偏度は七郎内Ｃ遺跡同様Ｎ－29°１′20″である。検出遺構の確認に入る。

６月16日　１号・２号掘立柱建物跡の平面図化と併行し，竪穴住居跡の掘り込みを行う。

６月26日　１号溝掘り上げの結果，下から新たな掘形を検出。３号掘立柱建物跡とする。

６月29日　各土坑の掘り込みと竪穴住居跡の平面図化を行う。５号土坑から土師器甕，須恵器甕破片がまとめて投げ入れたような状態で出土した。

７月７日　調査が終盤になったので，周辺の微地形や遺構の存否を再確するためトレンチ４本を設定し調査に入る。その結果，周辺区の東側は土師器・須恵器の遺物を含む深い埋没谷の包含層が，北側では新たな掘立柱建物跡の掘形が検出され，さらに遺構群が広がることが確認されたため急遽調査区を拡張することとした。しかし馬鈴薯の収穫が間近いため，収穫後の調査を余儀なくされた。

７月８日　４号住居跡が掘り込みによって，縄文中期の竪穴住居跡であることが判明した。

７月16日　調査拡張予定区内の表土の除去作業を開始する。

７月22日　拡張区の遺構検出の結果，竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡４棟，土坑１基を検出，順次各遺構の精査に入る。

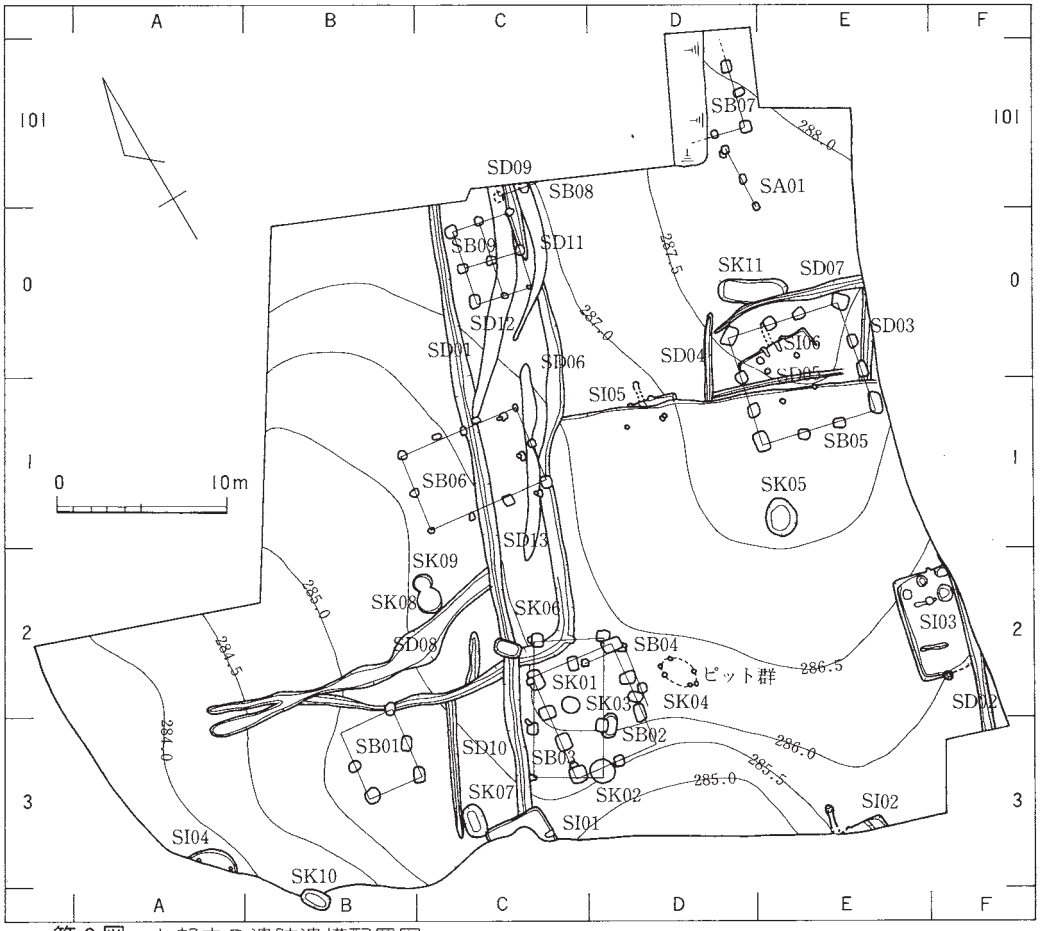
７月24日　６号建物跡は，掘形の配置からみて建て替えの可能性があることが推定された。

８月３日　７号溝が５号掘立柱建物跡に伴う水抜き的な溝であることが想定された。

８月６日　遺構全景・遠景写真を撮影し作業を終了する。

第２章　遺構と遺物

調査区内に検出された遺構は，竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡９棟，柱列１，土坑11基，ピット群１，溝跡13条を数える。遺構の分布は，埋没谷と尾根部との多少起伏がある微地形のなかで，尾根上の部分に集中する傾向があり，調査区の中央部から東半部にかけて分布する。残存状況は後世の耕作等により土層が削平されていたため，特に竪穴住居跡では全体のプランが明瞭に捉えられないものばかりであった。また開析谷に面する調査区の南部および西部は開田時の造成によって削平され，すでに失われた遺構も多いと思われる。調査は，対象区域内に一辺10m四方のグリッドを設定し，小区割を行い，各グリッドの名称はアルファベットと数字の組み合せによった。遺構外の遺物は各グリッドごとに収納した。



第２図　七郎内Ｄ遺跡遺構配置図

第１節　竪穴住居跡

総数６軒検出されている。このうち５軒まではロクロ土師器を伴出する時期の住居跡であるが１軒（ＳＩ04）のみは縄文時代中期後葉に位置付けられる住居跡である。竪穴住居跡の分布は，標高283～284mに位置するＳＩ04を除き，他の住居跡は約285mより上の比較的高位に位置している。以下時期的に前後するが，調査時に付した番号の順序に従い報告する。

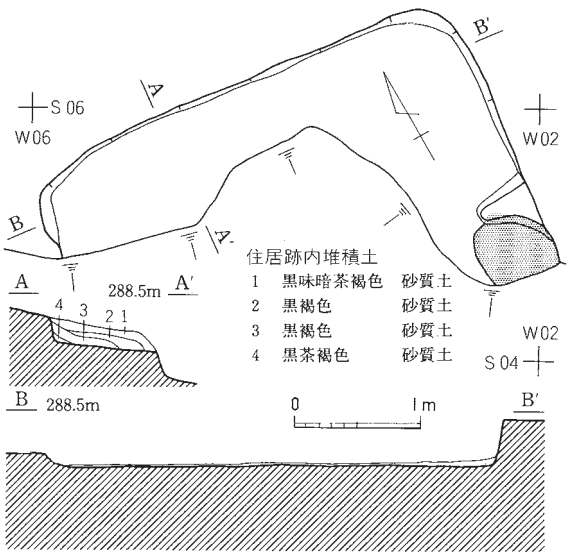
１号住居跡

遺　　構（第３図，図版２）

調査区の南Ｃ－３グリッドで検出された住居跡で，南側の大部分が水田造成時に削り取られている。プランは残存している北壁から推定して１辺3.6m前後の方形になるものと思われる。埋土は黒褐色砂質土が斜面上方から流れ込んだ様子を示しており自然堆積と考えられる。

壁面は東壁・北壁とも垂直に近い角度で立ち上っているが，僅かに残った西壁では崩落のためか多少傾斜が緩やかになっている。壁残存最大高は28cmを測る。床面は黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合土による貼床である。厚さは２～５cmを測りほぼ全般に平坦であるが，壁沿いの周辺は中央に較べやや迫り上がっている。

カマドは東壁に設置されている。壁面に対し燃焼部右半と右袖部が削取されすでにない。左袖は黄褐色砂質土を使用し，幅約25cm，長さ46cmで東壁にとりついている。燃焼部奥壁は住居跡東壁を若干抉り込んでいる。



第３図　１号住居跡

他に周溝・柱穴等の検出はない。

遺　　物

出土遺物総数は８片と少なく，いずれも小破片ですべて堆積土内出土である。内訳は縄文土器破片２点，弥生式土器破片１点，土師器破片３点，時期不明破片２点である。本跡の時期と異なる破片中採拓可能な弥生式土器破片は，第２章第３節に掲載した。

ま　と　め

本跡は大半が削られ遺構の全貌が明らかでない。また床面密着の遺物もなく時

期比定が困難である。ただ前述した遺物のなかで，最も時期の新しい土師器は甕の胴部下半の破片であるが，器厚が５㎜程度と薄手で均一なことからロクロ成形の土師器と思われる。従って当住居跡の形態等も含めて考慮すれば，竪穴の時期はロクロ土師器使用時期をそう逸脱するものではないと考えられる。

２号住居跡

遺　　構（第４図，図版３）

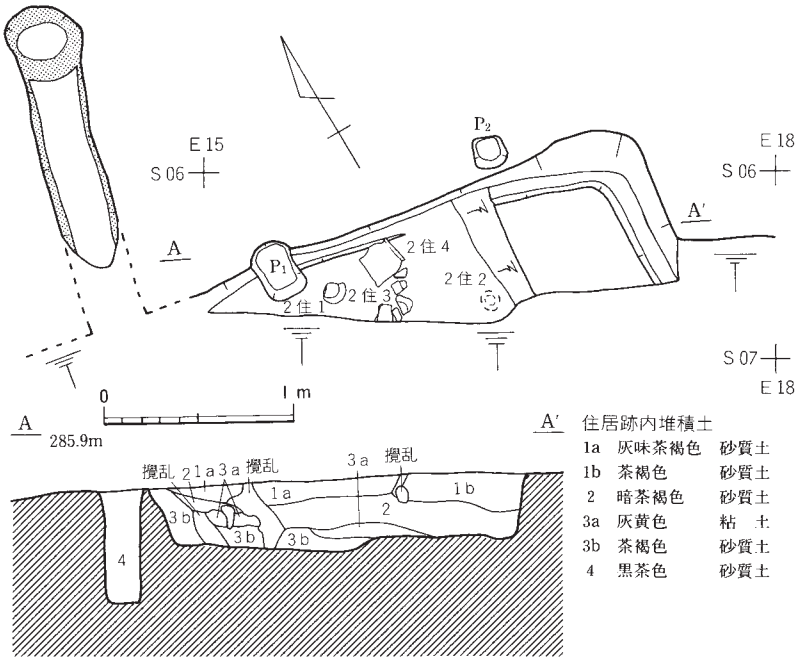
調査区南端Ｅ－３グリッドにて検出された住居跡で，１号住居跡から東へ20ｍの地点にあたる。遺構は北東コーナー部と煙道を残すのみで規模は不明である。

埋土は暗茶褐色砂質土が主に流入し自然堆積層と思われ，付近の地山を構成している小砂利や砂質粘土が混入している。

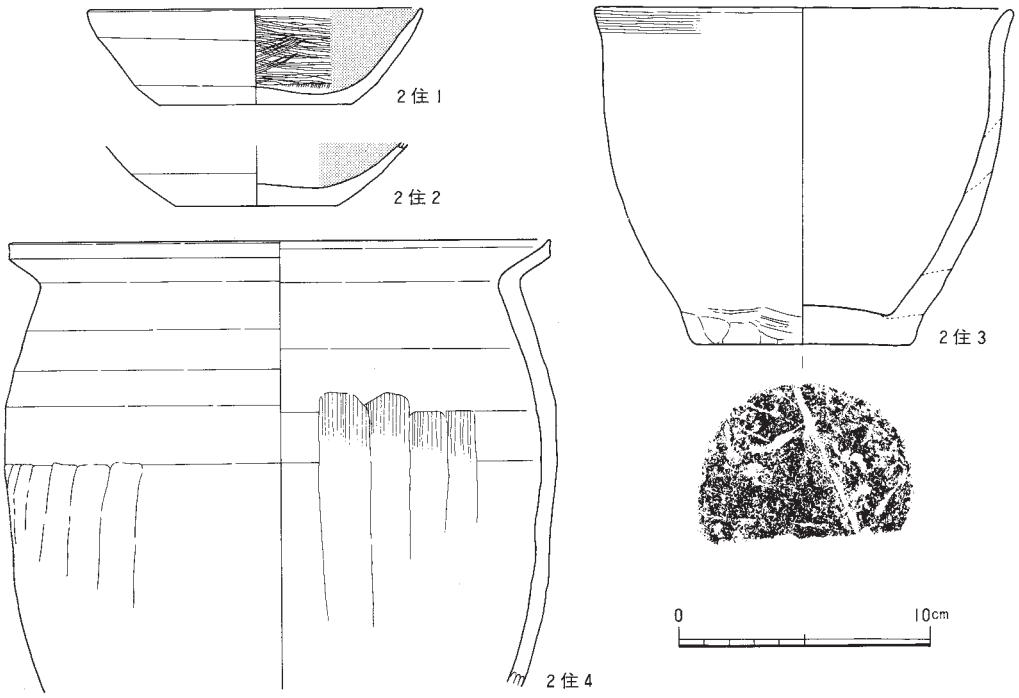
壁面は70～80度の傾斜角で立ち上がり，残存高は最大で38㎝を測る。周溝は幅約10㎝，床面からの深さ２～３㎝で部分的に取り付いている。床面は一律に平坦ではなく北東コーナー部分ではカマドに近い床面よりも５～10㎝高く段差がついている。一段高い部分は礫層を直に床面としているが，低位の床面では部分的に茶褐色砂質土を投入し貼り床としている。

カマドは煙道部が残存しているのみである。幅約30㎝，残存長144㎝を測り，先端部は煙道底面を７㎝程度掘り下げている。煙道の中央を通る軸線は，北壁の延長線に直交する線を基準とすれば東に11度傾く。

ピットは北壁沿いに２個検出された。P_1は北壁を掘り込んでいるもので，長辺32㎝，短辺22㎝の平面長方形を呈し，深さは約60㎝を測る。壁際で径約10㎝の柱痕を確認した。掘形内には青灰色粘土と黒色砂質土をたたき込んでいる。P_2は北東コーナー部で北壁に近接した住居跡外から検出された。径16㎝，深



第４図　２号住居跡



第５図　２号住居跡出土土師器

さ16cmを測り，黒褐色砂質土を埋土としている。

遺　　物（第５図，図版26）

遺物は，堆積土内，床面上，貼り床内，煙道内部からそれぞれ検出されている。すべて土師器で器種は杯と甕のみ，そのうち図化できたのは４点である。

土師器杯　すべてロクロ成形で，黒色処理されるものである。底部の切り離し技法が観察できるものは，その後の調整によって１点もない。外面の調整は底部全面から体部上半を全面回転ヘラケズリしている。特に２住１は体部の調整幅が広い。内面調整はヘラミガキされるのが通例であるが，底部のミガキ方向が２住１では一定方向を基本としている。他に底部の部位を含む破片は２住２を含め２点あるが，いずれも器面の荒れによってミガキ方向は不明である。

土師器甕　非ロクロ成形とロクロ成形のものが混在している。２住３と２住４はともに床面出土である。２住３は非ロクロ成形の比較的小振りな甕で，底部には木葉痕を残している。２住４はロクロ成形で長胴形になるものと思われる。成形の後体部外面下半を縦方向のケズリ，内面をナデ調整している。

ま　と　め

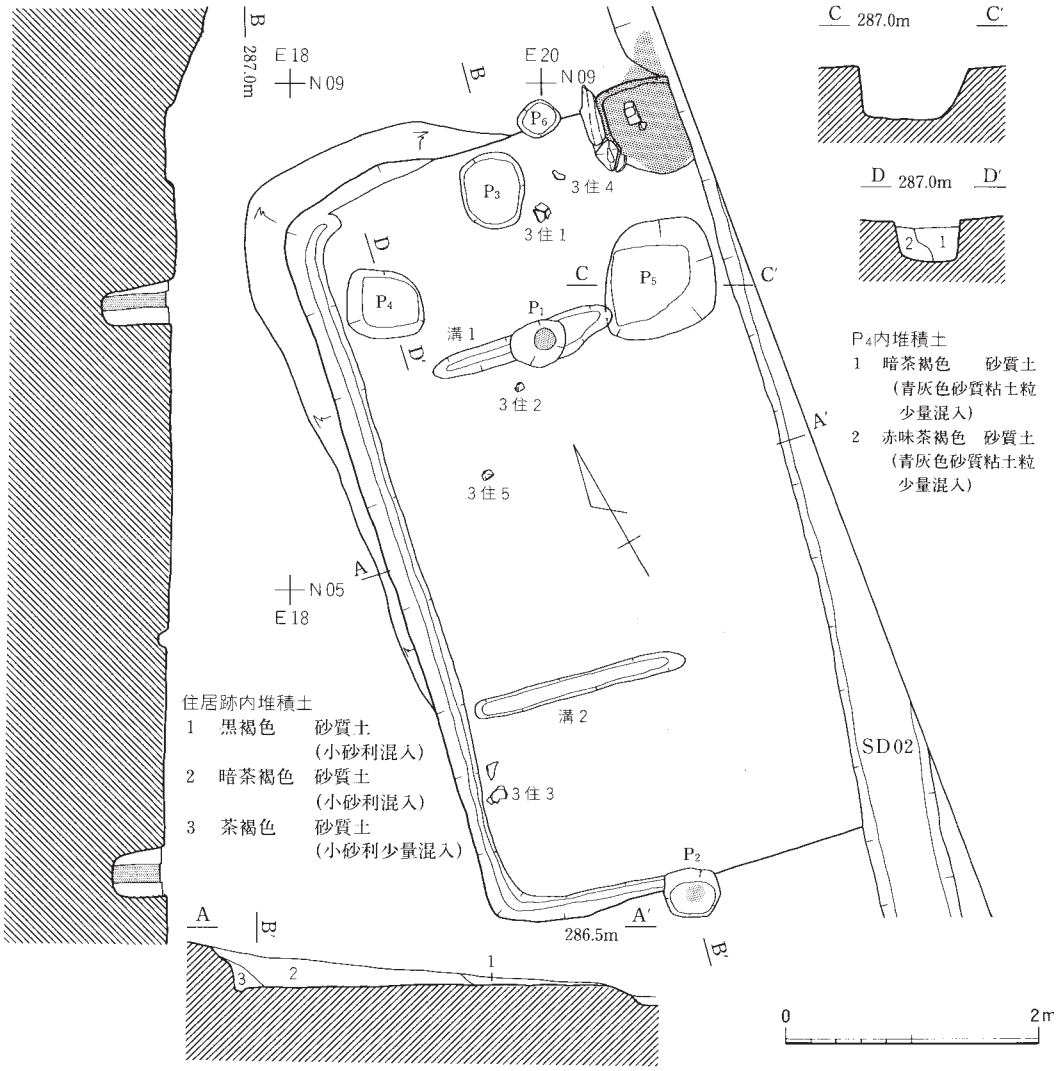
当住居跡は残存部が少なく構造等について不明な点が多い。北東コーナー部の台上の高まりも地盤が礫層であるという自然的条件に制約されたためなのか，意識して造り出した結果なのか，

ベッド状遺構と呼ぶには釈然としない面が多い。ただP_1はカマド両袖脇に取り付く柱穴のひとつと想定できる。時期は床面出土遺物の様相からロクロ土師器使用段階の前半代に置かれる。

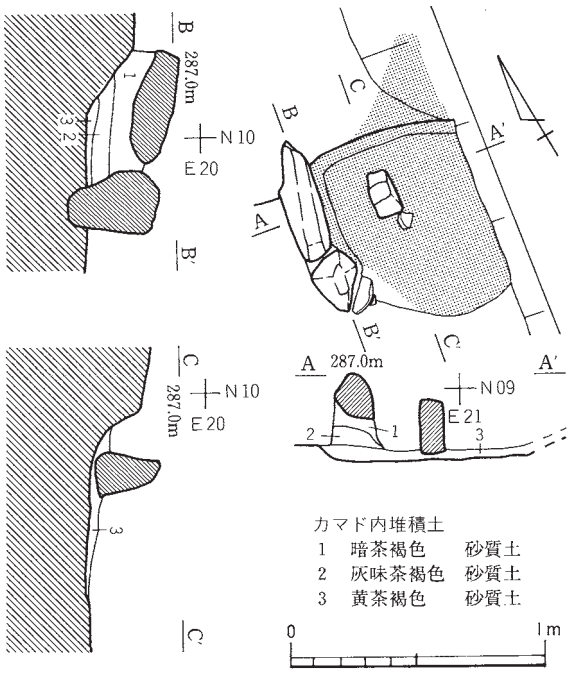
３号住居跡

遺　　構（第６・７図，図版４）

調査区東寄りＥ・Ｆ－２グリッドに検出された住居跡で，２号住居跡から北東に1.4mの地点にある。東側に生活道路があるため住居跡の西半を調査したに留まった。プランは残存している東壁から推定して6.2m前後の方形になるものと思われる。堆積土は小砂利を混入した暗茶褐色砂



第６図　３号住居跡



第７図　３号住居跡カマド

質土が主体である。

壁は北溝の西側から南壁の西寄りにかけて残存しており，その傾斜面は75度前後を測る。周溝は北西コーナーからP_2まで壁面直下を幅約14cm，深さ３～５cmで巡る。床面はほぼ平坦であるが住居跡自体が礫層を掘り込んで構築しているため，壁面同様礫層を直に床面としている。

カマドは北壁に設置されている。焚き口から燃焼部奥壁まで78cmを測り，燃焼部中央やや左寄りに花崗岩の支石を据えている。袖は左袖のみの検出で袖材は砂質土と長石とを併用しているが，心材は長石である。カマド袖および火床面下部には，深さ約５cmの掘り込み部分が検出された。埋土は黄褐色砂質土を使用し，その上面を火床面としている。また燃焼部奥壁から住居跡外にかけ焼土面が連続して確認されている。

ピットはP_1～P_6の６個が検出された。P_1とP_2は径35～45cmの不整円形で，深さはP_1が57cm，P_2が42cmを測る。ともに10～15cmの柱痕を有し，周囲の埋土は小礫混じりの暗茶褐色土である。P_3はカマドと北東コーナーとの中間に検出された深さ６cmと浅い円形のピットである。埋土は花崗岩の風化粒子が混入した茶褐色砂質土である。P_4は北西コーナーに位置し，径50～60cm，深さ34cmを測る不整円形のピットである。埋土は小礫混じりの暗茶褐色土で多少花崗岩の風化土団粒を含んでいる。P_5はカマド前面やや西よりに検出されたピットで径87～93cmの不整円形を呈し深さ43cmを測る。埋土は小礫混じりの暗茶褐色土である。ピットの西側を後述する溝状の掘り込みによって切られている。P_6はカマド西脇に検出された径28cm程度の円形のピットで，床面からの深さは３cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。

これら内部施設の他に，床面上で溝状の掘り込みを２本（溝１・２）検出した。溝１は幅20cm，全長1.5mでP_1を跨いでいる。溝２は南西コーナー付近で検出され，幅16cm，全長1.7mを測る。相方とも周溝とは連続しておらず，溝の西端と周溝との間隔は溝１で55cm，溝２が６cmで床面からの深さは７～10cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土で多少小礫を混入している。

遺　　物（第８図，図版26）

遺物は，土師器杯・蓋・甕，須恵器甕が破片状態で出土している。多くは竪穴内に埋土が堆積

する段階で流入した遺物で，直接遺構に伴う遺物は少なく図化できなかったものも含め土師器杯５個体分，土師器甕破片４点，須恵器甕破片３点を数えるのみである。

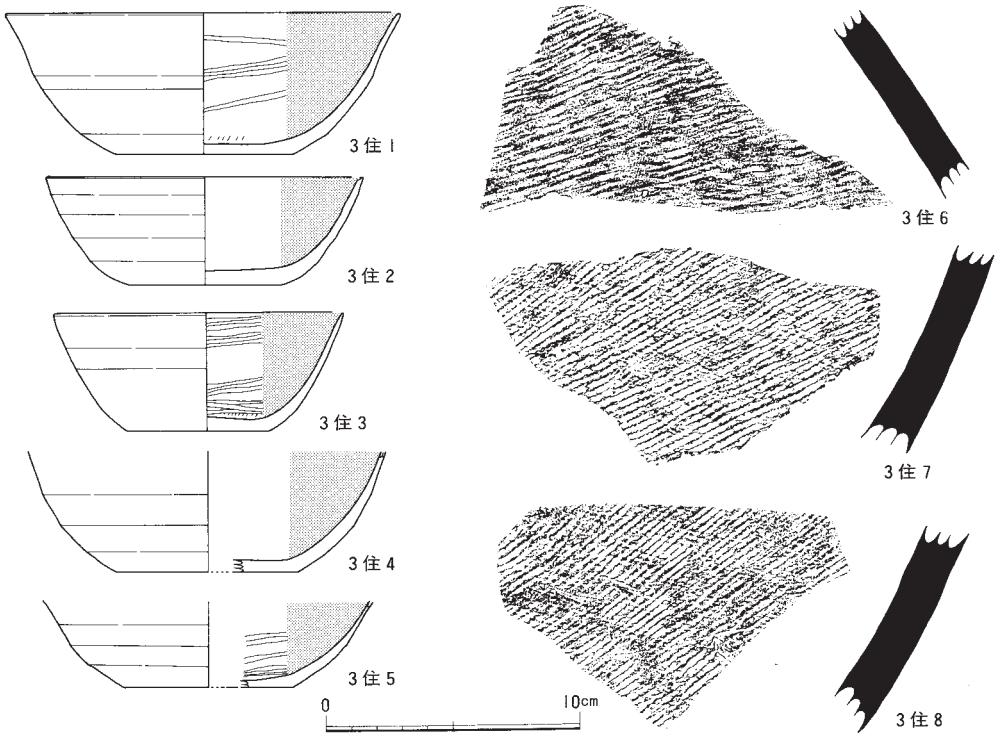
土師器杯　図化できたもののうち３住４・３住５は堆積土第２層目からの出土である。遺構に伴うと思われる杯については，大きさの点で３住１・２のように口径が15～16cmを測るやや大振りのものと，３住３のように口径が11cm前後のものとがある。外面の器面調整は，観察困難な３住４を除いてすべて回転ヘラケズリ調整を加えている。内面はヘラミガキ，黒色処理されるがカマド内出土の底部破片では再酸化のためか黒色が消失している。内面ヘラミガキ方向は一定方向（３住３）と，放射状（カマド内出土破片）のものが混在している。

土師器甕　口縁部破片２点，頸部直下の破片２点，計４点である。すべてロクロ成形で，口唇端部両側縁は明瞭な稜線がつくられるものである。

須恵器甕　いずれも胴部破片で15cm程度のものである。器厚は１～1.6cmで，内面は磨消されているが，外面では平行タタキ目が残る。

ま　と　め

当住居跡は西半分のみの調査で全貌を明らかにすることはできなかった。しかしながら柱穴構造についてはある程度折り返して想定できると思われる。検出されたピットの中で柱穴と考えられ



第８図　３号住居跡出土土師器・須恵器

るものは柱痕の確認できたP_1・P_2があげられる。恐らくは住居跡の東半においても対になる柱穴があると思われ４本柱の構造と思われる。ただP_2は南壁沿いに取り付くもので，一般的にみられる対角線上に配置される柱穴構造とは多少上屋構造が異なると想定される。またP_6は上部が削平されピットの底面しか残存していないが，その規模や位置から推定すれば２号住居跡P_1と同じくカマド袖両脇に取り付く柱穴のひとつと考えられる。

P_3・P_4は溝１・２ともに住居使用最終時には開口していた可能性がある。P_5については溝１に上部を幾分掘り込まれており，最終時にはすでに閉塞していたと考えられる。P_3・P_4の機能は貯蔵穴の類と思われる。溝１・２は間仕切り的な要素が強い。

住居跡の時期は，床面および床面直上から出土した遺物の特徴からロクロ土師器使用段階でも前半代としてとらえられる。

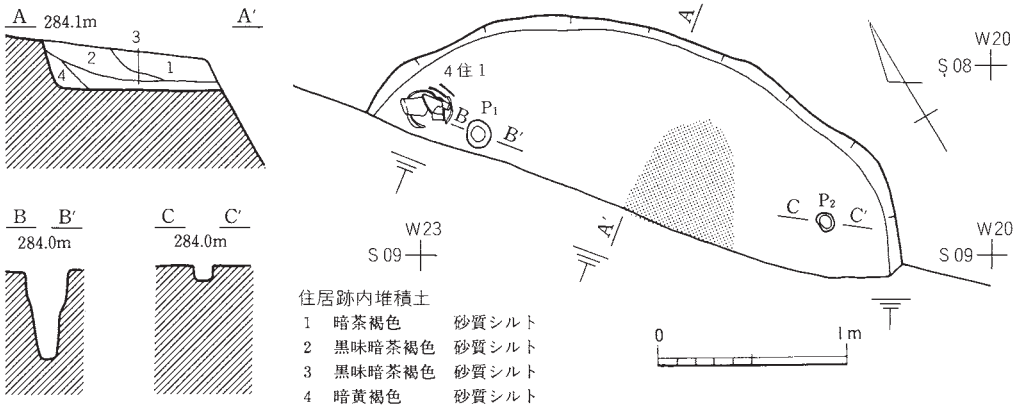
４号住居跡

遺　　構（第９・10図，図版５・６）

調査区南西部Ａ－３グリッドに検出された住居跡である。この住居跡も１・２号住居跡同様調査区の南縁にあり大半が削り取られている。プランは，北側から東側にかかる残存部から想定して直径3.5m前後の円形になるものと思われる。堆積土は，暗茶褐色微砂質土が流入している。

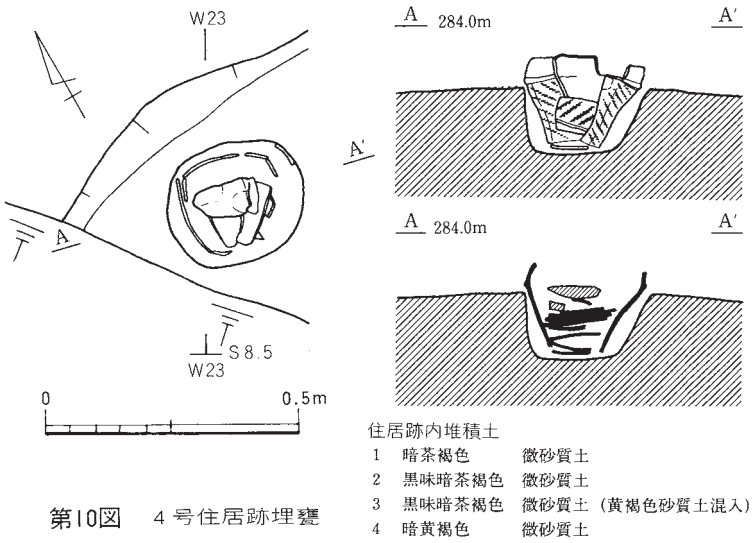
壁面は，70～75度の傾斜角で立ち上がり，最大残存高は20cmを測る。床面は地山砂質土を直に床としほぼ平坦であるが，西側では珪石の岩脈を一部掘り込んでいるため床面の凹凸が激しい。炉本体は確認できなかったが，炉の周縁部と思われる焼土面が検出されている。

ピットは３個検出されている。P_1は西側に位置するピットである。径12～13cmの円形で床面からの深さ48cmを測る。P_2は東側に位置している。径10cm弱，深さ８cmとP_1に較べ小さく浅い。P_3はP_1と西側壁との中間に位置する埋甕の掘形で珪長石の岩脈を掘り込んでいる。直径



第９図　４号住居跡

24～28cmのやや不正の円形で，深さ13cmを測る。この掘形内には埋甕として，深鉢形の縄文土器を打ち割り胴部上半から口縁部までを外枠とし，内部に残片を，残片上部には10～12cmの扁平な花崗岩と長石とを平積みとしている。



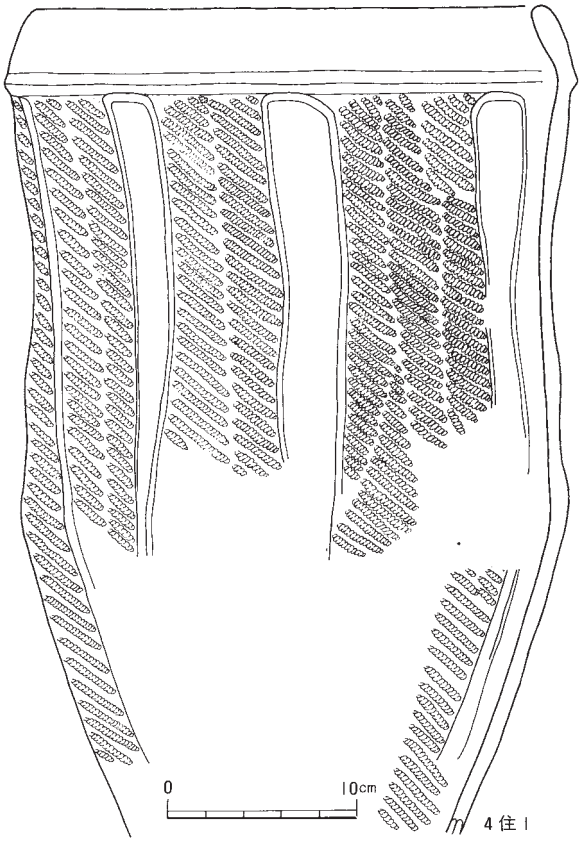
第10図　４号住居跡埋甕

遺　　物

（第11図，図版26）

遺物の出土量は極めて少なく，堆積土内から３片と遺構に直接伴うと考えられる深鉢形土器を埋甕として使用したもの１個体分である。

深　　鉢　埋甕として使用した平縁の土器で復元の結果，口縁から胴部下半にかかる部位の約⅓と，胴部下端から底部全面を欠損していることが判明した。口径30.2cm，現存高43.6cmを測る。胴部半ばに緩やかな括れがあり，括れから口縁にかけては，僅かに内彎しながら外傾する。文様は口縁部が無文，口縁下位には貼り付けによる隆帯が横位に巡っている。胴部は隆帯直下から胴部下半にかけ沈線で区画した細長い無文帯を縦位に垂下させている。数条垂下する無文帯間には２段の縄ＬＲを主に縦方向に回転させ地文として充填している。



第11図　４号住居跡出土縄文土器

ま　と　め

当住居跡の時期は，伴出した深鉢の特徴から縄文時代中期後半と考えられる。住居跡の構造は不明な点が多い。検出さ

れた２個のピットは柱穴と思われるが，P_2に関してはP_1に比較し深さの点で断定できないところがある。埋甕は，土器片と石とを内容物としているが，土器片が密着している上部に対し下部には多少の隙間があるため，他の内容物が入り込んでいた可能性も捨て切れない。

５号住居跡

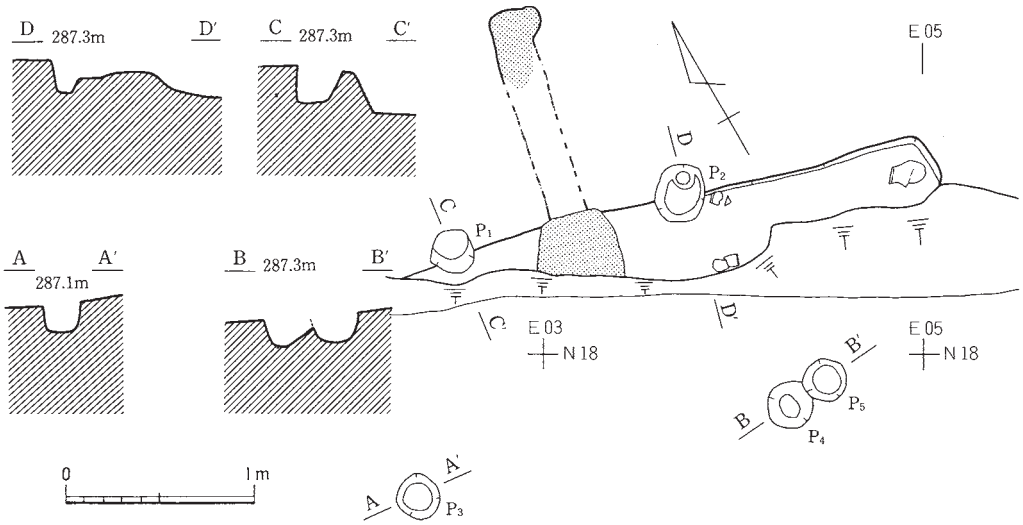
遺　　構（第12図）

調査区中央やや北東寄りＤ－１グリッドから検出された住居跡である。上部の削平が甚だしく住居跡の北辺の一部とピットを検出したにすぎない。プランは北東コーナーの残存状況からして方形に近い形態と思われるが，規模は不明である。堆積土も茶褐色砂質土が薄く堆積しているのみであり，恐らく自然堆積と思われるが断定は困難である。

壁は北壁の東半から北東コーナーにかけ残存しており，高さは僅か５cm程度である。床面は地山の黄褐色土を直に床面としている。北壁の延長線に直交する軸線はN－15°－Eの傾きである。

カマドは，北壁に設置されている。燃焼部火床面が検出されたのみで，袖部等はすでに失われている。燃焼部奥壁は住居跡北壁を幾分抉り込んで作られている。カマドの北側住居跡外に35×20cmの範囲で焼土が確認されたが，これは煙道先端部の窪みが残存したものとみられる。

ピットは，P_1～P_5まで総数５個検出されている。P_1・P_2はカマドを挟んで北壁に取り付いている。P_1は径24cm，深さ20cm，P_2は径30cm，深さ25cmを測る。P_3はカマド前西側に位置しているピットで，径24cm，深さ16cmである。P_4・P_5はカマド前面東側に検出されたピットで重複関係にあるが，前後関係は僅かの切り合いで断定できない。P_4は径23cm，深さ16cm。P_5は径24cm，深さ14cmを測る。



第12図　５号住居跡

遺　　物

床面上に土師器甕の破片が北西コーナー部とP_2付近とに散在していたのみである。

土師器甕　散布していた破片は同個体のもので，口縁部から胴部にかかる破片である。成形は粘土紐の積み上げによる。口縁部は短かく若干外反するものの直立に近い立ち上がりを示す。口唇端部は薄い。胴部は丸味をもって膨らむもので大振りの甕になるものと思われる。器面の調整は，剝落が著しく不明な点が多いが，胴部外面では僅かにハケメ調整されていることが窺われる。

ま　と　め

当住居跡に伴出した遺物は前述した土師器甕のみである。このため時期を限定するには甚だ無理な点が多い。ここでは上記の特徴を有す甕が使用される国分寺下層式期から表杉ノ入式期の前半代の広い幅を当住居跡の時期として捉えておきたい。住居跡の構造も不明な点が多いが，恐らくカマド両脇に支柱をもつ４本柱の構造で，P_4・P_5の重複から建て替えの可能性も考えられる。

６号住居跡

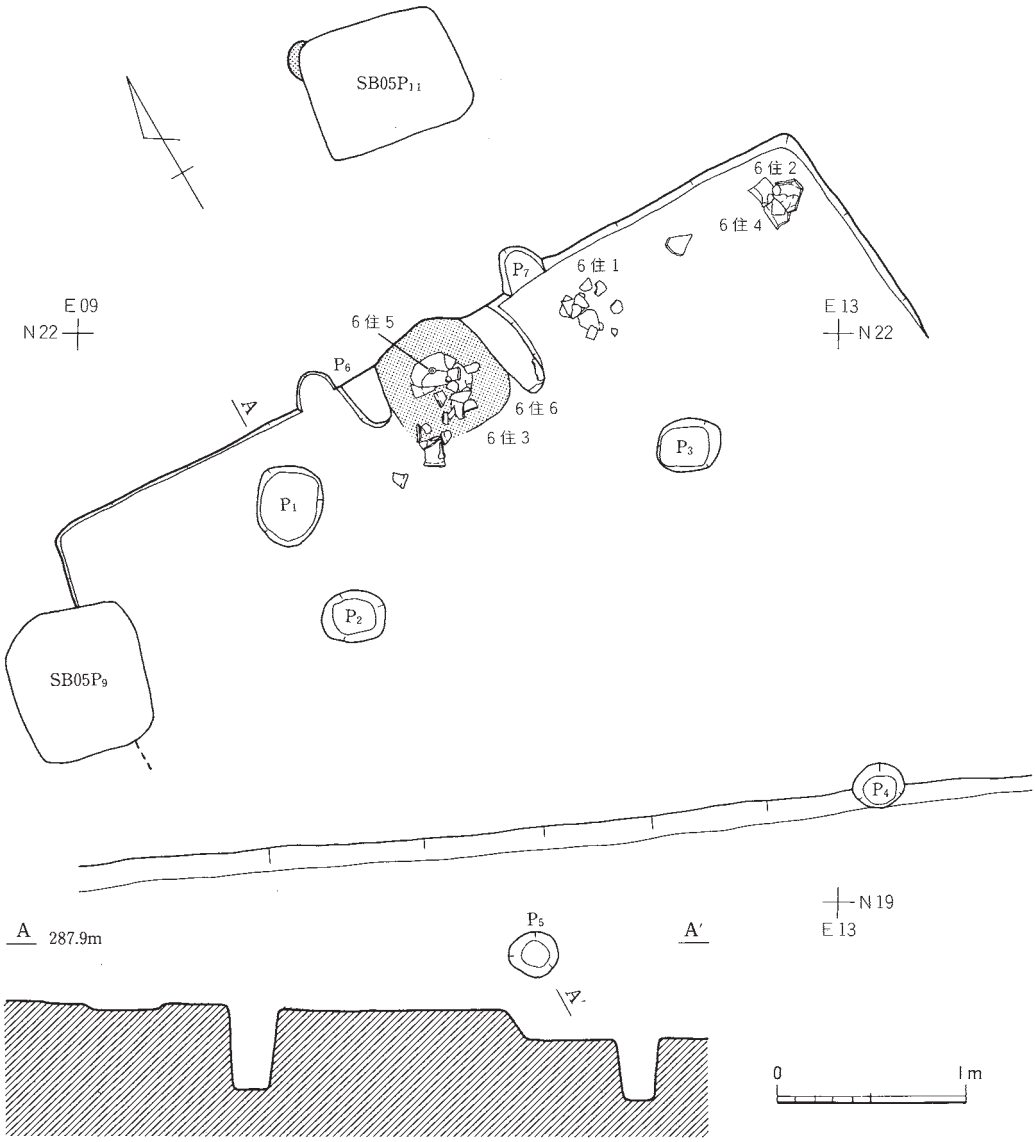
遺　　構（第13図，図版７・８）

調査区北東寄りＤ・Ｅ－０・１グリッドに検出された住居跡で，重複関係にある５号建物跡よりも古い。他の住居跡同様上部の削平が著しい。プランは残存している北壁から推定すれば4.5m前後の方形と思われる。堆積土は最下層のみの残存と思われ黄茶褐色砂質土単一層である。

壁は，北西コーナーから北東コーナーにかけ残存し，最大高13cmを測る。床面は，３号住居跡同様礫層を直に床面としている。

カマドは，北壁のほぼ中央に設置されている。燃焼部は焚き口幅60cm，焚き口から奥壁まで64cmを測る。焚き口の前面には15cm程度の幅で木炭・焼土の散布がみられた。袖は幅20cm，長さ55cmで北壁に取り付いているが，左袖は半欠している。袖材は黄茶褐色砂質土を使用し，左袖先端部には土師器甕口縁部を補強材として用いている。燃焼部奥壁から北に1.5m隔たった地点には，５号建物跡P_{11}に切られた煙道先端部が確認された。

ピットは，総数７個（P_1～P_7）検出された。P_1はカマド西側に検出されたピットで東西径35cm，南北径43cmを測るやや楕円形を呈している。深さは４cmと浅く壁面は多少緩やかに立ち上がっている。堆積土は木炭粒を混入した茶褐色砂質土である。P_2～P_5は主柱穴と考えられるピットで径24～35cmの不整円形を呈し，床面からの深さはP_2で43cm，P_3で50cmを計測する。床面が削平されているP_4・P_5についても，各々38cm・32cmを測り，底面のレベルはP_2・P_3とほぼ同様のものとなる。各主柱穴間の間隔は２m前後とほぼ共通している。P_6・P_7はカマド袖両脇に検出されたピットで，北壁を抉り込んで設置している。径20cm強であるが，床面からの深さは１～２cmと極めて浅い。カマド上屋の支柱穴と思われる。



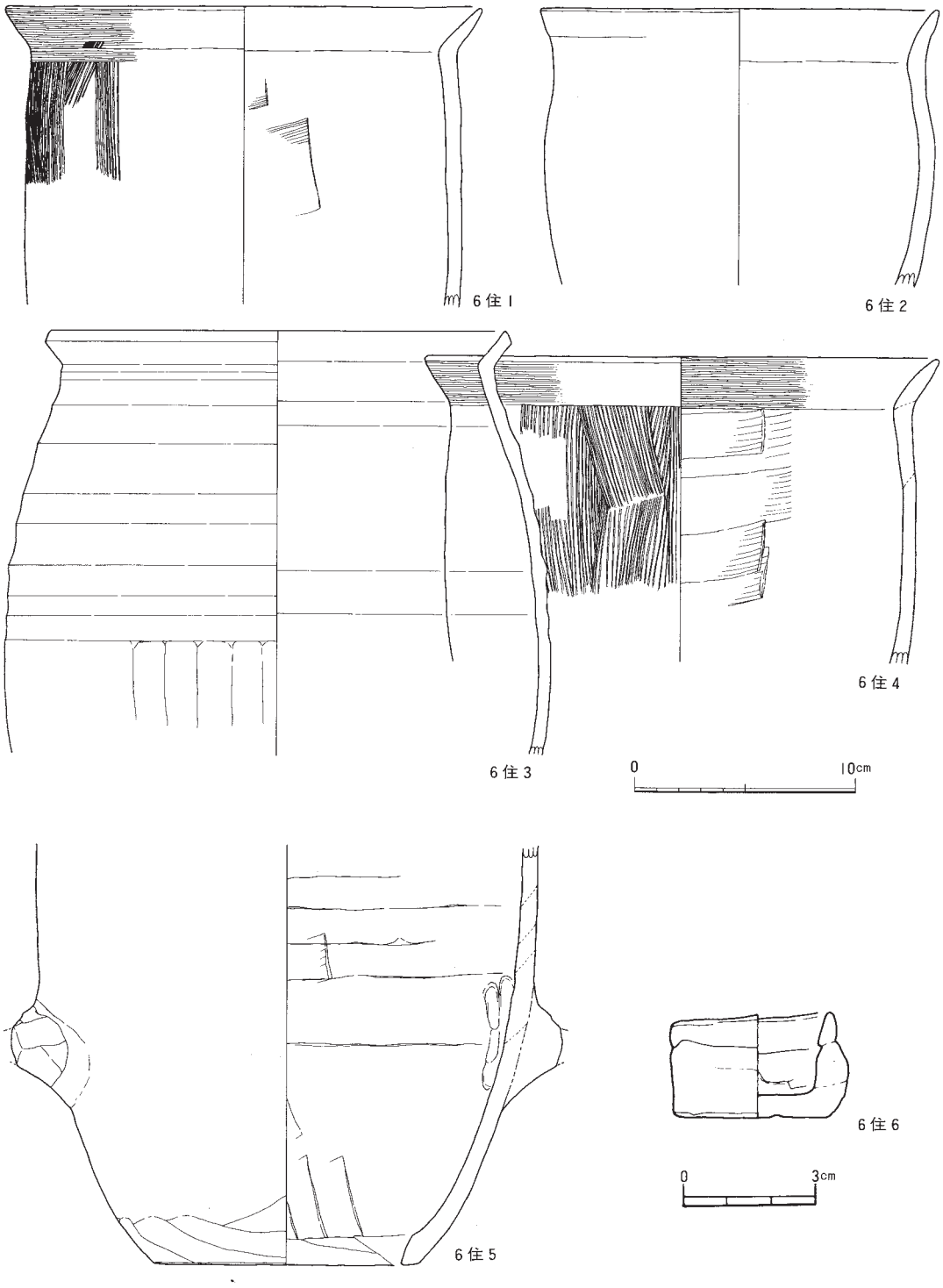
第13図　６号住居跡

遺　　物（第14図，図版26）

遺構に伴う遺物は，カマド内から土師器甕・甑，小型手捏土器が，カマドから北東コーナーにかけて土師器甕，P_4内から土師器杯・甕の小破片がそれぞれ検出されている。

土師器杯　P_4内から検出されたロクロ成形の杯である。口縁部の小破片で，内面はヘラミガキ黒色処理されている。

土師器甕　非ロクロ成形のものと，ロクロ成形のものとが混在している。非ロクロ成形甕の調整は，器面の摩滅によって観察困難な６住２を除けば，外面は口縁部ヨコナデ，胴部がハケメ，



第14図　６号住居跡出土土師器

内面では口縁部ヨコナデ，胴部がヘラナデされる。器形的には，胴部が若干膨らみ加減で，口縁部は外傾して開くものが多いが６住１のように胴部が膨らまないものも含まれる。ロクロ成形の甕は６住３の１点のみである。口唇端部に明瞭な稜がつくられるタイプで，最大径を胴部半ばにもつ。体部外面下半は縦位の手持ちヘラケズリによって調整されている。

土師器甑　胴部の半ばから下端にかけ遺存している無底式把手付きの甑（６住５）１個体分である。底部孔内径は10㎝強と推定され，現存高は19㎝を測る。成形は粘土紐の積み上げによる。外面の調整は，胴部全般をナデ，下端を手持ちヘラケズリ，内面ではヘラナデおよび下端のみ手持ヘラケズリしている。把手は胴部成形ののち貼り付け，表面を幾分削り調整している。貼り付けの際，指頭によると思われる痕跡が内面で観察される。

小型手捏土器　上記した把手付甑の直上から検出された土器である。成形は粘土紐の積み上げによるもので厳密な意味での手捏土器の範疇には入らぬかもしれぬが，ここでは形態上の特徴から手捏土器として扱っておく。平底の底部から体部は垂直に立ち上がっている。体部の器肉は下端で７㎜前後あるが，口唇部付近では２～３㎜と極端に薄くなっている。

ま　と　め

当住居跡の時期は，伴出遺物からロクロ土師器使用段階に入っているが，出土量が多い甕では非ロクロ成形のものが圧倒的に多く，ロクロ土師器の段階でも比較的早い時期におかれると考えられる。住居跡の構造は，３号住居跡と共通した面が多いが，主柱穴の配置は，壁長と各柱間間隔とを対比した場合，住居跡の対角線上に主柱穴が配置される構造と想定される。

第２節　掘立柱建物跡

総数９棟検出された。１間×２間が１棟，２間×２間が１棟，２間×３間が２棟，３間×３間が１棟，不明４棟である。この他にも建物跡として組み合わない柱穴もあり，削平の度合からみてすでに失われた建物跡もあったものと思われる。

１号建物跡（第15図，図版９）

調査区南西側Ｂ－３グリッドにて検出された建物跡である。北西側では削平が著しく西側柱列北側の柱穴が検出されなかったが，東側柱列で２間以上北に延びず，恐らく東西１間×南北２間の建物であったと推定される。

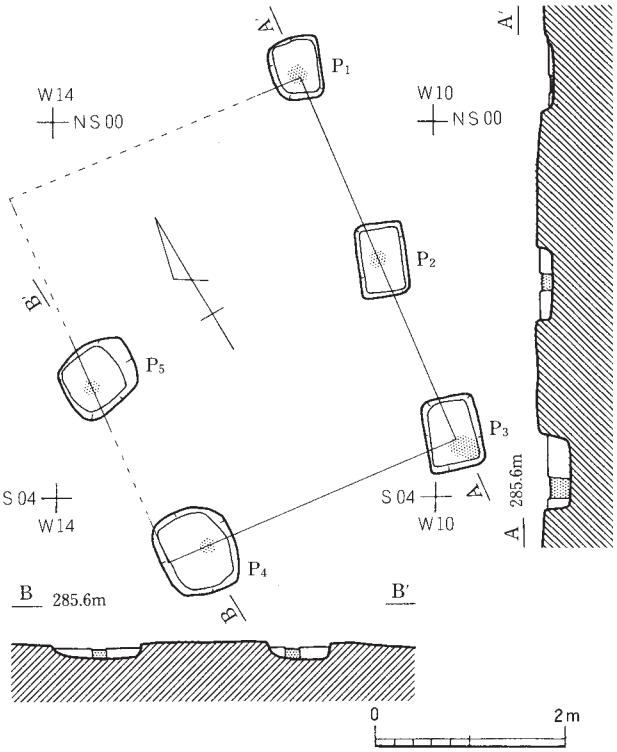
掘形は，長辺70～80㎝，短辺50～70㎝の方形ないし不整方形であるが，P_4のみは他の掘形に比較し一回大きく，形状もやや円形に近くなる。壁は礫層を掘り込んでいるため多少乱れてはいるが，垂直に近い角度で立ち上がっている。埋土は小礫を混入した暗茶褐色土である。

柱痕は，すべての柱穴で確認された。P_1・P_2・P_4・P_5では20cm弱であるが，P_3では25cmと多少太目になる。各柱間間隔は，東側柱列北から2.1＋2.1m，東側柱列と西側柱列との間隔はP_2・P_5間で3.3mを測る。東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはN－7°－Eである。

当建物跡からの出土遺物はない。

２号建物跡（第16図，図版10）

調査区南半Ｃ・Ｄ－２・３グリッドにて検出された建物跡で，重複関係にある３・４号建物跡よりも新しい建物跡である。規模は２間×３間で東西長5.1m，南北長6.6mを測る南北棟である。南東隅の柱穴は削平されたものか失われている。



第15図　１号建物跡

掘形は一辺0.6～１mの方形ないし長方形を呈しているが，隅柱であるP_1・P_6・P_9は他の掘形に較べ大きくなっている。埋土は黄褐色土と茶褐色土との二者を入れたたきしめている。

柱痕はP_5を除きすべての掘形で確認された。柱痕の多くは径18～28cmの円形であるが，P_1・P_6・P_{10}では方形に近い形である。各柱間間隔は東側柱列北から2.0＋2.2m，西側柱列北から2.2＋2.1＋2.3m，北側柱列西から2.5＋2.6mを測る。西側柱列の柱痕を通る軸線の偏度はN－７°－Eである。

遺物は，掘形P_1・P_2・P_5・P_6・P_9から総数７片検出された。内訳は，縄文土器２片，弥生式土器２片，土師器と思われる破片３点で，いずれも細片である。この破片のなかで最も時代が下降する遺物は土師器であるが，甕の胴部破片で時期判断は困難である。

３号建物跡（第16図，図版10）

２号建物跡同様Ｃ・Ｄ－２・３グリッドに位置している。２号建物跡と重複関係にあり，当建物跡P_1が２号建物跡P_1に切られていることから２号建物跡より古い。南北棟の建物跡で東西２間×南北３間どまりと思われるが，南側柱列第２間目の掘形が検出されていないため，３間以上の建物跡になる可能性もないわけではない。この他東側柱列では北から第２・４間目が削平のた

め，西側柱列では北から第２間目の柱穴が２号建物跡 P_9内に取り込まれているため，それぞれ検出されていない。

掘形は，一辺60～70cmの方形のものが多い。深さは削平の度合いによって様々であるが，西側柱列に較べ北側柱列のほうが残り具合いがよく，P_1では30cmを測る。埋土は，黒褐色と黄褐色の微砂質土を入れたたきしめている。

柱痕は，検出された掘形すべてに確認されている。径15cm前後の円形のものが多いが，P_1のみは方形に近い形である。各柱痕の並びは不規則で一直線上に乗らない柱痕が多い。西側柱列の南北両端の柱痕の中点を結ぶ軸線の偏度はＮ－29°－Ｅである。

遺物は，P_1・P_2・P_6から総数９片検出されている。縄文土器４片，弥生式土器１片，土師器４片を数える。土師器にはロクロ成形の杯破片がみられる。この破片は底部周縁の破片で外面調整は不明であるが，内面は一定方向のヘラミガキ・黒色処理されている。一応当建物跡の時期の上限を示す資料と思われる。

４号建物跡（第16図，図版10）

Ｄ－２グリッドに検出された建物跡で，２号建物跡 P_1が当建物跡 P_1を切っており当建物跡が２号建物跡よりも古い建物跡であることがわかる。検出された掘形は，建物の北東コーナーを形づくる３個(P_1～P_3)のみで，全体の規模は不明である。

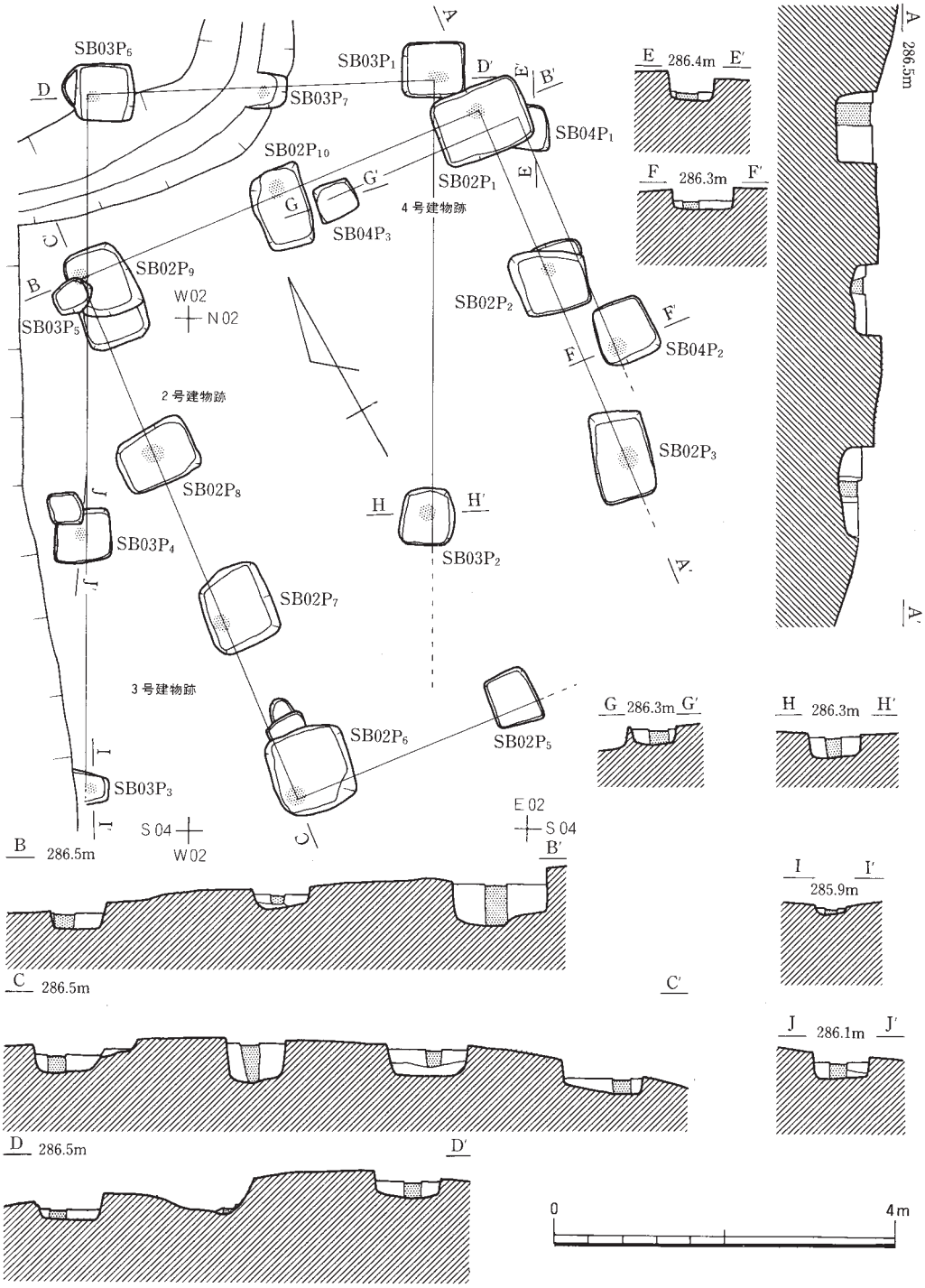
各掘形は，一辺45～70cmの方形に近い形状をとる。柱痕は P_2・P_3で検出された。径15～20cmを測る。柱痕周囲の詰め土には黒褐色砂質土を使用している。柱間は，P_1で柱痕が検出されなかったため判然としないが，P_1～P_2間では約３ｍ，P_1～P_3間では2.4ｍ程度と想定される。当建物跡からの出土遺物はない。

５号建物跡（第17図，図版11・13）

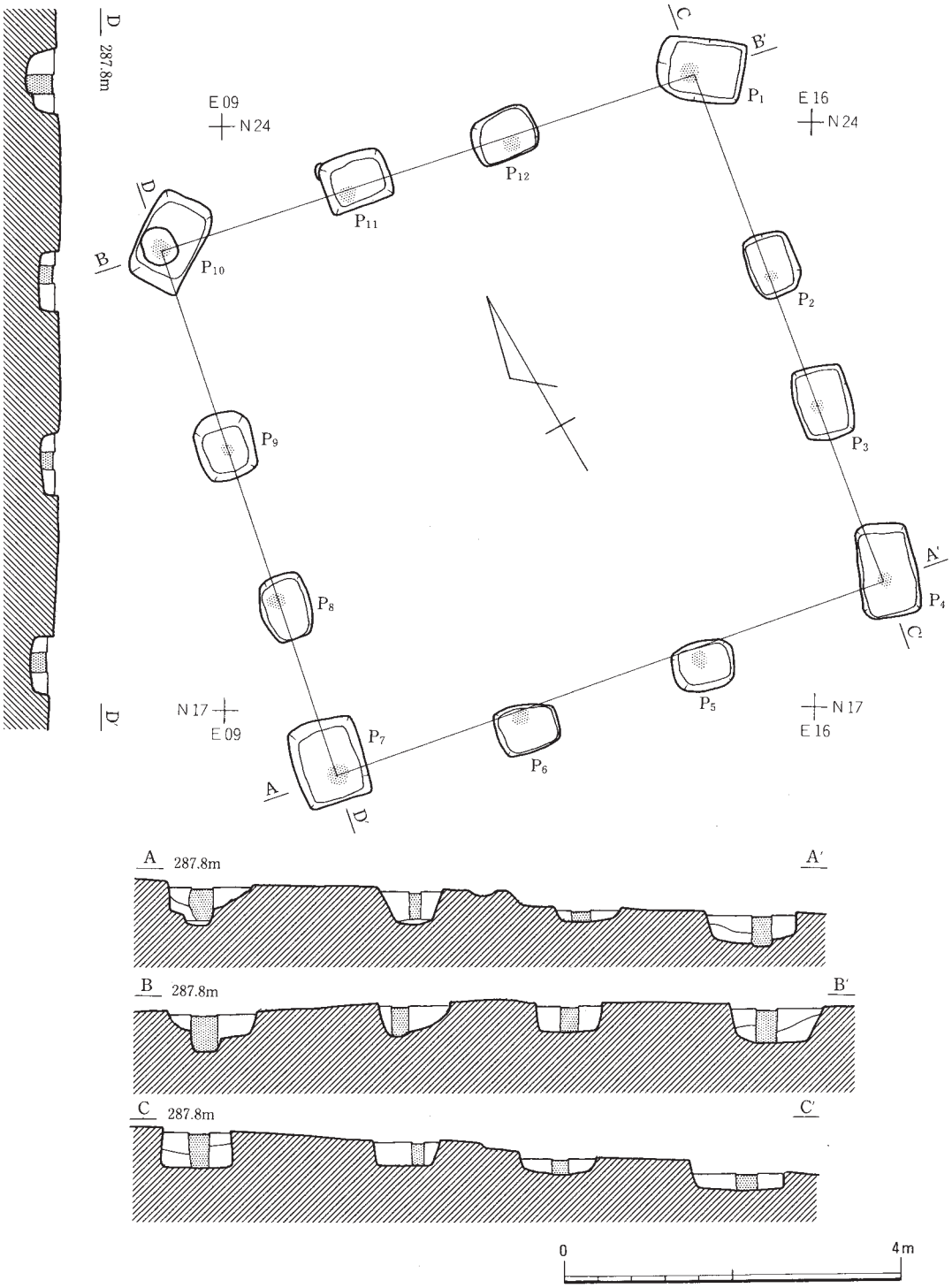
調査区東側Ｄ・Ｅ－０・１グリッドで検出された東西３間×南北３間の建物跡である。掘形 P_9が６号住居跡西壁を切っていることから６号住居跡よりも新しい時期の建物跡であることがわかる。プランは，東西長6.7ｍ，南北長6.6ｍのほぼ方形を呈し，西側柱列の柱痕を通る軸線の偏度はＮ－11°－Ｅである。

掘形は，長辺80cm，短辺60cm程度の長方形ないし方形に近い形状を呈しているが，各隅柱は他の柱穴に比較し10～20cm大きくなっている。

柱痕はすべての掘形で検出されている。径20cm程度の円形のものが多いが，なかに P_7・P_8のように方形に近いものもある。そして掘形の大きさに比例してかやはり隅柱の柱痕が他の柱痕よりもやや太目となっている。柱痕の並びは，南を除く３辺の柱列では一直線上にほぼ通るが，



第16図　２・３・４号建物跡


D
287.8m
E 09
N 24
E 16
N 24
C
B'
P1
P12
P11
D
B
P10
P2
P3
P9
A'
P4
C'
P8
P5
N 17
E 09
N 17
E 16
D'
P7
P6
A
D'
A 287.8m
A'
B 287.8m
B'
C 287.8m
C'
0
4m

第17図　５号建物跡

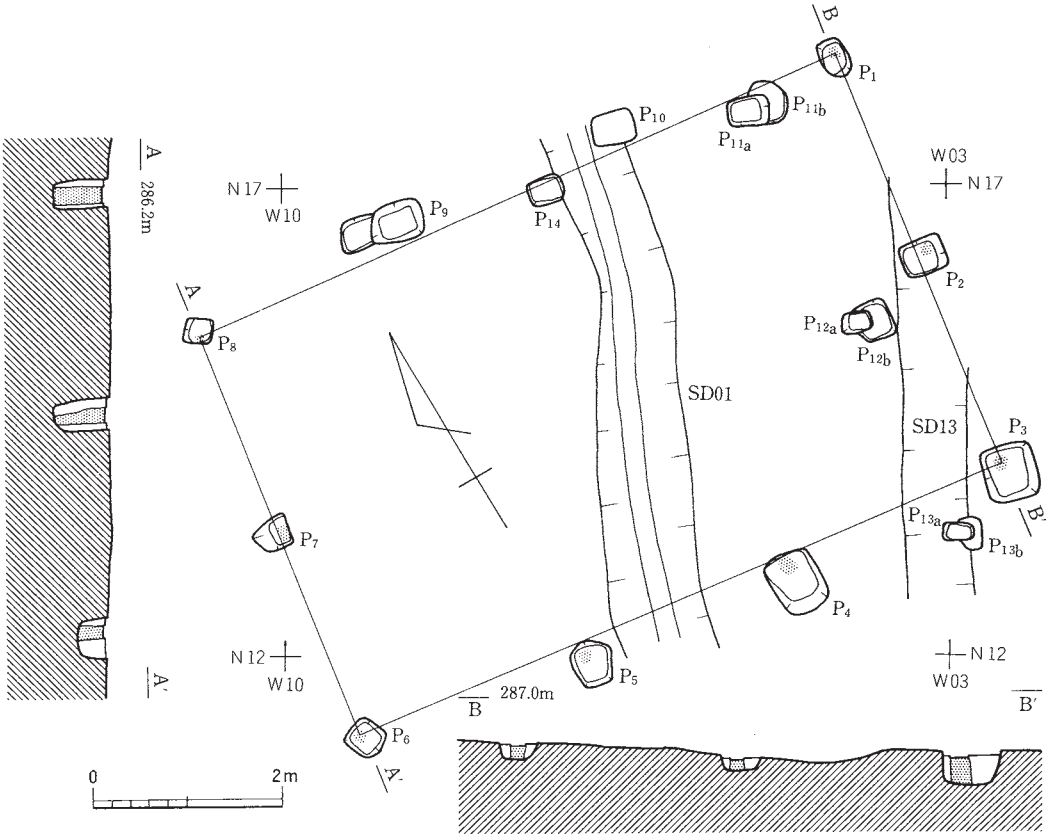
南側柱列でのP_5・P_6は東西の隅柱の柱痕を結ぶ軸線から若干南にずれている。柱痕の埋土の上部には，焼土粒の混入が多くみられた。

各柱間間隔は，北側柱列北から2.52＋1.98＋2.14m，東側柱列北から2.6＋1.68＋2.32m，南側柱列西から2.28＋2.24＋2.4m，西側柱列北から2.52＋1.98＋2.14mである。これら柱痕の間隔は一律でなく，特に南側柱列を除く他の３柱列の中央の柱間は両側に比較し短かくなっている。

遺物は，P_1・P_3・P_8・P_9・P_{10}で，縄文土器１片，土師器６片，須恵器２片のいずれも細片が検出された。土師器のなかには，内面黒色処理されたロクロ土師器杯の破片が含まれている。

６号建物跡（第18図，図版12）

調査区中央やや北西寄りＢ・Ｃ－１グリッドに出された建物跡で，東西３間×南北２間の東西棟である。規模は東西7.5m，南北4.5m程度で，西側柱列の柱痕を通る軸線の偏度はＮ－７°－Ｅである。この建物跡の西側柱列では，調査区南西側から北方向へ入り込む小規模な埋没谷に堆積した黒色土を掘り込んでいることが確認されている。



第18図　６号建物跡

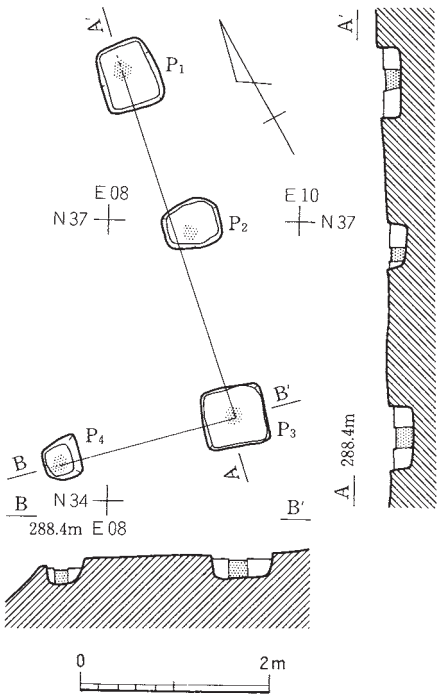
掘形は，一辺50cm内におさまる不整方形であるが，P_4のみは最大長70cmを測るやや大きいものである。検出面から掘形底面までの深さは，斜面下位にあるP_7・P_8では50～80cmを測るが，他の掘形は40cm以内と比較的浅い。埋土は，橙黄色ないし黄白色の粘土団粒を混入させた黒褐色砂質土を多用している。

柱痕は，北側柱列柱穴P_9・P_{10}を除く柱穴で確認された。径10～15cmと他の建物跡よりも細いものが多い。柱痕が直線上に並ぶのは西側柱列１本のみで，他の柱列では不規則である。

各柱間間隔は，東側柱列北から2.3＋2.4m，南側柱列西から2.5＋2.4＋2.5m，西側柱列北から2.3＋2.2mを測る。北側柱列ではP_9・P_{10}で柱痕が確認されておらず確実な数値は出せないが，西からほぼ2.4＋2.5＋2.5m程度と推定できる。

これら２間×３間の建物跡を構成する柱穴の他に，柱穴と思われるピットが４個検出されている。P_{11}～P_{13}は東側柱列から60～80cm西側に並び，掘形は一辺20～40cmの長方形を呈している。柱痕は３個とも確認され径15～20cmを測る。柱痕を結ぶ軸線の偏度はＮ－５°－Ｅである。各柱穴P_{11a}～P_{13a}には，より古い掘形P_{11b}～P_{13b}がとりついているが，恐らく柱の据え替えがあったものと思われる。P_{14}は，P_{11}～P_{13}からはずれ北側柱列P_9とP_{10}との間やや南よりに位置している。柱痕は確認されなかった。

P_{11}～P_{13}は，一直線上に並びＤ－101グリッドに検出された柱列と同様の性格のものか，P_{14}も含め，建物跡自体の建て替えによるものなのか定かではない。



第19図　７号建物跡

遺物は，掘形P_1・P_{10}内から土師器甕破片５点，須恵器杯破片２点が出土している。甕破片のなかには内面黒色処理されたものも含まれている。いずれも細片で建物跡の時期を限定する資料とはなり難い。

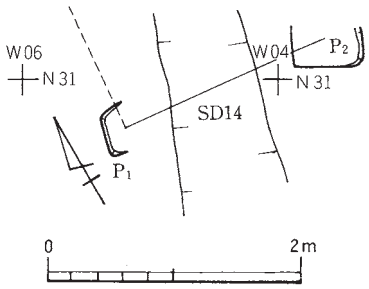
７号建物跡（第19図，図版14）

調査区北東隅Ｄ－101グリッドに検出された建物跡である。確認された掘形は４個で建物跡の南東部を構成するものと思われるが，北側では調査区外に，西側では一時水田として利用された部分によって削られ全貌は明らかではない。

掘形は，P_1・P_3は一辺60～70cmの方形であるが，P_2・P_4では一辺40～60cmと小振りになる。埋土には黄褐色粘質土を混入した黒色砂質土を使用している。

柱痕は太さ15～20cmで，P_1・P_2では円，P_3・P_4では方形に近い形である。各柱間間隔は，東側柱列北から1.86＋2.0m，南側柱列では1.92mである。

当建物跡からの出土遺物はない。



第20図　８号建物跡

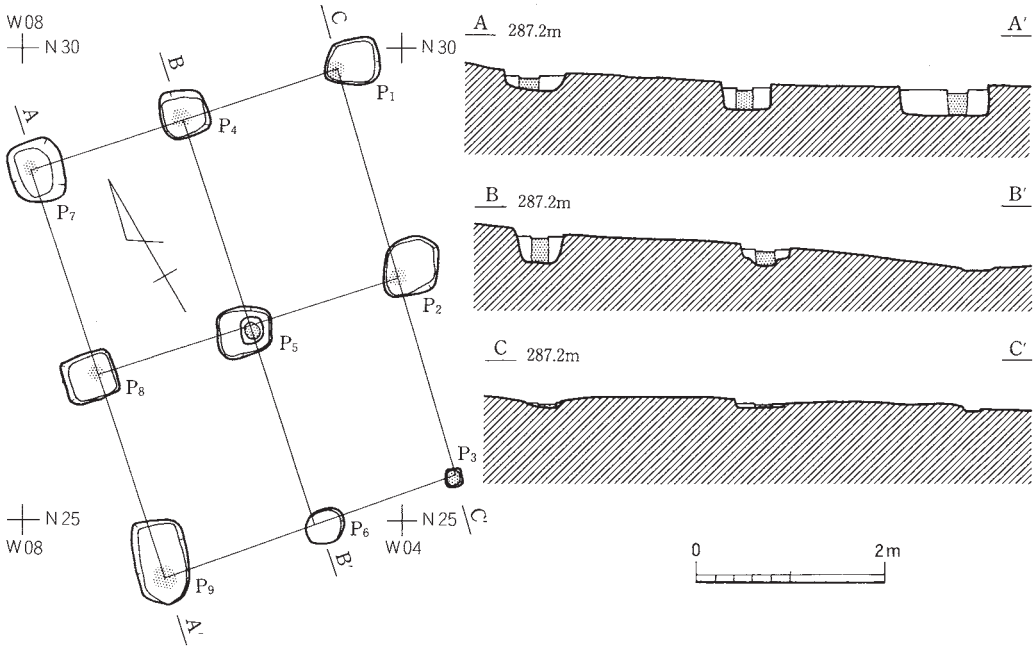
８号建物跡（第20図）

調査区北側Ｃ－101グリッドに検出された建物跡で，９号建物跡の北東に隣接している。掘形は南側柱列の西側部分にあたると思われる２個のみの検出で，建物跡の規模等は，調査区外へプランが延びるものと想定され不明である。

P_1は掘形の西半が検出されたのみで，すでに東半は削平をうけ消失している。P_2も掘形の北半が調査区外に隠れてしまうため全体が明らかでない。深さは双方とも10cm程度で，埋土は黒褐色砂質土を使用している。共に柱痕の確認はなく，遺物も皆無である。

９号建物跡（第21図，図版15）

調査区北側Ｃ－０グリッドに検出された建物跡で，２間×２間の総柱の柱構造である。規模は東西3.4m，南北4.5mを測り，やや南北に長い。西側柱列の柱痕を通る軸線の偏度はＮ－11°－Ｅである。



第21図　９号建物跡

掘形は，一辺50～60cmの方形ないし不整方形が一般的であるが，P_9は長方形で，他の掘形に較べ南北辺が30～40cm長い。またP_3・P_6は上部の削平が著しく柱痕の部分かもしくは掘形の底面の一部が残存しているのみである。掘形内埋土は黒褐色砂質土を使用している。

柱痕はP_6を除くすべての掘形で確認されている。概ね15～20cmの太さであるが，掘形の大きいP_9では25cmと太くなっている。柱間間隔は東西で1.5～1.7m，南北で2.2～2.3mを測る。

遺物はP_5・P_8・P_9から土師器杯・甕破片が７片検出されている。このなかにはロクロ成形の杯破片３点と甕破片１点が含まれている。

第１表　掘立柱建物跡掘形・柱痕計測表

SB№	P№	掘形			柱痕		
		大きさ	深さ	平面形態	径	深さ	形状
1	1	54 × 68	12	方　形	20	2	円
	2	52 × 80	16	長方形	18	12	方　形
	3	60 × 80	28	方　形	22	20	楕　円
	4	80 × 90	14	楕　円	16	10	方　形
	5	80 × 70	20	不整方形	16	12	楕　円
2	1	110× 82	46	長方形	26	40	方　形
	2	82 × 78	30	方　形	20	16	円
	3	68 ×104	42	長方形	18	22	楕　円
	4	－	－	－	－	－	－
	5	54 × 64	14	方　形	－	－	－
	6	96 ×100	30	方　形	22	16	方　形
	7	80 × 96	34	方　形	22	28	円
	8	92 × 70	48	方　形	22	44	楕　円
	9	70 × 84	32	方　形	22	20	円
	10	64 × 94	24	方　形	18	10	方　形
3	1	72 × 64	32	方　形	20	16	長方形
	2	64 × 68	28	方　形	20	22	楕　円
	3	36 × －	12	不整方形	16	6	楕　円
	4	64 × 60	32	方　形	20	16	楕　円
	5	80 ×118	40	長方形			
	6	72 × 66	30	方　形	20	10	楕　円
	7	－ × 44	42		14	6	楕　円
4	1	－ × 52	32	方形？	－	－	－
	2	68 × 72	24	方　形	18	8	楕　円
	3	46 × 44	22	方　形	22	16	円
5	1	102× 76	50	方　形	24	42	円
	2	60 × 78	44	長方形	14	44	円
	3	66 × 88	18	長方形	24	12	方　形
	4	66 ×112	40	長方形	24	34	円
	5	72 × 60	20	不整方形	20	14	楕　円
	6	74 × 60	24	不整方形	22	16	楕　円
	7	84 ×102	38	長方形	22	32	方　形
	8	60 × 78	18	方　形	22	12	長方形
	9	70 × 80	44	方　形	14	30	方　形
	10	74 ×112	54	長方形	26	39	楕　円
	11	82 × 66	42	方　形	14	30	円
	12	80 × 58	34	方　形	20	30	楕　円
6	1	30 × 40	18	方　形	16	14	円
	2	48 × 38	18	方　形	16	12	楕　円
	3	58 × 60	38	方　形	20	28	円
	4	52 × 68	42	方　形	18	34	楕　円
	5	46 × 50	22	不整方形	16	18	楕　円
	6	36 × 38	32	方　形	14	38	円
	7	44 × 34	62	方　形	16	54	方　形
	8	32 × 26	58	方　形	18	52	円
	9	56 × 44	48	方　形	－	－	－
	10	46 × 38	42	方　形	－	－	－
	11a	44 × 32	44	方　形	18	44	円
	11b	42 × 48	44	楕　円	－	－	－
	12a	30 × 22	32	方　形	18	32	円
	12b	38 × 42	32	方　形	－	－	－
	13a	34 × 18	44	長方形	16	44	円
	13b	22 × 34	44	方　形	－	－	－
	14	38 × 30	30	方　形	－	－	－
7	1	64 × 72	26	方　形	22	16	円
	2	60 × 48	20	楕　円	14	14	楕　円
	3	68 × 64	24	方　形	24	16	方　形
	4	40 × 44	26	不整方形	14	14	不整方形
8	1	－ × 40	9	方形？	－	－	－
	2	56 × －	10	方形？	－	－	－
9	1	60 × 50	8	不整方形	20	4	方　形
	2	60 × 60	8	不整方形	18	2	不整方形
	3	18 × 18	4	方　形	14	4	方　形
	4	50 × 50	36	方　形	18	26	楕　円
	5	60 × 50	24	方　形	20	14	楕　円
	6	42 × 34	4	不整方形			
	7	56 × 66	22	方　形	22	14	楕　円
	8	56 × 50	30	方　形	18	20	円
	9	56 × 90	32	不整方形	22	22	円

第３節　土坑・その他

ここでは，土坑，柱列，ピット群，溝跡，遺構外出土の遺物，遺構に直接伴わない遺物等について報告する。

１．土　　坑

１号土坑（第23図，図版16）

調査区中央やや南寄りＣ－２グリッドにて検出された。検出面でのプランは，直径105㎝の円形を呈している。壁の残存高は約16㎝を測り，壁面は全般に垂直に近い角度で立ち上るが，部分的には内傾する箇所もある。埋土は黒褐色砂質土が主体で，壁面及び底面付近に多少の茶褐色微砂質土・黄褐色砂質土が堆積している自然堆積層である。底面は壁面付近が若干高くなるもののほぼ平坦である。

遺物は，堆積土内から３片の土器細片が出土している。時期不明の１片を除き，他は土師器杯破片で，このうち１片は非ロクロ杯の口縁部破片である。他の１片は底部破片であるが，ロクロ使用の有無は識別できない。

２号土坑（第23図，図版17）

Ｄ－３グリッドに検出された土坑で，１号土坑の南４ｍに位置している。検出面のプランは，直径150㎝の円形で，深さ25㎝を測る。底面径は検出面での開口部より若干広い。従って壁面は南ないし南東側の壁面の一部を除き，内傾して立ち上がるのが大部分である。埋土は，流れ込みによる自然堆積と思われ，茶褐色ないし黄褐色の微砂質土が多く堆積している。底面は，１号土坑同様平坦である。

当土坑からの出土遺物はない。

３号土坑（第23図）

Ｄ－３グリッドに検出された土坑である。重複関係にある３号建物跡よりも古い時期のものである。プランは，長軸120㎝，短軸90㎝のやや南北に長い楕円形を呈している。深さは13㎝と浅い。底面の状態はやや鍋底気味で，壁面への移行はなだらかである。埋土は暗茶褐色微砂質土が主体で，南壁近くには幾分焼土混じりの黄茶褐色微砂質土が堆積している。土坑南半の底面付近には，細長く薄い焼土の範囲が確認された。

当土坑からの出土遺物はない。

４号土坑（第23図）

Ｄ－２グリッドに検出された土坑で，４号建物跡掘形P_2に切られている。プランは長軸80cm，短軸65cmの楕円形を呈し，深さ17cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面への移行はなだらかであるが，壁面の立ち上がりは70～80度とややきつい。埋土は自然堆積土と思われ，少量の木炭粒を含む暗茶褐色土が主体で壁付近に暗黄茶褐色土が堆積している。

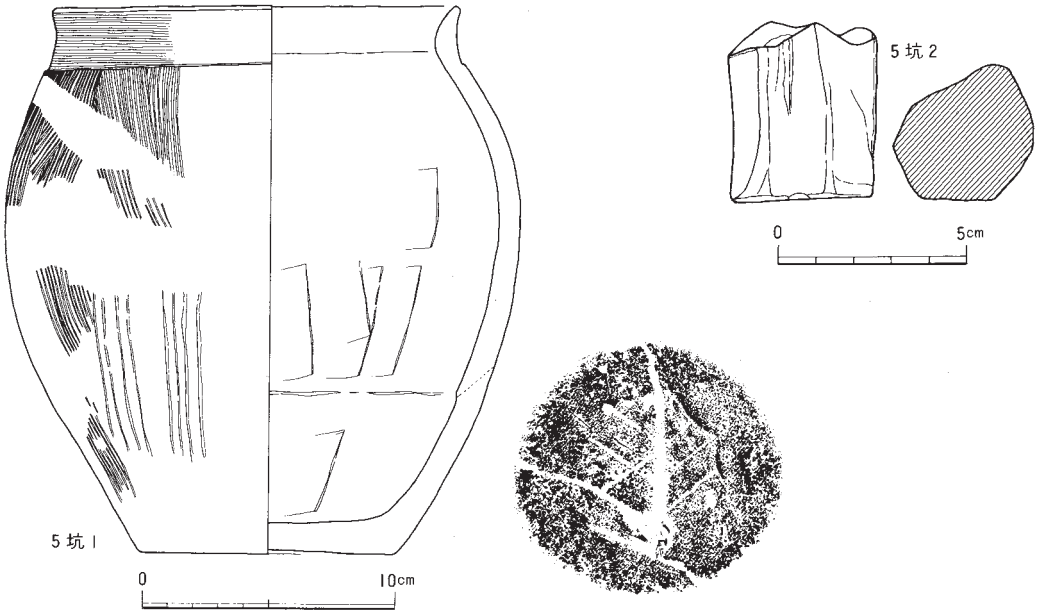
当土坑からの出土遺物はない。

５号土坑（第22・23図，図版18・26）

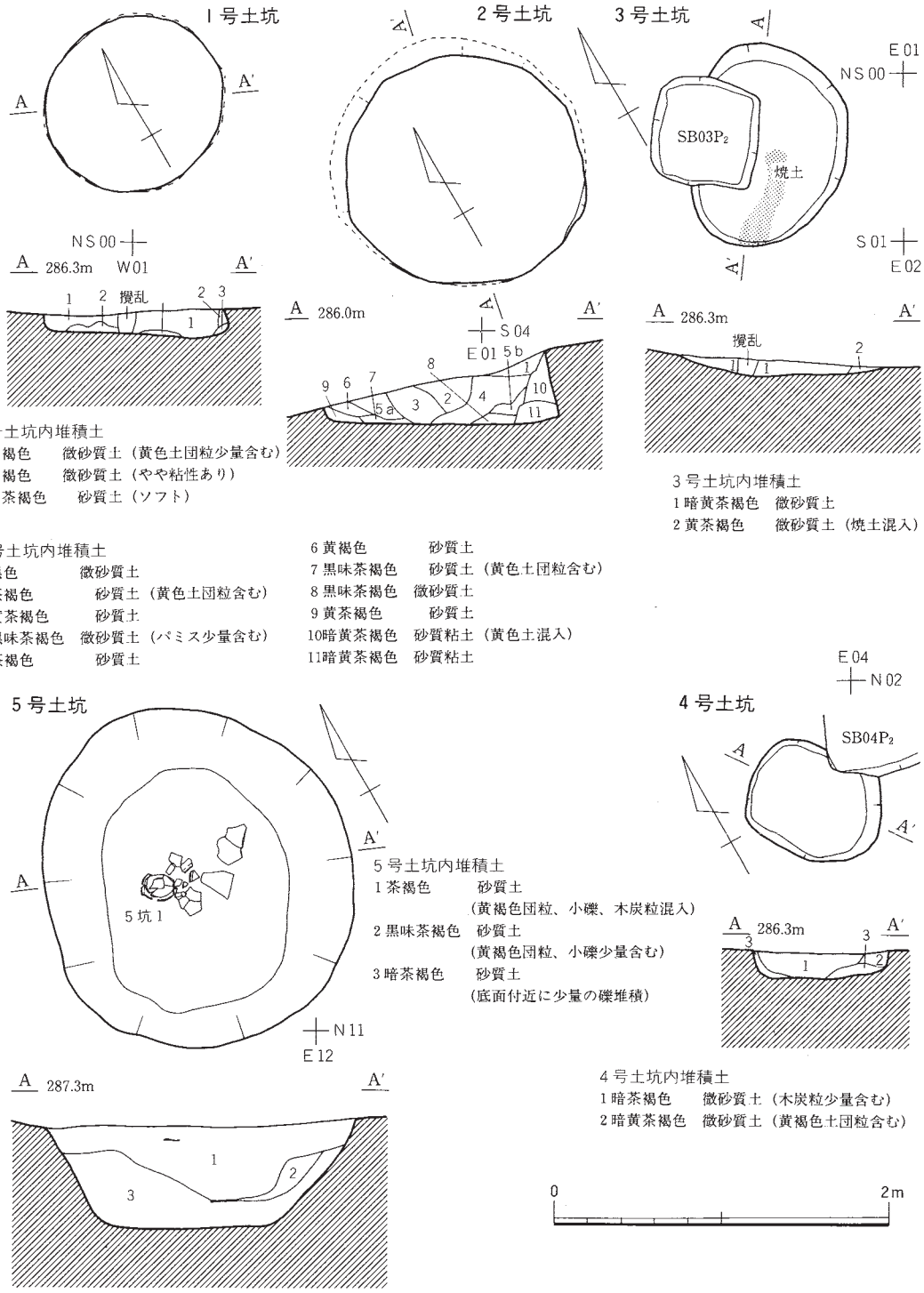
調査区東寄りＥ－１グリッドに検出された土坑で，検出面でのプランは長軸２ｍ，短軸1.85mの若干南北に長い楕円形を呈している。深さは65cmを測り，埋土は第１層に茶褐色砂質土，第２層に黒味茶褐色土が堆積している。堆積土中第３層は土粒がほぼ均一で自然堆積と思われるが，上層では黄褐色土の大きさのやや不揃いな団粒を含み人為堆積層と推定される。土坑底面は鍋底状で，壁面の傾斜角は40～60度とやや緩い。

出土遺物は，図化したものに土師器甕，土製支脚があり，他に須恵器甕破片，弥生式土器破片が出土している。すべて堆積土内からの出土で，量は少ない。

土師器甕　すべて非ロクロ成形のものである。完形に近い５坑１と，胴部破片３点，木葉痕を有



第22図　５号土坑出土土師器・土製支脚



1号土坑内堆積土
1 黒褐色　微砂質土（黄色土団粒少量含む）
2 茶褐色　微砂質土（やや粘性あり）
3 黄茶褐色　砂質土（ソフト）

2号土坑内堆積土
1 黒色　微砂質土
2 茶褐色　砂質土（黄色土団粒含む）
3 黄茶褐色　砂質土
4 黒味茶褐色　微砂質土（パミス少量含む）
5 茶褐色　砂質土
6 黄褐色　砂質土
7 黒味茶褐色　砂質土（黄色土団粒含む）
8 黒味茶褐色　微砂質土
9 黄茶褐色　砂質土
10暗黄茶褐色　砂質粘土（黄色土混入）
11暗黄茶褐色　砂質粘土

3号土坑内堆積土
1 暗黄茶褐色　微砂質土
2 黄茶褐色　微砂質土（焼土混入）

5号土坑内堆積土
1 茶褐色　砂質土
（黄褐色団粒、小礫、木炭粒混入）
2 黒味茶褐色　砂質土
（黄褐色団粒、小礫少量含む）
3 暗茶褐色　砂質土
（底面付近に少量の礫堆積）

4号土坑内堆積土
1 暗茶褐色　微砂質土（木炭粒少量含む）
2 暗黄茶褐色　微砂質土（黄褐色土団粒含む）

第23図　1～5号土坑

す底部破片１点，頸部外面に径２～３㎜の孔を有す破片１点がある。図化した５坑１は最大径を胴部にもち，頸部は若干括れ外面の段が比較的明瞭になる形態的特徴をもつ。外面調整は口縁部ヨコナデ，胴部ハケメ，内面では口縁部ヨコナデ，胴部はヘラナデである。底部外面の周縁は磨消されているが，僅かに窪んだ中央部には木葉痕が残っている。

須恵器甕　堆積土第１層と第３層との層理面から検出されたもので，大甕の胴部下端にあたる破片である。内面には同心円状のアテ具痕，外面には平行タタキメを残しているが，外面では大部分磨消されている。器厚は１～1.5㎝と厚い。

土製支脚　堆積土内から検出されたもので，片面に端面を残す欠損品である。側面は荒く削られ面取りされているため，やや不整な六角柱の形態をとる。現存高4.8㎝，径2.8～3.7㎝である。

６号土坑（第24図，図版19）

調査区中央やや南西寄りＣ－２グリッドで検出された土坑で，現代の溝によって上部を壊されている。検出面でのプランは長軸1.5ｍ，南北0.7ｍを測るほぼ長方形を呈している。底面までの深さは98㎝を測るが，底面にはピットの施設がありさらに20㎝下がる。

堆積土は黒茶色微砂質土，黄褐色砂質粘土が流れ込んでおり自然堆積層と考えられる。底面は検出面での形態と同様で，長辺1.4ｍ，短辺0.65ｍの長方形である。ほぼ平坦で東端には上述したピットが１個ある。径約35㎝で斜方向に掘り込まれている。壁面の立ち上がりは，ほぼ垂直に近い角度である。

当土坑からの出土遺物はない。

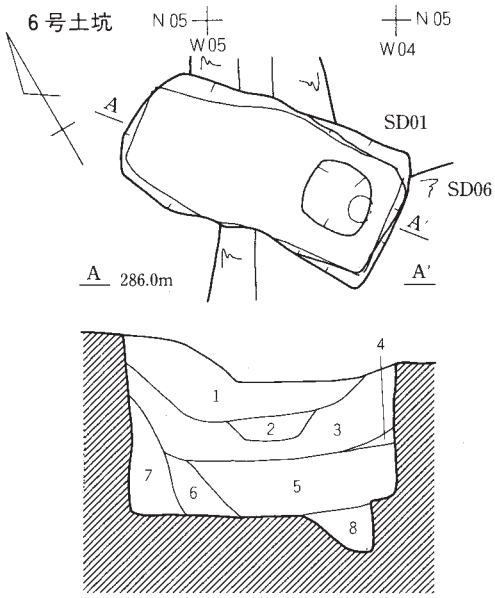
７号土坑（第24図，図版20）

調査区南Ｃ－３グリッドで検出された土坑である。検出面での平面形は長軸1.88ｍ，短軸1.1ｍを測る南北に長い楕円形を呈している。深さは1.03ｍで，埋土は黒褐色ないし暗黄褐色微砂質土がレンズ状に堆積し自然堆積層と思われる。壁面の傾斜は上半部が60～70度程度であるが，下半は垂直に近い角度で落ちている。底面は長辺145㎝，短辺85㎝の長方形を呈し，平坦である。

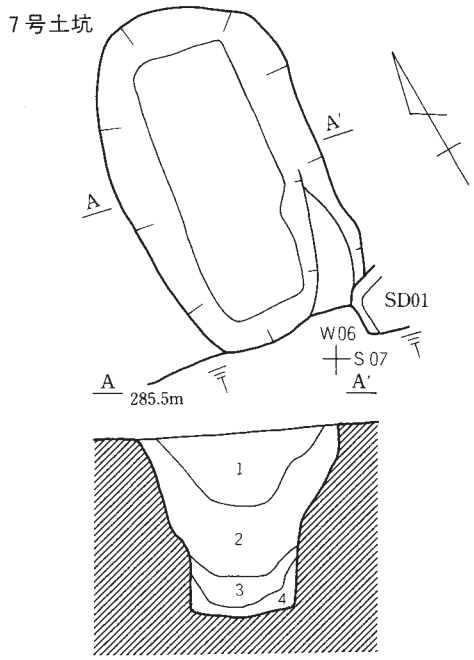
当土坑からの出土遺物はない。

８号土坑（第24・25図，図版21）

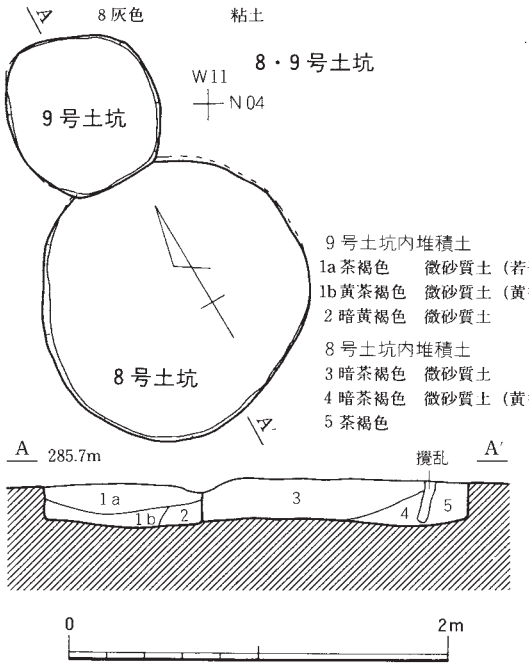
調査区中央やや西寄りＣ－２グリッドに検出された土坑で，重複関係にある９号土坑より新しい。平面プランは，最大径148㎝を測るほぼ円形を呈している。壁面は垂直に近いが，北半ではやや内傾し立ち上がっている。底面は平坦で，検出面からの深さは22㎝を測る。埋土は茶褐色・黄褐色微砂質土の自然堆積層を確認している。



6 号土坑内堆積土
1 黒茶色　　微砂質土（黄色粘土団粒、木炭粒混入）
2 黄褐色　　砂質粘土
3 黒茶色　　微砂質土（黄色粘土小塊混入）
4 黄褐色　　砂質粘土
5 暗黄褐色　微砂質土（黄橙色粘土団粒混入）
6 黒茶色　　微砂質土（黄橙色粘土粒混入）
7 暗黄橙色　砂質粘土（黄橙色粘土ブロック状）
8 灰色　　粘土

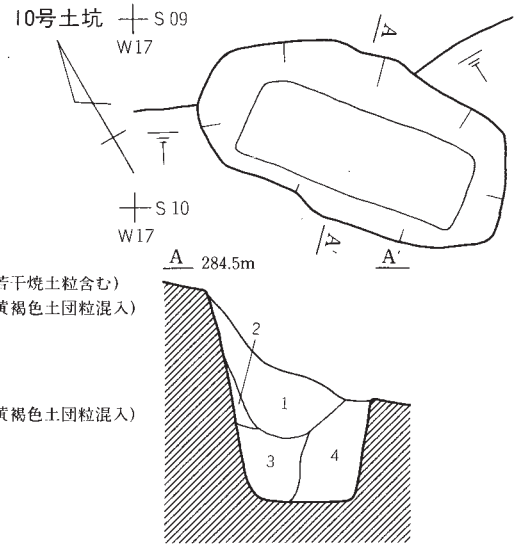


7 号土坑内堆積土
1 黒褐色　　微砂質土
2 暗黄褐色　微砂質土（黄褐色ブロック混入）
3 暗黄褐色　　砂質土（砂多量混入）
4 灰味黄褐色　砂質土（ソフト）



9 号土坑内堆積土
1a 茶褐色　　微砂質土（若干焼土粒含む）
1b 黄茶褐色　微砂質土（黄褐色土団粒混入）
2 暗黄褐色　微砂質土

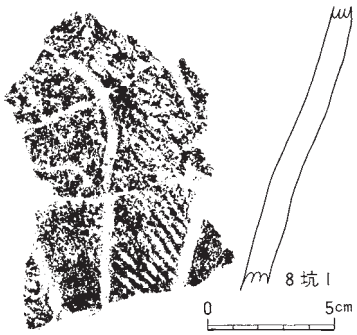
8 号土坑内堆積土
3 暗茶褐色　微砂質土
4 暗茶褐色　微砂質土（黄褐色土団粒混入）
5 茶褐色



10号土坑内堆積土
1 黒色　　微砂質土
2 橙味茶褐色　砂質土（ややソフト）
3 茶褐色　　砂質土（ソフト）
4 灰味茶褐色　砂質土（ややソフト）

第24図　６～10号土坑

遺物は，検出面から縄文土器破片３点が出土している。２片は小破片で無文であるが，拓影図を掲載した８坑１は，深鉢の胴部破片で沈線で区画された文様をもつ。沈線の幅は約４㎜で，恐らく沈線で区画された部分が無文帯になると思われ，前述した４住１に近い特徴をもつ。



第25図　８号土坑出土縄文土器

９号土坑（第24図，図版21）

８号土坑の北端を掘り込んでいる土坑で，平面の形態は不整円形を呈している。径85cm，深さ21cmを測り，壁面の立ち上がりは垂直に近い。底面は平坦で，８号土坑の底面よりは若干下がり気味である。堆積土は８号土坑より若干色調が黒味がかる暗茶褐色微砂質土の自然堆積層が確認された。

当土坑からの出土遺物はない。

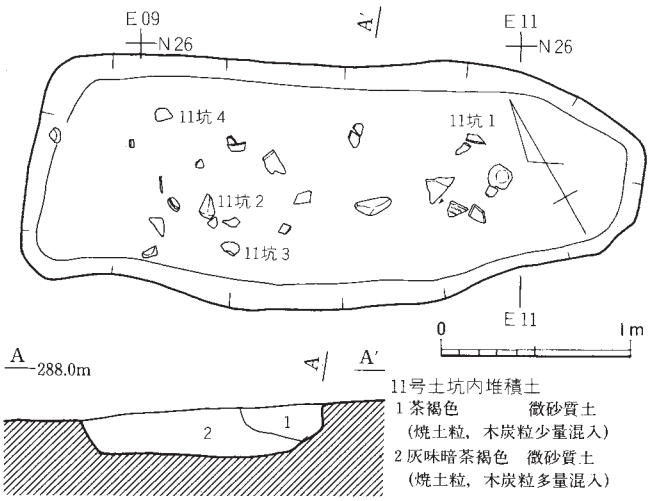
10号土坑（第24図，図版22）

調査区北東寄りＤ・Ｅ－０グリッドに検出された土坑で，遺構の上部は水田造成時に相当削平されている。検出面でのプランは長軸170cm，短軸90cmの楕円形であるが，底面は長辺123cm，短辺46cmを測る長方形である。壁の残存高は110cmで，立ち上がりは80度前後の傾斜角である。堆積土は上層に黒褐色砂質土，下層に茶褐色砂質土が流れ込んでいる。

当土坑からの出土遺物はない。

11号土坑（第26・27図，図版23・26）

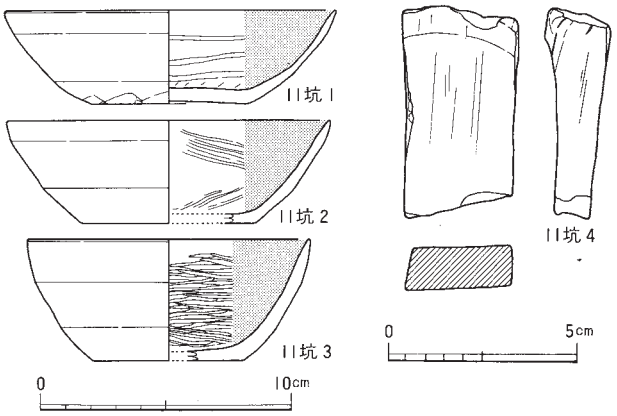
調査区北東寄りＤ・Ｅ－０グリッドで検出された土坑で，重複関係にある７号溝より新しい。平面プランは長辺3.24m，短辺1.28mで，長軸を東西方向にとる不整長方形である。深さは30cmを測り，底面は鍋底状でやや中央部が深い。底面から壁面への移行は緩やかである。埋土は，焼土・木炭粒を含む茶褐色微砂質土が主体である。



第26図　11号土坑

遺物はすべて堆積土内からの出土

で，いずれも破片である。出土状況から投げ込みか流れ込みによって土坑内に堆積したと思われる。遺物には，石鏃・磨石・土師器杯・甕，須恵器杯・甕・壺，砥石があるが，石鏃・磨石は時代的に隔絶しており直接当土坑に関係するものではない。



第27図　11号土坑出土土師器・砥石

土師器杯　破片総数318点を数える。１片のみ非ロクロ成形で，他はロクロ成形の破片である。ロクロ成形の破片のなかで底部および体部下端外面の調整痕が確認できるものは81片であるが，調整方法の別により回転ヘラケズリされるもの70片，手持ちヘラケズリされるもの11片がある。数量的に回転ヘラケズリされるものが多い。なお，破片総数中には高台杯の台部破片３点を含めてある。

土師器甕　破片総数278片を数えるが，明らかにロクロ使用と思われる破片は10点のみである。

土師器皿　蓋の可能性もあるがここでは皿として扱っておく。口縁部の小破片である。ロクロ成形で内面はヘラミガキ・黒色処理されている。口縁端部が短かく屈曲するもので，口径は13～15cm程度と思われる。

須恵器杯　体部破片１点，高台杯台部破片１点がある。いずれも細片である。この他に高台杯の台部に近い形態をとるが，薄手でやや長く台部と速断できない破片２点がある。

須恵器甕　破片総数12片を数える。内面のアテ具痕はすべて磨消されているが，外面ではタタキメの残るものと磨消されるものの二者がある。口唇部から頸部にかかる破片５点のうち外面に波状沈線が施されるものは２片である。

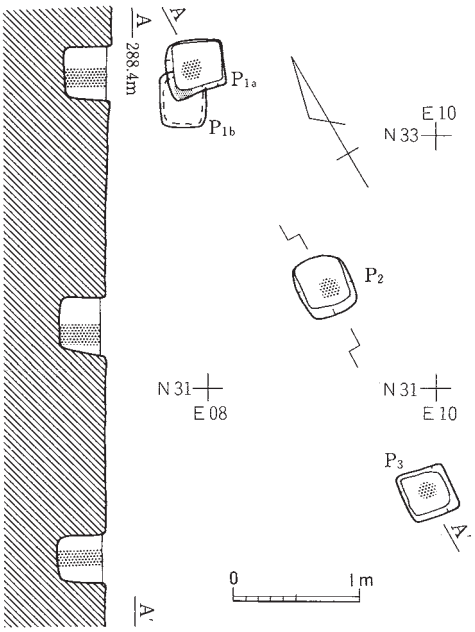
須恵器壺　頸部の小破片である。器肉は４～５㎜と薄手である。外面に平行タタキメ，内面は磨消されているがわずかにアテ具痕を残す。

砥　　石　両側端が失なわれている。使用痕は４面に観察されるが，なかの一面は砥ぎ減りが顕著であり，この面の背には擦痕状の痕跡が２条みられる。

２．柱　　列

１号柱列（第28図）

Ｄ－101・０グリッドにかけて検出された柱列で，８号建物跡の南側に近接している。３個の柱穴（P_1～P_3）で構成されている。各柱間は北から１間目が205cm，２間目が180cmを測る。P_1a と P_3との柱痕を結ぶ軸線は，ほぼ磁北に等しい。



第28図　１号柱列

掘形は一辺40～50cmの方形である。底面はほぼ平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。柱痕は掘形のほぼ中央に確認された。径15cm弱である。柱痕の周囲は黄褐色土と黒褐色土が入り混じった土で突き固めている。P_2の柱痕の位置は，P_{1a}とP_3を結ぶ軸線上からやや東にずれている。

P_{1a}はP_{1b}と重複関係にありP_{1a}のほうが新しい。P_{1b}にも僅かに残存した柱痕が確認されたことから本跡の柱穴と考えられ，あるいは据え替えの可能性も推定されるところである。出土遺物はない。

３．ピット群（第29図，図版24）

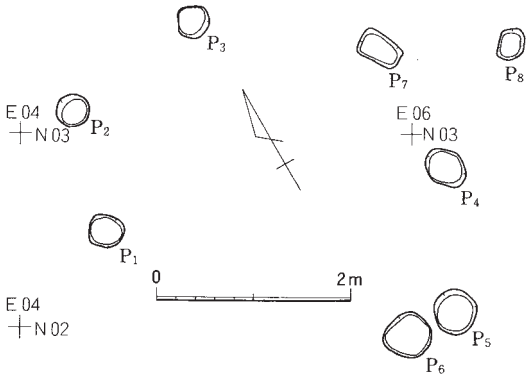
Ｄ－２グリッドに検出されたピット群である。調査区のなかでこの部分にのみ８個のピットが集中して検出されたため「ピット群」として報告する。

ピットは，直径17～23cmと若干の幅はあるが大きさの点ではほぼ共通している。形態は円形に近いもの（P_1～P_3・P_5・P_6・P_8）が多いが，なかに楕円形のもの（P_4），長方形のもの（P_7）がある。P_1～P_6までの深さは12～32cmの間でややばらつきがみうけられる。特にP_1・P_3は30cmを越えこのピット群のなかでは深い。P_7・P_8は２～３cmと極端に浅いものである。ピット内堆積土は，P_1～P_6が木炭粒の混入した暗茶褐色土で，P_7・P_8が地山粒子を多く混入した黄茶褐色土である。各ピット間の間隔は接近しすぎるものもありまちまちである。

第２表　ピット群計測表　単位cm

P No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
径	18	17	17	23	23	23	22	18
深さ	32	18	35	12	17	21	3	2

深さや堆積土の相異からすれば，P_1～P_6とP_7・P_8とに区別して考えられるが，用途・機能については不明である。

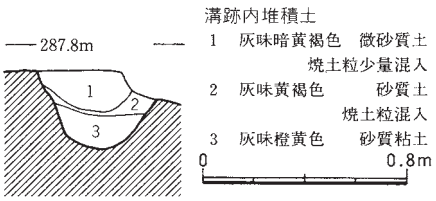


第29図　ピット群

４．溝　　跡（第２図）

調査区内に検出された溝は13条あるが，７号溝を除く他の溝は前述してきた遺構群を切って掘り込んでおり，その多くは最近まで

地境いや排水溝として機能した溝と思われ，現に開口していた溝（ＳＤ01）もある。ここでは調査区内で主体を占める平安時代の遺構に関連があると思われる７号溝についてのみ報告する。



第30図　７号溝セクション

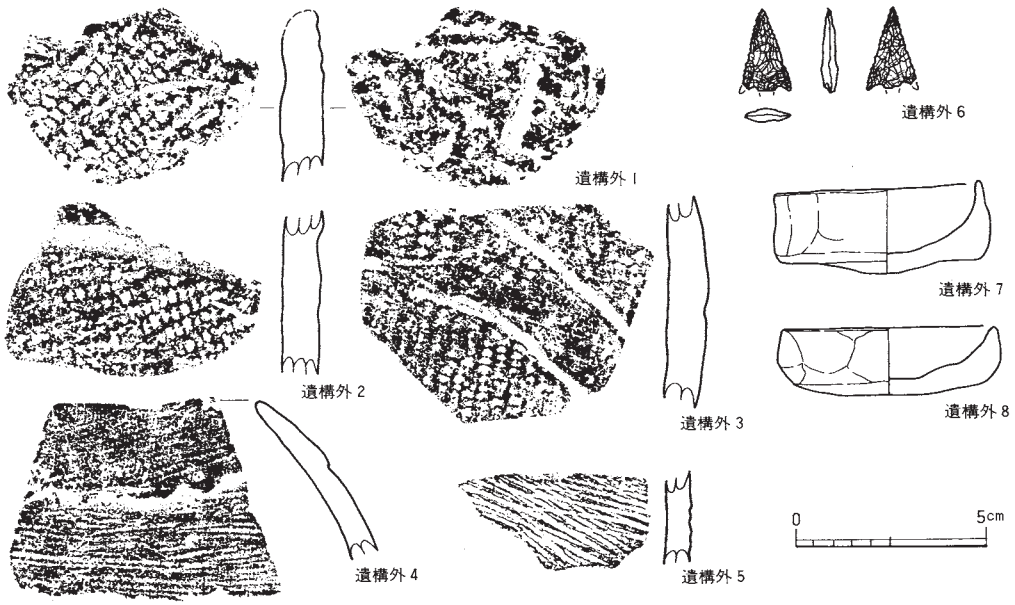
７　号　溝（第30図，図版13）

Ｄ・Ｅ－０グリッドに検出された溝で，５号建物跡の北側に隣接している。本跡の北側にある11号土坑の南東コーナー部と重複しているが，本跡が新しい。溝は最大幅96cmで東西方向に走っているが，東側は調査区外に延び全長は不明である。検出された部分での長さは西端から約9.3mである。深さは東端で最大深度47cmを測り，西に向かうに従い浅くなる。堆積土は３層に分層される自然堆積土で上層２層に焼土粒が混入するが，第２層に較べ第１層の混入度合が多い。

遺物は，西寄りの検出面からロクロ土師器甕の破片がまとまって出土した。これらの破片は同個体の破片と思われるものであるが，検出状況から溝が埋まる段階で一括して投げ込まれたと推定される。

5. 遺構外出土の遺物（第31図）

ここでは直接遺構に伴わず出土した遺物と，遺構内から検出されてもその遺構の時期から隔絶し恐らく偶然性の高い契機によって遺構に入り込んだ遺物を含めて取り扱う。



第31図　遺構外出土遺物

図示した遺物は８点である。内訳は，縄文土器３点，石鏃１点，弥生式土器２点，土師器２点である。

縄文土器　全て深鉢の破片と思われる。遺構外１は，調査区北東隅の表土から検出された土器片で，外面に縄文，内面に条痕文が施されている。胎土は繊維を含んでいて脆い。縄文時代早期末葉前後のものと思われる。遺構外２はＤ－０グリッド，遺構外３はＢ－３グリッドの各々表土内出土である。２片とも幅の差はあるが，沈線を施している。遺構外３では地文としての縄文を施文した後，沈線をやや弧状に描いている。中期後半の時期と思われる。

弥生式土器　遺構外４・５の２点である。遺構外４は口縁部破片で，折り返し口縁の形をとり，外面は条痕文が施されている。縄文晩期終末からの特徴を残しており，時期の位置付けは速断しがたい。遺構外５は１号住居跡堆積土内から検出された破片で，外面に撚糸文が施文されている。

石　　鏃　11号土坑堆積土内から検出された頁岩製の石鏃で，調査区内では１点のみの出土である。基部に抉りのある有茎の石鏃で，現存する最大幅1.3cm，長さ2.2cmを測る。茎部と基部の一部を欠損している。

土 師 器(小型手捏土器)　遺構外７・８の２点である。いずれも調査区東側の埋没谷に設定した２号トレンチの第２層黒色土から検出したものである。遺構外７は口縁部の一部を欠損，遺構外８は口縁部から底部にかかる約¼程度の破片である。若干丸味を持った底部から体部は短かく直立気味に立ち上がっている。

第３表　七郎内Ｄ遺跡出土土師器一覧表

○ 推定法量　△ 現在高　単位 cm

遺物番号	器種	出土層位	口径	底径	器高	成形	胎土	外面調整	内面調整	備考
2 住 1	杯	床面	13.0	7.5	3.8	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	杯	貼り床	—	6.3	△2.4	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	黒色処理	
3	甕		○16.6	8.4	13.4	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ナデ(?) 指頭によるオサエ		底部木葉痕
4	甕	床面	○21.4	—	△17.8	ロクロ	粗	手持ちヘラケズリ	ナデ	
3 住 1	杯	床直	○15.6	7.0	5.6	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	杯	ℓ－2	○13.5	6.0	4.3	ロクロ	密	——	黒色処理	
3	杯	床面	○12.0	5.5	4.7	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
4	杯	床直	—	○7.1	△4.8	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	黒色処理	
5	杯	ℓ－2	—	○6.6	△3.4	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
6 住 1	甕	床面	21.4	—	△13.4	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ(?)・ヘラナデ	
2	甕	床直	18.0	—	△12.5	非ロクロ	粗	ヨコナデ(?)・ハケメ(?)	ヨコナデ(?)・ヘラナデ(?)	
3	甕	カマド	20.4	—	△19.2	ロクロ	粗	手持ちヘラケズリ	ナデ	
4	甕	床面	23.2	—	△13.8	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	
5	甑	カマド	—	—	△19.0	非ロクロ	粗	ナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラナデ・手持ちヘラケズリ 指頭によるオサエ	孔径 12.0cm
6	手捏	カマド	3.7	3.4	2.4	非ロクロ	粗	——	——	
5 坑 1	甕	ℓ－1	16.2	10.0	21.8	非ロクロ	粗	ヨコナデ・ハケメ ナデツケ	ヨコナデ・ヘラナデ	底部木葉痕
11 坑 1	杯	ℓ－1	13.1	6.2	3.7	ロクロ	密	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
2	杯	ℓ－2	○12.8	7.0	4.1	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
3	杯	ℓ－2	○11.2	○6.0	4.8	ロクロ	密	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	
遺構外 7	手捏	L－Ⅱ	5.5	—	2.2	非ロクロ	粗	指頭によるオサエ	指頭によるオサエ	
8	手捏	L－Ⅱ	5.6	—	1.8	非ロクロ	粗	指頭によるオサエ	指頭によるオサエ	

第３章　考　　察

当遺跡の調査区内から検出された遺構・遺物は大きく縄文時代のものと，奈良・平安時代のもの，時期不明のものに分けられる。この他に弥生時代の土器破片も検出されているが，量的に僅かなため本章の対象からは除く。

第１節　縄文時代の遺物と遺構

遺物について

検出された遺物には，縄文土器，石器がある。遺構に直接伴う遺物は４住１のみで他は新しい時代の遺構に流れ込んだか，遺構に伴わず出土した遺物である。

縄文土器　早期と中期の土器が確認されている。早期の土器は遺構外１で，外面縄文と内面条痕文の口縁部破片である。大畑Ｇ式ないし船人島下層式の時期に並行するものであろう。

中期の土器としては図示した４住１，８住１，遺構外２・３がある。３片は小破片であるが４住１はある程度全体的な器形がうかがえる土器である。４住１は４号住居跡内の埋甕として使用されたもので，底部と口縁部から胴部下端の約⅓強を欠損している。器形は胴部が緩やかに括れる深鉢である。文様は，口縁部下に側縁を沈線化した隆帯を一条横位に巡らし口縁部を無文帯として画している。胴部は口縁下の隆帯直下から数単位太めの沈線により∩字状に懸垂帯を施しその内部を無文，懸垂帯間を単節縄文によって充塡している。一般的施文法とは異なり胴部の無文部と地文施文部が逆転している。この種の土器は加曽利Ｅ式土器に並行する時期のものと思われるが，加曽利Ｅ式土器のなかでも口縁部文様帯が退化し喪失していく過程の段階に位置づけられる。当土器は口縁部文様が施されていないが，口縁部下に隆帯を巡らし明らかに胴部の文様帯に対峙する文様帯として無文であるが意識されていると考えられ，一応神奈川第Ⅲ加曽利Ｅ式段階（神奈川考古同人会：1980）の末葉として把えておく。８坑１もほぼ同時期として考えられる。

石　　器　11号土坑から石鏃１点（遺構外６）と磨石１点が検出されている。石鏃は七郎内Ｃ遺跡で約180点と多量に検出されているが，すべて無茎の石鏃である。有茎の石鏃は両遺跡の石鏃中１点のみで無茎の石鏃よりは多少時期的に下降するものと思われる。磨石は凝灰岩の礫を利用している。欠損しており全体の⅓程度の遺存度である。

遺構について

確実に縄文時代の遺構として把えられるものは４号住居跡１軒のみである。この他検出面から

縄文中期の土器破片が出土した８号土坑や，陥し穴状の土坑と考えられる６・７・10号土坑は縄文時代に充分位置づけが可能であるが確実性に欠けるためここでは扱わない。

４住１は調査区南西端に位置している。住居跡南側の大半は開田時に破壊されており，構造等不明な点が多い。ただ住居跡南端の中央部に焼土面が観察されたことから炉の存在が想定できたことと，北西端に埋甕が埋置されていたことが確認された。埋甕は，深鉢（４住１）の胴部上半を外枠として設置し，その中に同個体の胴部下半を打ち割った破片を平積みにし上部には石を乗せている。七郎内Ｃ遺跡でも時期的に多少遡るが６基の埋甕が検出されている。６基中２号埋甕に使用されている土器は在地形の土器ではなく他地域から搬入された土器である。当遺跡の場合でも純然たる外来の土器ではないが，他地域（加曽利Ｅ式土器）の影響を相当受けている土器を使用しており，その点では共通性をある程度窺わせる。ただ，他の内容物があった可能性もあるが埋甕内部に土器片を詰め込んでいる状況はＣ遺跡にみられない現象である。

第２節　奈良・平安時代の遺物と遺構

遺物について

検出された遺物には，土師器杯・甕・甑・皿，須恵器杯・壺・甕，小型手捏土器，土製支脚，砥石がある。以下順次，図示したものを中心にまとめておく。

土師器杯　１・２・３・６号住居跡，２・９号建物跡，１・11号土坑から検出されている。この内，図化し得たのは２住１・２，３住１～５，11坑１～３の10点である。ロクロ成形の杯が大半であるが，１号土坑から図化し得なかった非ロクロ土師器の口縁部破片が１点出土している。ロクロ成形の杯は，体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリするものと，手持ちヘラケズリするものとの二者に分類された。後者の杯は図化した中では１点（11坑１）のみで，不明な３住２を除けば全て回転ヘラケズリされるものである。内面はヘラミガキ・黒色処理されるが，底部内面のミガキ方向は，観察可能な３点（２住１，３住３，11坑３）で見る限り一定方向をとる。ただ，３住３ではやや方向にばらつきが見られる。他の杯は器面の荒れにより不明である。

土師器甕　各遺構から小破片は相当数検出されているが，ある程度形が窺え，図示可能なものは７点であった。これらの甕は，成形技法の相違によって二者に分類できる。ひとつは非ロクロ成形のもので，２住３，６住１・２・４，５坑１がこれに当たる。他のひとつはロクロ成形のもので，２住４，６住３がこれに当たる。前者ではさらに形態の点で，小型甕（２住３，６住２？）と他のものとに分類できる。後者では全体的な器形を窺えるだけの資料はないが，多くは長胴の甕になるものと思われる。ただ，５坑１のみは胴部上半の丸味が強く，いずれの型にも入らない。

土師器甑　６号住居跡から検出された把手付甑１点のみである。胴部下半約¼の破片で，把手部

が１個しか確認されなかった。恐らく対になる把手が対面にあるものと推定される。

土師器皿　11号土坑から口縁部の小破片を１点だけ検出している。底部が欠損しているため，蓋としての可能性もないわけではないが，一応皿として報告した。

須恵器杯・壺　双方とも11号土坑から検出されている。杯は３片，壺は１片，いずれも小破片である。

須恵器甕　３号住居跡，５・11号土坑から検出されている。総べて破片で，全体を窺えるものはない。

手捏土器　６号住居跡から１点，２号トレンチⅡ層から２点，計３点検出されている。６住６は粘土紐積み上げによって成形しており，標記の範疇には入らないが，ミニチュア土器の多くが手捏手法によるため，広い意味で含めた。

支　脚　５号土坑から欠損品が１点検出されている。土製である。

土師器の編年上の位置　各器種の共伴関係は，今回の調査成果からは持たれていない。杯・甕の一応揃っている２号住居跡でも，数量的に不足があると思われる。また，３号住居跡では甕が，６号住居跡では杯が堆積土中に破片で見られる程度で，組成上では欠落しており，いわば各共伴関係を有する一括土器群での比較検討が不可能な状況にある。一応これらの土器群を全体的に大きく東北南半における編年（氏家：1957）の中で，国分寺下層式から表杉ノ入式の段階に平行するものをとらえておく。一方，２号住居跡と６号住居跡の図示した遺物中，各々共伴しているロクロ成形の甕の存在により，２住１に代表される外面回転ヘラケズリ調整，底部内面が一定方向にヘラミガキされる杯と，国分寺下層式的な非ロクロ成形の甕とが充分に共伴する可能性も考えられる。特に杯類では，ロクロ土師器の中でも前出的な要素で，非ロクロ甕との共伴を考慮に入れ七郎内Ｃ遺跡同様実年代は９世紀初頭を前後する時期としておく。また，手持ちヘラケズリされる11坑１は，回転ヘラケズリ技法よりも後出する技法という点から，９世紀後半以降の年代で考えておく。

遺構について

竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡９棟，土坑２基，溝１条が当時期のものとして考えられる。

竪穴住居跡　後世の耕作等による削平が著しく，完全な形を止めているものは皆無であるが，カマドにおける煙道の有無と，カマド両袖脇に設置された支柱的柱穴の有無とによって分類することが可能である。上記のタイプを分解して組み合わせると４タイプが想定されるが，当遺跡では煙道を持つカマドには必ず支柱穴が設置され（ＳＩ２・３・５・６），煙道を持たないカマドには支柱穴が設置されない（ＳＩ１）という二傾向しか存在しない。周辺地区での前者の類例は，東村谷地前Ｃ遺跡２軒，石川町杉内Ｂ遺跡１軒，須賀川市沼平東遺跡で１軒があげられる。これらの竪穴住居跡の時期は，非ロクロ土師器杯とロクロ土師器杯との共伴する時期，もしくはそれに後続す

る回転ヘラケズリされる杯を主体とする時期であり，それは国分寺下層式と表杉ノ入式の過渡的な時期から，表杉ノ入式の前葉の時期に対比される。カマドの構造は，表杉ノ入式の段階の中で新しい時期になるにつれ，煙道が取り付かなくなるとか，袖の造りが矮小化してくるとか，カマド全体の構造が粗略化してくる傾向にある。これはカマド自体に限ったことではなく，竪穴住居跡の構造の変遷についても同様の事と言える。従って当遺跡で検出された竪穴住居跡についても煙道・支柱穴を持つタイプと持たないタイプとを時間的な先後関係として捉え，前者を竪穴住居跡の１期，後者を２期としておく。

掘立柱建物跡　建物群の時期は出土遺物から上限が推定できるのみで，下限については根拠に欠ける。しかしながら，土師器以外の時期的に下降する遺物の検出がないことから，下限を平安時代の中で考えている。建物跡の構造や細部の法量等については第１・４表の通りである。

総数９棟検出されている建物跡は，２～４号建物跡が同一地区に重複関係を持って建てられている事から，総べてが同一時期に存在したのではなく，幾つかの時期の変遷が想定され，以下にあげる調査の成果から大きく３時期(Ａ～Ｃ期)の変遷を考えた。

１)掘形の形状・大きさによる分類	ⅰ)方形を基本とし１辺が50cm以上の建物跡	ＳＢ１～５，７～９
	ⅱ)堀形規模が50cm以下と小さい建物跡	ＳＢ６
２)主軸方位による分類	ⅰ)磁北から東に30度前後振れる建物跡	ＳＢ３
	ⅱ)主軸方向がほぼ磁北に近い建物跡	ＳＢ１･２･４･５･７･９
	ⅲ)主軸方向がほぼ東西方向の建物跡	ＳＢ６
３)柱列構造による分類	ⅰ)側柱のみで建てられる建物跡	ＳＢ１～３，５・６
	ⅱ)総柱式の建物跡	ＳＢ９

以上の３点に重複関係とを総合してみたとき，次のＡ～Ｃ期に書く建物後が位置付けられる。

Ａ期：ＳＢ３

Ｂ期：ＳＢ１・２・４・５・７・８・９

Ｃ期：ＳＢ６

９号建物跡は総柱式でほかの建物跡と構造的に異なり，比較の対象にはならにかもしれないが，重複関係等がないため１)－ⅰ)と２)－ⅱ)からＢ期に含めて考えた。尚８号建物跡は東西の柱間寸法が近似していることから，総柱式の建物跡の可能性が強い。Ｃ期に入れた６号建物跡の堀形は，Ａ期のものに較べて小さ

第４表　掘立柱建物跡一覧表

SB№	棟方向	規模			柱列構造	方　位	重複関係
		間×間	m×m	m²			
1	南北	1×2	4.2×3.3	13.9	側柱	N 7°E	
2	南北	2×3	5.1×6.6	33.7	側柱	N 7°E	SB３より新
3	南北	2×3?			側柱	N29°E	SB２より古
4	南北				—		SB２より古
5	南北	3×3	6.7×6.6	44.2	側柱	N 11°E	SI６より新
6	東西	3×2	4.5×7.4	33.3	側柱	N 7°E	
7	—		—		—	—	
8	—		—		—	—	
9	南北	2×2	3.4×4.5	15.3	総柱	N11°E	

く柱の目通りも不揃いであることから，建物群の中では最も下降するものと思われる。

土　　坑　当時期の所産と思われる土坑は５・11号土坑の２基である。５号土坑の時期決定の根拠となった遺物は，検出された土師器の中で調整技法や形態的特徴から，最も古い遺物であるが，土坑の第１層が堆積した後に廃棄され，土坑が掘り込まれた時期は遺物廃棄の時期より遡るが，時間差は差程ないものと思われる。また遺物の出土状況は，当初掘り込んだ意図を窺わせるものではなく，機能については不明な点が多い。

11号土坑からは，手持ちヘラケズリされる杯が検出されていることから，竪穴住居跡のⅠ期よりは新しい時期の所産と思われる。機能は土器の細片等が数多く詰まっており，廃棄を目的とした土坑と考えられる。

第３節　時期不明の遺構について

本節では時期決定に確実性の欠ける遺構について扱う。土坑９基，ピット群１があるが，形態別に３種，円形土坑（ＳＫ１・２・８・９）・楕円形土坑（ＳＫ６・７・10）・不整形土坑（ＳＫ３・４）に分類できる。

円形の土坑は更に，堆積土が茶褐色のもの（ＳＫ８・９）と黒色土のもの（ＳＫ１・２）とに細分される。８号土坑の検出面からは，４号住居跡の埋甕と同時期と思われる破片が検出されている事から，縄文時代中期後半を上限とする時期で捉えておく。９号土坑は８号土坑より新しい遺構であるが，堆積土の類似性から縄文時代の所産と考えておきたい。１・２号土坑は，堆積土が黒色土で壁面が若干オーバーハングする形態である。１号土坑堆積土内から，非ロクロ土師器杯破片が検出されているため，８世紀後半を上限とする時期で考えておく。

楕円形土坑は，形態的側面から縄文時代に多出する陥し穴状土坑に共通した特徴を持っている。堆積土も自然堆積状態を示しており，出土遺物はないが縄文時代の陥し穴として捉えておく。

不整形土坑とした３・４号土坑は１・２号土坑と類似する黒色土を堆積としており，掘立柱群に切られている事から１・２号土坑と同じ時期で考えたい。

ピット群は重複関係や伴出遺物もないが，ただ堆積土は８・９号土坑に近い状況を示している。

第４節　各遺構の相互関係について

縄 文 時 代

縄文時代の遺構としては，４号住居跡と断定はできないが陥し穴状土坑である６・７・10号土坑がある。まず土坑であるが，陥し穴とすれば個別に機能するよりも数基がまとまって機能する

方が合理的であり，他遺跡での陥し穴の検出例は，群在している例が多い。この点からすれば，３基の土坑も共存した可能性が強い。次に住居跡と土坑との関係であるが，同時期に集落跡内部に狩猟形態のひとつである陥し穴が存在したとは考え難く，住居跡と土坑とは時期を異にするものと思われる。

奈良・平安時代

竪穴住居跡６軒・掘立柱建物跡９棟・土坑５基が当時期を構成する遺構群である。竪穴住居跡を２時期，掘立柱建物跡を３時期の変遷として捉えてみたが，５号建物跡が６号建物跡よりも新しいという事実から，竪穴住居跡の１期と建物跡のＢ期とは共存しない関係が推定できる。

７号溝は５号建物跡の北側に隣接しながら，掘形と重複する事なく東西方向に走っている。この事は，溝が掘り込まれた時点では南側に位置する建物跡の存在を充分に意識したものであったと推察しうる。とすれば恐らく，溝の用途は斜面上方から流入する水の排水にあったと思われ，溝と建物跡が同時期に存在した事になる。５号建物跡の柱痕には焼土粒が多量に検出され，建物跡廃絶の原因は火災によるものと考えられるが，11号土坑の堆積土内にも焼土粒が混入している事実がある。当土坑は重複関係から７号溝が埋まった後掘り込まれているが，出土遺物からみれば５号建物跡炎上から差程時間の経過がない時点に掘り込まれたと思われる。

以上の点から，次の流れが考えられる。

Ⅰ期：ＳＩ２・３・５・６(竪穴住居跡１期)，ＳＢ３・８？・９？(建物跡A期)，ＳＫ１・２・３・４・５

Ⅱ期：ＳＩ２(竪穴住居跡２期)，ＳＢ１・２・４・５・７・８？・９？(建物跡B期)，ＳＫ11，ＳＤ７

Ⅲ期：ＳＢ６(建物跡C期)

時期的変遷は，大きく３時期に分類して考えた。Ⅰ期に位置付けた５号土坑の出土遺物は，ロクロ土師器と共伴しない古い要素を持っており，１～４号土坑を含めた土坑群はその上限が竪穴住居跡より若干遡る可能性がある。建物跡のＢ期に含めた９号建物跡は総柱式の倉庫と思われる建物跡で，他の建物跡と構造的に異なる。当建物跡は，重複関係や伴出遺物もない事から主軸の偏度のみでＢ期に含めたが，竪穴住居跡の１期に伴う可能性も捨てきれない。竪穴住居跡１期と建物跡Ａ期とが共存するか，もしくは前者から後者へ共存することなく連続するのか，現段階では結論づけ難い。建物跡の機能は，その規模や構造から幾つかに分かれると思われるが，ここでは総柱式の建物跡を倉庫，側柱だけで構成される中ヌキの建物跡を住居形態として捉え，１号建物跡のような小規模なものを作業小屋に類する建物跡として捉えておく。本集落跡は８世紀後葉から11世紀程度まで存続したと推定されるが，その居住形態は竪穴住居跡から掘立柱建物跡へ移行していった形跡が窺える。この傾向は最近県南における，一般集落内の側柱構成の建物跡を土座式の住居形態と捉えた論考(大越忠：1981)を一面から裏付けているように思える。　　(大越)

参　考　文　献

阿武隈川第四紀研究グループ　1968　「須賀川－白河付近の第四系」『第四紀№13』　第四紀総合研究会

小池　一之　1965　「阿武隈中流域の地形(短報)」『地理学評論第38巻第８号』　日本地理学会

阿部　恵・遊佐　五郎　1978　「長者原貝塚」(南方町文化財調査報告書第１集)

今村　啓爾他　1973　『霧ケ丘』　霧ケ丘遺跡調査団

江坂　輝弥　1960　『土偶』　校倉書房

海老原郁雄　1979　『湯坂遺跡』

1980　『槻沢遺跡』

1980　「加曽利ＥⅠ式の変遷について」『奈和18号』

大場　磐雄　1952　「千葉県銚子市粟島台石器時代遺跡調査報告」『上代文化22号』

加藤　孝他　1956　「大松沢貝塚」『陸前国大松澤貝殻塚の研究(一)・(二)』　宮城学院女子大学研究論文集９

1975　「八景腰巻遺跡　第３次調査」『東北自動車道遺跡調査報告(福島県文化財調査報告書47集)』　福島県教育委員会・日本道路公団

神奈川考古同人会　1980　「縄文時代中期後半の諸問題　土器資料集成図」『神奈川考古10』

金崎　佳生・佐藤　満夫・鈴木　雄三　1982　「郡山市野中遺跡調査報告」『福島考古第23号』

木下　　忠　1981　『埋甕』　考古学選書18　雄山閣

木本　元治・鈴鹿八重子他　1982　「鳴神・柿内戸遺跡」『東北新幹線関連遺跡調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告書第101集)』　福島県教育委員会

日下部善己　1972　「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」『福島考古第13号』

鈴木　裕芳他　1980　『諏訪遺跡』　日立市教育委員会

田中　正能　1967　「山王館遺跡」『郡山市山王館遺跡調査報告書』

1978　『南堀切・高山・道南北試掘調査概報』　白河市教育委員会

栃木県史編さん委員会　1976　「何耕地遺跡」「坊山遺跡」「弁天池遺跡」「浅香内遺跡」「諏訪遺跡」『栃木県史・資料編・考古一』

西村　正衛　1972　「阿玉台式土器編年学的研究の概要」『早稲田大学大学院文学研究科紀要18』

日本窯業史研究所　1981　『上の原遺跡』

丹羽　　茂　1981　「大木式土器」『縄文文化の研究４』　雄山閣

根本　信孝・寺島　文隆　1981　『高山・南堀切遺跡・発掘調査報告Ⅱ』　白河市教育委員会

芳賀　英一他　1981　「大久保Ａ遺跡」『母畑地区遺跡調査報告Ⅶ(福島県文化財報査報告書第96集)』　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

福　島　県　1964　『福島県史第６巻』

藤本　彌城　1977　「竹ノ下貝塚」『那阿川下流の石器時代研究Ⅰ』

堀越　正行　1975　「小竪穴考」『史館５号』

馬目　順一　1968　「いわき市下大越松林貝塚の資料」『福島考古第９号』

「台ノ上貝塚における土器意匠文の研究」

馬目　順一他　1975　「大畑貝塚」　福島県いわき市教育委員会

森　醇一郎　1979　「縄文時代中期～後期の貯蔵穴の一例」『考古学ジャーナル』№170　ニューサイエンス社

渡辺　　誠　1970　「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』№40　ニューサイエンス社

中村　五郎　1976　「東北地方南部の弥生土器編年」『東北考古学の諸問題』

福　島　県　1969　「柏山遺跡」「滝ノ森遺跡」「宮崎遺跡」『福島県史第１巻　原始・古代・中世』

氏家　和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』　東北史学会

大越　忠士他　1980　「西原遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告書第85集)』　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

大越　忠士　1982　「一般集落内における掘立柱建物跡について(県南・県中地区を中心として)」『福島考古第

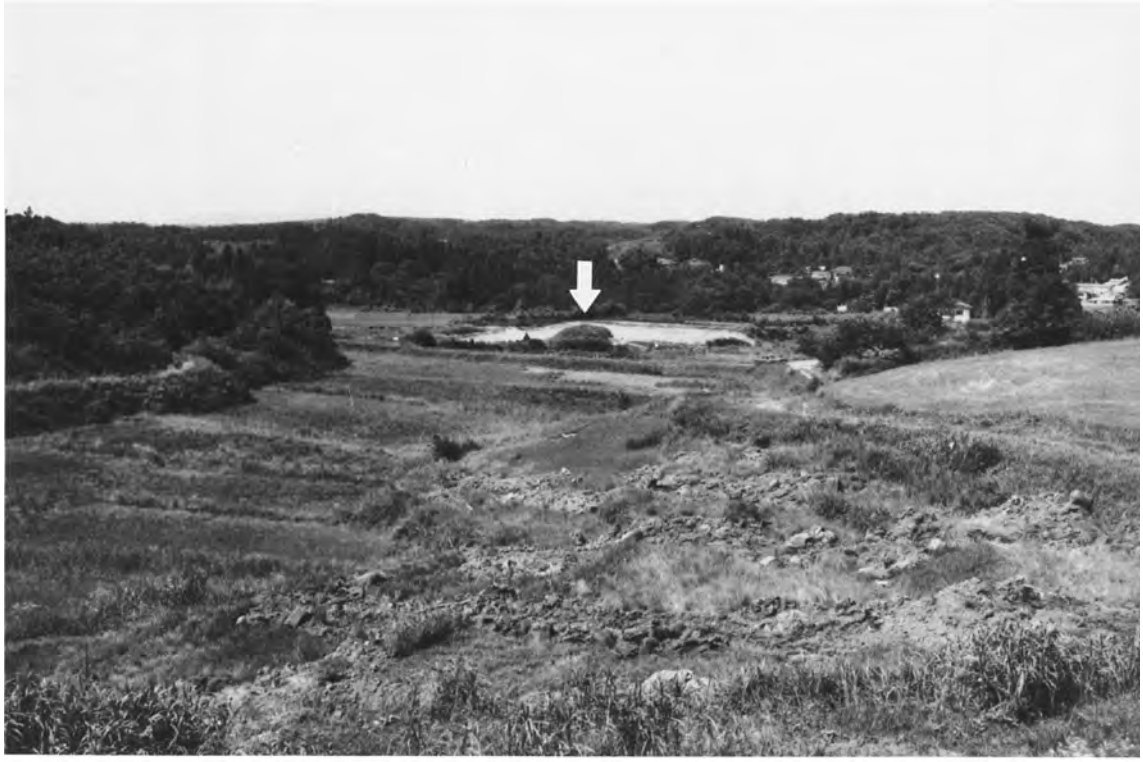
22号』
大越　道正他　1980　「佐平林遺跡Ⅷ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ（福島県文化財調査報告書第85集）』
福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
大越　道正・安田　稔他　1981　「杉内Ｅ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ（福島県文化財調査報告書第95集）』　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
小笠原好彦　1976　「東北における平安時代の土器について二・三の問題」『東北考古学の諸問題』
東北考古学会
木本　元治他　1980　「岩渕境遺跡」『東北新幹線関連遺跡調査報告Ⅰ（福島県文化財調査報告書第80集）』
福島県教育委員会・日本国有鉄道
桑原　滋郎　1969　「ロクロ土師器について」『歴史38』　東北史学会
高木　和夫・大越　忠士　1979　「板倉前Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
玉川　一郎他　1978　「谷地前Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』
福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
日高　　努・山内　幹夫他　1979　「佐平林遺跡Ⅵ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター
馬目　順一　1975　「仏具壇遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』
福島県教育委員会・日本道路公団

図　版

第１編　七郎内Ｃ遺跡

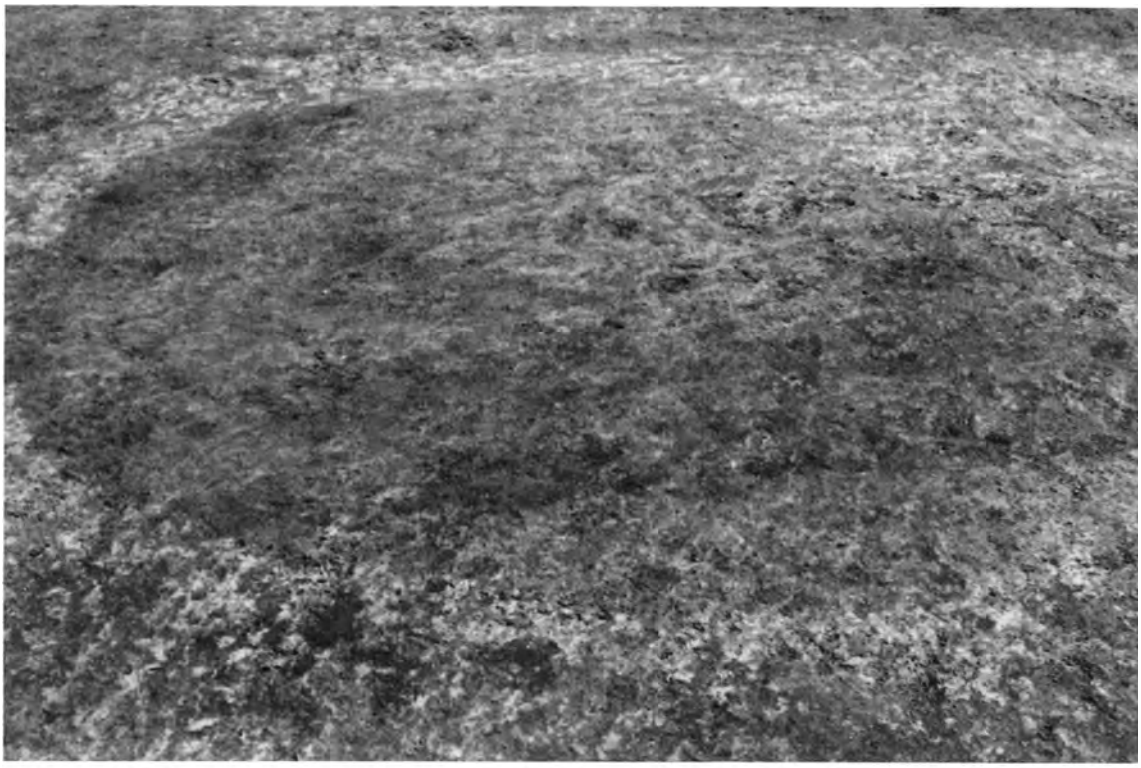
図　版　目　次

1　遺跡遠景(東より)…… 273
2　遺跡遠景(北より)…… 273
3　１号住居跡検出状況…… 274
4　１号住居跡完掘状況…… 274
5　１号住居跡…… 275
6　３号住居跡全景…… 276
7　４号住居跡全景…… 276
8　５号住居跡全景…… 277
9　５号住居跡炉セクション…… 277
10　７号住居跡全景…… 278
11　７号住居跡遺物出土状況…… 278
12　９号住居跡全景…… 279
13　１号炉跡全景…… 279
14　１号炉跡…… 280
15　２号焼土遺構…… 280
16　埋　甕…… 281
17　土坑(ＳＫ２・５～10・13)…… 282
18　15号土坑…… 283
19　20号土坑…… 283
20　土坑(ＳＫ23・27～29・31～36)…… 284
21　土坑(ＳＫ38～40・44)…… 285
22　土坑(ＳＫ46・47・51・54・55・66)…… 286
23　土坑(ＳＫ72～74・77・78)…… 287
24　調査区北側全景…… 288
25　調査区南東側全景…… 288
26　第１遺物包含層…… 289
27　第２遺物包含層…… 290
28　第４遺物包含層…… 291
29　１号竪穴状遺構…… 291
30　２号竪穴状遺構…… 292
31　２号住居跡完掘状況…… 292
32　２号住居跡遺物出土状況…… 293
33　１号掘立柱建物跡…… 293
34　２号掘立柱建物跡…… 294
35　３号土坑…… 294
36　１・７号住居跡・２～５号埋甕・15号土坑
　出土縄文土器…… 295
37　15・20・38・64・72号土坑出土縄文土器…… 296
38　72号土坑・第１遺物包含層出土縄文土器…… 297
39　第１遺物包含層出土縄文土器…… 298
40　第１遺物包含層出土縄文土器…… 299
41　第１遺物包含層出土縄文土器…… 300
42　第１遺物包含層出土縄文土器…… 301
43　第１遺物包含層出土縄文土器…… 302
44　第１～３遺物包含層出土縄文土器…… 303
45　第４遺物包含層・試掘８Ｔ(住居跡)出土
　縄文土器…… 304
46　第１遺物包含層・遺構外・試掘８Ｔ(住居跡)
　出土縄文土器…… 305
47　１号炉跡・ピット群出土縄文土器…… 306
48　第１遺物包含層出土Ⅰ群土器…… 306
49　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 307
50　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 307
51　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 308
52　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 308
53　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 309
54　第１遺物包含層出土Ⅱ群土器…… 309
55　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 310
56　第１遺物包含層出土Ⅲ群土器…… 310
57　第１遺物包含層出土Ⅵ群土器…… 311
58　第１遺物包含層出土Ⅶ群土器…… 311
59　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 312
60　第１遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 312
61　第１遺物包含層出土Ⅹ群土器…… 313
62　第１遺物包含層出土Ⅹ群土器…… 313
63　第２遺物包含層出土Ⅰ・Ⅱ群土器…… 314
64　第２遺物包含層出土Ⅱ～Ⅳ・Ⅷ群土器…… 314
65　第２遺物包含層出土Ⅷ群土器…… 315
66　第４遺物包含層出土Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ群土器…… 315
67　第１遺物包含層出土土偶…… 316
68　第１遺物包含層出土土偶…… 316
69　第１遺物包含層出土土偶…… 317
70　第１遺物包含層出土土偶・人面状突起・
　土製品…… 318
71　第１・４遺物包含層・遺構外出土土偶・
　人面状突起・土製品…… 319
72　第１遺物包含層出土人面・獣面状突起(外面)… 320
73　第１遺物包含層出土人面・獣面状突起(内面)… 320
74　第１・２遺物包含層出土人面・獣面状突起
　(外面)…… 321
75　第１・２遺物包含層出土人面・獣面状突起
　(内面)…… 321
76　七郎内Ｃ遺跡出土石鏃…… 322
77　七郎内Ｃ遺跡出土石鏃…… 323
78　七郎内Ｃ遺跡出土大珠・石斧・他…… 324
79　39号土坑出土琥珀玉…… 324
80　七郎内Ｃ遺跡出土石皿・他…… 325
81　第１遺物包含層・遺構外出土磨石・凹石…… 326
82　第１遺物包含層・遺構外出土磨石・凹石…… 326
83　七郎内Ｃ遺跡出土弥生式土器…… 327
84　２号住居跡・３号土坑出土土師器…… 327



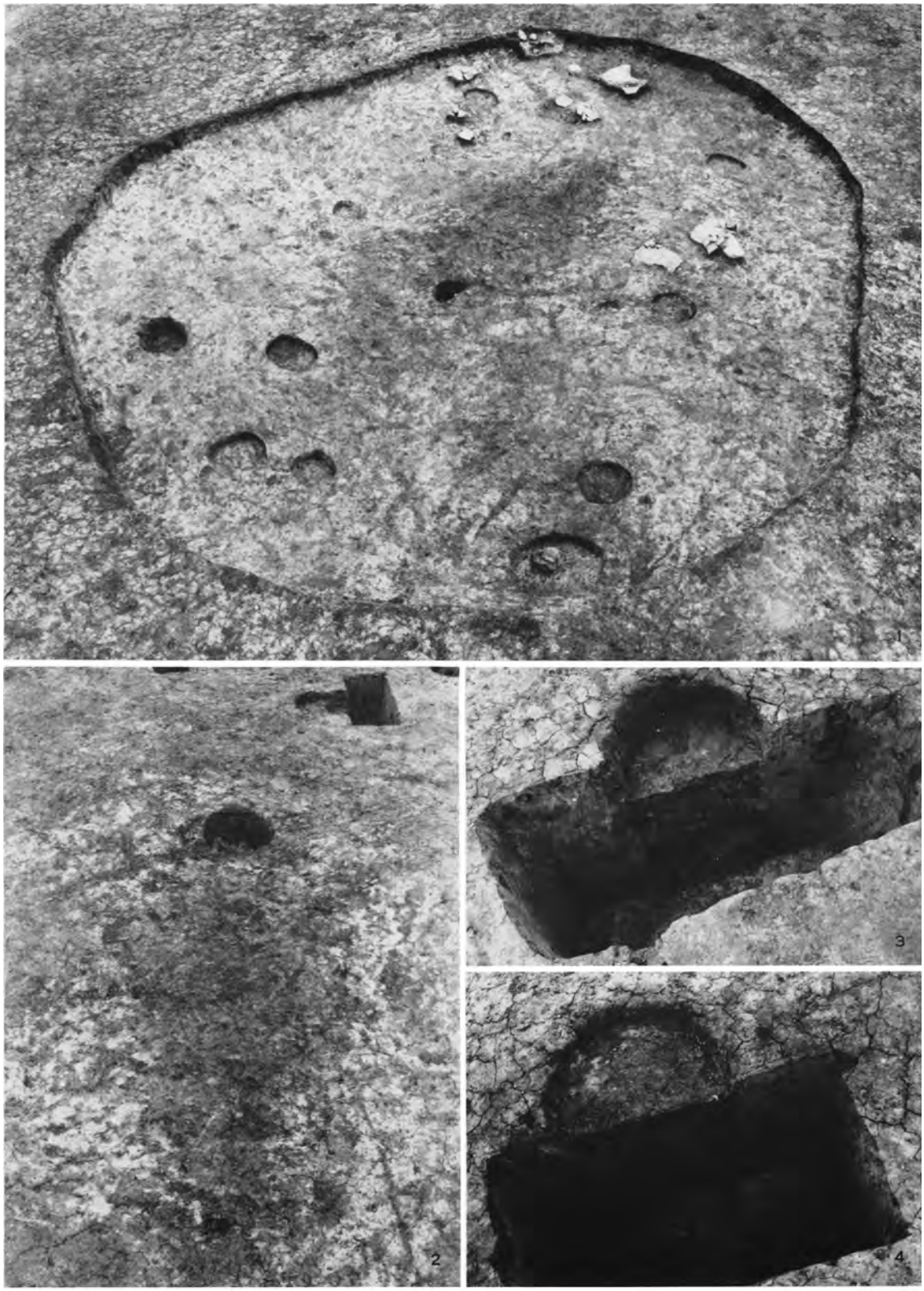
1　遺跡遠景（東より）

2　遺跡遠景（北より）



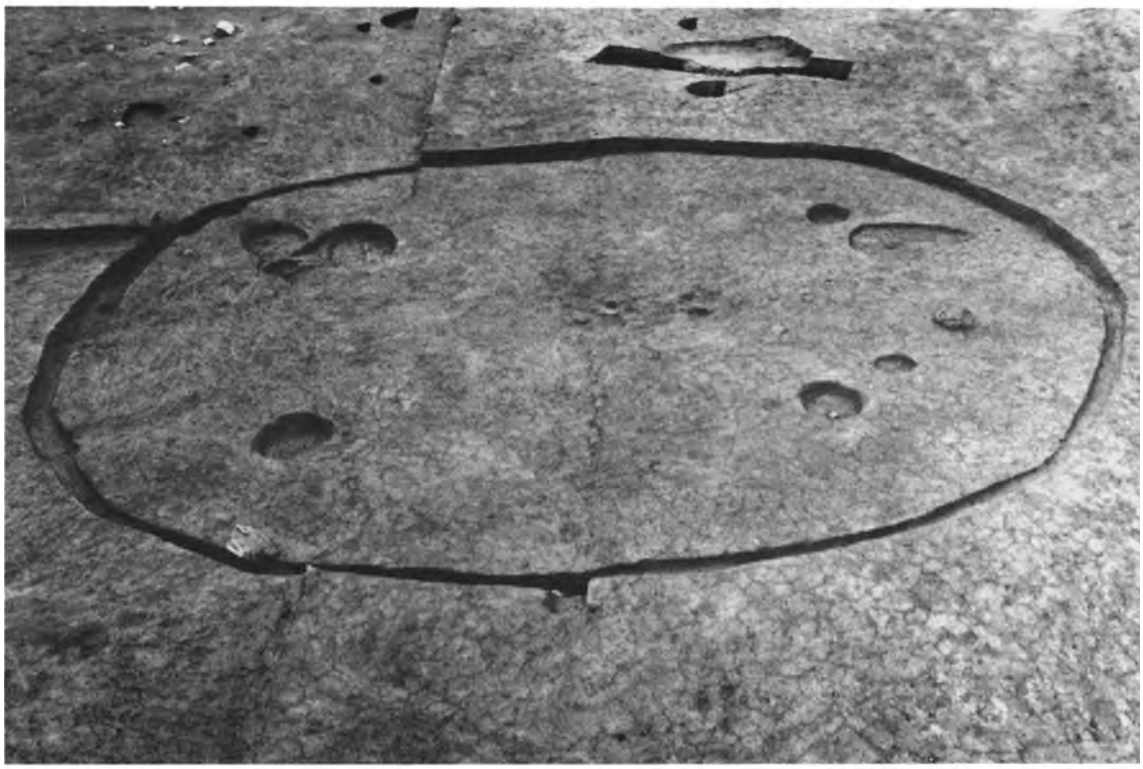
3　1号住居跡検出状況

4　1号住居跡完掘状況



5　１号住居跡　　1. 遺物出土状況
2. 炉
3. 柱穴断面（P_4）
4. 柱穴断面（P_6）

6　3号住居跡全景

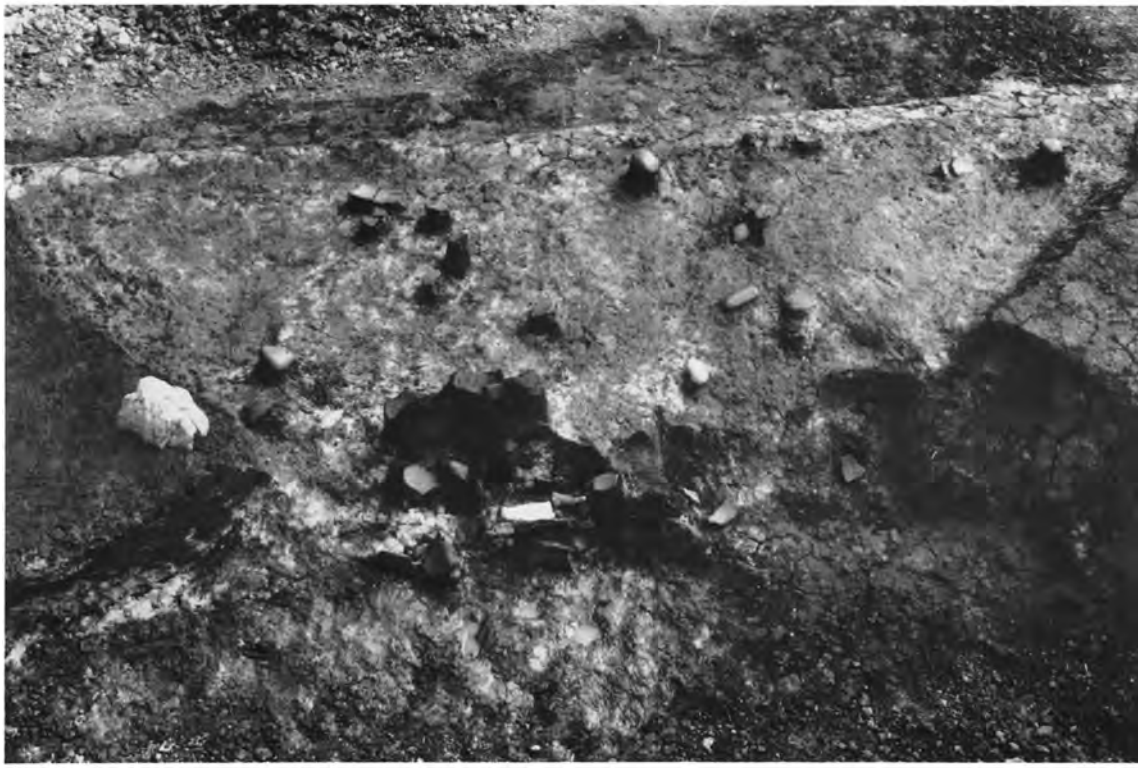


7　4号住居跡全景

8　５号住居跡全景

9　５号住居跡炉セクション

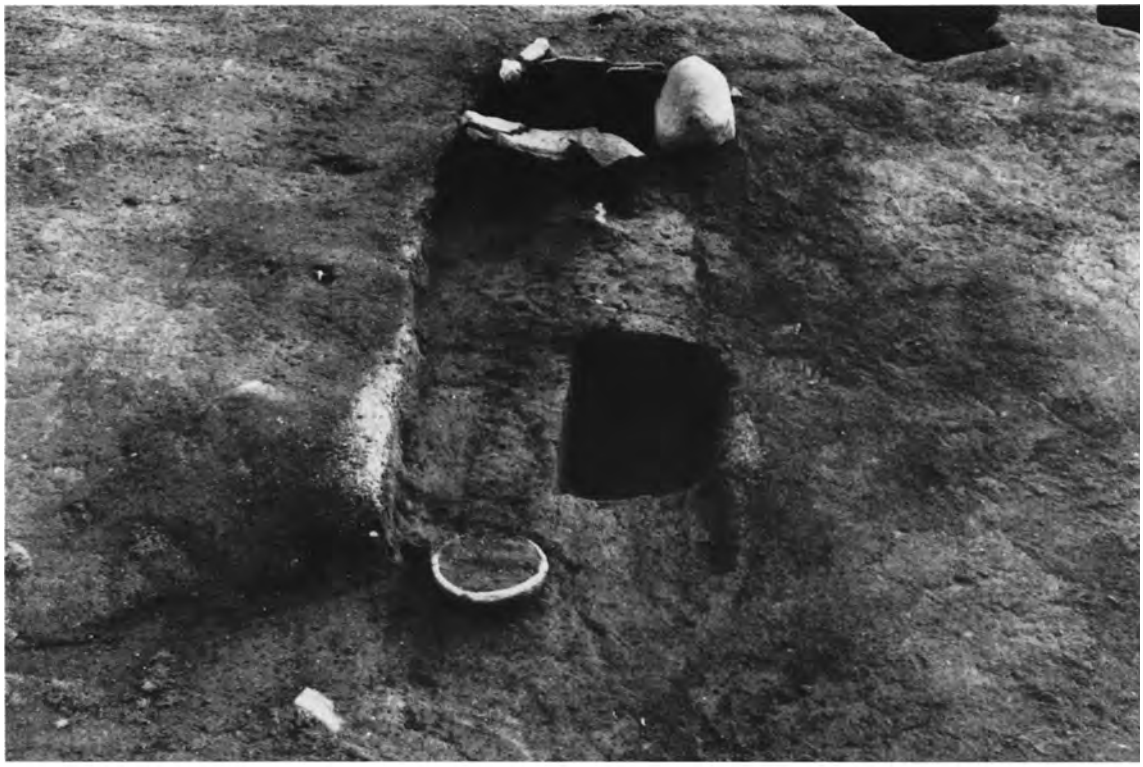
10　7号住居跡全景



11　7号住居跡遺物出土状況

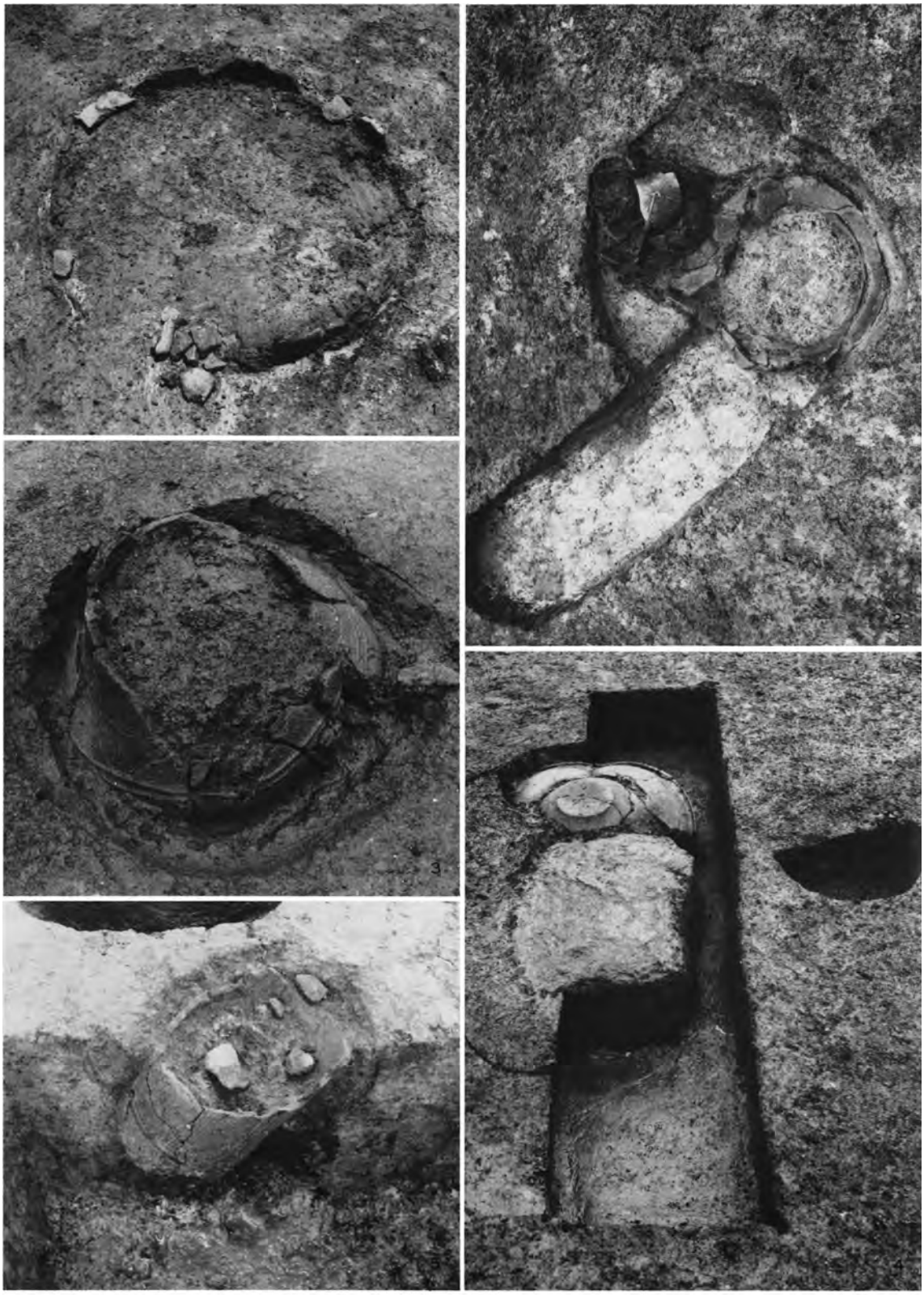
12　９号住居跡全景

13　１号炉跡全景

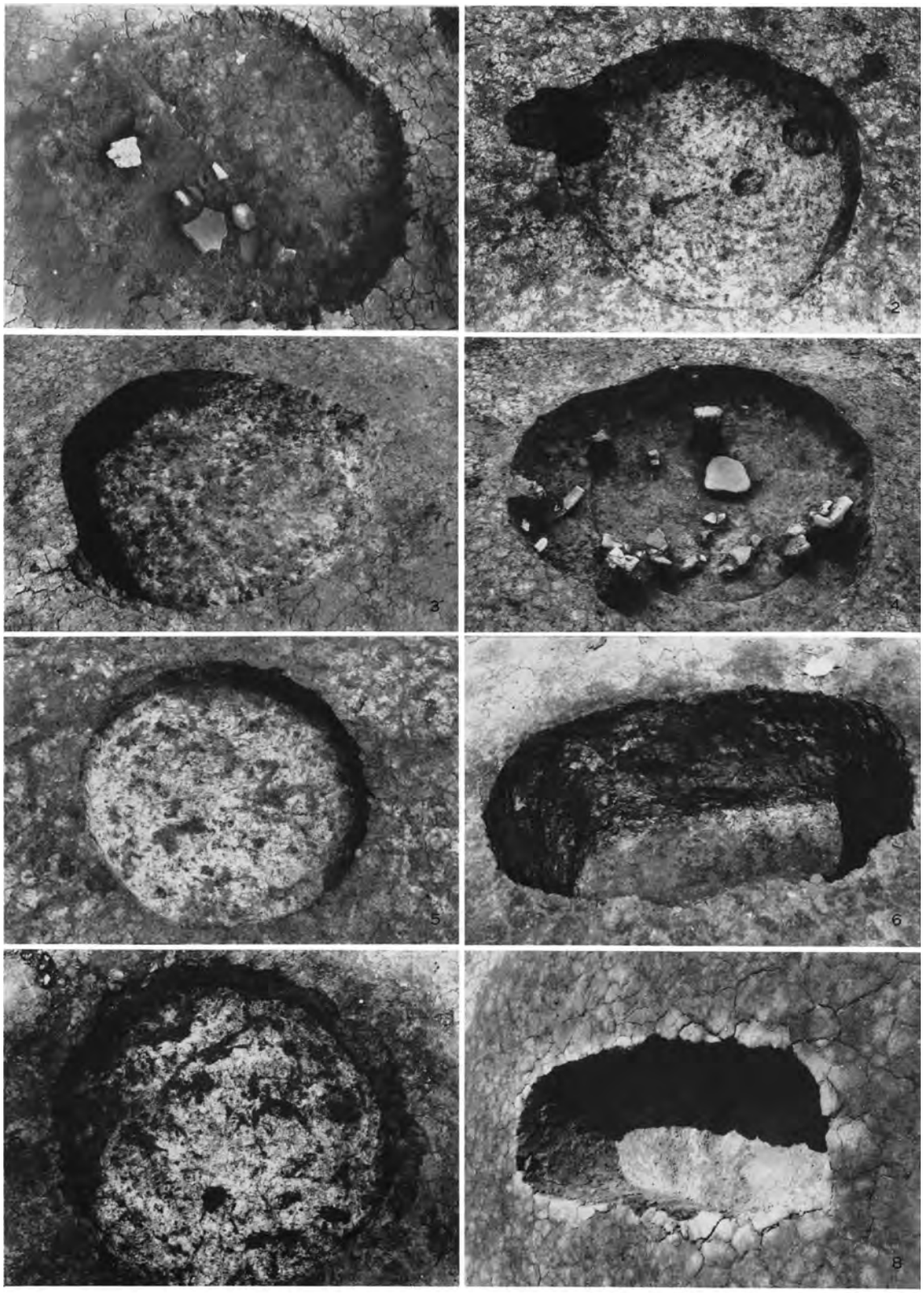


14　1号炉跡

15　2号焼土遺構



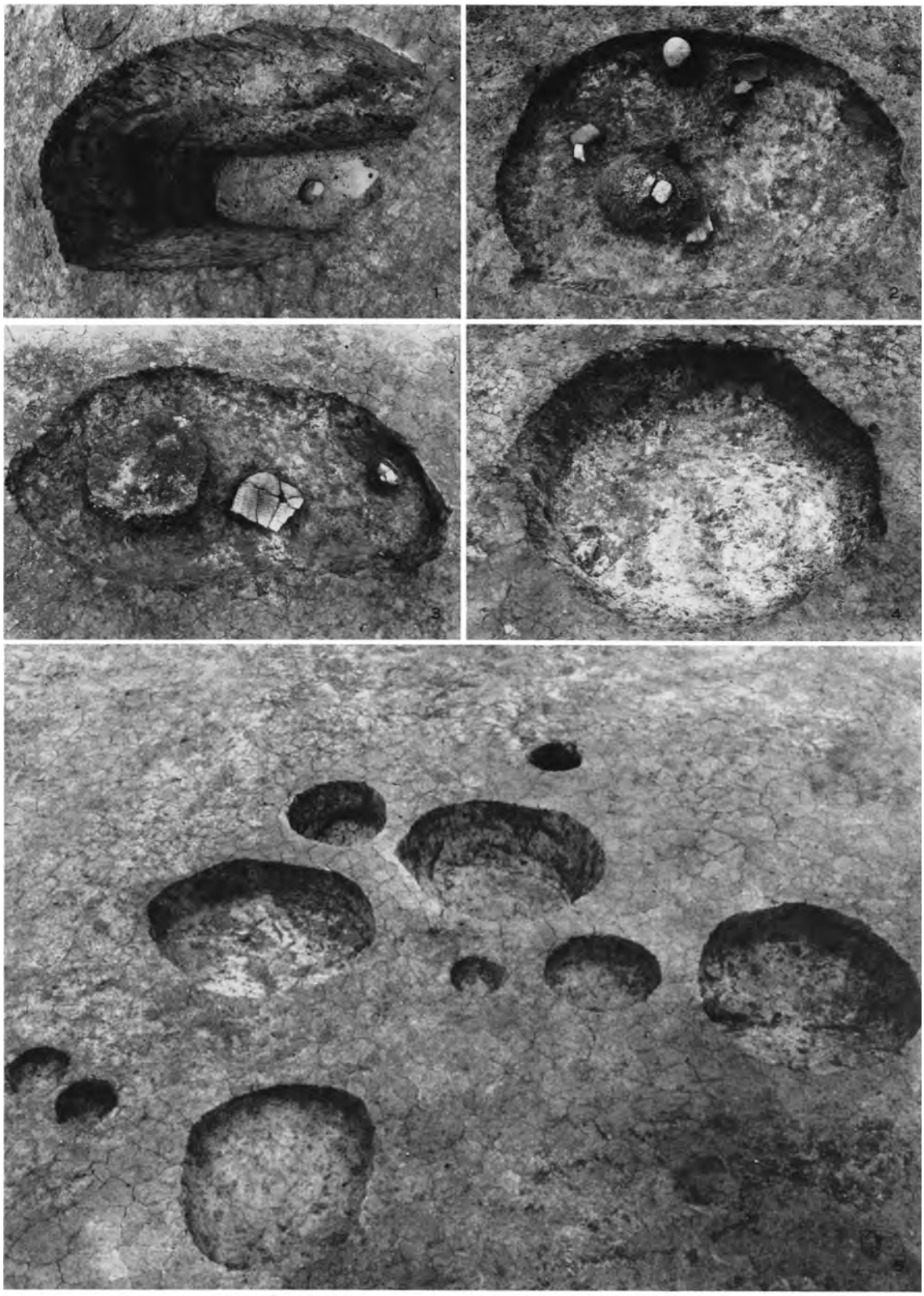
16　埋　甕　　1．1号埋甕　3．3号埋甕　5．5号埋甕
2．2号埋甕　4．4号埋甕



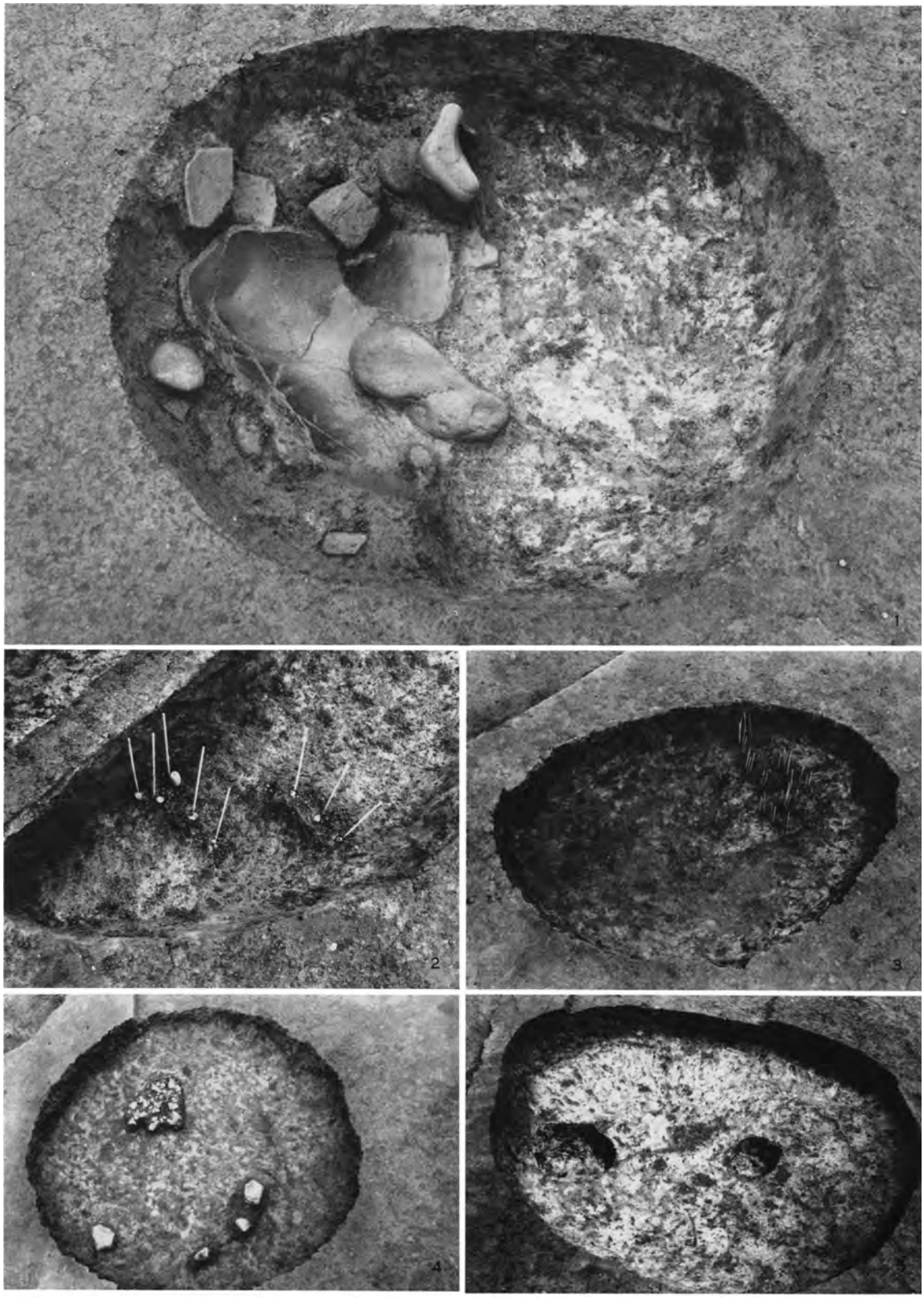
17 土　　坑　　1. 2号土坑　3. 6号土坑　5. 8号土坑　7. 10号土坑
2. 5号土坑　4. 7号土坑　6. 9号土坑　8. 13号土坑

18　15号土坑

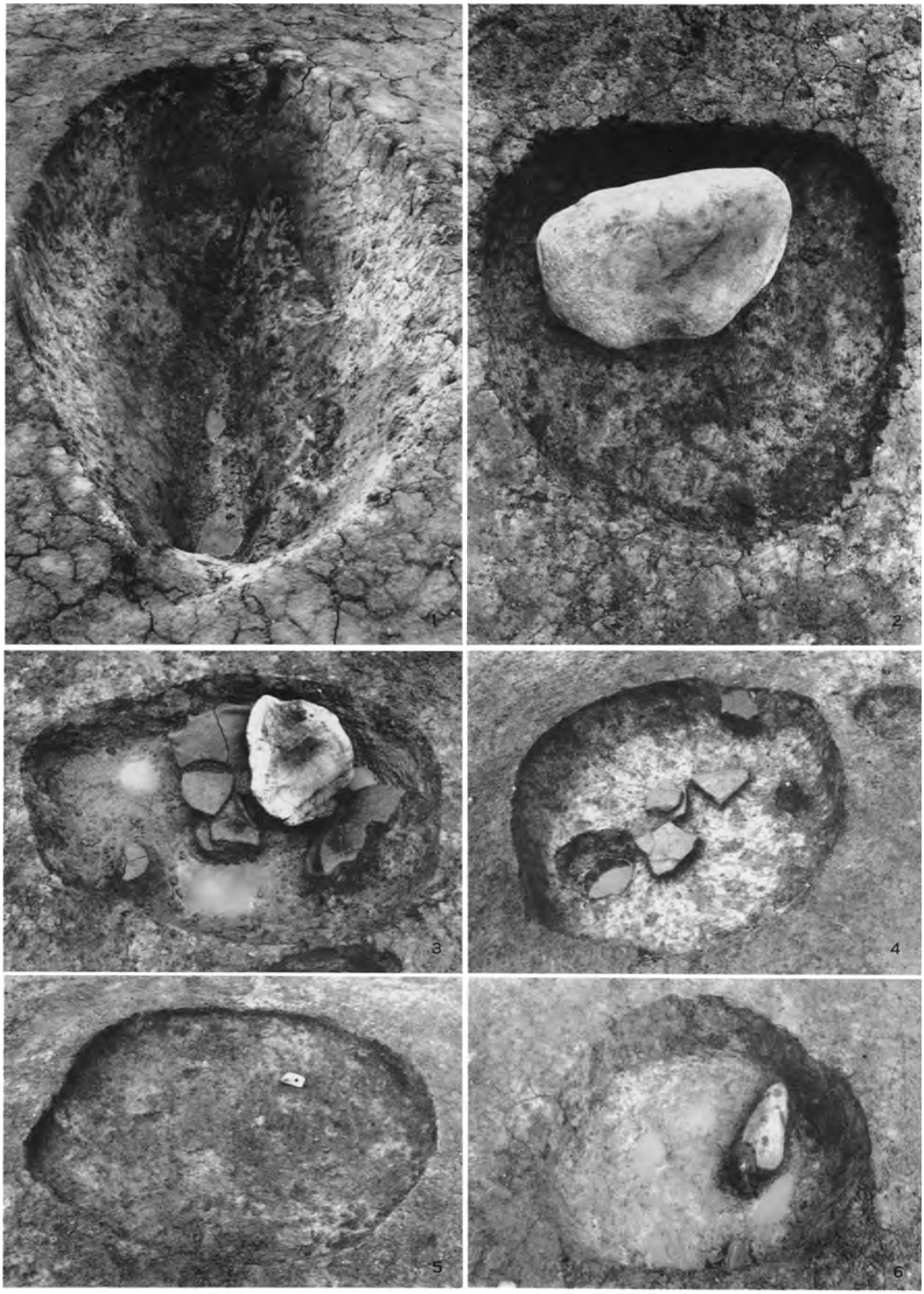
19　20号土坑



20 土　　坑　　1.23号土坑　3.28号土坑　5.31～36号土坑
2.27号土坑　4.29号土坑



21　土　　坑　　1.38号土坑　　3.39号土坑　　5.44号土坑
2.39号土坑(琥珀玉出土状況)　　4.40号土坑



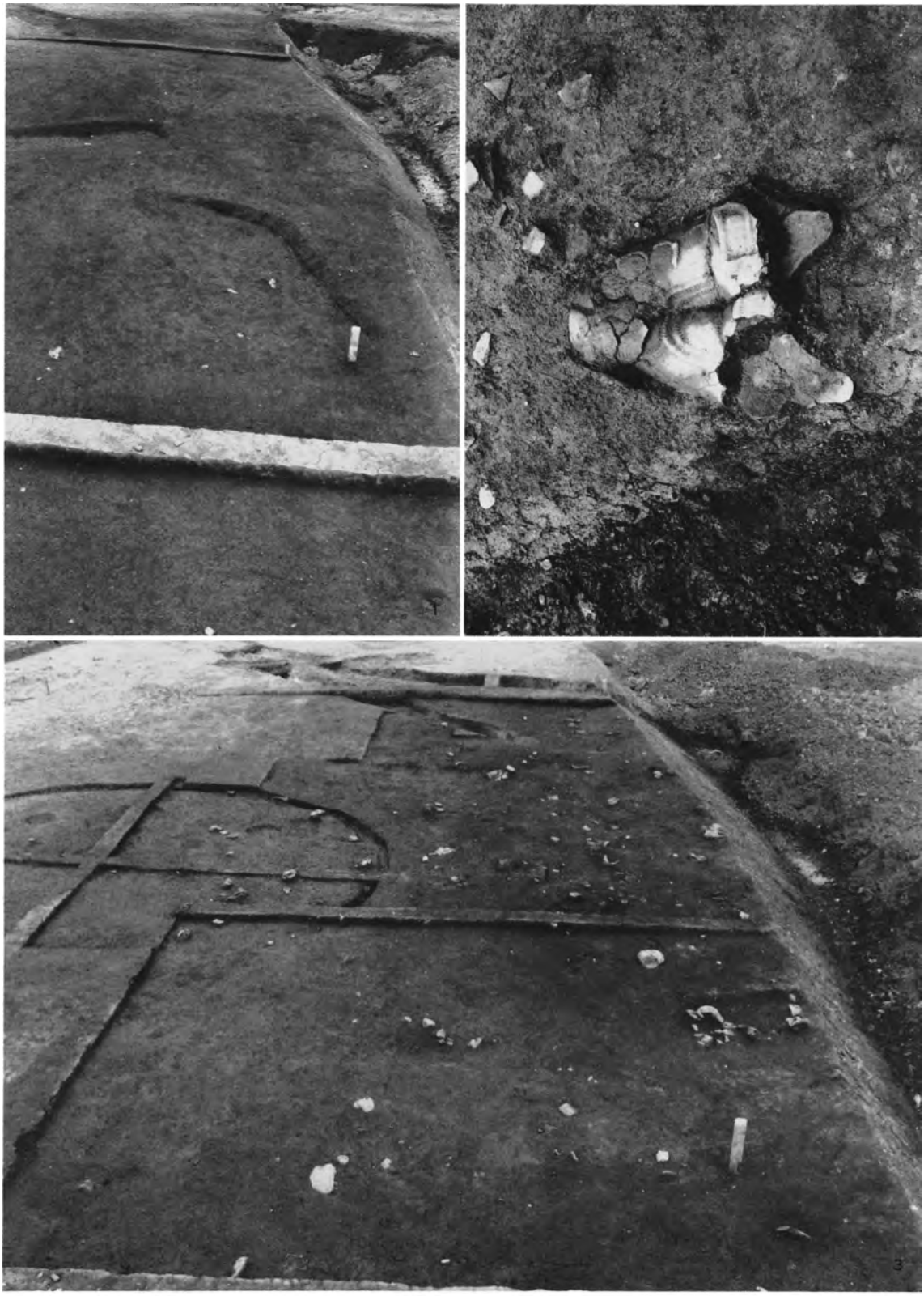
22 土　　坑　　1.46号土坑　3.51号土坑　5.55号土坑
2.47号土坑　4.54号土坑　6.66号土坑

23　土　　坑　　1.72号土坑　3.74号土坑　5.78号土坑
2.73号土坑　4.77号土坑

24　調査区北側全景

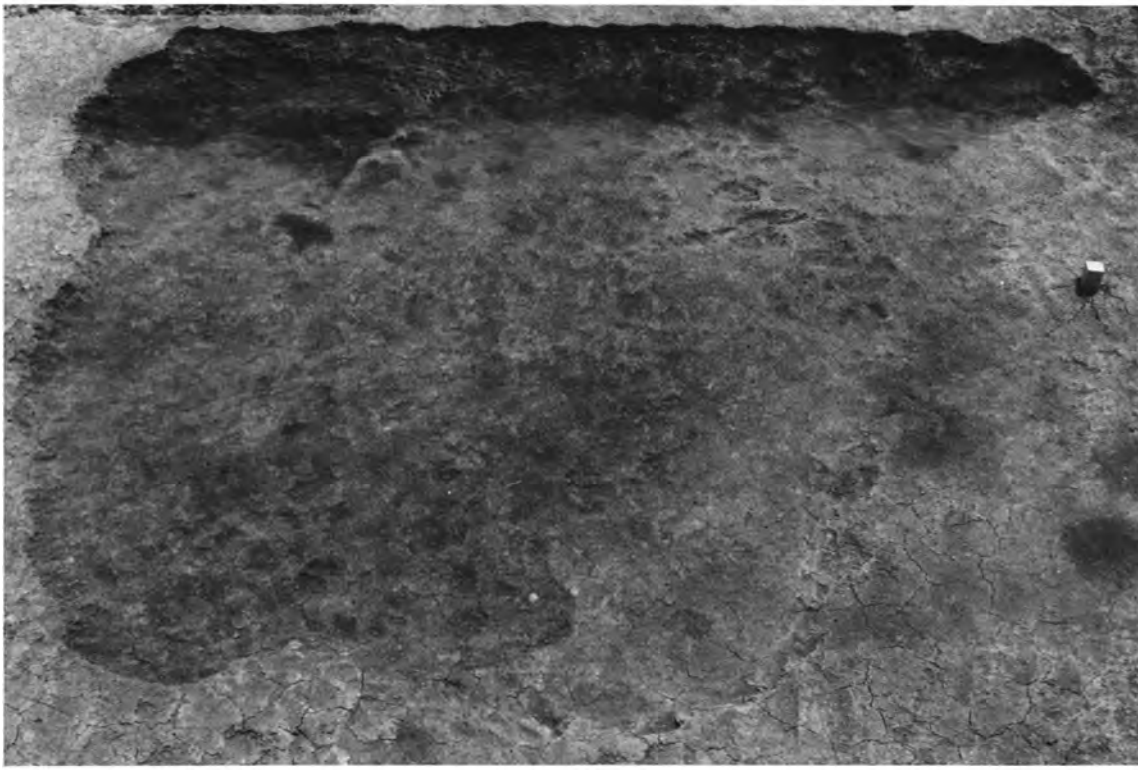
25　調査区南東側全景

26　第１遺物包含層　　1.遠景　3.遺物出土状況
2.全景　4.セクション



27　第２遺物包含層　　1.全景　　2.出土遺物　　3.遺物出土状況

28　第４遺物包含層　　1.全景
2.遺物出土状況



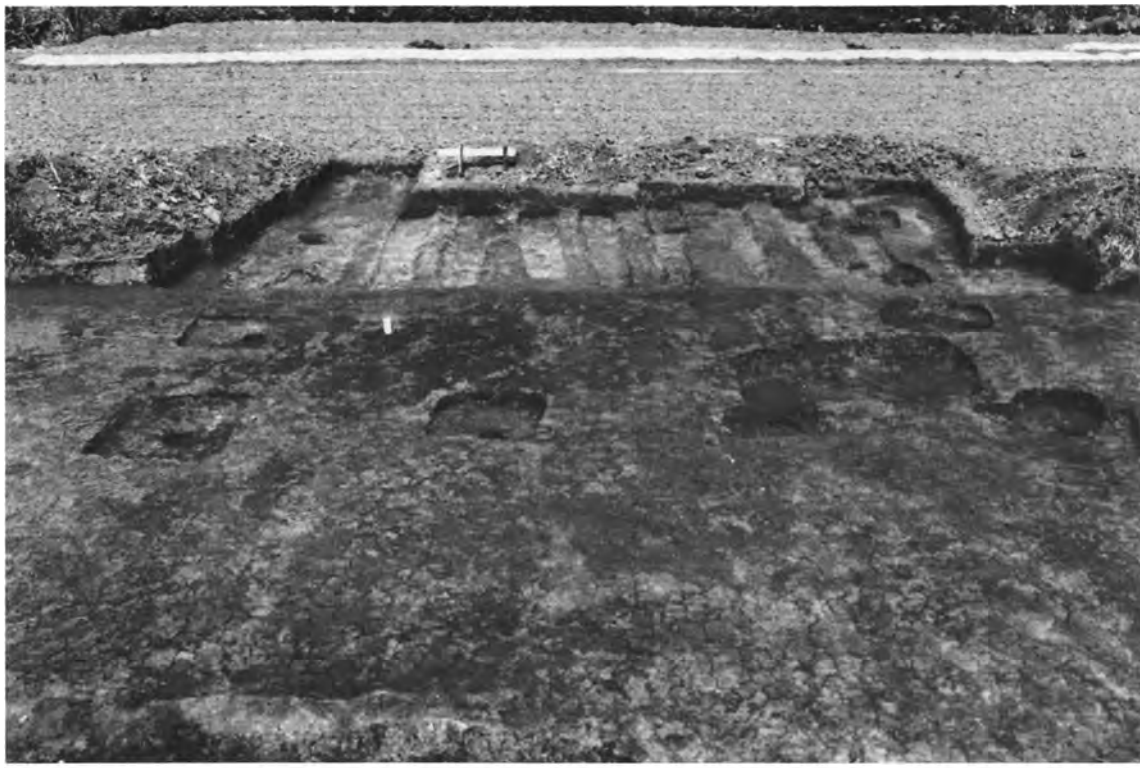
29　１号竪穴状遺構

30　2号竪穴状遺構

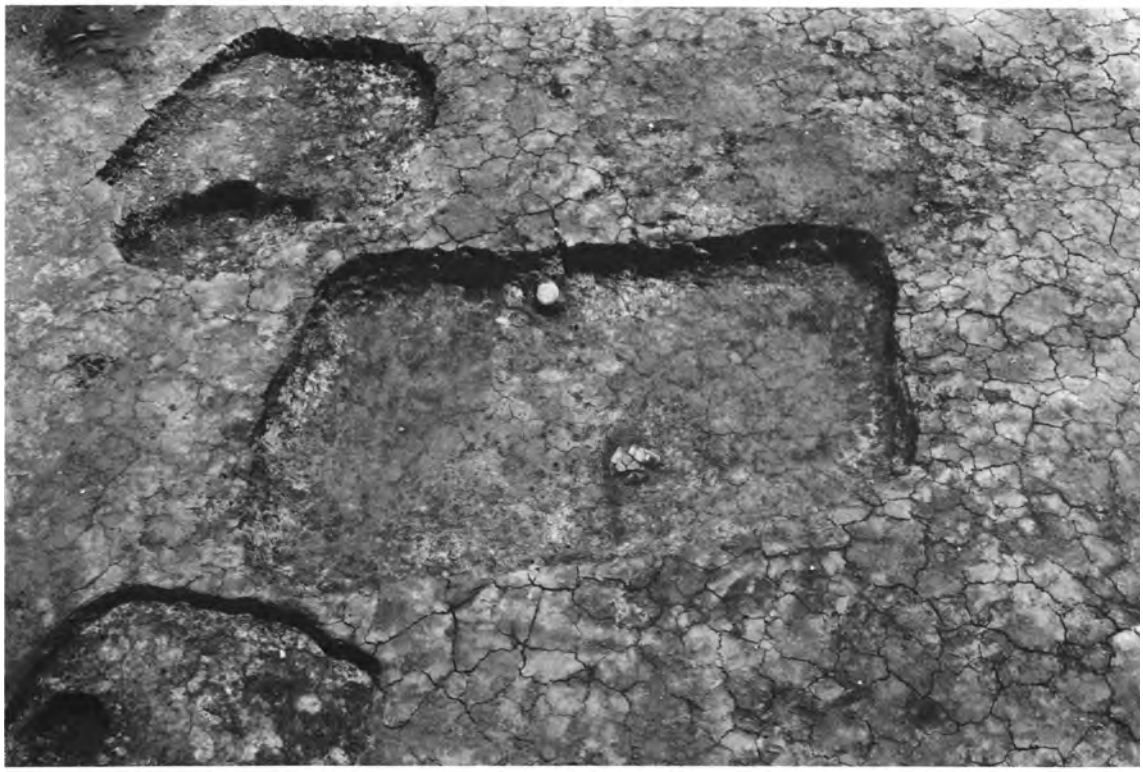
31　2号住居跡完掘状況

32　２号住居跡遺物出土状況

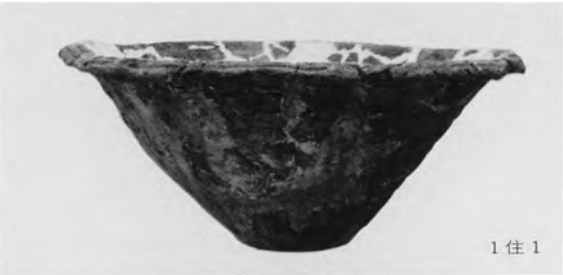
33　１号掘立柱建物跡



34　2号掘立柱建物跡



35　3号土坑



36　1･7号住居跡・2～5号埋甕・15号土坑出土縄文土器

15坑 3

15坑 4

38坑 1

15坑 5

20坑 1

64坑 1

72坑 2

37 15・20・38・64・72号土坑出土縄文土器

38　72号土坑・第１遺物包含層出土縄文土器

1 包49

1 包48

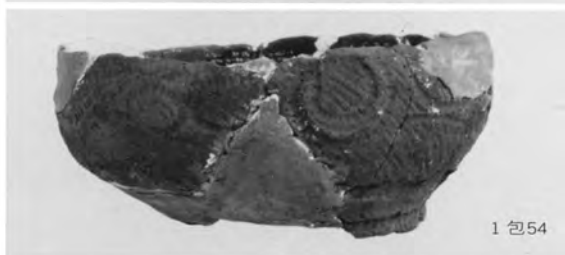
1 包53

1 包52

1 包50

1 包55

1 包57


1 包54

39 第 1 遺物包含層出土縄文土器

40　第１遺物包含層出土縄文土器

41 第 1 遺物包含層出土縄文土器

1 包296

1 包298

1 包297

1 包302

1 包301

1 包312

42　第１遺物包含層出土縄文土器

1 包320

1 包321

1 包326

1 包322

1 包323

1 包391

1 包392

43 第 1 遺物包含層出土繩文土器

1 包394

1 包405

1 包406

2 包13

2 包98

3 包20

44　第1～3遺物包含層出土縄文土器

45 第 4 遺物包含層・試掘8 T（住居跡）出土縄文土器

8Ｔ住１

遺構外１

１包７

１包５

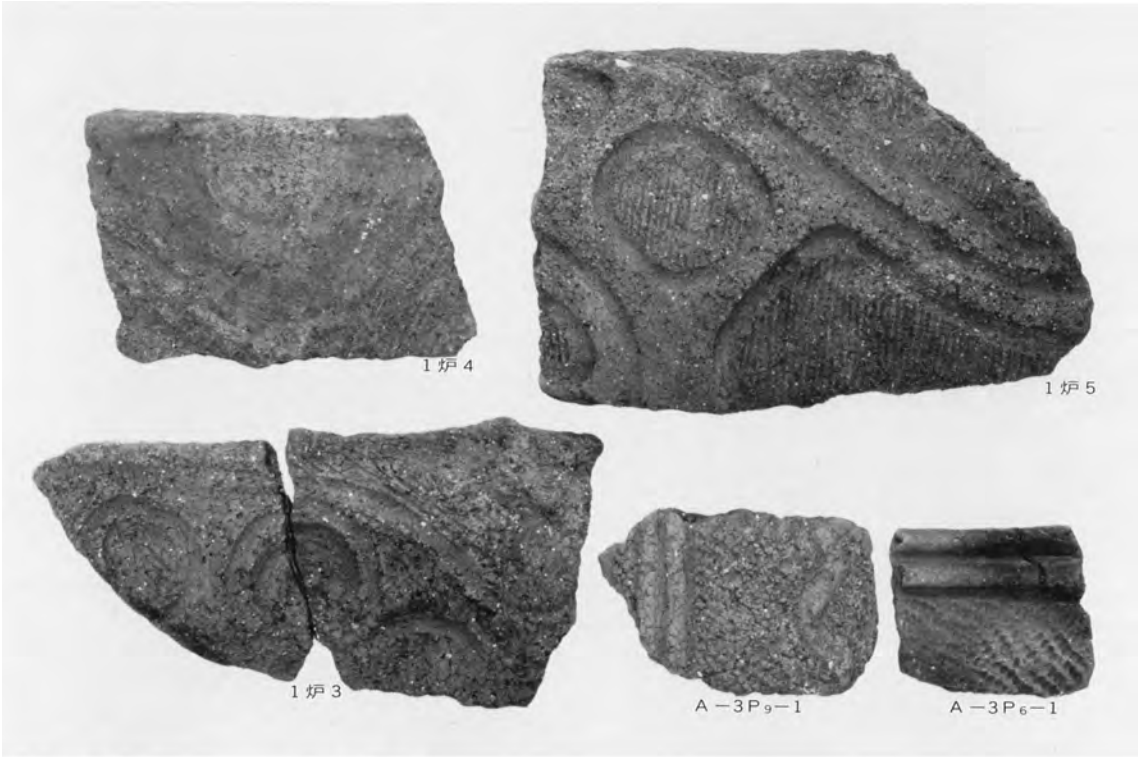
１包６

１包63

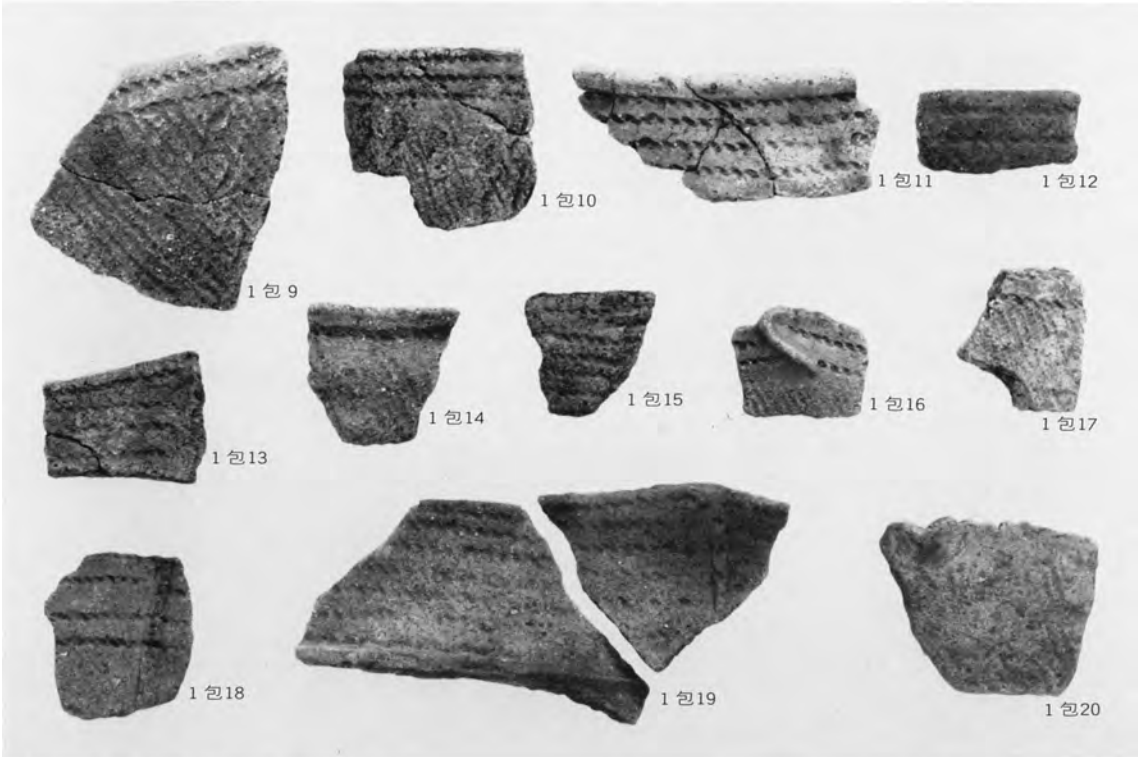
１包199

１包200

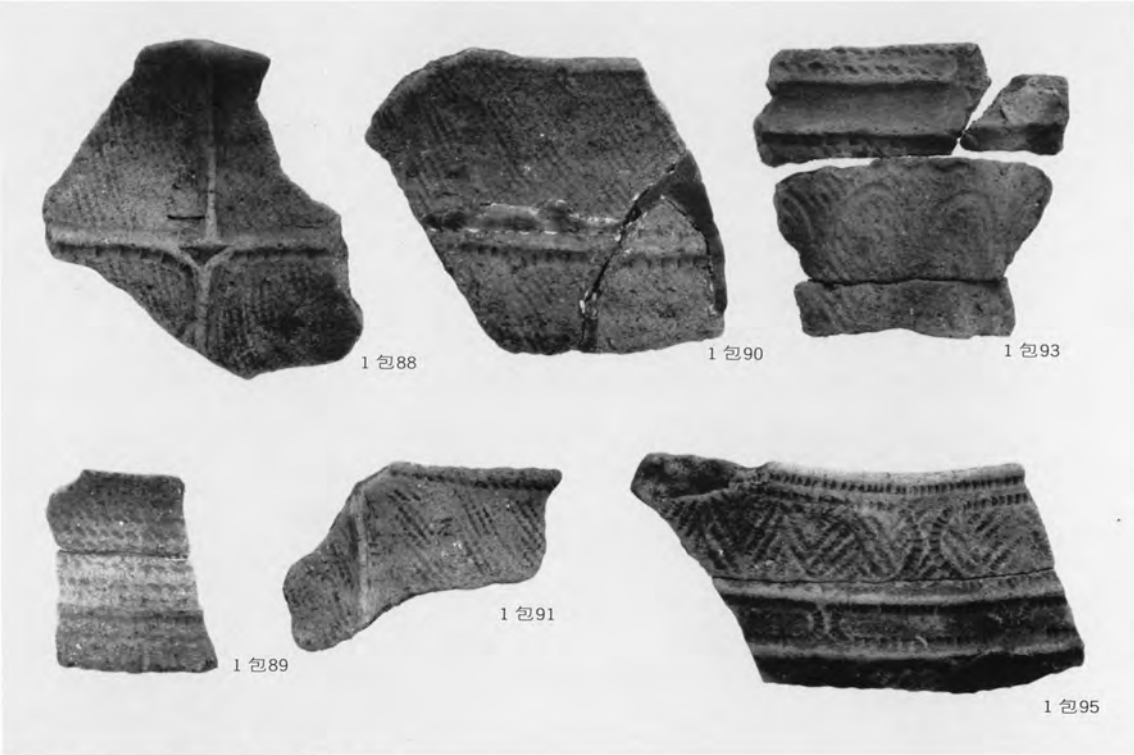
46　第１遺物包含層・遺構外・試掘８Ｔ（住居跡）出土縄文土器



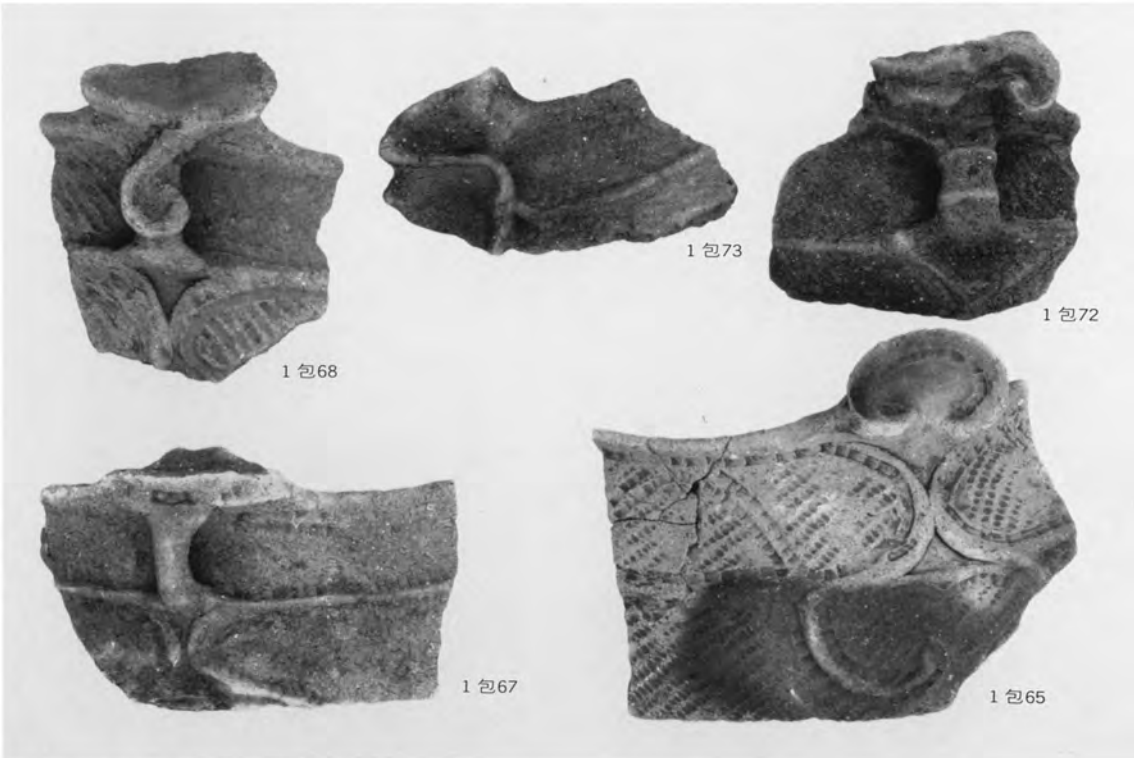
47 1号炉跡・ピット群 出土縄文土器



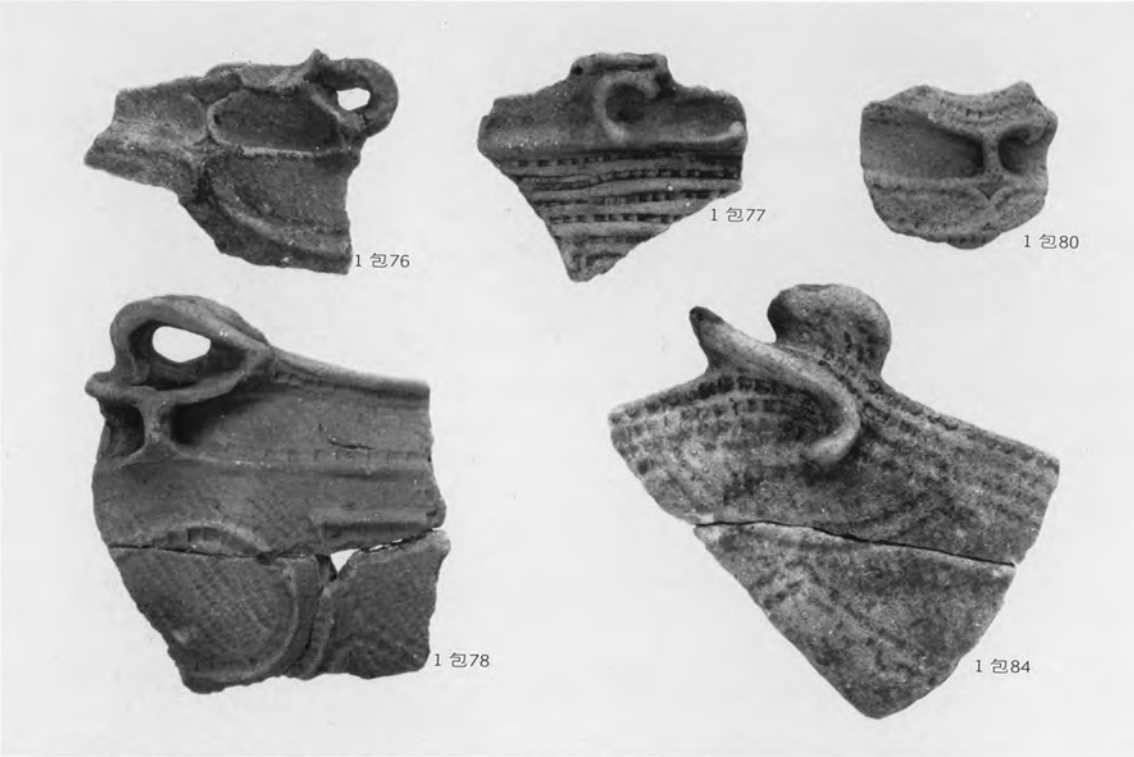
48 第1遺物包含層出土Ⅰ群土器



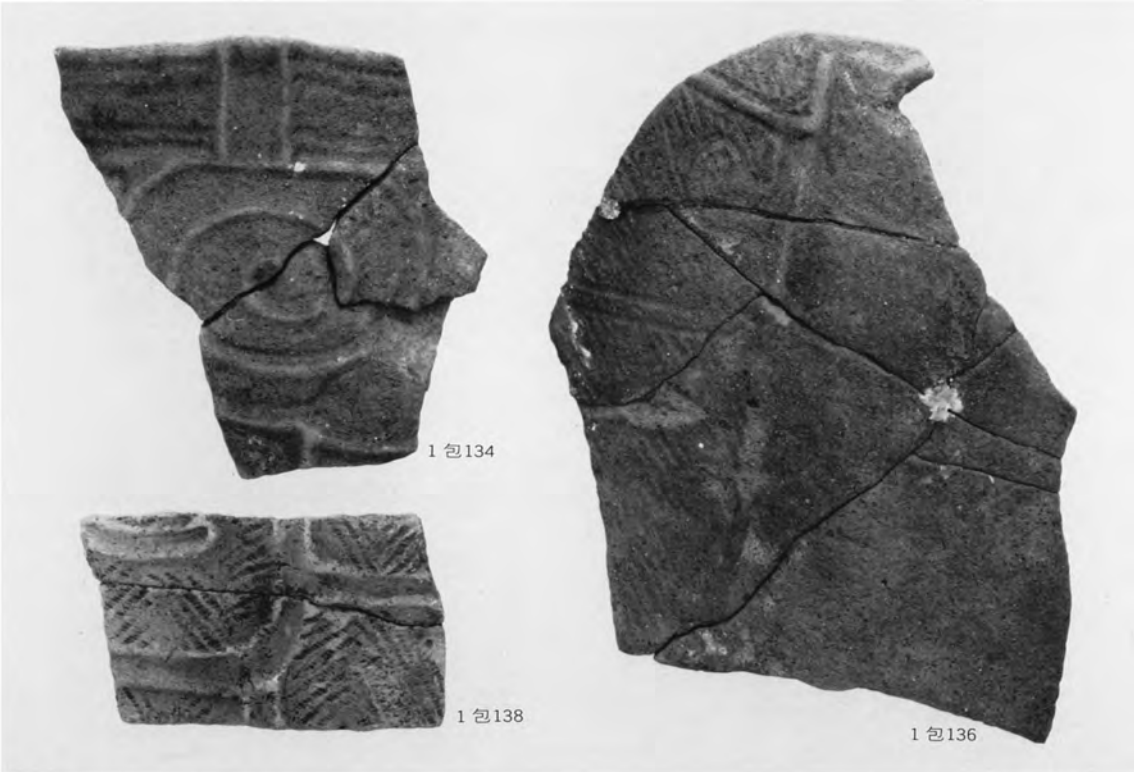
49　第１遺物包含層出土 II 群土器



50　第１遺物包含層出土 II 群土器

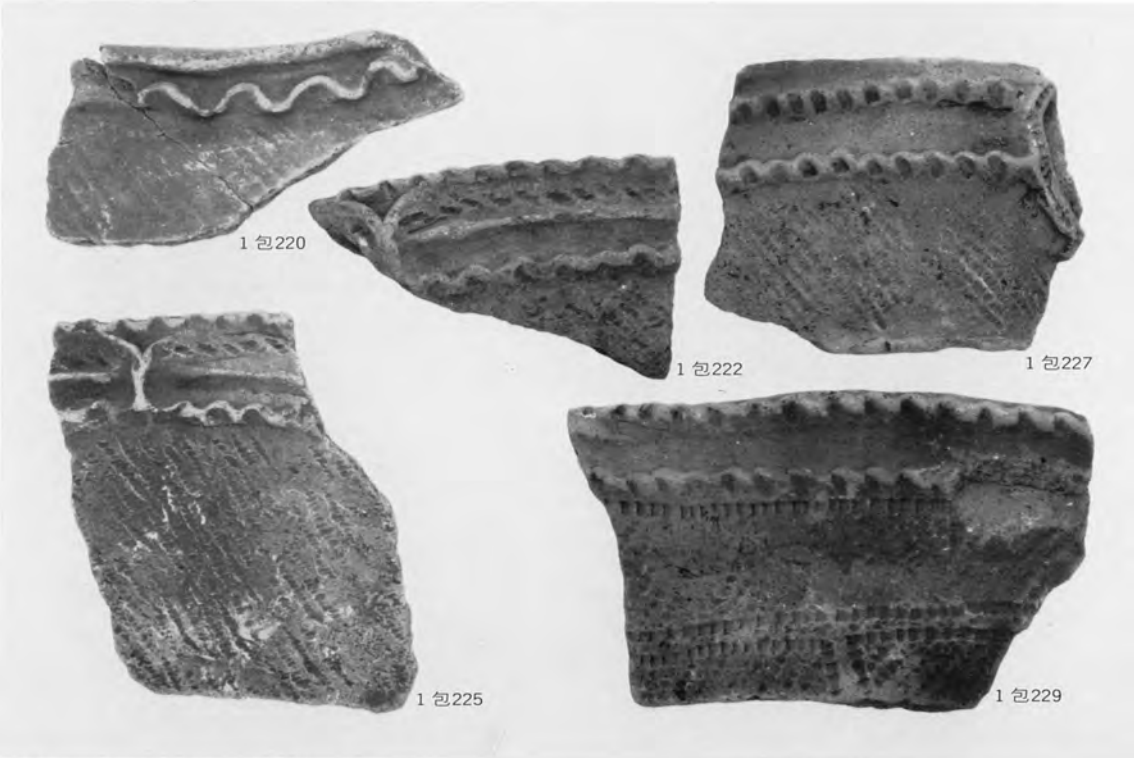


51　第 1 遺物包含層出土 II 群土器

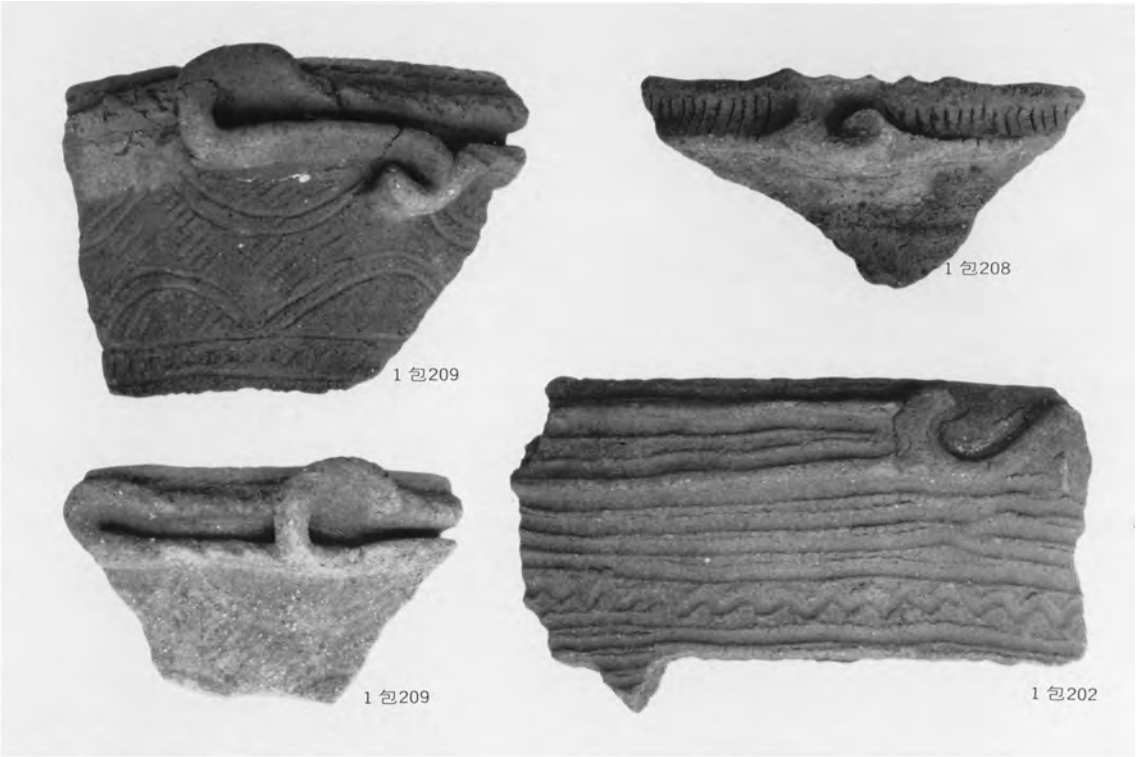


52　第 1 遺物包含層出土 II 群土器

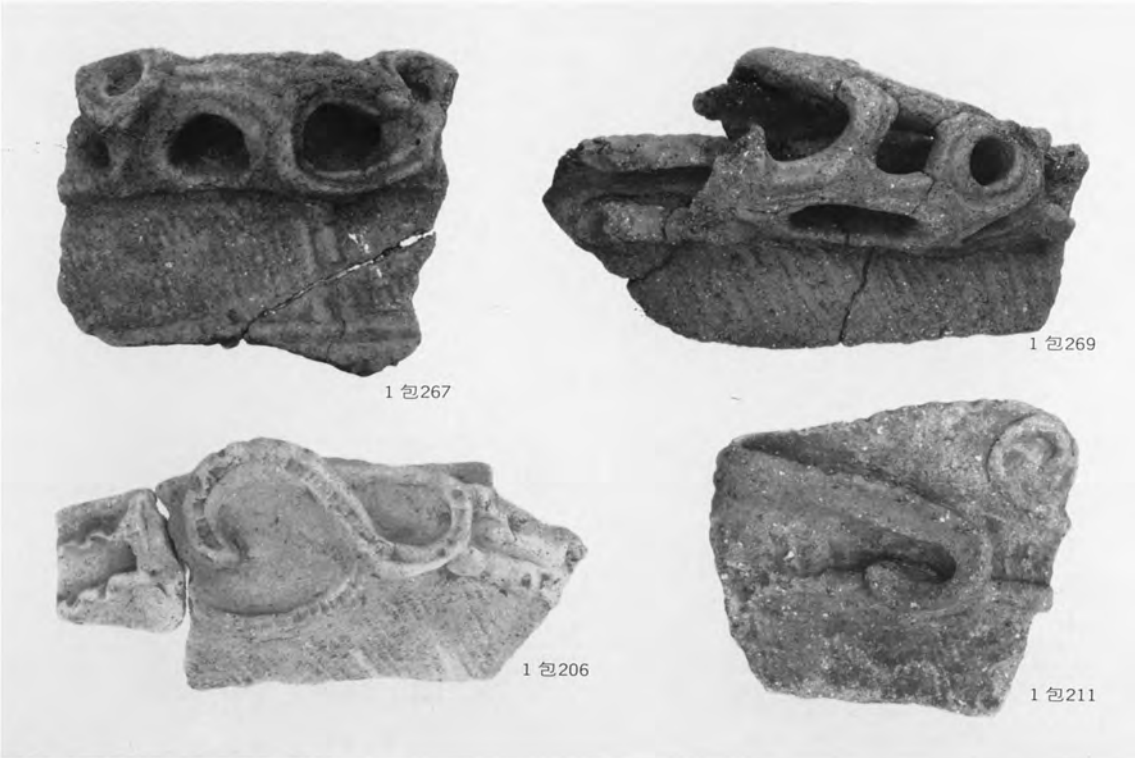
53　第１遺物包含層出土 II 群土器



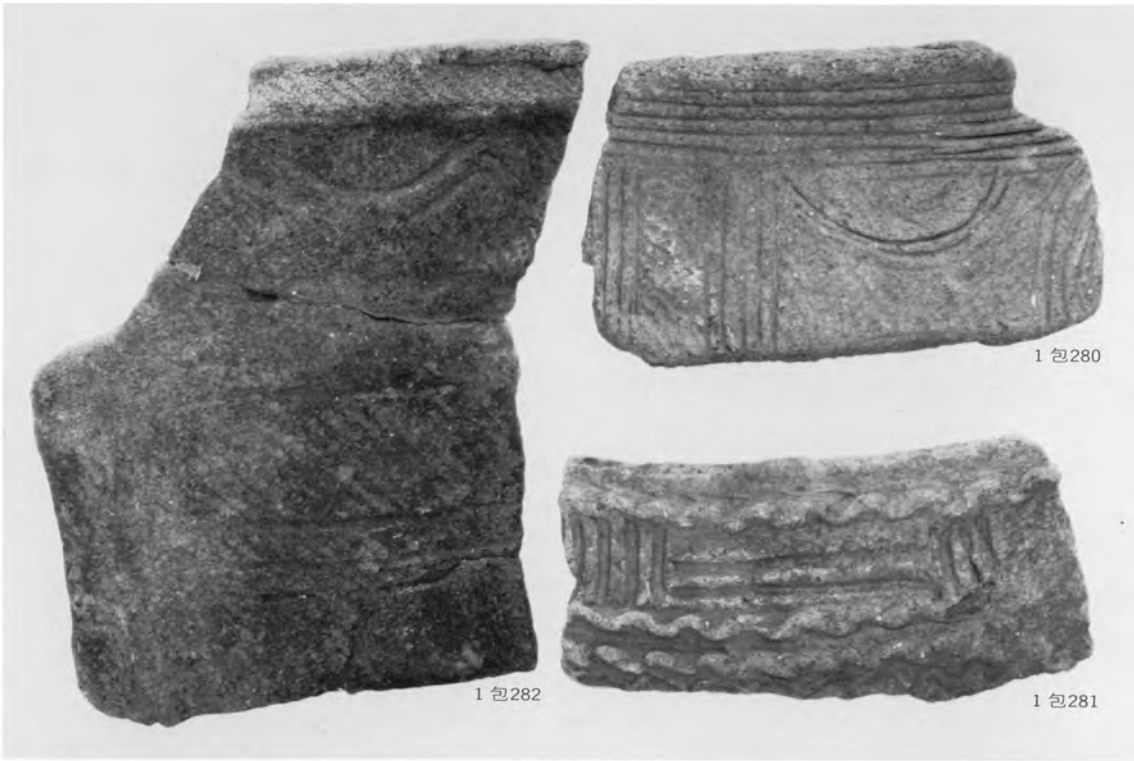
54　第１遺物包含層出土 II 群土器



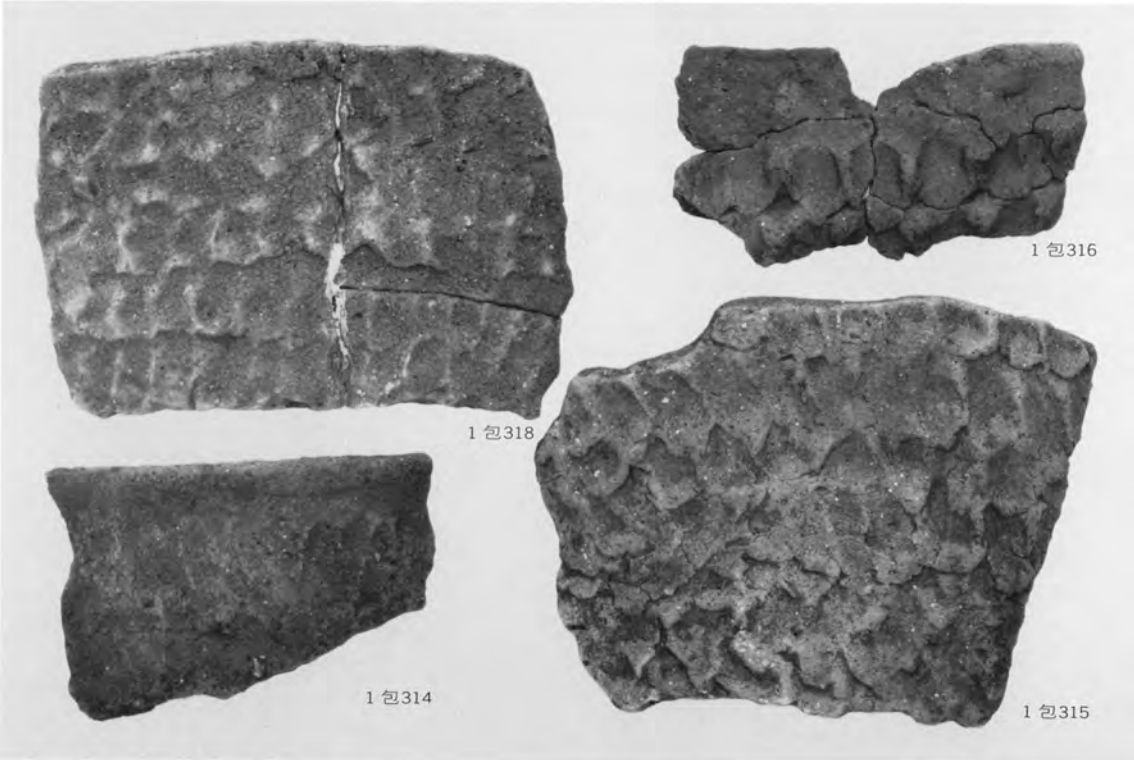
55　第 1 遺物包含層出土Ⅲ群土器



56　第 1 遺物包含層出土Ⅲ群土器



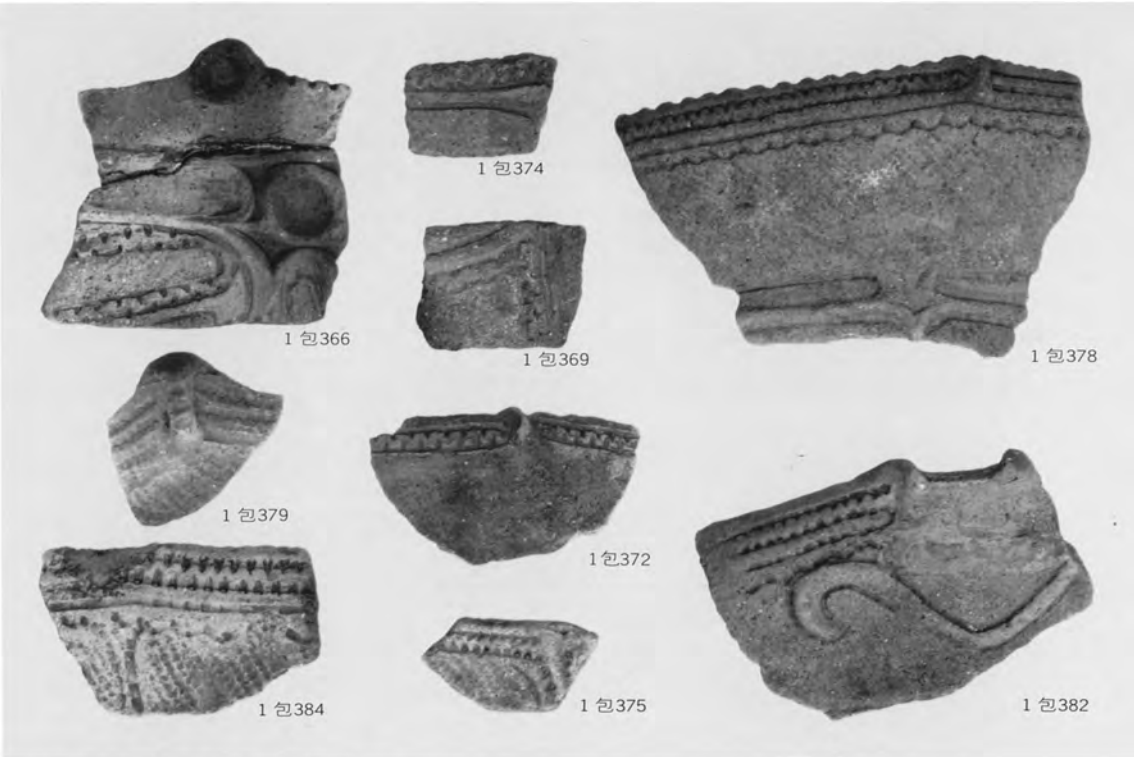
57　第１遺物包含層出土Ⅵ群土器



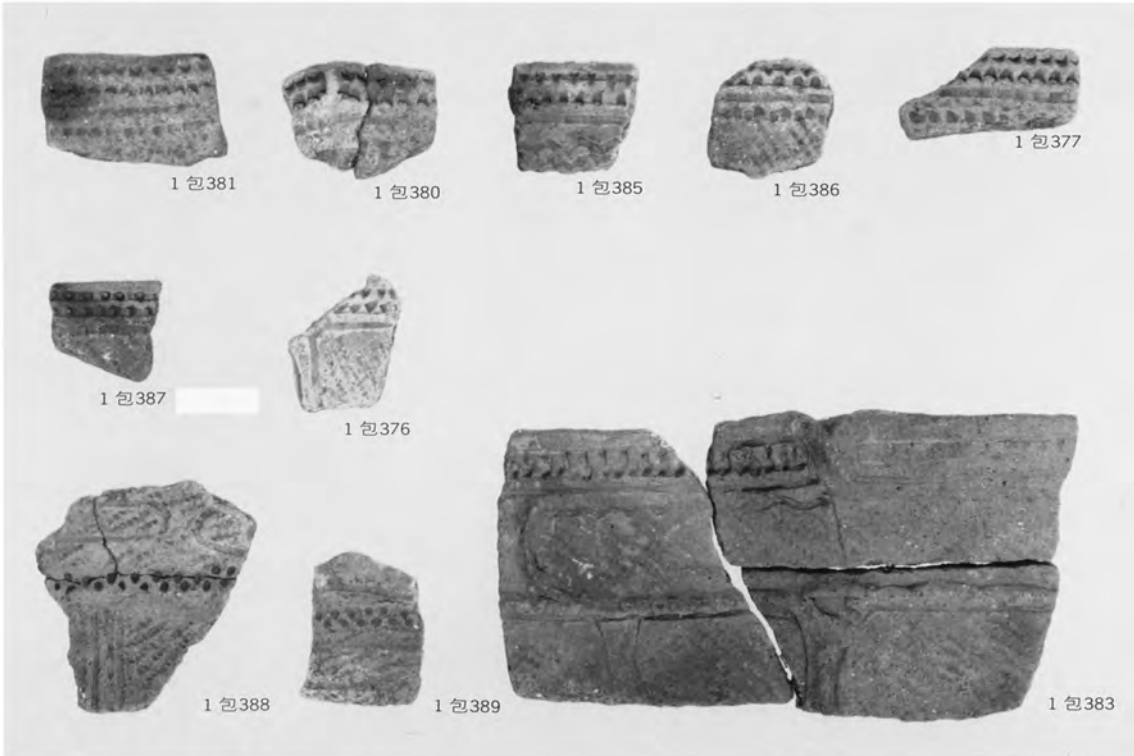
58　第１遺物包含層出土Ⅶ群土器

59　第 1 遺物包含層出土Ⅷ群土器

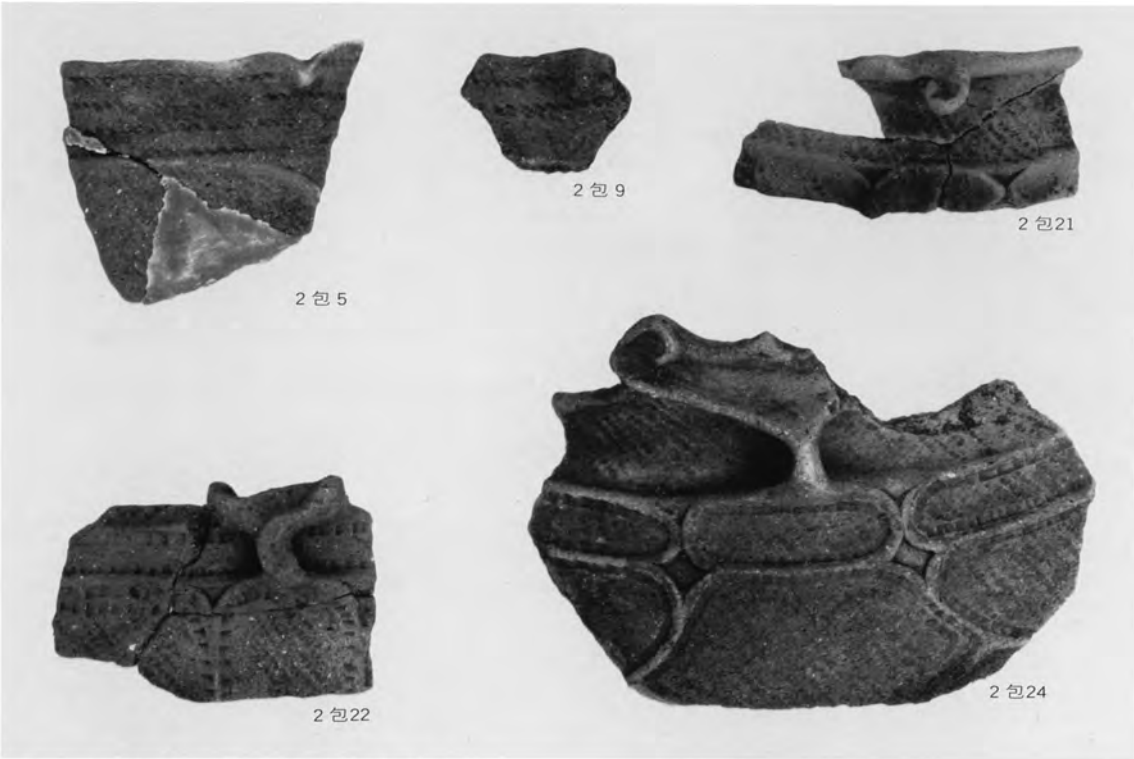
60　第 1 遺物包含層出土Ⅷ群土器



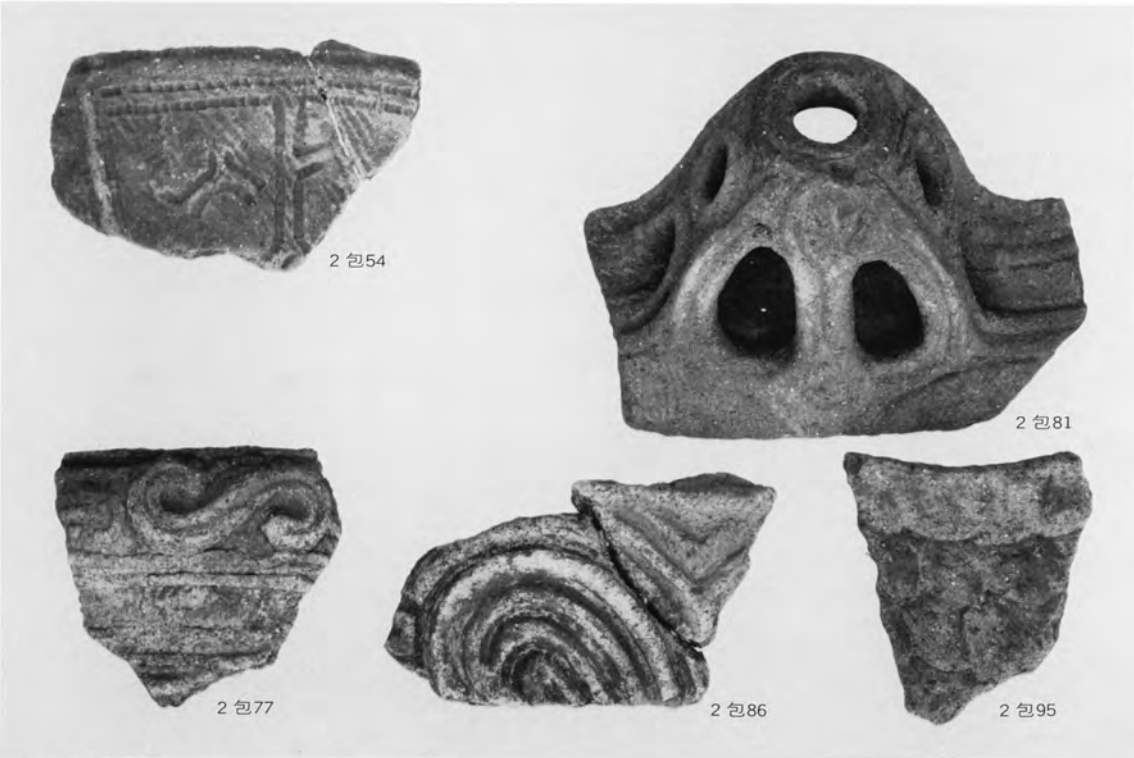
61　第１遺物包含層出土Ｘ群土器



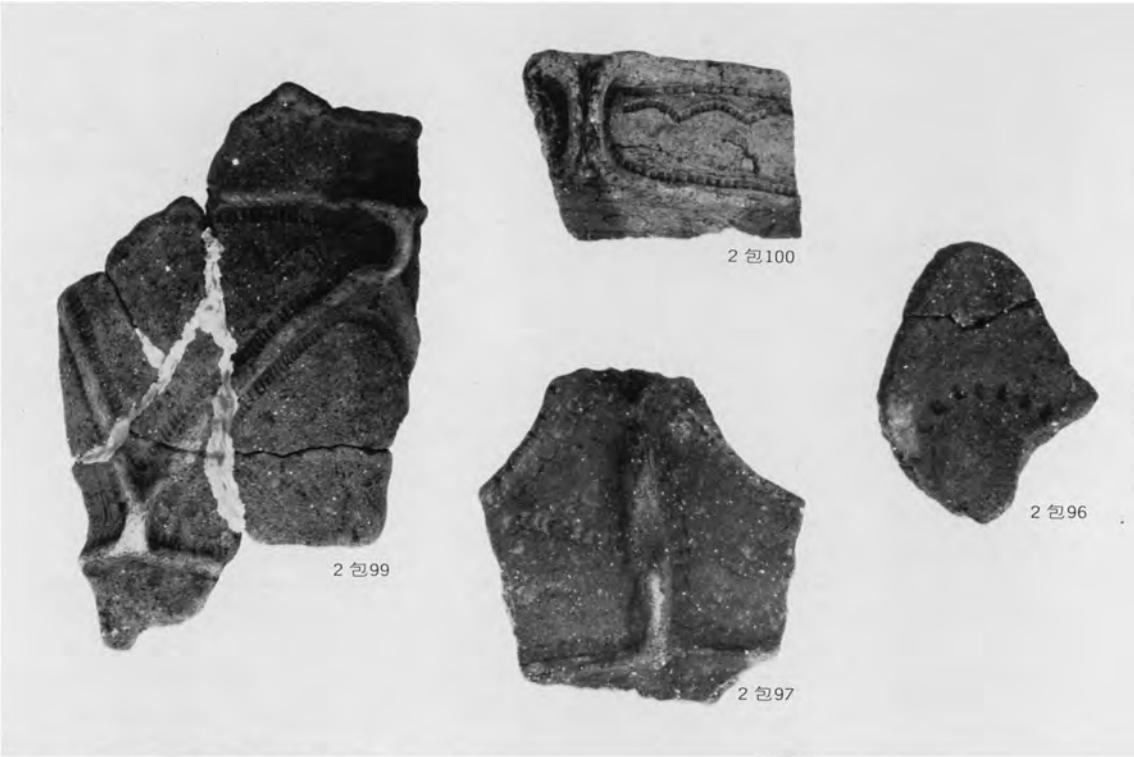
62　第１遺物包含層出土Ｘ群土器



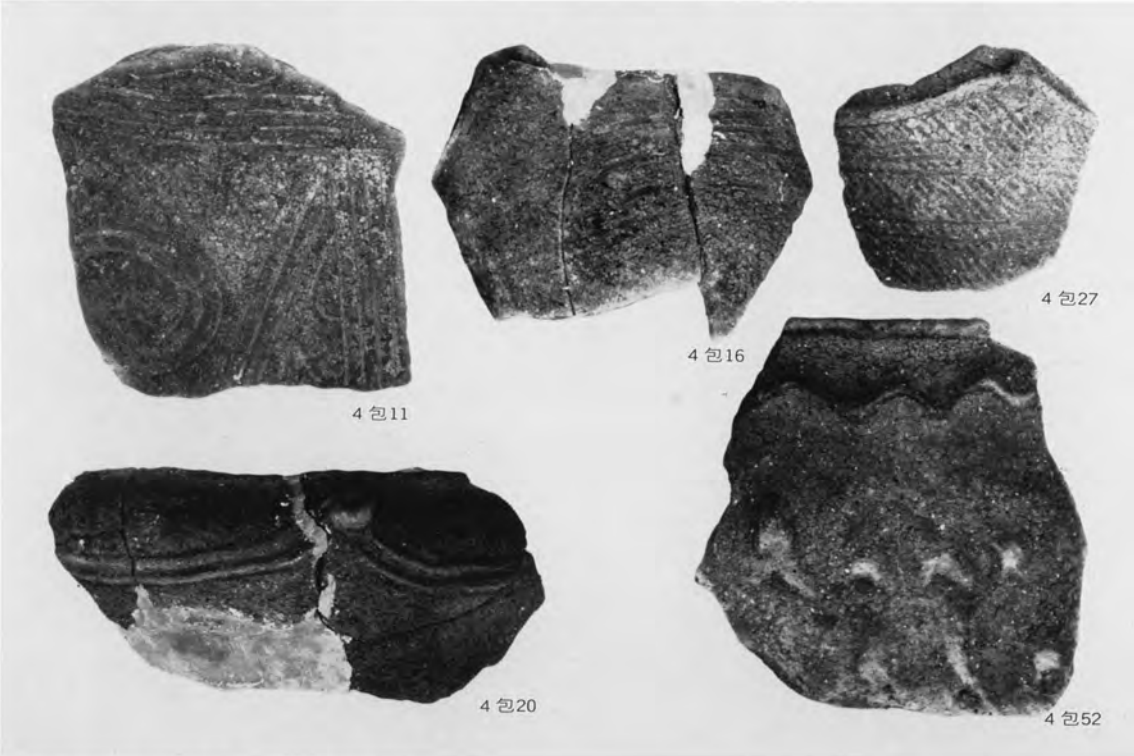
63　第 2 遺物包含層出土 I ・ II 群土器



64　第 2 遺物包含層出土 II ～ IV ・ VIII 群土器



65　第２遺物包含層出土Ⅷ群土器



66　第４遺物包含層出土Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ群土器

67　第 1 遺物包含層出土土偶

68　第 1 遺物包含層出土土偶

1 包569

1 包567

1 包563

1 包565

1 包570

1 包573

1 包574

1 包571

69　第１遺物包含層出土土偶

1 包568

1 包579

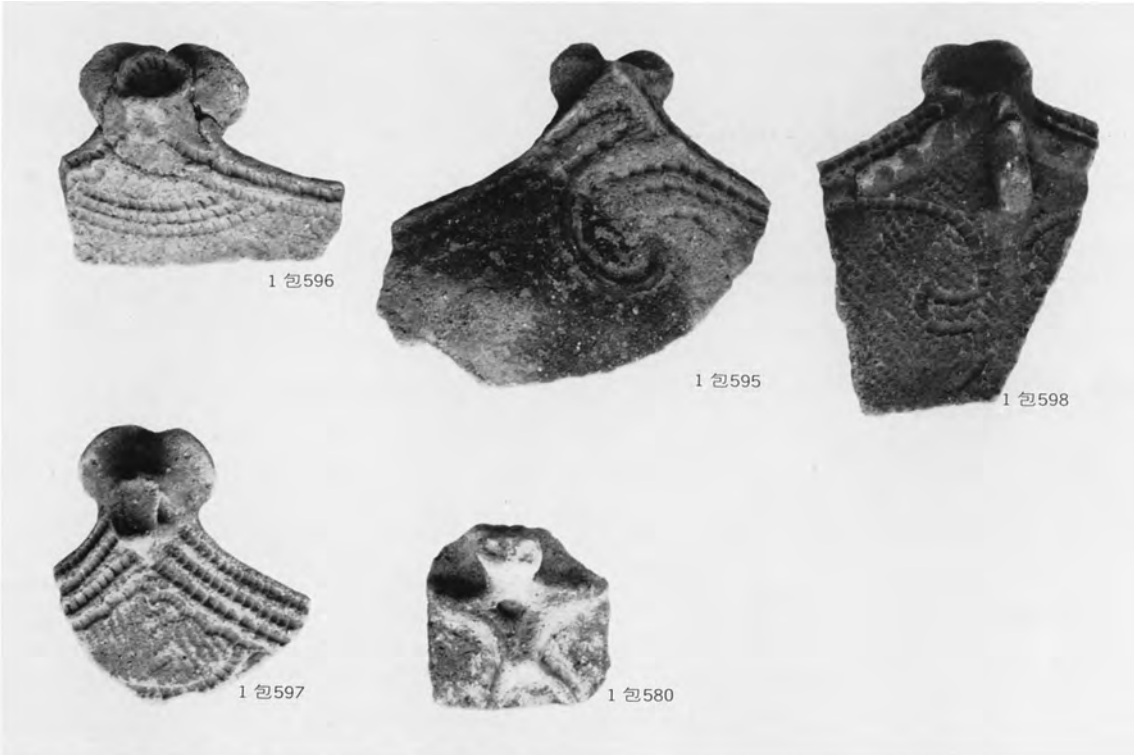
1 包575

1 包577

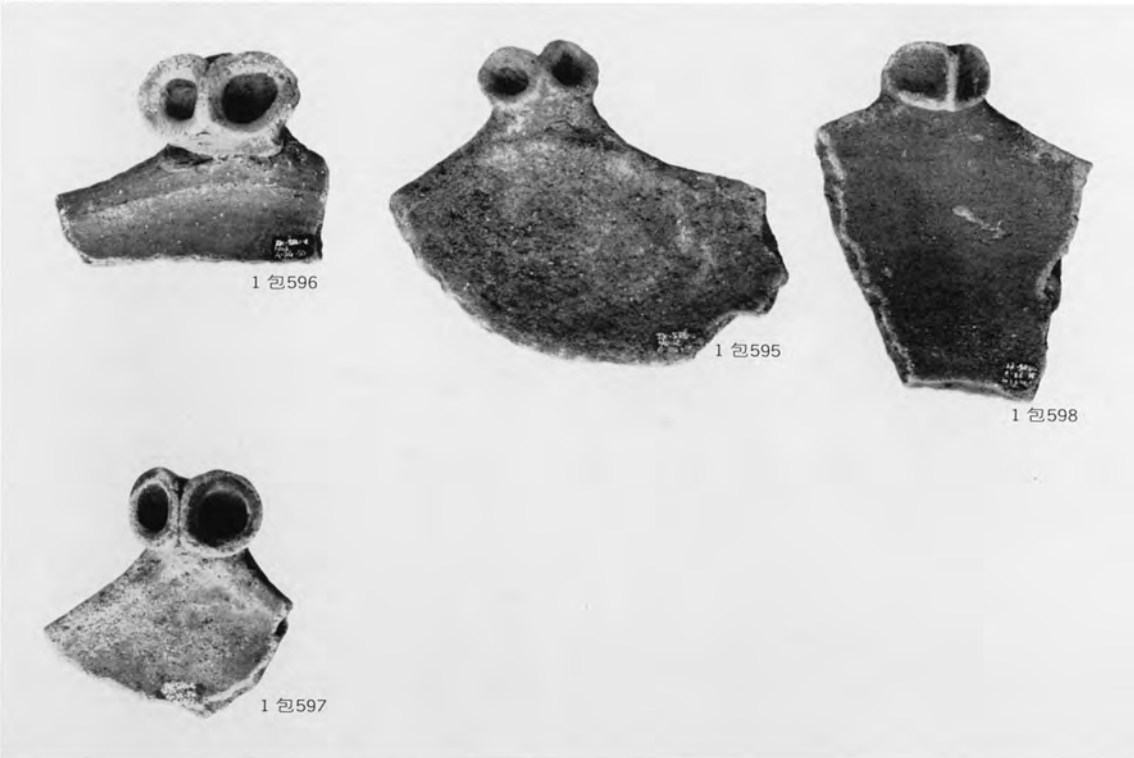
1 包582

70 第 1 遺物包含層出土土偶・人面状突起・土製品

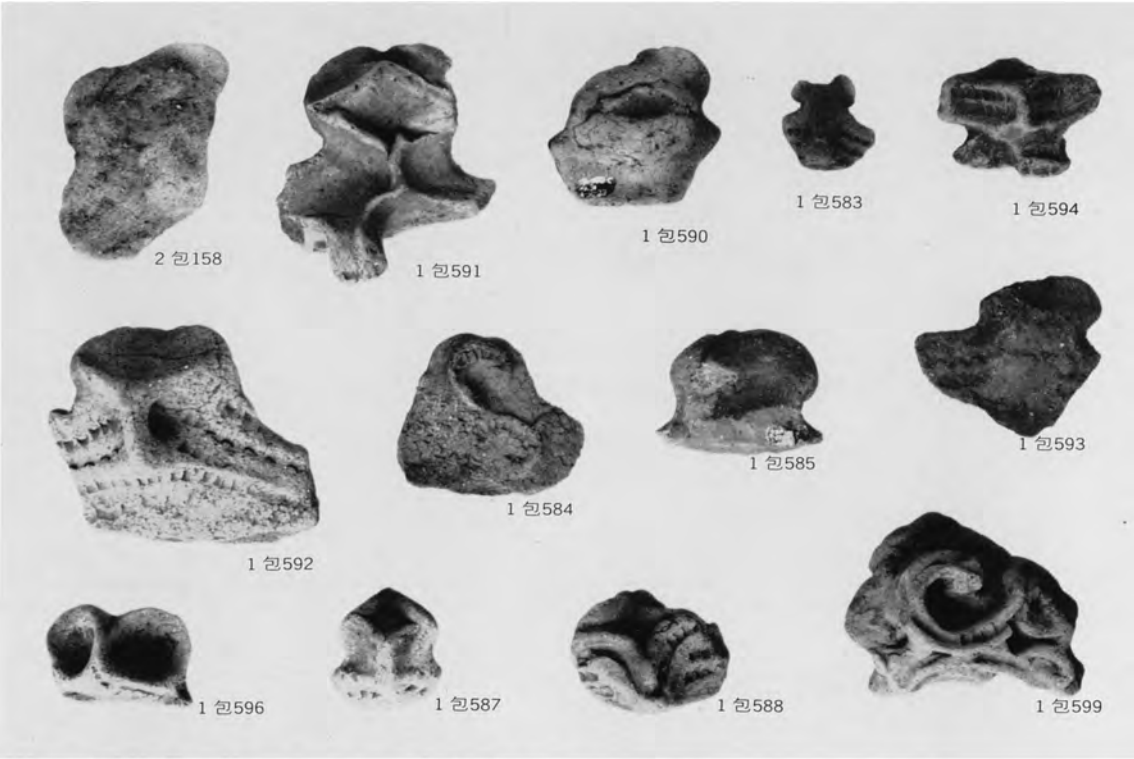
71　第1・4遺物包含層・遺構外出土土偶・人面状突起・土製品



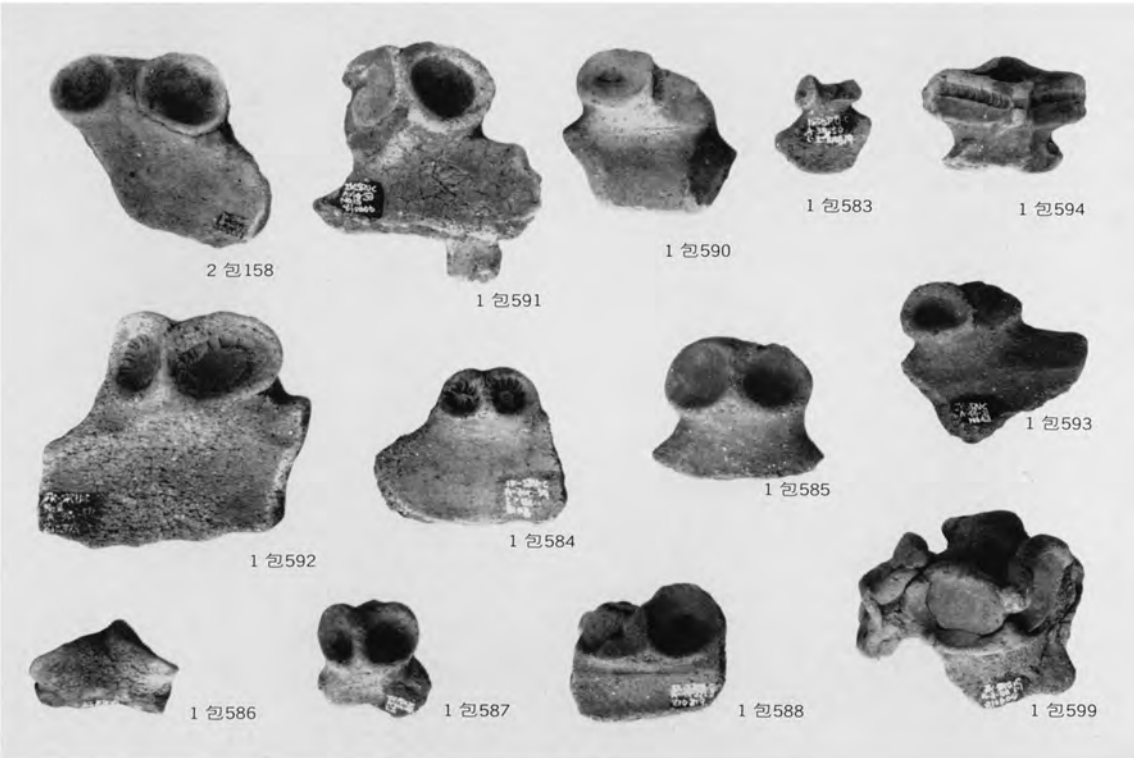
72　第 1 遺物包含層出土人面・獣面状突起（外面）



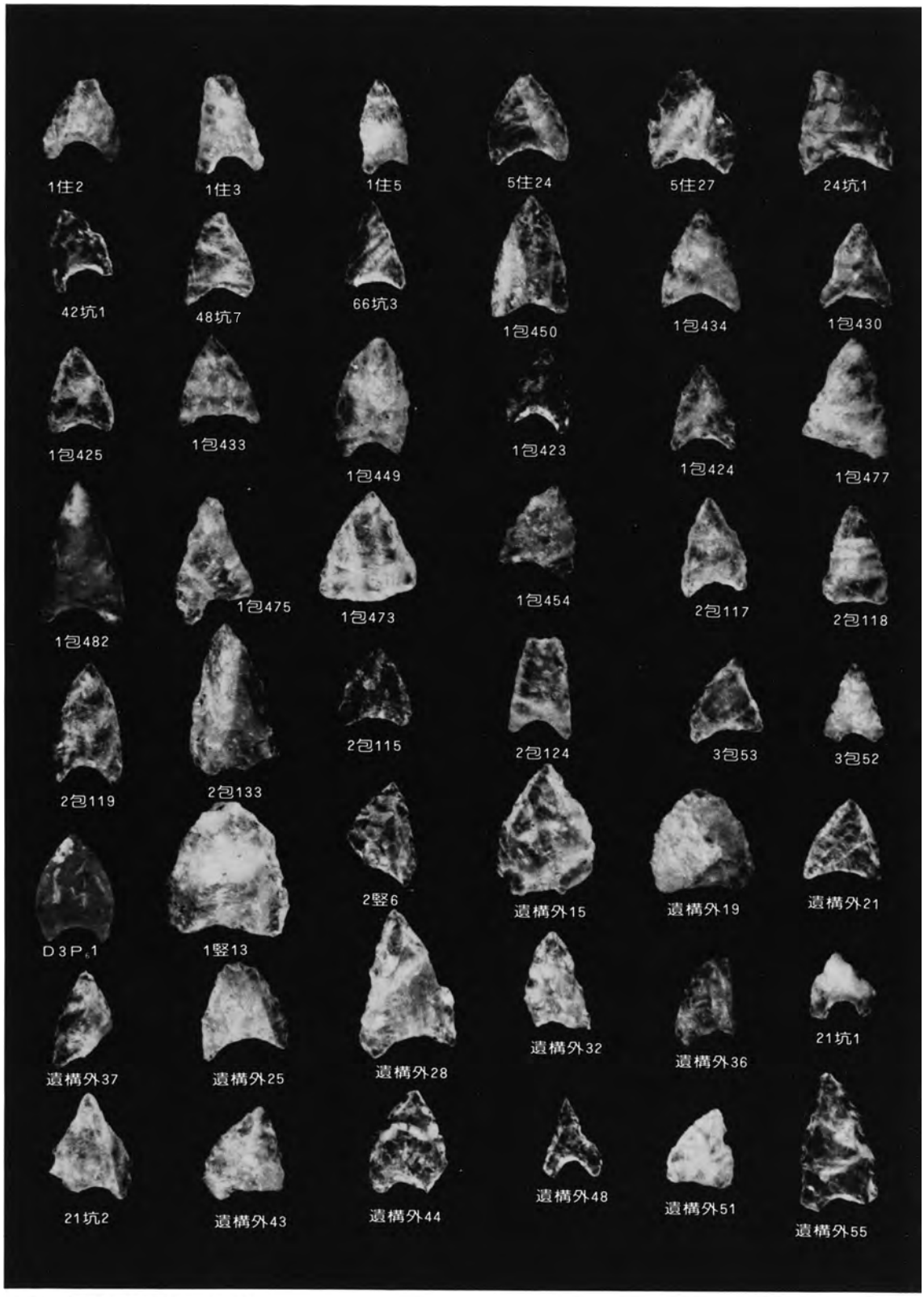
73　第 1 遺物包含層出土人面・獣面状突起（内面）



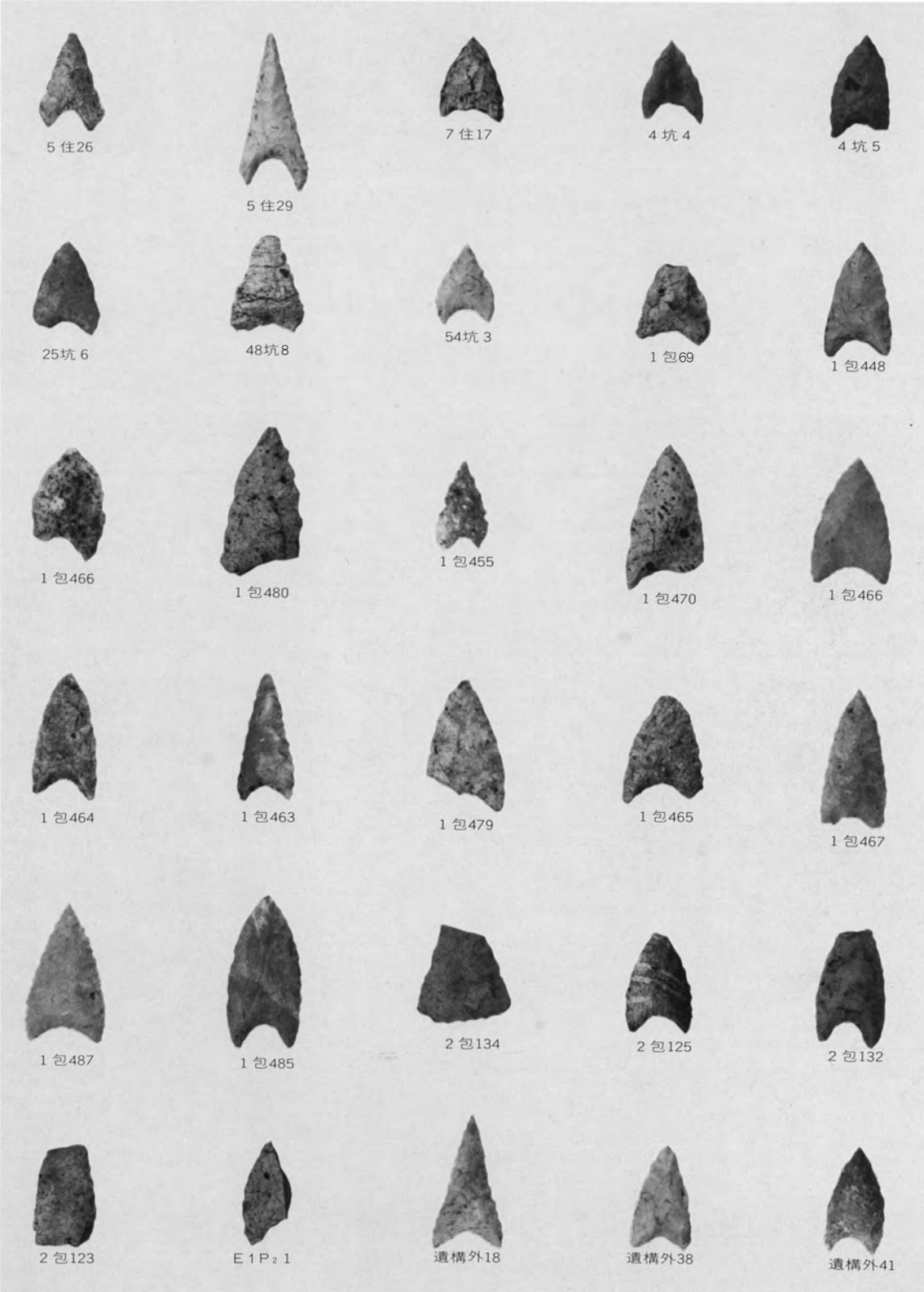
74　第1・2遺物包含層出土人面・獣面状突起（外面）



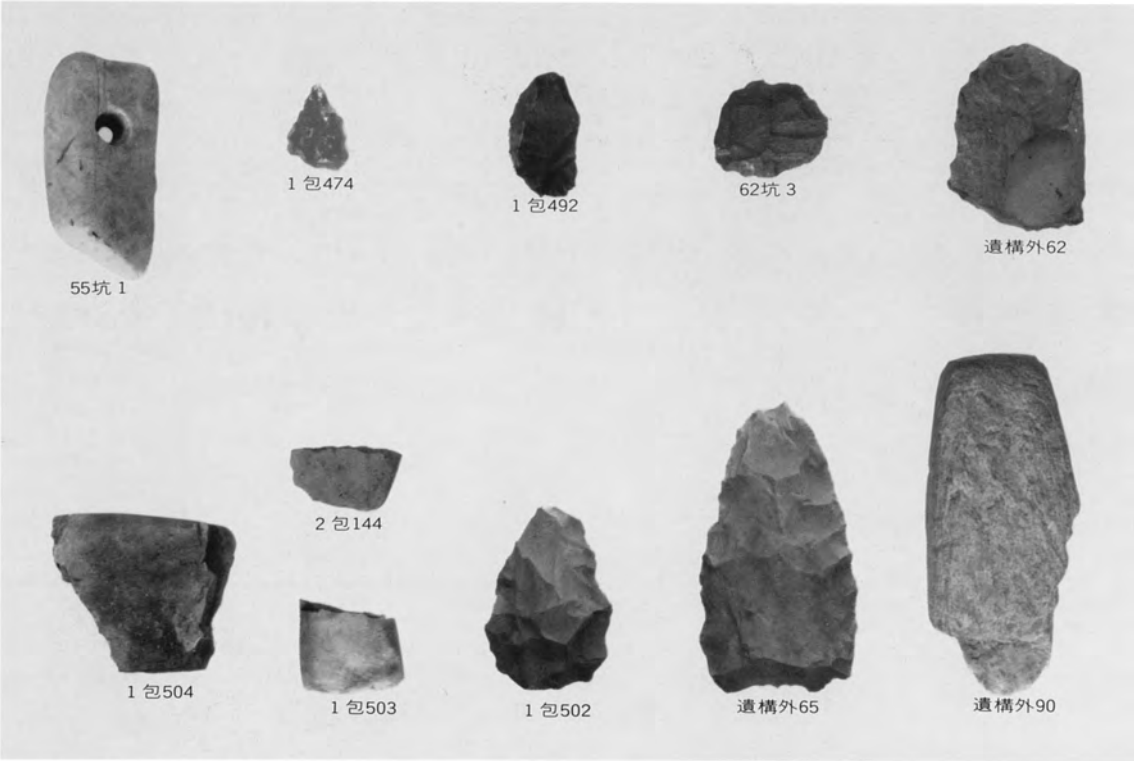
75　第1・2遺物包含層出土人面・獣面状突起（内面）



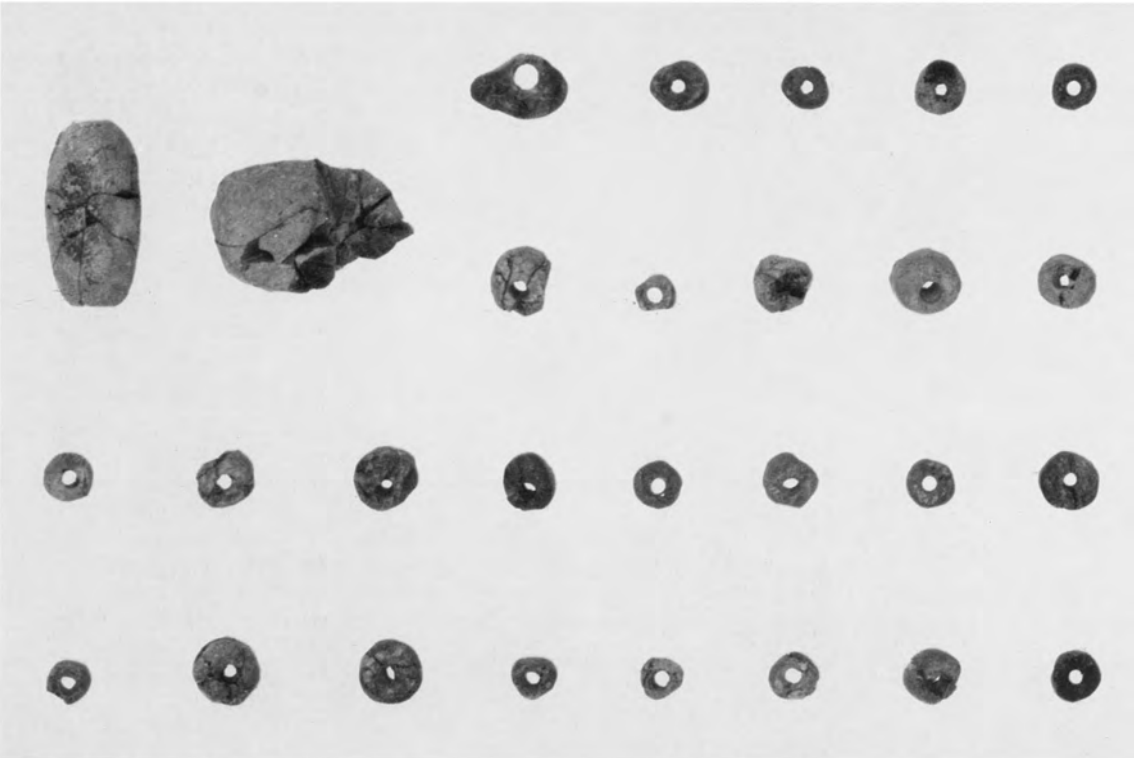
76　七郎内C遺跡出土石鏃



77　七郎内Ｃ遺跡出土石鏃



78 七郎内C遺跡出土大珠・石斧・他



79 39号土坑出土琥珀玉

47坑 1

遺構外85

7 坑 5

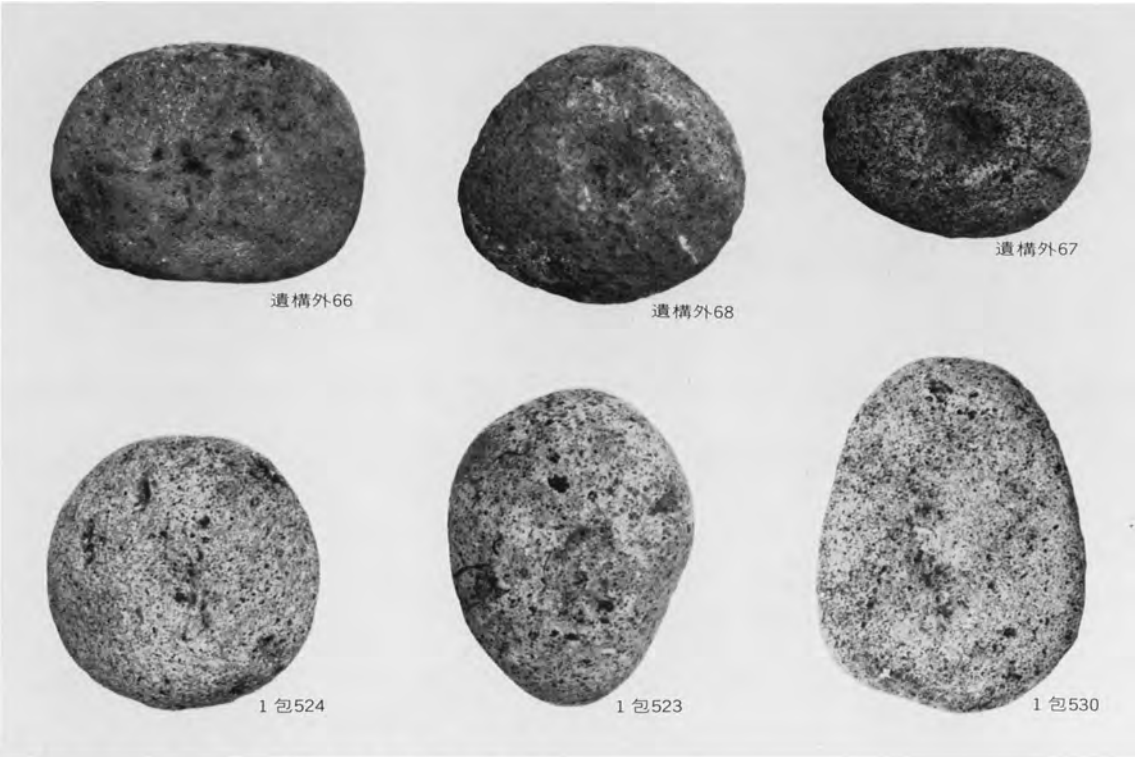
2 包156(表)

77坑 4

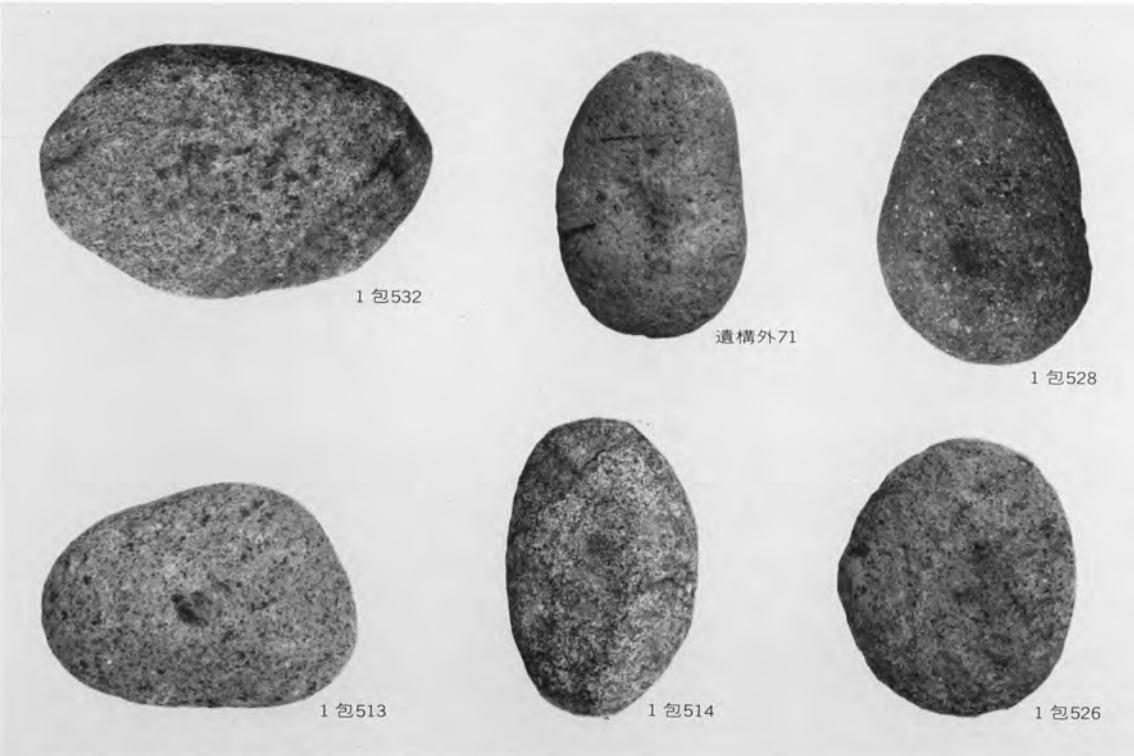
2 包156(裏)

遺構外89

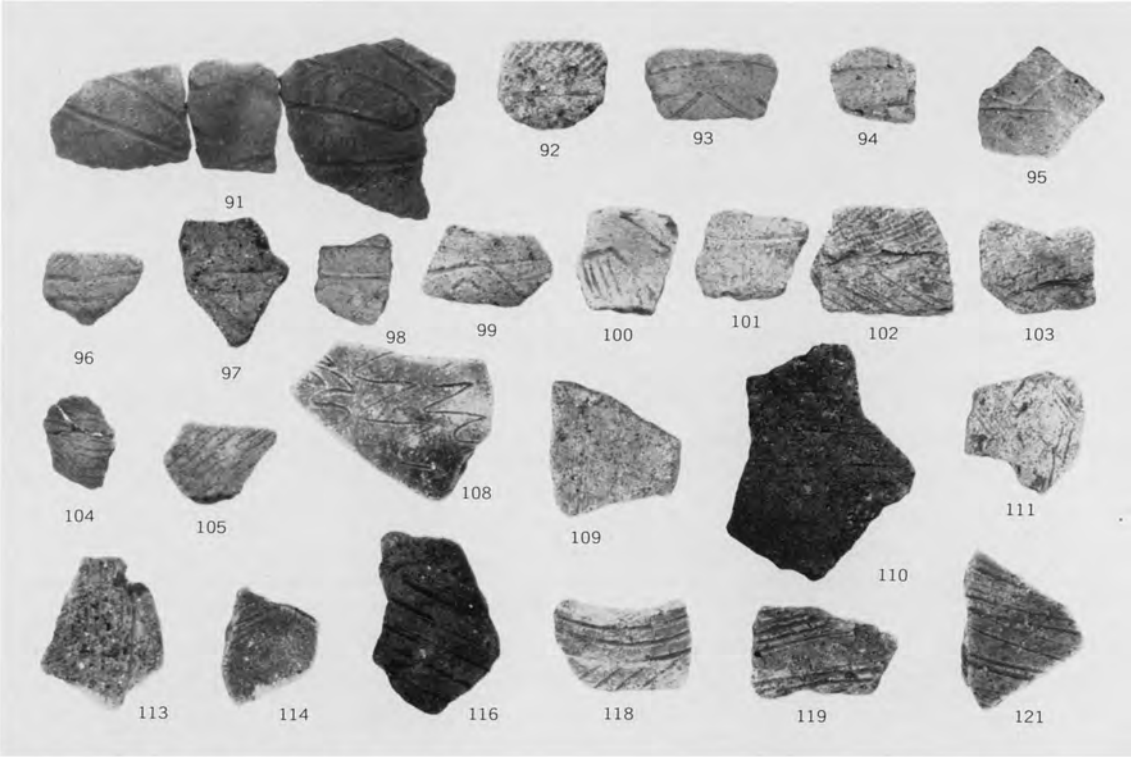
80　七郎内Ｃ遺跡出土石皿・他



81　第 1 遺物包含層・遺構外出土磨石・凹石



82　第 1 遺物包含層・遺構外出土磨石・凹石



83　七郎内Ｃ遺跡出土弥生式土器（遺構外）

84　２号住居跡・３号土坑出土土師器

図　版

第２編　七郎内Ｄ遺跡

図　版　目　次

1　遺跡遠景…… 331
2　１号住居跡…… 331
3　２号住居跡…… 332
4　３号住居跡…… 332
5　４号住居跡…… 333
6　４号住居跡内埋甕…… 333
7　６号住居跡カマド内遺物出土状況…… 333
8　６号住居跡…… 334
9　１号建物跡…… 334
10　２～４号建物跡…… 335
11　５号建物跡…… 335
12　６号建物跡…… 336
13　５号建物跡北側柱列（７号溝・11号土坑）…… 336
14　７号建物跡…… 336
15　９号建物跡…… 337
16　１号土坑…… 337
17　２号土坑…… 337
18　５号土坑…… 338
19　６号土坑…… 338
20　７号土坑…… 338
21　８・９号土坑…… 339
22　10号土坑…… 339
23　11号土坑…… 339
24　ピット群…… 340
25　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡…… 340
26　七郎内Ｄ遺跡出土土器…… 341

1　遺跡遠景

2　１号住居跡

3　2号住居跡

4　3号住居跡

5　４号住居跡

6　４号住居跡内埋甕

7　６号住居跡カマド内遺物出土状況

8　6号住居跡

9　1号建物跡

10　２～４号建物跡

11　５号建物跡

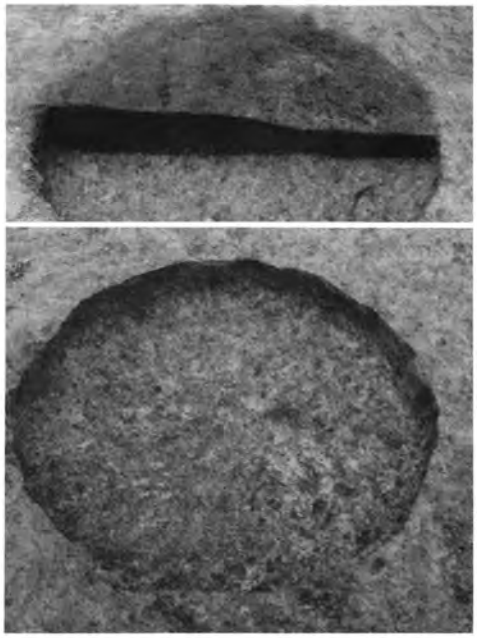
12　6号建物跡

13　5号建物跡北側柱列（7号溝，11号土坑）

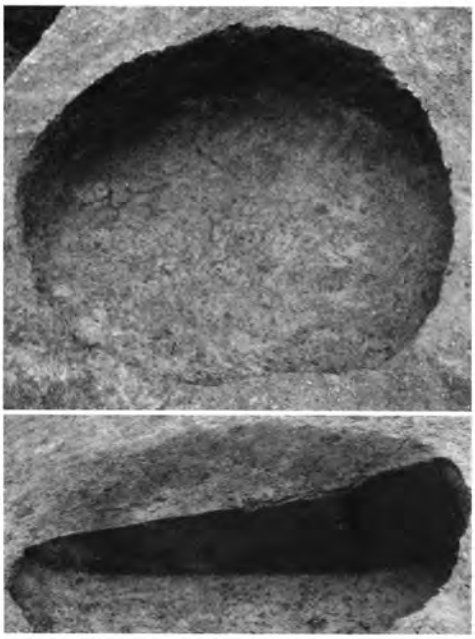
14　7号建物跡

第２編　七郎内Ｄ遺跡

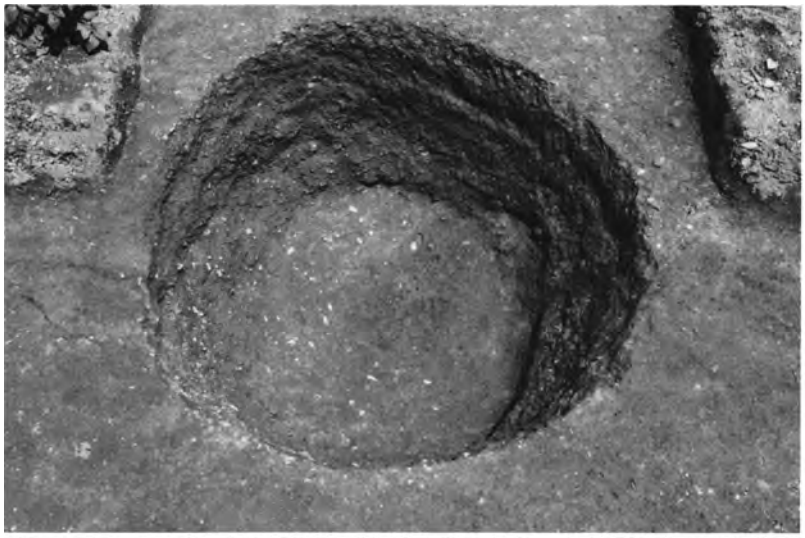
15　９号建物跡



16　１号土坑



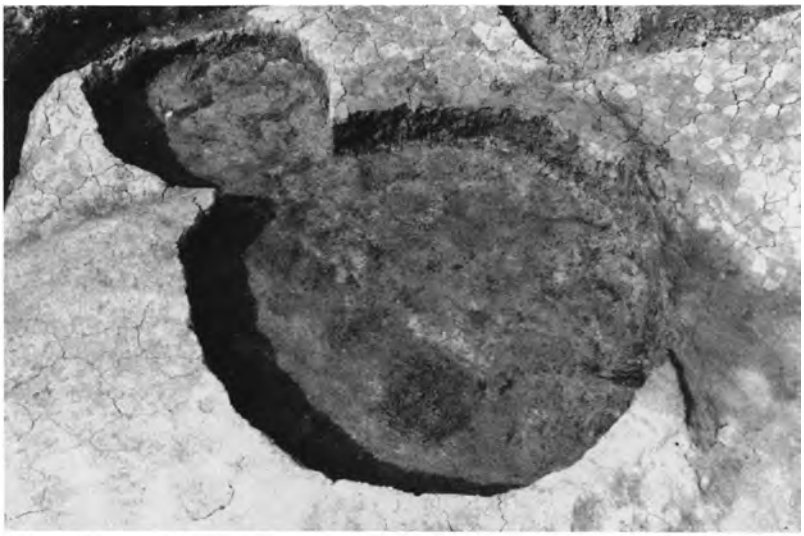
17　２号土坑



18　5号土坑

19　6号土坑

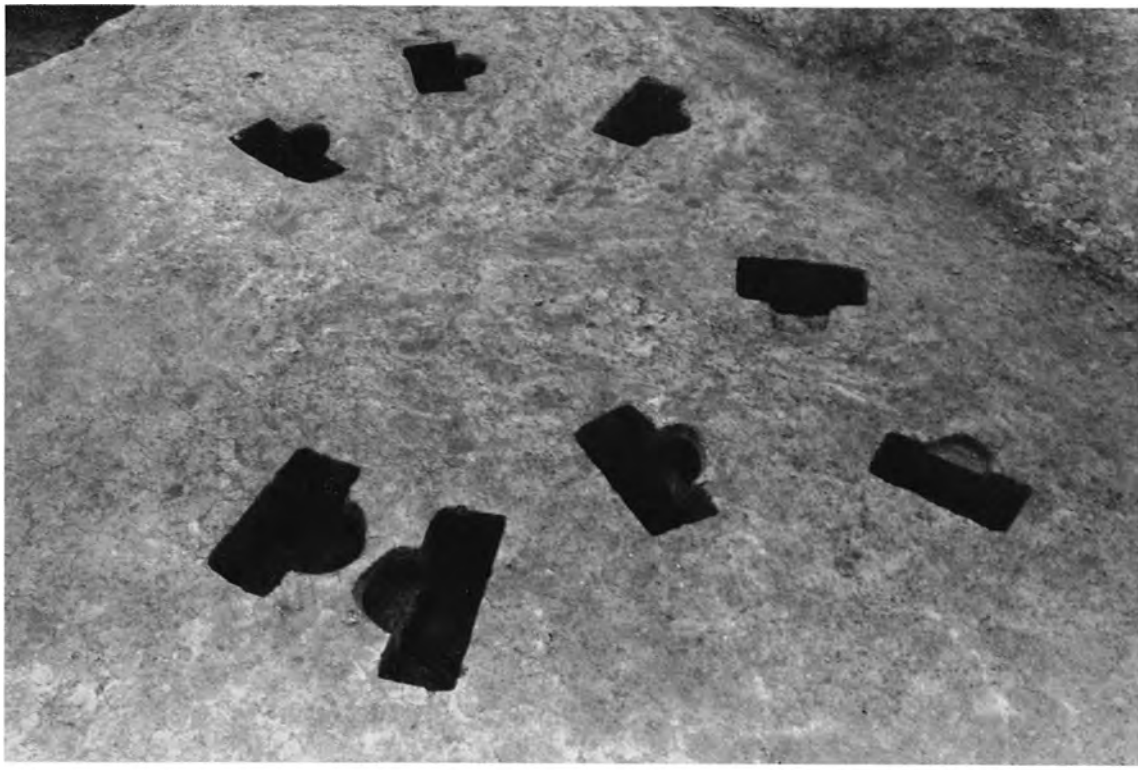
20　7号土坑



21　8・9号土坑

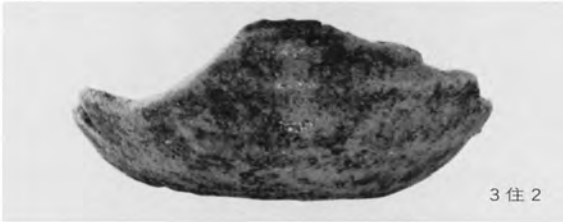
22　10号土坑

23　11号土坑



24　ピット群

25　七郎内Ｃ・Ｄ遺跡



26　七郎内Ｄ遺跡出土土器

福島県文化財調査報告書第108集

国営総合農地開発事業
母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅹ

昭和57年３月31日　発行

編　集　財団法人　福島県文化センター（遺跡調査課）

発　行　福島県教育委員会（〒960）福島市杉妻町２－16

財団法人　福島県文化センター
（〒960）福島市春日町５－54

印　刷　㈲平電子印刷所　美術写真印刷研究室
（〒970）いわき市平北白土字西ノ内13